遊戯王 白雲の使い手

ニンバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　白雲の使い手

【Ｎコード】
Ｎ４７３４Ｕ

【作者名】
ニンバス

【あらすじ】
俺は雲雀　塔也。

プロデュエリストを目指してデュエルアカデミアに入学したぜ！

入学中に様々な不可思議な出来事が俺を襲った。

どうしてこうなった…。

入学試験デュエル！！（前書き）

記念すべき1話目です。

オリカ多数出てきます。

苦手な人はバックして構いません。

入学試験デュエル！！

俺は雲雀　塔也。

俺は今、デュエルアカデミアの試験会場にいる。「今日の実技試験は頑張らないとな…。」

俺はポケットにしまっている受験票を取り出した。

「受験番号１１１か…。はは、筆記試験は寝坊してほとんど出来なかったからなぁ…。」

俺は自分で言うのも何だが、朝はなかなか起きれない。

小学校や中学校で遠足ではバス出発時にギリギリ間に合って、バスの中でへばっていた事もあった。

筆記試験の時も終了3分前に着いたっけ。幸い、試験内容はほとんど分かるものでスラスラ解けた。

が、如何せん時間が少なかった為、１０ヶ所くらいしか出来なかった。

なので、今日の実技試験には間に合うように、目覚ましを5つセットしたのたが、目を覚ました時には試験開始時間だった。

慌てて、家を飛び出して今に至る訳だが…。

「まだ、受付もあるし、もう終わったって事はないよな。急いでいこう！！」

俺は急いで受付に向かって、受験票を受付係の教師に見せる。

「受験番号１１１、雲雀　塔也　（ひばり　とうや）です！　遅れてすみません、まだ試験に間に合いますか！？」

「受験番号１１１か。今１１０番が試験を行っている。早く入りなさい。」

「ありがとうございます！！」

俺は一礼して、試験会場に入る。

試験会場に入ってデュエルを見ると、デュエルは終わるところだった。

「いっけー、　Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アースで攻撃！　ジ・アースマグマスラッシュ！！」

「ペペロンチーノ！！」

スゲー、古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）を破壊しやがった。
あれ、でもＥ・ＨＥＲＯ　ジ・アースってどっかで見たような…。
「受験番号１１１番、早くデュエルフィールドに来るノーネ！」
おおっといけない、早くデュエルフィールドに行かないとな。

「受験生はアナタで最後ナノーネ。アナタの試験相手は私、クロノス・デ・メディチが務めマスーノ。」「雲雀　塔也です！　よろしくお願いします！！」
頼んだぜ、俺のデッキ…。

「「デュエル！！」」

塔也　ＬＰ４０００

クロノス　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能によって、先攻はクロノス先生からだ。

「私のターン、ドローニョ。私は手札から　永続魔法、古代の機械（アンティーク・ギア・キャッスル）城を発動ッ！」

クロノス先生の後ろに巨大な城がそびえ立つ。
流石ソリッドビジョン、迫力があるぜ。

古代の機械城
（アンティーク・ギア・キャッスル）

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、アンティーク・ギアと名の付くモンスターの攻撃力を３００ポイントアップする。
フィールド上にモンスターが召喚される毎に、このカードにカウンターを１つ乗せる。
アンティーク・ギアと名の付くモンスターをアドバンス召喚する場合、このカードを墓地に送る事で、カウンターの数値分、リリースの代わりに出来る。

「更に私は古代の機械守護者（アンティーク・ギア・ガーディアン）を守備表示で召喚するノーネ。モンスターが召喚された事で、古代の機械城にカウンターが１つ乗るノーネ。」古代の機械守護者

ＡＴＫ１２００→１５００　ＤＥＦ２０００

古代の機械城

カウンター
0→1

「カードを2枚伏せ、ターンエンドナノーネ。私がアナタの実力を見極めてあげまスーノ！」

「俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン無し
魔法・罠ゾーン　無し

クロノス　ＬＰ４０００
手札２枚
モンスターゾーン
古代の機械守護者１体
魔法・罠ゾーン

古代の機械城1枚　伏せカード2枚

「俺は手札から、永続魔法　召喚雲（サモン・クラウド）　を発動。このカードはメインフェイズに1度、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、自分の手札または墓地からレベル4以下の雲魔物（クラウディアン）と名の付くモンスター1体を特殊召喚出来る。
俺は雲魔物－ディープ・ミストを攻撃表示で特殊召喚する。更に雲魔物－キロスタスを攻撃表示で召喚。」

召喚雲（サモン・クラウド）
永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない時、メインフェイズに1度、自分の手札または墓地から、レベル4以下の雲魔物と名の付くモンスター一体を特殊召喚出来る。
墓地から特殊召喚した時、このカードを破壊する。

雲魔物－ディープ・ミスト
ＡＴＫ0

雲魔物－キロスタス
ＡＴＫ９００

「何だ、2体とも攻撃力が低いじゃないか。」

「あいつ、やる気あるのか？」

回りが色々野次を飛ばすが、俺は一切気にせず進める。

「アナタがモンスターを召喚した事により、古代の機械城にカウンターが乗るノーネ。」　古代の機械城

カウンター

1↓2

「構いませんよ。俺は雲魔物－キロスタス、効果発動。　このカードは召喚した時、フィールド上の雲魔物の数だけこのカードにフォッグカウンターを乗せる。フィールド上にはキロスタスを含めて2体、従ってフォッグカウンターは2つ乗せる。」

雲魔物－キロスタス

フォッグカウンター

0↓2

「更にキロスタスの効果！
このカードに乗ったフォッグカウンターを2つ取り除く事で、フ

ィールド上のモンスター1体を破壊する。
俺はキロスタスのフォッグカウンターを2つ取り除き、古代の機械守護者を破壊する。」　雲魔物ー キロスタス

レベル4　水属性　天使族
ATK900　DEF0

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。
このカードの召喚成功時、フィールド上の雲魔物と名の付くモンスターの数だけこのカードにフォッグカウンターを乗せる。
このカードのフォッグカウンターを2つ取り除く事で、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

「甘いノーネ！　私は古代の機械守護者の効果発動ッ！
自分フィールド上のアンティーク・ギアと名の付くモンスターが相手のカード効果の対象になった時、自分フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する事で、その効果を無効にし、破壊するノーネ！
更に、破壊した黄金の邪神像の効果で、邪神像トークン1体を特殊召喚するーノ！」
古代の機械守護者（アンティーク・ギア・ガーディアン）

レベル4　地属性　機械族
ATK1200　DEF2000

自分フィールド上のアンティーク・ギアと名の付くモンスターが、相手のカード効果の対象になった時、自分フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する事で、その効果を無効にし、破壊する。

黄金の邪神像

通常罠

このカードがフィールド上で破壊された時、自分フィールド上に邪神像トークン（レベル４　地属性　悪魔族　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００）１体を特殊召喚する。

「なら、古代の機械守護者の効果にチェーンして、速攻魔法　蒸留水　を発動！
自分フィールド上の水属性モンスター１体をリリースして、リリースしたモンスターよりレベルの低い水属性モンスター１体をデッキから特殊召喚する。
俺はキロスタスをリリースして、雲魔物－羊雲（シープ・クラウド）をデッキから守備表示で特殊召喚。」

蒸留水

速攻魔法

自分フィールド上の水属性モンスター１体をリリースして発動する。
リリースしたモンスターよりレベルの低いモンスター１体を、自分のデッキから特殊召喚する。

邪神像トークン

ＤＥＦ１０００

雲魔物－羊雲
ＤＥＦ０

「ふむ、なかなかやりまスーノ。」

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドです。」

「では私のターン、ドローニョ。」

塔也　ＬＰ４０００
手札1枚

モンスターゾーン

雲魔物－ディープ・ミスト

雲魔物－羊雲

魔法・罠ゾーン

召喚雲

伏せカード1枚

クロノス　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

古代の機械守護者

邪神像トークン

魔法・罠ゾーン

古代の機械城

伏せカード１枚

「私はカウンター２つ乗った古代の機械城を墓地に送り、古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）をリリース無しで召喚するノーネ！」　古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）

ＡＴＫ３０００

古代の機械巨人か…。俺のデッキだとかなりキツいモンスターだな。

古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）

レベル８　地属性　機械族

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ３０００
このカードは特殊召喚出来ない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えた場合、その数値分、相手に戦闘ダメージを与える。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠を発動する事が出来ない。

「更に魔法カード、二重召喚発動ッ！
このカードの効果により、もう１度通常召喚出来るノーネ。　私は古代の機械守護者と邪神像トークンをリリースして、古代の機械巨人をアドバンス召喚するノーネ！」

古代の機械巨人
ＡＴＫ３０００

二重召喚（デュアル・サモン）
通常魔法

このターン、もう一度だけ通常召喚出来る。

おいおい、２体目の古代の機械巨人かよ！？
…さて、どうやって倒すかな。

「（ムヒョヒョヒョ…。このデュエル、貰ったノーネ。）ではバ

トル「バトルフェイズに入る前に俺は永続罠　スピリット・バリアを発動！」何でスート？」

古代の機械巨人は、貫通効果を持っている上に、攻撃する時に相手は魔法・罠を発動出来ないからな…。
発動するなら今しか無いな。
「スピリット・バリア　は、自分フィールド上にモンスターがいる限り、俺に戦闘ダメージを与える事は出来ない。」

これなら、古代の機械巨人を何とかするカードをドローするまで凌ぐ事が…。

「見え透いてマスーノ！カウンター罠、　魔宮の賄賂を発動ッ！相手の魔法・罠カードの発動と効果を無効にして破壊するノーネ！　その後、相手はカードを1枚ドローするノーネ。」

スピリット・バリアが破壊されたのはマズイな…。
俺は渋々カードをドローする。

スピリット・バリア

永続罠

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは0になる。

魔宮の賄賂

カウンター罠

相手の魔法・罠カードの発動と効果を無効にして破壊する。
相手はカードを1枚ドローする。

「古代の機械巨人は、相手モンスターの守備力を攻撃力が上回った時、貫通ダメージを与えるノーネ。
しかも、攻撃する時、ダメージステップが終了まで相手は魔法・罠カードを発動出来ないノーネ！
これで終わりナノーネ！！
まずは、1体目の古代の機械巨人で、ディープ・ミストを攻撃するノーネ！
アルティメット・パウンド！！」

古代の機械巨人が、渾身の力で　ディープ・ミストに拳を奮う。

「だがモンスター効果なら発動出来る。雲魔物－ディープ・ミスト　の効果発動！」

「ナパッ！？」

「自分フィールド上の雲魔物と名の付くモンスターが攻撃対象になった時、自分フィールド上の他のモンスターに変更する。

俺は攻撃対象を　ディープ・ミスト　から　羊雲　に変更する！」

雲魔物－ディープ・ミスト

レベル１　水属性　天使族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する時、このカードは破壊される。
自分フィールド上の雲魔物と名の付くモンスターが攻撃対象になった時、自分フィールド上の他のモンスターに変更出来る。
雲魔物と名の付くモンスターが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に戦闘を行ったモンスターにフォッグカウンターを１つ乗せる。

「デスーガ、羊雲の守備力も０。
ダメージは変わらないノーネ。」

ディープ・ミストから濃霧が立ち込もり、古代の機械巨人の拳は狙いを外し、羊雲に直撃した。

「ウアァァッ！　くっ、効いたぜ。」

塔也　ＬＰ４０００→１０００

「だがこの時、羊雲と　ディープ・ミストの効果を発動だ！
ディープ・ミストがいる時に雲魔物と名の付くモンスターが戦闘を行った時、ダメージステップ終了時に戦闘を行ったモンスターにフォッグカウンターを1つ乗せる。
そして、羊雲が戦闘で破壊された時、自分フィールド上に雲魔物トークンを2体を特殊召喚する。」

雲魔物ー羊雲（シープ・クラウド）

レベル1　水属性　天使族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードが戦闘で破壊された時、自分フィールド上に雲魔物トークン（レベル1　水属性　天使族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０）2体を守備表示で特殊召喚する。
雲魔物トークンは、雲魔物以外のアドバンス召喚の為のリリースには出来ない。

古代の機械巨人

フォッグカウンター

0↓1

雲魔物トークン×2

ＤＥＦ０

「無駄ナノーネ！私は２体目の古代の機械巨人で雲魔物トークンを攻撃ナノーネ！！
アルティメット・パウンド！！」

「まだだッ！　俺は手札から　雲魔物ー コットン・ボール　の効果発動！」

「手札からモンスター効果デスート！？」

クロノス先生はまたもや驚いた。

「相手モンスターが攻撃した時、このカードを手札から墓地に送る事で、その攻撃を無効にする。　その後、相手フィールド上のモンスターの数まで雲魔物トークンを特殊召喚する。
先生のフィールドにはモンスターが２体、よって２体の雲魔物トークンを守備表示で特殊召喚する！」

雲魔物トークン×２

ＤＥＦ０

雲魔物ー コットン・ボール

レベル３　水属性　天使族
ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００

相手モンスターが攻撃した場合、このカードを手札から墓地に送る事で、その攻撃を無効にする。
その後、相手フィールド上のモンスターの数まで雲魔物トークン（レベル１　水属性　天使族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０）を特殊召喚する。
雲魔物トークンは、雲魔物と名の付くモンスター以外のアドバンス召喚の為のリリースは出来ない。

「ヌググ、止められたノーネ。
しかーし、次のターンで決めるノーネ!!
ターンエンドナノーネ…。」

クロノス先生は悔しいそうにエンド宣言をする。

「俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ１０００
手札２枚
モンスターゾーン

雲魔物－ディープ・ミスト

雲魔物トークン×４

魔法・罠ゾーン

召喚雲

クロノス　ＬＰ４０００

手札０枚

モンスターゾーン

古代の機械巨人

古代の機械巨人　フォッグカウンター＋１

魔法・罠ゾーン　無し

「（来た！これなら…。）　俺はフィールド上の雲魔物トークン４体をリリースして、　雲魔物－ニンバスマンをアドバンス召喚！」

「モンスター４体をリリースしてアドバンス召喚だと！？」

周りの生徒たちがざわめき出す。

「ニンバスマンはアドバンス召喚する時、自分フィールド上の水属性モンスターを任意の数リリース出来る。
そして、ニンバスマンはアドバンス召喚のリリースしたモンスターの数だけこのカードにフォッグカウンターを乗せる。」

ニンバスマンの周りにフォッグカウンターが出た事でニンバスマンが巨大化していく。

「ニンバスマンの効果は知っているノーネ。　フィールド上のフォッグカウンター1つにつき、ニンバスマンは攻撃力を５００ポイントアップするノーネ。」

「その通りです。フィールド上にはフォッグカウンターはニンバスマンに４つ、古代の機械巨人に１つあります。
よって、ニンバスマンの攻撃力は２５００ポイントアップします。」

ニンバスマン

ＡＴＫ１０００→３５００

フォッグカウンター

０→４

「攻撃力３５００…。私の古代の機械巨人を超えマーシタカ…。ですが、私のＬＰはまだ残るノーネ。」

クロノス先生は余裕の表情だ。
けど、このカードで度肝を抜くだろう。

「俺は速攻魔法、ダイアモンドダスト・ストームを発動！」

「何デスート!?そのカードは！」

どうやらクロノス先生は効果を知っているようだ。

「このカードはフィールド上のフォッグカウンターを任意の数取り除いて発動する。
取り除いたフォッグカウンター１つにつき、フィールド上のモンスター１体の攻撃力を４００ポイントダウンさせる！
俺は古代の機械巨人とニンバスマンから合計４つ取り除いて、２体の古代の機械巨人の内１体の攻撃力を１６００ポイントダウン！」

雲魔物－ニンバスマン

フォッグカウンター

４↓１

ＡＴＫ３５００→１５００

古代の機械巨人

フォッグカウンター

１→０

ＡＴＫ３０００→１４００

「ダイアモンドダスト・ストームの効果で攻撃力が半分以下になった場合、そのモンスターは破壊され、破壊したモンスターの攻撃力１０００ポイントにつき、１枚ドローする。古代の機械巨人の攻撃力は３０００…。よって３枚ドロー！」

４つのフォッグカウンターが竜巻となり、古代の機械巨人を跡形もなく破壊した。

「マンマミーア！私の古代の機械巨人がッ！」

クロノス先生は、古代の機械巨人が破壊された事で、顔を青ざめていた。

ダイアモンドダスト・ストーム

速攻魔法

フィールド上のフォッグカウンターを任意の数取り除いて発動する。
フィールド上のモンスターの攻撃力を取り除いたフォッグカウンターの数×４００ポイントダウンする。
この効果で攻撃力が半分以下になった時、そのモンスターを破壊して、破壊したモンスターの攻撃力１０００ポイントにつき、１枚ドローする。

「俺は墓地の雲魔物－羊雲を除外して、雲魔物－ストーム・ドラゴンを特殊召喚。」

雲魔物－ストーム・ドラゴン

ＡＴＫ１０００

「そして効果発動！１ターンに１度、フィールド上のモンスター１体にフォッグカウンターを１つ乗せる。
俺はニンバスマンにフォッグカウンターを追加する。更に二重召喚発動、雲魔物－ゴースト・フォッグを召喚する！」

雲魔物－ニンバスマン

フォッグカウンター

1↓2

ＡＴＫ１５００↓２０００

雲魔物－ストーム・ドラゴン

レベル４　水属性　天使族

ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ０

このカードは通常召喚出来ない。
自分の墓地から雲魔物１体を除外して特殊召喚する。
このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する時、このカードを破壊する。
１ターンに１度、フィールド上の表側モンスターにフォッグカウンターを１つ乗せる。

雲魔物－ゴースト・フォッグ

レベル１　水属性　悪魔族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードは特殊召喚出来ない。
このカードによって発生する互いの戦闘ダメージは０となる。
このカードが戦闘で破壊された時、このカードを破壊したモンスタ

ーのレベル数だけフィールド上のモンスターにフォッグカウンターを乗せる。

「バトルだ！　雲魔物－ゴースト・フォッグで古代の機械巨人を攻撃。」

「くっ、迎撃ナノーネ！
アルティメット・パウンド！」

ゴースト・フォッグは、古代の機械巨人に纏わりつこうとするが、呆気なく吹き飛ばされて、霧散した。

「ゴースト・フォッグの効果発動！
このカードによって発生する互いの戦闘ダメージを０にして、このカードを破壊したモンスターのレベルの数だけフィールド上のモンスターにフォッグカウンターを乗せる。
古代の機械巨人のレベル数値分、ニンバスマンにフォッグカウンターを乗せる。」

雲魔物－ニンバスマン

フォッグカウンター

２→１０

ＡＴＫ２０００→６０００

「攻撃力６０００だとッ！」

「何だ、あの受験生は！？」

またもや周りがざわめいた。

「これで終わりです。
ニンバスマンで古代の機械巨人を攻撃！！」

「ひぎゃー！！」

クロノス　ＬＰ４０００→１０００

巨大化したニンバスマンの息吹で、古代の機械巨人をたちまち瓦礫の山と化した。

「そしてストーム・ドラゴンでダイレクトアタック！
ストーム・ブレス！！」

「ぺぺロンチーノ！！」

クロノス　ＬＰ１０００→０

なんとか勝てたな…。

先生に勝てたんだ、これで入学は間違いないだろう。

俺は真っ白になったクロノス先生に一礼して試験会場を後にした。

入学試験デュエル！！（後書き）

「ここがデュエルアカデミアか…。」

念願のデュエルアカデミアに入学した俺、雲雀塔也はレッド寮で十代たちと知り合う。

「よっ、お前もオシリス・レッドか？　俺は遊城　十代。　十代って呼んでくれ。」

「俺は雲雀　塔也だ。　よろしくな十代。」

「僕は丸藤　翔って言うんだ。　よろしくね、塔也君。」

十代たちとアカデミアで過ごして数日、寮対抗デュエル大会が開かれた。

そこで十代は、　皇　宝山と言うブルー生徒とデュエルする事になった。

次回、ＨＥＲＯＶＳ宝玉獣。

よろしく。

ＨＥＲＯＶＳ宝玉獣（前書き）

第２話です。

ここの小説に出てくるクロノスは、十代らレッド生徒の事を毛嫌いしてません。

少し修正しました。

HEROVS宝玉獣

塔也ｓｉｄｅ

クロノス先生との入学試験デュエルを終えて約一週間後、デュエルアカデミアから合格通知が家のポストに入っていた。

その時は嬉しくて思わず叫んだくらいだ。

それで今日が記念すべきデュエルアカデミアの入学式だ。

ん、今何しているかって？

そうだな、只今アカデミア行きのフェリーで絶賛グロッキー中だ…。

と言うのも、俺は相変わらず朝に弱く、フェリーを乗り遅れる事があっては一大事だ。

ん、親に起こして貰えって？

生憎、俺の両親は仕事で日本を離れる為頼めない。

だが妹が某ＲＰＧのフライパン鳴らしで起こしてくれた。

いい年した男が、妹に起こしてくれと頼むのは気が引いたので、デッキ調整がてら徹夜をしたのだが、結局睡魔に負け、妹に起こされたのだが、いかんせん睡眠時間が短かった為、フェリーに向かう時でも睡魔と激闘した程だ。

…部屋の外が騒がしい。

今頃、アカデミアの入学生たちが自己紹介したり、特設のデュエルフィールドでデュエルしているのだろうか…。

俺も挨拶したいが、…ダメだ。今は睡魔に勝て…る…気が……しねぇ……？？

塔也↓？？？ｓｉｄｅ

いや～、やっぱアカデミアは楽しいデュエルが出来そうだぜ！

部屋の中でいるのも退屈だから、俺と同じアカデミアの入学生に挨拶ついでにデュエルの約束をした。

特設のデュエルフィールドでデュエルしようにも結構混んでて、俺たちの番が回る頃にはアカデミアに着いちまうって事でデュエルはアカデミアまでお預けだ。

ちぇ～、そういや挨拶まわりの時に鍵が掛かっていた部屋があったな。

まあいいや、アカデミアに着いたら、翔や三沢他のやつらとデュエルしまくるぜ！

？？？↓塔也ｓｉｄｅ

ふぁ～、よく寝た。

起きた時には、アカデミアに着いていて、係員に起こされた。

係員の顔が妙に疲れた表情だったが…、うん、気にしない気にしない。

フェリーから降りて、俺はアカデミアの教師から制服を受け取った。

…色は赤色。オシリス・レッドか。

やっぱ、筆記試験の結果が響いたのか…。

まあいいや、下克上で上がると言うのも楽しみかもな。

俺は荷物を置きにレッド寮に向かって着いたら、これまたえらく年期を感じさせられるボロアパートだった。

だが、俺は割とこういう風情は好きな方だ。

さて、寮長に俺の部屋を聞きに行こう。

「おーい。」

と思った矢先、後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向くと、黒と茶色の髪のレッド生徒が俺に手を降っていて、水色の髪の眼鏡をした背が小さいレッド生徒が息を切らしていた。

「ア、アニキ…。置いてかないでよ～。」

「悪いな、翔。早く荷物を置いてデュエルしたかったからさ。」

アニキと呼ばれているレッド生徒は、水色の眼鏡のレッド生徒に謝っていた。

「よっ、お前もオシリス・レッドか？　俺は遊城　十代。よろしくな。」

「フェリーじゃ見かけなかったたね。
僕は　丸藤　翔　よろしくね。」

「俺は　雲雀　塔也　だ。よろしくな遊城、丸藤。」

遊城と丸藤が自己紹介したので、俺も軽く自己紹介した。

「十代でいいぜ。俺も塔也って呼ぶぜ。」

「僕の事も　翔　でいいよ、　塔也君。」

「そうか、じゃ改めてよろしくな十代、翔。」

「おうっ！よろしくな。」

「うんっ！よろしく。」

と思った矢先、後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向くと、黒と茶色の髪のレッド生徒が俺に手を降っていて、水色の髪の眼鏡をした背が小さいレッド生徒が息を切らしていた。

「ア、アニキ…。置いてかないでよ～。」

「悪いな、翔。早く荷物を置いてデュエルしたかったからさ。」

アニキと呼ばれているレッド生徒は、水色の眼鏡のレッド生徒に謝っていた。

「よっ、お前もオシリス・レッドか？　俺は遊城　十代。　よろしくな。」

「フェリーじゃ見かけなかったね。
僕は　丸藤　翔　よろしくね。」

「俺は　雲雀　塔也　だ。よろしくな遊城、丸藤。」遊城と丸藤が自己紹介したので、俺も軽く自己紹介した。

「十代でいいぜ。俺も塔也って呼ぶぜ。」

「僕の事も　翔　でいいよ、　塔也君。」

「そうか、じゃ改めてよろしくな。
十代、翔。」

「おうっ！よろしくな。」

「うんっ！よろしくね。」

十代に翔、２人ともいい友達になれそうだな。

「じゃあ、部屋に荷物を置いて早速デュエルしようぜ！　翔、塔也。」

「こらっ！この後すぐに入学式でしょ、十代君！」

俺たちの後ろから、黒の長い髪の女教師がやってきた。

「あっ、みどりさん。久しぶり。」

「ここではみどり先生よ、十代君。
本当に久しぶりね、病院以来かしら？」
「この先生と知り合いなのか、十代？」

「ああ、小学校の時にちょっとな。」

十代は、しみじみと言った。

「そうだよアニキ！入学式もうすぐ始まっちゃうよ！　今から走

っていかないと間に合わないよ！」

翔の言葉に俺はギョッとした。

入学早々こんな事で目立ちたくない。

「いけねぇ！そうだった。　悪いな十代、デュエルは入学式の後だ。」

「しょうがないか…。じゃ入学式の後絶対にデュエルしような。」

俺たちは、校舎に向かって全速力で走った。

入学式の内容は、先生の自己紹介と鮫島校長の長話、校則についてだった。

しかし十代は器用な奴だな。

立ったまま爆睡しているんだからな。

俺も小中学校じゃ、やってな…。

入学式が終わってから俺たちはレッド寮の近くでデュエルした。

…結論から言おう。十代の圧勝だった。

ここ一番と言う時に、状況を打破出来るカードを引き当てるもの

だから、追い詰めてもあっという間に逆転される事が多い。

特にジ・アースとＺＥＲＯのコンボは戦慄が走ったぜ…。

そうこうして数日後、俺たちはレッド寮の食堂で食事している時に、寮長のみどり先生は寮対抗デュエル大会の事をレッド生徒に伝えた。

ちなみに、献立は味噌汁、ご飯、漬け物、サンマの塩焼きだった。

…うん、庶民的だ。

「…と言う訳でまずは明日のデュエル大会に出る代表を決めます。」

「ハイ！ハイ！！ハイ！！！俺が代表で出たいです！！！」

みどり先生が言い終わるやいなや、十代が速攻で立候補した。

あまりの速さに俺や翔たちは呆気に取られたぞ。

「待てよ十代、代表ってのには俺も興味がある。俺も立候補するぜ。」

「ぼ、僕はいいかな…。」

「立候補は…２人だけみたいね。

じゃあここは公平にジャンケンで決めましょ。」

みどり先生の提案に正直ホッとした。

デュエルだったら、９０％俺は代表になれなさそうだからな。

…あれ？自分で言っておいて悲しくなってきたぞ？

「行くぜ、十代！」「来い！塔也！」

「「ジャンケーン、ポン！！」」

結果、十代がパーで勝って代表に選ばれた。

塔也↓十代ｓｉｄｅ

そして、デュエル大会当日がやってきたんだ。

「それデーハ、これより寮対抗デュエル大会を開催するノーネ！」

クロノス先生が司会をするみたいだ。

「まずは試合方式を改めて説明するノーネ。

各寮で決まった代表生徒と代表生徒が選んだ生徒でデュエルして貰いマスーノ。

デュエルの対戦相手は　この特設ルーレットで決めマスーノ。」

俺はあと1人の生徒は塔也を選んだぜ。

塔也は代表生徒になれなかった事が悔しかったとか言ってけど、快く引き受けてくれたぜ。

塔也は面白いデュエルをするからな。

俺は何回もデュエルして毎回勝てているけど、いつやってもギリギリだったけ…。

「デュエルに勝利した場合にはその寮に1点、引き分けた場合、負けた場合は0点ナノーネ。代表生徒に勝利した、もしく代表生徒が勝利した場合、その寮に更に1点追加されるノーネ。

大会はこの得点で競うノーネ。

優勝した寮には豪華賞品がアリマスーノ。」

豪華賞品かぁ…、何なんだろな。

みどり先生に質問したけど、「優勝してからのお楽しみよ。」って言って結局分からずじまいだったけど…。

「賞品はきっとすごいレアカードに違いないよ！」「それは無いんじゃないか？

この手の豪華賞品って大体鉛筆かノートだって。」

翔が目を輝かせていると、塔也が水が差した。俺は寮の食事にエビフライが出てくるとかがいいな。

「ではルーレットスタートナノーネ。
あっ、ポチっとな。」

ルーレットが動き出した、一体誰とデュエル出来るか楽しみだぜ。

「決まったノーネ！第1試合はオベリスク・ブルー、　シニョール　皇（すめらぎ）！　オシリス・レッド　シニョール　十代！」

おっ、どうやら俺と皇って奴に決まったようだぜ。

「皇か、気を付けろよ十代。
奴はあのジュニアチャンプを称号を取った万条目と互角の強さを持っているって話だぜ。」
塔也が俺にそう言った。
そんな奴とデュエル出来るか、くぅ～燃えてきたぜ！

「アニキ、頑張って！」

「十代、期待しているぜ？」

「おうっ！行ってくるぜ！」

俺は翔と塔也、レッド生徒の仲間たちの応援を背にデュエルフィールドに上がる。

「やあ、君が十代だね。入学試験デュエルでクロノス寮長に勝った噂は僕も耳にしてるよ。

僕の名前は　皇　宝山　（すめらぎ　ほうざん）だよ。　よろしくね、十代。」

「俺は遊城　十代だ。　楽しいデュエルにしようぜ、宝山！」

「うん、もちろんさ。でもデュエルは勝たせて貰うけどね。」

「それデーハ、デュエル開始ナノーネ！」

「「デュエル！！」」

十代　ＬＰ４０００

宝山　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能で先行は俺に決まったようだぜ。

「俺の先行、ドロー！　俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタル・ヒーロー）　エアーマンを攻撃表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

ＡＴＫ１８００

「そしてエアーマンの効果発動！
エアーマンは召喚した時、デッキからＨＥＲＯ１体を手札に加える。
俺はＥ・ＨＥＲＯ　ネクロ・ダークマンを手札に加える。
そして、カードを２枚伏せターンエンドだ。」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタル・ヒーロー）　エアーマン
レベル４　風属性　戦士族
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ３００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果の内、１つ選択して発動する。
●デッキからＨＥＲＯと名の付くモンスター１体を手札に加える。
●このカード以外のＨＥＲＯと名の付くモンスターの数だけ相手フィールド上の魔法・罠カードを破壊する。

「早速来たな、十代のエンジンが。」
「アニキー！ファイトー！」
「なら僕のターンだな、ドロー。」　十代　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード２枚

宝山　ＬＰ４０００

手札６枚

「僕は宝玉獣　サファイア・ペガサスを召喚。」
ＡＴＫ１８００

「そして、サファイア・ペガサスの効果発動！　サファイア・ペガサスが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の手札・デッキ・墓地から宝玉獣１体を永続魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く事が出来る！
僕はデッキから宝玉獣　ルビー・カーバンクルをセットするよ。」

宝玉獣　サファイア・ペガサス

レベル４　風属性　獣族
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１２００

召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の手札・デッキ・墓地から宝玉獣１体を永続魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く事が出来る。
このカードがモンスターゾーンで破壊された時、墓地に送らず、

永続魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く事が出来る。

「モンスターを魔法・罠ゾーンに置く事に意味があるの？」

「確かに普通のデッキなら、ただ魔法・罠ゾーンを圧迫するだけだが、宝山の使う宝玉獣たちは、その効果を利用した強力なカードが豊富にある筈だ。」

「な、なるほど。よく分かったよ。」

「けど、宝玉獣は攻守はそんなに高くない。十代なら難なく勝てるさ。」

「永続魔法、レインボー・クリスタル発動。　このカードは自分フィールド上に存在する宝玉獣１体につき、宝玉獣の攻撃力を２００ポイントアップする。

更に魔法カード、鉱山採掘発動。

デッキの上からカードを3枚めくって、宝玉獣があった場合、そのカードを永続魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く。　…確認したカードは、宝玉獣　コバルト・イーグル、リビングデットの呼び声、宝玉獣アンバー・マンモスだ。

コバルト、アンバー2体を魔法・罠ゾーンにセット。

残ったカードをデッキの下に。」

宝玉獣　サファイア・ペガサス

ＡＴＫ１８００↓２６００

すげー、攻撃力１８００のサファイア・ペガサスが攻撃２６００になったぜ。

「魔法・罠ゾーンにセットされた宝玉獣たちもカウントされるから、合計４体。
僕のフィールド上の宝玉獣たちの攻撃力は８００ポイントアップするよ。」

レインボー・クリスタル

永続魔法

自分フィールド上の宝玉獣と名の付くモンスターの攻撃力を自分フィールド上の宝玉獣と名の付くカード×２００ポイントアップする。

鉱山採掘

通常魔法

自分のデッキからカード3枚めくって、宝玉獣と名の付くモンスターがあった場合、そのカードを自分の魔法・罠ゾーンに永続魔法扱いとしてセットする。
他のカードは好きな順番でデッキの下に置く。

「バトル！僕は宝玉獣　サファイア・ペガサスで、Ｅ・ＨＥＲＯエアーマンを攻撃！

サファイア・トルネード！」

「ウワァッ！」

十代　ＬＰ４０００→３２００

サファイア・ペガサスの角から竜巻を起こした事で、俺のエアーマンが破壊されちまった…。
だがタダじゃやられないぜ！

「罠発動、ヒーロー・シグナル！
自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時、俺の手札またはデッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体を特殊召喚する！
来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

ＤＥＦ２０００

ヒーロー・シグナル

通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時、手札また

はデッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体を特殊召喚する。

「やるね、僕はバトルフェイズは終了してメインフェイズ２に入るよ。
　魔法カード、レア・ヴァリュー発動。
僕の魔法・罠ゾーンに宝玉獣が２体以上ある時に発動出来る。
君は僕の魔法・罠ゾーンの宝玉獣１体を選択して、僕はそのカードを墓地に送るよ。」

へっ？墓地に送っていいのか。
まあいいや、だったら俺は攻撃力の高いアンバー・マンモスを選択するぜ。

「俺は宝玉獣　アンバー・マンモスを選択するぜ。」

「ＯＫ、じゃあアンバー・マンモスを墓地に送るよ。
そして僕はレア・ヴァリューの効果で２枚ドローする。」

ドロー効果があったのか…。
でも、アンバー・マンモスが墓地に送られて、サファイア・ペガサスの攻撃力はダウンするぜ。

宝玉獣　サファイア・ペガサス
ＡＴＫ２６００→２４００

レア・ヴァリュー

通常魔法

自分の魔法・罠ゾーンに宝玉獣が2体以上ある時に発動出来る。
相手は自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣1体を選択し、自分はそのカードを墓地に送る。
その後、デッキからカード2枚ドローする。

「僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド。
さぁ、君のターンだよ、十代。」

よし、俺のターンだ。こっから反撃だ！

「俺のターン、ドロー！」

十代　ＬＰ３２００

手札　４枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

宝山　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

宝玉獣　サファイア・ペガサス

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

宝玉獣　コバルト・イーグル

レインボー・クリスタル

伏せカード×１

「俺はスタンバイフェイズに　フォレストマン　の効果発動だ！
自分のデッキまたは墓地から　融合　１枚を手札に加える。
俺はデッキから融合を手札に加えるぜ。
更に魔法カード、戦士の生還発動。
墓地のエアーマンを手札に加えてそのまま攻撃表示で召喚だ！
効果でデッキから　Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャンを手札に加える。」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
ＡＴＫ１８００

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
レベル４　地属性　戦士族
ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ２０００
自分のスタンバイフェイズに自分のデッキまたは墓地から融合１枚を手札に加える。

戦士の生還
通常魔法
自分の墓地から戦士族１枚を手札に加える。

「アニキが融合を手札に加えた！」
「始まるぞ…。　十代のラッシュが。」
「俺は魔法カード融合を発動！」

「待った！僕はカウンター罠、宝玉の願いを発動するよ。」

「えっ？」

「自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣１体を墓地に送る事で発動して、相手の魔法・罠カードの発動と効果を無効にして破壊する！君に融合を使われると厄介でね。宝玉獣　コバルト・イーグルを墓地に送って、融合を無効にする！」

宝玉獣　サファイア・ペガサス

ＡＴＫ２４００→２２００

「あちゃー、融合を止められたか。これじゃ、次の宝山のターンでエアーマンが攻撃されちまうぜ。」

「大丈夫だよ塔也君。きっとアニキの手札にはまだ…。」

「俺は諦めないぜ！　手札から魔法カード融合を発動！」

「２枚目だって！？」

「俺は手札の　オーシャン　と、　フィールドの　フォレストマン　を融合！
来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース！」

オーシャンとフォレストマンが融合して、このデッキのフェイバリットカードがフィールドに降り立ったぜ！

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース
ＡＴＫ２５００

「十代の奴、フォレストマンで手札に加える前に、融合を引き当てたってのか？
すごい強運だな…。」

「これがアニキの強ささ！」

「よし、バトルだ！　Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース　で、　宝玉獣　サファイア・ペガサスを攻撃ッ！　いっけー！　ジ・アース！！
アース・インパクト！！！」

「うあああっ！」

宝山　ＬＰ４０００→３３００

ジ・アースのパンチで、　サファイア・ペガサスを倒し…あれ？

「サファイア・ペガサスが魔法・罠ゾーンにセットされてる！？」

「ふーっ、驚いた～。宝玉獣たちの共通の効果さ。
宝玉獣たちは、モンスターゾーンで破壊された時、そのカードを永続魔法扱いとして、魔法・罠ゾーンにセットする事が出来る！」

そういう事か…。　けど、宝山のフィールドは今、がら空きだ！

「続けて　エアーマンでダイレクトアタック！　エアーシュート！」

「うぐっ…！」

宝山　ＬＰ３３００→１５００

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」　「へへっ、やるね十代。　けど、デュエルはまだまだこれからだ！」

「おうっ！かかって来い、宝山！！」

ＨＥＲＯＶＳ宝玉獣（後書き）

「僕の更なる力を見せてあげるよ、十代！」

「来い、宝山！」

俺は宝山とのデュエルでとんでもない方法の召喚を見る事になる。

「僕は魔法・罠ゾーンのサファイア・ペガサスをリリースするよ！」

「な、何だって！？　魔法・罠ゾーンのモンスターをリリース！？」

「これこそが、宝玉獣の祖先…。
現れろ！Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク！！」

次回、「古のＬ・宝玉獣！」

次回も俺のＨＥＲＯたちと一緒に突っ走るぜ！

古のL・宝玉獣！（前書き）

お待たせしました！第3話です。

前回のデュエルの続きで、視点は十代からです。

古のＬ・宝玉獣！

「僕のターン、ドロー。」

十代　ＬＰ３２００

手札　２枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

魔法・罠カード

伏せカード×２

宝山　ＬＰ１５００

手札　４枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　サファイア・ペガサス

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

レインボー・クリスタル

「僕は魔法カード、宝玉の契約を発動。
自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣１体を特殊召喚するよ。
来て、宝玉獣　ルビー・カーバンクル！」

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

ＡＴＫ３００→７００　ＤＥＦ３００

「何で　ルビー・カーバンクルを特殊召喚したんだろ？
サファイア・ペガサスを特殊召喚すれば効果で宝玉獣を魔法・罠ゾーンにセット出来るのに…。」

「いや、あれでいいんだ翔。
宝玉獣　ルビー・カーバンクルは、特殊召喚した時、自分の魔法・罠ゾーンの全ての宝玉獣を特殊召喚する効果がある。
この効果で　サファイア・ペガサスを特殊召喚すれば、効果で宝玉獣をセット出来るから　ルビー・カーバンクルを　特殊召喚した方が得なんだ。」　翔の疑問に塔也が　ルビー・カーバンクルの効果を説明した。
くっそー、だったら　レア・ヴァリューの時にルビー・カーバン

クルを選択すれば良かったぜ。

宝玉の契約

通常魔法

自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣１体を特殊召喚する。

「へぇ、よく効果を知っているようだね。」

「小さい時に少し聞いた事があるからな。」

宝玉獣って確か大会の賞品でしか出てないって聞いた事があるけど…。　塔也もその大会に出ていたのか？

「宝玉獣　ルビー・カーバンクル　の効果発動。
説明は彼がしてくれたから、言わなくていいよね？
効果で魔法・罠ゾーンの　サファイア・ペガサスを特殊召喚して効果発動、デッキからサファイア・ペガサスをセットするよ。サファイア・コーリング！」

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

ＡＴＫ７００→９００

宝玉獣　サファイア・ペガサス

ＡＴＫ１８００↓２４００

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

レベル３　光属性　天使族

ＡＴＫ３００　ＤＥＦ３００

このカードが特殊召喚に成功した時、自分フィールド上の魔法・罠ゾーンに存在する　宝玉獣　と名の付くモンスターを可能な限り特殊召喚出来る。　このカードがモンスターゾーンで破壊された時、墓地に送らず、永続魔法扱いとして自分の魔法・罠ゾーンにセット出来る。

一気に2体も特殊召喚されたぜ。

でも、　ジ・アースの方が攻撃力は上だ。

それに伏せカードも2枚ある。

宝山は、そう簡単に手は出せない筈だ…。

十代↓宝山ｓｉｄｅ

参ったな…。

彼は…、十代は強いや。　こんなに苦戦するのは、万丈目とのデュエル以来かな。

こんな状態から逆転出来たら、　どれだけ面白いだろう事か…。

それを考えるだけですごくワクワクするや。

これは久々にアレを出さないと負けるかもしれないね。

「僕の更なる力を見せてあげるよ、十代！」

「来い、宝山！」

「更なる力か…。宝山は上級モンスターを召喚する気か？
宝玉獣の効果を生かす事が出来て、この場を逆転するとなると、
召喚するのは　グラビ・クラッシュドラゴンか？」

うーん、いい線いっているけど、違うんだよね。
彼、塔也は宝玉獣の事を知っているみたいだけど、この子たちの事は知らない筈だ。

「僕は魔法・罠ゾーンの　サファイア・ペガサスをリリースするよ！」

「な、何だって!?　自分の魔法・罠ゾーンのモンスターをリリース!?」

「バカな!?　そんな召喚方法を持ったモンスターは存在しない筈だ！」　やっぱり彼は知らないようだね。

「いるんだよ、　僕のデッキにはね。　このカードをアドバンス召喚する時、自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣をリリース出来る。」

アカデミアじゃ、出すのは初めてだったね。
おまたせ、…さぁ出番だよ。

「これこそが、宝玉獣たちの祖先が1体、現れろ！　L（レジェンド）・宝玉獣オパール・シャーク!!」

水しぶきを上げて、額にオパールをつけた鮮やかな色の鮫が、優雅に空を泳ぐ。
…久しぶりだね、オパール・シャーク。

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク
ＡＴＫ２１００

「オパール・シャークも宝玉獣の名を持つモンスター、よって永続魔法、レインボー・クリスタルの効果で攻撃力アップ！」

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク
ＡＴＫ２１００→２７００

「何、あのモンスター…。」

「あんな召喚方法聞いた事が無いぞ。」

やっぱりみんなオパール・シャークを見て驚いいるみたいだね。

「ねぇ塔也君、　あのモンスターの事も知っているの？」

「いや…俺も知らないカードだな。
というか、宝玉獣に上級モンスターが存在するなんて初耳だぞ。」

みんなの中でも、彼らはそんなに驚いてないようだ。

十代はオパール・シャークを見て、目を輝かせているみたいだね。
「スゲー！スゲーよ宝山！！
メッチャクチャカッコいいモンスターだな！」

「おい十代、感動している場合じゃねぇぞ！
宝山のフィールドには　ジ・アース　の攻撃力を超えるモンスターがいるんだ。
　このターン、大ダメージを受けちまうぜ！」

「大丈夫だって、塔也。
まあ見ててくれよ。」

彼の態度から見て、やっぱり彼の伏せカードは攻撃に反応するカードみたいだね。
…だけど、思い通りにはならないよ！

「僕は永続魔法、宝玉の加護を発動！
このカードがある限り、僕の宝玉獣たちは相手のカード効果の対象にはならないよ！」

宝玉の加護

永続魔法

自分フィールド上の宝玉獣と名の付くカードは相手の魔法・罠・モンスター効果の対象にはならない。
自分フィールド上の宝玉獣と名のモンスターの戦闘でダメージを

受ける時、自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣を墓地に送る事で受けるダメージを0にする。

「行くよ、バトル！　L・宝玉獣　オパール・シャークで、　E・HERO　ジ・アースを攻撃！

更にオパール・シャークは戦闘でモンスターを破壊した時、相手に自分フィールド上の宝玉獣一体につき、300ポイントダメージを与えるよ！行け、オパール・バイト！」　L（レジェンド）・宝玉獣　オパール・シャーク
レベル5　水属性　魚族
ATK2100　DEF1600

このカードをアドバンス召喚する場合、自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣をリリース出来る。
このカードがモンスターを破壊した時、相手に自分フィールド上の宝玉獣1体につき300ポイントダメージを与える。
このカードが破壊される場合、墓地に送らず、永続魔法扱いとして自分の魔法・罠ゾーンにセット出来る。

オパール・シャークが、　ジ・アースを噛み砕こうと飛びかかった。「まずい！オパール・シャークのバトルが通ったら、十代は大ダメージを受ける羽目になってしまうぞ！」

「アニキッ！」

「俺は罠カード、ヒーロー・オーラを発動！　手札のHERO1枚を墓地に送る事で、このターン、自分フィールド上のHEROは戦闘及びカード効果じゃ破壊されない！」

「けど、戦闘ダメージは受けて貰うよ。」

「うぐっ！」

十代　ＬＰ３２００→３０００

オパール・シャークは　ジ・アースの右腕に噛みついたけど、振りほどかれちゃった。

「やるね十代。　なら僕はこのままターンエンド「いーや、まだだぜ？」　…えっ？」

このタイミングで一体何をするつもりだろうか？

「罠発動、　アース・グラビティ！　相手のバトルフェイズに発動出来、　相手のレベル４以下のモンスターは、可能なら　ジ・アースと強制戦闘だ！」

何だって！　じゃあ、このターン、攻撃表示のサファイア・ペガサスは、　ジ・アースと…。

「くっ、サファイア・ペガサスで　ジ・アースを攻撃するよ！」

「迎え撃て！　アース・インパクト！！」

サファイア・ペガサスは、サファイア・トルネードで攻撃するけど、　ジ・アースは　竜巻を突き破って、サファイア・ペガサスに一撃を与えた。

宝山　ＬＰ１５００→１４００

「でもペガサスの効果で、魔法・罠ゾーンにセット！　…ターンエンドだよ。」

「よっしゃー！！　行くぜ、俺のターン、ドロー！」

十代　ＬＰ３０００

手札　２枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース

魔法・罠ゾーン　無し

宝山　ＬＰ１４００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　サファイア・ペガサス

レインボー・クリスタル

宝玉の加護

「俺は　ネクロ・ダークマンの効果発動！　このカードが墓地に存在する時、デュエル中に１度だけ　Ｅ・ＨＥＲＯをアドバンス召喚する時のリリースを無しに出来るぜ！　来い！　Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン！！」

ネクロ・ダークマンはさっき発動したヒーロー・オーラで墓地に送ったんだね。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロ・ダークマン

レベル５　闇属性　戦士族

ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１８００

このカードが墓地に存在する時、自分はデュエル中に１度だけＥ・ＨＥＲＯのアドバンス召喚に必要なリリースを無しに出来る。

Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン

レベル７　地属性　戦士族

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ１８００

このカードが守備表示モンスターを攻撃する時、守備力を攻撃力が超えた場合、その数値分戦闘ダメージを与える。

「行くぜ！　エッジマンで、　ルビー・カーバンクルを攻撃！　エッジマンが守備表示モンスターを攻撃する時、攻撃力が守備力を超えた場合、貫通ダメージを与えるぜ！行け、パワー・エッジアタック！！」

「ルビー・カーバンクルの守備力は３００！
これが決まればアニキの勝ちだ！」

「甘いよ、宝玉の加護の効果発動！　自分フィールド上の宝玉獣の戦闘によってダメージを受ける時、　自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣１体を墓地に送る事で、　戦闘ダメージを０にする！
僕は魔法・罠ゾーンの　サファイア・ペガサスを墓地へ送る！」
エッジマンの斬撃の余波が飛び交ってきたけど、サファイア・ペガサスが風となって僕を守ってくれた。

「そして、ルビー・カーバンクルを効果で魔法・罠ゾーンにセットするよ。」

「俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ。」

「僕のターン、ドロー。」

十代　ＬＰ３０００
手札０枚
モンスターゾーン

E・HERO　エッジマン

E・HERO　ジ・アース

魔法・罠ゾーン

伏せカード×1

宝山　LP1400

手札1枚

モンスターゾーン

L・宝玉獣　オパール・シャーク

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

レインボー・クリスタル

宝玉の加護

「僕は魔法カード、魔法石の導きを発動。　自分フィールド上の永続魔法1枚につき、1枚ドローする。
僕のフィールド上の永続魔法は永続魔法扱いのルビー・カーバンクルを含めて3枚、よって3枚ドローするよ。」

1枚目、…違うこれじゃない。

2枚目、いいカードだけど、これでもない。

そして、3枚目、…来た。

ありがとう僕のデッキ、これならまだまだ逆転出来るかもしれない。

「僕は魔法カード、宝玉の恵みを発動するよ。
自分の手札または墓地から、宝玉獣を2体まで魔法・罠ゾーンにセットする。
僕は　サファイア・ペガサスと、　アンバー・マンモスをセット！」

宝玉の恵み

通常魔法

自分の手札または墓地から、宝玉獣を2体まで永続魔法扱いとし

て自分の魔法・罠ゾーンにセットする。

「宝山君のフィールドに宝玉獣が大量にセットされちゃったよ！」

「宝玉獣が増えた事で、レインボー・クリスタルの効果で、僕のフィールド上の宝玉獣の攻撃力はアップするよ。」

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク

ＡＴＫ２５００→２９００

「宝山はまたＬ・宝玉獣を召喚する気か？」

「僕は魔法・罠ゾーンのルビー・カーバンクルと、アンバー・マンモスをリリース！

紅の炎を宿し、大空を舞え！

Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックスをアドバンス召喚！」

ルビー・カーバンクルとアンバー・マンモスの宝玉が光に消えて、紅色の翼をはためかせ、首と額にガーネットをつけた鳳凰のような姿をした鳥が、僕のフィールドに舞い降りる。

Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックス

ＡＴＫ２５００→３１００

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク

ＡＴＫ２９００→２７００

「Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックスの効果発動だよ！
１ターンに１度、自分の墓地の宝玉獣１体を魔法・罠ゾーンにセットする！
ガーネット・コーリング！！」

Ｌ・宝玉獣（レジェンド）　ガーネット・フェニックス

レベル７　炎属性　鳥獣族

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００

このカードをアドバンス召喚する場合、自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣をリリース出来る。
１ターンに１度、自分の墓地から宝玉獣１体を永続魔法扱いとして、自分の魔法・罠ゾーンにセット出来る。
自分のエンドフェイズ時、自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣を２体墓地に送る事で、このカードを墓地から特殊召喚出来る。

ガーネット・フェニックスが１枚の羽根を落とすと、羽根が輝い

て、ルビー・カーバンクルの宝玉が現れたよ。

「宝玉獣が新たに現れた事で、レインボー・クリスタルの効果で更に攻撃力をアップする！」

Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックス

ＡＴＫ３１００→３３００

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク

ＡＴＫ２７００→２９００

「マズいな、宝山のフィールド上のモンスターの攻撃力は、十代の　エッジマンと　ジ・アースより上だ！
このターン、十代のモンスターは全滅されちまうぜ！」

「へへっ、面白れぇ…。　すごく楽しいデュエルだぜ、宝山！！」

「ふふ、遠慮なく行くよ十代！
まずは　オパール・シャークで、　ジ・アース　を攻撃！
オパール・バイト！！」　さっきは防ぐ事が出来たけど、高速で突っ込む攻撃にジ・アースは耐えられなかったようだね。

「うわっ！」

十代　ＬＰ３０００→２６００

オパール・シャーク…、もう少し力を貸して貰うよ！

「　そして、オパール・シャークの効果発動！
戦闘でモンスターを破壊した時、自分フィールド上の宝玉獣１体につき、３００ポイントダメージを与える！
僕のフィールドには宝玉獣は４体…。
よって１２００ポイントダメージを受けて貰うよ！」

十代　ＬＰ２６００→１４００

「へへ、まだまだだ！」

「今度は　ガーネット・フェニックスで、　エッジマンを攻撃！
ガーネット・フレア！！」

ガーネット・フェニックスが放った紅の炎が、エッジマンを燃やし尽くした。

「ぐわぁぁっ！」

十代　ＬＰ１４００→７００

「ふふっ、僕はこれでターンエンドだよ。」

さぁ、どうする十代？

「俺のターン…。ドロー！！」

十代　ＬＰ７００

手札１枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

宝山　ＬＰ１４００

手札１枚

モンスターゾーン

Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックス

Ｌ・宝玉獣　オパール・シャーク

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　ルビー・カーバンクル

宝玉獣　サファイア・ペガサス

レインボー・クリスタル

宝玉の加護

宝山→十代ｓｉｄｅ

なかなかやるな宝山。　でもこっちも負けてられないぜ！

「俺は魔法カード、貪欲の壺発動！」

「十代の奴、このタイミングでドローカードを引き当てやがった！　さっきも思ったが、ありえない引き運だな。」

「自分の墓地からＥ・ＨＥＲＯ　エアーマン、エッジマン、ネク

ロ・ダークマン、オーシャンをデッキに、そしてジ・アースをエクストラデッキに戻して、カードを2枚ドローするぜ！」

よし、来たぜ！

「罠発動、窮地の進撃。　自分のＬＰが１０００ポイント以下で、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、デッキからレベル４以下のモンスターを2体特殊召喚する！
来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン、オーシャン！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
ＤＥＦ２０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン
ＡＴＫ１５００

窮地の進撃
通常罠

自分のＬＰが１０００ポイント以下で、自分フィールド上のモンスターが存在しない場合に発動出来る。
自分のデッキから、レベル４以下のモンスター2体を特殊召喚する。

貪欲な壺

通常魔法

自分の墓地からモンスターを5体デッキに戻して、カードを2枚ドローする。

「俺は魔法カード　マックス・フュージョン発動！　俺はフィールド上の　フォレストマンとオーシャンを融合！
再び舞い戻れ！　Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース！
更にマックス・フュージョンで融合召喚モンスターは、レベル×２００ポイント攻撃力をアップするぜ！」

ジ・アースにオーラが漂っている。どうやら力が漲って来たようだぜ！

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース
ＡＴＫ２５００→４１００

「攻撃力４１００だって！？」

「だが、宝山のフィールドには永続魔法　宝玉の加護がある。
アレを何とかしないと宝山にダメージを与える事が出来ないぞ。」

大丈夫だぜ、塔也。　その為の方法は、俺の手札にやって来たぜ！

「俺はＥ・ＨＥＲＯ　エアーマンを召喚して、効果発動！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

ＡＴＫ１８００

「一体どんなＨＥＲＯを手札に呼び込み気だい？」

「エアーマンの効果はもう１つある。
それは、召喚・特殊召喚した時に、自分フィールド上のエアーマン以外のＨＥＲＯの数だけ相手の魔法・罠カードを破壊する！
宝玉の加護を破壊するぜ！」

「くっ、宝玉の加護が！」

「塔也君っ！」

「ああ、このデュエル…。」

「俺はＥ・ＨＥＲＯ　ジ・アース　の効果発動！　自分フィールド上のＥ・ＨＥＲＯをリリースする事で、このターンまでリリー

スしたモンスターの攻撃力分アップする！　ジ・アース・マグマ！！」

「十代の勝ちだ！」

ジ・アースはエアーマンを吸収すると、マグマのように体を赤くたぎらせた。
いつ見てもカッコいいぜ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース

レベル８　地属性　戦士族／融合

このカードは融合召喚でしか特殊召喚出来ない。
自分フィールド上のＥ・ＨＥＲＯをリリースする事で、エンドフェイズまでリリースしたモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース

ＡＴＫ４１００→５９００

「行け、ジ・アース！　Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックスを攻撃！　ジ・アース・マキシマム・マグナスラッシュ！！」

ジ・アースは飛び上がると、ガーネット・フェニックスよりも熱の籠もったマグマソードで引き裂いて、決着がついたぜ！

「うわあああっ！！！」

宝山　ＬＰ１４００→０

「そこまで！勝者、オシリス・レッド　シニョール十代！」

「よっしゃー！！」

俺は勝った事に喜んでいると、宝山が俺に歩み寄って手をさしのべた。

「見事なデュエルだったよ、十代。
また、君にデュエルをしてもいいかな？」

「ああ、もちろんだぜ！　またやろうな宝山！！」

俺は宝山に握手しながら、そう約束したんだ。

古のL・宝玉獣！（後書き）

僕と十代のデュエルが終わって、第2試合が始まろうとしている中で、僕は万丈目と話した。

「ゴメンね、負けちゃった。」

「オシリス・レッドの生徒に負けるとはな…。腕が落ちたようだな宝山。」

「いや、彼はとても強かったよ。
ジュニアチャンピオンの時の君によく似たデュエリストさ。」

万丈目と話している中、第2試合の相手が決まった。

次回、「灼熱の傭兵　ベネット」

次回もゆったり行こうよ。

灼熱の傭兵　ベネット（前書き）

お待たせしました、第４話です。

今回は視点がかなり入れ替わります。

灼熱の傭兵　ベネット

宝山ｓｉｄｅ

僕は十代とのデュエルの後、彼の友達の塔也と翔と色んな話をしていた。

デュエルの再戦の申し込みや、カードのトレードとかね。　あと、Ｌ・宝玉獣の事も話したよ。

Ｌ・宝玉獣は、宝玉獣の元の宝石の石盤が発見した所から更に地下深くで発見されたんだって。

僕にこの子たちを渡してくれた　Ｍｒ　フェニックスがそう言ってたな。

宝玉獣もあるデュエル大会で、　ペガサス会長から譲ってくれた物だ。

「なるほど、Ｍｒ　フェニックスがＬ・宝玉獣を…。
宝玉獣のカード研究は、ペガサス会長が亡くなってからは打ち切りになったが、ペガサス会長が考案したカード群の創作を担当していたＭｒ　フェニックスが引き継いだと聞いた事があったな…。」

「塔也、よく知ってるな。

もしかしてペガサス会長に会った事があるのか？」

十代が塔也に尋ねる。

確かに宝玉獣のカードは、ペガサス会長か創作に協力した人しか知らない筈なんだけど…。

「ハハハ、まさか。　宝玉獣のカード制作に俺の親父が関わっただけさ。　宝玉獣の事は親父から聞いたんだ。」

塔也の発言に翔はすごく驚いた。

「ええ～！！　塔也君のお父さんって？2の社員なのっ！？」

「まぁな、俺と葵を家に置いて、仕事でよく海外を飛び回っているよ。」

僕も驚いた。

？2社は、デュエルモンスターズの大会社なのだから。

「お袋と一緒に出掛けるもんだからおかげで、小さい頃から俺と葵には親父とお袋との思い出があまり無いな…。

まぁ、たまに手紙を何通かよこす事はあるがな…。」

塔也は暗い顔で話した。
そっか、両親と楽しい思い出が無いのか…。

「塔也、ここはデュエル・アカデミアだ。
デュエルを通して思い出も沢山出来る。
僕と十代たちと一緒にここで楽しい思い出を沢山作ろうよ。」

塔也は僕の言葉に呆気にとられたけど、すぐに笑顔で答えてくれた。

「ああ、ありがとうなみんな。」

「宝山の言う通りだぜ？　俺たちと一緒に楽しい思い出を作ろうぜ！」

「その俺たちに俺も混ぜてくれないか？」

後ろからイエロー生徒が声を掛ける。

彼は確か三沢　大地だったかな、入学試験の筆記試験で1位で、
このデュエル・アカデミアでも成績はかなり上位に食い込んでいる。

「おぉ、三沢か。」

「今日のデュエル大会には、俺は代表生徒として出場している。
塔也、君はまだ選ばれていないから、俺と戦う事もあるかもな。」

「まぁその時は全力で勝ちに行くぜ、三沢。」

「フッ、君に対する方程式は完成している…。
こちらこそ勝たせて貰うよ。」

おっと、そろそろ万丈目の所に戻らないと…。

「そろそろ万丈目の所に戻るよ。またね、みんな。」

「おうっ！またな宝山！！」

「またね～。」

「ああ、じゃあな。」

僕は十代たちに別れを告げて、万丈目の所に戻った。

「ゴメンね、負けちゃったよ。折角君が選んでくれたんだけどね、

万丈目。」

「ふん、オシリス・レッドの生徒に負けるとは、腕が落ちたな宝山。」

万丈目の所に戻った時に、彼はそう冷静に突きつける。

「いや、彼はかなり強いよ。　彼からはジュニアチャンピオンの時の君と同じ感じがしたよ。」

「レッド生徒と俺が同じだと？
冗談も休み休み言え。」

「僕は冗談は苦手さ。十代なら君にも勝てるんじゃないかな？」

「ふん、だが俺はアイツに、遊城　十代になどには負けん！　…そうだ、負ける事などあってはならないんだ…。」　万丈目…、君は一体何に葛藤しているんだい？

「それデーハ、第2試合の対戦相手を決定するノーネ！
あっ、ポチッとナノーネ。」

おっと、第2試合の対戦相手を決定するルーレットが動き出した。
今度は一体、誰と誰がデュエルするのだろうか…。

「決まったノーネ！　第2試合の対戦相手は、　オベリスク・ブルー　シニョール　万丈目！　ラー・イエロー　シニョール　コレルスナノーネ！」

第2試合は、万丈目とコレルス・ベネットか…。
一体彼はどんなデュエルをするのかな？

「俺の番のようだな。　これ以上負けては　オベリスク・ブルーの名折れだ。
宝山、お前の尻拭いは代表生徒である俺がやる。　そこで見ていろ。」

「万丈目、頑張ってね。」

「ふん、俺に応援は不要だ。」

万丈目は静かにデュエルフィールドに上がった。
君なら大丈夫だよね？

宝山→万丈目ｓｉｄｅ

遊城　十代…。　奴は入学当時はまるで眼中になかった。

だが、奴のあのカード…。

奴と偶然出くわした時、俺は見てしまった…。

奴の持つハネクリボーのカードから精霊が出てくるところを…。

一瞬だったが間違いない。

俺は入学直後、俺の相棒　光と闇の竜を封印した。

アカデミアの全生徒に俺の実力を知らしめる為だ。

十代、お前も精霊に選ばれた者だと言うのか…。

だとしても俺は奴には負けん！

俺は奴に勝利するまでに敗北も許されない。　だから、このデュエルも必ず勝つ！

「ふん、精々足掻いてみるがいい…。」

「見せてみろ、マンジョウメ。

お前の切り札を…。」　「それでは、第2試合の開始ナノーネ！」

「「デュエル！！」」

万丈目　ＬＰ４０００

ベネット　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能で奴からターンが始まる。

「オレのターン、ドロー。」

万丈目　ＬＰ４０００

手札５枚

ベネット　ＬＰ４０００

手札６枚

「オレはヴォルカニック・バーナーを攻撃表示で召喚。」

ヴォルカニック・バーナー
ＡＴＫ１４００

ヴォルカニック…。　奴はバーンデッキか！

「更に永続魔法、ヴォルカニック・ウォールを発動！
このカードは自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送り、その中に炎族モンスターがあった場合、その枚数1枚につき相手に５００ポイントダメージを与える。ただし発動したターンはオレはモンスターで攻撃出来ないが、先行ならば関係ない…。
…墓地に送ったカードは、ヴォルカニック・バレット、スキル・サクセサー、ヴォルカニック・アサルトショットだ。
よって、オマエに１０００ポイントダメージを受けて貰う。」

「ちっ！」

万丈目　ＬＰ４０００→３０００

「更にヴォルカニック・バーナーの効果発動！
オレが　ヴォルカニック・バーナー以外の　ヴォルカニックと名の付くカードによって、相手に効果ダメージを与えた時、相手に４００ポイントダメージを与える！　ファイア！！」

ヴォルカニック・バーナー

レベル３　炎属性　炎族
ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ６００

このカードのコントローラーが　ヴォルカニック・バーナー以外の　ヴォルカニックと名の付くカードで効果ダメージを与えた時、相手に４００ポイントダメージを与える。

ヴォルカニック・ウォール

永続魔法

１ターンに１度、自分のデッキの上からカード３枚墓地送る事が出来る。
この効果で炎族モンスターを墓地に送った場合、その枚数×５００ポイントダメージを相手に与える。
この効果を発動したターン、バトルフェイズを行えない。

「ぐくっ！」

万丈目　ＬＰ３０００→２６００

「オレは装備魔法、ブレイズ・キャノン・ショットを　ヴォルカニック・バーナーに装備する！
このカードは１ターンに１度、自分の手札１枚を墓地送り、送った種類によって効果が変わる。
オレは手札からヴォルカニック・ロングショットを送る。
そして、モンスターを墓地送る事で、ブレイズ・キャノン・ショットを装備したモンスターは、攻撃力を６００ポイントアップ！」

ヴォルカニック・バーナー

ＡＴＫ１４００→２０００

ブレイズ・キャノン・ショット

装備魔法

炎属性モンスターに装備可能。１ターンに１度、手札１枚を墓地に送り、送った種類によって以下の効果を発動する。
●モンスターカード：装備モンスターの攻撃力を６００ポイントアップする。
●魔法カード：相手に装備したモンスターのレベル×１００ポイントダメージを与える。
●罠カード：このターン、装備モンスターが攻撃する時、フィールド上のカード１枚破壊する。

「更にヴォルカニック・ロングショットの効果発動！
ブレイズ・キャノンと名の付くカードで墓地に送った場合、相手の手札１枚を墓地に送る。
左から２番目のカードを墓地に送って貰おう…。」

「…いいだろう。」「ヴォルカニック・バレットの効果発動。
このカードが墓地に存在する時、１ターンに１度、５００ＬＰを払う事で、同名カードを手札に加える。」

ベネット　ＬＰ４０００→３５００

ヴォルカニック・ロングショット

レベル３　炎属性　炎族

ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ０

このカードが　ブレイズ・キャノンと名の付くカードで墓地に送った場合、相手の手札1枚を墓地に送る。

ヴォルカニック・バレット

レベル1　炎属性　炎族

ＡＴＫ１００　ＤＥＦ０

このカードが墓地に存在する場合、５００ポイントＬＰを払う事で、デッキからヴォルカニック・バレット1体を手札に加える。この効果は自分のメインフェイズ　に1度だけ発動出来る。

「魔法カード、弱者の宝札を発動。自分の手札からレベル3以下のモンスターを1体除外する事で、デッキから2枚ドローする。ヴォルカニック・バレットを手札から除外して2枚ドロー！オレはカードを2枚伏せ、ターンエンド。さぁ、かかって来い…。マンジョウメ。」

弱者の宝札

通常魔法

自分の手札からレベル3以下のモンスター1体を除外する事で、カードを2枚ドローする。

「アイツやるな…。先行1ターンで１４００ポイントもＬＰを削るなんてな…。　三沢、ベネットってどんなプレイングをするんだ？」

「バーンダメージを軸にしたデッキだ。
彼は　ブルー生徒にも勝つ実力を持つデュエリストだ。
だから俺は彼を選ばせて貰った。」

「ブルー生徒に!?スゲーなそいつ。」

「十代が言っても説得力無いけどな。」

「そうだね。アニキもブルー生徒の何人かに勝ってるし…。」

「…何だよ。」

「だが相手が万丈目となると、一筋縄には行かないだろう。」

ふん、味な事をする。　今度は俺の番だ！

「俺のターン、ドロー。」

万丈目　ＬＰ２６００

手札６枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

ベネット　ＬＰ３５００

手札１枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・バーナー

魔法・罠ゾーン

ヴォルカニック・ウォール

伏せカード×2枚

「俺は魔法カード、冥府の取引を発動！
相手は墓地からモンスターを2体まで特殊召喚し、特殊召喚したモンスター数だけ、アドバンス召喚のリリースの数を減らす。
さぁ、お前の墓地からモンスターを特殊召喚して貰うぞ！」

「…いいだろう。オレは墓地から、ヴォルカニック・アサルトショットとヴォルカニック・ロングショットを守備表示で特殊召喚する。」

ヴォルカニック・アサルトショット

DEF0

ヴォルカニック・ロングショット
ＤＥＦ０

冥府の取引
通常魔法

相手は墓地からモンスターを2体まで特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの数だけ、このターン、アドバンス召喚する時のリリースを減らす。

「冥府の取引の効果で、俺はこのターン、上級モンスターをアドバンス召喚する時にリリースは必要無くなった。
俺はバーニング・ドラゴンをリリース無しで召喚する！」

俺のフィールドに灼熱のドラゴンが地表を破り、周囲を威嚇するように吼える。

バーニング・ドラゴン
ＡＴＫ２５００

「バーニング・ドラゴンの効果発動！　このカードを召喚した時、フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！
最も、俺のフィールドには魔法・罠カードは無いがな…。」

「くっ…！ならば、バーニング・ドラゴンの効果にチェーンして、永続罠　宮廷のしきたり、炎上網ーファイアー・バリケードを発動！」

くっ、宮廷のしきたりで、炎上網ーファイアー・バリケードを破壊出来なかったか…！

「だが、　ファイアー・バリケード以外の魔法・罠カードは破壊だ！」「くっ！1ターン目からオレの魔法・罠を一掃するとは…。」

宮廷のしきたり

永続罠

このカード以外の永続罠は破壊されない。
宮廷のしきたりは、フィールド上に1枚しか存在出来ない。

炎上網ーファイアー・バリケード

永続罠

相手のスタンバイフェイズ時、自分の墓地から炎属性モンスター

2体を除外する事で、このターンのバトルフェイズをスキップする。

バーニング・ドラゴン
レベル8　炎属性　ドラゴン族
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２１００

このカードの召喚成功した時、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する。

「まだだ！俺は魔法カード、二重召喚発動！　このターン、もう1度通常召喚出来る。
俺はハリケイン・ドラゴンをリリース無しで召喚だ！」　ハリケイン・ドラゴン
ＡＴＫ２２００

「ハリケイン・ドラゴンの効果発動！　このターンまで攻撃力を半分にする事で、ハリケイン・ドラゴンは相手のモンスターを一回ずつ攻撃出来る！」

ハリケイン・ドラゴン
レベル7　風属性　ドラゴン族

ＡＴＫ２２００　ＤＥＦ１８００

このカードの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする事で、相手フィールド上のモンスターに１回ずつ攻撃出来る。

ハリケイン・ドラゴン

ＡＴＫ２２００→１１００

「バトル！行け、ハリケイン・ドラゴンで、ヴォルカニック・アサルトショットと、ヴォルカニック・ロングショットを攻撃だ！ハリケイン・クロス！！」

ハリケイン・ドラゴンは、体の中心のファンで強風を起こし、奴の守備表示モンスターを一掃する。

「くっ！」

「まだだ！バーニング・ドラゴンで、ヴォルカニック・バーナーを攻撃だ！　燃え尽きろ、バーニング・ブレス！！」

バーニング・ドラゴンの高熱の炎を受けて、ヴォルカニック・バーナーは一瞬で溶けた。

「うあぁぁっ！」　ベネット　ＬＰ３５００→３０００

「俺はカードを１枚を伏せ、ターンエンド。」

万丈目→塔也ｓｉｄｅ

俺は目の前のデュエルを見て驚嘆した。

先行１ターン目からバーンダメージで万丈目のＬＰを大幅に削ったベネットって奴も凄いが、ベネットのフィールドをほとんど吹き飛ばした万丈目も半端無く強い。

もしこの２人の内どちらかとデュエルしたら、俺勝てるかな？

「すげぇな…万丈目。　１ターン目で相手フィールド上のモンスターと魔法・罠を一掃したぜ。」

「さすがはジュニアチャンピオンの座を勝ち取っただけはあると言う事さ。」

十代が驚いている中、三沢は平然としている。

どっかの大会で、万丈目の強さを目の当たりにしたから、それが

当然と思えているのかもな。

「このデュエル、先の展開が全く予想出来ないよ！」

翔の気持ちは分かるぞ。
このデュエル、本当にどちらが勝ってもおかしくない。
だが、あえて予想するとしたら…。

「万丈目のドラゴンがベネットのＬＰを吹き飛ばすか、ベネットがドラゴンの猛攻を抑えてバーンダメージを駆使して削るか、このどちらかだろうな。」

「まあ、そうなるだろうな。
彼はフィールドに、炎上網－ファイアー・バリケードを残す事が出来た。
あの効果を使えば、現状況だと1ターンは耐えられる。」

「そうだな、1ターンでも耐えられるなら、ドローで逆転の可能性もあるからな。」

「あ～俺もあの2人とデュエルしてぇ～！」

「ア、アニキ…。」

十代の気楽さに翔は少し呆れている。

さぁ、このデュエルどう動く？

塔也↓ベネットｓｉｄｅ

くっ、大体予測していたが、ここまでやるとはな…。

だが取り乱してはならない…。マスターは言っていた、焦りが己のタクティクスを破綻させると…。

依頼人がアカデミアの資料と一緒に同封されていた水晶…。

この水晶が輝くと、精霊が現れた事を知らせるとの事だが…。未だに反応が無い。まだ奴が精霊のカードを使っていないと言う事か…。

奴に精霊のカードを使わせる為にも、まずは現状を打破する！

オレは深呼吸して落ち着かせてから、ドローする。

「オレのターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ２６００

手札０枚

モンスターゾーン

バーニング・ドラゴン

ハリケイン・ドラゴン

ベネット　ＬＰ３０００

手札２体

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

炎上網ーファイアー・バリケード

オレの手札は、ヴォルカニック・フォースとヴォルカニック・ロケット…。
この状況を打破するには十分だ！

「オレはヴォルカニック・ロケットを攻撃表示で召喚！」

後方にマグマのブースターを搭載したモンスターが飛び出した。

ヴォルカニック・ロケット
ＡＴＫ１９００

「ヴォルカニック・ロケット、効果発動！
このカードの召喚・特反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキ・墓地からブレイズ・キャノンと名の付くカード１枚を手札に加える。
オレが加えるのは、ブレイズ・キャノンだ。」

ヴォルカニック・ロケット

レベル４　炎属性　炎族

ＡＴＫ１９００　ＤＥＦ１４００

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキまたは墓地からブレイズ・キャノンと名の付くカード1枚を手札に加える。

「ヴォルカニック・バレットの効果のより、LPを500払いデッキの同名カードを手札に加える。」

ベネット　LP3000→2500

「そして永続魔法、ブレイズ・キャノンを発動！
オレは手札のヴォルカニック・バレットをブレイズ・キャノンに装填させ、バーニング・ドラゴンに射出する！ファイア！！」

オレのフィールドに現れた緑色の着立式の銃の装填口にヴォルカニック・バレットが入ると、勢いよく放たれてバーニング・ドラゴンを打ち抜いた。

「そして墓地のヴォルカニック・アサルトショットの効果が発動される…。
ブレイズ・キャノンと名の付くカードで相手フィールド上のモンスターを破壊した時、相手フィールド上のカード1枚を破壊する！
ハリケイン・ドラゴンを破壊！」

バーニング・ドラゴンの爆発にハリケイン・ドラゴンを巻き込んで、2体のドラゴンを撃破した。

「ちっ、俺の2体のドラゴンが！」

「このままダイレクトアタックを決めるところだが、ブレイズ・キャノンを使用したターンは攻撃出来ない。
カードを1枚伏せてターン・エンド。」

ヴォルカニック・アサルトショット

レベル3　炎属性　炎族

ＡＴＫ５００　ＤＥＦ０

このカードが墓地に存在する時に、相手フィールド上のモンスターをブレイズ・キャノンと名の付くカード効果で破壊した時、相手フィールド上のカード1枚を破壊する。
この効果は1ターンに1度しか発動出来ない。

「待て、お前のエンドフェイズに俺は罠カード、奇跡の逆鱗を発動。

俺のドラゴン族モンスターが破壊されたターンのエンドフェイズに発動して、俺はデッキから魔法・罠カードを2枚セットする！」

奇跡の逆鱗

通常罠

自分フィールド上のドラゴン族モンスターが破壊された時に発動出来る。
自分のデッキから、魔法・罠カードを2枚セットする。

「俺のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ２６００

手札１枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

ベネット　ＬＰ２５００

手札０枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ロケット

魔法・罠ゾーン

ブレイズ・キャノン

伏せカード×1

「オレは炎上網ーファイアー・バリケードの効果発動、相手のスタンバイフェイズにオレの墓地から炎属性モンスターを2体除外する事で、このターンのバトルフェイズをスキップする！オレは墓地からヴォルカニック・ロングショットとヴォルカニック・バーナーを除外する。」

「ふん、俺は罠カード、無謀な欲張り発動。カードを2枚ドロー、ただし2ターン、自分のドローフェイズをスキップされるがな。」

無謀な欲張り

通常罠

デッキからカード2枚ドローする。
2ターンの間、自分のドローフェイズをスキップする。

「俺は永続罠、リビングデットの呼び声発動。　墓地からラビードラゴンを攻撃表示で特殊召喚し、魔法カード、竜の共鳴発動。俺は2体目のラビードラゴンを特殊召喚する！」

ラビードラゴン…。　ヴォルカニック・ロングショットで撃ち落としたカードか…。　ラビードラゴン

レベル8　光属性　ドラゴン族

ＡＴＫ２９５０　ＤＥＦ２９００

雪原に生息するドラゴンの突然変異種。
拡大な耳は数キロ離れた物音を聴き分け、驚異的な瞬発力と相まって狙った獲物は逃さない。

リビングデットの呼び声

永続罠

自分の墓地からモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する。
このカードが存在しない時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

竜の共鳴

通常魔法

自分フィールド上のドラゴン族を選択して発動する。
選択したモンスターと同じレベルのドラゴン族1体をデッキから特殊召喚する。

「だがいくらモンスターを召喚しても、オマエはこのターン、ファイアー・バリケードの効果で攻撃出来ない！」

「ならばそいつを消し去るまでだ！　手札から速攻魔法、竜の魔眼を発動！　自分フィールド上のドラゴン族モンスターの数だけ、相手の魔法・罠カードを破壊する。　貴様の残りの魔法・罠カードを一掃する！」

何だと！くっ、ならば仕方ない…。

「オレは竜の魔眼にチェーンして、罠カード、ヴォルカニック・フォース発動！
自分フィールド上のブレイズ・キャノンと名の付くカードを全て破壊して、自分の手札・デッキ・墓地からヴォルカニックと名の付くモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する！
来い！ヴォルカニック・デビル！！」

ブレイズ・キャノンが爆発して、その爆炎から業火を纏った悪魔が雄叫びをあげる。

ヴォルカニック・デビル
ＡＴＫ３０００

竜の魔眼
速攻魔法
自分フィールド上のドラゴン族モンスターの数だけ、相手の魔法・罠カードを破壊する。

ヴォルカニック・フォース
通常罠
自分フィールド上のブレイズ・キャノンと名の付くカードを全て破壊して発動する。
自分の手札・デッキ・墓地からヴォルカニックと名の付くモンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚する。

ヴォルカニック・デビルの攻撃力は３０００…。
マンジョウメのラビードラゴンより攻撃力は上だ。

コイツを破壊するには骨が折れる筈だ。
そして、コイツを破壊するモンスターこそ精霊のカードの可能性が高い！

「ヴォルカニック・デビルの攻撃力は３０００だ…。　オマエのラビードドラゴンでは倒せない。
残念だったな。」

「だったらコイツを使うまでだ。
俺はレベル８のラビードドラゴン２体をオーバー・レイ！！」

むっ、来るのか！？

「オーバー・レイって何？」

「オーバー・レイってのは、エクシーズ召喚する時の呼び方の事だ、翔。
ほら、シンクロ召喚の時もチューニングって言うだろ？」

「塔也の言う通りだ。
だが、モンスター・エクシーズはまだ出回った数が少ないと聞いたが…。」

「凄いな万丈目は。　そんな稀少なモンスターを使いこなすのか…。」

マンジョウメの2体のラビードラゴンが、黄色い光となって、ブラックホールのような渦に飲み込まれていく。

「2体のモンスターでオーバー・レイ・ネットワークを構築！
エクシーズ召喚！　数多の雷より出でよ、サンダーエンド・ドラゴン！！」

刹那、渦よりいくつもの雷がマンジョウメのフィールドに現れ、雷が青白いドラゴンの姿になった。
…だが、水晶に反応が無い。どうやら精霊のカードでは無いようだ。

サンダーエンド・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

「だが攻撃力はヴォルカニック・デビルと同じだ。
相打ちにでもする気か？」

「誰がそんな事をするか！
俺はサンダーエンド・ドラゴンの効果発動！

1ターンに1度、オーバー・レイ・ユニットを1つ使用し、サンダーエンド・ドラゴン以外のモンスターを全滅させる！
ライトニング・ストリーム！！」

「何！？」

サンダーエンド・ドラゴンは、周囲を漂っているオーバー・レイ・ユニットを1つ飲み込むと、いくつもの雷を放出して、オレのヴォルカニック・デビルとヴォルカニック・ロケットを消し去った。

サンダーエンド・ドラゴン

ランク8　光属性　ドラゴン族／エクシーズ

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２０００

レベル8通常モンスター×2

1ターンに1度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを1つ使用する事で、このカード以外のモンスターを全て破壊する。

「これでとどめだ！　サンダーエンド・ドラゴンで、貴様にダイ

レクトアタック！！
ボルテック・カノン！！」

「うおおぉぉっ！！」　ベネット　ＬＰ２５００→０

「それまでナノーネ！　勝者、オベリスク・ブルー　シニョール万丈目デスーノ！！」

マンジョウメとのデュエルでは、水晶に反応が無かったか…。
マンジョウメも違うのか？

「くっ、ミッション失敗だ…。」

灼熱の傭兵　ベネット（後書き）

「それデーハ、第3試合　シニョール三沢とシニョール塔也のデュエルを開始するノーネ！」

「やっと俺の出番か…。　待ちくたびれたぜ。」

「君に対する方程式は完成している。
このデュエル、勝たせて貰う！」

「面白い、ならその方程式、打ち破ってやるぜ！」

デュエル大会も大詰め、俺と三沢のデュエルが始まった。
けど、三沢の繰り出す妖怪モンスターに苦戦して…。

「これで準備は整った。　行くぞ塔也！！」

次回、「奇々怪々　妖怪デッキ」

よろしくな。

奇々怪々　妖怪デッキ（前書き）

お待たせしました！

第５話です。

後半のモンスターのに対して述べた順番は、フォリナ、翔、十代、明日香、ベネット、万丈目、宝山、クロノス教諭、建宮先生、響先生です。

建宮先生の事は、この話でほんの少し紹介します。

???side

ビックリシマシータ～。　デュエル・アカデミアでトウヤに再会出来るナンテっ！

ワタシは入学当時で見かけたけど、なかなかお話出来ナカッタヨ～。

トウヤはワタシの事、覚えててくれているカナ？

今日のデュエル大会でトウヤが出るって聞いて、応援に行こうとしているケド、ドキドキして足が動かないヨ～。

「フォリナ、塔也の応援に行きましょ。」

「デ、デモ～緊張して足が動かないヨ～。」

ワタシがデュエルアカデミアでフレンドになった　同じオベリスク・ブルーのアスカだ。

「早くしないと、塔也の出番が終わっちゃうわよ。」

「そ、それは困るワっ！」　「もう第2試合が終わって、これか

ら第3試合が始まるわ。
ここで立ったままだと、
本当に応援出来なくなるわよ？」

「ウゥ～…デモ～、やっぱりドキドキして足が動かないヨ…。
アスカ、お願いシマース。
ワタシをトウヤの所まで、引っ張ったクダサーイ…。」

それを聞いたアスカは、少しため息をツキマーシタ…。

「はぁ～、仕方ないわね…。　ほら、しっかり握って。」

「ソ、ソーリー…アスカ。」

うぅ～、またドキドキしてキタヨ～。

？？？↓塔也ｓｉｄｅ

万丈目とベネットのデュエルが終わって、　今の総合得点は　オベリスク・ブルーが2点、ラー・イエローが0点、そして俺たち　オシリス・レッドが2点か…。　俺が勝ったら、オシリス・レッドの

優勝で、負けたら同点だな。

ん、待てよ？同点の場合、どうすんだ？

「なぁ、もし同点になった場合はどうなるんだクロノス先生？」
「そうなった場合、各寮長でバトルロイヤル形式でデュエルをシーテ、決着をつけるノーネ。」

「ふふ、そうなった時はよろしくお願いしますね。
クロノス教諭、建宮先生？」

「フフン、コッチこそ返り討ちにしてアゲマスーノ！」

「あはは…どうかその、２人とも、お手柔らかにお願いしますね…。」

みどり先生の挑発にクロノス先生は自信満々で、建宮先生は困った様子で返した。

あっ、建宮先生は三沢やベネットたち、ラー・イエローの寮長だ。
眼鏡を掛けていて、いつも生徒に優しい事で評判になっているな。

「どうした塔也？　もしかしてさっきの万丈目のデュエルを見て、怖じ気づいたか？」

「そんな訳無いだろ、三沢。
ただ、勝敗が決まらないまま大会が終わるってのは、もやもやするからな。
それに、今か今かと待ちくたびれたくらいだぜ！」

俺は三沢にそう返した。

「フッ、済まないな。確か君はそういう奴だったな。」

「それデーハ、第３試合を始めマスーノ。
ラー・イエロー　シニョール　三沢、オシリス・レッド　シニョール塔也、デュエルフィールドに上がるノーネ！」

「頑張れよー！塔也！！」

「諦めずにデュエルすれば勝てるよ塔也君！」

十代と翔が、俺を応援してくれてる。
ふぅ、ならその期待に応えなきゃな！

「おう、勝ってくるぜ！　十代、翔！」

俺は十代と翔にそう告げて、三沢の待つデュエルフィールドに上がる。

「待たせたな、三沢。」

「君に対する方程式は完成している。　このデュエル、勝たせて貰う！」

「面白い、ならその方程式、俺が打ち破ってやるぜ！」

「それデーハ、第3試合を開始スルーノ！」

「「デュエル！！」」

「ウェーイト！！！ちょっと待ッテー！！」

「…はっ？」

「な、何だ!?」

「一体何ナノーネ?」

突然響いた声で、俺と三沢は声がした方に振り向いた。

ん、あいつは確か…。

「ハ、ハロー…トウヤ、久しぶりネ…。」

フォリナ!?　何であいつがデュエル・アカデミアに!?

「フォリナ、お前何でデュエル・アカデミアにいるんだ?」

「ワ、ワタシもトウヤみたいなデュエルがしたくてデュエル・アカデミアに入学シタノ…。
トウヤ、このデュエルファイト!頑張ッテ!!」

「フォリナさん、デュエル開始を遮っちゃいけませんよ。」　フォリナはデュエルを遮った事を建宮先生に注意を受けた。
つーか、デュエルを遮ってまで応援って、あいつどんだけ俺に応援したかったんだよ…。

「この子の期待に頑張って応えてあげなさい、塔也。ここに来るまでずっとモジモジしてたんだから。」

「は、はぁ…。」

フォリナと明日香が、俺に声援したや否や、三沢がジト目で俺を睨み付けてきた。

「（あ、明日香君とフォリナ君から応援だと…！　なんて羨ましい事を…！！）　さぁ、気を取り直してデュエルだ！！　このデュエルで完膚無きまでに君を打ち負かす！！」

オイオイ、さっきと違ってやたら物騒な物言いなんだが…。
俺が何かしたか？　まぁ、いいや…。

「んじゃ、改めて…。」

「「デュエル！！」」

塔也　ＬＰ４０００

三沢　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能で、先攻は俺からだ。

「先攻は俺からだ。俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ４０００
手札　６枚

三沢　ＬＰ４０００
手札　６枚

「俺は永続魔法、召喚雲を発動。
自分の手札または墓地からレベル４以下の雲魔物１体を特殊召喚

出来る。
俺は召喚雲で特殊召喚する前に、永続魔法、残留雲（ダスト・クラウド）を発動しておくぞ。

召喚雲の効果で、雲魔物－ミストルティを攻撃表示で特殊召喚する。

更に残留雲の効果発動だ。
自分フィールドに雲魔物が召喚・特殊召喚した時、このカードにフォッグカウンターを1つ乗せる。」

雲魔物－ミストルティ
ＡＴＫ１８００

残留雲（ダスト・クラウド）
永続魔法

自分フィールド上に雲魔物が召喚・特殊召喚した時、このカードにフォッグカウンターを1つ乗せる。
1ターンに1度、フィールド上のフォッグカウンターを2つ取り除く事で、墓地から雲魔物1体を手札に加える。「へぇ、彼は特殊なカウンターを扱うデッキなのね…。」

「イエス！トウヤのデッキはかなりテクニカルなデッキデスヨッ

！」

「あら、もう緊張しなくなったのねフォリナ。」

「ハ、ハハ、さっきタテミヤティーチャーに注意された時に、気持ちを落ち着けるよう言われマーシタ…。」

「フォリナさんは、塔也君とデュエルした事あるんですか？」

「オフコース！トウヤとワタシは子供の頃に沢山デュエルをシマシータヨ。」

「じゃ、フォリナもデュエル強いのか！？
今度、俺とデュエルしようぜ！」

「オフコース！　その時は負けマセンヨ、ジュウダイ君。」　4人とも、とても楽しそうに話しているなぁ…。
その会話の楽しさが増す毎に、三沢が俺を更に睨み付けている気がするなぁ…。
だから、俺が何をしたって言うんだよ…。

「まだ君のターンだが、まだ何かあるのかっ！」

「落ち着けって、俺は雲魔物－ホワイト・ジェットを攻撃表示で召喚して、効果発動だ。

ホワイト・ジェットは召喚成功した時、フィールド上の雲魔物１体につき、このカードにフォッグカウンターを乗せ、更に残留雲にも効果でフォッグカウンターを追加だ。」　雲魔物－ホワイト・ジェット

フォッグカウンター

０↓２

残留雲

フォッグカウンター

１↓２

「俺はカードを１枚伏せ、ターンエンドだが、雲魔物－ホワイト・ジェットは効果でフォッグカウンターを１つ乗せる。
そして、ホワイト・ジェットは、このカードのフォッグカウンターの数×６００ポイントアップする。」

雲魔物－ホワイト・ジェット

ＡＴＫ０↓１８００

フォッグカウンター
2→3

雲魔物－ホワイト・ジェット
レベル４　水属性　天使族
ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードは破壊される。
このカードの召喚成功時、フィールド上の雲魔物の数だけこのカードにフォッグカウンターを乗せる。
このカードの攻撃力は、このカードのフォッグカウンターの数×６００ポイントアップする。
このカードが戦闘する時、このカードのフォッグカウンターを１つ取り除く。
自分のエンドフェイズにこのカードにフォッグカウンターを１つ乗せる。

「ウンウン、トウヤは今回もコンディションはとてもいいみたいネ。」

「俺も序盤にやられて、苦戦したぜ。」

「でもアニキ、最後にはいつも逆転しちゃうけどね。」

「へぇ…、それは興味深いわね。」

さて、まずは様子見だ。
三沢はどう来る？

「行くぞ、俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ４０００

手札　２枚

モンスターゾーン

雲魔物－ミストルティ

雲魔物－ホワイト・ジェット

フォッグカウンター＋３

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋２

伏せカード×１

三沢　ＬＰ４０００

「俺は牛頭鬼を守備表示で召喚する。」

三沢のフィールドに牛の顔をした鬼が大槌を背負い、腕を交差し、守備表示の体制で現れた。

牛頭鬼

ＤＥＦ　１５００

「そして俺は牛頭鬼の効果を発動する。　１ターンに１度、自分のデッキからレベル４以下のアンデット族１体を墓地に送る。俺はケウケゲンを墓地に送る。」

牛頭鬼

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１５００

１ターンに１度、自分のデッキからレベル４以下のアンデット族１体を墓地に送る事が出来る。

出たな…。　三沢の妖怪デッキのエンジンが。

三沢のデッキの妖怪モンスターは、墓地に送られてからが本領発揮するんだよな…。

「ワオッ！ミサワ君のジャパニーズ・アンデット、ベリーカッコいいデースネッ！」

「僕はちょっと苦手かな…。」

「ふぅ…この子、こういう変わった物が大好きなのよ。」

「へぇ…変わってるんだな、フォリナ。」

「…？ワタシ、何か可笑しな事言いマーシタカ？」

そういやフォリナは、トーテムポールとか呪術とかのデザインの顔を見て、可愛いと言うかなりずれた感覚を持ってたな。

前に珍しく、家族一緒に旅行に出掛けた時に、俺の両親とフォリナの両親が知り合い、家に泊めて貰った時に、フォリナの部屋を覗いたが、トーテムポールの置物や、ちょっと変わったぬいぐるみが沢山あったけ…。

「…フォリナ君。」

「オーイ三沢、もうターンエンドでいいのか～？」「…ハッ！す、済まないな。

俺は永続魔法、妖(あやかし)の灯籠を発動。

更にカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

妖の灯籠　（あやかしのとうろう）

永続魔法

自分フィールド上のアンデット族1体が破壊された時、自分のデッキから同じレベルのアンデット族1体を墓地に送る。

ボーとしてたが、大丈夫か三沢？

まさか、フォリナに惚れたか？
…ナイナイ有り得ない。
何、バカな事考えるんだ俺。
今はデュエルに集中だ！

「俺のターン、ドロー。」　塔也　ＬＰ４０００

手札　３枚

モンスターゾーン

雲魔物－ミストルティ

雲魔物－ホワイト・ジェット　フォッグカウンター＋３

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋２

伏せカード×１

三沢　ＬＰ４０００

手札　3枚

モンスターゾーン

牛頭鬼

魔法・罠ゾーン

妖の灯籠

伏せカード×1

さて、三沢も様子見のようだな。
だったらコッチから行くか。

「バトルだ！　雲魔物－ミストルティで、牛頭鬼を攻撃！」

ミストルティは、牛頭鬼を霧で包み込むと、牛頭鬼はもがきだして、倒れた。

「俺は妖の灯籠の効果発動！
自分フィールド上のアンデット族が破壊された時、そのモンスターと同じレベルのアンデット族1体をデッキから墓地に送る。

俺はカラス天狗を墓地に送る。
更に永続罠、輪廻回廊を発動！」

何だあれは？三沢のフィールドの一部が歪んで見えるぞ。

「輪廻回廊は、自分フィールド上のアンデット族が破壊された時、そのモンスターを除外して、
墓地から除外したモンスターのレベル以下のアンデット族１体を特殊召喚して、そのモンスターの攻撃力をレベル数値×１００ポイントアップする！
俺は牛頭鬼を除外して、カラス天狗を特殊召喚する。
黄泉帰れ、カラス天狗！」

歪んだ空間から、修行僧の格好をしたカラスが飛び出した。

カラス天狗
ＡＴＫ１４００→１８００

「カラス天狗の効果発動！　このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター１体を破壊する！
雲魔物－ホワイト・ジェットを破壊する！　悪霊退散！！」

カラス天狗が扇で起こした風で、　ホワイト・ジェットを吹き飛ばそうとする。　カラス天狗

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１２００

このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター１体を破壊する。

「なら俺はカラス天狗の効果にチェーンして、手札から速攻魔法、爆裂雲（バースト・クラウド）を発動！
自分フィールド上の雲魔物を２体まで選択して、破壊するぜ！俺はホワイト・ジェットを破壊！」

「何故、破壊対象になったモンスターを自ら破壊したんだ！？」

三沢は不思議がってるな。
まぁ無理も無いけどな。

「ミサワ君、爆裂雲には、破壊したモンスター１体につき、雲魔物トークンを２体特殊召喚出来るからデース。
しかも、この効果で特殊召喚した雲魔物トークンは、リリースしてアドバンス召喚するモンスターが、雲魔物以外はダメな以外は制限がナッシングだから、

色んな使い方があるからダヨネ、トウヤ？」

「あ、ああ。　爆裂雲で破壊したモンスターは1体だ…。
よって、雲魔物トークンを2体、守備表示で特殊召喚する。」

「なるほど、リリース要因を増やす為か…。」

爆裂雲（バースト・クラウド）

速攻魔法

自分フィールド上の雲魔物を2体まで選択して、破壊する。　その後、破壊したモンスター1体につき、自分フィールド上に雲魔物トークン（レベル1　水属性　天使族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０）2体を特殊召喚する。
この雲魔物トークンは、アドバンス召喚のリリースにする時、そのモンスターは雲魔物と名の付くモンスターでなければならない。

輪廻回廊

永続罠

自分フィールド上のアンデット族が破壊された時、そのモンスター1体を除外して、
墓地から除外したモンスターのレベル以下のアンデット族1体を特殊召喚して、
そのモンスターの攻撃力を、レベル数値×１００ポイントアップする。　雲魔物トークン×２

ＤＥＦ０

残留雲

フォッグカウンター

2→3

「凄いや塔也君、三沢君のカラス天狗の破壊を逃れて、
モンスターを2体を特殊召喚した！」

「ああ、しかも塔也はこのターン、通常召喚して無いぜ。」

「と言う事は、塔也はアドバンス召喚するつもりかしらね…。」

「バトルフェイズは終了して、メインフェイズ2に移るぜ。

俺は2体の雲魔物トークンをリリースして、
雲魔物ー レイジング・ミストをアドバンス召喚だ！」　俺のフィールドに、赤みがかった色の巨大な雲が渦巻く。

雲魔物ー レイジング・ミスト
ＡＴＫ２５００
　残留雲
フォッグカウンター
3↓4

「くっ、遂に君の大型モンスターのお出ましか！」

「俺はこれでターンエンド。
だが、雲魔物ー レイジング・ミストの効果発動だ。
エンドフェイズに、フィールド上のフォッグカウンター1つにつき、
自分フィールド上の雲魔物の攻撃力を２００ポイントアップする！
フィールド上にフォッグカウンターは、４つだ。
よって、俺の雲魔物たちは攻撃力を８００ポイントアップするぜ！」　雲魔物ー ミストルティ

ＡＴＫ１８００→２６００

雲魔物－レイジング・ミスト

ＡＴＫ２５００→３３００

雲魔物－レイジング・ミスト

レベル７　水属性　悪魔族

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ１６００

自分のエンドフェイズ時、自分フィールド上の雲魔物の攻撃力を、フィールド上のフォッグカウンター×２００ポイントアップする。

「エクセレント！トウヤ！！
これなら、ミサワ君もそうイージーに手が出せナイワ！」

「どうかしらね、三沢君は既に、塔也を攻略する手立てを立てているかもしれないわ。」　そうなんだよな、三沢は次のターンで手札は４枚になる。
どう動いてくるのか…。

塔也→三沢ｓｉｄｅ

全く、君には十代の次に俺を驚かせてくれる…。

天上院君に応援して貰ったり、　オベリスク・ブルーの大地の魔（グランド）女の異名（ウィッチ）を持つフォリナ君と知り合いだったり…。

…おっと、違ったな。

数ターンの内に、攻撃力３０００越えのモンスターを出すとはやってくれる。

だが君の布陣を崩す方程式は、整いつつある。
次のターンで、あのカードを引ければ…。

「俺のターン、ドロー。」　塔也　ＬＰ４０００

手札　２枚

モンスターゾーン

雲魔物－レイジング・ミスト

雲魔物－ミストルティ

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋４

伏せカード×１

三沢　ＬＰ４０００

手札　４枚

モンスターゾーン

カラス天狗

魔法・罠ゾーン

妖の灯籠

…流石に俺は十代みたいにドローは良くないようだ…。
仕方ない、今引いたカードに賭けるか…。

「俺は速攻魔法、手札断殺を発動だ。」

「て、手札断殺だとっ!!?」　あの様子だと、相当いいカードが手札にあったようだな…。

「互いに手札2枚を墓地に送って、デッキから2枚ドローする。俺は馬頭鬼と陰魔羅鬼(おんもらき)を墓地に送る。」

「…俺はライトニング・ボルテックスと、雲魔物－ニンバスマンを墓地に送るぜ。」

危ない危ない。
塔也の手札は、
全モンスター除去カードと、状況次第じゃ、強大なアタッカーになる　ニンバスマン　だったとは…。

勘弁してくれ…なんて引きだ…。

だが、俺の手札に残っているカードで、ニンバスマンは使えなくなる筈だ。

「そして、互いに2枚ドローする。」

手札断殺

速攻魔法

互いに手札2枚を墓地に送って、デッキからカード2枚ドローする。

よし、揃ったぞ。

「これで君に対する方程式は完成した…。行くぞ!塔也!!」

「来いよ、三沢!」

「な、何!?　一体何をドローしたのデースカ、ミサワ君?」

「何をするつもりだ、三沢？」

「まずは魔法カード、　三途の使徒　を発動する！
相手の墓地のモンスター1体を除外して、　更に相手は同名モンスターを、手札・デッキから除外する！」

「な、何!?　くっ、俺はデッキから、　雲魔物－ニンバスマンを2体除外するぜ…。」　よし、これで塔也は　ニンバスマンは使えない！

「俺は更に速攻魔法、百鬼夜行を発動！
俺の墓地からレベル4以下のアンデット族モンスターを可能な限り特殊召喚する！

ただし、エンドフェイズにこの効果で特殊召喚したモンスターは破壊される…。

俺は墓地から、ケウケゲン、馬頭鬼、陰魔羅鬼を特殊召喚する！」

俺のフィールド上に妖怪たちが勢揃いした。

ケウケゲン
ＡＴＫ１８００

馬頭鬼

ＡＴＫ１７００

陰魔羅鬼

ＡＴＫ１２００

百鬼夜行

速攻魔法

自分の墓地から、レベル４以下のアンデット族を可能な限り特殊召喚する。　エンドフェイズに、この効果で特殊召喚したモンスターを全て破壊する。

「俺は陰魔羅鬼の効果発動！
このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、デッキからカード１枚ドローする。
更にケウケゲンの効果発動だ。
１ターンに１度、相手フィールド上のモンスターを選択し、選択したモンスターは、
次の相手のエンドフェイズまで、モンスター効果と表示形式の変更を無効にする！
俺は雲魔物－ミストルティを選択する。

呪毛縛！！」

「な、何！？」　ケウケゲンは、大量の体毛で、ミストルティを縛り付ける。

陰魔羅鬼

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ６００

このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、デッキからカード１枚ドローする。

ケウケゲン

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１６００

１ターンに１度、相手フィールド上のモンスター１体を選択して、発動する。
次の相手のエンドフェイズまで、選択したモンスターは、効果と表示形式の変更を無効にする。

「行くぞ、俺は陰魔羅鬼と馬頭鬼をリリース！
獰猛なる大妖よ、獲物を狩るべくこの地に降臨せよ！
山姥（やまんば）召来！！」

黒雲が立ち込めて、そこから、包丁を持ったおぞましい形相の老婆が歩いて来た。

山姥

ＡＴＫ２９００

「ワーオ！　随分とエキゾチックなモンスターネ！」

「ヒャー、怖いよー！アニキ！！」

「うわ～…。　凄い迫力を持ったモンスターだなぁ…。」

「この局面で、あのモンスターを使うなんて…。　流石、三沢君ね。」

「中々だな、ミサワ。」

「…フン。」

「ウヒャ～…。　随分と凄いモンスターだなぁ…。」

「ナパァァ！怖いノーネ！！」

「見事です…三沢君。」

「やるわね…、三沢君。　あのモンスターなら確かに…。」

山姥を見て、みんなそれぞれ多種多様な事を口にしている。

それにしてもフォリナ君、山姥を見てよく歓声をあげられるものだな…。

デッキに入れている俺が言うのも何だが、　かなり恐ろしいと思う…。

と、いかんいかん。

気を取り直して…。

「行くぞ、バトル！　山姥で、　雲魔物一ミストルティを攻撃だ！」

山姥は、包丁を振り回して、　ミストルティに突撃する。

「くっ、雲魔物－ミストルティには、雲魔物が戦闘を行う時、フィールド上のフォッグカウンター１つにつき、相手モンスターの攻撃力を２００ポイントダウンさせる効果があるが…。」

「そう、その効果は　ケウケゲンの効果で封じられている…。よって、攻撃力は変化しない！
行け、滅殺乱舞切り！！」

山姥は、ケウケゲンで縛った体毛ごと　ミストルティを小間切れにする。

…ソリッド・ビジョンとは言え、見ていてあまりいい気分では無いな…。

「うあっ…。」

塔也　ＬＰ４０００→３７００

「そして、エンドフェイズに　百鬼夜行で特殊召喚された　ケウケゲンを破壊して、妖の灯籠と輪廻回廊と山姥の効果を発動する！

まずは、妖の灯籠でデッキから　マツリ火　を墓地に送って、
山姥の効果で、エンドフェイズにフィールド上のモンスター1体を
破壊する！」

「な、何だとっ！」

「山姥は、妖怪の中でもかなり獰猛な奴でね…。
戦いを終えてなお、その餓えは癒える事は無いのさ！

喰らい尽くせ、餓狼の刃！！」

山姥は、　レイジング・ミストをやはり小間切れにして、それら
全てを吸引した。

…雲魔物みたいなモンスターだからまだマシな光景だが、他の…
人型や獣のモンスターだったら…。

止めよう、想像するだけで恐ろしいな…。

山姥（やまんば）

レベル8　地属性　アンデット族

ＡＴＫ２９００　ＤＥＦ２５００

このカードを特殊召喚する場合、自分フィールド上のモンスター1体を破壊する。
自分のエンドフェイズに、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

「くそ～、　レイジング・ミストまでが…。」

「覚悟するんだな、塔也。
これから俺の妖怪たちが、君に牙をむくぜ。」

奇々怪々　妖怪デッキ（後書き）

「山姥の効果発動だ！　雲魔物－ミストルティを破壊する！」

「くそっ！早いとこ山姥を何とかしないと…。
このままじゃマズいぜ！」

俺と塔也のデュエルは、
俺に流れが向いて来て、
順調に攻め続けるのだが…。

「コイツで、このデュエルの流れを変えてやるっ！
来い、俺の切り札！」

次回、「妖の畏れと渦巻く嵐」

次回も、俺の計算が冴え渡るぞ！

妖の畏れと渦巻く嵐（前書き）

第６話です。

今回、三沢は大変辛い目に遭います。

妖の畏れと渦巻く嵐

フフフ、これでこのデュエルの流れは俺の方に向いてきた。

さて、次のターンからは、どういう方程式で塔也を追い詰めようか…。

ん、塔也がこちらを悩まし気に見ているようだが…。どうしたのだろうか？

「なぁ、三沢。」

「どうしたんだ、塔也？」

「さっきから気になったんだが、三沢お前、永続罠　輪廻回廊の効果処理は　どうしたんだ？」

「…ン？輪廻回廊の効果処理…？」

ハッ、　しまった！　輪廻回廊の効果は強制的に発動しなければならないのを忘れてた！！

輪廻回廊

永続罠

自分フィールド上のアンデット族が破壊された時、そのモンスターを除外して、
そのモンスターのレベル以下のモンスターを墓地から特殊召喚し、
そのモンスターの攻撃力をそのモンスターのレベル数値×１００ポイントアップする。

「ア～ア、ミサワ君ダメダメネ…。」

「まぁ僕は、つい焦ってやっちゃうのは分からなくも無いけど…。」

「三沢～。」

「三沢君がミスをするなんて珍しいわね…。」

「目先の勝利を追って、足元を掬われたか…。
ツメが甘いな…ミサワ。」

「…バカバカしい。」

「まぁ、自分が有利になると、ちょっとこういう見落としちゃうよね。」

「アンチョビーナ、効果処理は適切に行うノーネ…。」

「…三沢君、大会が終わったら補習ですかね。」

「ふぅ…そう言えば小さい頃、紅葉にデュエルを教えた頃も、良くこういう細かいミスをした度に、注意したわね…。」

うわぁぁぁっ！！

みんなからそれぞれ厳しい言葉が飛び交って来ている～！

特に、建宮寮長は眼鏡を軽くかけ直しているぞ！

あの人があの仕草をする時は、大抵頭にきている時だけだ。

建宮寮長は普段、あまり怒らないが、一度怒り出すと…。

あ～！！想像したくも無い！

「…沢、三沢！！」

「な、何だい？塔也。」

「まぁそのなんだ、やっちまったものはしょうがねえよ、三沢。
次からは気を付けてくれれば、
いいからさ。
あまり頭を煮詰め過ぎるなよ。」

「三沢君、
あまり、思い詰めないようにしなよ。」

「　次は気を付けようぜ、三沢。」

「あぁ、済まないな塔也、翔、十代…。」

「だからさ、パパッと　輪廻回廊の効果処理を終わらせてくれ、
三沢。」

しかし、悩み所だ…。

今は塔也のフィールド上のモンスターがいないが、
塔也のフィールドには、残留雲がある…。　あの効果を使って、
墓地の雲魔物を回収されるのは厄介だ…。　馬頭鬼を出したら、塔
也は山姥を気にせず、

輪廻回廊の強制効果で相まって、戦闘を仕掛けて除去を狙うだろうな…。
だったら俺は…。

「俺はケウケゲンを除外して、陰魔羅鬼を攻撃表示で特殊召喚する。
効果で1枚ドローして、輪廻回廊の効果で攻撃力アップだ。」

陰魔羅鬼
ＡＴＫ１２００→１６００

…まあまあのカードを引けたな。

「さぁ、コッチはこれで本当にターンエンドだ。」

「んじゃ、俺のターン、ドロー。」　塔也　ＬＰ３７００

手札　３枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋４

伏せカード×１

三沢　ＬＰ４０００

手札　２枚

モンスターゾーン

山姥

カラス天狗

陰魔羅鬼

魔法・罠ゾーン

妖の灯籠

輪廻回廊

「よしっ！俺は、魔法カード、梅雨前線を発動するぜ。
自分のデッキから、レベル４以下の雲魔物を
２体手札に加える。

俺はデッキから、雲魔物ー キロスタスと　雲魔物ー スモッグ・フ
ァクトを手札に加えるぞ。」　キロスタス…。

塔也の入学試験デュエルで、出て来たモンスター除去効果を持っ
たモンスターか…。

「そして俺は、残留雲の発動だ！
1ターンに1度、フィールド上のフォッグカウンターを2つ取り
除いて、墓地の雲魔物1体を回収する。俺は残留雲のフォッグカウ
ンターを2つ取り除いて、
墓地から、雲魔物ー ミストルティを手札に戻すぜ。」

残留雲

フォッグカウンター

4↓2

またミストルティか…。
召喚雲と通常召喚を合わせれば、
残留雲のフォッグカウンターは、また4つに戻るな。
しかも、キロスタスの効果を使えば、更にフォッグカウンターが
増える。
だが、君の思惑通りにはならないぞ。

「俺は召喚雲の効果発動！

自分フィールドにモンスターがいない時、手札または墓地から
レベル４以下の雲魔物１体を特殊召喚出来る。
俺は手札から、雲魔物－ミストルティを特殊召喚し、更に雲魔物
－キロスタスを通常召喚する。」

雲魔物－ミストルティ

ＡＴＫ１８００

雲魔物－キロスタス

ＡＴＫ９００

フォッグカウンター

０↓２

残留雲

フォッグカウンター

２↓４

やはり、ならば…。

「俺は手札から鬼一口を特殊召喚する。」

鬼一口
ＡＴＫ１８００

「な、何だ！？」「このカードは、相手がレベル４以下のモンスターを召喚・特殊召喚した時、手札から特殊召喚出来、この効果で、相手フィールド上のレベル４以下のモンスター１体を破壊する！
俺は　キロスタスを破壊する！
咀嚼一口！」

「なっ、キロスタスが！」

鬼一口は突然現れると、キロスタスが驚いている中、キロスタスを丸呑みにする。

鬼一口（おにひとくち）

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１８００

このカードは、通常召喚出来ない。
相手がレベル４以下のモンスターを召喚・特殊召喚した時、手札

から特殊召喚出来る。　この効果で特殊召喚に成功した時、
相手フィールド上のレベル４以下のモンスター１体を破壊する。

「オ～ノ～！　トウヤのキロスタスが、　ミサワ君のモンスターにイートサレマーシタ…。」

「これじゃ、キロスタスの効果で山姥を破壊出来ないよっ！」

「さっきのミスを帳消しにしたようね、三沢君。」

「凄いぜ、三沢！！」

よし、さっきの失敗に捕らわれるのは止めだ。
今を見据えてデュエルするぞ！

「やるな…三沢。
だったら、バトルだ！
雲魔物－ミストルティで、カラス天狗を攻撃！
除去要因には消えて貰うぜ！」

「くっ、本来なら相打ちだが…。」

「そうだ、ミストルティの効果で、カラス天狗の攻撃力はダウンするぜ。
フィールド上のフォッグカウンターは４つ…。
よって、カラス天狗の攻撃力を８００ポイントダウンだ！」

カラス天狗
ＡＴＫ１８００↓１０００

雲魔物－ミストルティ
レベル４　水属性　悪魔族
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１５００
自分フィールド上の雲魔物が戦闘を行う時、相手モンスターの攻撃力を、ダメージステップ終了まで攻撃力を、フィールド上のフォッグカウンター×２００ポイントダウンする。

ミストルティは、カラス天狗を霧で包み込めると、カラス天狗は、牛頭鬼同様もがいて倒れた。

「うわっ！」

三沢　ＬＰ４０００→３２００

「だが、妖の灯籠と輪廻回廊の効果発動だ！
輪廻回廊で、カラス天狗を除外して、墓地から　マツリ火　を特殊召喚し、　妖の灯籠でデッキから　マタタビ丸　を墓地に送る。
そして、輪廻回廊で特殊召喚した　マツリ火　の攻撃力はアップだ！」

マツリ火
ＡＴＫ１４００→１８００

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ３７００
手札1枚
モンスターゾーン

雲魔物ー ミストルティ

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋４

伏せカード×２

三沢　ＬＰ３２００

手札２枚

モンスターゾーン

山姥

陰魔羅鬼

鬼一口

マツリ火

魔法・罠ゾーン

妖の灯籠
輪廻回廊

俺の引いたカードは、
サイクロンか…。

これで、残留雲を破壊出来るといいが…。

「俺は速攻魔法、サイクロンを発動する。
勿論、対象は君の残留雲だ！」

「あ、危なっ！　俺は速攻魔法、アテンション・ゲイル　を発動するぜ！
こいつは、相手が自分フィールド上のカードを対象にした効果を発動した時、
その効果を、「自分フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する」効果に、　変更するぜ！」

「な、何だって！？」

「あれ？あのカードを発動しても、どの道塔也君の魔法・罠カー

ドは破壊されるんじゃ…。」

いや、違うんだ翔。

この場合の自分フィールド上は塔也のフィールド上ではなく…。

「それは違いマース、
ショウ君、この場合の
自分フィールド上は、
カード効果を発動したプレーヤーからウォッチしてからの自分フィールド上デースカラ、
ミサワ君は自分の魔法・罠ゾーンのカードを
1枚セレクトしてブレイクしなければナリマセーン。」

「え、えっと、つまりどう言う…。」

「簡単に言うと、三沢君の　サイクロンの効果が、塔也の　アテンション・ゲイルの効果で、
三沢君自身の魔法・罠ゾーンのカード1枚を破壊すると言う効果に書き換えられたのよ。」

サイクロン

速攻魔法

フィールド上の、魔法・罠カード1枚を破壊する。

アテンション・ゲイル
速攻魔法

相手が、自分フィールド上のカードを対象とした魔法・罠・モンスター効果を発動した時、
その効果を「自分フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。」効果に変更する。

「う～ん、何かややこしいな…。」

「でも何となく分かったよ。
ありがとう明日香さん、
フォリナさん。」

「お安い御用デース。」

「ふふ、どう致しまして。」

翔は理解したようだが、
十代はまだ頭を抱えているようだ。

まあ、アテンション・ゲイルなど上級者向けのカードは、テキストが複雑な物が多いから、頭を抱えるのは無理無いが…。

「分かってるよな、三沢。
アテンション・ゲイルの効果で変更されたサイクロンの効果で、三沢のフィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊して貰うぜ！」　さて、どうする…。

今の状況だと、輪廻回廊の強制効果がデメリットに成りかねないな…。
ならば、答えは1つだ。

「俺は輪廻回廊を破壊する。」

「やっぱ、そっちを破壊するか～。」

「これだけモンスターがいるんだ、もう輪廻回廊は無用だ。」

とは言っても、バトルしようにも塔也のフィールドには、ミストルティと4つのフォッグカウンターがある…。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド。
そしてエンドフェイズに山姥の効果を発動！

ミストルティを破壊する！
餓狼の刃！！」

山姥は再び、ミストルティを小間切れにする。

「くそっ！早いとこ山姥を何とかしないと、
このままじゃ、マズいぜ！」

流れは今、俺が掴んでいる。
このまま押し切らせて貰うぞ、塔也！

三沢↓塔也ｓｉｄｅ

マズいな…。　本当にマズい！
雲魔物の強みの戦闘破壊耐性が、まるで機能してねぇ…。

これじゃあ、手札の雲魔物が尽きたら、俺は負ける…。
このドローで何とかしないと…

「俺のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ３７００

手札２枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋４

伏せカード×１

三沢　ＬＰ３２００

手札１枚

モンスターゾーン

山姥

陰魔羅鬼

鬼一口

マツリ火

魔法・罠ゾーン

妖の灯籠

伏せカード×1

ん、こいつは…。

いけるのか…？

「まずは永続魔法、ポイズン・ミストを発動し、
残留雲の効果発動だ！
残留雲に乗ったフォッグカウンターを2つ取り除いて、
雲魔物一キロスタスを手札に加えるぜ！」

残留雲

フォッグカウンター

4↓2

「そして、ポイズン・ミストの効果発動！
フィールド上のフォッグカウンターを取り除く時に、
取り除いたフォッグカウンター×２００ポイントダメージを与える！
よって、三沢に４００ポイントダメージを与えるぜ！」

ポイズン・ミスト
永続魔法
フィールド上のフォッグカウンターを取り除く時に、
取り除いたフォッグカウンター×２００ポイントダメージを相手に与える。

「うっ…！」

三沢　ＬＰ３２００→２８００

「そして、召喚雲の効果で、　雲魔物－スモッグ・ファクトを攻撃表示で特殊召喚し、
更に、雲魔物－キロスタスを通常召喚して、効果でキロスタスにフォッグカウンターを２つ乗せ、
残留雲にも２つ乗せるぜ！」

雲魔物－スモッグ・ファクト

ＡＴＫ１５００

雲魔物－キロスタス

フォッグカウンター

０↓２

残留雲

フォッグカウンター

２↓４

「そして雲魔物－スモッグ・ファクトの効果発動だ！
１ターンに１度、自分フィールド上の雲魔物をリリースする事で、フィールド上のモンスター１体に、リリースしたモンスターのレベル数値分、
フォッグカウンターを乗せる！

俺はスモッグ・ファクト自身をリリースして、　キロスタスにフォッグカウンターを乗せるぜ！」

雲魔物－スモッグ・ファクト

レベル４　水属性　天使族

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する時、このカードを破壊する。
１ターンに１度、自分フィールド上の雲魔物１体をリリースする事で、フィールド上のモンスター１体に、リリースしたモンスターのレベル数値分、フォッグカウンターを乗せる。

雲魔物－キロスタス

フォッグカウンター

２→６

「トウヤのキロスタスに一気にフォッグカウンターがプラスされマシタネ！」

「…と言う事は！」

「ああ、塔也は仕掛けるつもりだぜ。」

「俺は雲魔物－キロスタスの効果発動！
このカードのフォッグカウンターを２つ取り除いて、フィールド上のモンスター１体を破壊する！
俺はキロスタスのフォッグカウンターを６つ取り除いて、山姥・鬼一口・マツリ火を破壊するぜ！
更にポイズン・ミストで１２００ポイントの追加ダメージだ！
くらいな！ポイゾニック・マイクロ・ストーム！」

キロスタスは、フォッグカウンターを小さな、毒を含んだ竜巻にして、
山姥・鬼一口・マツリ火にぶつける。

「うわああっ！」　三沢　ＬＰ２６００→１４００

「ワンダフル！ミサワ君のＬＰを一気にダウンサセマーシタネ！」

「三沢君とここまで戦えるなんて…。」

「いいぞ！塔也君、その調子だよ！」

「いっけー！塔也！！」

よしっ、三沢のＬＰを大幅に削ったぜ！
返しのターンで、馬頭鬼の効果で、山姥を復活させるだろうが、
俺のＬＰは　３７００　だ。
充分耐えられる！

「俺は妖の灯籠の効果を発動する！
デッキから、火車・マツリ火・酒呑童子を墓地に送る。」

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！」　塔也　ＬＰ３７００

手札０枚

モンスターゾーン

雲魔物－キロスタス

魔法・罠ゾーン

召喚雲

残留雲　フォッグカウンター＋４

ポイズン・ミスト

伏せカード×１

三沢　ＬＰ１４００

手札１枚

モンスターゾーン

陰魔羅鬼

魔法・罠カード

妖の灯籠

伏せカード×１

「俺は　マツリ火の効果発動だ！
このカードを墓地から除外する事で、
俺のフィールド上に、　火の魂トークンを2体、守備表示で特殊召喚する。」　火の魂トークン×２

ＤＥＦ１０００

マツリ火

レベル４　炎属性　アンデット族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００

このカードを墓地から除外する事で、
自分フィールド上に
火の魂トークン（レベル４　炎属性　アンデット族　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００）
２体を特殊召喚する。

一気にトークン２体を特殊召喚しただと？
三沢、一体何をするつもりだ？

「俺は魔法カード、黄泉の船賃を発動！
自分フィールド上のアンデット族２体をリリースして、
墓地のアンデット族１体を手札に加える。
俺は火の魂トークン２体をリリースして、墓地から火車を手札に加える！」　火車か、マズいな…。
三沢は俺のフィールドを空にする気か！？

黄泉の船賃

通常魔法

自分フィールド上のアンデット族モンスター2体リリースする事で、
墓地のアンデット族1体を手札に加える。

「更に罠カード、妖魔の援軍を発動だ！
自分のＬＰを１０００ポイント払い、
自分の墓地から、アンデット族2体を特殊召喚する！
黄泉帰れ、マタタビ丸、酒呑童子！」

三沢　ＬＰ１４００→４００

マタタビ丸

ＡＴＫ１６００

酒呑童子

ＡＴＫ１５００

三沢のフィールド上に侍のような格好をした化け猫と、真っ赤な鬼が現れた。

「まだまだ行くぞ！塔也！
自分フィールド上にアンデット族が2体以上いる時、このカードは手札から特殊召喚出来る！

行くぞ！　火車　召来！！」

三沢のフィールドに炎が立ち上り、そこから時代劇に出てきそうな　座敷車が、カラカラと車輪を鳴らしてやって来て、
それに憑依した鬼が俺を睨み付ける。

火車
ＡＴＫ？

「火車の効果発動！
自身の効果で特殊召喚した時、
フィールド上の火車以外のモンスターを全てデッキに戻す！！
行くぞ、冥界入口！！」

火車の座敷車のゴザが上がり、
座敷車の中に、陰魔羅鬼、マタタビ丸、酒呑童子、キロスタスが飲み込まれていく。

「火車の攻撃力は、この効果でデッキに戻したアンデット族１体につき、１０００ポイントアップする！
デッキに戻したアンデット族は３体、
よって火車の攻撃力は３０００！！
更に２体目の　マツリ火を除外して、火の魂トークンを２体特殊召喚！
今度は攻撃表示だ！更に馬頭鬼の効果発動！馬頭鬼を墓地から除

外して、墓地の山姥を特殊召喚！」

火車

ＡＴＫ？↓３０００

火の魂トークン×２

ＡＴＫ１０００

山姥

ＡＴＫ２９００

うわぁ、何つー光景だよ…。

まさに地獄絵図だな。

火車

レベル８　地属性　アンデット族

ＡＴＫ？　ＤＥＦ１０００

このカードは通常召喚出来ない。

自分フィールド上のアンデット族が２体存在する時に、特殊召喚

出来る。
このカードの特殊召喚に成功した時、
フィールド上のモンスターを全てデッキに戻し、
このカードの攻撃力を戻したアンデット族×１０００ポイントアップする。

馬頭鬼

レベル４　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１５００

このカードを墓地から除外する事で、
自分の墓地からアンデット族１体を特殊召喚する。

「まずいよっ！この４体の攻撃が通ったら…。」

「迎撃のカードが無ければ塔也の負けね…。」

「トウヤ…。」

「行くぞ！塔也！！

まずは火の魂トークン２体で、ダイレクトアタックだ！」

「うぐうぅぅっ！」

塔也　ＬＰ３７００→１７００

「これで最後だ！
山姥でダイレクトアタック！！
滅殺乱舞切り！！」

「罠カード発動、ガード・ブロック！！
俺が受ける戦闘ダメージを１度だけ０にするぜ！」

寸でんのところで、山姥の包丁を、
デュエルディスクで受け止めて、弾いた。

「くっ、止めたか。」

「そして、カードを１枚ドローする。」

頼む、この状況を変えられるカード、来てくれ！

「このカードで流れを変えてやるぜ！
来い、俺の切り札！」

俺は祈るようにドローする。
…そして、ドローしたカードは…。

「だが、まだ俺のバトルフェイズは続いている！　今度こそ終わりだ！
火車で塔也をダイレクトアタック！！　火炎車！！！」

「トウヤッ！！！」

「塔也君！」

「塔也っ！」

はは、みんな、このデュエル…。

俺の勝ちだ！！

「俺は手札から、　雲魔物－コットン・ボールの効果発動だ！」

「何だって！？　そのカードは…。」

「このカードを手札から墓地に送る事で、相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「トウヤ…。」

「その後、相手フィールド上のモンスターの数だけ、自分フィールド上に雲魔物トークンを特殊召喚する！って言っても、このターンを凌いだから意味ないけどな…。」

雲魔物トークン×４

ＤＥＦ０

残留雲

フォッグカウンター

４↓５

「…ここまでか、俺はターンエンド。
そして、山姥の効果でエンドフェイズに火の魂トークン1体を破壊だ。」

「俺のターン、ドローだ。」

塔也　ＬＰ１７００
手札１枚
モンスターゾーン
雲魔物トークン×４

魔法・罠ゾーン
召喚雲
残留雲　フォッグカウンター＋５
ポイズン・ミスト

三沢　ＬＰ４００
手札０枚
モンスターゾーン
火車
火の魂トークン
山姥
魔法・罠ゾーン　無し

「俺は残留雲の効果発動。
残留雲のフォッグカウンターを２つ取り除いて、雲魔物ーミストルティを手札に加える。」

残留雲
フォッグカウンター
５→３

しっかし、十代や万丈目は大型モンスターでトドメを決めたって

のに…。
俺は、地味に効果ダメージで終わりか…。
なんか締まらないな…。

「あのさ、三沢？」

「どうしたんだい、塔也？」

「なんか悪いな、こんな地味な効果ダメージでトドメなんてさ…。」

「いいさ、どんな形でもそれは君の努力の結果だから、
君が気にする必要は無いよ。」

「悪いな、三沢。
俺はポイズン・ミストの効果発動！
フォッグカウンターを２つ取り除いた為、三沢に４００ポイントのダメージを与える！」

三沢　ＬＰ４００→０

「また改めてデュエルな、三沢。」

「ああ、俺も研究のやり直しだ。」

こうして俺は三沢にデュエルの再戦を約束し、このデュエルは終わりを告げた。

「勝者、オシリス・レッド　シニョール　塔也ナノーネ！

よって、今回の寮対抗デュエル大会の優勝はオシリス・レッドデスーノ！！」

「やったー！　僕たちオシリス・レッドが優勝だよ！」

「やったぜ！塔也！！」

「お疲れ様、とてもいいデュエルだったわ、塔也君。」

「コングラッチュネイション！！　オメデトウ、トウヤ！」

「ふふ、最後までワクワクするデュエルだったよ塔也。

そして、おめでとう十代、塔也、翔。　優勝は君たちオシリス・

レッドだよ。」

「はは、ありがとうな、みんな。」

みんなそれぞれ祝福の言葉をかけてくれる。

そうして寮対抗デュエル大会は幕を閉じた。

ちなみに優勝賞品は、優勝した寮の、１ヶ月の献立に幻のエビフライが付いてくると言う物だった。

十代が大層喜んでいたな。

まぁ、かなり美味いしな。

その気持ち、分かるぜ。

塔也→三沢ｓｉｄｅ

ふぅ、負けてしまったな…。

彼のデッキの研究は、また1からやり直しだな。

「…ミサワ。」

「君から声をかけるなんて、珍しいなベネット。」

「今のデュエル、悪くは無かった。
だが、まだツメが甘い、気を付けろ。」

彼からそんな言葉を聞くなんてな…。
彼とはあまり話した事は無いが、いい奴かもしれないな。

「三沢君、ちょっと宜しいですか?」

「何ですか、建宮寮長?」

「明日から1週間、放課後に教室で補習ですよ。」

「…はい。」

建宮寮長は、笑顔で俺にそう言うと、鮫島校長のところへ向かっ

ていった。

後日、俺は1週間、建宮寮長の厳しい補習を受ける事になった…。

妖の畏れと渦巻く嵐（後書き）

寮対抗デュエル大会が終わって、ワタシやトウヤたちは、勉強にデュエルと楽しい日々をエンジョイしてマーシタ。

デモ、そんな中、リュウガティーチャーに、ショウ君のカードが奪われた事を知ったトウヤは、デュエルを申シ込ンダノ…。

「あんた、最低な奴なんだな…。　あんたみたい奴が先生と名乗る資格は無ぇ！」

「…今なんて言った、オシリス・レッドの分際で…！」

「俺とデュエルだ！　俺が勝ったら、生徒から奪ったカードは返して貰うぜ！」

そうしてデュエルが始まったノデースガ…。

「な、何だ！？何で魔法カードが使えないんだ！？」

ネクスト、「魔法禁止！？龍牙の策略！」

みんな、応援ヨロシクネ。

魔法禁止！？　龍牙の策略！（前書き）

お待たせしました！

第7話です。

今回は漫画版1話をベースの話です。

魔法禁止!?　龍牙の策略!

塔也ｓｉｄｅ

「くっ、何でだ!　何で魔法カードが使えないんだ!?」

「ククク…。　おいおい塔也君、あまり長考し過ぎじゃないか?
早くしてくれないかなぁ?」

龍牙は余裕綽々と、俺に言い放つ。

「くそっ!だったら俺は…」

どうしたっていうんだ?俺のデュエルディスクは…。

…そもそもなんで俺が龍牙とデュエルをしているかと言うと、
話は昨日の昼まで、遡る。　俺は昼休みに十代と翔、そして寮対抗デュエル大会で知り合って以来、友達となった宝山と一緒にデュエルをしていた。「いっけー!　Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイアで　Ｌ・宝玉獣　オパール・シャークを攻撃っ!
コンチネンタル・ハンマー!!」

「うわあぁぁっ！！」

宝山　ＬＰ２１００→０

「よっしゃー！！　勝ったぜ！　見たか、翔！」

「うん、流石アニキだぜ！」

「あたたた…やるねぇ十代。
これで君の５連勝だよ。」

宝山相手に連勝って、十代、お前やっぱ凄えよ…。

「よし、十代。
今度は俺とデュエルだぜ！
今度こそお前の連勝を止めてやるよ。」「ああ、いいぜ！また俺が勝ってやるぜ！！」

「ちょっと待って、十代、塔也。

…そろそろお昼ご飯にしない？
デュエルの連戦で、僕もうお腹空いちゃって…。」

「なーに言ってるんだ宝山。
昼メシは、このデュエルの後で…。」

宝山の提案を無視して、十代はデュエルを始めようとするが…。

グウゥゥゥッ！

…十代の腹の音が大きく鳴り響いた。

「…やっぱ、昼メシにしねぇ？」

「うん、大賛成だよ。」

「僕も、少しお腹空いてきたかな…。」

「じゃあ、みんなで購買で何か買って食おうぜ。」

「「「「おーっ！！」」」」

こうして俺たちは、購買に行き、みんな様々な物を買って、アカデミアのロビーのベンチに座って、食べた。

十代はドローパンを、
宝山はサンドイッチを、
翔はオニギリを、

…俺はコロッケパンだな。

ドローパンは、デュエルアカデミアの名物的なパンで、何が入っているか買ってみないと分からない、と言う闇鍋のようなパンの事だ。

俺も1度だけ買ってみたが、クサヤ入りのパンだった…。

以降、俺はドローパンは買わない事に決めた。

十代は毎回、黄金のタマゴパンを当てているらしい…。

十代、お前透視能力でもあるのか？

俺たちは各々買った物を食べながら会話した。「そうそう、そ

う言えば十代。
君が僕に勝った事がアカデミア中で噂になっているよ。」

「へっ？　何でだよ、宝山？」

十代がケロッとした表情だったので、
俺は、思わず呆れた。

「十代お前な…。
宝山は、万丈目に匹敵する位強いって前から言われてたんだぞ…。
その宝山に、デュエルで勝ったんだ…。噂にならない方がおかしいぜ。」

「まぁ、アニキは噂なんて気にしないから…。」

そう言うと、ハッと翔が焦り出した。

「あっ、そう言えば僕、そろそろ総合デュエル場に行かなきゃ…。
じゃあね、アニキ、塔也君、宝山君。」

「おう！じゃあな。
…そう言えば翔が、今回の龍牙先生の課題デュエルの相手に選ばれたんだったな…。」

「それって、あれだろ？　アカデミアの先生になる条件の中のアカデミアの５０人の生徒とデュエルで勝利するってヤツだろ？」

「うん、この条件は、ここのオーナーが、デュエルを通じて生徒との関係を深め易くするのが目的なんだって。」

十代の言葉に、宝山はそう答える。

「へぇ、そうなんだ…。」

アカデミアのパンフレットで、ここのオーナーの写真を見たが、とてもそんな考えを持つ人間には見えなかったな…。
そう思っていると、向こうから明日香とフォリナがやって来た。

「ハローッ！　ジュウダイ君、ホウザン君、…トウヤ。」

「あら、翔君と三沢君がいないのは珍しいわね。」

「よう、明日香、フォリナ！」

「ふふ、こんにちは。
明日香さん、フォリナさん。」

「おお、明日香とフォリナか。
三沢なら、建宮先生の補習を受けてる最中で、翔なら、龍牙先生の課題デュエルの相手だ。」
明日香とフォリナにそう言った。
「ああ、実習生の龍牙先生の…。」
「ウーン…。」
…？何だ、フォリナは何か浮かない顔をしているが…。
「どうしたんだ、フォリナ？」
「…実はアスカから、リュウガティーチャーのバッドな噂を聞いタノ…。」「…何だよ、悪い噂って？」
「龍牙先生って、その課題デュエルは今のところ４６連勝したって話なんだけど…。」
「４６連戦!?凄ぇな!!」
その発言に、俺と宝山は首を捻った。

「うーん、十代が言っても…。
…ねぇ。」

「ああ、全く凄いとは思わ無ぇな。」

「何だよ、２人して…。」

「アハハ、ジュウダイ君なら、１００連戦くらい出来る気がシマース。」

「うん。」

「だな。」

「フォリナまで…。」

「…コホン、話を続けていいかしら?」

十代を茶化していると、明日香が咳払いをして中断させる。

「ああ、悪いな。続けてくれ。」「…で、噂って言うのは負けた生徒から、レアカードを奪っているらしいのよ。」

「な、何だって!?」

「なんだよそりゃ!?ヒデェな!」

「その噂が本物なら、龍牙先生…最低だな。」

俺たちはそう言った。

「まぁ、あくまでも噂なんだけど…。」

「でも、バッドな予感がシマース…。
リュウガティーチャーとデュエルする時は気を付けてクダサーイ。
」

フォリナの言葉に、俺はハッと何かに気がついた。

「…って事は、翔はヤバいんじゃないか!?」

「あっ!!　そりゃそうだ!
こうしちゃいられないぜ、総合デュエル場に行くぜ!宝山、塔也!!」「うん!じゃあね、明日香さん、フォリナさん。」

「悪い、明日香、フォリナ、またな!」

十代と宝山と俺は、明日香とフォリナに別れを告げた。

「あっ、ちょっと！」

「3人とも、気を付けてクダサーイ…。」

塔也↓？？？ｓｉｄｅ

私はクロノス教諭に、課題デュエルの報告をして、部屋から去った。

…フフフ、私がここの教師になった暁には、アナタなどすぐに蹴落としてやるよ…。

ここの学園で、大きな地位を築き上げれば、デュエル界において、かなりの発言権を得られる…。

今まで私の行動が順調なのも、全てあのカードを拾ってからだ…。
その時から、私は何でも出来る気がしてきた。
それこそ、私が世界を動かす事すら…。

…クククク。

???→塔也ｓｉｄｅ

俺たち3人は、龍牙先生と翔がデュエルしているであろう、総合デュエル場に向かった。

その途中で翔を見つけたが、
やけに表情が沈んでいる。
まさか…。

「おいっ！大丈夫か、翔！」

「ア、アニキ、宝山君、塔也君…。
龍牙先生に、僕のカードが取られちゃった…。」

「「「何だって！！？」」」

…決定だな。　龍牙先生、いや龍牙は最低な奴だって事がな！

「明日香さんたちが言ってた噂は本当だったんだね…。」　「…

十代、龍牙は今、クロノス先生の部屋に課題デュエルの報告に行っている筈だ！！」

「ああ！クロノス先生の部屋に行こうぜ！みんなっ！！
龍牙の奴から翔のカードを取り戻すんだ！」

「あと翔以外から奪ったカードもな…。」

俺と十代が、いきり立つと、翔が静止しようとする。

「待ってよ、アニキ、塔也君！！
相手は先生だよ！？

無理だよ！」

悪いな、翔。

俺たちは止まる気は、　毛頭無い。
その証拠に宝山が翔を止めた。

「ゴメンね、翔。
君が何と言おうと、彼の行為を僕たちは許せないんだ！」

「行こうぜ！塔也、宝山、翔！」

「「おーっ！」」

「ま、待ってよ、３人共ー！」

クロノス先生の部屋に向かったら、その途中で案の定、龍牙に会った。
そして俺たちは龍牙に直訴した。

「おいアンタ！翔のカードを返せよ！」

「それに、他の生徒からもカードを奪っているらしいな…。」

「あなたのやっている行為は、教師として反しています！」

「おや、君たちは翔君と…。」

「遊城　十代だ！」

「雲雀　塔也だ…。」

「皇　宝山です！」

俺たちは怒りを露わに名乗り上げた。

「何を言い出すかと思えば、その事か…。
私は翔君に持っていないカードを譲って貰っただけだよ。」

「そ、そんな…。僕は譲ってなんか…。」

コイツ、しらを切ってやがるな。

「どうだい、君たちも私にカードを譲ってくれないかな？」

龍牙の申し出に、俺たちは真っ向から断った。

「ふざけんな！　カードはデュエリストの魂なんだ！！」

「友達や仲間ならともかく、他人にホイホイ渡す訳にゃ、行かねぇな！」

「持っているカードたちには、

その人の大切な思い出があるんです！
簡単には譲れません！！」

「分かっていないな君たちは…。
私は来年からはこの学園の教師だ。
今から味方につけた方が色々といいと思うがね。
それにカードも、落ちこぼれの者が持っているより、
私のようなデュエリストに持って貰った方が光栄に思うだろう…？」

「アンタなんかにデュエリストを名乗って欲しくないねっ！」

「十代の言う通りだ、アンタは先生とも名乗る資格も無ぇ！」

「あなたのような人に持っていられているカードたちが可哀想だよ…。」

「…今なんて言った、オシリス・レッドの落ちこぼれ共とエリート崩れが…！」

俺たちの発言に、龍牙は青筋を立てて、吐き捨てた。
…化けの皮が剥がれてきたか。

「よく聞け小僧共、

私がこの学園にきたら、お前たちなど、
私の権限で、即刻退学にしてやる。
その時になってから後悔するなよ…。」

お前みたいな先生がいるアカデミアなんてコッチから願い下げだ！

「まだ教師になるって、決まったわけじゃないだろ。」

「課題デュエルの相手はあと3人残っています！」

「それまでにアンタのやった事を、鮫島校長に暴露してやるよ…。
」

「無駄だよ！　そんな証拠がドコにある？
それに課題デュエルも、あと3人だ。
すぐに終わるさ！」

「…やけに廊下が騒がしいと思えば、ドロップアウトボーイズに、
シニョール　皇　に龍牙…。
こんな所で何を騒いでいるノーネ？」

龍牙が得意気に宣言すると、向こうからクロノス先生がやって来た。

「あ、いえ先ほどの翔君とのデュエルの事で…。」

龍牙は十代と翔を抑えて、
俺と宝山には、「何も言うな。」
、と視線で訴える。

宝山が構わず、クロノス先生に暴露しようとするが、
俺が止めた。

「…どうして止めるんだい、塔也。」

「今、クロノス先生に言っても、コイツはどうせ、しらを切り通すだろうよ…。
それに、奴の言う通り、その証拠が無ぇ…！」

「…くっ！」

俺は拳を握り締めながら、宝山を小声で抑えた。

「ふーむ…あっ、そうナノーネ！　シニョール龍牙の残りの３人

の対戦相手は、
シニョールたちがするノーネ。」

これは好都合だな…。
勝った条件で、カードを返して貰おうか…。

「ああ、そのデュエル…。」

「俺たちが」

「「「受けて立つ！！！」」」

「…よろしい、では早速総合デュエル場に…。」

「ちょっと待ってくれませんか？」

「何デスーカ、シニョール龍牙？」

龍牙がクロノス先生を止めた、大方このままじゃ勝てないから、
デッキ調整するつもりだろうな。

「流石の私でも、この3人が相手となると、少し不安があります。…どうでしょう?明日のこの時間まで、デュエルを持ち越しと言う事で…。
その時はまずは塔也君からお相手させて頂きたいですね。」

「フム、確かに一理アルノーネ…、シニョールたちはいいデスーカ?」

「構わないぜ!」

「別にいいぜ。」

「異論はありません。」

俺たちとしても有り難いからな…。
提案を受ける事にした。

「では、また明日。
…クククク。」

そうして、打倒龍牙を胸に、俺たちはレッド寮の俺と十代と翔の部屋で、デッキ調整していた。

そして、課題デュエルの時がやって来た。

最後を飾る為か、大勢の生徒が観戦している。

「それデーハ、教育実習生のシニョール龍牙の課題デュエルを執り行うノーネ！」

「塔也、負けないでね！」

「俺たちのカードを託したぜ、塔也！」

「ああ、このデッキで奴を倒す！」

「…フフフ、別れの挨拶は済んだか？」

「アンタこそ、俺が勝ったら、みんなから奪ったカードを返して貰おうか！」

「フン、出来るものならな…。」

「行くぜ…。」

「…ククククク。」

「「デュエル！！」」

塔也　ＬＰ４０００

龍牙　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能によって、先攻は龍牙に決まった。

「行くぞ、私のターン、ドロー。
私はジュラック・ヴェローを攻撃表示で召喚する。」

龍牙のフィールドにカラフルな色合いの恐竜が飛び出した。

ジュラック・ヴェロー
ＡＴＫ１７００

「更にカードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドローだ！」

塔也　ＬＰ４０００
手札　６枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

龍牙　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

ジュラック・ヴェロー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「俺は、雲魔物ーミストルティを召喚！」

俺のフィールドにベールで覆った修道士の格好のような雲が現れる。

雲魔物ーミストルティ

ＡＴＫ１８００

「ならば、罠発動！　落とし穴！！

相手が攻撃力１０００以上のモンスターを召喚した時発動し、

そのモンスターを破壊する。」

やっぱ、アタッカー潰しの罠があったか…。

つーか、雲なのに落とし穴に落ちるってどうなんだ？

落とし穴

通常罠

相手が攻撃力１０００以上のモンスターを召喚した時に発動出来る。

そのモンスターを破壊する。

だが、まだまだだな。

「俺は墓地の　雲魔物－ミストルティ1体を除外して、　雲魔物－ストーム・ドラゴンを特殊召喚する！」

雲魔物－ストーム・ドラゴン

ＡＴＫ１０００

「そんな弱小モンスターでどうするつもりかね？」

「もちろんまだあるぜ、俺は　ストーム・ドラゴンをリリースして、　雲魔物－テンペスト・ドラゴンを特殊召喚する。」

「何！？」

ストーム・ドラゴンよりも、大きな龍の形の雲が龍牙を威嚇する。

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

ＡＴＫ２４００

「コイツは通常召喚出来ない代わりに、自分フィールド上の雲魔物１体をリリースする事で、特殊召喚出来る。」

「よし、いいぞっ！　塔也！！」

「これで、ジュラック・ヴェローを倒せるよ！」

「バトルだ！　雲魔物－テンペスト・ドラゴンで、ジュラック・ヴェローを攻撃！！
テンペスト・ストーム！」

テンペスト・ドラゴンは、嵐のような息吹でジュラック・ヴェローを吹き飛ばした。

「ちっ！」

龍牙ＬＰ４０００→３３００

「だがこの瞬間、ジュラック・ヴェローの効果を発動する！　攻撃表示のこのカードが、戦闘で破壊された時、自分のデッキから「ジュラック」と名の付く攻撃力１７００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚出来る！　私はデッキから、ジュラック・プロトプスを攻撃表示で特殊召喚する！」

ジュラック・プロトプス

ＡＴＫ１７００→１８００

「そして、ジュラック・プロトプスは、相手フィールド上のモンスター１体につき、攻撃力を１００ポイントアップする。」

ジュラック・ヴェロー

レベル４　炎属性　恐竜族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１０００

このカードが攻撃表示の時に、戦闘で破壊された場合、自分のデッキから「ジュラック」と名の付く攻撃力１７００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する。

ジュラック・プロトプス

レベル４　炎属性　恐竜族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１２００

このカードの攻撃力を、相手フィールド上のモンスター１体につき、１００ポイントアップする。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

「私のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ４０００
手札　１枚
モンスターゾーン
雲魔物－テンペスト・ドラゴン
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

龍牙　ＬＰ３３００
手札　４枚
モンスターゾーン
ジュラック・プロトプス
魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「私はジュラック・ブラキスを攻撃表示で召喚する。」

ジュラック・ブラキス
ＡＴＫ１０００

ジュラック・ブラキスはチューナーモンスター…。
龍牙の奴、仕掛けて来るか？

「私はレベル４のジュラック・プロトプスに、レベル３のジュラック・ブラキスをチューニング！
古の王者よ、炎を纏い現代に蘇れ！
シンクロ召喚！　蹂躙しろ、ジュラック・ギガノト！！」

ジュラック・ブラキスが３つの輪になって、ジュラック・プロトプスがそこに入ると、炎を纏ったティラノザウルスとなって、雄叫びをあげる。

ジュラック・ギガノト

ＡＴＫ２１００

「けど塔也の　テンペスト・ドラゴンの方が攻撃力は上だぜ。」

「いや、十代…。
ジュラック・ギガノトの効果は…。」

「ジュラック・ギガノトは、自分の墓地に存在する「ジュラック」と名の付くモンスター１体につき、
自分フィールド上の「ジュラック」と名の付くモンスターの攻撃力を２００ポイントアップする！
私の墓地にはジュラックは２体だ…。　よって、攻撃力を４００ポイントアップする！」　ジュラック・ギガノト

ＡＴＫ２１００→２５００

ジュラック・ギガノト

レベル７　炎属性　恐竜族／シンクロ

ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ１８００

チューナー＋チューナー以外の恐竜族１体以上

自分フィールド上のジュラックと名の付くモンスターの攻撃力を、自分の墓地のジュラックと名の付くモンスター1体につき200ポイントアップする。

くっ、テンペスト・ドラゴンの攻撃力を上回ったか…。

「バトルだ！ジュラック・ギガノトで、雲魔物－テンペスト・ドラゴンを攻撃！！
ギガント・バイト！」

「だがテンペスト・ドラゴンは、戦闘じゃ破壊され無いぜ！」

「だが戦闘ダメージは受けて貰おうか！」

「くっ…！」

塔也　ＬＰ４０００→３９００

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

レベル６　水属性　天使族

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ０

このカードは通常召喚出来ない。
自分フィールド上の雲魔物１体をリリースする事で、特殊召喚出来る。
１ターンに１度、手札１枚を墓地に送る事で、フィールド上のモンスター１体に、
フォッグカウンターを２つ乗せる。

テンペスト・ドラゴンは、ジュラック・ギガノトに噛み付かれたが、体は雲だから、すぐに元に戻った。

「…ククク、私はカード１枚伏せ、ターンエンド。」

塔也→龍牙ｓｉｄｅ

…ククク、お前の戦術は、昨日の内に調べさせて貰った。

召喚補助、モンスターサーチ、カウンター補助に至るまでお前は魔法カードで行っている…。

つまり、魔法カードさえ封じてしまえば、怖くも何ともない訳だ…。

「俺のターン、ドロー！…よしっ！」　塔也　ＬＰ３９００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ３３００

手札　２枚

モンスターゾーン

ジュラック・ギガノト

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

ほう、あの表情からすると、逆転のカードを引いたか…。

だが魔法カードなら、気の毒だが、そいつは使えないぞ…。

龍牙→塔也ｓｉｄｅ

よし、いいぞっ！　まずはコイツを召喚して…。

「俺は雲魔物－クライ・レインを攻撃表示で召喚！」　俺のフィールドに青黒い人型の雲が発生する。

雲魔物－クライ・レイン

ＡＴＫ１６００

「そして、クライ・レインの効果発動だ！
召喚に成功した時、フィールド上の雲魔物の数だけ、
このカードにフォッグカウンターを乗せる。
フィールド上の雲魔物は２体だ。
よって、フォッグカウンターは２つ乗せる！」

雲魔物－クライ・レイン
フォッグカウンター
０→２

あとは、俺の手札のダイアモンドダスト・ストームを発動すれば、
ジュラック・ギガノトの攻撃力をダウンして、龍牙に大ダメージ
を与えられる！

「そして俺は、速攻魔法　ダイアモンドダスト・ストームを発動
！」

…するはずだった。

「あ、あれ？魔法カードが発動しない…？」

おかしい…。

龍牙は伏せカードを発動した素振りも、魔法無効カードが発動した様子も無い。

なら発動するはずだ。

…なのに、何故だかダイアモンドダスト・ストームが発動するビジョンが一向に映らない。

「くそっ、何でだ！　何で魔法カードが発動しないんだっ！」

そうして今に至る訳だが…。

何故か龍牙が、余裕綽々で、俺に早くしろと促してくるが、まさか何か細工でもしたか？

まあいい…。

だったら別の手で、ジュラック・ギガノトを倒してやる。「俺は雲魔物－クライ・レインの効果発動！

このカードのフォッグカウンターを2つ取り除いて、
フィールド上のカード1枚をセットし直す！」

「な、何！？」

龍牙は、酷く驚いた。
大方、ジュラック・ギガノトを魔法無しで対処されるとは思ってなかったからだろうな…。

雲魔物－クライ・レイン

レベル４　水属性　天使族

ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。
このカードの召喚に成功した時、
フィールド上の雲魔物の数だけ、このカードにフォッグカウンターを乗せる。
このカードのフォッグカウンターを2つ取り除いて、
フィールド上のカード1枚をセットし直す。

「よしっ！これでジュラック・ギガノトを倒せるぜ！　塔也！！」

「しかも、クライ・レインのダイレクトアタックで大幅にＬＰを削れるよ！」

「バトルだ！　テンペスト・ドラゴンで、ジュラック・ギガノトを攻撃！！
テンペスト・ストーム！」

「くっ！　だが、まだまだだっ！」

「そうだ、まだだ！！
更に　クライ・レインで、ダイレクトアタック！！」

「ぐわあぁっ！」

龍牙　ＬＰ３３００→１７００

…どうやら2枚とも、攻撃反応の罠じゃなかったようだが…。
油断は出来ないな…。

「俺はこれでターンエンドだ。」

塔也→フォリナｓｉｄｅ

フ～、ビックリしまシータヨ…。
トウヤが、魔法カードを使えないアクシデントが起こったみたいデースガ、
上手く切り返しマシタヨ！

「塔也のディスクに、トラブルが起こったみたいだけど、何とかジュラック・ギガノトを破壊出来たみたいね…。」

「デモ、ディスクのトラブルが、こんなタイミングで起きるものデショウカ…。」

「…一緒だ、僕の時と。」

「えっ？」

「どう言う事デースカ？」

「僕と龍牙先生のデュエルの時も、今の塔也君のようなトラブルが起こったんだけど、
後で、ディスクを調べてみたら異常は全く無かったんだ！」

「何ですって！？なら、龍牙先生は不正を…？」

そんな…。リュウガティーチャー、許せマセン！

「だとしても、心配無いわフォリナ、翔君。」

「ソウデスネ！
トウヤたちには、ワタシたちが秘策を与えてアリマスヨ！！
絶対に負けマセンッ！」

「そうだよね！塔也君だったら、龍牙先生にだって勝てるよ！」

トウヤたちが負けてしまったら、リュウガティーチャーによって、
退学になってシマイマース…。
そんなのは、とても耐えられマセン…。
お願い、トウヤ…負けないで…。　フォリナ↓塔也ｓｉｄｅ

「私のターン、ドロー。…！ククククク…。」

塔也　ＬＰ３９００

手札　１枚

モンスターゾーン

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

雲魔物－クライ・レイン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ１７００

手札　３枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

何だ、何を引き当てたんだ?

「私は俊足のギラザウルスを攻撃表示で特殊召喚する!」

俊足のギラザウルス

ＡＴＫ１４００

「俊足のギラザウルスは、手札から特殊召喚出来る!
ただ、この効果で特殊召喚した場合、相手は墓地からモンスター1体を　レベル制限無く特殊召喚出来てしまいますがね…。
さぁ、塔也君。
墓地のモンスター1体を特殊召喚してくれたまえ。」

俊足のギラザウルスか…。

アドバンス召喚か、シンクロ召喚するのか？

俊足のギラザウルス

レベル３　地属性　恐竜族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ４００

このカードは、手札から特殊召喚出来る。
この効果で特殊召喚した場合、相手は相手の墓地からモンスター１体を特殊召喚出来る。

「俺は雲魔物－ストーム・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚だ！」

雲魔物－ストーム・ドラゴン

ＡＴＫ１０００

「…ククク、更に私はジュラック・ガリムを攻撃表示で召喚する。」

ジュラック・ガリム
ＡＴＫ１２００

「龍牙のフィールドにまたチューナーが出て来たぜ！」

「またシンクロ召喚する気だね…。」

「私はレベル３俊足のギラザウルスと、レベル２ジュラック・ガリムをチューニング！
古の狩人よ、立ち塞がる障壁を粉砕しろ！
シンクロ召喚！駆け抜けろ、ジュラック・ヴェルヒプト！！」

ジュラック・ガリムが２つの輪となり、俊足のギラザウルスが中に入ると、
そこから、炎を纏った身軽そうな恐竜が現れる。

「ジュラック・ヴェルヒプトの攻撃力・守備力は、シンクロ素材にしたモンスターの攻撃力の合計となる！　よって、攻撃力・守備力は２６００です。」

ジュラック・ヴェルヒプト
ＡＴＫ？→２６００
ＤＥＦ？→２６００

ジュラック・ヴェルヒプト
レベル５　炎属性　恐竜族／シンクロ
ＡＴＫ？　ＤＥＦ？
チューナー＋チューナー以外の恐竜族１体以上
このカードの攻撃力・守備力は、シンクロ素材にしたモンスターの攻撃力の合計数値と同じになる。
このカードがセットモンスターを攻撃する場合、セットしたまま破壊する。

ジュラック・ヴェルヒプトか…。
攻撃力は上だが、テンペスト・ドラゴンとクライ・レインの効果で倒せるな。

「更に私は魔法カード、簡易融合を発動

魔法禁止！？　龍牙の策略！（後書き）

塔也君は龍牙先生のジュラック・ギガノトを倒して、大ダメージを与えたんだ！

…けど次のターンに龍牙先生は見た事も無いモンスターを出したんだ…。

「私はレベル５のジュラック・ヴェルヒプトとプラグティカルをオーバー・レイ！
２体のモンスターでオーバー・レイ・ネットワークを構築！！
エクシーズ召喚！紅蓮のマグマより生まれ出でよ、Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス！！」

「な、何だ！？　このモンスターは！！？」

そのモンスターで、塔也君は窮地に追い込まれたんだ…。

「俺は諦めない！　みんなが俺に託したカードが入ったデッキで、お前に勝つ！」

次回、「託された友情」

次回も僕は頑張るよ！

託された友情（前書き）

お待たせしました！

第7話です。

今回はあのモンスターが、塔也を苦しめます。

少し修正しました。

託された友情

「私は魔法カード、簡易融合発動！　１０００ＬＰを払い、レベル５以下の融合モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！　出でよ、プラグティカル！」

プラグティカル
ＡＴＫ１９００

何でジュラック・ガリムがいる時に簡易融合を使用しなかったんだ？　そしたらレベル７のシンクロモンスターを召喚出来たはずだ。

「…ククク、行くぞ！　レベル５のジュラック・ヴェルヒプトとプラグティカルをオーバー・レイ！！」

「エクシーズ召喚だと！？」

「その通りだ塔也君。
２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！
エクシーズ召喚！灼熱のマグマより出でよ！Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス！！」

ヴェルヒプトとプラグティカルが、黒い渦に飲み込まれると、そ

こから巨大な火球が現れ、たちまち凶悪な恐竜に変形した。

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス
ＡＴＫ　２５００

オーバー・レイ・ユニット
０→２

「な、何だ、このモンスターは…。」

「ハハハ！　ヴォルカザウルスの効果発動！
このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、相手モンスター１体を破壊し、
相手に破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス
ランク５　炎属性　恐竜族／エクシーズ

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００

レベル５モンスター×２

このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、相手モンスター１体を破壊し、
相手に破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える。

「な、何だよ!?その反則じみた効果はっ!」

「ハハハ行くぞ、オーバー・レイ・ユニットを使用し、テンペスト・ドラゴンを破壊する!
喰らえ!マグマックス!!」

ヴォルカザウルスが、オーバー・レイ・ユニットを1つ食らうと、胸部の噴射口から放たれた高熱を帯びた炎で、テンペスト・ドラゴンを一瞬で蒸発させた。

「うおあぁぁぁっ!」

塔也　LP3900→1500

「何だ!?あのモンスター・エクシーズはっ!初めて聞いたぞ。」

「塔也君のLPが一気に減っちゃった…。」

「何て効果なの…。」

ヴォルカザウルスの効果で、みんな驚きを隠せないようだ…。

…俺だってそうだ。

「そしてもう1度効果発動だ！　クライ・レインを破壊する！」

ヴォルカザウルス

オーバー・レイ・ユニット

1↓0

「なっ、また効果を使えるのか！？」

「そうだ！ヴォルカザウルスはオーバー・レイ・ユニットが存在する限り、何度も発動出来るのだよ！！
もう1度喰らえ！マグマックス！！」

今度はクライ・レインに向かって炎を放った。

「マズいよ！　塔也のＬＰは１５００だよ！！」

「１６００もダメージを受けたら、塔也が負けちまうぜ！」

「イヤァァッ！トウヤー！」

くそ、俺の負けか…。

このカードが無かったらな！力を貸して貰うぜ明日香！

「罠発動！フロスト・ダメージ！！」

「な、何！？」「アッ、あのカードはアスカの…！！」

「ふふ、上手く使いこなしたみたいね。」

「墓地から水属性１体を除外して、このターンにダメージを受ける時、除外したモンスターの攻撃力分、ダメージを減らす！
テンペスト・ドラゴンを除外して、このターンに受けるダメージを２４００ポイントダウンだ！」

フロスト・ダメージ

通常罠

自分の墓地から水属性１体を除外して発動。
このターン、ダメージを受ける時、この効果で除外したモンスターの攻撃力分、ダメージを減らす。

テンペスト・ドラゴンが爆炎にぶつかって、炎を相殺した。

「ならばヴォルカザウルスで、ダイレクトアタック！

ボルカノン！！」

攻撃まで出来るのか…とことんふざけてやがる。

「くっ、フロスト・ダメージの効果だ！」

「それがどうした！戦闘ダメージを受けて貰うぞ！」

「ぐはっ！」

塔也　ＬＰ１５００→１４００

「明日香のカードで何とか踏ん張れたな。」

「うん、危なかったよ。」

本当に危なかったな…。

昨日、十代たちとデッキ構築をしている時、翔から事情を聞いて駆けつけた明日香とフォリナと三沢が、俺にカードを託してくれた。

勿論、十代たちともな。

「何故フロスト・ダメージが…。

それは君のデッキにある筈の無いカードだぞ！」

「そうだな。なんせ仲間から預かったカードだからな。
仲間が託したカードの入ったデッキでお前を倒してやるぜ！」

「フン、下らん。
私はエンドフェイズに罠カード、ユニット・リカバリーとダメージワクチンΣＭＡＸを発動！」

げっ、あの２枚のカードは…。

「ユニット・リカバリーの効果で、このターン使用したオーバー・レイ・ユニットを、装着していたモンスターに再装着出来、ダメージワクチンΣＭＡＸは、このターン、相手に与えたダメージ分、私のＬＰを回復する！」　ヴォルカザウルス

オーバー・レイ・ユニット
０→２

龍牙　ＬＰ１７００→４２００

ユニット・リカバリー
通常罠

エンドフェイズに発動出来る。
このターン使用したオーバー・レイ・ユニットをそのエクシーズモンスターに再装着する。

ダメージワクチンΣＭＡＸ
通常罠

エンドフェイズに発動出来る。
このターン、相手に与えたダメージ分、自分のＬＰを回復する。

「マズいよ！またヴォルカザウルスの効果が使われちゃうよ！！」

「デモ、ジュウダイ君かホウザン君のカードをドロー出来れば…。」

「もしくは三沢君のカードでヴォルカザウルスを対処するか、ね。」

「僕のカード、お願い塔也に力を貸して…。」

「頼むぜ、塔也。」

「俺のターン、ドロー！」　手札２枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

龍牙　ＬＰ４２００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×２

魔法・罠カード　無し

くっ、ダメだ！今コイツを出しても、ヴォルカザウルスの餌食になるだけだ！

「…俺はこのままターンエンド！」

「そんな！塔也君の手札にモンスターは無かったの！？」

「…いいえ、塔也の判断は正しいわ。今モンスターを召喚しても、ヴォルカザウルスの的になるだけよ。」「デハ、トウヤのリバースカードは攻撃に対応した罠デショウカ？」

「そうだと信じたいわね…。」

「ハハハ、成す術無しかね？　私のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ１４００
手札２枚
モンスター　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

龍牙　ＬＰ４２００
手札１枚
モンスターゾーン
Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×２
魔法・罠ゾーン　無し

「バトルだ！ヴォルカザウルスでダイレクトアタック！　ボルカノン！！」「罠発動、ミスト・ゲイン！　このターン受けるダメージを１度だけ０にし、無効にしたダメージ４００ポイントにつき、フィールド上のモンスターにフォッグカウンターを乗せる！
無効にしたダメージは２５００…。
よって、ヴォルカザウルスにフォッグカウンターを６つ乗せる！」

ヴォルカザウルス

フォッグカウンター

0→6

ミスト・ゲイン

通常罠

自分がダメージを受ける時、発動出来る。
そのダメージを0にし、無効にしたダメージ400ポイントにつき、
フィールド上のモンスターにフォッグカウンターを1つ乗せる。

「くっ、鬱陶しい霧め…。
私はカードを1枚伏せターンエンド！」　「俺のターン、ドロー！」

塔也　LP1400

手札3枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

龍牙　ＬＰ４２００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×２
　フォッグカウンター×６

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

俺はコイツに賭けるぜ！

「俺は雲魔物－トワイライト・スカイを召喚して、効果でフィールド上の雲魔物の数だけ、
このカードにフォッグカウンターを乗せる！」

雲魔物－トワイライト・スカイ

ＡＴＫ１７００

フォッグカウンター

０→１

「そして効果発動！
フィールド上のフォッグカウンターを２つ取り除く事で１枚ドロー出来る。
俺はヴォルカザウルスのフォッグカウンターを全て取り除いて、３枚ドロー！」

雲魔物－トワイライト・スカイ

レベル４　水属性　天使族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。
このカードの召喚成功した時、
フィールド上の雲魔物の数だけ、
このカードにフォッグカウンターを乗せる。
フィールド上のフォッグカウンターを２つ取り除く事で、カード１枚ドローする。

よし！来たぜ！！

「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ！」

「往生際が悪いぞ！私のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ１４００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－トワイライト・スカイ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ４２００

手札１枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「ヴォルカザウルスの効果発動！
オーバー・レイ・ユニットを1つ取り除いて、トワイライト・スカイを破壊する！」

ヴォルカザウルス

オーバー・レイ・ユニット

2↓1

今度はお前の力を借りるぜ、三沢！

「カウンター罠発動！崇り目！！」

「くっ、また入っていない筈のカードを…！」「今度は三沢のカードだぜ！」

「その調子だよ、塔也！」

「自分フィールド上のモンスターが相手の効果対象になった時、対象になったモンスターと同じ種族のモンスター2体を除外して、その効果を無効にし、破壊する！
そして、この効果で除外したモンスターの合計レベル×２００ポイントのダメージを与える！」

「何だと!?」

ストーム・ドラゴンとクライ・レインの魂が、ヴォルカザウルスの炎に乗り移って、ヴォルカザウルスを爆散させる。

「うおぉぉっ!」

龍牙　ＬＰ４２００→２６００

「やったよ!塔也君がヴォルカザウルスを倒したよ!」

「エクセレント!トウヤの勝機が見えてキマシタヨッ!」

「ええ、そうね。」

崇り目

カウンター罠

自分フィールド上のモンスターが、

相手の魔法・罠・モンスター効果の対象になった時、対象になったモンスターと同じ種族のモンスター2体を除外して発動する。
その効果を無効にし、除外したモンスターの合計レベル×２００ポイントダメージを与える。

「くっ、小癪なマネを！私はカードを1枚伏せ、エンドフェイズに永続罠、リチャージ・リボーンを発動！」

くそっ！あれは…。

「私のモンスター・エクシーズが破壊された時、そのモンスター・エクシーズを特殊召喚し、更にエクシーズ召喚に必要なモンスターの数だけ、墓地のモンスターをオーバー・レイ・ユニットとして装着する！
蘇れ！　Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス！！」

ヴォルカザウルス

ＡＴＫ２５００

オーバー・レイ・ユニット

０→２

「ヴォルカザウルスが復活しちまったぜ！」

「しかもオーバー・レイ・ユニット付きでね。
このままじゃ塔也は…。」

リチャージ・リボーン

永続罠

自分のモンスター・エクシーズが破壊されたターンのエンドフェイズに発動出来る。
そのモンスター・エクシーズを墓地から特殊召喚し、
更にエクシーズ召喚に必要なモンスターの数だけ、墓地のモンスターをオーバー・レイ・ユニットとして装着する。
このカードがフィールドから離れた時、このモンスターを破壊する。
このモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「俺のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ１４００

手札３枚

モンスターゾーン

雲魔物－トワイライト・スカイ＋フォッグカウンター×１

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

龍牙　ＬＰ２６００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×２

魔法・罠ゾーン

リチャージ・リボーン

伏せカード×１

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ！」

「ふっ、私のターン、ドロー！」　塔也　ＬＰ１４００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－トワイライト・スカイ＋フォッグカウンター×１

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ２６００

手札１枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×２

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「私はハイパーハンマーヘッドを召喚！」

ハイパーハンマーヘッド

ＡＴＫ１５００

「そしてヴォルカザウルスの効果発動！
今度こそトワイライト・スカイを破壊する！
喰らえ！マグマックス！！」

「罠発動！レインボー・ライフ！！　手札１枚を墓地に捨て、このターン、受けるダメージ分、自分のＬＰを回復する！」

塔也　ＬＰ１４００→３１００

「僕のカードが塔也を守ったよ！」

レインボー・ライフ

通常罠

手札１枚を捨て発動する。
このターン、自分がダメージを受ける時、
その数値分、ＬＰを回復する。

「くっ、ならばターンエンドだ…。」

くそ、そろそろコッチがジリ貧になって来たぜ…。

「俺のターン、ドロー！…ん？コイツは…。」

塔也　ＬＰ３１００

手札２枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ２６００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×１

ハイパーハンマーヘッド

魔法・罠ゾーン

リチャージ・リボーン
伏せカード×１

「俺はハネクリボーを守備表示で召喚！」

ハネクリボー
ＤＥＦ２００

「よし！塔也に力を貸してくれ相棒！」

頼むぜ、ハネクリボー。
…ん、気のせいか？

ハネクリボーが笑いかけた気がする。

「ハハハ、そんなモンスターで何になる！」「言ってろ、俺はターンエンドだ。」

「フン、私のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ３１００
手札１枚
モンスターゾーン
ハネクリボー
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

龍牙　ＬＰ２６００
手札１枚
モンスターゾーン
Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス＋オーバー・レイ・ユニット×１
ハイパーハンマーヘッド
魔法・罠ゾーン
リチャージ・リボーン
伏せカード×１

「ならば望み通り、その雑魚モンスターを破壊する！喰らえ！マグマックス！！」

ヴォルカザウルス

オーバー・レイ・ユニット

0↓1

「うぐっ！」

塔也　ＬＰ３１００↓２９００

「だがハネクリボーの効果発動！このカードがフィールド上で破壊され墓地に送られた時、このターンプレイヤーが受ける戦闘ダメージを０にする！」

ハネクリボー

レベル１　光属性　天使族

ＡＴＫ３００　ＤＥＦ２００

このカードがフィールド上から破壊され墓地に送られた時、

このターンプレイヤーが受ける戦闘ダメージを０にする。

「やったぜ！塔也！！」

「本当にしぶといな…。　私はターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！！」

塔也　ＬＰ２９００
手札２枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

龍牙　ＬＰ２６００
手札１枚
モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス
ハイパーハンマーヘッド

魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

…来た、このカードと、フォリナと翔のカードを合わせれば…。

「俺は罠カード　暁の導き　を発動！」

「アレはワタシのカードデースヨ！」

「自分の除外ゾーンのモンスター１体と同じ種族・レベル４以下のモンスター１体をデッキから特殊召喚する！
俺は雲魔物－スモッグ・ファクトを特殊召喚し、更に雲魔物－タービュランスを召喚！」

雲魔物－スモッグ・ファクト
ＡＴＫ１５００

雲魔物－タービュランス
ＡＴＫ８００

暁の導き

通常罠

自分の除外ゾーンのモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターと同じ種族・レベル4以下のモンスター1体をデッキから特殊召喚する。

「タービュランスは召喚した時、フィールド上の雲魔物の数だけフォッグカウンターを乗せ、
更にタービュランスの効果発動！
このカードのフォッグカウンターを1つ取り除いて、自分のデッキ・墓地から雲魔物－スモーク・ボールを特殊召喚する！」

タービュランスは、フォッグカウンターを1つ飲み込んで、体の穴から　スモーク・ボールが飛び出した。

雲魔物－タービュランス
フォッグカウンター
2→1

雲魔物－スモーク・ボール
ＤＥＦ６００

雲魔物－タービュランス
レベル４　水属性　天使族
ＡＴＫ８００　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。
このカードの召喚成功した時、フィールド上の雲魔物の数だけ、このカードにフォッグカウンターを乗せる。
このカードのフォッグカウンターを１つ取り除いて、自分のデッキ・墓地から　雲魔物－スモーク・ボール１体を特殊召喚出来る。

「スモッグ・ファクトの効果発動！
スモッグ・ファクト自身をリリースして、タービュランスにフォッグカウンターを４つ乗せ、更にタービュランスの効果でデッキからスモーク・ボール２体を特殊召喚だ！」

雲魔物－スモーク・ボール×２
ＤＥＦ６００

行くぜ、翔！

「俺はレベル１のスモーク・ボール３体をオーバー・レイ！！」

「な、何！？」

「３体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！
エクシーズ召喚！
銀河の星屑よ、１つの命となれ！
雲魔物－コズミック・ボール！！」

スモーク・ボール３体が黒渦の中に入ると、スモーク・ボールに似た星屑の雲が飛び出した。

雲魔物－コズミック・ボール
ＡＴＫ１５００

「あ！あれは僕が塔也君と交換したカードだ！」
「何の効果があるかはしらんが、永続罠　アバランチ発動！
相手のモンスター・エクシーズ１体は攻撃出来ず、効果を使用する場合、相手は５００ポイントのダメージを受ける！」

「構わねぇよ！　コズミック・ボールの効果発動！
オーバー・レイ・ユニット1つ使用し、フィールド上のモンスター1体を選択し、選択したモンスターのレベルだけフォッグカウンターを乗せる！
俺はオーバー・レイ・ユニットを3つ取り除いて、　タービュランスにフォッグカウンターを12個乗せるぜ！」

コズミック・ボールは、周りに漂っているオーバー・レイ・ユニットを　3つとも食べると、
タービュランスに大量のフォッグカウンターを付加させた。

塔也　LP2900→1400

雲魔物ーコズミック・ボール

オーバー・レイ・ユニット
3→0

雲魔物ータービュランス
フォッグカウンター
3→15

「そして、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」　雲魔物ーコズミック・ボール

ランク1　水属性　天使族／エクシーズ

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０

レベル1×3

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。

　このカードのオーバー・レイ・ユニットを1つ取り除く事で、フィールド上のモンスター1体を選択して、そのモンスターにレベル数値分、フォッグカウンターを乗せる。

アバランチ

永続罠

相手がエクシーズ召喚した時、そのモンスター1体は攻撃出来ず、効果を発動する時、
そのプレイヤーは５００ポイントのダメージを受ける。
対象モンスターが存在しない場合、このカードを破壊する。「ハハハ！何をするかと思えば、大量のフォッグカウンターを追加しただけか！
　悪あがきが過ぎるぞ！」

「ダメだ、次の龍牙先生のターンで負けちゃうよ！」

「ノープロブレムデスヨ、ショウ君。アナタのカードでトウヤのビクトリーデスヨ！！」

「え、どう言う事なの？」

「フォリナ一体何を…。」

「見ていてクダサイ、ショウ君、アスカ。」

「このターンで終わりだ！　私のターン、ドロー！」

「ああ、終わりだな。
…お前の負けでな！！」

「何を世迷い言を…。」

「俺はドローフェイズに罠カード　上昇気流発動！！」

「な、何！？」

「このカードは、フィールド上のフォッグカウンターを全て取り

除いて、取り除いたフォッグカウンター×３００ポイントのダメージを与える！」

「やったぜ！これで…。」

「塔也の勝ちだね！！」

上昇気流

通常罠

フィールド上のフォッグカウンターを全て取り除いて、取り除いたフォッグカウンター×３００ポイントのダメージを与える。

「そ、そんな私はこんな雑魚カードに負けるのか…？」

「お前みたいに色眼鏡で見ている奴に、雑魚カードなんて呼ばせねぇ！　フォッグカウンターを１５個取り除いて、お前に４５００ポイントのダメージだ！

喰らえっ！」　フォッグカウンターが集まると、大嵐になり龍牙に向かって吹き抜けた。

「ぐわあぁぁぁっ！！」

龍牙　ＬＰ２６００→０

「イエス！トウヤのビクトリーデースヨ！」

「やったよ！塔也君！！」

「やるわね塔也。」

「見事だよ、塔也。」

「やったぜ！塔也！！」

俺はみんなの方を向いてこう言った。

「ありがとうな！みんなのおかげで勝てたぜ！」

託された友情（後書き）

俺は仲間から託されたカードを使って、龍牙に勝てたんだが…。

「さぁ、生徒たちのカードを返して貰うぜ！」

「カード？フン、何の事かね？」

奴は尚もしらを切り続ける。

そこに建宮先生がやって来て…。

「これについて説明して戴きましょうか…。」

次回、「裁きの刃　剣帝カリバー」

次回もよろしくな。

裁きの刃　剣帝カリバー（前書き）

第９話です。

今回は建宮先生がデュエルします。

塔也ｓｉｄｅ

龍牙はヴォルカザウルスと言う反則なカードを使って、
俺は苦戦したが、みんなが託してくれたカードのおかげで勝てた…。

さて、勝ったんだ。

龍牙には生徒たちのカードを返して貰うか。

「俺の勝ちだな。さぁ生徒たちのカードを返して貰うぜ！」

「…カード？フン、何の事かな？」

「アイツ、まだシラを切るつもりだぜ！」

「何て人だ…。　塔也とデュエル前に約束したのに…。」

本当に最低な奴だな…。
約束すら守らない気か。

「さぁ、次は宝山君、
君の番だ…。

塔也君で負けた分はまた別の生徒から取り戻すとしようか。」

「くっ、アンタなぁ！！」

「あんな人が教師になるなんて…。」

俺も憤りを感じたが、どうしょうもねぇ…。

「仕方ねぇさ十代、宝山。
代わりに、なんとしても奴に一勝もさせるな！」

「分かったよ！僕はこのデュエル、容赦なく行くよ！」

「負けるなよ、宝山！」

「それデーハ、シニョール　皇、デュエルフィールドに上がるノーネ！」

「…じゃあ行って来るよ十代、塔也。」

「気を付けろよ宝山。
奴は恐らくこっちの魔法が使えない細工をしてくるぞ。」

俺は宝山に注意した。

「じゃあさっきのデュエル、君が魔法を使えなかったのは…。分かったよ気を付ける！」

宝山がデュエルフィールドに上がろうとする時だった。

「…そのデュエル、少し待って頂けませんか？」

誰かがデュエルを遮った。

…建宮先生だ。

三沢も一緒にいるようだが、なんか顔が青ざめているような…。

「どうしたノーネ、シニョール建宮。

今はシニョール龍牙の課題デュエルの最中デスーガ…。」

「失礼、クロノス教諭。ですが、私は龍牙先生に少しお話がありまして…。」

「ほお、私に話ですか…。」

何か心なしか、建宮先生の雰囲気が　いつもと違う気がした。

何か覇気を醸し出しているような…。

「ええ…。　どうやら、龍牙先生にカードを剥奪されたと言う事を生徒から聞かされたもので…。」

「おやおや、一体誰がそんなデタラメな事を建宮先生に？」

「…ほお、私が生徒から聞いた話をデタラメと…。」

な、何だ！？一瞬背筋が凍ったような。

「…ではこれについて説明して頂きましょうか？」

そう言うと、建宮先生は懐から数枚の写真を、龍牙に見せた。
…どれも龍牙が対戦した生徒からカードを奪った姿が写ったものばかりだ。

「な、何ですか！？この写真は！」

「私の所にこれが送られて来ましてねぇ…。
ちなみにこれらの写真は調べましたが、合成ではありませんでしたよ。」

「くっ！こんな物、一体何処から！？」

龍牙の表情が見る見るうちに青ざめているな。
そりゃ、カードを奪った証拠を突き付けられたらな。

「さて、クロノス教諭。」

「ウーム、このような不祥事が発覚してしまった以上、シニョール龍牙の採用は無かった事に…。」

「待って下さい！これは誰かの陰謀だ！！」

龍牙は尚も食い下がった。
見苦しい奴だぜ。

「…いいでしょう、そこまで言うならばこうしましょう。
私とデュエルして、龍牙先生が勝ったらこの件は不問としましょう。
ですが、私が勝ったらあなたには早急にアカデミアから去って戴きます。」「…いいでしょう、それで濡れ衣が晴れると言うなら…。」

「…クロノス教諭、よろしいでしょうか？」

「ムムム、シカーシ…。」

クロノス先生は困惑した様子だったが、
建宮先生の目を見て、何かを感じたようで了承した。

「分かりマシターノ、このデュエル認めるノーネ。」

「ありがとうございます、クロノス教諭。
では、始めましょうか…？」

「「デュエル！！」」

建宮　ＬＰ４０００

龍牙　ＬＰ４０００

デュエルが始まった。
建宮先生が勝てば、龍牙はカードを返さざる負えないが…。建宮先生に勝算はあるのか？

塔也→三沢ｓｉｄｅ

建宮寮長、かなり頭にキテるな。

近くにいて、何度も背筋が震えてしまった…。

しかし、龍牙先生に勝利は限りなく無いに等しい。

何故なら建宮寮長のデッキは…。

おっと、どうやらルーレット機能で、建宮寮長からデュエルが始まるようだ。

「私のターン、ドロー。

私は、地帝の番兵を守備表示で召喚しますよ。」

グランマーグに似た鎧を装備した兵士が、強固な盾を構える。

地帝の番兵

ＤＥＦ２０００

「私はカードを2枚伏せ、ターンエンドです。」

「なぁ三沢、建宮先生のデッキってどんなデッキなんだ？」「そう言えば俺、建宮先生がデュエルしている所は見た事が無いな。」

「建宮寮長は帝デッキだ。」

十代と塔也の質問に俺はそう答える。

「帝デッキかぁ…。それなら僕と同じオベリスク・ブルーで石原さんが使っていたけど…。」

「ただ建宮寮長のデッキは、他の帝デッキとは一味違う。」

「違うって…。」

「どう言う事だ、三沢？」

まぁ疑問に思うだろうな…。

無理も無い何故なら…。

「建宮寮長の使用するカードは、
殆ど俺も知らない物ばかりだからな。」

「三沢でも知らないカードだと?」

「君は殆どのカードの知識は把握している筈だ…。
その君が知らないカードを使うなんて…。」

「凄いな、そんなカードを使うなんて…。
俺、建宮先生とデュエルしたいぜ!」

塔也と宝山は驚いている中、十代は相変わらずだな。

「まぁ見ていれば分かると思うよ、建宮寮長の強さが…。」

「では私のターン、ドロー。」

建宮　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

地帝の番兵

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

龍牙　ＬＰ４０００

手札６枚

「私は魔法カード、地砕きを発動！
地帝の番兵を破壊する！」「では私は、地帝の番兵の効果を発動しましょう。このカードが破壊される時、代わりに自分フィールド上のセットカードを１枚破壊しますよ。」

地砕き

通常魔法

相手フィールド上の守備力の高いモンスター１体を破壊する。

地帝の番兵

レベル４　地属性　岩石族

ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ２０００

このカードが破壊される時、代わりに自分フィールド上のセットカード１枚を破壊する。

地砕きの亀裂が、地帝の番兵に向かうが、軌道が反れて右のセットカードを破壊した。

「くっ、上手く逃げられましたか…。」

「そして破壊された罠カード、皇帝の財宝の効果が発動します。
私はデッキからカード１枚ドローしますよ。
更に手札の帝１体を相手に見せる事で、更にドロー出来ます。
私は　氷帝メビウス　を龍牙先生に見せ、更にドローしますよ。」

皇帝の財宝

通常罠

このカードが破壊された時、デッキからカード1枚ドローする。
更に手札の帝と名の付くモンスター1枚を相手に見せる事で、
もう1枚ドロー出来る。

「まだです、私の魔法・罠カードが破壊された事で、手札から
氷帝の守護者を特殊召喚しますよ。」

今度はメビウスの鎧と同じ色合いのローブを纏った魔導士が現れた。

氷帝の守護者

ＡＴＫ１８００

氷帝の守護者

レベル４　水属性　水族
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１６００

自分フィールド上の魔法・罠カードが破壊された時、手札から特殊召喚出来る。

「…ならば、私はバルーン・リザードを召喚して、魔法カード超進化薬を発動！
バルーン・リザードをリリースして、究極恐竜を特殊召喚！」

バルーン・リザードが進化して、屈強な体の恐竜に成長した。

究極恐竜
ＡＴＫ３０００

「ほお、攻撃力３０００ですか…。
中々厄介ですね。」

口ではそう言っているが、
建宮寮長は殆ど慌てた様子は無い。

「バトル！究極恐竜は、相手フィールド上のモンスターに総攻撃が可能！　行け、アブソリュート・バイト！！」

「ならば罠カード　皇帝の刃を発動です。
攻撃モンスター１体を破壊しますよ。」

「何ですと！？」

究極恐竜は突然振り下ろされた剣に両断された。

「更に私はデッキから帝1体を手札に加えます。　私は剣帝の調律師を手札に加えましょう。」

皇帝の刃

通常罠

相手モンスターが攻撃した時、そのモンスター1体を破壊して、自分のデッキから帝と名の付くモンスター1体を手札に加える。

「…私はバトルフェイズして、メインフェイズに入る。

私は俊足のギラザウルスを特殊召喚！

この効果で特殊召喚した場合、相手は墓地のモンスター1体を特殊召喚出来るのですが、

建宮先生の墓地にはモンスターが存在しないので関係ないですね。」

「ええ、その通りですね。」

「私はカードを1枚伏せてターンエンド…。」

まだ開始2ターンしか経ってないが、
本当に凄いな、建宮寮長は…。
デュエルの流れを完全に握っている。

「凄いな、あれだけの事をしておいて、手札が殆ど減って無いぜ。」

「ああ、それに相手の主力モンスターを潰して、
自分のリリース要因を確保出来たな。」「あと皇帝の財宝で、
メビウス　を見せた事で龍牙先生の伏せカードに抑制をかけたしね。」

「建宮寮長は相手の行動に対応したモンスターを特殊召喚してリリース要因を確保し、
帝モンスターや魔法・罠で、
相手の主力カードを叩くのが基本戦術だ。」

「だが、龍牙にはヴォルカザウルスって言う反則効果を持つモンスター・エクシーズがある。
まだ楽観視出来ないな…。」

「どんな効果を持つモンスターが来ても、建宮寮長なら大丈夫だ。」

「三沢、やけに建宮先生を信じているみたいだけど、どうして？」

宝山がそう尋ねたが、何故って、それは…。

「俺は、前に建宮寮長とデュエルしたんだが…。　俺は何も出来ないまま負けたんだ…。」

「何だって！三沢が！？」

「俺も三沢の妖怪モンスターには苦戦したのに…。」

「三沢はオベリスク・ブルー生徒にも匹敵する筈だ…。
君が完封されるなんて…。」

「だから天地がひっくり返っても、建宮寮長が負ける事は無い。
安心して見よう、みんな。」

「私のターン、ドローです。」

建宮　ＬＰ４０００

手札　５枚

モンスターゾーン

地帝の番兵

氷帝の守護者

魔法・罠ゾーン　無し

龍牙　ＬＰ４０００

手札　１枚

モンスターゾーン

俊足のギラザウルス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「私は魔法カード、クロス・ソウルを…、おや？」

「フフフ、どうしました建宮先生？」

「アイツ、またかよ！」

「また？どう言う事だ十代？」

「奴は対戦相手の魔法を使えなくする細工をしているみたいなんだよ…。」

デュエルに細工を？

信じられない行為だな…。

あっ、建宮寮長が眼鏡を上げ直した…。

細工の事に気がついたのか？

「…まぁいいでしょう。　私は　氷帝の守護者をリリースして、地帝グランマーグをアドバンス召喚です！」

氷帝の守護者が光になり、茶色の鎧を纏った巨大な皇帝が現れた。

地帝グランマーグ

ＡＴＫ２４００

「グランマーグの効果発動です。

フィールド上のセットカード1枚を破壊します。
龍牙先生のセットカード1枚を破壊します！
グランド・スタンプ！」

「では罠カード、和睦の使者をチェーン発動！
これで私のフィールドのモンスターは破壊されず、ダメージも発生しない！」　地帝グランマーグ

レベル6　地属性　岩石族

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１０００

このカードがアドバンス召喚に成功した時、
フィールド上のセットカード1枚を破壊する。

和睦の使者

通常罠

このターン、自分フィールド上のモンスターは戦闘では破壊されず、自分は戦闘ダメージも受けない。

「成る程、ではカードを1枚伏せてターンエンドですね。」

「私のターン、ドロー！…フッ。」

建宮　ＬＰ４０００
手札　１枚
モンスターゾーン
地帝の番兵
地帝グランマーグ
魔法・罠カード
伏せカード×１

龍牙　ＬＰ４０００
手札　２枚
モンスターゾーン
俊足のギラザウルス

魔法・罠ゾーン　無し

何だ、龍牙先生はキーカードを引いたのか？

「私はジュラック・ガリムを召喚して、レベル３　俊足のギラザウルスに、　レベル２　ジュラック・ガリムをチューニング！
古の狩人よ、立ち塞がる障壁を粉砕せよ！！
シンクロ召喚！　駆け抜けろ、ジュラック・ヴェルヒプト！
そして、ジュラック・ヴェルヒプトの攻守はシンクロ素材の攻撃力の合計数値となる！」

ジュラック・ヴェルヒプト

ＡＴＫ？→２６００　ＤＥＦ？→２６００

「更に簡易融合発動！
ＬＰを１０００払い、エクストラデッキから　プラグティカルを特殊召喚！」

プラグティカル

ＡＴＫ１９００

「レベル5が2体…。
エクシーズ召喚ですか。」

「ご名答ですよ、建宮先生！私はレベル5の　ジュラック・ヴェルヒプトと　プラグティカルをオーバー・レイ！！
2体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！
エクシーズ召喚！！
紅蓮のマグマより出でよ！
Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス！！」

ヴェルヒプトとプラグティカルが渦に飲まれると、
そこから巨大なマグマの塊が出て来て、獰猛な恐竜に変形した。

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス
オーバー・レイ・ユニット
０↓２
ＡＴＫ２５００

「来やがったな、龍牙の反則モンスターが！」

塔也が先程から毒づいているが、
どんな効果が…？

「ヴォルカザウルスの効果発動！
オーバー・レイ・ユニットを１つ使用して、
相手モンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！マグマックス！！」

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス
オーバー・レイ・ユニット
２↓１

何て効果だ…。
塔也が反則と言っていた事が分かった。

さっきの龍牙先生の説明だと、何も制約も無い事になる。

だとしたら、効果でモンスターを一掃してダイレクトアタックを与えたら終わりじゃないか！

「ならば罠発動！　プラウド・ソウル！！
このターン、私の帝と名の付くモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されません！」

「何ですと！」

グランマーグは、ヴォルカザウルスの放った業火を受けたが、
巨大な腕でそれを払った。

プラウド・ソウル

通常罠

自分フィールド上の帝と名の付くモンスターは、
このターン、戦闘及びカード効果によっては破壊されない。「
ですが戦闘ダメージは受け貰いますよ！
ヴォルカザウルスで、地帝グランマーグを攻撃！　ボルカノン！
！」

「むっ…。」

建宮　ＬＰ４０００→３９００

「私はこれでターンエンドです…。」

「私のターンです、ドロー。」

建宮　ＬＰ３９００

手札　２枚

モンスターゾーン

地帝の番兵

地帝グランマーグ

魔法・罠ゾーン　無し

龍牙　ＬＰ４０００

手札　０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス（オーバー・レイ・ユニット×１）

魔法・罠ゾーン　無し

「私は剣帝の調律師を召喚です。」

タクトのような剣を持つ剣士が現れた。

剣帝の調律師

ＡＴＫ１２００

「私はレベル４　地帝の番兵に、レベル２の　剣帝の調律師をチューニング！

誇り高き魂よ、邪悪を断ち切る刃となれ！

シンクロ召喚！　切り払え、　剣帝カリバー！！」

剣帝の調律師が剣を奮って、２つの輪を作り、地帝の番兵が輪に入ると、巨大な双剣を携えた皇帝が降臨した。

剣帝カリバー

ＡＴＫ２４００

「おぉ、凄いカッコいいモンスターだぜ！」

「剣帝カリバー？　そんな帝っていたか？」

十代と塔也はそれぞれ驚嘆していた。

「言っただろ、建宮寮長の使うカードは俺が殆ど知らないカードだと。ちなみに建宮寮長は、剣帝カリバー以外の出回って無い帝も持っているぞ。」

「「「へぇ～。」」」

この状況で剣帝カリバーが来た以上、建宮寮長の勝ちだな。

「では、剣帝の調律師の効果発動です。シンクロ素材で墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を半分にする。そして、剣帝カリバーは、1ターンに1度、帝と名の付くモンスターが、相手モンスターを戦闘破壊した時、もう1度攻撃が出来ます。」　Ｎｏ６１　ヴォルカザウルス　ＡＴＫ２５００→１２５０

剣帝の調律師

レベル２　地属性　戦士族／チューナー

ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ１０００

このカードがシンクロ素材になった時、相手モンスター１体の攻撃力を半分にする。

自分フィールド上にレベル４モンスターがいる時、手札から特殊召喚出来る。

剣帝カリバー

レベル６　地属性　戦士族／シンクロ

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１０００

剣帝の調律師＋チューナー以外のモンスター１体以上

このカードが存在する時、帝と名の付くモンスターが、相手モンスターを戦闘破壊した場合、もう１度だけ攻撃出来る。この効果は１ターンに１度だけ発動出来る。

「で、では私は…。」

「…はい、龍牙先生の負けです。」

建宮寮長が低い声で言い放った。

「バトル、地帝グランマーグで、ヴォルカザウルスを攻撃。
バスター・ロック！」

グランマーグの拳が、ヴォルカザウルスを捉えて、地に伏せさせた。

「うっ！」

龍牙　ＬＰ４０００→２８５０

「そして剣帝カリバーの効果により、地帝グランマーグはもう１度攻撃出来ます。
今度はダイレクトアタックです！
バスター・ツイン・ロック！！」

グランマーグは、今度は龍牙先生に拳を見舞った。

「ぐはあっ！」

龍牙　ＬＰ２８５０→１４５０

「では終わりです…。
剣帝カリバーでダイレクトアタック！
セイント・ルーカス！！」

剣帝カリバーは、双剣を龍牙先生に振り下ろした。

「ぐわあぁぁぁっ！！」

龍牙　ＬＰ１４５０→０

剣帝カリバーのダイレクトアタックの衝撃で、龍牙先生は吹っ飛んで気絶してしまった。

「凄いな、１ターンの内にＬＰを削りきったぜ。」

「しかも、あのヴォルカザウルスを破壊した上でな。」

「それに建宮先生、ＬＰが１００しか減って無いよ。」

３人共、それぞれ感想を漏らす。
建宮寮長が恐ろしいくらいに強い、と再認識出来たな。

…ん？建宮寮長が龍牙先生のヴォルカザウルスのカードを持っているぞ。
しばらく見つめてから、龍牙先生のエクストラデッキに戻したが、あれは何だったんだ？

「う、うう…、私は一体何を？」

「龍牙先生、約束ですよ。
アカデミアから去って頂きます。
…ああ、あと生徒から剥奪したカードを返却して下さいね。」

「はい、大変申し訳ありせんでしたっ！
カード剥奪の件は、私が鮫島校長に自白します。
勿論、生徒たちから奪ったカードも返しますっ！」

「フン、１から出直して来るノーネ！
シニョール龍牙！！」

「本当に済みませんでしたっ！建宮先生、クロノス教諭！！」

「宜しい、また来年気持ちを入れ替えてからアカデミアにいらして下さいね龍牙先生。」

何だ、龍牙先生随分と潔く謝罪したな。
まぁ、これで食い下がられたら面倒なのだが…。
おや、十代たちが首を捻っているな。

「なぁ、アイツってあんなに潔い奴だったか？」

「だったら、俺が勝った時に謝っているだろ。」

「何で、彼は急に改心したんだろ？」

「いいじゃないか３人共、龍牙先生が謝罪しているんだ。
あの様子なら、嘘ではないだろう。それよりも早く翔たちの所に行こう。」

「ああ、そうだな！」

「まぁ嘘ならまた俺たちで懲らしめてやろうぜ！」

「そうだね、でもあの態度なら僕は大丈夫だと思うけどね。」

こうして、龍牙先生の起こした騒動は幕を閉じた。

三沢↓ベネットｓｉｄｅ

オレは今、今回の依頼人の元に向かっている。　今回のミッションの報酬を受け取る為だ。

「フォリナ、ここにいたか。」

「あれ、ベネット君？」

「あなたがフォリナに用事なんて珍しいわね。」

「何、フォリナに今回のミッションの報酬を受け取りにな。」

「「ミッション？」」

2人共、首を傾げているが関係ないな。

「今回はアリガトウゴザイマース、ベネット君！」

「フン、オレは　ミッションを遂行したまでだ。」「フォリナ、あなたベネット君に一体何を？」

「ワタシはアスカから、リュウガティーチャーのバッドな噂を聞いた時から、トウヤたちにも及ぶと思いマーシテ、この事を誰かに相談しようと思いマーシタノ…。」

「でも何でベネット君なの？」

「それはワタシの感デース！」

「か、感って…。」

「フォリナ、あなたね…。」

オレも、いきなり部屋に飛び込んだ時には驚いたがな。

「という事は建宮先生に写真を送ったのって、ベネット君だったの！？
でも、どうやって？」

「それは極秘事項だ、ショウ。
それよりもフォリナ、報酬だが…。」

「分かってマースヨ、コレデスヨネ？」
オレはフォリナから報酬を受け取った。

「それって、ダイハードのＤＶＤ集だよね？」

「ああ、オレは訓練の時に、たまにこういった物を参考資料として見ている。」

「へぇ、ベネット君ってアクション映画が好きなのね。」

「好きと言う訳では無いが、訓練に応用出来るからな。」

「フォリナさん、僕もＤＶＤ借りてもいいかな？」

「オフコース！その時はみんなでウォッチングシマショウネ！」

「ふふ、それは楽しみね。」

ではコレは、今日早速見る事としよう。

フッ、ミッションコンプリートだ…。

裁きの刃　剣帝カリバー（後書き）

オレは水晶の反応を追って森の中を駆け抜けると、そこには1枚のカードを見つめているマンジョウメの姿があった。

「それが精霊のカードか、マンジョウメ…。」

「貴様はベネットか…。
俺に何の用だ？」

「知れた事、オマエの精霊のカードを貰い受けるぞ！マンジョウメ！！」

オレは精霊のカードを賭けて、デュエルをする事になる。

次回、「大罪の炎　ヴォルカニック・ルシファー」

次回は更に加熱する。

大罪の炎　ヴォルカニック・ルシファー（前書き）

大変お待たせしました！
第１０話です。

今回はベネットの切り札が少し出てきます。

大罪の炎　ヴォルカニック・ルシファー

ベネットｓｉｄｅ

オレはこの前、予想外のミッションに挑んだ。

リュウガと言う教育実習生の悪事の証拠を取り、アカデミアの教師に知らせると言うミッションだ。

依頼人は、突然オレの部屋に飛び込んだフォリナと言うアカデミアの女子生徒だ。

何を思ってオレに頼んだかは知らないが、
オレはフォリナのミッションを承諾した。

オレ自身、そんな非道な奴を野放しにはしたく無かったからな。

ミッションに挑んだ数日間、オレは奴を張り込み、カードを剥奪する所を写真に収め、保険としてあと数人のデュエルの際にも撮った。

そして、それらをタテミヤ寮長の所に送ってミッションコンプリートだ。そしてあれから数日過ぎ、今フォリナの所にいる。
あのミッション以来、オレは時々フォリナにＤＶＤを借りている。

「ハローッ、ベネット君、この前のＤＶＤはドウデシタ？」

「…まあまあだったな、鍛錬に使える場面がいくつかあったな…。」

「ソレは良かったデース。」

「また良さそうなＤＶＤを借りたいのだが…、あるか？」

「ソーリー…。良さそうな物は貸し出し中デスネ。」

むぅ、まあ仕方無いか…。

「分かった、ではまた今度頼ん…。」

「ウェイト！ベネット君、ちょっとお願いイイデスカ？」

…オレに頼み？　今度は一体どんなミッションだ？

「…何だ。」

「エート、このＤＶＤをショウ君に渡してクダサーイ。
ようやく戻ったのデースガ、
ワタシはちょっと手が離せマセーン…。」

いつも借りている身だ、これ位は無償で受けるか。

「…了解した、ショウに渡せばいいんだな？」

「イエス！頼みマーシタヨ、ベネット君。」

そうしてショウのいるレッド寮に来たのだが、…いないな。

そう言えば、今日は実技授業でジュウダイとマンジョウメの課外デュエルがあったな。

恐らく、そのデュエルの観戦に行ったのだろうか…。

ちなみに、オレのクラスの授業は終わっている。

オレはそこに向かったが、デュエルは既に終了したようだ…。

…ん、水晶が反応している…。

まさか精霊のカードか！？

オレは水晶が反応した方角に従って、森の中を駆け抜けて行くと、1枚のカードを持つマンジョウメの姿があった。

水晶は明らかにあのカードに反応している…。

ならば、今こそ本来のミッションを遂行する！

「…それが精霊のカードか？　マンジョウメ。」

「…！お前はベネットか…。　何の用だ？」

「知れた事、その精霊のカードを貰い受けるぞ！マンジョウメ！！」

「何？お前何故、光と闇の龍が精霊のカードだと知っている！？」

「そんな事はどうでもいい…。
オレは元々精霊のカードを捜索する為にアカデミアにやって来たのだ。」

「フン、コイツを渡す気は毛頭無いわ！」

まあ、素直に渡してくれるとは思って無かったが…。
ならば…。

「オレとデュエルしろ、マンジョウメ。」

「何、デュエルだと？」

「オマエが勝ったら、そのカードには手は出さない…。
だが、オレが勝ったら、そのカードは渡して貰うぞ。」

「…いいだろう、お前に俺の相棒を取られてたまるかっ！」

「以前のオレと思うなよ、マンジョウメ。」

「フン、また叩き潰してくれる！」

「「デュエル！！」」

ベネット　ＬＰ４０００

万丈目　ＬＰ４０００

デュエルディスクのルーレット機能により、先攻はマンジョウメからだ。

「行くぞ、俺のターン、ドロー！　俺は竜の尖兵を召喚！」

バックラーと槍を装備した竜が飛び出した。

竜の尖兵

ＡＴＫ１７００

「竜の尖兵の効果発動！手札のドラゴン族１体を墓地に送る事で、このカードの攻撃力を３００ポイントアップする！　俺はエメラルド・ドラゴンとラビードラゴンを墓地に送り、攻撃力を６００ポイントアップする！」

竜の尖兵

ＡＴＫ１７００→２３００

竜の尖兵

レベル４　地属性　ドラゴン族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１３００

手札のドラゴン族１体を墓地に送る事で、このカードの攻撃力を３００ポイントアップする。

自分フィールド上のこのカードが相手の効果によって墓地に送れ

た時、墓地のドラゴン族通常モンスター1体を特殊召喚出来る。

ラビードラゴン…。

サンダーエンド・ドラゴンを召喚するつもりか…。

「更に魔法カード、ウェーブ・マテリアルを発動！
自分フィールド上のモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力1000ポイントにつき1枚ドローする！
竜の尖兵の攻撃力は2300だ…。
従って、2枚ドローする！」

ウェーブ・マテリアル
通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動する。
そのモンスターの攻撃力1000ポイントにつき、1枚ドローする。

「永続魔法　竜の巣を発動、カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

ほお、先攻でいきなり攻撃力2300のモンスターをフィールド

に出すとはな…。

だが、今回の火力は一味違うぞ…。

「オレのターン、ドロー！」

ベネット　ＬＰ４０００
手札　６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

万丈目　ＬＰ４０００
手札　２枚
モンスターゾーン
竜の尖兵
魔法・罠ゾーン
竜の巣
伏せカード×１

まずはコイツからだ…。

「オレはフィールド魔法、ヴォルカニック・タワーを発動！」

周りの景色が、溶岩地帯に変化して、機械作りのバーナー状の塔がそびえ立つ。

「何だ、このフィールド魔法は？」

「ヴォルカニック・タワーは、相手に効果ダメージを与えた時、このカードに、ファイヤーカウンターを1つ灯す。
そして、ファイヤーカウンター1つにつき、
フィールド上の炎属性の攻撃力を200ポイントアップする。」

「フン、どうやらそいつが今回のお前のデッキのキーカードと言う訳か…。」

ヴォルカニック・タワー
フィールド魔法

自分が相手に効果ダメージを与えた時、

このカードにファイヤーカウンターを１つ乗せる。
フィールド上の炎属性の攻撃力は、
ファイヤーカウンター×２００ポイントアップする。
このカードがフィールド上から離れる場合、
このカードに乗ったファイヤーカウンターの数以下のレベル持つ
ヴォルカニック１体を
自分の手札・デッキ・墓地から、特殊召喚する。「フッ、オレはヴォルカニック・エッジを召喚！」　緑色の怪獣が、マンジョウメを威嚇する。

ヴォルカニック・エッジ
ＡＴＫ１８００

「更に魔法カード、ファイヤー・バレットを発動。
手札の炎属性１体を墓地に送り、
相手に、そのモンスターのレベル×２００ポイントダメージを与える。
オレはレベル４のヴォルカニック・カートリッジを墓地に送り、
マンジョウメに８００ポイントのダメージを与える！ファイヤ！！」

ヴォルカニック・カートリッジが、炎の弾丸となり射出される。

「くっ！」　万丈目　ＬＰ４０００→３２００

「効果ダメージを与えた事で、ヴォルカニック・タワーはファイヤーカウンターを1つ灯す。
そして、炎属性の攻撃力をアップする！」

ヴォルカニック・タワー

ファイヤーカウンター
0↓1

ヴォルカニック・エッジ

ＡＴＫ１８００↓２０００

「まだだ、魔法カード、ファイヤー・バックを発動！
手札のヴォルカニック・バレットを墓地に送り、ヴォルカニック・カートリッジを特殊召喚する！」

ヴォルカニック・エッジを角張らせたような怪獣が、
炎の中から現れる。

ヴォルカニック・カートリッジ

ＡＴＫ１０００↓１２００　ＤＥＦ２０００

ファイヤー・バック

通常魔法

手札の炎族１体を墓地に送り、墓地の炎族１体を特殊召喚する。

「オレはヴォルカニック・バレットの効果で、５００ＬＰを払う事で同名カードを手札に加え、
ヴォルカニック・カートリッジの効果で、自分の墓地のヴォルカニック１体をデッキに戻し、２枚ドローする。」

ベネット　ＬＰ４０００→３５００

ヴォルカニック・カートリッジ

レベル４　炎属性　炎族
ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ２０００

１ターンに１度、自分の墓地からヴォルカニックと名の付くモンスター１体をデッキに戻し、
カードを２枚ドローする。

フッ、来たようだ…。

「オレはヴォルカニック・エッジの効果発動！
１ターンに１度、相手に５００ポイントダメージを与える！
ただし効果を発動したターン、　コイツは攻撃出来ないがな…。」

「ぐっ、これ位！」

万丈目　ＬＰ３２００→２７００

ヴォルカニック・タワー
ファイヤーカウンター
１→２

ヴォルカニック・エッジ
ＡＴＫ２０００→２２００

ヴォルカニック・カートリッジ
ＡＴＫ１２００→１４００

「更にヴォルカニック・ビットを効果ダメージを与えた事で特殊召喚する！」

ヴォルカニック・ビット
ＡＴＫ５００↓９００

さて、準備は整った…。
マスターから預かったコイツの出番だ！

「オレは、レベル４ヴォルカニック・エッジと、レベル１　ヴォルカニック・ビットをチューニング！
欲深き魂よ、今煉獄の意思と交わり、強欲なる悪魔となれ！
シンクロ召喚！　カモン！　ヴォルカニック・マーモン！！」

ヴォルカニック・ビットが輪に変化して、
ヴォルカニック・エッジが入ると、
真紅の翼をした双頭の悪魔が炎から現れる。

ヴォルカニック・マーモン
ＡＴＫ２２００↓２６００

ヴォルカニック・ビット

レベル１　炎属性　炎族／チューナー

ＡＴＫ５００　ＤＥＦ１５００

相手に効果ダメージを与えた時、このカードを手札または墓地から特殊召喚出来る。

「バトル！ヴォルカニック・マーモンで、竜の尖兵を攻撃！ツイン・バーナー！！」「甘いわ！罠発動、ドラゴン・クライ！！

相手がドラゴン族に攻撃をした時、バトルフェイズを終了させる！」

マーモンが炎を放とうとすると、竜の尖兵が威嚇して、マーモンたちを後退させた。

ドラゴン・クライ

通常罠

相手がドラゴン族に攻撃をした時発動し、バトルフェイズを終了させる。

「ならば、カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！」

ベネット　ＬＰ３５００

手札　１枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・マーモン

ヴォルカニック・カートリッジ

魔法・罠ゾーン

ヴォルカニック・タワー

伏せカード×１

万丈目　ＬＰ２７００

手札　３枚

モンスターゾーン

竜の尖兵

魔法・罠ゾーン
竜の巣

「相手がドローした時にヴォルカニック・マーモンの効果発動！」

「…させるか！俺は手札から速攻魔法、ブレイク・アーツ発動！」

「…ほお。」

「ブレイク・アーツの効果により、ヴォルカニック・マーモンの効果は「相手フィールド上のモンスター1体を破壊する」　効果に変更される。」

上手く逃げられたか…。

マーモンには、相手がドローする時に５００ポイントダメージを与え、自身の攻撃力をアップする効果があるのだがな…。

ヴォルカニック・マーモン
レベル５　炎属性　炎族／シンクロ

ＡＴＫ２２００　ＤＥＦ１６００

炎属性チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上

相手がドローする時、相手に５００ポイントダメージを与え、
このカードの攻撃力を２００ポイントアップする。

ブレイク・アーツ

速攻魔法

相手の魔法・罠・モンスター効果を、
「相手フィールド上のモンスター１体を破壊する」
効果に変更する。

「…ならば竜の尖兵を破壊する。」

「竜の尖兵の効果発動！　このカードが相手のカード効果で破壊
された時、
墓地のドラゴン族通常モンスター１体を特殊召喚する！
蘇れ、ラビードラゴン！
更に竜の巣の効果により、
破壊された竜の尖兵より攻撃力の低い　ミンゲイ・ドラゴンを手
札に加える！」

竜の巣

永続魔法

自分フィールド上のドラゴン族が破壊された時、
そのモンスターより攻撃力の低いドラゴン族1体をデッキから手札に加える。

ラビードラゴン

ＡＴＫ２９５０

くっ、ブレイク・アーツで変更された破壊効果はマーモンによる効果だ…。　竜の尖兵の効果を使用する為か！

「更に魔法カード、竜の共鳴発動！
デッキから2体目のラビードラゴンを特殊召喚する！」

ラビードラゴン

ＡＴＫ２９５０

レベル８が２体…。
来るか、アレが。

「俺はレベル８のラビードドラゴン２体をオーバー・レイ！
２体のモンスターでオーバー・レイ・ネットワークを構築！
エクシーズ召喚！　数多の雷より出でよ、サンダーエンド・ドラゴン！！」　渦より複数の雷が発生し、それは青白いドラゴンに形成されていく。

サンダーエンド・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

オーバー・レイ・ユニット
０→２

「サンダーエンド・ドラゴンの効果発動！
オーバー・レイ・ユニットを１つ使用し、サンダーエンド以外のモンスターを全滅させる！
行け！ライトニング・ストリーム！！」

サンダーエンド・ドラゴン

オーバー・レイ・ユニット
2↓1

オーバー・レイ・ユニットを1つ飲み込むと、複数の雷を、オレのモンスターたちに放電しようとする。

…が、想定内だ。

「ならば、　手札を1枚捨て、カウンター罠　ブラスト・バック発動！
自分フィールド上のカードを破壊する効果を無効にし、そのカードを破壊！
更に破壊される筈だったカード1枚につき、５００ポイントのダメージを与える。」

「何！？」

サンダーエンドが放電する前に、
溜まった電流が爆発を発生し、墜落した。

「くっ！サンダーエンドが…。」

万丈目　ＬＰ２７００→１７００

ブラスト・バック

カウンター罠

自分フィールド上のカードが相手のカード効果により破壊される時、手札１枚捨てる事で発動する。
その効果を無効にし、破壊する。　更に相手に、破壊される筈だったカード×５００ポイントダメージを与える。

これでマンジョウメの戦力は大幅にダウンしたな。

「だが、竜の巣の効果の効果により、俺はサンダーエンドより攻撃力の低いドラゴン…。
光と闇の竜を手札に加える！！」

精霊のカード…！
出される前にかたをつけなければ…。

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ。」

「オレのターン、ドロー！」

ベネット　ＬＰ３５００
手札１枚
モンスターゾーン
ヴォルカニック・マーモン
ヴォルカニック・カートリッジ

魔法・罠ゾーン
ヴォルカニック・タワー

万丈目　ＬＰ１７００
手札２枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

「オレはヴォルカニック・バレットの効果を発動！
５００ＬＰを払い、同名カード１枚を手札に。

そして、ヴォルカニック・カートリッジの効果で墓地のバレットをデッキに戻し2枚ドロー！」

ベネット　ＬＰ３５００→３０００

「オレはヴォルカニック・アラームを召喚！」

緑色のボディの目のようなセンサーを持つ浮遊メカが出撃する。

ヴォルカニック・アラーム

ＡＴＫ１５００→１９００

「オレはレベル4ヴォルカニック・カートリッジに、レベル3ヴォルカニック・アラームをチューニング！
傲慢なる魂よ、煉獄の炎を纏う覇者となれ！
シンクロ召喚、カモン！
ヴォルカニック・ルシファー！！」

アラームが3つの輪となり、
カートリッジが入ると、
金色の鎧のようなトゲトゲしい体に紅いマントをなびかせ、炎の鎌を構える。

ヴォルカニック・ルシファー
ＡＴＫ２６００↓３０００

「そいつがお前の切り札か、ベネット。」

コイツより強力な奴がまだ控えてあるのだがな。

「いや違うな、だがオマエを倒すには十分だ。」

「フン、言ってくれる！」

「ヴォルカニック・ルシファーの効果発動！
１ターンに１度、相手フィールド上のカード１枚を破壊して、相手に５００ポイントダメージを与える！」

「ちっ、ならば罠発動、ドラゴン・プレッシャー！
墓地のドラゴン族１体を除外し、その攻撃力以下の相手モンスターを全て破壊する！
俺はサンダーエンド・ドラゴンを除外！」

サンダーエンドの重圧にルシファーたちが地に伏せた。
…だが、まだだ。

ドラゴン・プレッシャー

通常罠

自分の墓地からドラゴン族1体を除外して発動する。
除外したドラゴン族より攻撃力以下の相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「やるな…、だがダメージは受けて貰う。そして、ヴォルカニック・ルシファーの効果発動!」

「何っ!」

万丈目　ＬＰ１７００→１２００

「ヴォルカニック・ルシファーは、１ターンに１度、　５００ＬＰを払う事で、戦闘及び効果による破壊を無効にさせる!」　ベネット　ＬＰ３０００→２５００

ヴォルカニック・ルシファー

レベル７　炎属性　炎族／シンクロ

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２４００

炎属性チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上

１ターンに１度、相手フィールド上のカード１枚を破壊し、相手に５００ポイントダメージを与える。
このカードがフィールド上で戦闘及び効果で破壊される時、５００ポイントＬＰを払う事で、破壊を無効に出来る。
「カードを１枚伏せてターンエンドだ。」

「くっ俺のターン、ドロー！」　ベネット　ＬＰ２５００

手札０枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ルシファー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

万丈目　ＬＰ１２００

手札３枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「俺はミンゲイ・ドラゴンを守備表示で召喚！

」

ミンゲイ・ドラゴン

ＤＥＦ２００

「そして、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「オレのターン、ドロー！」

ベネット　ＬＰ２５００

手札1枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ルシファー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

万丈目　ＬＰ１２００

手札1枚

モンスターゾーン

ミンゲイ・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×1

さて、ルシファーでモンスターを破壊するべきか…。
それとも魔法・罠か…。

…決めたぞ、ここは！

「ヴォルカニック・ルシファーの効果発動！
マンジョウメの魔法・罠カード1枚を破壊する！」

「ならば罠発動、和睦の使者！
このターン、ミンゲイ・ドラゴンは戦闘では破壊されない！」

くっ、選択を誤ったか！

「だがダメージは受けて貰う！」

「ぐうぅっ！」

万丈目　ＬＰ１２００→７００

戦闘破壊出来ない以上、バトルは無意味…。
仕方無いか…。

「ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！」

ベネット　ＬＰ２５００

手札１枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ルシファー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

万丈目　ＬＰ７００

手札２枚

モンスターゾーン

ミンゲイ・ドラゴン

魔法・罠ゾーン　無し

「俺は魔法カード、ソウル・ブースト発動！
自分の墓地からモンスター１体を除外し、
除外したモンスターがレベル４以下なら１枚、　それ以上なら２枚ドローする！
更に同レベルモンスターを除外する事で１枚ドローする！
俺は墓地の２体のラビードラゴンを除外し、３枚ドロー！！」

ソウル・ブースト

通常魔法

自分の墓地からモンスター１体除外し、
レベル４以下なら１枚、
レベル４以上なら２枚ドローする。

更に同レベルモンスター1体を除外する事で1枚ドローする。

ここに来て、手札を大量に補充して来たか…。

「そして、ミンゲイ・ドラゴンはドラゴン族をアドバンス召喚する時、
2体分のリリースとして扱う。
ミンゲイ・ドラゴンをリリースし、
光と闇の狭間より出でよ！
光と闇の竜！！」

ミンゲイ・ドラゴンが光となると、
空から光と闇の加護を受けた竜が降臨する。

光と闇の竜
ＡＴＫ２８００

来たか、精霊のカード！
だが、資料通りなら今召喚されても問題無いな。

「俺は魔法カード、ライト・イザレクトを発動！」

「何！？」

バカな！？光と闇の竜は、　敵味方関係無く、発動したカード効果を無効にする効果がある筈だ！

「無効にされると知って発動するとは、動揺でもしたか？」

「ほう、光と闇の効果を知っていたか…。
確かにお前の言う通りの効果だ…。
だがライト・イザレクトには、発動時に俺はそのカードに対してカード効果を発動出来ない効果がある。」

なる程な、チェーン処理が出来ない効果なら　光と闇の影響を受けず発動出来る訳か！

「俺からはチェーン発動出来ないが、お前はあるか？」

「…無いな。」

「ならばライト・イザレクトの効果発動だ！
自分フィールド上の光属性１体を選択し、
選択したモンスターの攻撃力分、
自分のＬＰを回復するか、相手モンスター１体の攻撃力をダウンする！
俺は攻撃力をダウンする効果を選択する！」

ライト・イザレクト
通常魔法
自分は、このカードの発動時にカード効果を発動出来ない。
自分フィールド上の光属性1体を選択し、以下の効果の内1つを発動する。
●選択したモンスターの攻撃力分、自分のＬＰを回復する。
●選択したモンスターの攻撃力分、
相手モンスター1体の攻撃力をダウンさせる。

光と闇の竜から閃光が放たれ、
ルシファーは閃光の影響で衰弱していく。

ヴォルカニック・ルシファー
ＡＴＫ３０００→２００

オレの伏せカードは奴の攻撃を防ぐカウンター罠では無い…。
…だが！

「バトル！光と闇の竜で、ヴォルカニック・ルシファーを攻撃！」

「速攻魔法、サイクロン発動！
ヴォルカニック・タワーを破壊する！

だが、光と闇の効果で無効になる。」

光と闇の竜

ＡＴＫ２８００→２３００　ＤＥＦ２４００→１９００

これで、このターンは凌げる！

「甘いわ！　手札から速攻魔法　突進をチェーン発動！
光と闇の効果は同一チェーン上では再び発動出来ない！
よって、突進の効果で　光と闇の攻撃力を８００ポイントアップする！」

突進の効果の影響で、光と闇の力が増幅する。

光と闇の竜

ＡＴＫ２３００→３１００

くっ、これでは…。

「ルシファーに光の洗礼を浴びせろ！光と闇！！
シャイニング・ブレス！！」

光と闇の竜の閃光のブレスが、
ルシファーを消滅させていく。

「うおぉぉぉっ！！」

ベネット　ＬＰ２５００→０

「ば、バカな！勝機は俺の方に向いていたのに…。」

「お前は何か、自分に結び付きのあるカードはあるか？」

何を言っているんだ、マンジョウメは？

「マーモンもルシファーも、
マスターから預かったカードだ。
コイツらは本気の戦いの時に使うと決めたが、実際使用したのは、
今回が始めてだ。
それに、カードに思いを籠めても、勝利には繋がらない。」

「それは違うな、カードに思いを乗せるからこそ、デッキはそれ
に答え、　やがては勝利に繋がる。
今のデュエルがいい例だ。」

カードを信頼して無いから負けたと言うのか…。

「最もこの言葉は、奴の受け売りだがな…。」

「約束だ…、そのカードには手を出さない。
だが次は、精霊のカードなど関係無くデュエルを挑み、勝つ！
…オレの思いを乗せたデッキでな。」

「…フン、その時も返り討ちにしてくれる。」

オレは決めたぞ。

マスターから預かったカードたちと、
オレの思いを乗せたカードたちで新たなデッキに作ると！

ミッションは、その時に遂行しよう。

今はミッションを遂行出来る程、オレと、オレのデッキは強くないからな。

「ところで、お前のバックから覗いているそいつは何だ？」

「ん？」

…そうだ、オレはコイツをショウに届けなければならかった…。

「マンジョウメ、またな。」

「…フン。」

オレはショウに会う為、再びレッド寮に向かった。

大罪の炎　ヴォルカニック・ルシファー（後書き）

俺は、十代に明日香君のアドレス　を教えて貰う為…、
…もとい、万丈目に勝利した十代の実力を知る為にデュエルを申し込もうとするが…。

「おい、そこにいる奴出て来いよ…。」

「雲雀　塔也、何故分かった！」

俺たちの後を付けた　増川　と塔也がデュエルするになった。

「コイツ、強いな…。」

「ハーハッハ、思い知ったか雲雀　塔也！」

次回、「フォリナのアドレスを死守せよ！」

次回も俺の計算が冴え渡るぞ！

フォリナのアドレスを死守せよ！（前書き）

お待たせしました。

第１１話です。

今回は漫画版の３話がベースです。

フォリナのアドレスを死守せよ！

三沢ｓｉｄｅ

俺は悩んでいた。

塔也に対して有効なカードがなかなか思い浮かばないからだ。

塔也の扱う　雲魔物たちの弱点は、攻撃力が低い物が多い事と、
大半が守備表示にされると破壊される事なのだが…。

俺のデッキに合いそうなカードがなかなか見つから無いな…。

前回は、効果破壊を主軸で構築したが…、
結果は負けだ…。

一体何が足りないと言うんだ？

…止めよう、思考を煮詰め過ぎてもロクな考えが浮かばないな。

今は十代の実力を改めて知る為のデッキ構築に専念しようか。

幸い、コッチはもう少しで完成出来る。　俺は十代のデュエルの
資料の目に通しながら、足りないカードについて模索する。

塔也もだが、十代はここぞと言う時に必要なカードを引き当てている。
と言う事は、やはり手札断殺が妥当か？
前回の塔也のデュエルでも、
いい流れに貢献したカードだしな。

ふぅ、資料を見ながら、俺は思わずこう呟いた。

「何で、こんな凄い腕を持つ奴らが、
オシリス・レッドなんだ？」

あいつらには驚かされているばかりだな。
2人して入学試験に、クロノス先生に勝ったり、
多くのブルー生徒に勝ったり…。

「あら…。」

「この前のマンジョウメ君とジュウダイ君のデュエルの研究データカ、ミサワ君？」

ん？この声はまさか…。

振り返ると、そこには明日香君とフォリナ君がいた。

「や、やあ！明日香君、フォリナ君。」

「こんにちは、三沢君。」

「ハ～イ！頑張り屋さんデスネ、ミサワ君。」

か、感激だ…。　この2人に会えるなんて…。

「それにしても、万丈目君が負けたって知った時には、
アカデミアのみんなはビックリしたけど…。
三沢君はどう思ったかしら？」

最近この2人は、十代たちと会う事が多い。
俺も十代たちとは友達だが、
十代たちが、明日香君たちと会っている頃、俺は　建宮寮長の補習授業の最中だったからな…。
なかなか会えなかったものだ…。

「三沢君、聞いてる？」

「ハッ！？ああ済まないな。
まあ、俺は身近で十代の実力を見ているからな。
十分あり得る話さ。」

「ソウデスネ、ジュウダイ君はトウヤにも勝ってイマスシネ。」

「まあ、そう言う事さ。
ただ、万丈目の連勝を止めたのが、
俺じゃ無かったのが心残りだけどね。」

「ホワイ、何故デスカ？」

「俺は、ジュニアチャンピオン時代の万丈目を一目見てね、
その時に万丈目の初黒星は俺が付ける、と意気込んだものさ。」

「ソウダッタンデースカ…。」

「まあ、万丈目の初黒星を十代が付けた以上、
十代に勝つ事が新たな目標かな。」

「へぇ、なら三沢君は十代のデッキを研究した結果、どう出たの
？」

「う～んそうだな、十代のデッキの大半の魔法・罠は、
ＨＥＲＯ関連の物が多いが、
状況に対応して使える物が多いし、
モンスターはハネクリボーを除いてＥ・ＨＥＲＯが殆どだが、攻
守のバランスが良く、効果も優秀だ。
カテゴリーで言うなら、
オールラウンド型かな。」

「確かにそうね。」

「デモ、1番のポイントは…。」

「そうだな、何と言ってもここ1番の時に発揮するあの引き運だな。」

「そうね、どんなに追い詰めても、
そのドローで流れを変える。」

「何時見ても驚かされマースネ。」

「実際羨ましいよ、ああ言うのが、才能なんだろうな…。」

本当に羨ましい事だ。
俺だって、たまに運に見放される事があるからな…。

「じゃあ三沢君の結論は、
十代が天才と言う事ね。」

「ハハ、そうだな。
十代と違って俺は凡人だからな、日々努力するしかないよ。」

その時、何処からか着信音が聞こえた。

「…あら、噂すれば十代から電話ね。」

な、何!?　十代の奴、明日香君のアドレスを…！

「もしもし十代？
…何？またバトルシティのＤＶＤを貸して欲しいですって？
あなたこの前も借りてたじゃない…。」

「いや～どうしてもまた見たくなっちまったんだ。　頼むよ、明日香。」

「ハァ～…、しょうがないわね。
分かったわ、貸し出した人に頼んでみるから、少し待ってて。」

「おぉ！頼むぜ、明日香!!」

…ピッ！

明日香君は携帯を切った。

「ごめんなさい、少し用事が出来ちゃって…。

じゃあまたね三沢君、貴重な意見をありがとうね。」

「シーユー！マタ会いましょう、ミサワ君。」

「あ、ああ。」

2人が出てった後、俺は無性に叫びたくなった。

「何故だあぁぁぁぁっ！！」

…しばらくして、俺はアカデミアのロビーに向かった。

何故だって？

決まっている、そこにいるであろう十代に会う為だ！

ロビーに着くと、やはり十代はいた。

いつものメンバーの、翔、塔也、宝山と一緒に談笑していた。

「やあ、みんな！！悪いが十代、ちょっと君に聞きたい事があるんだが…。」

みんなは呆気に取られているが、

お構い無しだ！

「ど、どうしたんだよ三沢、そんな血相変えて…。」

「今、ちょうどみんなで君の話をしていた所だよ。」

「三沢君、確か用事があるって言って無かった？」

「それならさっき済ませた所だ。
それよりも十代！答えてくれないか？
さっき明日香君に電話しなかったか？」

「え？明日香に電話？
…ああ、したけど？」

「何故、君が明日香君の番号を…？」

「アイツ、デュエルの資料とか色々持っていてさ、
前にカードカタログを借りていた時に、
向こうも必要になったけど、
俺と連絡着かなくてさ、
そんで連絡着くようアドレス交換したんだよ。」

う、羨ましい…！

この無神経な性格のおかげで
明日香君の番号を…。

「つーかさぁ、俺たちの間じゃ今更じゃねぇか？」

…何？どう言う事だ。

「そん時、俺たちも居合わせてて、
ついでに、ってアドレス交換したんだ。
俺も明日香からはよく資料借りるし。」

「そうだね、僕はデュエルの相手する時の連絡も兼ねているけどね。」

「あっ！そう言えば三沢君、その時居なかったね…。」

何て事だ…。

この中で、俺だけが明日香君のアドレスを知らなかったとは…。

「あ～あ、それにしても、バトルシティのＤＶＤ見たかったなぁ…。」

「何だ、それなら…。」

「だったらフォリナに聞いてみるか？
アイツも持ってる筈だからさ。」

何！？塔也の奴、フォリナ君のアドレスまで…。

「…ダメだ、繋がらないな。
電源切れてるな。」

「え～、じゃ待つしかないか～。」

「残念ッスね。」

「まあ仕方無いよ、物が物だし。」

「…それなら俺も持っているぞ。
あと、ペガサス島の奴もな。」

４人とも、目を輝かせて俺を見ている。
やはり人気があるからな。
じゃあ、この後みんなで…。
…待てよ、折角だ。

「「「「是非とも、見てみたい！」」」」

「ただし、十代が俺にデュエルに勝ったらな。　そして俺が勝ったら……を教えて貰う！」

「「「「え？何を教えてくれって？」」」」　…うっ、もう1度言うのは恥ずかしいな…。

「だ、だから俺が勝ったら、明日香君のアドレスを教えて貰う！！！」

それを聞くなり、十代と翔は爆笑し、
塔也と宝山は、半ば呆れていた。

～ッ！だからもう1度言うのは嫌だったんだ！

「何だよ三沢、お前明日香のアドレスが知りたかったのかよっ？」

「アハハハ！一体何事かと思ったよ～！」

「…三沢さぁ～、俺たち友達だからさ、そんな事しなくてもお前なら教えるぜ？」

「そうだよ三沢、どうしてわざわざデュエルを？」

「俺にもプライドがある！
タダで教えて貰うなんて事は、気が引けるからな。
…それに、ようやく十代に勝てそうなデッキが完成したんだ。
そのデッキを試してみたくてな。」

「…まあ、アドレスだったら教えるけど、
そのデッキは興味あるぜ！
よし、そのデュエル乗ったぜ！」

「じゃあ場所を移そうか。
教えて貰う内容が内容だからな…。」

「ああいいぜ、じゃあレッド寮近くの林でいいか？」

「まあ、そこなら滅多に人は来ないから都合がいいな…。
ならそこに行こうか。」

かくして俺たち5人はロビーを出た。
よし、このデュエルに勝って、
明日香君のアドレスをゲットだ！！

三沢↓塔也ｓｉｄｅ

…全く、三沢は何か変な意地を張っているみたいだな。
本人以外から人のアドレスを聞く時点で、プライドも何も無いって事に気付かなかったのか？

「思ったんだけど、本人以外に人のアドレスを聞くのってプライドがある人のする事かな～？」

「言ってやるな翔、
三沢はその事は全く頭に無いと思うぞ。」

「まあ、本人はプライドを賭けてデュエルを挑んでいるんだから、目を瞑ってあげようよ。」

まぁ、凄い剣幕で教えてくれ！と言われるよりマシか。

「じゃあ行くぞ！十代！！」

「おう！行くぜ、三沢！！」

…ん？今、あそこの茂みが動いたような…。

「「デュエル！！」」

「待て！」

「な、何だよ塔也！？」

「どうしたんだ？」

「いやな、ただ…そこに隠れてる奴がいてな。」

「え、誰かいるの？」

「君の気のせいじゃないかな？」

「いや、絶対誰かいる！間違いねぇ！！」

いいぜ、あくまで黙りを決めるってんなら…。

「そらっ！」

俺は、直感を信じ、そこいらにあった石を投げてやった。

「痛っ！　くっそー、何故分かった！？　雲雀　塔也！」

石を投げた場所から、
黒の短髪のつり目のブルー生徒が、俺たちの所に飛び出て来た。

「お前は増川か！？」

「よぅ！面白い事をしているなぁ、三沢氏。」

「三沢、コイツを知ってるのか？」

「ああ、増川は…。」

「いや、いい！俺から話そう三沢氏。」

三沢の言葉を遮って、コイツは自己紹介しだした。

「俺の名は　増川（ますかわ）　海堂（かいどう）だ！　見ての通り、オベリスク・ブルーの1年生で、フォリナファンクラブの隊長だ！」

「「「「フォリナファンクラブ？」」」」

何だそれ？フォリナにファンクラブだって！？

「何だ?塔也、君は知らなかったのか?」

「いやいや、当たり前のように言うなよ三沢。
フォリナにファンクラブがあるなんて知らねえし…。」

「フォリナ様の事を呼び捨てか…!
お前はフォリナ様の何なんだ!雲雀　塔也!!」

「…俺とアイツは友達だ。」

「ほう、友達ねぇ～。
ならばお前、フォリナ様のアドレスをいつ知ったんだ!」

「俺とフォリナは小さい頃に友達になって、
アドレス交換したのも、
その頃だったか。」

それを聞くと、三沢と増川は地面にうなだれていた。

…三沢、お前もソイツの同類かよ。

「お、おのれ～!雲雀　塔也　俺とデュエルしろ!!」

「ハァッ？何でだ？」

「俺が勝ったら、フォリナ様のアドレスを教えろ！」

「断る！俺が勝っても、何のメリットも無ぇじゃねぇか！」「勿論メリットはあるぞ！
お前が勝ったら、フォリナファンクラブの会員にしてやろう。」

「いらんわっ！そんなもん！！」

「むぅ…、ならばお前が勝ったらコイツをくれてやるぞ。」

増川はそう言うと、懐から1枚のカードを俺たちに見せる。

「「「「「それはモンスター・エクシーズのカード！？」」」」」

「ああ、そうだ。パックを買った時に出た奴だ。」

「でも、アンティルールはダメだよ！
校則で禁止にされているよ！」

「問題無いぞ、皇氏。　コイツは互いに同意の上でやる事だからな！」

「そう言う問題じゃ無い気が…。」　「…分かったよ。受けてやるよ、そのデュエル。」

「塔也、どうして！？」

「ここでデュエルを断っても、コイツは付き纏ってでもデュエルを挑んできそうだからな。」

「ほう、分かっているじゃないか…、　雲雀　塔也。」

「「「…うわぁ～。」」」

コイツ、マジで付き纏う気だったのかよ…。

「悪いな十代、三沢。まず先に俺がアイツを倒す。」

「ああ、負けんなよ塔也。」

「気を付けろ塔也、増川はああ言う性格だが、仮にもブルー生徒なんだ。

油断禁物だぞ。」

「…ああ、分かってる。とっとと倒して、アイツにはこの場から退いて貰う。」　俺と増川は向かい合って、ディスクを構える。

「では行くぞ！雲雀　塔也！！」

「サッサと終わらすぜ。」

「「デュエル！！」」

塔也　ＬＰ４０００

増川　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で先攻で増川からだ。

「俺が先攻の様だな…。俺のターン、ドロー！

俺はシー・バルカンを攻撃表示で召喚！」

亀に乗った人魚がバルカンを構える。

シー・バルカン
ＡＴＫ１４００

「俺は永続魔法　強者の苦痛を発動！
そして、カードを１枚伏せて、ターンエンドだ。」

「強者の苦痛か…。
随分厄介なカードを使うんだね、彼。」

「ああ、増川は１年生の中でも俺に近い位、成績が優秀な奴なんだ。」

「え～！あんな人が三沢君に近い成績だって！？」

「…聞こえているぞ、丸藤氏。」

マジかよ…、あんな奴が三沢に近い成績があるだと？

「行くぜ、俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ４０００
手札　６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

増川　ＬＰ４０００
手札　３枚
モンスターゾーン
シー・バルカン
魔法・罠ゾーン
強者の苦痛
伏せカード×１

「俺は永続魔法　残留雲を発動し、雲魔物－クライ・レインを召喚だ。

効果で、残留雲と　クライ・レインにフォッグカウンターが乗る！」

雲魔物－クライ・レイン
ＡＴＫ１６００→１２００
フォッグカウンター＝ＦＣ
０→１
残留雲
ＦＣ
０→１

「だが強者の苦痛の効果で攻撃力はダウンだ！」

強者の苦痛
永続魔法
相手モンスターの攻撃力は、
レベル×１００ポイントダウンする。

本当に厄介だよ、ソイツは。

「俺は、カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！…！フハハハ！」

塔也　ＬＰ４０００
手札２枚
モンスターゾーン
雲魔物－クライ・レイン（ＦＣ×１）
魔法・罠ゾーン
残留雲（ＦＣ×１）
伏せカード×２

増川　ＬＰ４０００
手札４枚
モンスターゾーン
シー・バルカン

魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

何だ？なんか凄いカードでも引いたか？

「ハッハハー！これでお前の敗北は確定だ！
俺は永続魔法　ハイレートを発動！」

「ハイレートってどんな効果だ、三沢？」

「ハイレートは、効果でフィールド上のモンスターの攻守をアップまたはダウンする数値が５００以下だった場合、
その数値を倍にするカードだ、十代。」

「う～ん、かなり扱いが難しいカードだね…。」「フフフ、そんな事は無いぞ　皇氏！
俺にとってコイツこそが、
核になり得るカードなんだからな！」

宝山の言う通り、５００以下の攻守増減のカードは微妙な奴ばかりだ。

多く積んでも、事故が起きかねないんだが…。

「さて、早速このカードの力を使用するか…。
強者の苦痛はレベル×１００ポイント攻撃力をダウンさせるカードだ…。
つまり、ハイレートがある限り、
お前のレベル５以下のモンスターの攻撃力をダウンさせる数値は倍になる！」

雲魔物－クライ・レイン
ＡＴＫ１２００→８００

ハイレート

永続魔法

フィールド上のモンスターの攻守のアップまたはダウンする数値が、
５００以下だった場合、
その数値は倍になる。

「更に俺はハリマンボウを召喚！」

ハリマンボウ

ＡＴＫ１５００

ヤベェな…ハリマンボウは墓地に送られたら、　モンスター１体の攻撃力を５００ダウンする効果がある。
しかもハイレートがあるから、１０００もダウンしちまう…。

「シー・バルカンの効果発動！
自分フィールドのレベル３以下のモンスター１体を、
このカードに装備する。
俺はハリマンボウを、シー・バルカンに装備し、更に効果発動だ！
１ターンに１度、装備されたモンスターの攻撃力の半分のダメージを与えるぞ！」

シー・バルカン

レベル３　水属性　海龍族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ７００

１ターンに１度、自分フィールド上のレベル３以下の水属性１体を装備出来る。
（この効果で装備出来るモンスターは１体まで。）
また、メインフェイズに１度、
相手に、装備されたモンスターの攻撃力半分の数値のダメージを与える。
このカードが破壊される時、代わりにこの効果で装備したモンスター１体を破壊する。

シー・バルカンは、ハリマンボウに乗り替えてから、バルカンを乱射した。

「うわっ！」

塔也　ＬＰ４０００→３３５０

「更に攻撃だ！シー・バルカンで、クライ・レインを攻撃するぞ！」

今度はハリマンボウに指示を出して、攻撃させた。

「速攻魔法　蒸留水　を発動だ！
クライ・レインをリリースし、デッキから　羊雲　を特殊召喚！
更に残留雲にフォッグカウンターを追加するぜ。」

雲魔物－羊雲

ＤＥＦ０

残留雲

ＦＣ

1↓2

「ぬぅ、ならばソイツに攻撃だ！」

ハリマンボウの棘が、羊雲に複数突き刺さる。

「羊雲の効果発動。　戦闘で破壊された時、　雲魔物トークン２体を守備表示で特殊召喚、更に残留雲にフォッグカウンターを追加する！」

雲魔物トークン×２

ＤＥＦ０

残留雲

ＦＣ

2↓3

「まぁ、こんな物か…ターンエンドだな。」

「頑張れー、塔也君！」

「フォリナさんの為にも負けちゃダメだよ～！」

そうだな、こんな奴にフォリナのアドレスが渡ったら、
一体何をするか分かったもんじゃない！

「ああ、分かっている翔、宝山。
俺のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ３３５０
手札３枚
モンスターゾーン
雲魔物トークン×２
魔法・罠ゾーン
残留雲（ＦＣ×３）
伏せカード×１

増川　ＬＰ４０００
手札２枚

モンスターゾーン

シー・バルカン

魔法・罠ゾーン

ハリマンボウ

ハイレート

強者の苦痛

伏せカード×１

「俺は　雲魔物－アシッド・クラウドを召喚し、効果でフォッグカウンターを追加する！」

緑色の雲が小さく渦巻く。

雲魔物－アシッド・クラウド

ＡＴＫ５００→０

ＦＣ

０→３

「ふん、強者の苦痛で攻撃力が０になったな。」

「まあ、見てな。まずは速攻魔法　ダイアモンドダスト・ストーム発動！　残留雲のフォッグカウンターを２つ取り除いて、シー・バルカンの攻撃力を８００ポイントダウンし、更に攻撃力が半分になった時、そのモンスターを破壊するぜ！」

残留雲

ＦＣ

３→１

「ハハハ、甘い甘い！
シー・バルカンは破壊される時、代わりに装備されたモンスターを破壊する！更にハリマンボウの効果が発動するが、攻撃力０じゃ意味無いか…。」

ハリマンボウ

レベル３　水属性　魚族
ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１００

墓地に送られた時、相手モンスター１体の攻撃力を５００ポイン

トダウンする。

破壊を無効にされたか！
だったら…。

「アシッド・クラウドの効果発動。
このカードのフォッグカウンターを2つ取り除いて、魔法・罠カード1枚を破壊する！

俺は強者の苦痛を破壊するぜ！」

雲魔物－アシッド・クラウド

レベル4　水属性　天使族

ＡＴＫ５００　ＤＥＦ０

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する場合、このカードを破壊する。
このカードの召喚成功した時、
フィールド上の雲魔物の数だけこのカードにフォッグカウンターを乗せる。　このカードのフォッグカウンターを2つ取り除く事で、
魔法・罠カード1枚を破壊する。

「まあいいだろう…。」

これで俺のフィールドのモンスターの攻撃力は元に戻るぜ。

雲魔物－アシッド・クラウド
ＡＴＫ０↓５００

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

「ならばエンドフェイズに罠カード、ギミック・サイクルを発動だ！
このターンに、俺の魔法・罠ゾーンから墓地に送られたカードを除外して、
その枚数だけドローするぞ。
ハリマンボウ、強者の苦痛を除外して2枚ドローだ！」

ギミック・サイクル
通常罠
エンドフェイズに発動出来る。
自分の魔法・罠ゾーンから墓地に送られたカードを除外して、
その枚数だけドローする。

大量ドローだと！？
このターンでやった事が悉く裏目に出たか…。

「くっ、コイツ、強いな…。」

「ハッハハー、俺のデッキの恐ろしさを存分に味わうがいい！
雲雀　塔也！！」

フォリナのアドレスを死守せよ！（後書き）

塔也は増川の繰り出す戦術によって、
徐々に押されていったんだ。

「行くぞ！俺の切り札に恐れおののけ、雲雀　塔也！！」

「なっ、　攻撃力４０００だと！？」

「諦めるなー！塔也！！」

「…そうだ、フォリナの為にもこのデュエル、負ける訳にゃ、いかねぇんだ！」

次回、「波乱の嵐　雲魔物ー カトリーヌ！」

次回も気合い入れとけよ、塔也！

波乱の嵐　雲魔物ーカトリーヌ！（前書き）

お待たせしました！

第１２話です。

今回は、塔也の切り札の１枚が出て来ます。

翔ｓｉｄｅ

大変だ、塔也君が押されているよ！

このデュエルに負けちゃったら、
増川君にフォリナさんのアドレスが…。

僕が思った感じ、増川君にアドレスが渡ったら、何か嫌な事が起き
そうッス…。

「凄いね、彼。
塔也を相手に互角に戦っているよ。」

「まあ、フォリナ君への異常な思いであまり認識されていないが、
増川は、かなり緻密な戦略を錬るデュエリストだからな…。
実際、俺とデュエルをした時もかなり手ごわい相手だったよ…。」

増川君って、そんなデュエリストだったの！？
とてもそうは見え無いよ…。

「へえ、俺も増川とデュエルしてみたくなったぜ。」

アニキは、いつも通りだね…。

「フフフ、このデュエルの後で、フォリナ様に何て話そうか？
フハハッ！想像するだけで飛び上がりそうだ！！」

…うん、確信したよ。
絶対ロクな事にならないや…。

「な～に勝った気でいやがる！
まだデュエルの途中だろうが！」

「そう、いきり立つな雲雀　塔也。
なら望み通り、このデュエルでお前を叩きのめしてやるぞ！
俺のターン、ドローだ！」

塔也　ＬＰ３３５０

手札１枚

モンスターゾーン

雲魔物－アシッド・クラウド（FC×1）

雲魔物トークン×2

魔法・罠ゾーン

残留雲（FC×2）

伏せカード×2

増川　LP4000

手札4枚

モンスターゾーン

シー・バルカン

魔法・罠ゾーン

ハイレート

「俺はニードル・ギルマンを召喚し、更にシャーク・サッカーを効果で特殊召喚だ。」

赤い三又の槍を持った、青い半魚人と、細長い鮫が飛びだした。

ニードル・ギルマン

ＡＴＫ１３００

シャーク・サッカー

ＡＴＫ２００

「ニードル・ギルマンは、自分フィールド上の魚・海龍・水族の攻撃力を４００ポイントアップするぞ。勿論、ハイレートでその数値は倍になるがな！」

ニードル・ギルマン

ＡＴＫ１３００→２１００

シー・バルカン

ＡＴＫ６００→１４００

シャーク・サッカー
ＡＴＫ２００→１０００

ニードル・ギルマン
レベル３　水属性　海龍族
ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ０
自分フィールド上の魚・海龍・水族の攻撃力を４００ポイントアップする。

シャーク・サッカー
レベル３　水属性　魚族
ＡＴＫ２００　ＤＥＦ１０００
自分フィールド上に魚・海龍・水族を召喚・特殊召喚した時、このカードを手札から特殊召喚出来る。
このカードはシンクロ素材に出来ない。

マ、マズイよ！この３体の攻撃が通ったら、シー・バルカンの効果で塔也君のＬＰが０に…。

「ハッハハー！終わりだな、雲雀　塔也！！
まずはニードル・ギルマンで、アシッド・クラウドを攻撃！！」

「終わりじゃねぇよ！
罠発動、爆弾低気圧！！
自分フィールド上の雲魔物を任意の数選択し、破壊する！
俺は2体の雲魔物トークンを破壊！！」

えっ？自分のモンスターを破壊してどう言うつもりなんだろう？

「ハッハハー！血迷ったか雲雀　塔也！
わざわざ自分のモンスターを破壊するとはな！」

「んな訳あるか！爆弾低気圧の効果はここからだ。
この効果で破壊した雲魔物の数だけ相手フィールド上のカードを破壊する事が出来る！
俺はニードル・ギルマンとシー・バルカンを破壊するぜ！」

爆弾低気圧

通常罠

自分フィールド上の雲魔物を任意の数破壊する。
その後、破壊した雲魔物の数だけ、相手フィールド上のカードを破壊出来る。

凄いや塔也君！これなら、このターンは凌げるよ！

シャーク・サッカー
ＡＴＫ１０００↓２００

「お、おのれ～！ならばメインフェイズ２に移る！
これで逆転したと思ったら大間違いだ、雲雀　塔也！
俺は魔法カード、モンスター・スロットを発動するぞ！」

あっ、あのカードって、条件は少し簡単な奴でドロー出来るカードだったね…。

「自分フィールド上のモンスター１体を選択し、選択した同レベルモンスター１体を墓地から除外する事で１枚ドローするぞ！
更にドローしたカードが、
この効果で選択したモンスターと同じレベルだった場合、特殊召喚出来るのだ！」

モンスター・スロット
通常魔法

自分フィールド上のモンスター１体を選択し、自分の墓地から選

択したモンスターと同じレベルのモンスター1体を除外して、
カードを1枚ドローする。　ドローしたカードがこの効果で選択
したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、　そのモン
スターを特殊召喚出来る。

「同レベルモンスターかぁ…。
彼は都合良く引けるかな?」

「まあ、引けなかったとしても、
引いたカードに何の制約も無いからな…。
魔法か罠で巻き返しを狙ってくるかもな…。」
「へぇ、面白そうなカードだぜ。」

アニキなら普通に使いこなしそうだね。

「シャーク・サッカーを選択し、ニードル・ギルマンを除外!
フハハ!来い、レベル3!ドロー!!
…ぬぅ、命拾いしたな!
カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

どうやらレベル3モンスターは引けなかったみたいだけど…。
ドローした場合、エクシーズ召喚するつもりだったのかな?

「へっ、どうやらコッチに流れが来たみたいだな。　俺のターン、ドロー。」

塔也　ＬＰ３３５０
手札２枚
モンスターゾーン
雲魔物－アシッド・クラウド（ＦＣ×１）
魔法・罠ゾーン
残留雲（ＦＣ×２）
伏せカード×１

増川　ＬＰ４０００
手札１枚
モンスターゾーン
シャーク・サッカー

魔法・罠ゾーン

ハイレート

伏せカード×１

「俺は雲魔物－ミストルティを召喚だ。　そして雲魔物を召喚した事で、残留雲にフォッグカウンターを追加するぜ。」

雲魔物－ミストルティ

ＡＴＫ１８００

残留雲

ＦＣ

２↓３

「バトルだ！雲魔物－アシッド・クラウドでシャーク・サッカーを攻撃！！

そしてミストルティの効果発動だ！

雲魔物が戦闘する時、フォッグカウンター1つにつき、相手モンスターの攻撃力を２００ポイントダウンする。」

シャーク・サッカー
ＡＴＫ２００→０

よし！今度は塔也君が大ダメージを与えられるチャンスだ！

「俺をナメるな！罠発動、海龍神の加護！！
コイツの効果でこのターン、
俺のフィールドのレベル３以下の水属性は戦闘及び効果では破壊されないのだ！」

海龍神の加護
通常罠

自分フィールド上のレベル３以下の水属性は、このターン、戦闘及び効果では破壊されない。

アシッド・クラウドが酸性雨をシャーク・サッカーに降らせるけど、

海龍神の加護によって、耐えきった。

「だが、戦闘ダメージは通るぜ！」

「ぬぅ！」

増川　ＬＰ４０００→３５００

「続けてミストルティで、シャーク・サッカーを攻撃だ。さっきと同じだ、戦闘ダメージは受けて貰うぜ！」

「ぬぐぅっ！」

増川　ＬＰ３５００→１７００

「これでターンエンドだ。」

「よし！塔也が増川に大ダメージを与えたぜ！」

「だが、増川はこのまま終わるような奴じゃない…。」

「そうだね…まだ彼は切り札を出していない筈…。
まだまだ気は抜けないよ。」

増川君の切り札はやっぱりモンスター・エクシーズかな？
さっき、モンスター・スロットでレベル３モンスターを引けなかった時に渋った顔してたし…。

「く、くぅ～！俺は負けん、勝ってフォリナ様のアドレスをゲットするのだ！！」

「お前みたいな奴にフォリナのアドレスを渡してたまるか！
断固阻止してやる！！」

「ハハハ、粋がるな　雲雀　塔也！！
俺のターン、ドローだ！」

塔也　ＬＰ３３５０

手札１枚

モンスターゾーン

雲魔物－アシッド・クラウド
（ＦＣ×１）

雲魔物－ミストルティ

魔法・罠ゾーン

残留雲
（ＦＣ×３）

伏せカード×１

増川　ＬＰ１７００

手札２枚

モンスターゾーン

シャーク・サッカー

魔法・罠ゾーン

ハイレート

「フン、まずはコイツからだな…。
魔法カード、サルガッソーを発動だ！
除外されたレベル４以下の水属性を２体まで手札に戻すぞ。
ニードル・ギルマンとハリマンボウを手札に戻すぞ。」

レベル３が手札に戻った！
仕掛けて来るのかな？

「…ここからが勝負だ！魔法カード、強欲なウツボ発動！！
手札のニードル・ギルマンとハリマンボウをデッキに戻す事で、
カードを３枚ドロー出来るのだ！」

さ、３枚もドロー出来るの！？
流石にマズイよ…。

サルガッソー

通常魔法

自分の除外されたレベル４以下の水属性を２体まで手札に加える。

強欲なウツボ

通常魔法

手札の水属性2体をデッキに戻し、
カードを3枚ドローする。

「フフフ、俺はカードを3枚ドロー！！
…！フハハハ、ハッハハハ！！」

な、何！？一体何のカードをドローしたの！？

「俺はアドレナ・ジェリーを召喚！」

アドレナ・ジェリー・

ＡＴＫ１５００

増川君のフィールドに赤いクラゲが出現した。
アドレナ・ジェリーのレベルって確か3だったような…。
あっ、まさか！

「ハハハ！行くぞ、雲雀　塔也！！
俺はレベル３のシャーク・サッカーと、アドレナ・ジェリーをオーバー・レイ！！」

「エクシーズ召喚か…。　来るのかな、彼の切り札が…。」

「ワクワクするな、どんなモンスター・エクシーズが出るんだ！？」

「…十代、君は相変わらずだな。」

本当だね、三沢君…。

「２体のモンスターでオーバー・レイ・ネットワークを構築！
エクシーズ召喚！！大海の底より猛威を奮え！
Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン！！」

増川君の２体のモンスターが渦に飲まれた瞬間、
渦から青い目玉のモニュメントが浮かび上がり、
それが細長いドラゴンに変形していった。

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００

オーバー・レイ・ユニット＝ＯＲＵ

０↓２

「リバイス・ドラゴンの効果発動！
１ターンに１度、オーバー・レイ・ユニットを１つ使用して、このカードの攻撃力を５００ポイントアップするが、ハイレートの効果でその倍の数値、１０００ポイントアップするのだ！」

リバイス・ドラゴンは、オーバー・レイ・ユニットを１つ食べると、力を蓄えたみたいだ。

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００↓３０００

ＯＲＵ

２↓１

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン

ランク３　水属性　ドラゴン族／エクシーズ

ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ０

レベル３×２体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、このカードの攻撃力を５００ポイントアップする。
このカードにオーバー・レイ・ユニットが存在しない場合、このカードはダイレクトアタック出来ない。

「バトルだ！リバイス・ドラゴンで、ミストルティを攻撃するぞ！」

「ミストルティの効果だ！フォッグカウンターが５つある事で、リバイス・ドラゴンの攻撃力を１０００ポイントダウンするぜ！」

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ３０００↓２０００

「だがこの瞬間、アドレナ・ジェリーの効果発動！
このカードを装着したモンスター・エクシーズが攻撃する時、攻撃力を５００ポイントアップ。
勿論、ハイレートでその数値は倍になるぞ！」

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン
ＡＴＫ２０００↓３０００

「くそっ！ミストルティでダウンした分がチャラになったか！」

アドレナ・ジェリー

レベル３　水属性　水族
ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１２００

このカードをオーバー・レイ・ユニットとして使用しているモンスター・エクシーズが攻撃する時、
攻撃力を５００ポイントアップする。
このカードを装着したモンスター・エクシーズが戦闘で破壊される場合、
このカードを取り除く事で、その戦闘では破壊されない。

「ハハハ、ミストルティを吹き飛ばせ！バイス・ストリーム！！」

リバイス・ドラゴンの放った激流を、ミストルティが抑えようとしたけど、
更に威力の増した激流に、吹き飛ばされちゃった。

「うわあぁぁっ！」　塔也　ＬＰ３３５０→２１５０

「そして、ダメージステップを終了した事で、
リバイス・ドラゴンの攻撃力はダウンした分、戻るぞ！」

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン
ＡＴＫ３０００→４０００

「くっ、攻撃力４０００かよ…。」

「そして、カードを１枚伏せてターンエンドだ！さぁ、サッサと観念するんだな、雲雀　塔也！！」

「誰がするか！俺のターン、ドロー！」

塔也　ＬＰ２１５０

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－アシッド・クラウド（ＦＣ×１）

魔法・罠ゾーン

残留雲（ＦＣ×３）

伏せカード×１

増川　ＬＰ１７００

手札０枚

モンスターゾーン

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン（ＯＲＵ×１）

魔法・罠ゾーン

ハイレート

伏せカード×1

「俺は残留雲の効果発動だ！
1ターンに1度、フィールド上のフォッグカウンターを2つ取り除く事で、
墓地の雲魔物1体を回収する。
俺はアシッド・クラウドと残留雲から1つずつ取り除いて、雲魔物ークライ・レインを墓地から回収する。」

雲魔物ーアシッド・クラウド

FC

1↓0

残留雲

FC

3↓2

「そして、雲魔物ークライ・レインを召喚。
そして効果で…。」

「ソイツは使わせん！

カウンター罠、アウト・コードを発動するぞ！」

「な！？」

「アウト・コードは、俺のフィールド上のモンスター・エクシーズから、　オーバー・レイ・ユニット１つを使用する事で発動出来、相手モンスターの召喚・特殊召喚、またはカード効果を無効にして破壊するのだ！」

Ｎｏ１７　リバイス・ドラゴン

ＯＲＵ

１↓０

アウト・コード

カウンター罠

自分フィールド上のモンスター・エクシーズから、オーバー・レイ・ユニット１つ取り除く事で発動出来る。　相手モンスターの召喚・特殊召喚、または魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する。

フィールドに召喚されたクライ・レインが、
リバイス・ドラゴンのオーバー・レイ・ユニットの光に衝突されて消えちゃった…。

「大方ソイツの効果でリバイス・ドラゴンをセットして、
総攻撃で決めるつもりだっただろうが、残念だったな！」

「くっ！ここまでか…。」

「ハッハハー！もう策が尽きたか？
ならサレンダーをする事だな！
そして、早くフォリナ様のアドレスを教える事だ！」

「お、俺は…！」

そんな！塔也君…。

「諦めるなよ！塔也！！」

「じ、十代！？」　アニキ！？

「まだお前には、カードがあるじゃないか！！
カードが残っているなら諦めたらダメだ！」

翔↓塔也ｓｉｄｅ

…やれやれ、らしく無かったな俺。

そうだな…十代の言う通り、まだカードがあるし、
手段は残っている！

「俺は墓地の雲魔物－アシッド・クラウドをリリースして、雲魔物－テンペスト・ドラゴンを特殊召喚する！
更に残留雲にフォッグカウンターが乗るぜ！」

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

ＡＴＫ２４００

残留雲

ＦＣ

２↓３

「フン、やはり攻撃力の高いモンスターが手札にあったか…。
だが、クライ・レインがいないんじゃ意味が無いな…。」

「意味ならあるぜ。
俺はテンペスト・ドラゴンの効果発動！
手札１枚を墓地に送り、フィールドのモンスター１体にフォッグカウンターを２つ乗せる！
俺はテンペスト・ドラゴンを選択するぜ！」

雲魔物－テンペスト・ドラゴン
ＦＣ
０→２

「更に罠発動！レイン・ダンス！！
フィールド上のフォッグカウンターを全て取り除き、
取り除いたフォッグカウンター１つにつき、
自分のＬＰを５００ポイント回復する！
テンペスト・ドラゴンと残留雲のフォッグカウンターを取り除いてＬＰを２５００ポイント回復するぜ！」

雲魔物－テンペスト・ドラゴン

ＦＣ
２→０
残留雲
ＦＣ
３→０
塔也　ＬＰ２１５０→４６５０

「ＬＰを大幅に回復したよ！
…だけど。」

「ＬＰを回復した所で、リバイス・ドラゴンで数ターンの内に削ってやるぞ！」

「まあ慌てるなよ…。レイン・ダンスの効果で回復したＬＰが１０００ポイントにつき、俺はカードを１枚ドローする！
回復した数値は２５００だ…。
よって、２枚ドローするぜ！」

レイン・ダンス
通常罠
フィールド上のフォッグカウンターを全て取り除いて、自分は、取り除いたフォッグカウンター×５００ポイントＬＰを回復する。　そして、回復した数値１０００ポイントにつき、１枚ドローする。

「ドロー効果か…。だが、悪あがきでしか無い！　たった2枚ドローした所で、この状況を逆転出来る訳がないのだ！」

「そいつはどうかな？」

「ああ、そうだぜ！塔也！！」

「そのドローで流れを逆転出来るかもしれない…。だからデュエルは面白いんだよ。」

「…フッ、そうだな。十代、宝山。」

「そうだよ！そのドローで決めるッス、塔也君！！」

「…ぐぬぬぅ、早くドローしろ！
雲雀　塔也！！」

頼む、来てくれ！フォリナを守る為のカード！！

「…俺はデッキから2枚ドロー！！」

…コイツか、久しぶりに引いたな。
頼むぜ、力を貸してくれよ！

「俺はテンペスト・ドラゴンをリリースして、このカードを手札から特殊召喚する！
大いなる天空の歌を聞け！
雲魔物ーカトリーヌ、降臨！！」

テンペスト・ドラゴンが空に吸い込まれ、

そして上空より、聖女の姿を型どった雲がゆっくりと降下していく。

雲魔物－カトリーヌ
ＡＴＫ２６００
残留雲
ＦＣ
０→１

「あれはニンバスマンに次ぐ、塔也の切り札かい！？」「すっげー！！とてつもなく迫力のあるモンスターだぜ！」

「ああ、まるで見る者全てを圧倒する様だ…。」

「凄いや、塔也君！！」

「だ、だが攻撃力はリバイス・ドラゴンが…。
…そうか！さては効果が…！」

その通りだぜ、増川！

「雲魔物－カトリーヌは、　このカードを特殊召喚する時、自分フィールドの雲魔物を任意の数リリースして、手札から特殊召喚出来る。
そして、この時リリースした雲魔物の数だけ相手フィールド上のカードを破壊する！
歌え、セイント・アリア！」
雲魔物－カトリーヌ

レベル７　水属性　天使族

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ１４００

このカードは戦闘では破壊されず、守備表示で存在する時、このカードを破壊する。
このカードは、自分フィールド上の雲魔物を任意の数リリースして手札から特殊召喚出来る。
この時、リリースした雲魔物の数だけ相手フィールド上のカードを破壊する。

カトリーヌが歌い出すと、
その歌声によって、リバイス・ドラゴンが光の粒となって、空を舞って行く。

「…バ、バカな！こんな事が！！」

「これで終わりだ！雲魔物ー カトリーヌでダイレクトアタック！！
響け、セイグリット・ウィンド！！」

カトリーヌが祈りを捧げると、
清らかな風が増川に吹き荒んだ。

「ぬぐおぉぉぉっ！！」

増川　ＬＰ１７００→０

「よっしゃー！やったぜ、塔也！！」

「凄いや！君にニンバスマン以外にあんな切り札があったなんて…。
」

「全くだ、君のデッキの研究をまた考え直さないとな…。」

「いや～、別に隠してた訳じゃないんだぜ？
いつもは大体、ニンバスマンとかレベル４以下の雲魔物を駆使しているんだが、
切り札は今まで来た試しが殆ど無いからな…。」

「いつもは、切り札以外で勝ってるんだ…。
十分凄いや、塔也君。」

「…ッ！雲雀　塔也！！」

俺たちが話している中、
増川が叫んだ。

「…今回のデュエルは俺の負けだ、コイツをくれてやる！」

俺は増川が放ったカードを受け取った。

「本当にいいのか、増川？」

「ああ、約束は約束だからな。
…だがしかし！次こそは勝って、
フォリナ様のアドレスをゲットして見せるぞ！」

な、何!?コイツ、フォリナのアドレスを諦めちゃいねぇってか!?

「お前、フォリナのアドレスを諦めるんじゃ無かったのか!?」

「何を言うか、雲雀　塔也!
俺は負けたらカードはやるとは言ったが、
フォリナ様のアドレスを諦めるとは一言も言って無いぞ!」

「…まあ確かに、増川自身はそう言ってないが…。」

「相当執念深い性格なんだね、彼…。」

「あれじゃあ、塔也君に勝つまで挑んで来そうだよ…。」

ぐくっ!確かに奴はそう言って無かったな…。　だったら、こっちにも考えがあるぜ!

「いいだろう、何度でも受けてやるよ!!
…ただし、お前が十代に勝てたらな!!」

「えっ？」

「何だと？」

「な、何だよそれ！塔也、どういう事だよ！？」

十代が渋った顔をする。

…まあ、当然か。

「悪いな、十代。

俺1人じゃ、フォリナのアドレスを守りきる自信がねぇんだよ…。

アイツ、あの様子だと所構わずデュエルを挑んで来そうだからさ…。」

「だからってな、塔也…。」

「頼むよ十代、友達だろ？」

十代はしばらく考えてから、了承してくれた。

「…分かったぜ、塔也。

俺がフォリナのアドレスを守ってやるぜ！

…増川！そう言う事だ！！フォリナのアドレスを知りたきゃ、俺のデュエルに勝ってからだ！」

「ぬぐおぉぉっ！お前もフォリナ様を呼び捨てか！
…いいだろう！まずはお前を手早く倒してやるぞ、遊城　十代！
！」

十代がフォリナを呼び捨てにした事で、
上手い事、増川が十代に突っかかって来た。

「おうっ！いつでもかかって来い増川！！」
「いい度胸だな…。
なら、日を改めてお前に挑んでやるぞ！遊城　十代！！
…ではサラバだ！！」

そう言い残して、増川は去っていった。

「…悪いな十代、後で何か奢るよ。」

「いいって、友達なんだからさ。」

「アニキが相手だったら、フォリナさんのアドレスも一安心だね。
」

「…では俺たちのデュエルを始めようか、十代。」

「ああ、そうだな！！」

「彼の様に行き過ぎないでね？三沢。」

「分かっている、俺は増川と違って、分はわきまえているつもりだ。」

「じゃあ、行くぞ！十代！！」

「いつでも来い、三沢！！」

その後のデュエルは十代が勝ったが、
途中に来た明日香に三沢が貸し出す約束をしてしまい、
相当ショックを受けていたな…。

…落ち込むなよ、十代。
後でフォリナに頼んで、貸し出して貰うからさ…。

波乱の嵐　雲魔物ーカトリーヌ！（後書き）

僕と十代と塔也は、三沢と翔に連れられて、ミス・デュエルアカデミアの発表会場にやって来てんだけど…。
そこで一騒動が起こっちゃったんだ。

「そうだ！だったらあなた達2人でタッグデュエルで決着をつけたらどう？」

「フォリナ、悪いけど力を貸して貰うわよ。」

「オフコース！勿論デスヨ！！」

「塔也、俺たち2人で明日香たちの挑戦を受けて立とうぜ！」

「まぁ仕方無ぇ、一丁やってやるか！」

そうして十代たちのタッグデュエルが始まったんだ…。

次回、「氷と英雄と大地と雲」

次回もまったり行こうよ。

氷と英雄と大地と雲（前書き）

大変お待たせしました！
第１３話です。

今回は十代と塔也がタッグデュエルします。

氷と英雄と大地と雲

宝山ｓｉｄｅ

僕たち5人はいつものロビーでお昼ご飯を食べていたら、特設モニターにミス・デュエルアカデミアの出場者が映った。

「いよいよ発表されるね、ミス・アカデミアが。」

「ああ、今回はレベルが高いだろうな…。
何せ、明日香君とフォリナ君がいるんだからな。」

「なあ…そのミス・アカデミアって何だ?」

十代が不意に尋ねた。

「アニキ知らないの!?アカデミアのホームページで、
1ヶ月も前に知らせがあったよ!?」

「俺パソコン使わないし、それに最近はそんな暇も無ぇよ…。」

「…あっ!ゴメン、そうだったね…。」

「本当に執念あり過ぎだろアイツ…。」
アイツって、増川の事かな？

「もしかして増川の事かい？
話は聞いてたけど…。」

「そうソイツだよ…。
アイツあの日以来、何度も何度も十代にデュエルを挑んで来やがったんだよ…。」

「そうだよね…。晩ご飯の時に食堂にやって来たり、
お風呂に入ってる時だって…。」

「かれこれ、今日まで１００回以上は増川とデュエルをした気がするぜ…。
おかげで、最近寝不足でよ、…フワァァッ。」

…大変だね十代。
でも未だに狙われているって事は、全勝したと言う事だよね。
フォリナさんの言う通り、１００連勝した十代って…。「悪いな十代…、俺が焚き付けた事とは言え…。」

「何言ってるんだ塔也、友達が困っていたら助けるのは当然だろ？」

「でも安心してよアニキ、塔也君。
ミス・アカデミアの発表日が近くなったら、
増川君は多分、それどころじゃなくなる筈だから…。」

「俺がどうしたって、丸藤氏？」

「「「うわあっ！出た～！！」」」

翔が話していると突然、増川が会話に入って来た。
…一体何時からいたんだろ？

「何だ何だ？その、幽霊を見た様な反応は…。」

「実際、幽霊よりタチが悪いだろうが！
いい加減、フォリナのアドレスを諦めろよ！」

「誰が諦めるか！今回も早速デュエル！
…と、いきたい所だが…丸藤氏の言う通り俺は忙しいのでな。
デュエルはまた今度だ。」

3人共、ホッと胸を撫で下ろした。
十代はデュエルが好きな筈なのに…。

「まあそう言う訳だから、サラバだ皆の者。
…あっ、そうだ！時に聞くが、一体誰に投票したんだ？」

「俺は明日香君に投票したな。」

「僕もかな、いつもお世話になっているし…。」

それを聞くなり、増川は怒り出しちゃった。

「な、何～！天上院　明日香だと～！！
三沢氏、皇氏！何故だ！！」

何故って言われても困るよ…。
僕は資料を借りたり、勉強を見て貰ったりしたから、
恩返しのつもりで投票したんだけどね…。

「そうだ、お前たちは一体誰に！？」

「ぼ、僕はフォリナさんかな…。」

「俺は投票して無いな、　この手のイベントはあんまりな…。」

「俺は今知ったけど、興味無ぇな…。」

「おお！丸藤氏！！分かっているじゃないか！
…それに引き替え、他の2人は投票すらしない気か？
…まあ、他の奴に投票しないならそれもいいがな。
…ではサラバだ。」

そう言って、増川は去っていった。

「アイツ、本当に神出鬼没な奴だな…。」

「増川が忙しくなるって言ってたけど、
さっき言おうとした事と関係あるのか、翔？」

「うん、発表当日の応援の為に、フォリナファンクラブと、明日香ファンクラブ全員で準備をしてるってホームページに載ってたよ…。」

「明日香ファンクラブって…。
…大変だな明日香も。
増川みたいな奴がついているなんて…。」

「全くだな。大勢で応援って大袈裟じゃねぇか？」

「大袈裟なものか！明日香君の女王になる瞬間を見れるんだ、応援も気合いが入るという物さ。」

三沢が凄い力説をする。

…何だか増川みたいだよ。

「…三沢さぁ、お前やっぱり増川と同類じゃ…。」「ち、違うぞ！俺は増川みたいに熱狂的じゃない！！ただ明日香君に憧れているだけだ！」

「端から見たら、十分熱狂的だけどな。」

「って言うか三沢、この前のデュエルの後はショックを受けたぜ…。

塔也がフォリナに頼んでＤＶＤを借りる事が出来たから見れたけどよ…。」

「あの時は済まなかったな…。

明日香君と一緒にいられる時間を作りたかったんだ。」

「次はちゃんと約束守ってくれよな、三沢。」

「ああ、気を付けるよ十代。」

その時、チャイムが鳴り響いた。

「あっ、僕そろそろ教室に戻るね。」

「やべぇ、急いで戻るぞ翔、塔也！」

「そうだな！じゃ、またな三沢、宝山。」

「ま、待ってよ～！アニキ、塔也君。」「慌ただしいな3人共。さて、俺も教室に戻るかな。」

こうして昼休みを終えて、教室に戻ったんだ。

そして数日後、体育館を会場に、ミス・アカデミアの投票結果が発表されるんだ。

宝山↓十代ｓｉｄｅ

…で、ミス・アカデミアを決める投票発表の日がやって来たんだけど…。
正直言ってあんまり興味無ぇな…。

塔也も俺と同じみたいで、結局誰にも投票しなかったんだ。

三沢と翔に連れられて来た塔也と宝山、そして俺も渋々会場に来たんだけど…。

「「「「「ウオーッ！フォリナ様ー！！」」」」」
「「「「「ア・ス・カ！ア・ス・カ！」」」」」

うわぁ…滅茶苦茶五月蝿いぜ。

耳鳴りが起きそうだ…。

「なぁ三沢、翔！俺やっぱ会場抜けるよ！興味無いからさ…。」

「俺もいいか？増川みたいな奴らと一緒にいると疲れてくるぜ…。」

「何言ってるんだ十代、塔也！
明日香君がミス・アカデミアに選ばれる瞬間を見ようじゃないか
！！」

「そうだよアニキ！それに塔也君、フォリナさんの勇姿を見ておくべきだよ！」

「えぇ～、フォリナは別にミス・アカデミアに興味無いと思うけどな…。」

明日香も興味無いんじゃないか？
アイツって目立つのは好きじゃ無さそうだし…。

「え～、永らくお待たせ致しました！
それでは優勝者を発表します！！」

「明日香君だ、明日香君に決まっている！！」

「その通りだ、三沢君！栄光を掴み取るのは
我らが明日香様だ！！」

「天上院　明日香では無い！絶対フォリナ様だ！！」

三沢と増川と明日香のファンクラブの天野って奴が激しく言い争っているぜ…。

「何ちゅう醜い争いやってんだ、アイツらは…。」

「まあまあ、3人共抑えてよ。」

塔也は完全に呆れていた。
本当に何やってんだよ三沢…。

「投票数198票！エントリーナンバー1番　小日向（こひなた）　星華（せいか）さん！！」

どうやらミス・アカデミアは、小日向って奴に決まった様だな。

その宣言の後、増川と天野たちファンクラブの奴らが号泣していたな…。
…全く、泣く程の事か？

「…っと、失礼致しました。
得票数が同じ生徒がいました！
しかも2人です！！

エントリーナンバー2番　フォリナ・ロック・ハートさんと、
エントリーナンバー5番　天上院　明日香さんです！！

…って、あれ？お二方がいませんね？」

ホ～ラ、やっぱりだ。
大方、大会に興味が無くって、何処かで大会が終わるのを待ってるんだろうな…。

「何故明日香君がいないんだ？」

「それにフォリナさんもいないよ！？」

「だから言ったろ、アイツは興味無いだろうってな。
それにフォリナは照れ屋だからな。
こんな大勢に見られる所じゃ、出られねぇよ…。」

「…塔也、君は本当にそう思っているの？」

「…え？だって俺と顔合わせる度に緊張してるじゃねぇか。」

だよな？フォリナはステージにいる所を塔也に見られるのが恥ずかしいからじゃないか？

「ちょっと！私は出たくないって言ってるでしょ！」

「ワ、ワタシも大勢の人に注目されるのは耐えられマセーン！」

「ダメです！優勝者と票が同じ以上、出て貰います！！」

ミス・アカデミアの運営委員に連行される様に2人がステージに立たされた。　…2人共、気の毒だぜ。

「お2人共、ご感想を…。　…ん？ちょっと待って下さい！まだ投票して無い生徒が2人いました！！オシリス・レッドの遊城　十代君と、雲雀　塔也君です！！」

何だ何だ！？運営委員たちが俺と塔也に近づいて来たぜ！？

「さぁ、ステージ上へ。」

「な、何だよ！？」

「おい、離せよ！」

俺と塔也がステージ上に連行される時、増川と天野が立ち塞がった。

「待てお前たち！フォリナ様には1歩も近寄らせんぞ！！」

「フォリナ君は別にいいが、明日香様には指1本も触れさせやしない！」

「…運営委員の皆さん、この2人を抑えて下さい。」

「ぬぐうぁ！離せー！！」

「くっ！明日香様！！」

運営委員たちが2人を抑えて、
俺と塔也はステージ上に連れて来られた。
2人が抑えられている所を見て、
明日香は呆れてて、フォリナは塔也が来た事で顔を俯かせてたな。

「さぁ2人共、優勝者候補の3人の内1人に投票して下さい。
ただし、2人して別々の方に投票せず、
1人に投票して下さいね。
ミス・アカデミアは1人だけですから。」

「なぁ…俺の票無効に出来ねぇ？興味無いし…。」

「あっ、なら俺も！」

「そうですねぇ…。２人共はダメですが、どちらか１人なら…。」

塔也が票を無効にすると聞いて、フォリナが泣き出しそうになっている。

「ソ、ソンナ…トウヤはワタシには全く魅力がナッシングと言うのデースカ…。」

「い、いや違うだろ！そうは言ってないって、フォリナ…。」

「コラ～！！フォリナ様を泣かせるな！　雲雀　塔也！！」

「…まあ、今のは塔也がいけないね。」

「塔也君、最低ッス！！」

あっ！だったら塔也にゃ悪いけど…。

「なら俺の票を無効にしてくれ。
…塔也、いいな?フォリナに入れてやるんだぜ。」

「うっ…、分かったよ十代。
じ、じゃあ俺はフォリナに…。」

「ちょっと待ちなさいよ!」

塔也が票を入れようとした時、
小日向が横槍を出して来た。

「ステージには遅れて来る!
お友達に票を入れさせる!!
そうまでしてミス・アカデミアになりたいの、フォリナさん!?」

「違いマス!ワタシそんなつもりじゃ…。」

何だよ!とんだ言いがかりだぜ!!
そしたら塔也が抗議した。

「おいアンタ、言いがかりはやめろよ!
フォリナはそんな事をする奴じゃねえ!」

「全くだわ…。だったら私とフォリナは辞退させて貰うわ。

行きましょ、フォリナ。」

「…ハ、ハイ！分かりマシタッ！」　2人が出ていこうとすると、小日向が塔也にデュエルの提案をした。

「塔也君だったわね…。
君、私とデュエルしなさい。
君が勝ったら、フォリナさんへの投票を認めるわ。
でも、負けた場合は私に投票して貰うわ。」

「…まあいいぜ、デュエルを挑むってんなら受けて立つぜ。」

「感謝するわ。」

「ちょっと待ちなさい！そんな勝負、私は認めないわ！！」

塔也が小日向のデュエルを受けようとした時、明日香が止めにかかった。

「あらアナタには関係無いじゃない。
それとも、ミス・アカデミアの座が惜しくなったかしら？」

「そんなものはどうでもいい！

…ただ私はフォリナの意思を無視したデュエルが気に入らないだけよ！」

「あら、だったらアナタがフォリナさんに加勢してタッグデュエルで塔也君とデュエルすればいいわ。
私は見守るだけでいいし、
塔也君のパートナーはアナタが決めればいいわ。」

「何ですって？」

十代↓明日香ｓｉｄｅ

困ったわ…。

フォリナの意思を無視したデュエルに抗議したら、
更に面倒な事になったわね…。

「アスカ、済みマセン…。
ワタシの所為でハプニングに巻き込んでシマイマーシテ…。」
「気にしないで、フォリナ。

友達だから当然よ。

…フォリナ、このデュエル、アナタはどうする？」

フォリナは、しばらく考えてから答えたわ。

「…受けマス！ワタシはミス・アカデミアの事は別に構いませンガ、

ワタシ自身の事は自分で決めたいデス！

このデュエル、ワタシたちが勝ったら、ワタシたちはこの大会を辞退シマス！

負けたら、トウヤの票をアナタに譲りマス！！」

「ふふ…いいわよ、それで。」

そう、それがフォリナの答えなのね…。

なら、私の答えは…。

「…分かったわフォリナ。

なら、私はアナタの意思を尊重して塔也にタッグデュエルを申し込むわ。　塔也のパートナーは…十代、頼めるかしら？」

「俺が塔也のパートナーかぁ…。よし、塔也！明日香たちからの挑戦、真っ向から受けて立とうぜ！！」

「仕方無いな…。けど、さっきの相手より楽しいデュエルになりそうだな。　ああ！一丁やるか十代！！」

「サンキュー、助かりマス２人共。」

本当に悪いわね２人共。
けど、私もアナタたちとは、近い内にデュエルしてみたかったのよ！

「そ、それではルール説明します！
お互いのＬＰは２人共通で４０００、
パートナーの手札・墓地などの確認及びパートナーのモンスターをアドバンス召喚などのリリースはアリとし、　そして互いに最初のターンは攻撃出来ないものとします。
…それで宜しいですか？」

「構わないわ。」

「ああ！いいぜ！！」

「ノープロブレムデース！」

「問題無い、早く始めようぜ！」

「では、デュエル開始です！」

「「「「デュエル！！」」」」

十代・塔也　ＬＰ４０００

明日香・フォリナ　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で、順番は私、十代、フォリナ、塔也になったわ。

「私からの様ね…私のターン、ドロー！私はフリズド・スタチューを攻撃表示で召喚するわ。」　私の　フィールドに氷の鎧の氷像が出現した。

フリズド・スタチュー
ＡＴＫ１６００

「更に永続魔法　ダイアモンドダストを発動し、カードを2枚伏せてターンエンドよ。」

さぁ、私の目の前で見せて貰うわ…。
あなたたちの実力を…。

「次は俺だな。俺のターン、ドロー！」

十代・塔也　ＬＰ４０００
手札　６枚　５枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

明日香・フォリナ　ＬＰ４０００
手札　２枚　５枚
モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー

フォリナ　無し

魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

伏せカード×２

フォリナ

無し

「スタンバイフェイズに永続魔法　ダイアモンドダストの効果発動よ。
フィールドのモンスター全てにアイスカウンターを１つ乗せるわ。」

フリズド・スタチュー

アイスカウンター＝ＡＣ
０→１

ダイアモンドダスト
永続魔法
スタンバイフェイズにフィールド上の全てのモンスターにアイスカウンターを１つ乗せる。

「へぇ、明日香も俺と同じ様に特殊なカウンターを使うデッキか…。」

「ええ、そうよ。」

そしてアイスカウンターを使って、あなたたちを凍てつかせてあげるわ…。

「もういいよな、俺はＥ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイアを攻撃表示で召喚！」

ＡＴＫ１３００

あのモンスターは…！
十代は早速、先制ダメージを与える気ね。

「更に魔法カード　エレメント・コールを発動！　自分フィールド上のＥ・ＨＥＲＯを選択し、デッキから違う属性のレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体を特殊する！
来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック！！」

岩石で出来た屈強な体の戦士が現れたわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック
ＡＴＫ１６００

エレメント・コール

通常魔法

自分フィールド上のＥ・ＨＥＲＯ１体を選択し、
選択したモンスターと違う属性・レベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体をデッキから特殊召喚する。

「カードを１枚伏せてターンエンド。
そしてエンドフェイズにレディ・オブ・ファイアの効果発動だ！
自分のエンドフェイズに俺のフィールドのＥ・ＨＥＲＯ１体につ

き、２００ポイントのダメージを与える！
俺の場のＥ・ＨＥＲＯは２体、よって４００ポイントのダメージを与えるぜ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア

レベル４　炎属性　炎族
ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００

自分のエンドフェイズに、
自分フィールドのＥ・ＨＥＲＯの数×２００ポイントダメージを相手に与える。

「うっ！」

「アゥッ！」

明日香・フォリナ　ＬＰ４０００→３６００

「へっ、相変わらずいい引きだな十代。」

「おう！この調子でガンガン行くぜ、塔也。」

１ターン目から私たちにダメージを与えるなんてね…。

でも、十代ならこれ位は当然か…。
気を引き締めないといけないわね…。

「じゃあワタシのターンデスネ。
ワタシのターン、ドローデス！」　十代・塔也　ＬＰ４０００

手札２枚　５枚

モンスターゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック

塔也　無し

魔法・罠ゾーン

十代

伏せカード×１

塔也　無し

明日香・フォリナ　ＬＰ３６００

手札２枚　６枚

モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー（ＡＣ×１）

フォリナ　無し

魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

伏せカード×２

フォリナ　無し

「スタンバイフェイズに、ダイアモンドダストの効果でフィールドのモンスター全てにアイスカウンターを乗せるわ。」

フリズド・スタチュー
ＡＣ
１↓２

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア
ＡＣ
０↓１

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック
ＡＣ
０↓１

「アスカ、アナタのセットカードと手札をウォッチしてもいいデスカ？」

「勿論いいわよ。」

「じゃあ十代、俺たちも手札とか確認しようか。」

「よし来た！じゃあ、塔也の手札を見せて貰うぜ。」

私たちはお互いに近づいて、手札・伏せカードの確認をしたわ。

フォリナは私の伏せカードと手札を見てから、自分の手札と見比べて何度も考えているわ。

十代たちも、同じ様にお互いの手札と伏せカードを確認したけど…。

「あ～…。予想はしてたが、お互いに専用カードばっかりだな…。」

「気を落とすなよ塔也。だったら、お互いの切り札を合わせて戦おうぜ！」

まぁ、十代たちのデッキは1つのカテゴリーを元に構築されているから、

タッグデュエルじゃ、なかなか真価発揮とは行かないかもしれないわ。

そうしている内に、フォリナは考えがまとまったみたいね。

「アリガトウ、アスカ。今のワタシの手札ならこの状況を活かしてプレイデキマスヨ！
まずは手札1枚を墓地に捨て、魔法カード　標本の閲覧をトウヤを対象に発動シマース！
ワタシの宣言する種族とレベルを持つモンスターがデッキに存在する場合、そのカード1枚を墓地に送って貰いマスヨ。　ワタシはレベル7の悪魔族を宣言シマスヨ！」

「…俺は雲魔物ー レイジング・ミストを墓地に送るぜ。」

標本の閲覧

通常魔法

手札1枚捨てて発動。
自分は種族とレベルを宣言し、宣言したモンスターが相手のデッキにあった場合、そのモンスター1体を墓地に送る。

塔也が苦い顔をしている…。
どうやらフォリナがやる事が分かっているみたいね。

「フフッ、ワタシは手札から魔法カード　化石融合ー フォッシル・フュージョン発動デス！」

「…やっぱりそれか。」

「ハイ！ワタシのお気に入りのカードデースヨ！　ワタシは自分の墓地から　フォッシル・リザード　シュメルケとトウヤの墓地から　雲魔物ーレイジング・ミストを融合デス！
カモン！古生代化石魔王（こせいだいかせきまおう）　スカルヴォラス！！」

フィールドにシュメルケとレイジング・ミストが出現して、
その2体が融合すると、
骸骨の模した岩石を纏った悪魔が、四枚の翼を広げて雄叫びを上げる。
古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＴＫ３５００

「スゲェなフォリナ！1ターン目から強力なモンスターを召喚なんてな。」

「本当にやってくれるぜ…。
昔より展開が早くなったな。」

「アリガトウゴザイマース！
デモ、まだ終わりじゃアリマセンヨ！」

「「何だって!?」」

「フォリナの言う通りよ…。
私は罠カード　命の湧き水を発動よ！
相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、
そのモンスターと同じレベルの水属性1体をデッキから特殊召喚するわ！
私から見たら、フォリナも相手プレイヤーよ。　よって、効果は成立するわ！
来なさい、アイス・ブリザード・マスター！！」

私のフィールドに湧き水が噴き出して、水から氷の魔術を会得した上級魔術師が降り立った。

アイス・ブリザード・マスター
ＡＴＫ２８００

化石融合－フォッシル・フュージョン

通常魔法

自分と相手の墓地から決められたモンスターを除外して、
化石と名の付く融合モンスター1体を融合召喚する。

命の湧き水
通常罠

相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、
自分のデッキから、そのモンスターと同じレベルの水属性1体を
特殊召喚する。

「す、凄いよ！2人して上級モンスターを召喚したよ！！」

「うん、確かにね。でも次の塔也のターンに除去されるかもしれ
ないよ…。」

「フォリナ様がそんな事を考えて無いと思っているのか、皇氏？」

「増川の言う通りだ、宝山。
フォリナ君は塔也の戦術を知り尽くしている。　どんな対処をし
てくるか…。」

「ワタシは魔法カード　奇跡の穿孔を発動デス。　手札のプレー
ト・ガードを墓地に送って、1枚ドローシマスヨ。」

ドローした後、フォリナの表情が明るくなった。
どうやらいいカードが引けたみたいね。

「…イエス！ワタシはカードを2枚セットしてターンエンドデスヨ。」

「ふぅ、ようやく俺の番だな…。俺のターン、ドローだ。」

十代・塔也　ＬＰ４０００

手札２枚　６枚

モンスターゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア（ＡＣ×１）

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック（ＡＣ×１）

塔也　無し

魔法・罠ゾーン

十代

伏せカード×１

塔也　無し

明日香・フォリナ　ＬＰ３６００

手札２枚　０枚

モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー（ＡＣ×２）

「スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果よ！」　フリズド・スタチュー

ＡＣ

２↓３

アイス・ブリザード・マスター

ＡＣ
０↓１
Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア
ＡＣ
１↓２
Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック
ＡＣ
１↓２
古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＣ
０↓１

「俺は魔法カード　ワン・フォー・ワンを発動だ。
手札の雲魔物一ミスティ・ベールを墓地に送って、
デッキから雲魔物一ディープ・ミストを特殊召喚するぜ。」

雲魔物－ディープ・ミスト
ＡＴＫ０

ワン・フォー・ワン

通常魔法

手札のモンスター１体を墓地に送って発動。
手札またはデッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する。

「そして雲魔物－ターピュランスを召喚だ。
効果でフォッグカウンターが２つ乗るぜ。」

雲魔物－ターピュランス
ＡＴＫ８００

ＦＣ

０↓２

「そしてターピュランスの効果発動！
このカードのフォッグカウンターを１つ取り除く事で、
デッキまたは墓地から雲魔物－スモーク・ボールを特殊召喚する！

俺はこの効果を2回使うぜ！」

タービュランスが周囲のフォッグカウンターを2つ取り込むと、
頭の穴からスモーク・ボールが2体飛び出したわ。

雲魔物－タービュランス
ＦＣ
2↓0

雲魔物－スモーク・ボール
ＤＥＦ６００

「俺はレベル1のスモーク・ボール2体とディープ・ミストをオーバー・レイ！！
3体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！
銀河の星屑よ、1つの命となれ！
エクシーズ召喚！来い、雲魔物－コズミック・ボール！！」

雲魔物－コズミック・ボール
ＡＴＫ１５００
ＯＲＵ

0→3

「今デス！アスカ！！」

ええ、分かっているわ。
フォリナ！

「罠発動、フロスト・フロア！
フィールド上のアイスカウンターを任意の数取り除いて、
取り除いた数だけ、フィールドのモンスターの守備表示に変更し、
表示形式を変更出来ないわ！
私はアイス・ブリザード・マスターと、
フォリナの　スカルヴォラスから1つずつ取り除き、
塔也のタービュランスとコズミック・ボールを守備表示にするわ
！」

フロスト・フロア

通常罠

フィールド上のアイスカウンターを任意の数取り除いて発動。
取り除いた数までモンスターを選択し、選択したモンスターは守
備表示となり、
表示形式を変更出来ない。

アイス・ブリザード・マスター
ＡＣ
１↓０

古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＣ
１↓０

アイスカウンターが吹雪となり、タービュランスとコズミック・ボールの体勢を崩すと、
見る見るうちに分解されていったわ。

「…タービュランスとコズミック・ボールは守備表示になると破壊される。
　…やるな、明日香。」

「ふふ、まだまだこれからよ。」

…そうよ、これはまだまだ序の口でしか無いわ。
覚悟する事ね、十代、塔也！

氷と英雄と大地と雲（後書き）

小日向さんの提案で、突如十代と塔也とのタッグデュエルをする事になってしまった。

けど、やると決まった以上、全力で挑むわ！

「見せて貰うわ、あなたたちの実力を…。」

「やるな、明日香。けどこっから反撃だぜ！」

「フフ、覚悟してクダサイネ、２人共。」

「デュエルはまだまだこれからだ！
巻き返しを狙うぜ十代！！」

次回、「極寒の息吹と憤怒の地層」

凍てつく氷の力を見せてあげるわ…十代、塔也。

極寒の息吹と憤怒の地層（前書き）

お待たせしました！

第１４話です。

今回は前回の続きで、十代達はかなり苦戦してます。

極寒の息吹と憤怒の地層

明日香ｓｉｄｅ

タービュランスとコズミック・ボールが破壊された事で、塔也のフィールドが、がら空きになったわね。
これなら次のターンは、十代のフィールドのモンスターを一掃すれば…。

「2体共破壊されちまったか…。
だが、エンドフェイズに手札から速攻魔法　リユース・バックを発動だ。
このターンに墓地に送られたユニットの数だけドローするぜ！」

リユース・バック
速攻魔法

エンドフェイズに発動出来る。
自分はこのターン、墓地に送られたオーバー・レイ・ユニットの数だけドローする。

コズミック・ボールのユニットは、最初からこのターンの内に使い切るつもりだったのかしら？　だとしたら、コズミック・ボールを破壊出来て良かったわね…。

下手したら、大量のフォッグカウンターを使って、私達のモンスターを一掃しかねないからね…。

「このターン、墓地に送られたユニットは3枚、よって3枚ドローするぜ！
更に俺は、十代のレディ・オブ・ファイアの効果発動だ。
タッグデュエルなら、パートナーのモンスター効果を使ったり、攻撃が出来るからな。
明日香達に４００ポイントのダメージを与えるぜ！」

レディ・オブ・ファイアが、
再び、仲間の闘気を炎の玉に変化させ、私達に放った。

「うぅっ！」

「アァッ！」

明日香・フォリナ　ＬＰ３６００→３２００

「この～っ！さっきから効果ダメージでフォリナ様達をネチネチと…。
お前たちは鬼か！？鬼なのか！
遊城　十代！雲雀　塔也！！」

「堂々と戦いたまえ！失礼だぞ君達！！」

増川君と天野君が、十代達に訳の分からない抗議をし出したわ…。

…ふぅ、全く止めて欲しいわね。

「仕方無いだろ！？コイツはこう言う効果なんだからさ！」

「それに全力で挑まなきゃ、２人に失礼だろうが！」

「だがなぁ…！」

「しかしだな…！」

「「いい加減にして！」下サイ！」

「十代達は全力で挑んで来ていると言うのに、あなた達に非難される言われは無いわ！」

「ソウデス！２人のプレイにバッシングするアナタ達の方こそ失礼デスヨッ！！」

私達が異議を唱えた瞬間、増川君と天野君は申し訳無さそうに謝ったわ。

「…ぬぐぅ、スマン！フォリナ様！！」

「…済まない、私も少々熱くなってしまった様だ…。」

「ごめんなさいね塔也、他には何かあるのかしら？」

「あ、ああ…何も無いぜ。
明日香のターンだ。」

「分かったわ、では私のターン、ドロー！」

十代・塔也　ＬＰ４０００

手札２枚　４枚

モンスターゾーン

十代

E・HERO　レディ・オブ・ファイア（AC×2）
E・HERO　グランド・ロック（AC×2）

塔也　無し

魔法・罠ゾーン

十代

伏せカード×1

塔也　無し

明日香・フォリナ　LP3200

手札3枚　0枚

モンスターゾーン

明日香

アイス・ブリザード・マスター

フリズド・スタチュー（ＡＣ×３）

フォリナ

古生代化石魔王　スカルヴォラス

魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

フォリナ

伏せカード×２

「スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果発動よ！」

アイス・ブリザード・マスター

ＡＣ

０↓１

フリズド・スタチュー

ＡＣ

3↓4

E・HERO　レディ・オブ・ファイア

AC

2↓3

E・HERO　グランド・ロック

AC

2↓3

古生代化石魔王　スカルヴォラス

AC

0↓1

まずは十代のフィールドを一掃するわ！

「私は速攻魔法、スノー・ギフトを発動よ！

フィールド上のアイスカウンターを全て取り除き、

取り除いた数1つにつき、

ＬＰを２００ポイント回復するわ。
フィールド上のアイスカウンター１１個を取り除いて、
私達のＬＰを２２００ポイント回復よ。」

アイス・ブリザード・マスター
ＡＣ
１↓０

フリズド・スタチュー
ＡＣ
４↓０

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア
ＡＣ
３↓０

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック
ＡＣ
３↓０

古生代化石魔王　スカルヴォラス

ＡＣ

１↓０

明日香・フォリナ　ＬＰ３２００↓５４００

「ＬＰを大幅に回復して来たか！」

それだけじゃ無いわよ、塔也…。

「更に、この効果で取り除いたアイスカウンター３つにつき、１枚ドローするわ！」

スノー・ギフト

通常魔法

フィールド上のアイスカウンターを全て取り除き、
その数×２００ポイント自分のＬＰを回復し、
取り除いたアイスカウンター３つにつき、１枚ドローする。

「スゲェな、ドロー効果まであるのか！」

「取り除いたアイスカウンターは１１個…。よって３枚ドロー！
そして私は、コールド・エンチャンターを召喚！」

私のフィールドに氷の魔術師が舞い降りる。

コールド・エンチャンター
ＡＴＫ１６００

「コールド・エンチャンターの効果発動！
手札１枚を捨て、フィールドのモンスターにアイスカウンターを乗せる！
更にアイス・ブリザード・マスターの効果発動よ！
２体のモンスター効果により、
十代の全てのモンスターに、アイスカウンターを１つずつ乗せるわ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア
ＡＣ
０↓１

E・HERO　グランド・ロック
AC
0↓1

「そして、アイス・ブリザード・マスターの効果発動！
このカードをリリースする事で、
アイスカウンターの乗ったモンスターを全て破壊するわ！」

コールド・エンチャンター
レベル4　水属性　水族
ATK1600　DEF1200

手札1枚を捨てる事で、フィールドのモンスター1体にアイスカウンターを乗せる。
このカードの攻撃力を、アイスカウンター×300ポイントアップする。

アイス・ブリザード・マスター
レベル8　水属性　魔法使い族
ATK2500　DEF2000

自分フィールドの水属性2体をリリースする事で、手札から特殊

召喚出来る。
1ターンに1度、フィールドのモンスター1体にアイスカウンターを乗せる。
このカードをリリースする事で、
アイスカウンターの乗ったモンスターを全て破壊する。

アイス・ブリザード・マスターは自ら吹雪となって、
十代のモンスターを襲った。

「見事だ、明日香君！これなら十代のモンスターを一掃出来る！」

「けど、十代もそう簡単にはやられないよ。」
「そうだよ！アニキは絶対に負けないッス！」

「何故そう思うんだ？翔、宝山。」

「そ、それはえ～と…。」

「全く丸藤氏は…。グランド・ロックの効果があるからだろう？宝山氏。」

「うん、そうだよ。」

「俺はグランド・ロックの効果発動だ！

1ターンに1度、自分フィールドのE・HERO1体は、戦闘及びカード効果では破壊されない！」

「でも、アイス・ブリザード・マスターはあなたのHERO2体に及んでいるわよ。
どちらか1体は破壊して貰うわ！」

「…なら、レディ・オブ・ファイアを破壊だ。」

E・HERO　グランド・ロック

レベル4　地属性　岩石族

ATK1600　DEF1500

1ターンに1度、自分フィールドのE・HERO1体は戦闘及びカード効果では破壊されない。

「続けて、フォリナのスカルヴォラスの効果発動よ！」

「スカルヴォラスは、1ターンに1度、相手モンスター1体の攻守を逆転デキマースヨ！」

古生代化石魔王　スカルヴォラス

レベル8　地属性　岩石族／融合

ＡＴＫ３５００　ＤＥＦ２８００

岩石族１体＋レベル７以上の悪魔族１体

このカードは融合召喚でのみ特殊召喚出来る。　１ターンに１度、相手モンスター１体の攻守を入れ替える事が出来る。　また、このカードが破壊される時、自分の墓地のモンスター１体を除外する事で、　このカードの破壊を無効にする。

「な、何ぃ～！？」

「これは、ちょっとマズいなオイ…。」

「フフ、覚悟して下サイネ、２人共！」

「「ネガティブ・クライシス！！」」

スカルヴォラスが放ったオーラを受けて、グランド・ロックが衰弱していく。

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック

ＡＴＫ１６００↓１５００　ＤＥＦ１５００↓１６００

「さあ、バトルよ！スカルヴォラスで、グランド・ロックを攻撃！」

「行きマスヨー！」

「「グラビティ・インパクト！！」」

スカルヴォラスは、両手をかざし、重力の塊をグランド・ロックに目掛けて放った。

「ぐわぁっ！」

「うおぉっ！」

十代・塔也　ＬＰ４０００↓２０００

「十代！」「ああ、分かっているぜ！塔也！！罠発動！ヒーローシグナル！！

この効果で、デッキからE・HERO　エアーマンを特殊召喚するぜ！」

E・HERO　エアーマン
ATK1800

「くっ！ならバトルは中止よ！」

「更にエアーマンの効果で、デッキからE・HERO　オーシャンを手札に加えるぜ！」

「カードを2枚伏せてターンエンドよ。」

「やるな、2人共！けど、こっからが俺達の反撃だぜ！！俺のターン、ドロー！」

十代・塔也　LP2000
手札4枚　4枚
モンスターゾーン
十代

E・HERO　エアーマン

塔也　無し

魔法・罠ゾーン　無し

明日香・フォリナ　LP5400

手札1枚　0枚

モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー
コールド・エンチャンター

フォリナ

古生代化石魔王　スカルヴォラス

魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

伏せカード×２

フォリナ

伏せカード×２

「スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果発動よ！
そして、コールド・エンチャンターは効果により攻撃力アップするわ！」

フリズド・スタチュー
ＡＣ
０↓１

コールド・エンチャンター
ＡＣ
０↓１
ＡＴＫ１６００↓２８００

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
ＡＣ

0↓1

古生代化石魔王　スカルヴォラス

ＡＣ

0↓1

「行くぜ！俺は魔法カード　モンスター・スロットを発動！」

「十代！？そいつは増川が使ってたカードじゃねぇか！」

「へへ、面白いカードだから入れてみたのさ！
俺は自分フィールドからエアーマンを選択し、
墓地からレディ・オブ・ファイアを除外！」

モンスター・スロット…。
十代が使ったら、どう転んでも嫌な予感しかしないわ…。

「遊城　十代め！俺の必殺カードを使うとは…！」

「十代が使ったら、どっちにしてもいいカードを引きそうだね。」

「そうだな…運に左右されるカードだが、
十代なら必ず必要なカードを引き当てる筈だ。」

「うん！アニキなら絶対引き当てるよ、この状況を逆転出来るカードを！」

「頼むぜ、ドロー！！
…よし！俺がドローしたカードは、レベル４のＥ・ＨＥＲＯ　フォレストマン！！
よって、効果で特殊召喚だ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
ＤＥＦ２０００

「更に魔法カード融合を発動！
俺はフィールドのエアーマンと、手札のオーシャンを融合！
来い！氷のＨＥＲＯ！！　Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ！」

エアーマンとオーシャンが融合して、
氷の力を司るＨＥＲＯがフィールドに推参したわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ
ＡＴＫ２５００

「アブソルートＺｅｒｏはこのカード以外の水属性１体につき、攻撃力を５００ポイントアップする！
Ｚｅｒｏ以外の水属性は２体！
よって、攻撃力を１０００ポイントアップする！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ
ＡＴＫ２５００→３５００

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ

レベル８　水属性　戦士族／融合

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００

ＨＥＲＯ１体＋水属性１体

このカードは融合召喚でのみ特殊召喚出来る。

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ以外の水属性１体につき、攻撃力を５００ポイントアップする。

このカードがフィールドから離れる時、
相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「アイスカウンターが減った事で、
コールド・エンチャンターの攻撃力はダウンするぜ！」　コールド・エンチャンター
ＡＴＫ２８００→２５００

来たわね！…悪いけど、アブソルートＺｅｒｏには退場して貰うわ！

「私は、フリズド・スタチューとコールド・エンチャンターのアイスカウンターを取り除いて、
罠カードフリーズ・カプセルを発動！！
このカードは、フィールドのアイスカウンターを２つ取り除いて発動する事が出来、
相手フィールドのモンスター１体を魔法・罠ゾーンにセットするわ！」

フリーズ・カプセル
通常罠

アイスカウンターを２つ取り除いて発動する。　相手フィールド上のモンスター１体を魔法・罠ゾーンにセットする。

コールド・エンチャンター
ＡＣ
１↓０
ＡＴＫ２５００↓１９００
フリズド・スタチュー
ＡＣ
１↓０

アイスカウンターが、アブソルートＺｅｒｏの周囲を回りだした瞬間、アブソルートＺｅｒｏを凍結させたわ。

「げぇ～!?アブソルートＺｅｒｏが凍っちまった!」

「フィールドから離れてないから効果も発動出来ねぇな…。味な真似してくれるぜ明日香。」

「ふふ、さあどうする十代?」

「なら、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「行きマスヨ！ワタシのターン、ドローデス！」

十代・塔也　ＬＰ２０００

手札０枚　４枚

モンスターゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

塔也　無し

魔法・罠ゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ

伏せカード×１

塔也　無し

明日香・フォリナ　ＬＰ５４００

手札１枚　１枚

モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー
コールド・エンチャンター

フォリナ

古生代化石魔王　スカルヴォラス（ＡＣ×１）

魔法・罠ゾーン

明日香

伏せカード×１

フォリナ

伏せカード×２

「スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果を発動し、
コールド・エンチャンターの攻撃力はアップするわ！」

フリズド・スタチュー

ＡＣ

０↓１

コールド・エンチャンター

ＡＣ

０↓１

ＡＴＫ１９００↓２８００

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

ＡＣ

０↓１

古生代化石魔王　スカルヴォラス

ＡＣ

０↓１

「このままバトルデス！スカルヴォラスでフォレストマンを攻撃シマスヨ！」

「俺は罠カード、スピリット・フュージョンを発動！
１０００ポイントＬＰを払い、墓地の融合素材モンスターを除外して融合召喚するぜ！」

十代・塔也　ＬＰ２０００→１０００

「ワッツ！？罠融合デスカ！！？」

融合…一体何を呼び出す気？

「俺は墓地のエアーマンとグランド・ロックを除外して、融合だ！
襲来しろ！風のＨＥＲＯ！！
Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ（グレート）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）！！」

十代のフィールドに竜巻が発生し、
その中から緑色のマントをなびかせて、
フィールドに降り立った。

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＴＫ２８００

「ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動！
このカードの融合召喚に成功した時、
相手フィールドの全てのモンスターの攻守を半分にするぜ！」

スピリット・フュージョン

通常罠

ＬＰを１０００ポイント払い発動出来る。
自分の墓地から、融合素材モンスターを除外する事で、
Ｅ・ＨＥＲＯの融合モンスター１体を融合召喚する。

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ

レベル８　風属性　戦士族／融合

ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２２００

Ｅ・ＨＥＲＯ１体＋風属性１体

このカードは融合召喚でのみ特殊召喚出来る。
このカードの融合召喚に成功した時、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

「行くぜ！」

「「タウン・バースト！！」」

ＴＯＲＮＡＤＯの発生させた嵐が、
私達のモンスターを疲労させていったわ…。

フリズド・スタチュー
ＡＴＫ１６００↓８００　ＤＥＦ１４００↓７００

コールド・エンチャンター
ＡＴＫ２８００↓１４００　ＤＥＦ１２００↓６００

古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＴＫ３５００↓１７５０　ＤＥＦ２８００↓１４００

「ノー！ワタシ達のモンスターの攻守がっ！！」

「やってくれるわね、２人共。」

「へへ、どんなもんだ！」

「さーて…どうするんだ、フォリナ？」

「…ウゥ、バトルはキャンセルシマス…。
デモ、メインフェイズ２に、スカルヴォラスの効果でＴＯＲＮＡＤＯの攻守を逆転サセマスヨ！　ネガティブ・クライシス！！」

スカルヴォラスがＴＯＲＮＡＤＯの攻守を逆転させたけど…。

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＴＫ２８００→２２００　ＤＥＦ２２００→２８００

「けど、まだＴＯＲＮＡＤＯの方が攻撃力は上だぜ！」

「…ウゥ、フリズド・スタチューを守備表示に変更してターンエンドシマス…。」

「このまま押し返すぜ！俺のターン、ドロー！」

十代・塔也　ＬＰ１０００

手札０枚　５枚

モンスターゾーン

十代

E・HERO Great TORNADO

E・HERO フォレストマン

塔也　無し

魔法・罠ゾーン

十代

E・HERO アブソルートZero

塔也　無し

明日香・フォリナ　LP5400

手札1枚　1枚

モンスターゾーン

明日香

フリズド・スタチュー（AC×1）

コールド・エンチャンター（ＡＣ×１）

フォリナ

古生代化石魔王　スカルヴォラス（ＡＣ×１）　魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

伏せカード×１

フォリナ

伏せカード×２

「スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果発動！
そして、コールド・エンチャンターの攻撃力をアップさせるわ！」

フリズド・スタチュー
ＡＣ

１↓２

コールド・エンチャンター

ＡＣ
１↓２
ＡＴＫ１４００↓２６００
Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＣ
０↓２
古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＣ
１↓２

「その効果にチェーンして俺は、十代のフォレストマンの効果発動だ！
十代の墓地から融合を手札に加えるぜ！」

どうして塔也は融合を？
タッグデュエルだから、
パートナーの墓地のカードも回収出来るけど…。
手札コストとしてかしら？

「魔法カード　メルト・フォーゼを発動だ！
フィールドの全てのカウンターは、
俺が宣言するカウンターに変化する！
俺が宣言するカウンターは、
当然フォッグカウンターだ！」

メルト・フォーゼ

通常魔法

フィールド上の全てのカウンターは、
宣言したカウンターになる。

フリズド・スタチュー
ＡＣ２→０

ＦＣ０→２

コールド・エンチャンター
ＡＣ２→０

ＦＣ０→２

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ

ＡＣ１→０
ＦＣ０→１

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
ＡＣ１→０
ＦＣ０→１

古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＡＣ１→０
ＦＣ０→１

「…アワワ、マズイデース！」

アイスカウンターをフォッグカウンターに…。　塔也は仕掛けてくるのかしら？

「俺は速攻魔法、ダイアモンドダスト・ストーム発動！
フィールド上のフォッグカウンターを任意の数取り除いて、取り除いた数１つにつき、
相手モンスター１体の攻撃力を４００ポイントダウンする！

フリズド・スタチューと、
スカルヴォラスのフォッグカウンターを取り除き、
スカルヴォラスの攻撃力を１２００ポイントダウンする！」

フリズド・スタチュー
ＦＣ２→０

古生代化石魔王　スカルヴォラス
ＦＣ１→０
ＡＴＫ１７５０→５５０

「ノ～！スカルヴォラスの攻撃力がボロボロデース…。」

「更に、この効果で攻撃力が半分になった時、そのモンスターは破壊されるが…。
そいつの効果を使うか、フォリナ？」

「…ウゥ、スカルヴォラスの効果には、このカードがブレイクされる代わりに、自分の墓地のモンスター１体をデリート出来マスガ…。ワタシはこの効果は…。」

「待って、フォリナ！」

「ワッツ？」

「スカルヴォラスの効果を発動するのよ、フォリナ！」

「何故デスカ？今効果を使っても…。
アッ！もしかして…。。」

フォリナは私の意図に気がついて、自分の伏せカードを確認した。

「…！分かりマーシタヨ、アスカ！
ワタシはアスカの墓地からアイス・ブリザード・マスターをデリートシマース！」

「何で効果を発動させたんだ？
今の攻撃力じゃ、的になるだけだってのに…。」

それは、このカードを発動する為よ！

「私は、フォリナの伏せた罠カード、ロスト・ゲートを発動よ！
私の除外ゾーンのモンスターを1体選択し、デッキから選択したモンスターと同じレベルのモンスター1体を特殊召喚出来る！
現れなさい、氷魔巨獣　シベアル！」

突如出来た次元の狭間から、鋭い氷柱で体を覆った、巨大な青白

いトドが出現したわ。

氷魔巨獣　シベアル

ＡＴＫ２８００

ロスト・ゲート

通常罠

自分の除外ゾーンのモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じレベルのモンスター１体をデッキから特殊召喚する。

「また上級モンスターかよ！？」

「スゲェな、明日香！」

さぁ、一体ここからどう押し切るつもりかしら？塔也。

極寒の息吹と憤怒の地層（後書き）

明日香達のタッグデュエルもいよいよ佳境だ、俺達がどんどん押してくぜ！

「私達は最後まで諦めないわ！」

「ソウデス！ＬＰが０になるまでファイトし続けマスヨ！」

「お前に託したぜ、十代！」

「おう！俺達のカードを合わせて奇跡を起こすぜ！」

次回、「決着！　決めろ、ダブルアタック！！」

俺と塔也の力を合わせて勝利だぜ！

決着！　決めろ、ダブルアタック！！（前書き）

大変お待たせしました！

第１５話です。

今回でタッグデュエルの決着がつきます。

決着！　決めろ、ダブルアタック！！

明日香ｓｉｄｅ

フォリナのカードの力を借りて、シベアルを特殊召喚出来たわ。
このターン、塔也に策が無ければ、次のターンからシベアルを破壊する事は不可能になってくるわ！

「ほう、天上院　明日香はシベアルを召喚したか。
このターンにシベアルを処理出来ねば、
アイツらに勝機は無いな…。」

「増川君、何でそう言えるのさ！
いくら、アニキと塔也君が気に入らないからって、そんな事を…。」

「…あのな丸藤氏、確かに俺はアイツらは好きでは無いが、
それだけでここまで断言はしないぞ…。」

「フリズド・スタチューと、氷魔巨獣　シベアルの効果が厄介だから…。そうだろう、増川？」

「ご名答だ三沢氏、フリズド・スタチューには、　自分の水属性が戦闘で破壊される時、
アイスカウンターを２つ取り除く事で、破壊を無効にし、
氷魔巨獣　シベアルは、コイツがカード効果の対象となった時、
コイツ以外の自分フィールドのカード１枚をセットする事で、
その効果を無効にし、破壊する事が出来るからな。」

フリズド・スタチュー

レベル４　水属性　水族
ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１４００

自分フィールドの水属性が戦闘で破壊される時、
フィールド上のアイスカウンター２つ取り除く事で、破壊を無効に出来る。

氷魔巨獣　シベアル

レベル８　水属性　獣族
ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２５００

このカードを対象とした魔法・罠・モンスター効果が発動した時、
自分フィールド上のこのカード以外のカードをセットする事で、
その効果を無効にし、破壊する。
１ターンに１度、自分フィールド上のセットカード１枚を墓地に送る事で、

フィールド上のカード1枚を破壊する。

「増川君、詳しいんだね。」

「当然だ、水属性は俺の専門分野だからな。
まあ、他の属性のカードも大抵は知ってるぞ。」

「フィールドのアイスカウンターは、メルト・フォーゼでフォッグカウンターに変えたけど、明日香のフィールドにはダイアモンドダストがあるから、またアイスカウンターが出てくるからね。
確かにこのターンしか無いね。」

「…全く、面倒な奴を召喚してくれたぜ、明日香。」

「けど、塔也の手札には対策はあるんだろ?」

「あまりアレは使いたくは無かったが…、
四の五の言ってる場合じゃねぇよな…。
仕方ねぇ!俺は墓地のスモーク・ボールを除外して、
雲魔物ーストーム・ドラゴンを特殊召喚だ!」

雲魔物ーストーム・ドラゴン

ＡＴＫ１０００

「ストーム・ドラゴンの効果発動！
１ターンに１度、フィールドのモンスター１体にフォッグカウンターを乗せる。
十代のＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯに乗せるぜ。」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＦＣ　１↓２

「…さてと、フォレストマンを借りるぜ十代！」

「おう！目に物見せてやろうぜ、塔也！！」

「行くぜ明日香、フォリナ！俺はレベル４のストーム・ドラゴンとフォレストマンをオーバー・レイ！
２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！
雲海を漂う王者よ、白雲のうねりより出でよ！　エクシーズ召喚！浮上せよ！
雲魔物－ホワイト・ディック！！」

ストーム・ドラゴンとフォレストマンが渦に飲み込まれ、

そこからとてつもなく大きな雲が発生し、たちまち鯨の形に変わっていったわ。

雲魔物－ホワイト・ディック
ＡＴＫ２４００
ＯＲＵ　０→２

「…ほう、アレは俺がくれてやったカードではないか！」

「あのカードは強力だけど、シベアルを倒す事は出来ないね…。」

「うむ、確かにな…。だが奴にはまだ手札が残っている。
それでどんな手を打ってくるかで、がらりと変わってくるぞ。
…全く、腹立たしい事にな。」

「塔也も、十代に負けず劣らず引きが強いからな。
リユース・バックでドローした中に、
いいカードを引き当てたかもしれないな。」

「俺は雲魔物－ホワイト・ディックの効果発動！　１ターンに１度、オーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、

相手モンスター1体を墓地に送る！
俺はフリズド・スタチューを墓地に送るぜ！
飲み込め、ストーム・バキューム！」

雲魔物－ホワイト・ディック

ＯＲＵ　２→１

ホワイト・ディックは、ユニット1つと一緒にフリズド・スタチューを吸い込んで、
４つのフォッグカウンターを十代のＴＯＲＮＡＤＯに追加したわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ

ＦＣ　２→６

「バトルだ！雲魔物－ホワイト・ディックでコールド・エンチャンターを攻撃！！」

「今度はこっちの番だ！」

「「フォール・ストリーム！！」」

ホワイト・ディックの放った凄まじい嵐に、コールド・エンチャンターが吹き飛ばされていく。

「うくぅっ！」

「ウゥッ！」

明日香・フォリナ　ＬＰ５４００→４４００

「続けてＥ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯで、スカルヴォラスを攻撃だ！」

「まだまだ行くぜ！」

「「スーパーセル！！」」

ＴＯＲＮＡＤＯが両手を天に仰ぐと、
強い風圧を持った竜巻がスカルヴォラスを襲う。

「くうぅぅっ！」

「アウゥッ！」

明日香・フォリナ　ＬＰ４４００→２７５０

「さ～て２人共、今度は効果を使うのか？」

「…今度は使いマセン。」

そうね、フィールドに残しても的にされるだけだものね…。

「なら、メインフェイズ２に移るぜ。
十代、コイツを上手く使ってくれよ！カードを２枚伏せてターンエンドだ。」

…成る程ね、回収した融合を伏せて、十代に使わせる気ね！

「私のターン、ドロー！」

十代・塔也　ＬＰ１０００

手札１枚　２枚

モンスターゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ（ＦＣ×６）

塔也

雲魔物－ホワイト・ディック（ＯＲＵ×１）

魔法・罠ゾーン

十代　無し

塔也

伏せカード×２

明日香・フォリナ　ＬＰ２７５０

手札2枚　1枚

モンスターゾーン

明日香

氷魔巨獣　シベアル

フォリナ　無し

魔法・罠ゾーン

明日香

ダイアモンドダスト

伏せカード×1

フォリナ

伏せカード×1

「そして、スタンバイフェイズにダイアモンドダストの効果を…。

」

「待った！俺は罠カード、砂塵の大竜巻を発動だ。
ダイアモンドダストを破壊するぜ！」

砂塵の大竜巻

通常罠

相手フィールドの魔法・罠カード1枚を破壊出来る。
その後、手札から魔法・罠カード1枚を自分の魔法・罠ゾーンにセット出来る。

ダイアモンドダストが破壊されたわ…。
しかも、あのカードは…。

「その後、手札の魔法・罠カードを自分の魔法・罠ゾーンにセット出来る。
俺は手札から1枚セットだ。」

あのカードが融合なら、伏せカードはシベアルの攻撃を止めるカード…。

ブラフなら、先に伏せた方が融合ね。

どう動くにしても、まずはこのカードを使ってから…。

「私は魔法カード、逆転の宝札を発動！
自分フィールドのモンスターが相手よりも少ない時、相手のモンスターの数だけドローするわ。　十代達のフィールドにはモンスターが2体…。　よって2枚ドローするわ！」

逆転の宝札
通常魔法

自分のモンスターが相手より少ない場合に発動出来る。
相手フィールドのモンスターの数だけドローする。

…来たわ！これで伏せカードを封じるわ！

「魔法カード、フリーズ・フォースを発動よ。
自分の水属性1体を選択し、
そのモンスターがレベル4以下なら相手の伏せカードを1枚、
それ以上なら2枚を選択し、相手はそのカードを発動出来ないわ！
十代達の2枚の魔法・罠カードを使用不能にするわ！」

「十代、今だ！」

「任せろ！俺は塔也のフィールドから、
罠カード　レイン・ダンスをチェーン発動だ！
フィールドのフォッグカウンターを全て取り除き、
その数１つにつき、ＬＰを５００ポイント回復し、　１０００
ポイント回復する度に１枚ドローするぜ！」

「アワワ、今フォッグカウンターは６個アリマース！」

「俺はフォッグカウンターを６個取り除いて、ＬＰを３０００ポ
イント回復して、
３枚ドローするぜ！」

十代に３枚もドローさせたらマズイわ！

「ウェーイト！！速攻魔法　サプライズ・ギフト発動デース！
相手のカード効果をお互いにカードを１枚ドローする効果にチェ
ンジシマスヨ！」

サプライズ・ギフト
速攻魔法

相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を「お互いにカード1枚ドローする。」という効果に変更する。

「あちゃ～…止められたか。」

「ワタシ達はデュエリストデス！
最後までファイトし続けマスヨ！」

「その意気よ、フォリナ！
LPが尽きるまで、私達は戦い続けるわ！」

「へっ、凄い闘志だな明日香、フォリナ！」

「フフッ、お互いにカードを1枚ドローシマスヨ！」

「そして、フリーズ・フォースで選択したカード1枚につき、選択した水属性の攻撃力を500ポイントアップ！
レイン・ダンスは発動したけど、チェーン処理の時には、まだフィールドに残っているわ。
よって、シベアルの攻撃力を1000ポイントアップ！」

氷魔巨獣　シベアル
ＡＴＫ２８００↓３８００

フリーズ・フォース

通常魔法

自分の水属性１体を選択して発動する。
そのモンスターがレベル４以下なら相手のセットカード１枚、それ以上なら２枚選択する。
相手は選択したカード効果を発動出来ず、
選択した水属性の攻撃力を、選択したカード×５００ポイントアップする。

「見事だ、明日香君。これなら、どちらのモンスターを攻撃しても、十代達のＬＰを０になるな…。」

「確かにシベアルの攻撃を受けたら十代達の負けだけど…。」
「…分かるぞ宝山氏、悪運の強いアイツらをあれ位では仕留められんな。」

「増川君、君は何を言っている？
あの２人の伏せカードは封じられているのだぞ？

明日香様の勝利は確実だ！」

「だが、フォリナ様が最小限に抑えたとは言え、アイツらにドローを許してしまった…。
アイツらはドローで何遍も状況をひっくり返した事があるからな…。」

「特にアニキは引き運が強いよ！
それでデュエルを逆転するだよ！ね、増川君？」

「…何故俺に振るんだ丸藤氏。」

「フフフ、聞いているぞ増川君。
君は遊城　十代君に１００回、いや２００回以上デュエルを挑んで負けたそうじゃないか！」

「…ぬぐぐ！嫌な事を思い出したしまったぞ、天野（あまの）　光（ひかる）！
だが、実際アイツらとデュエルしてみたら分かるぞ。
アイツらが如何にしぶといと言う事がな…。」

「これで終わりよ！シベアルで、十代のＴＯＲＮＡＤＯを攻撃！
ブリザード・ヘイル・ストーム！！」

シベアルが、極寒の息吹をＴＯＲＮＡＤＯに、無数の霜の針と共

に放った。

「まだ終わりじゃないぜ、明日香！
俺は手札から、雲魔物－コットン・ボールの効果発動だ！」

「オ～ノ～！その効果はッ！」

「手札のこのカードを墓地に送る事で、相手モンスター1体の攻撃を無効にするぜ！」　コットン・ボールですって！？
塔也は、さっきのサプライズ・ギフトの効果で引き当てたというの！？

「その後、相手フィールドにいるモンスターの数だけ、自分フィールドに雲魔物トークンを特殊召喚する！
俺を除いたフィールドだから、シベアルと十代のＴＯＲＮＡＤＯの2体だな…。
よって、トークン2体を守備表示で特殊召喚だ！」

雲魔物トークン×2
ＤＥＦ０

「なら、カードを1枚伏せてターンエンドよ！」

「よし、俺のターン、ドロー！」

十代・塔也　ＬＰ１０００

手札３枚　１枚

モンスターゾーン

十代

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ（ＦＣ×６）

塔也

雲魔物ーホワイト・ディック（ＯＲＵ×１）

雲魔物トークン×２

魔法・罠ゾーン

十代

E・HERO　アブソルートZero

塔也

伏せカード×1

明日香・フォリナ　LP2750

手札2枚　2枚

モンスターゾーン

明日香

氷魔巨獣　シベアル

フォリナ　無し

魔法・罠ゾーン

明日香

伏せカード×2

フォリナ　無し

「俺は魔法カード、平行世界融合（パラレルワールド・フュージョン）を発動！
除外ゾーンの融合素材モンスターをデッキに戻し、融合召喚するぜ！
ただし俺達は、このターン、この効果以降じゃ特殊召喚は出来ないけどな。」

平行世界融合（パラレルワールド・フュージョン）
通常魔法

自分の除外ゾーンから、決められた融合素材モンスターをデッキに戻し、
Ｅ・ＨＥＲＯと名の付く融合モンスター１体を融合召喚扱いとして特殊召喚する。
このカードを発動したターン、自分はモンスターを特殊召喚出来ない。

「俺は除外ゾーンのレディ・オブ・ファイアと、グランド・ロックをデッキに戻す！
平行世界より現れろ！Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア！！」

空間に亀裂が走り、そこから巨大な土偶の様な体を持つ戦士が、

亀裂から現れたわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア
ＡＴＫ２２００

「ガイアの効果発動！相手モンスター１体の攻撃力をエンドフェイズまで半分にし、
ガイアの攻撃力をその数値分アップする！」

「何ですって！？」

「ソ、ソンナッ！！」

氷魔巨獣　シベアル
ＡＴＫ３８００→１６００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア
ＡＴＫ２２００→３８００

「更に魔法カード、クラック・バック発動！
自分の魔法・罠ゾーンにセットしたカードを手札に戻し、
戻した数だけ相手の魔法・罠カードを破壊する！
塔也のセットしたカード１枚を俺の手札に加え、
俺から見て、明日香の伏せた右側のカードを破壊するぜ！」

クラック・バック

通常魔法

自分のセットした魔法・罠カードを手札に戻し、
戻した数だけ相手の魔法・罠カードを破壊する。
この効果で戻したカードは、このターンにセット出来ない。

「なら私は罠カード、フロスト・ダメージをチェーン発動！
フォリナの墓地からスカルヴォラスを除外し、　このターン、私達がダメージを受ける時、　３５００ポイントダメージを軽減するわ！」

「なら俺はそれにチェーンして、墓地から雲魔物－ミスティ・ベールの効果発動だ！
墓地のこのカードを除外し、フォッグカウンターを２個取り除く事で、　相手の魔法・罠カードを無効にし、破壊する！
十代のＴＯＲＮＡＤＯからフォッグカウンターを２個取り除いて、

フロスト・ダメージを無効にして破壊するぜ！

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＦＣ　６↓４

あれは塔也が最初のターンに墓地に送ったカード！
これを見越して温存していたと言うの！？

雲魔物－ミスティ・ベール
レベル１　水属性　悪魔族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ２０００

このカードが墓地に送られたターン、自分が受けるダメージは０になる。
墓地のこのカードを除外し、
フィールドのフォッグカウンターを２つ取り除く事で、
相手の魔法・罠カードを無効にして破壊する。

「サンキュー塔也！行くぜ明日香、フォリナ！！
俺はＥ・ＨＥＲＯ　ガイアで、氷魔巨獣　シベアルを攻撃！
コンチネンタル・ハンマー！！」

まだよ！まだ私は諦めないわ！！

「罠発動！アイス・リフレクション！！
自分フィールドの水属性が、相手モンスターの攻撃対象になった時、
その攻撃を無効にし、相手に攻撃モンスターの攻撃力の半分の数値分、ダメージを与える！」

アイス・リフレクション
通常罠

相手が自分フィールドの水属性を攻撃対象にした時、
その攻撃を無効にし、相手に攻撃モンスターの攻撃力の半分の数値分、ダメージを与える。

「流石に、この状況では彼らの負けは決まったも同然だな。」

「お前の目は節穴か！？天野　光！」

「…増川君、私が何処を見落としていると言うのだ？」

「アイツらの顔を見ろ！まだ勝負を諦めた顔ではないぞ…。」

「へへ、最高のデュエリストだぜ！２人共！！
だけど、勝つのは俺達だ！
俺は速攻魔法、残留思念を発動！
自分の墓地からモンスター２体を除外して、
このターンに受けるダメージを１度だけ０にする！
俺は自分の墓地からフォレストマン、塔也の墓地からターピュランスを除外して、
アイス・リフレクションで受けるダメージを０にするぜ！」

残留思念

速攻魔法

自分の墓地からモンスター２体を除外する事で、
このターンに受けるダメージを１度だけ０にする。

防がれた！？でも、これで十代はこのターン、何も出来ない筈！

「さぁ、見せてやれ十代！俺達のコンビネーションを！」

「おうっ！行くぜ！！俺は速攻魔法、活気団を発動！」

…っ！？融合じゃないですって！？
じゃあ、融合はまだ塔也の手札に…！

「明日香、その顔からすると、俺が融合を伏せたと思っていたようだな。」

「…やってくれたわね。融合を伏せずにそのまま手札に握っていたなんてね。」

「まあな、融合を手札に加えたら、俺の魔法・罠カードを狙ってくると踏んでたぜ。
けど、正直ヒヤヒヤしたけどな。
それじゃあ、活気団の効果発動だ！
フィールドのフォッグカウンターを４個取り除く事で…。」

「俺達のフィールドのモンスター１体は、このターン、２回攻撃が出来るんだ！
ＴＯＲＮＡＤＯのフォッグカウンターを４個取り除いて、Ｅ・Ｈ

ＥＲＯ　ガイアの攻撃をもう１度だけ可能にするぜ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ

ＦＣ　４↓０

活気団

速攻魔法

フィールド上のフォッグカウンターを４個取り除いて発動する。
自分フィールドのモンスター１体は、このターン２回攻撃出来る。

４つのフォッグカウンターが、ガイアに活力を取り戻させた。

「ノ～！それじゃあ、またガイアの攻撃が…。」

「行くぜ！明日香、フォリナ！！
Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイアで、もう１度氷魔巨獣　シベアルを攻撃だっ！」

「「コンチネンタル・セカンド・ハンマー！！」」

ガイアは両手を重ねて、
シベアルに拳を振り下ろした。

「ぐうぅぅっ！！」

「アァァァッ！！」

明日香・フォリナ　ＬＰ２７５０→１１５０

「これでトドメだぜ！Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯで明日香達にダイレクトアタック！！」

「「スーパー・セル！！」」

そう…、私達の負け…ね。

明日香・フォリナ　ＬＰ１１５０→０

明日香→十代ｓｉｄｅ

ふぅ、かなりギリギリなデュエルだったぜ…。
塔也のフォローが無かったら、ヤバかったぜ。

流石だぜ、２人共。

「え～、それでは、小日向さんに塔也君の票を譲ると言う事で宜しいですね？２人共。」

「ハイ、構いマセンヨ。」

「私も約束を受け入れるわ…。」

「…冗談じゃないわ。」

その時、小日向が割って入った。

「あんなデュエルをされた後じゃ、票を貰える訳にはいかないわ…。」

すると、会場全体から、2人への声援が響いた。

「ぬおぉぉっ！いいデュエルだったぞー！！　フォリナ様ー！！」

「とても感動的なデュエルをありがとうございます！明日香様！！」

「明日香君、素晴らしいデュエルだったぞー！！」

…まあ、殆どが明日香とフォリナのファンクラブの奴らなんだけどさ…。

…てか、三沢も一緒に声援をあげてるのな…。

「こんな状態で票を貰っても、みんなは納得しないし、私自身、願い下げよ…。」

そう言って、小日向はステージから降りていった。

「…アハハ、ワタシはただ、自分自身の信念を込めてデュエルをしただけデースヨ…。」

「私もよ、フォリナ。ただ1人のデュエリストとして認めて貰いたいだけ…。」

「この会場の声援が2人がデュエリストだって言っているぜ、明日香、フォリナ。」

「えっ？」

「ワッツ？」

「アカデミアじゃ、あらゆる称号はデュエルで勝ち取る物、だろ？十代。」

「ああ、そうだぜ！塔也。」

こうして、塔也の票はフォリナに入って、ミス・アカデミアの座はフォリナの物になったぜ。

その時には増川ら、フォリナのファンクラブ全員が号泣してたっけな。

まあ一方で、天野と明日香のファンクラブ全員は悔し泣きしてた

な…。

そういや塔也も、フォリナを褒めていたっけ。

…小声でだけどな。

決着！　決めろ、ダブルアタック！！（後書き）

俺は増川　海堂だ。

アカデミアの噂では、遊城　十代が手に取るドローパンは、必ず黄金のタマゴパンを引き当てるらしいな…。

よし！遊城　十代のドローパンをデュエルで勝ち取るとしよう！

「クックク、遊城　十代よ、そのドローパンを賭けて俺とデュエルしろ！」

「え～！？何でだよ増川！」

ゴネる遊城　十代に何とかデュエルの承諾を得て、デュエル開始だ。

ところがその時、乱入者が出てきてしまったのだ…。

次回、「誰の為のドローパン」

遊城　十代よ、俺の超絶コンボの前にひれ伏すがいいわ！

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ達のデッキが一通り出たので、軽くオリキャラ達を紹介します。

話が進んだら内容を更新します。

オリキャラ紹介

雲雀（ひばり）　塔也（とうや）

所属：オシリス・レッド
性別：男

身長：１６８？

体重：６７？

見た目：黒髪で少しツンツン頭、瞳の色は茶色。

カードデザイナーの父親と写真家の母親を持つ日本人。
　よく幼少時に、妹の葵と両親と一緒に世界中を旅して回った事がある。
その為、体力と勘は人並み以上ある。
友達想いがあり、少し熱血漢だが、朝に極力弱く、よく葵や翔に起こして貰っている。
使用デッキは、エクシーズを搭載した雲魔物デッキ。
父親のデザインのカードも多数入っている。

皇（すめらぎ）　宝山（ほうざん）

所属：オベリスク・ブルー

性別：男

身長：１７１？

体重：６８？

見た目：水色の髪で、ややツンツン頭。瞳の色は緑色。

日本人の父親と、フランス人の母親を持つハーフ。
家は、やや裕福であり、その関係で万丈目と知り合った。
幼少時にデュエル大会に出場して、
その時にペガサスの目に適い、宝玉獣のカードを託される。
基本、穏やかな性格な為、滅多に怒らない。
使用デッキは、多くの種族が入った宝玉獣デッキ。

コレルス・ベネット

所属：ラー・イエロー

性別：男

身長：１８０？

体重：７８？

見た目：黒髪で、長髪。瞳の色は灰色で、肌は褐色。タグを首から下げている。

アフリカ人で、オブライエンの従兄弟であり、オブライエンの父親の弟子でもある。
その為、格闘術等、軍事に関わる事は一通り会得している。
今はオブライエンの元を離れ、フリーの傭兵として活動中で、とある依頼により、デュエルアカデミアに潜入し、精霊のカードを探している。
使用デッキは、シンクロを搭載したヴォルカニックデッキ。

フォリナ・ロック・ハート

所属：オベリスク・ブルー

性別：女

身長：１５１？

体重：４７？

見た目：金髪のポニーテールで、瞳の色は青色。
冒険家の父親と画家の母親を持つアメリカ人。
幼少時に世界中を回っていた塔也と知り合い、それ以来、塔也に

想いを寄せている。
呪術的なデザイン等、変わった物が好み。
フレンドリーな性格だが、1度決めた事は貫き通す頑固な一面もある。　使用デッキは、岩石族中心の化石デッキ。

増川（ますかわ）　海堂（かいどう）

所属：オベリスク・ブルー

性別：男

身長：169？

体重：70？

見た目：黒髪の少しボサボサの長髪。
瞳の色は茶色でつり目。

新聞記者の父親と、主婦の母親を持つ日本人。
アカデミアの入学当時、ある生徒にデュエルに完膚無きまでに敗北して挫折してた所を、フォリナに励まされ、それ以来、フォリナの事が好きになった。
ファンクラブを立ち上げる位、熱狂的にのめり込んでいる。
粘着質な性格で、ちょっとした事では目的に達成するまで諦めない。
気に入らない者は、名字と名前で呼ぶ。

使用デッキは、エクシーズを搭載した魚・海龍・水族デッキ。
最近は打倒十代の為、デッキを改築中である。

建宮（たてみや）　御門（みかど）

所属：ラー・イエロー
性別：男

身長：１７６？

体重：７１？

見た目：黒髪の整った短髪。
瞳の色は茶色で、眼鏡を掛けている。

三沢やベネットが所属しているラー・イエローの寮長。
生徒からは優しいと評判であると同時に、怒らせらた怖いと噂されている。
時々、アカデミアを出張で離れるが多い。
使用デッキは帝デッキ。

誰の為のドローパン（前書き）

お待たせしました！

第１６話です。

今回はＴＦより、あのキャラが出てきます。

誰の為のドローパン

増川ｓｉｄｅ

俺の名前は増川　海堂。
フォリナファンクラブの親衛隊長だ。

俺にとってフォリナ様は、正に女神だ！

何故かと言うと、フォリナ様とアカデミアの入学当時に初めて会った事が強く印象に残っているからだ…。

フォリナ様に出会う以前の俺は、

あるアカデミアの生徒の１人に、手も足も出ずにデュエルで完敗してしまって、かなり滅入っていた。
自分の非力さを、嫌と言う程思い知らされ、アカデミアを去ろうとその時は考えた物だ…。

その時だった！フォリナ様が俺に笑顔で声をかけてくれたのは…。

フォリナ様は、俺の事を優しく励ましてくれたのだ…。

「暗い気分はバッドデースヨ？
もっとポジティブに頑張りマショウ！
きっと、努力が実を結ぶ時がやって来マスヨッ！！」

俺はその時、涙が止まらかったな…。
その時から、フォリナ様に振り向いてくれる為に色々と努力した！
勉強もそう、デュエルもそうだ。

勉強は問題無いが、デュエルの方は難ありだな…。

雲雀　塔也、遊城　十代…この2人に俺は頭を悩ませている。

元は、フォリナ様のアドレス欲しさにデュエルを挑んだが…。

…いや、今もそうか。

雲雀　塔也の提案により、俺は遊城　十代を勝たねば、俺は奴とデュエルする事が出来なくなったのだ。　最初は、たかがオシリス・レッドと甘く見ていた。
だが、幾ら挑んでも、後少しと言う所で負けてしまうのだ。

だが、俺は諦めんぞ！あの頃とは違い、今の俺にはフォリナ様がいるからな！
アイツらに勝ち、フォリナ様とお話するのだ！！

…とは言っても、いい加減それ以外のフォリナ様へのアプローチも考えねばな…。

…まずは購買でも行って、何か食うか。
それから考えてみるか。

購買に着くと、遊城　十代といつものメンバーの雲雀　塔也と、三沢氏、宝山氏、丸藤氏がいた。

宝山氏を何故名前で呼んでいるかと言うと、
ミス・アカデミアの2～3日前に廊下で会って、
「名前で呼んで欲しいな」、と言われたからだ。　別に宝山氏の事は嫌いでは無いからな。

…とまあこの事はこれ位にして、アイツらが何か話しているな。

「塔也、一緒にドローパン買おうぜ。」

「パスだ、俺はくさや入りパンを当ててからは、そいつは買わんと決めたからな。
俺は普通のカレーパンを買うぞ。」

「ちぇ～選んでいる時のドキドキ感がたまんねえじゃんかよ…。」

ドローパンか…。確か、黄金のタマゴパンと言うかなり美味いパンがあると言うあれか。

当たりは確かに美味いが、
中にはゲテモノが入った外れがある…。俺も外れを当てて以来、久しく買って無いな。

「それにしても、凄いね十代は。　黄金のタマゴパンを連続で当ててるんだからね。」

「アニキが選んだドローパンが黄金のタマゴパンだったのは、大体５０回以上だよね？」

「…全く、その引き運を少し分けて欲しいね。」

…なぬ！？するとあれか？遊城　十代は毎回黄金のタマゴパンを当てていると言う事か！？

何て奴だ…あれは１００個に１個しか当たらないと言われているのに…。

…待てよ、コイツは使えるかもな。

ちょうど奴に対抗出来るデッキが完成したんだ。

雲雀　塔也への挑戦権をゲットして、ついでに奴のドローパンもゲットし、

そいつをフォリナ様に渡して、一緒に昼食を食べるとしよう…。

そうと決まれば、行動開始だ！

「ハッハハー！よう、皆の者！！

また５人で昼食か？」

「増川！お前、またフォリナのアドレスを賭けたデュエルをするつもりかよ！！」

「騒ぐな雲雀　塔也よ、今回はそっちではないぞ。」

「え？じゃあ、何を賞うつもりなの？増川。」

「フフフ…遊城　十代よ！
今回は、お前の持っているそのドローパンを賭けて、俺とデュエルするがいい！」

「な、何だって！？増川！俺のドローパンを欲しがるなんて、どういうつもりだよ！！」

「ハッハハー！俺は知っているぞ、遊城　十代よ！
お前はいつもドローパンを買って、
必ず、黄金のタマゴパンを当てているらしいな。」

「え！？何で増川が、俺がタマゴパンを当てた事を知ってるんだ！？」

「…まあ、毎回当ててたら噂にもなるよね…。」

「…宝山君、アニキは噂には疎いから…。」

「…で、俺はドローパンを賭けるとして、増川は何を賭けるつもりだよ？」

「下らない物だったら受けなくていいぜ、十代。
今日は人を待たせているんだからな。」

…全く、現金な奴らめ。

「…勿論、タダで受けろとは言わん。
もしお前が勝てたら、コイツをやるぞ。」

そう言って俺は、懐からある物を取り出す。

「うわぁ～！！それって、数量限定で販売している幻のガスタ・バウムかいっ！？」

宝山氏が目を輝かせて尋ねた。

「流石は宝山氏、お目が高いな。
そうだ、コイツは我がファンクラブの同志が、通販で買った奴を俺に譲ってくれたのだ。」

「あれって、そんなに美味いのか？宝山。」

「勿論だよ！十代！！食感はフワフワしてて、後味は爽やかとした特製メロンクリームが絶品なんだよ！」

「そう言えば宝山君って、スイーツが大好物だったね。」

「ガスタ・バウムなら小さい時に食べた事があるな…。
海外に親父とお袋、そして葵と旅行した時だったかな…。
確かにあれは美味かった…。」

「塔也…君の小さい頃は、一体何をしてたんだ？」

「両親に連れられて、世界中を転々とな…。
あれは確か…。」

うぬぬ…話が脱線しつつあるな…。

「とにかく！俺はコイツを賭けてお前にデュエルを挑むが、どうする遊城　十代よ！」

「ねえっ！受けてあげようよ十代！！僕、ガスタ・バウムを食べてみたいんだ！」

「おいおい…宝山。」

「宝山が凄く美味いって言うのか…。なんか、俺もそいつを食べてみたくなったぜ！」

よし！食い付いて来たな！！

「フフフ、なら決まりだな。では、廊下に出ろ！遊城　十代！！今日こそお前を倒してくれるわ！」

「十代！頑張って！！応援するよ！」「あまり長引かせるなよ～、十代。昼休みが終わっちまうからな。」

「分かっているって、塔也。じゃあ行ってくるぜ！」

「…いいのかな、あの2人を待たせて。」

「こうなったら、十代が早く増川に勝つ事を祈るしか無いな…。」

「行くぞ！お前を倒す為に改良を重ねに重ねたこのデッキで絶対に勝つ！！」

「楽しみだぜ、増川！」

「「デュエ…。」」

「お待ちなさい、庶民達。」

「え？何だ何だ！？」

「誰だ？デュエルに割って入って来る奴は！」　振り向くと、白いリボンを付けた髪の青いオベリスク・ブルーの女子生徒が、

こっちに向かって歩いて来た。

「ぬっ！お前は確か…。」

「私の事をお前呼ばわりですって…！？
歩をわきまえなさい！庶民！！」

ぬくぅ…、いちいち腹が立つ奴だ！

「えっと、君は海野（うみの）さんだよね。
君もこれから昼食かい？」

「あら…ごきげんよう、宝山君。
私もちょうど、寮の食堂でランチを頂きに向かう所でしたの。」

くぬぅっ！俺と宝山氏とでは態度が全然違うではないか！

…コイツの名前は海野（うみの）　幸子（ゆきこ）。　オベリスク・ブルーの生徒で、
言葉使いで分かる様に、コイツはお嬢様と言う奴で、
実家もかなりの金持ちだ。

デュエルの腕も、オベリスク・ブルーの女子生徒の中でもかなり強い方だ。
…まあ、フォリナ様には適わないがな。

「では、とっとと寮へ行け。
俺達はデュエルで忙しいんだ。」

「増川が十代に一方的に仕掛けたデュエルだけどな…。」

「まあっ！私に向かって何て無礼な態度をっ！
…まあいいわ、庶民達、ガスタ・バウムと、噂のタマゴパンを賭けてデュエルをすると仰ったのね？」

「…だったら何だと言うんだ？」

まさか、コイツ…デュエルに乱入する気か！

「ならば、私もそのデュエルに混ぜなさい。
私が勝ったら、ガスタ・バウムとタマゴパンは、私が頂くわ。
2つ共、是非とも召し上がってみたかった品物ですので。」

「ふざけるな！俺はお前とデュエルする気など毛頭無いわ！」

「また私の事をお前などと…。」

「と言うか、俺が勝ったら幸子はどうするんだよ？」

遊城　十代の言葉に半ば呆れながら、海野　幸子は答える。

「…ハァ、もういいですわ…。
…そうね、では万が一私が負けたら、
あなた達に今夜、私の専属シェフの作るフルコースをご馳走致します。
…これでいかがかしら？」

「専属シェフって…金持ちって、凄いな。」

「あら、これ位普通ですわ。」

「いやいや、普通じゃ無いッスよ…。」

「僕の家じゃ、専属シェフはいなかったかな。
毎日違うメイドさんが料理を作ってくれたよ。」

「あら、宝山君の家にはいらっしゃらないのね…。」

「うん、でもメイドさんと一緒に料理を作ると、とっても楽しいよ？」

「フフ、それは楽しそうですわね。
宝山君、今度あなたのお屋敷にお邪魔しても宜しいかしら？
その時は是非、私もご一緒に料理をしてみたいものですわね。」

「勿論、歓迎するよ！海野さん。」

「宝山君の家ってお金持ちみたいだね…。」

「ああ、宝山の両親は、小さい規模なからも、経済を担う皇グループの社長と社長夫人だ。」

「…なんか、２人の会話についていけねぇよ十代。」

「ああ、内容がチンプンカンプンだぜ…。」

…全くだ、俺の家は庶民そのものだからな。
…っと、いかんいかん！
また話が逸れているではないか！

「ええい！デュエルすると言うのなら、2人まとめて叩きのめしてくれるわ！」

「私を誰だと思って？あなた達にたっぷりと私の実力を分からせてあげるわ！」

「へっ！面白いデュエルになりそうだぜ！！」

「ならばっ！」

「参りますわ！」

「行くぜっ！」

「「「デュエル！！！」」」

増川　ＬＰ４０００

海野　ＬＰ４０００

十代　ＬＰ４０００

「…あ～あ、何かさっきよりも大変な事になっちゃったよ…。」

「３人となると、バトルロイヤル形式か…。
面倒なデュエルになりそうだな。」

「まあ、十代なら滅多な事じゃあ負けねぇな。」

「けど、海野さんもかなり強い戦術を持ったデュエリストだよ。」

「そうなると勝敗を分けるとしたら、どのプレイヤーを先に脱落させるか…だな。」

ディスクのルーレット機能で順番は、

俺、海野　幸子、遊城　十代となった。

「先攻は貰った！俺のターン、ドローだ！
俺はバルーン・オクトパスを攻撃表示で召喚だ！」

風船の様に、フワフワと空を漂うタコが現れた。

バルーン・オクトパス
ＡＴＫ１８００

「風属性だと！？増川は水属性のデッキじゃないのか！？」

フフフ、驚いているな…雲雀　塔也！

「ハッハハー！俺が今使っているデッキは、風属性と水属性のハイブリッドデッキなのだ！
種族のバラつきは、前のデッキと変わってないがな。」

「…下品な笑い声ね。早くターンを進めて下さらないかしら？」

くぅ～！本当に腹が立つ奴だな！

「フン、俺は永続魔法、ラピュタの雲海門を発動し、カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

「では私のターン、ドローよ。」

増川　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
バルーン・オクトパス
魔法・罠ゾーン
ラピュタの雲海門
伏せカード×１

海野　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

十代　ＬＰ４０００

手札５枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

「私は永続魔法、ウォーター・ハザードを発動よ。」

ちいっ！あれは…。

「自分フィールドにモンスターが存在しない時、手札から、レベル４以下の水属性１体を特殊召喚出来るわ。来なさい、竜影魚　レイ・ブロント！」

目の無い海龍が、水流と共に出現した。

…というか、アイツって、ああ見えて魚族なんだよな…。

竜影魚　レイ・ブロント

ＡＴＫ１５００

「そして、レイ・ブロントを再度召喚して、
レイ・プロントのデュアル効果が発動するわ！
元々の攻撃力を２３００とし、
守備表示モンスターに攻撃した時、貫通ダメージを与えるのよ！」

竜影魚　レイ・ブロント

ＡＴＫ１５００→２３００

竜影魚　レイ・ブロント

レベル４　水属性　魚族／デュアル

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１０００

このカードはフィールドまたは墓地にいる時、通常モンスターとして扱う。
このカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、
効果モンスターとして扱い、以下の効果を得る。
●：元々の攻撃力は２３００となり、

守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃が上回った場合、貫通ダメージを与える。
このカードが攻撃した時、守備表示となり、次の自分のエンドフェイズまで表示形式を変更出来ない。

「先攻1ターン目から攻撃力2000以上のモンスターを…。やるね、海野さん」

「増川と十代を相手にするんだ、これ位出来ねぇと…。」

「そしてカードを2枚伏せてターンエンドですわ。」

「よし!行くぜ!!俺のターン、ドロー!」

増川　LP4000
手札3枚
モンスターゾーン
バルーン・オクトパス
魔法・罠ゾーン

ラピュタの雲海門

伏せカード×１

海野　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

竜影魚　レイ・ブロント

魔法・罠ゾーン

ウォーター・ハザード

伏せカード×２

十代　ＬＰ４０００

手札６枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

「俺はＥ・ＨＥＲＯ　エアーマンを攻撃表示で召喚だ！」

E・HERO　エアーマン
ATK1800

来たか、HEROをサーチするモンスターが！

「エアーマンの効果発動！
召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからHERO1体を手札に加える。
俺はE・HERO　ムーン・ウォーカーを手札に加えるぜ。
そして、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「では行くぞ！俺のターン、ドローだ！」

増川　LP4000

手札4枚

モンスターゾーン

バルーン・オクトパス

魔法・罠ゾーン

ラピュタの雲海門

伏せカード×１

海野　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

竜影魚　レイ・ブロント

魔法・罠ゾーン

ウォーター・ハザード

伏せカード×２

十代　ＬＰ４０００

手札４枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

アイツらはまずは、互いに様子見の様だな…。
ならば、俺から行かせて貰うぞ！

「俺はエアジャチを、攻撃表示で召喚するぞ！」　赤と黒の斑点を持つシャチが飛来したぞ。

エアジャチ

ＡＴＫ１４００

「そのモンスターは…！庶民にしてはなかなかのカードね。」

ほう、海野　幸子はコイツの効果を知っているのか。

「俺はエアジャチの効果発動！
１ターンに１度、手札から魚・海龍・水族１体を除外し、相手フィールドの表側表示のカード１枚を破壊するぞ！
…だが、この効果を使った時、エアジャチは次の俺のターンのスタンバイフェイズまで除外されるがな…。」

エアジャチ

レベル３　風属性　海龍族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ３００

１ターンに１度、手札から魚・海龍・水族１体を除外し、相手フィールドの表側表示のカード１枚を破壊する。
その後、このカードを次のスタンバイフェイズまで除外する。

「俺は手札からスカイトビウオを除外する！
行け、エアジャチよ！海野　幸子のレイ・ブロントを破壊しろ！
エア・ダイブ！！」

エアジャチは宙を舞ってから、
レイ・ブロントに向かって突撃をすると、
そのまま、上空へと飛び去った。

「くうっ…！よくも私のモンスターをっ！」

「フン…攻撃が出来ん時にそんなモンスターを召喚するから、的にされるのだ！」

「…決めたわ！まずはあなたから先に倒してあげますわ！」

「出来る物ならやってみるがいいわ！

…だがな、自分フィールドから魚・海龍・水族が除外された事で、ラピュタの雲海門の効果発動をするぞ！

除外したモンスターと同じレベルの魚・海龍・水族1体をデッキから特殊召喚出来るのだ！」

ラピュタの雲海門

永続魔法

自分フィールドから魚・海龍・水族が除外された時、
そのモンスターと同じレベルの魚・海龍・水族1体をデッキから特殊召喚出来る。

「除外したエアジャチのレベルは3…。
よって、デッキからレベル3のアドレナ・ジェリーを特殊召喚するぞ！」

空に浮かぶ丸いゲートから、
赤いクラゲが降り立った。

アドレナ・ジェリー
ＡＴＫ１５００

「あのモンスターを召喚したって事は、増川はエクシーズ召喚する気だな。」

「更にラピュタの雲海門にチェーンして、ウィングトータスを特殊召喚するぞ！
コイツは自分フィールドの表側表示の魚・海龍・水族が除外された時、手札または墓地から特殊召喚出来るのだ！」

俺のフィールドに、翼の生えた亀が空を舞う。

ウィングトータス
ＡＴＫ１５００

ウィングトータス
レベル３　風属性　水族
ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１４００

自分フィールドの表側表示の魚・海龍・水族が除外された時、
このカードを手札または墓地から特殊召喚出来る。

「レベル３が２体…エクシーズ召喚でもするつもりかしら？」

「当然だ！俺はレベル３のアドレナ・ジェリーと、ウィングトータスをオーバー・レイ！！
２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！
海底をたゆとう狩人よ、
海底より出でて、獲物を撃ち落とせ！

エクシーズ召喚！来い、爆撃戦艦－ブラスト・シャーク！！」

俺のフィールドの２体のモンスターが渦に入ると、
そこから、魚雷を装填した機械のサメが飛び出した。

爆撃戦艦ーブラスト・シャーク

ＡＴＫ２１００

ＯＲＵ　０↓２

「覚悟しろ！遊城　十代！！
ブラスト・シャークで、エアーマンを攻撃！
更にブラスト・シャークと、装着されたアドレナ・ジェリーの効果発動だ！
アドレナ・ジェリーを装着したモンスターが攻撃する時、
装着したモンスター・エクシーズの攻撃力を５００ポイントアップ！
そして、ブラスト・シャークが攻撃する時、オーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、
自分フィールドの魚・海龍・水族１体につき、相手に３００ポイントのダメージを与えるぞ！」

爆撃戦艦ーブラスト・シャーク

ＡＴＫ２１００↓２６００

ＯＲＵ　２→１

爆撃戦艦ーブラスト・シャーク

ランク３　水属性　魚族／エクシーズ

ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ１６００

レベル３×２体

このカードが攻撃する時、
このカードのオーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、
自分フィールドの魚・海龍・水族×３００ポイントダメージを、
相手に与える。

バトルロイヤルデュエルの場合にはタッグデュエル同様、お互いのプレイヤーまたはフィールド全体に及ぶ効果以外の場合、効果対象を選択せねばならん。
…さて、どいつにしようか。

「…決めたぞ！ブラスト・シャークの効果の対象は…。
海野　幸子！お前だ！！」

「私に刃向かうなんていい度胸ね、庶民！」

「何とでも言うがいい！俺のフィールドの魚・海龍・水族は合計2体だ…。
よって、６００ポイントのダメージを喰らえ！！」

ブラスト・シャークは、装填した兵器から小型魚雷６発を、海野幸子に撃ち込んだ。

「くぅぅっ！私に手をあげるなんて…。
躾がお望みの様ね！！」

海野　ＬＰ４０００→３４００

「…さて、待たせたな遊城　十代！！
ブラスト・シャークよ、エアーマンを撃墜しろ！
ジェット・クラスター！！」

さっきよりも大きな魚雷を口から発射し、エアーマンを撃墜させた。

「ぐうぅっ！」

十代　ＬＰ４０００→３２００

「エアーマンが…！けどこの瞬間、罠カード　ヒーローシグナルを発動！　自分フィールドのモンスターが戦闘で破壊された時、自分のデッキまたは手札から、レベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体を特殊召喚出来る！来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

ＤＥＦ２０００

ぬう…これでは遊城　十代には攻撃出来んな…。

「ならばバルーン・オクトパスよ、海野　幸子にダイレクトアタックだ！」

「まあっ！浅ましい！！罠カード、ウォーター・リフトを発動よ！相手フィールドのモンスターがダイレクトアタックして来た時、その攻撃を無効にし、自分のデッキまたは手札から、レベル４以下の水属性１体を特殊召喚するわ！

私のデッキよりおいでなさい、アトランティスの番兵！！」

バルーン・オクトパスの目の前に水柱が吹き出し、
そこから、貝の鎧を纏った魚人が飛び出して、盾を構えて行く手
を阻む。

アトランティスの番兵
ＤＥＦ２０００

ウォーター・リフト
通常罠

相手フィールドのモンスターがダイレクトアタックをした時、
その攻撃を無効にし、自分のデッキまたは手札からレベル４以下
の水属性１体を特殊召喚する。

「くぅ…これでは攻撃出来んではないか！」

「伏せカードがあるにも関わらずに攻撃を仕掛けるなんて…。
所詮は、庶民と言った所かしら？」

「当然備えはあるぞ！メインフェイズ２に移り、　俺は魔法カード、ラピュタの贈り物を発動！

エンドフェイズに、このターンに自分フィールドまたは手札から魚・海龍・水族が除外された数だけドローするのだ！
更に通常魔法を発動した事で、除外ゾーンからスカイトビウオを特殊召喚出来るぞ！」

上空から突然、翼の様なヒレを持つトビウオが飛来した。

スカイトビウオ
ＡＴＫ１７００

ラピュタの贈り物
通常魔法

エンドフェイズに、このターンに自分フィールドまたは手札から魚・海龍・水族が除外された数だけドローする。

スカイトビウオ
レベル４　風属性　魚族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ６００

自分が通常魔法を発動した時、このカードを除外ゾーンから特殊召喚出来る。

「フィールドを更に展開して、更に手札補充まで…。庶民にしてはいい戦略ね。」

「フン、エンドフェイズに移るぞ。このターン、俺のフィールドと手札から除外された魚・海龍・水族は２体だ…。ラピュタの贈り物の効果により２枚ドローだ。」

「増川の奴、言うだけあってかなり強くなっているな。」

「確かにね、海野さんと十代にそれぞれダメージを与えるなんて凄いや。」

「そうだな…しかもあのデッキは、除外を最大限利用するデッキみたいだから、かなり手強い筈だ。」

「アニキ…頑張ってっ！」

予定は少し狂ったが、遊城　十代よ…俺が構築した新デッキの前にひれ伏すがいいわ！

誰の為のドローパン（後書き）

私は庶民達と、ガスタ・バウムと黄金のタマゴパンを賭けたデュエルをする事になりましたわ。

「このデュエル、このまま俺が押し切ってくれるわ！」

「あまり調子に乗らない事ね…。
私の実力をその目に焼き付けなさい！庶民達！！」

…だけど、もう1人の庶民によって、
私は窮地に立たされてしまいましたわ…。

けれども、私は諦めませんわ！
…お願い、来て！私の切り札！！

次回、「ランチはデュエルの後で…」

次回も刮目してご覧なさい、庶民達。

ランチはデュエルの後で…（前書き）

大変お待たせしました！

第１７話です。

多人数デュエルは相変わらず構成を悩みます。

その分、やりがいもありますが…。

今回は十代の新ＨＥＲＯが登場しますよ。

ランチはデュエルの後で…

海野ｓｉｄｅ

私(わたくし)はいつも通りに、昼休みにランチを頂く為に寮へ戻る最中でしたわ…。

購買の近くを通った時、
庶民達が、ガスタ・バウムと黄金のタマゴパンを賭けたデュエルをすると意気込んでいましたわ。

…まあ、意気込んでいたのは1人だけでしたけど…。

ガスタ・バウムも黄金のタマゴパンも、以前より是非とも召し上がってみたい物でしたので、
私は庶民達に、そのデュエルに加える様、申し込みましたわ。

…それに、あの天上院　明日香と、フォリナ・ロック・ハートにタッグデュエルで勝利した遊城　十代と言う庶民の実力を拝見してみたいと思っていましたし…。

近い内に、一緒にいた雲雀　塔也と言う庶民ともデュエルしてみたいものですわね。

「ハッハハー！どうだ、俺のデッキの力は！

恐れ入っただろ、お前ら！！」

「ハハ…確かに前と比べて格段に強くなったな、増川。」

…くっ！先程から思っていましたが、本当に下品な殿方ですわね…！

…それに比べて遊城　十代は、何とも純粋ですこと…。

「増川の奴、完全に調子づいてやがる…。」

「いや、あれは元の性格からの発言だろう…。

ああ見えて、用意周到に守りを固めている事がよくある。

増川とはそういう奴だ。」

「三沢氏！余計な発言は止めてくれ！」

「確かに…今までも油断している様に見えても、結構守りが固かったよね。」

「宝山氏まで…。」

「でも結局、アニキに負けているけどね。」

「止めろ止めろ!!…ええい、俺はターンエンドだ!
どうした海野　幸子!お前のターンだ、早く進めろ!」

周囲に罵倒され、挙げ句私に八つ当たりするなんて…。
もはや、庶民と呼ぶのもおこがましいわね…。　下民と呼ぶ事にしましょう。

「お黙りなさい、下民!
今にあなたを跪かせて差し上げますわ!」

「お前!さり気なく俺を格下げするな!」

「フン…私のターン、ドローよ。」　「人の話を聞かんかっ!」

増川　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

爆撃戦艦－ブラスト・シャーク（ＯＲＵ×１）

バルーン・オクトパス

スカイトビウオ

魔法・罠ゾーン

ラピュタの雲海門

伏せカード×１

海野　ＬＰ３４００

手札３枚

モンスターゾーン

アトランティスの番兵

魔法・罠ゾーン

ウォーター・ハザード

伏せカード×１

十代　ＬＰ３２００

手札４枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

…さて、どうしましょう。

あの下民、態度は最低ですけど、

実力はあるみたいですわ…。

それに、遊城　十代に対して守りを敷かなければなりませんし…。
今ある手札で、流れを呼び込むしかない様ね…。

「あなた方2人に見せて差し上げますわ…。海底に存在する楽園を！
私はフィールド魔法、伝説の都　アトランティスを発動致しますわ！」

周囲の景色が、海底に沈んだ都市の風景に変わりましたわ。

「う、うわぁ～！溺れる～！！」

「…何してるんだよ十代。」

「…これはソリッド・ビジョンですわ。
溺れる筈がありませんわよ…。」

「…あっ！そうだったぜ。
あまりにもリアルだったから、つい…。」

…全く、庶民は滑稽ですわね。

「…では続けます。伝説の都　アトランティスは、
フィールドの水属性の攻守を２００ポイントアップし、
更に、お互いの手札とフィールドの水属性モンスターのレベルを
１つ下げますわ。」

アトランティスの番兵
レベル４→３
ＡＴＫ１２００→１４００　ＤＥＦ２０００→２２００

爆撃戦艦－ブラスト・シャーク
ＡＴＫ２６００→２８００　ＤＥＦ１６００→１８００

「フン、わざわざブラスト・シャークの攻守をアップさせるとは
…。
どういうつもりだ？海野　幸子。」

…確かに、このままでは、下民のモンスターの攻守を強化させた
だけで終わってしまいますわ…。

…そう、このままでは…ね。

「当然、これで終わりではありませんわ。
私は魔法カード、豊穣の果実を発動よ！
フィールド魔法が存在する時に発動出来、
カードを1枚ドローしますわ。
更に発動しているフィールド魔法のコントローラーが私だった場合、もう1枚ドロー出来ますのよ！」

豊穣の果実
通常魔法

フィールド魔法が存在する時に発動出来、
カードを1枚ドローする。
更に発動しているフィールド魔法のコントローラーが自分だった場合、もう1枚ドロー出来る。

「成る程な、それで伝説の都　アトランティスを発動したのか…。
まあ…いいカードを引ける様、祈る事だな…。」

「フィールドに存在する伝説の都　アトランティスは私のカードです。
よって、2枚ドローよ！」

…フフ、来た様ね。

「私は素早いマンタを守備表示で召喚するわ。　そして、アトランティスの効果で、攻守がそれぞれアップしますわ。」

小さなエイが、名の通り颯爽と現れたわ。

素早いマンタ

レベル２→１

ＡＴＫ８００→１０００　ＤＥＦ１００→３００

「そして、カードを１枚伏せて、ターンエンドよ。」

「何だ何だ？結局いいカードを引けなかったのか？海野　幸子。」

…フン、今に見てなさい下民。

「…どうかしらね？

さあ…庶民、あなたのターンよ。」

「へっ！なら行くぜ！！俺のターン、ドロー！」

増川　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

爆撃戦艦－ブラスト・シャーク（ＯＲＵ×１）　バルーン・オクトパス

スカイトビウオ

魔法・罠ゾーン

ラピュタの雲海門

伏せカード×１

海野　ＬＰ３４００

手札１枚

モンスターゾーン

アトランティスの番兵

素早いマンタ

魔法・罠ゾーン

ウォーター・ハザード

伏せカード×２

十代　ＬＰ３２００

手札５枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「スタンバイフェイズにフォレストマンの効果を発動して、
デッキから融合を1枚、
手札に加えるぜ！」

融合を…どうやらこのターン、庶民は動く様ね…。

「行くぜ！魔法カード、融合を発動！
俺はフィールドのフォレストマンと、手札のオーシャンを融合！
来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース！！」

フォレストマンとオーシャンが融合して、
庶民のフィールドに、全身が白い巨人の戦士が出現したわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース
ＡＴＫ２５００

「フン、来おったか融合モンスター…。だが、攻撃力はこっちが
上だぞ！」

「まあ、見てな！俺は、Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカーを攻

撃表示で召喚！」

黒と黄色のスーツを着服した戦士が、ステッキを携えて現れましたわ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカー

ＡＴＫ１８００

「行くぜ！Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカーで、スカイトビウオを攻撃だ！」

ムーン・ウォーカーは、空中を飛び交うスカイトビウオを捉えて、ステッキで叩き落としたわ。

「フン、軽いわ！」

増川　ＬＰ４０００→３９００

「次、行くぜ！Ｅ・ＨＥＲＯジ・アースで、バルーン・オクトパスに攻撃！
アース・インパクト！」

「甘いわ！俺はバルーン・オクトパスの効果発動だ！

相手モンスターが攻撃した時、
その攻撃を無効にするぞ！」
バルーン・オクトパスは、
空気を吐き出して、ジ・アースを押し返したわ。
自身は縮んで、上空へ飛んでいったわね。

「へへっ、やるな！増川。」

「フフン、バルーン・オクトパスは効果を使用した時、
次の自分のスタンバイフェイズまで除外するぞ。」

バルーン・オクトパス

レベル４　風属性　魚族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ９００

相手モンスターが攻撃した時、
その攻撃を無効にする。
その後、次の自分のスタンバイフェイズまで除外する。

「そして、バルーン・オクトパスが除外された事で、
墓地からウィング・トータスを守備表示で特殊召喚し、

ラピュタの雲海門の効果で、
ゴールデン・ジェリーを攻撃表示で特殊召喚だ！」

ゴールデン・ジェリー
レベル４→３
ＡＴＫ１８００→２０００
ＤＥＦ１６００→１８００

ウィング・トータス
ＤＥＦ１５００

「まだまだだぜ！俺は速攻魔法、融合解除を発動！
融合モンスター１体をエクストラデッキに戻し、墓地から融合素材モンスター一組を特殊召喚する！

ジ・アースをエクストラデッキに戻し、墓地からオーシャンとフォレストマンを攻撃表示で特殊召喚だ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン

レベル４→３

ＡＴＫ１５００→１７００

ＤＥＦ１２００→１４００

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

ＡＴＫ１０００

融合解除

速攻魔法

フィールドの融合モンスター１体をエクストラデッキに戻し、その融合モンスターの素材モンスター一組が墓地に存在する時、それらのモンスターを墓地から特殊召喚出来る。

「攻撃表示だと？２体共、俺のモンスターには及ばんぞ？」

「慌てるなよ増川。Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカーが、俺のフィールドに存在する時、俺のフィールドのＥ・ＨＥＲＯは、ダイレクトアタックが出来るんだぜ！」

「な、何だとぉ～！？」

「…けど、与える戦闘ダメージは半分になるけどな。」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカー

レベル４　闇属性　戦士族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１２００

自分フィールドのＥ・ＨＥＲＯは、
相手にダイレクトアタックが出来る。
この効果でダイレクトアタックした場合、
与えるダメージは半分になる。

見事ですわね…。１ターンの内に、これだけのラッシュを…。

「行くぜ増川！２体のＨＥＲＯでダイレクトアタックだ！」

「ぬおおっ！…くっ、まだまだだ！」

増川　ＬＰ３９００→２５５０

「メインフェイズ２に移って、
魔法カード、ラッシュ・アワーを発動！
このターン、攻撃した自分フィールドのＨＥＲＯの数まで、
相手フィールドのカードを選択して破壊するぜ！」

ラッシュ・アワー

通常魔法

メインフェイズ２に発動出来る。
このターン、攻撃した自分フィールドのＨＥＲＯの数まで、
相手フィールドのカードを破壊する。

「な、何！？攻撃して、お前のフィールドにいるＨＥＲＯは３体！」

「そうだ！よって、俺は増川のフィールドから、ブラスト・シャークとラピュタの雲海門を、

幸子のフィールドから、アトランティスの番兵を破壊するぜ！」

何て事!?…でもお生憎様ね。

「残念だったわね、庶民。

アトランティスの番兵は、フィールドに海が存在する時、
1ターンに1度、私のフィールドの水属性1体は戦闘及びカード効果では破壊されない効果があるのです。」

「…え?でも俺達のフィールドには海なんて…。」

「アホが…海ならば、海野　幸子のフィールドにあるではないか!」

「伝説の都　アトランティスは、
フィールドに存在する時、
このカード名を海として扱う事が出来るのです!」

「マ、マジで!?そんな効果が…。」

伝説の都　アトランティス
フィールド魔法

このカード名は海として扱う事が出来る。
フィールドの水属性の攻守を２００ポイントアップする。
お互いの手札とフィールドの水属性モンスターのレベルは１つ下がる。

アトランティスの番兵
レベル４　水属性　水族
ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ２０００
フィールドに海が存在する時、
１ターンに１度、自分フィールドの水属性は戦闘及びカード効果では破壊されない。

「けど、増川の２枚のカードは破壊だ！」

庶民の３体のＨＥＲＯがオーラを放って、
下民のブラスト・シャークと、
ラピュタの雲海門を破壊していきましたわ。

私のアトランティスの番兵は、それを盾で防ぎましたが…。
」

「流石、十代だな。増川のＬＰと戦力を大幅にダウンさせたか…。

「どうやら十代は、増川を先に倒すつもりだね。」

「そりゃあ、そうだよ…。
もし増川君が勝ったら、
今度は塔也君が追われる羽目になっちゃうからね…。」

「げぇ～!?た、確かに奴なら、勝った事を理由に俺を付け狙ってきそうだぜ…。
…十代!速攻で増川を倒してくれ!!」

「おう!任せろ塔也!!俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ!」

「ぬぐぐ…!味な真似をしおって～!!
倍返しで返してくれるわ!
俺のターン、ドローだ!」

増川　ＬＰ２５５０

手札３枚

モンスターゾーン

ゴールデン・ジェリー

ウィング・トータス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

海野　ＬＰ３４００

手札１枚

モンスターゾーン

素早いマンタ

アトランティスの番兵

魔法・罠ゾーン

伝説の都　アトランティス

ウォーター・ハザード

伏せカード×２

十代　ＬＰ３２００

手札１枚

モンスターゾーン

Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「そして、このスタンバイフェイズに、エアジャチとバルーン・オクトパスが俺のフィールドに戻って来るぞ！
上空より舞い戻れ！エアジャチ、バルーン・オクトパスよ！！」

エアジャチ
ＡＴＫ１４００

バルーン・オクトパス
ＡＴＫ１８００

「俺は魔法カード、モンスター・スロットを発動！
俺は自分フィールドからバルーン・オクトパスを選択し、墓地からスカイトビウオを除外する！
そして１枚ドローし、それがレベル４だった時、そいつを特殊召喚出来るのだ！」

「おぉ！そいつは塔也とデュエルした時に使ったカードだな！」

「随分とギャンブル要素が強いカードですのね…。　都合良く引き当てられるのかしら？」

「フン、黙って見ているがいい！

…行くぞ！ドロー！！」

下民は引き当て…られ無かったみたいですわね。

悩んだ表情をしていますもの…。

「う～ん、コイツは…。

まあいいか…モンスター・スロットの効果でドローしたカードをお互いに確認するぞ。

俺がドローしたカードは、天空の都　ラピュタ、魔法カードだ…。」

「増川…あのカードに見放されてるんじゃね？」

「…いや、そうとも言い切れないぞ。」

マズいですわ！

モンスターじゃありませんが、

フィールド魔法を引かれてしまいましたわ…。

「海野　幸子よ…お前は海底の楽園を見せてくれたな…。
ならば俺は、天空の楽園を見せてくれるわ！
行くぞ！フィールド魔法、天空の都　ラピュタを発動！」

アトランティスが崩壊して、
周囲が空を漂う古代都市に変わりましたわ…。

「アトランティスが消滅した事で、効果で変化したレベルは元に戻る！
そして、天空の都　ラピュタの効果により、フィールドの風属性の攻守を４００ポイントアップするぞ！」

ゴールデン・ジェリー
レベル３→４
ＡＴＫ２０００→１８００　ＤＥＦ１８００→１６００

エアジャチ
ＡＴＫ１４００→１８００　ＤＥＦ３００→７００

ウィング・トータス

ＡＴＫ１５００→１９００　ＤＥＦ１４００→１８００

バルーン・オクトパス

ＡＴＫ１８００→２２００　ＤＥＦ９００→１３００

素早いマンタ

レベル１→２

ＡＴＫ１０００→８００　ＤＥＦ３００→１００

アトランティスの番兵

レベル３→４

ＡＴＫ１４００→１２００　ＤＥＦ２２００→２０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン

レベル３→４

ＡＴＫ１７００→１５００　ＤＥＦ１４００→１２００

「行くぞ！俺は魔法カード、浮上を発動！

自分の墓地からレベル３以下の魚・海龍・水族１体を守備表示で

特殊召喚する！

復活しろ、アドレナ・ジェリー！

更に、通常魔法を使用した事で、除外ゾーンのスカイトビウオを攻撃表示で特殊召喚だ！」

アドレナ・ジェリー

ＤＥＦ１２００

スカイトビウオ

ＡＴＫ１７００→２１００　ＤＥＦ６００→１０００

「反撃開始だ！俺はレベル３のアドレナ・ジェリーとウィング・トータスをオーバー・レイ！

２体のモンスターでオーバー・レイ・ネットワークを構築！！

大海の底より猛威を奮え！

エクシーズ召喚！現れろ、？１７　リバイス・ドラゴン！！」

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００
ＯＲＵ　０→２

な、何ですの!?あんなカードは見た事がありませんわ!

「まだまだ行くぞ!俺はレベル４のゴールデン・ジェリーとスカイトビウオをオーバー・レイ!

大気の力よ、天空をはためく竜となれ!

エクシーズ召喚!飛翔しろ、天海飛竜ラピュトブルム!!」

２体のモンスターが渦に入ると、
そこから、４枚の翼を持つ青緑の飛竜が飛び出したわ。

天海飛竜ラピュトブルム

ＡＴＫ２４００→２８００　ＤＥＦ１８００→２２００

「リバイス・ドラゴンの効果発動!
オーバー・レイ・ユニット１つ使用し、攻撃力を５００ポイントアップ!」

リバイス・ドラゴンはユニットを１つ飲み込んで、

力を蓄えましたわ。

…どうやら、大した効果ではない様ね。

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００↓２５００

ＯＲＵ　２↓１

「スゲェ増川！１ターンに２回もエクシーズ召喚するなんてな！」

「ハッハハー！見たか、俺の底力を！！

さあ、怒涛のラッシュと行こうか！

まずはエアジャチで、フォレストマンを攻撃！」

「カウンター罠、攻撃の無力化を発動！

相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「ぬぐぅ！みすみす勝機は逃さんぞ！！

カウンター罠、アウト・コードを発動だ！」

「ゲエッ！？そいつは！！」

「自分フィールドのモンスター・エクシーズ１体から、
オーバー・レイ・ユニット１つ使用するで、
相手モンスターの召喚・特殊召喚、またはカード効果の内１つを
無効にし、破壊する！

俺はリバイス・ドラゴンからオーバー・レイ・ユニット１つ使用
し、攻撃の無力化を無効にするぞ！」

？１７　リバイス・ドラゴン
ＯＲＵ　１→０

「あぁ！アニキの攻撃の無力化がっ！」

「マズいぞ！アレを無効にされた事で、増川のバトルフェイズが
…！」

「バトル続行だ！突撃しろ、エアジャチ！」

高速で飛行して、フォレストマンを粉砕しましたわ。

「ぐっ！」

十代　ＬＰ３２００→２４００

「次だ！リバイス・ドラゴンで、オーシャンを攻撃！
吹き飛べ！バイス・ストリーム！！」

リバイス・ドラゴンの激流を放たれ、
オーシャンは、それに飲まれてしまったわ。

「ぐわあぁっ！」

十代　ＬＰ２４００→１４００

「あと少し…あと少しで奴に勝てる…。長かったぞ、ここまで漕ぎ着けるのに本当にな！

行くぞ！天海飛竜ラピュトブルムで、Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカーを攻撃！
切り裂け、エリアル・ストーム！」

「このままだと十代は…。」

「まだだ！罠発動！締裁の代償！！
自分フィールドのモンスターが2体以上破壊させた時、
次の自分のスタンバイフェイズまで、受けるダメージを0にする
！」

ムーン・ウォーカーは　、大気の刃に切り裂かれながらも、
庶民にそれを届かない様、
叩き伏せてから力つきました…。
…なかなか天晴れな姿ね。

締裁の代償
通常罠
自分フィールドのモンスターが2体以上破壊された時、発動出来
る。
次の自分のスタンバイフェイズまで受けるダメージは0にする。

「…くうぅ～！何てしぶといのだお前は！
だが、ゴールデン・ジェリーの効果発動！

このカードをユニットとして装着したモンスター・エクシーズが戦闘でモンスターを破壊した時、
デッキから1枚ドローするのだ！

奴を倒さない以上、仕方無いか…。
バルーン・オクトパスで、アトランティスの番兵を攻撃！」

「愚かしいですわよ！下民！！！

罠発動、濁流葬！

自分フィールドのモンスターを任意の数だけ破壊して、その数だけ、相手フィールドのモンスターを選択して破壊しますわ！

素早いマンタとアトランティスの番兵を破壊して、
バルーン・オクトパスとエアジャチを破壊しますわ！」

「なっ！？…く、くそ～！2人揃って悪あがきとは…！」

…？下民の様子が明らかにおかしいわね…。

本当なら、リバイス・ドラゴンかラピュトブルムを破壊したい所でしたが、
下手に効果で無効にされては適わないので、無難にバルーン・オクトパスとエアジャチにしましたが…。

…どうやら当たりの様ですわね。

「そして、素早いマンタの効果発動よ！
カード効果で破壊された時、同名モンスターをデッキから特殊召喚するわ。　私は2体の素早いマンタを、デッキから守備表示で特殊召喚しますわ！」

素早いマンタ×2
ＤＥＦ１００

濁流葬
通常罠
自分フィールドのモンスターを任意の数だけ破壊して、その数だけ、相手フィールドのモンスターを破壊する。

素早いマンタ
レベル2　水属性　魚族
ＡＴＫ８００　ＤＥＦ１００
自分フィールドのこのカードがカード効果で破壊させた時、デッキから、同名モンスターを任意の数だけ特殊召喚出来る。

「くくぅ～！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！！」

「私のターン…。」

この状況を一体どうすれば宜しいの！？

今のままだと、庶民は倒せても、
下民のモンスターの総攻撃を受けて終わってしまいますわ…。

「頑張れー！海野さん！！」

宝山君！？

「最後まで諦めなかったら、
きっと、デッキは応えてくれるよ！」

「宝山君！？海野さんはアニキの相手なんだよ？
応援だったら、アニキに…。」

「あはは…海野さんが今にも諦めそうな顔だったから、思わず元気付けちゃった。」

「まあ、いいんじゃないか？
宝山がそう思ったのならそれで…。」

「そうだぜ…デュエルは楽しくやるもんだ。
だから、間違ってないぜ宝山。」　ありがとう…宝山君。
お陰で気分が落ち着きましたわ！

「ハッハハ！どうした？海野　幸子よ。
策が無いなら降参してもいいのだぞ？」

「私を誰だと思って？策が無いなら呼び込むまでです！」

私のデッキ…応えて！

「私のターン、ドロー！」

増川　ＬＰ２５５０

手札０枚

モンスターゾーン

？１７　リバイス・ドラゴン

天海飛竜ラピュトブルム（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

天空の都　ラピュタ

伏せカード×２

海野　ＬＰ３４００

手札２枚

モンスターゾーン

素早いマンタ×２

魔法・罠ゾーン

ウォーター・ハザード

伏せカード×１

十代　ＬＰ１４００

手札１枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

…ッ！来ましたわ！このカードなら…。

「私は素早いマンタ2体をリリース！
海底に潜む龍よ、今こそ目覚めなさい！
海竜一ダイダロス（リヴァイア・ドラゴン）をアドバンス召喚よ！」　素早いマンタ2体が水流となり、
そこから雄々しい海龍が出現したわ！

海竜一ダイダロス
ＡＴＫ２６００

「そして私は永続罠、忘却の海底神殿を発動よ！
このカードは1ターンに1度、自分フィールドの表側表示の魚・海龍・水族1体を除外し、
自分のエンドフェイズにそのモンスターを特殊召喚出来ますが…。
今の私には、こちらの効果は必要ありません。」

「え？じゃあ何で発動したんだ？」

「庶民、伝説の都　アトランティスの効果は覚えているかしら？」

「え～と、確かカード名を海として扱うが…。

…ッ！まさか！」

「そうですわ、そして、忘却の海底神殿にも同じ効果が備わっているのよ！そして私は…。」

「待てーい！お前のやろうとしている事はお見通しだ！
俺はラピュトブルムの攻撃発動！

このカードのオーバー・レイ・ユニット１つ使用し、
俺のスタンバイフェイズまでこのカードを除外するぞ！」

天海飛竜ラピュトブルム
ＯＲＵ　２→１

くっ、逃げられましたわ！

「更に罠発動！ゼロ・フォース！！

自分フィールドのモンスターが除外された時、　フィールドのモ

ンスターの攻撃力は０になるのだ！」

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２５００→０

海竜一ダイダロス

ＡＴＫ２６００→０

やってくれますわね！下民！！

こんな秘策を用意しているなんて…。

「これでダイダロスは攻撃出来まい！？

効果を発動した所で、俺や遊城　十代は倒せんぞ！

更にラピュトブルムは　効果でフィールドに戻った時、

自分フィールドのモンスター１体につき、

５００ポイントのダメージを与えるのだ！

せいぜい遊城　十代が俺を倒す事を祈るがいい！」

ゼロ・フォース

通常罠

自分フィールドのモンスターが除外された時、　フィールドのモンスターの攻撃力を０にする。

天海飛竜ラピュトブルム

ランク４　風属性　海龍族／エクシーズ

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１８００

レベル４×２体

このカードのオーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、このカードを次の自分のスタンバイフェイズまで除外する。

この効果でフィールドに戻った時、自分フィールドのモンスター×５００ポイントダメージを、相手に与える。

成る程…ですが、無駄よ！

「祈るまでもありませんわ下民！あなたはこのターンで倒して差し上げます！」

「何だと？」

「まずはダイダロスの効果発動よ！
自分フィールドの海を墓地に送り、
ダイダロス以外のカードを全て破壊するのです！
私は、海として代用出来る忘却の海底神殿を墓地に送りますわ！
全てを飲み込みなさい！
メイル・ウェーブ！！」

ダイダロスが唸りあげると、
津波が巻き起こり、天空の都　ラピュタと、下民のカード諸共全て飲み込んだわ。

下民が伏せていたカードは、ダイビングね…。

エアジャチかバルーン・オクトパスが残っていたら、
ダイダロスが除外される所でしたわ…。

海竜－ダイダロス

レベル７　水属性　海龍族

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ１５００

自分フィールドの海を墓地に送り、
このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する。

ダイビング
通常罠
自分フィールドの魚・海龍・水族1体と相手フィールドのモンスター1体を除外する。
次の自分のスタンバイフェイズに、この効果で除外した自分のモンスターをフィールドに戻る。

「スゲェ効果だな…。フィールドを一掃しちまったぜ。」

「これが海野さんの切り札の力だよ。」

「だが、攻撃力0では俺は…。」

「なら、これでどうでしょう?

私は速攻魔法、聖水の弊害を発動よ!

これでダイダロスの攻撃力は元に戻りますわ!」

聖水を浴びた事で、ダイダロスは活力を取り戻したわ!

海竜一ダイダロス
ＡＴＫ０→２６００

「さあ、嬉しい悲鳴をあげなさい！下民！！
お行きなさい、ダイダロス！
リヴァイア・ストリーム！！」

「だ、誰がお前の攻撃なんぞに…！
…ぬぐうあぁぁっ！！」

増川　ＬＰ２５５０→０

ダイダロスの放った水流を受けて、
下民が吹き飛んだわ。
…フン、いい気味ですわ。

「優雅に…ターンエンドです。」

「へへ、スゲェな幸子…。さあ頼むぜ、俺のデッキ！俺のターン、

ドロー！」

海野　ＬＰ３２００
手札０枚
モンスターゾーン
海竜－ダイダロス
魔法・罠ゾーン　無し

十代　ＬＰ１４００
手札２枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「来たぜ！俺は魔法カード、戦士の生還を発動！
墓地からエアーマンを手札に加えて、そのまま攻撃表示で召喚だ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

ＡＴＫ１８００

「効果でデッキからＥ・ＨＥＲＯ　グランド・ロックを手札に加え、
魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！」

「相変わらずだな十代…。
少ない手札であそこまで出来るか？普通…。」

「本当に凄いね、十代は。」

「手札のグランド・ロックと、
墓地のムーン・ウォーカーを除外して融合！
来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　ギガ・ニュートン！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ギガ・ニュートン
ＡＴＫ２６００

なっ！？僅かな手札でここまでの展開を…！

「行くぜ幸子！ギガ・ニュートンでダイダロスを攻撃だ！」

「攻撃力が同じ…。相打ち狙いかしら？」

「いいや！ギガ・ニュートンには、戦闘する時、相手モンスターの攻撃力を守備力分ダウンさせる効果がある！」

何ですって！それではダイダロスがっ！

海竜－ダイダロス

ＡＴＫ２６００↓１１００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ギガ・ニュートン

レベル８　地属性　戦士族／融合

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２５００

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランド・ロック＋Ｅ・ＨＥＲＯ　ムーン・ウォーカー

このカードが相手モンスターと戦闘を行う時、そのモンスターの攻撃力は、

守備力分ダウンする。

「行けー！ヘクト・プレッシャー！」

重力の力場がのしかかり、
ダイダロスが地に伏せてしまったわ…。

「うくぅぅっ！」

海野　ＬＰ３２００→１７００

「これで終わりだ！エアーマンでダイレクトアタック！
エアー・シュート！！」

「キャアァァッ！！」

海野　ＬＰ１７００→０

…参りましたわ。これが遊城　十代の実力ですのね…。

海野↓塔也ｓｉｄｅ

「くぬぅ～！改良を重ねたデッキが…！

…約束だ！コイツを取っとけ、遊城　十代！！

…くう～っ、覚えていろよ～！」

増川は月並みの捨て台詞を言うと、
ガスタ・バウムを十代に渡して、走り去っていった。

「お疲れさん、十代。」「ハ、ハハ…今回のデュエルは、マジでヤバかったぜ…。」「またまた～、凄いデュエルだったよアニキ！」

「十代の言う通りかもね、翔。」

「え？どういう事、宝山君？」

「今回はバトルロイヤル形式だったから、
増川は、海野さんから妨害されてフィールドを荒らされたけど…。」

「そうだな…ダイダロスでフィールドを一掃しなかったら、十代のモンスターは、ゼロ・フォースとのコンボで攻撃力が０になる所だった…。」

そう考えると、恐ろしいなアイツ…。

伊達に十代に挑み続けちゃいねぇってか。

そう思っていると、海野がこっちに歩いた来た。

「見事でしたわ庶民、噂通りにお強いのね。」

「へへ、楽しいデュエルだったぜ！幸子！！」

「楽しい…まあいいわ、約束通り、あなた方を今夜のディナーにお招きしましょう。」

「おぉっ！いいのか！？」

「ええ、光栄に思いなさい。
…では、ごきげんよう庶民達。」

そう言って、海野はブルー女子寮に向かった。

「…あっ！ヤバいぞみんな！
そろそろ行かねぇとフォリナ達にどやされるぞ！」

「いっけね！早くロビーに行こうぜみんな！」

「待ってよ、アニキ～！」

「確かに、フォリナさん達、きっと待ちくたびれているよ！」

「やれやれ…急ぐとしようか。」

俺達は急いでロビーに着いたけど、
フォリナと明日香に遅れた事について説教されちまった…。
ガスタ・バウム2人にをあげて、何とか機嫌を直してくれたが…。
宝山が食べられなかった事で、落ち込んでたな…。

ランチはデュエルの後で…（後書き）

ある日、クロノス先生から、俺と翔に退学を言い渡される事になっちまった…。

「シニョール翔並びに、シニョール塔也…。
アナタ達を教育主任の権限により、退学を命じるノーネ！」

それは、俺と翔が中間テストで有り得ない赤点を出した事からだったらしい。

「そ、そんな！？何かの間違いじゃ…！」

「そうだ！第一俺達は…。」

反論をするが、クロノス先生は聞く耳を持ってくれねぇ…。

その時、クロノス先生から、俺と翔で、退学を賭けたデュエルをする様言い渡されるのだった…。

次回、「崖っぷち！制裁デュエル！！」

…くそ、何でこんな事に…！

崖っぷち！制裁デュエル！！（前書き）

大変お待たせしました！

第１８話です。

今回は翔が、ナンバーズカードを使います。

崖っぷち！制裁デュエル！！

塔也ｓｉｄｅ

俺は今、アカデミアのパソコン室で、カイザー亮こと、丸藤　亮の活躍を載せたホームページを、

翔、十代、明日香、三沢、宝山、フォリナ達と一緒に見ていた。

ちなみに、カイザーは翔の兄貴だ。

「スゲェな、翔の兄ちゃん…。

アメリカの大会で優勝だってよ！」

「へへ、当然さ！お兄さんだもん！」

「この記事の内容によると、明日香の兄貴はこの大会には出ていないみたいだな…。」

「まあ、兄さんは気紛れだからね…。」

「そう言えば、アスカのブラザー、フブキングはプロデュエリストに勝った事があると言う噂を聞きマーシタヨ。」

「フブキング？キング吹雪じゃないのか？」

「ここの入学したてに会いマーシテ、本人がそう名乗ってイマシタヨ？」

「兄さんってば…。全く恥ずかしいわ…。」

キング吹雪って、明日香とは正反対な性格してんのな…。

「その大会にキング吹雪の他に、プリンス優介がいたら面白い事になりそうだったけど…。」

「確かその人だけ、フランスアカデミア校に留学したんだっけか？」

俺の言葉に三沢は相槌を打つ。

「その通りだ塔也。

このアカデミアの3皇帝こと、カイザー亮とキング吹雪、そしてプリンス優介…。

3人揃って海外短期留学か…。羨ましい限りだな…。」

「そうね、外国のデュエリストと戦う機会は、そうそう無いものね…。」

「まあ、海外短期留学は、優秀生徒3人に贈られるご褒美だからね。

でも僕は、日本でのびのびと過ごす方がいいや。」

「まあ…確かに、住み慣れた国の方が落ち着くよな。」

「…デモ、外国に旅をした時に、
掛け替えの無い物がウォッチ出来るかもしれマセンヨ。」

「そうだな…世界中を回った事で、
フォリナに出会えたしな。」

「…イエース！だから外国を回る事も大切デース！」

「へぇ…塔也は外国に旅した事があるのね？」

「そう言えば塔也、購買でそんな事を言ってたな…。」

「俺の親父は、創作意欲の為に世界中を回ったんだ。
そん時に、お袋と葵と一緒に連れられてったっけな…。
旅先の中には、秘境のジャングルとか、
険しい山脈とか…。」

「ず、随分と壮絶な旅をしたんだな塔也…。」

「壮絶なんてもんじゃないぜ、三沢…。
けど、お陰で色んな国で友達が出来たけどな。」

「あれ？でも塔也君って、
両親とは殆ど一緒じゃないって言ってなかった？」

「一緒に旅をしたのは、１０才までな。
それ以降は、両親２人で世界を飛び回ってるよ。」

「そうだったんだ…。」

「大変だったんだな、塔也…。

あっ！気になる事と言えば、
何で俺の事をアニキなんて呼ぶんだ、翔？」

「え？」

確かに気になってたんだよな…。

別に、十代は年上って訳じゃなさそうだしな。

「僕も知りたいな…、どうしてだい、翔？」

「え、え～と…何て言ったら…。」

翔が口を濁しているな…。

あまり理由を人に言いたく無いのか？

「確かに…翔君のお兄さんはカイザー1人の筈なのに…。」

「私も知りたいノーネ。
アナタがカイザーの異名を持つ、シニョール亮の弟なのかを…。」

「「「「「クロノス先生!?」」」」」ティーチャー!?」

何だ!?一体どうしてこんな所に…。

「クロノス先生、今のは一体どういう?」

「シニョール翔、並びにシニョール塔也…。」

え、俺も!?一体何なんだ?

「アナタ達2人を退学にしマスーノ!!」

「「「「「な、何だって!!」」」」」

「ワッツ!?どうしてトウヤとショウ君が!?」

クロノス先生から、寝耳に水な事を言い渡され、
俺達は驚愕した。

「先日行った中間テストで、
そこの2人の点数が0点だったノーネ。」

「そ、そんな!?」

「クロノス寮長、何かの間違いではないですか?
翔の知識は、アカデミアの1年生の中でも上位だった筈です!
その彼が0点なんて…。」

「ソウデス!トウヤはホームルームに遅刻する事は、よくアリマースガ…。
成績はミサワ君にも負けてマセンッ!」

宝山とフォリナが、必死に俺と翔の事を弁明してくれた。
…フォリナは一言多かったが。

「アナタ達の言う通り、その2人は高成績だったノーネ。
デスガ、今回の中間テスト成績表には、
確かに0点と記載されてイマシータ。」

「何かの間違いじゃ…。
僕は確かに答えを書きました！」「俺もです！それに、書き忘れたのは名前欄くらいで…。」

俺と翔は必死に食い下がった。

「言い訳は見苦しいノーネ！！

兎に角、0点などアカデミアでは前代未聞ナノーネ！
よって、教育主任の権限により、
2人にはアカデミアから去って貰うノーネ！」

「そ、そんな…。」

「ハ、ハハ…嘘だろ…？」

マジかよ…。俺のプロデュエリストへの道が…。

「…が、私の鬼ではないノーネ。

2人にはチャンスを与えるノーネ！

明日の放課後、2人にデュエルをして貰い、
勝った者は、この件に関した事は不問とするーノ！」

つまり、2人の内どちらかは退学になるって訳だ…。

なんて、後味の悪くなるデュエルだ…。

「2人には今日、夜中の外出を許可しまスーノ。
今日の内に、親しい者と別れの挨拶を済ませるといいノーネ。
私からのせめてもの慈悲デスーノ…。」

そう言って、クロノス先生は部屋を出た。

「翔、心配すんな。俺はお前とはデュエルしないぜ。
お前が勝つ為の特訓相手にはなるけどな。」

「ソレデハ、トウヤはどうするつもりデスカ！？」

「クロノス先生に頼んで、
別々の相手を用意して貰うさ。」

「いい考えだね！僕からもクロノス寮長に頼んでみるよ！」

「俺も特訓相手になるぜ、翔。
だから…。」

「いいんだ！みんな！！」

「翔？」

「塔也君…、明日…僕とデュエルして…。」

「「「「「え！？」」」」」

翔の発言に、俺達はまたもや驚愕した。

「な！？何言ってるんだ翔！

俺は…。」

「そうだよ！そうなったら、君達の内1人は…。」

「…もし、退学になるとしても…、

後悔する様なデュエルはしたくない…。

後悔する様な相手とデュエルはしたくないんだ！」

翔は、思いの丈を俺達に打ち明けた。

「だから…塔也君、僕と本気でデュエルして欲しいんだ！」

参ったな…そこまで言われちゃ、
断れないだろうが…。

「…分かった、明日のデュエル、翔の相手は俺が受ける。
…これでいいんだな？」

「トウヤ、どうしてデスカ！
トウヤだって戦いたく無いって…。」

フォリナの言う通り、確かに俺は、翔と退学を賭けたデュエルなんかやりたくはねぇ…。

けどな…。

「翔が俺とデュエルしたいと言ったんだ…。

俺は翔の意見を曲げてまで断るつもりはねぇよ。

それに応えなきゃ、翔に失礼だろ？」

それを聞いて、翔は俺にお礼をした。

「…ありがとう、塔也君！」

「…全く、２人共頑固だな…。」

「２人がそう言うなら、僕からはもう、何も言わないよ…。」

「じゃあ僕、デッキ調整するから先に部屋に戻っているよ！

…塔也君、明日は負けないからね！」

「ああ…やると決まった以上、全力で戦うぜ！翔！！」

「うん…僕も全力で塔也君に挑むよ！」

そう言って、翔はパソコン室を後にした。

…しかし、口ではああ言ったが…、
俺は明日のデュエル、全力で戦う事が出来るのか？

塔也→翔ｓｉｄｅ

僕は真夜中にレッド寮の階段に座って、
明日のデュエルの事を考えていた。

明日のデュエルで、塔也君に勝たないと…。　じゃないと、僕が退学になっちゃう…。　あの後、アニキ達が特訓相手を務めたデュエルをしてくれたり、
戦術のアドバイスもしてくれたけど…。

明日の事を考えると、不安でいっぱいだよ…。

そう言えば、お兄さんに入学始めに会った時に、
「お前にデュエリストは向いてない。」
…って言われたんだっけ…。

思いを巡らせていると、ブルー寮の方から増川君がやって来た。
…またアニキにデュエルを挑むつもりかな。
最近は、真夜中にでもやって来る様になってきて、
アニキは、ますます寝不足気味になってきているよ…。

「おぉ、丸藤氏じゃないか！
お前が真夜中に起きているとは珍しいな！」

「こんばんは、増川君。
またアニキにデュエルを挑みに来たの？」

「当然だ！…だが、丸藤氏の辛気臭い顔を見たら、
そんな気分ではなくなったがな…。

丸藤氏…明日、雲雀　塔也と退学を賭けたデュエルをするそう

じゃないか？」

「…アニキ達から聞いたの？」

「…いや、パソコン室を通りがかった時に、クロノス寮長がそう言ったのを耳にしたのでな…。」

そっか…、クロノス先生はかなり大声で言ってたからね。

「…勝算はあるんだろうな、丸藤氏？
奴は、この俺を負かした相手だぞ…。」

「分からないよ、そんな事は…。
やってみない事には結果は…。」

「何だ何だ？やる前から弱気なのか？

そんな姿勢では、明日のデュエルには絶対勝てんぞ？

もっと自分に自信を持つのだ！！」

「僕は増川君みたいに自信に満ちている訳じゃ無いんだ…。

簡単に言わないでよ…。」

そう言うと、増川君の表情が真面目になって、僕に言葉をかけた。

「…あのな丸藤氏、俺は最初から自信満々という訳では無かったのだぞ？」

「え？そうなの？」

「うむ、…まあ多少は自信はあったがな。

だがしかし、入学始めに、カイザー亮、丸藤氏の兄ちゃんに、完膚無きまでに打ち負かされてな…。

仕舞いには、その時カイザーに、「デュエルの腕が未熟過ぎる。」…っと、言われた物だ…。」

ハハ…お兄さんは本当に容赦無いなぁ…。

「それからと言うもの、俺はフォリナ様に会うまで、限りなく鬱状態だったな…。」

「今の増川君からじゃ、とても想像出来ないや…。」

「丸藤氏も何か信念を持つ事だ。
それを目指して戦う事で、
自然と自信がついてくるというものだぞ。」

僕の信念か…。

僕の場合、信念じゃなくて目標だけど…。

僕の目標は、アニキや塔也君みたいに楽しいデュエルをする事だ！

「ありがとう増川君、お陰で自信が出てきたよ！」

「フッ…いい顔だ、丸藤氏。

そんな丸藤氏には、相応しいカードを進呈しよう…。」

そう言って、増川君は1枚のカードを差し出した。

「増川君、いいの？こんな強力なカードを貰っちゃって…。」

「いいのだ丸藤氏、俺は機械族は使わんしな。
そいつで、俺の代わりに一泡吹かせるといいぞ！

…ではな丸藤氏、明日のデュエル、頑張るといい…。」

そう言って、増川君は帰って行った…。

さて、明日に備えてもう寝ようっと。

…あれ？カードが落ちてる…誰のかな？

拾って、明日職員室に届けようっと。

…うぐっ！な、何これ！？

意識…が途絶えてい…く…。

翔↓十代ｓｉｄｅ

そして今日、いよいよ翔と塔也の退学を賭けたデュエルする日がやって来た。

…くそ、こんなに見たく無ぇと思うデュエルは始めてだ…。

けど、翔が望んだ相手とのデュエルなんだ、最後まで見届けないとな…。

俺は三沢、明日香、宝山、フォリナと一緒に、観客席で2人のデュエルが始まる時を待っている。

「いよいよ始まるんだな、2人の運命を決めるデュエルが…。」

「翔君も塔也とも、私の友達だから、
正直、見るのが辛いデュエルになるわね…。」

「あの時はああ言ったけど、
やっぱり、クロノス寮長に相手を代える様に言うべきだったのかな…。」

「いや、そんな事をしたら、2人を裏切る事になるぜ。
友達だからこそ、最後まで見届ると俺は決めたんだ!」

「ジュウダイ君…。」

…翔と塔也がデュエルフィールドに上がった。いよいよ始まるな…。

「翔…お前の望み通り、俺は全力を尽くす…。
お互いに悔いの無いデュエルをしような。」

「…早く始めようよ、塔也君。」

…何だ？なんか、翔の様子がおかしい…。
一体どうしたんだ？

「…翔？お前一体…。」

「それデーハ２人共、デュエルを開始するノーネ！」

「「デュエル！！」」

翔　ＬＰ４０００

塔也　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で、先攻は翔からだ。

「僕の先攻…ドロー！僕はタンクロイドを守備表示で召喚！」

翔のフィールドに、小型の戦車がやって来た。

タンクロイド

ＤＥＦ１９００

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「行くぜ、翔…。俺のターン、ドロー！」

翔　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
タンクロイド

魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

塔也　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「俺は、手札から雲魔物－モーニング・ミストを特殊召喚する！
このカードは、自分フィールドに他のカードが無い時にメインフェイズに1度、
手札または墓地から特殊召喚出来る！」

塔也のフィールドに靄が立ち込もって、
靄が、人型の姿に整っていったぜ。

雲魔物－モーニング・ミスト
ＡＴＫ１０００

「俺は魔法カード、大波小波を発動！

自分フィールドの水属性を全て破壊して、破壊モンスターの数だけ、手札から水属性モンスターを特殊召喚する！

雲魔物－モーニング・ミストを破壊して、
手札から、雲魔物－レイジング・ミストを特殊召喚する！
更に雲魔物－ミストルティを攻撃表示で召喚だ！」

雲魔物－レイジング・ミスト

ＡＴＫ２５００

雲魔物－ミストルティ

ＡＴＫ１８００

スゲェな塔也…。言葉通りに全力で挑んでいるぜ。
…けど、それだけになんか複雑な気分だぜ…。

雲魔物－モーニング・ミスト

レベル３　水属性　悪魔族

ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００

自分フィールドに他のカードが存在しない時、メインフェイズに1度だけ、
このカードを手札または墓地から特殊召喚出来る。

大波小波

通常魔法

自分フィールドの水属性を全て破壊して、　破壊した数だけ、手

札から水属性モンスターを特殊召喚する。

「行くぞ！レイジング・ミストで、
タンクロイドを攻撃！
ヒートランス・レイン！」

「罠発動、スーパー・チャージ！

自分フィールドのロイドと名の付くモンスターが攻撃された時、
デッキからカードを2枚ドロー出来る！」

「だが、タンクロイドは破壊させて貰うぜ！」

「うっ…。」

レイジング・ミストが、灼熱の雨をタンクロイドに降らせて、破壊したぜ。

「この瞬間、タンクロイドの効果を発動！
戦闘で破壊された時、カードを1枚ドローするよ！」

スーパー・チャージ

通常罠

自分フィールドのロイドと名の付くモンスターが攻撃された時、
カードを2枚ドロー出来る。

タンクロイド

レベル４　地属性　機械族

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１９００

このカードが戦闘で破壊された時、
カードを1枚ドローする。

「大量ドローをして来たか…。
けど、モンスターはいなくなったぜ！

ミストルティで、翔にダイレクトアタックだ！」

「甘いよ！僕は手札からバギーロイドを特殊召喚！

このカードは、相手からダイレクトアタックを受ける時、手札から特殊召喚出来る！」

バギーロイド

ＤＥＦ１６００

バギーロイド

レベル４　地属性　機械族

ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１６００

相手からダイレクトアタックを受ける時、手札から特殊召喚出来る。

「だったら、ミストルティで、バギーロイドを攻撃だ！」

「罠発動、アンダー・ガレージ！
相手モンスターが攻撃した時、
墓地からロイドと名の付くレベル４モンスター１体を特殊召喚出来る！
僕は墓地からタンクロイドを守備表示で特殊召喚するよ！」

タンクロイド

ＤＥＦ１９００

「これで戦闘は巻き戻されるけど…。

どうする？塔也君。」　「バトル続行だ！バギーロイドを攻撃！ライフレス・ベール！」

やるな、翔！バギーロイドは破壊されたけど、モンスターは残せたぜ！

特訓の成果だな、翔！

「やるじゃねぇか、翔！俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

「ほお…丸藤氏も、なかなかやるではないか。」

えっ？この声はまさか…。

「「「増川か！？」」」かい！？」

「よう、皆の者！そして、フォリナ様も！」

「ア…アハハ…コンニチハ、マスカワ君。」

増川の言葉に、フォリナは若干困っているな…。

「増川…悪いけど、今はお前とデュエルするつもりは無いぜ！
翔のデュエルを見届けないといけないからな。」

「早まるな、俺もこのデュエルを観戦しに来たのだ。
…ところで丸藤氏のプレイングが、以前見た時よりも上のようなのだが…。」

「それはそうだよ。なんたって、僕達が翔に特訓をつけたからね。」

「後は、アドバイスも少々…な。

今の翔なら、オベリスク・ブルーの生徒にだって、
いい勝負になる筈だ。」

「ほお、そいつはいいな…。
俺もカードを渡した甲斐があったという物だ！」

増川が翔にカードを！？
どういうつもりなんだ？

「珍しいな…君が誰かにカードを渡すとはな…。
前にカードを渡した時は確か、塔也とのアンティ…」ぬわーッ！

止めろ三沢氏！！」

増川が慌てて三沢の言葉を遮った。

フォリナに、アンティデュエルをした事は知られたくは無いみたいだな…。

「アンティ…？マサカ、マスカワ君…トウヤと？」

「いやいや違うぞ！フォリナ様！！

その時は…そう！奴のデュエルの健闘を讃えて、カードを渡したのだ！」

「本当に…？怪しいわね。」

「兎に角だ！俺は、丸藤氏に強力なカードを与えたのだ！奴はこのデュエル、簡単に勝つ事など出来んわ！」

「一体、翔にどういうカードを渡したんだい？増川。かなり強力と豪語しているみたいだけど…。」

「それは見てのお楽しみだ。

まあ…今の丸藤氏のフィールドなら、
呼び出す準備は整ったか…。」

準備？増川が渡したカードって、もしかしてモンスター・エクシーズか？

「フフフ…行くよ！僕のターン、ドロー！」　翔　ＬＰ４０００

手札６枚

モンスターゾーン

タンクロイド

魔法・罠ゾーン　無し

塔也　ＬＰ４０００

手札０枚

モンスターゾーン

雲魔物－レイジング・ミスト

雲魔物－ミストルティ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×2

「僕は魔法カード、精神操作を発動！
エンドフェイズまで、相手モンスター1体のコントロールを得る。
僕は、塔也君のフィールドからミストルティを選択するよ！」

「だが、精神操作の対象になったモンスターはこのターン、攻撃が出来ず、リリースも出来ないぜ。」

精神操作

通常魔法

エンドフェイズまで、相手モンスター1体のコントロールを得る。
このカードの対象になったモンスターは、このターン、攻撃出来ず、リリースも出来ない。

「フフフ…僕はラピート・ロイドを召喚！」

ラピート・ロイド

ＡＴＫ１６００

「ラピート・ロイドの効果発動！
１ターンに１度、自分フィールドのロイドと名の付くモンスターの数だけ、
相手のセットされた魔法・罠カードを選択し、選択したカードは、エンドフェイズまで使用出来なくするよ！

僕のフィールドにロイドは２体…。

よって、塔也君の２枚の伏せカードは、この　ターン、使用出来ない！」

ラピート・ロイド

レベル４　風属性　機械族

ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１４００

１ターンに１度、自分フィールドのロイドと名の付くモンスターの数だけ、
相手のセットされた魔法・罠カードを選択し、選択したカードは、エンドフェイズまで使用出来なくなる。

「なら、ラピート・ロイドの効果にチェーンして、

罠カード、ミスト・ゲインを発動だ！
このターンに受けるダメージを1度だけ0にするぜ！」

「これで塔也はこのターン、1度だけダメージを無効に出来るわね。」

「うぬぅ…。これではアレを呼べても、レイジング・ミストを破壊するだけしか出来んな…。」

「僕は魔法カード、能力調整（パワー・チューン）を発動！
エンドフェイズまで、自分フィールドのモンスターのレベルを1つ下げる！」

タンクロイド
レベル4→3

ラピート・ロイド
レベル4→3

雲魔物－ミストルティ

レベル４→３

「レベルを下げた？まさかエクシーズ召喚か！？」

「フフフ…行くよ塔也君！
僕はレベル３のタンクロイド、ラピート・ロイド、ミストルティをオーバー・レイ！！

３体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！

電脳世界に巣くう魔獣よ、
虚像より出でて、世界を制圧せよ！

エクシーズ召喚！電脳の魔獣、？３４　電算機獣　テラ・バイト！！」

３体のモンスターが渦に飲まれて、
そこから十字型の箱が出てくると、
たちまちモンスターに変形したぜ。

？３４　電算機獣　テラ・バイト
ＡＴＫ０
ＯＲＵ　０→３

「どういうつもりだ？翔は…。
守備力が高いにも拘わらず、わざわざ攻撃表示なんてな…。」

「へぇ…あれが翔に渡したカードかい？増川。」

「いや…違う。俺が渡したカードはランク４の轟魔武王（ごうまぶおう）　ヴェルトロイドだ。

あんなカードは知らんぞ！」

「何だって！？じゃああのカードは一体…。」

それに、翔の手になんか数字が浮かび上がって来たけど…。

あのカードの影響なのか？

ハネクリボーも、あのカードを警戒してるしな…。

「僕は魔法カード、波動共鳴を発動！
フィールドのモンスター１体のレベルを、
このターンまで４にする！

僕はこのターン、レイジング・ミストのレベルを７から４にするよ！」

雲魔物ー レイジング・ミスト
レベル7→4

「一体どういうつもりだ？丸藤氏は…。
波動共鳴があるのなら、
レイジング・ミストをオーバー・レイ・ユニットに出来た筈だぞ！？」

「けど、それをしなかったって事は…。」

「あのモンスター・エクシーズの効果の為かしらね…。」

「これで全て揃ったよ…塔也君。」

「何？それはどういう事だ！？」

「僕はテラ・バイトの効果発動！
1ターンに1度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを1つ使用する事で、
相手フィールドのレベル4以下のモンスター1体のコントロール

をエンドフェイズまで奪う！」

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＯＲＵ　３→２

「レベル４以下だと…！そうか、レイジング・ミストのレベルを４にしたのはこの為か！！」

「アッハハハ！！僕もアニキ達みたいなデュエルをするんだぁ～！やれっ！テラ・バイト！！

リアレンジ・ジャック！！」

テラ・バイトは周囲のユニットを１つ、角に吸収すると、尻尾から電流を流して、　レイジング・ミストを引き寄せたぜ。

波動共鳴

通常魔法

フィールドのモンスター１体のレベルを、エンドフェイズまで４にする。

？３４　電算機械　テラ・バイト

ランク３　闇属性　機械族／エクシーズ

ＡＴＫ０　ＤＥＦ２９００

レベル３×３体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、相手フィールドのレベル４以下のモンスター１体のコントロールを、エンドフェイズまで得る。

「レイジング・ミストが…！
だが、このターン、俺にダメージは通らないぜ！」

「僕は永続魔法、ハード・シェアを発動。そしてバトルだ！レイジング・ミストでダイレクトアタック！」

「ミスト・ゲインの効果発動！
レイジング・ミストによって発生するダメージを０にし、無効にしたダメージ４００ポイントにつき、フィールドのモンスターにフォッグカウンターを１つ乗せる。

無効にしたダメージは２５００…。

よって、フォッグカウンターを６個をテラ・バイトに乗せる。」

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＦＣ　０→６

「まだまだ！僕はテラ・バイトでダイレクトアタック！」

「な！？攻撃力０でダイレクトアタックだと！？」

「この瞬間、永続魔法、ハード・シェアの効果発動！

バトルフェイズに１度、自分フィールドのモンスターが攻撃する時、

エンドフェイズまで、そのモンスターと、自分フィールドの別のモンスターの攻撃力と入れ替える事が出来る！」

ハード・シェア

永続魔法

バトルフェイズに１度、自分フィールドのモンスターが攻撃する時、エンドフェイズまで、そのモンスターと、自分フィールドの別のモンスターの攻撃力と入れ替える事が出来る。

「何!?テラ・バイトの攻撃力が!」

雲魔物－レイジング・ミスト

ＡＴＫ２５００→０

?３４　電算機獣　テラ・バイト

ＡＴＫ０→２５００

「行け!テラ・バイト!!
テラ・ボルトチャージ!!」

テラ・バイトは、電流を帯電させて、塔也に突撃した。

「うおぁぁっ!」

塔也　ＬＰ４０００→１５００

「塔也のＬＰが一気に削られたよ!」

「メインフェイズ２に移行して、
魔法カード、カスタマイズを発動！
自分フィールドのモンスター１体をリリースして、デッキから、
リリースしたモンスターのレベル以下・同じ属性の機械族モンスター１体を特殊召喚するよ！
僕はレイジング・ミストをリリース！
デッキより浮上せよ！マリンロイド　アクア・バッシャー！！」
レイジング・ミストが青い光になって、見る見るうちにシャチ型のメカに変形していったぜ。
マリンロイド　アクア・バッシャー
ＡＴＫ２４００
カスタマイズ
通常魔法
自分フィールドのモンスター１体をリリースして、

デッキからリリースしたモンスターのレベル以下・同じ属性の機械族モンスター1体を特殊召喚する

「僕はこれでターンエンド。　そして、テラ・バイトの攻撃は元に戻る！」

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＡＴＫ２５００→０

「さぁ…かかって来てよ塔也君！

僕が圧倒的な力で叩き潰してあげるよ！！

アハハハ！アーッハハハ！！」

「くっ…！翔、お前…。」

デュエルを進めるにつれ、翔の態度が豹変していった…。

本当にどうしちまったんだよ翔！

崖っぷち！制裁デュエル！！（後書き）

丸藤　翔と雲雀　塔也のデュエルの最中、丸藤　翔がテラ・バイトを召喚した事で態度が豹変した。

「アーッハハハ！どうしたの塔也君？
もっとかかって来てよ！」

「翔！お前一体どうしちまったんだよ！！
お前はそんな奴じゃないだろ！？」

奴のテラ・バイトにおぞましいオーラが漂っている…。
それが奴の性格を変えたのか！？

次回、「欲望の象徴　ナンバーズカード！」

雲雀　塔也！お前のデュエルで、奴を正気に戻してやれ！

欲望の象徴　ナンバーズカード！（前書き）

お待たせしました！

第１９話です。

今回は最後ら辺が、少々甘めです。

欲望の象徴　ナンバーズカード！

万丈目ｓｉｄｅ

奴の召喚したテラ・バイト…。

アレからは、何か得体の知れないオーラが漂っていて、

それが、丸藤　翔に纏わり憑いている…。

以前にも、同じ光景を目の当たりしたな…。

あれは確か、龍牙先生と雲雀　塔也の課題デュエルの時だったか…。

今は光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）がいるから、

その時よりも鮮明に見える…。

まさか龍牙先生も、あのナンバーズとやらに取り憑かれていたのか！？

ん？向こうから誰か来る…。

…響先生か。

「万丈目君、総合デュエル場で起こっているこの騒ぎは何なの？もう放課後の筈なのに…。」

「雲雀　塔也と丸藤　翔のお互いの退学を賭けたデュエルですよ。」

「退学ですって!?どうして？」

…？響先生は原因を知っていると思ったが…。

「何でも中間テストで、２人共０点を取ったらしい。全く、嘆かわしい事ですがね…。」

すると、響先生は驚愕した。

「０点!?丸藤君と塔也君が!!誰がそんな事を!?」

「クロノス寮長ですよ。このデュエルの提案も寮長だ、…と宝山が言ってましたが。」

「ありがとう万丈目君！なら、クロノス教諭を探さないと…！」

そう言って、響先生は走って行った。

どういう事だ？…まあいい、今はあいつらのデュエルを観戦するか。　このデュエルで、ナンバーズについて分かるかもしれないからな…。

「くっ…俺のターン、ドロー！」

翔　ＬＰ４０００

手札０枚

モンスターゾーン

マリンロイド　アクア・バッシャー

？３４　電算機獣　テラ・バイト（ＯＲＵ×２　ＦＣ×６）

魔法・罠ゾーン

ハード・シェア

塔也　ＬＰ１５００

手札１枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「俺は魔法カード、梅雨前線を発動！
デッキからレベル４以下の雲魔物２体を手札に加える。
俺はデッキから、雲魔物ートワイライト・スカイとコットン・ボールを手札に加えるぜ！
手札に加えた雲魔物ートワイライト・スカイを召喚！
効果でフォッグカウンターを乗せるぜ。」

雲魔物ートワイライト・スカイ

ＡＴＫ１７００

ＦＣ　０→１

あのモンスターは龍牙先生の時にも出した奴か…。

効果でドローして、流れを変えるつもりか？

「トワイライト・スカイの効果発動！

フィールドのＦＣを２個取り除く事で、カードを１枚ドロー出来る。

テラ・バイトのフォッグカウンター６個を全て取り除いて、３枚ドロー！」

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＦＣ　６→０

「今回はすんなり引けたな…。

俺はトワイライト・スカイをリリースする。

コイツは自分フィールドの雲魔物を任意の数をリリースする事で、手札から特殊召喚出来る！

大いなる天空の讃美歌を聞け！

降臨しろ！雲魔物ー カトリーヌ！！」

何だ！？あのカードから僅かに精霊の気配を感じるぞ…！

雲魔物－カトリーヌ
ＡＴＫ２６００

「へぇ…そのモンスターは。」

「カトリーヌの効果発動だ！
自身の効果で特殊召喚に成功した時、
その時にリリースした雲魔物の数だけ、相手フィールドのカードを破壊するぜ！」

「ぬぐぐ…！あのカードは俺にトドメを刺した必殺カードではないか！」

「ここでカトリーヌを引き当ててくるか！
塔也も十代にも劣らず、引き運が強いな…。」

「ウゥ…！本当なら喜びたい所デスガ…。」

「翔君っ！」

確かに強力な効果だが、丸藤　翔は口元を綻ばせた。

何か策があるのか？

「リリースした雲魔物は１体だ…。
よって俺は、テラ・バイトを破壊するぜ！
歌え、セイント・アリア！！」

「アッハハ！甘いよ塔也君！
アクア・バッシャーの効果発動！
自分フィールドの機械族が相手のカード効果を受ける時、そのモンスターを次の自分のスタンバイフェイズまで除外出来る！」

成る程、一時的に除外する事で破壊を逃れたか…。

「だったらバトルだ！カトリーヌで、アクア・バッシャーを攻撃！
響け！セイグリット・ウィンド！！」

「それも無駄さ！アクア・バッシャーの効果発動！
１ターンに１度、自分フィールドの機械族が戦闘で破壊される時、
ＬＰを８００払う事で、その戦闘では破壊されない！」

翔　ＬＰ４０００→３２００

アクア・バッシャーは水流の壁を作り上げ、
カトリーヌの放った風を阻んだ。

マリンロイド　アクア・バッシャー

レベル７　水属性　機械族

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１８００

自分フィールドの機械族が、相手のカード効果を受ける時、
そのモンスターを次の自分のスタンバイフェイズまで除外出来る。

また、自分フィールドの機械族が、戦闘で破壊される時、
１ターンに１度、ＬＰを８００払う事で、その戦闘では破壊されない。

「だが、戦闘ダメージは通るぜ！」

「うぅっ…！」

翔　ＬＰ３２００→３０００

「アクア・バッシャーを守られたか…俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

「本当に強くなったな…翔。このターンまで、翔がデュエルの流れを掴んでいるぞ。」

「それはいいのだがな…。
さっきから、丸藤氏の様子が何かおかしくないか？」

「そうだね…相手にあんな高圧的な態度をとるなんて、翔らしくないよ…。」

「一体どうしたと言うのデショウカ…ショウ君。」

「アッハハハ！僕のターン、ドロー！」

翔　ＬＰ３２００
手札１枚
モンスターゾーン
マリンロイド　アクア・バッシャー

魔法・罠ゾーン

ハード・シェア

塔也　ＬＰ１５００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－カトリーヌ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「このスタンバイフェイズにテラ・バイトは戻って来る！」

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＡＴＫ０

「フフフ…僕は魔法カード、エレメント・ギフトを発動！

自分フィールドにいるモンスターの属性1種類につき、カードを1枚ドローする。

僕のフィールドにいるモンスターの属性は2種類。　よって2枚ドローするよ！」

エレメント・ギフト

通常魔法

自分フィールドにいるモンスターの属性1種類につき、カードを1枚ドローする。

「いいカードを引いたよ！僕は魔法カード、フォースを発動！

相手モンスターの攻撃力を半分にし、エンドフェイズまで、その数値分、

自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をアップするよ！」

雲魔物－カトリーヌ

ＡＴＫ２６００↓１３００

マリンロイド　アクア・バッシャー

ＡＴＫ２４００↓３７００

フォース
通常魔法
相手モンスターの攻撃力を半分にし、エンドフェイズまで、その数値分、自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をアップする。
成る程…これならば、このターンで終わらせる事が出来るが…。
奴の伏せカードが勝敗の分かれ目か…。
「アッハハハ！行くよ塔也君！！
アクア・バッシャーで、カトリーヌを攻撃！
アクエリア・ウェーブ！」
「俺は手札から、雲魔物－コットン・ボールを墓地に送って、効果発動だ！
相手モンスター1体の攻撃を無効にする！
そして、相手モンスターの数だけ、自分フィールドに雲魔物トークンを守備表示で特殊召喚するぜ！

翔のフィールドのモンスターは2体…。
よって、2体の雲魔物トークンを守備表示で特殊召喚だ！」

アクア・バッシャーが起こした激流の壁に、
コットン・ボールがぶつかり、相殺した。

雲魔物トークン×2
ＤＥＦ０

手札のカードで凌いだか…。

だが、次はどうする気だ？雲雀　塔也。

「まだまだぁ！僕はハード・シェアの効果で、テラ・バイトとアクア・バッシャーの攻撃力を入れ替えて、

テラ・バイトでカトリーヌを攻撃！

行け！テラ・ボルトチャージ！！」

マリンロイド　アクア・バッシャー
ＡＴＫ３７００→０

？３４　電算機獣　テラ・バイト
ＡＴＫ０↓３７００

「俺は雲魔物トークン１体をリリースして、カウンター罠、悪天候を発動！
そのモンスターの攻撃を無効にして、このターンのバトルフェイズを終了させる！！」

悪天候
カウンター罠

相手モンスターが攻撃した時、自分フィールドの雲魔物１体をリリースして発動出来る。
そのモンスターの攻撃を無効にして、
このターンのバトルフェイズを終了させる。

奴は、何とかこのターンを凌いだ様だな。
雲雀　塔也…奴のカードには、僅かながら精霊の気配を感じる…。
奴が、このデュエルに勝つ事が出来れば、丸藤　翔をあのカード

の支配から解放出来るかもしれんな…。

勝て！雲雀　塔也！！丸藤　翔を、あのカードの呪縛から解き放て！！

万丈目↓塔也ｓｉｄｅ

攻撃を防がれて翔は、心底悔しがっていた。

…いや、悔しいなんて表情じゃ無いな。

恨めしいと言うのが正しいか…。

「くそっ！防がれるなんて！！

何でだ！何でなんだ～！！」

「落ち着け翔！お前はどんなデュエルだって楽しんでいただろ！？

昨日お前は、後悔したく無いデュエルをするって言ってたじゃねぇか！」

「うるさい！僕はこのカードで…テラ・バイトで勝つデュエルを

するんだ～！！」

「翔…お前なっ！」「僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド！！

そして、フォースとハード・シェアの効果は切れる！！」

マリンロイド　アクア・バッシャー

ＡＴＫ０→２４００

？３４　電算機獣　テラ・バイト

ＡＴＫ３７００→０

雲魔物ー カトリーヌ

ＡＴＫ１３００→２６００

翔は何故、テラ・バイトにそんなに拘るんだ？

まるで、あのカードに取り憑かれているみたいだぜ…。

いいぜ…そのモンスターで勝つだけのデュエルをするってんなら…！

「翔…お前の間違った考えを、
そのモンスターごと吹き飛ばしてやるぜ！！」

俺の思いに答えろ、俺のデッキ！！

「俺のターン…ドロー！！」

翔　ＬＰ３０００

手札０枚

モンスターゾーン

マリンロイド　アクア・バッシャー

？３４　電算機獣　テラ・バイト（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

ハード・シェア

伏せカード×１

塔也　ＬＰ１５００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物－カトリーヌ

雲魔物トークン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

来たぜ！翔の目を覚ますカードがっ！

「俺は魔法カード、スペース・キャプチャーを発動！

フィールドにいるモンスター・エクシーズを選択し、そいつに装着しているユニットとなったモンスターを全て、自分フィールドに特殊召喚する！

俺のフィールドに現れろ！

タンク・ロイド！ミストルティ！」

スペース・キャプチャーのカードから、テラ・バイトのユニットに光が放出され、
２体のモンスターは、ユニットの光から元の姿になって、俺のフィールドに現れた。

？３４　電算機獣　テラ・バイト
ＯＲＵ　２↓０

タンクロイド
ＡＴＫ１５００

雲魔物－ミストルティ
ＡＴＫ１８００

スペース・キャプチャー
通常魔法

フィールドのモンスター・エクシーズを選択して発動する。
そのモンスター・エクシーズにオーバー・レイ・ユニットとして装着されているモンスターを全て、
自分フィールドに特殊召喚する。

「くっ！テラ・バイトのオーバー・レイ・ユニットがっ！！」

「悪いな…翔。…けど俺は、今のお前の考えは気に入らねぇんだよ！

だから、徹底的に叩くぜ！」

「アッハハハ！面白い事を言うねぇ塔也君！！

今の塔也君じゃあ、テラ・バイトは疎か、アクア・バッシャーも倒せないよ！」

「なら、その目に焼き付けろ翔！

俺は雲魔物トークンと、タンクロイドをリリース！

雄々しき風の闘志を刮目せよ！

雲魔物ーグスタフ、襲来！！」

雲魔物トークンと、タンクロイドが天に昇り、

上空より、勇ましい戦士の姿をした雲がやって来た。

雲魔物ーグスタフ

ＡＴＫ２８００

「あのカードからも、カトリーヌと同じ気配を感じるぜ…。」

「あれも、塔也の切り札の内の１枚みたいだね…。」

「ソウデース…。アノカードが出てしまった以上、ショウ君はモウ…。」

「どう言う事だ、フォリナ君?あのカードには一体、どんな効果があると言うんだ?」

「ソレは…。」

「行くぜ…翔!雲魔物一グスタフで、テラ・バイトを攻撃だ!
そして、グスタフの効果発動!
グスタフが攻撃する時、自分フィールドの雲魔物の数だけ、相手フィールドのカードを手札に戻す!
俺のフィールドには、雲魔物は３体いる!
俺はテラ・バイトと、アクア・バッシャー、そして、ハード・シェアを手札に戻すぜ!

ぶっ飛べ！アトミック・ブロウ！！」
雲魔物－グスタフ
レベル８　水属性　天使族
ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ１６００
このカードが攻撃する時、自分フィールドの雲魔物の数だけ、
相手フィールドのカードを手札に戻す。

「フフフ…そうはさせないよ！
僕は罠カード、リフレクト・フォーメーションをチェーン発動！
自分フィールドの機械族を全て守備表示にして、
このターン、自分フィールドの機械族は戦闘では破壊されず、
このカード以外の効果も受け付けない！」

やっぱ、そういうカードを伏せてあったか！
けどな、翔…。

「徹底的に叩くと言った筈だぜ！！
俺はリフレクト・フォーメーションにチェーンして、　速攻魔法、
誤爆（ミス・バースト）を発動！」

「アレは…！雲雀　塔也め、あんなカードも伏せておったのか！」

「誤爆って、どんな効果だ増川？」

「あのカードは、相手が発動したカード効果を、自分フィールドのモンスター1体を選択して破壊する、と言う効果に変更させるカードだ…！」

「て事は、このデュエル…！」

「…ええ、翔君の負けね…。」

「くっ…！丸藤氏…。」

リフレクト・フォーメーション

通常罠

自分フィールドの機械族を全て守備表示にして、
このターン、自分フィールドの機械族は戦闘では破壊されず、
このカード以外の効果も受けない。

誤爆（ミス・バースト）

速攻魔法

相手が発動したカード効果を、「自分フィールドのモンスター1体を選択して破壊する」と言う効果に変更する。

「誤爆（ミス・バースト）の効果で、リフレクト・フォーメーションは自分自身のフィールドにいるモンスター1体を破壊する効果に変更される！

リフレクト・フォーメーション自体は、既に発動している効果だから、

アクア・バッシャーの効果をチェーン発動する事は出来ないぜ！」

「ぐ…ぐくっ！こんな効果を仕掛けて来るなんて…！！」

「さぁ！どっちのモンスターを破壊するかを選べ、翔！！」

「ぐくっ！僕は…僕は…。」

さあ…自分自身の意志で、そのカードの呪縛を断ち切れ翔！

「…ッ！僕はリフレクト・フォーメーションの効果で、

…テラ・バイトを破壊する!!」

リフレクト・フォーメーションのカードから、光線が放出され、
やがて、テラ・バイトを爆発させた。

テラ・バイトが破壊されたのと同時に、
翔は倒れ、手に浮かび上がっていた数字も消滅していった。

…よくテラ・バイトの呪縛に打ち勝ったな翔…。

「う、う〜ん…僕は今まで一体何を…?」

倒れて直ぐに、翔は立ち上がった。
…どうやら、一時的に気を失っただけみたいだ。

…ホッとしたぜ。

「…翔、大丈夫か?」

「…あれ、塔也君?そっか…僕は今、塔也君と退学を賭けたデュエルを…。」

「…ああ、そうだ翔。そして、このターンでこのデュエルは終わる…。」

「…そっか、僕は…負けるんだね…。」

「本当なら、俺はバトルフェイズを終了して、ターンエンドを宣言したいところだが…。
約束したもんな…全力で戦うって！」

「うん！そうだよ！！僕はこのデュエルの事は殆ど覚えて無いけど…。

僕の体に心が躍る様な感覚が、まだ残っているよ。

僕はこんなに楽しくて大好きなデュエルをまたやる為に、来年には必ずアカデミアに戻って来るよ！

…だから、攻撃して！塔也君！！」

…良かった、やっぱお前は、心の底からデュエルを楽しむ様な奴だぜ！

「ああ！必ず戻って来い翔！！

さっきのチェーン処理の続きだ、
グスタフの効果で、アクア・バッシャーとハード・シェアを翔の手札に戻すぜ！」

「僕のフィールドのカードが…。」

「行け！グスタフ！！ブレイジング・ストーム！！」

グスタフは体勢を直して、剛腕によって起こした強風を、翔に向かって放った。

「うあぁぁっ！…くっ、まだまだだよ！！」

翔　ＬＰ３０００→２００

「翔の負けか…。」

「けど、今の翔はさっきまでと違って、デュエルを楽しんでいるぜ！」

「ソウデースネ！今のショウ君、表情がとってもライト…明るいデースヨ！」

「ふふ、確かにフォリナや十代の言う通りね。」

「うん、まるで憑き物が取れたみたいだよ。」

「…まあ、さっきまでのしかめっ面よりかは、幾分かマシな顔つきになった様だな丸藤氏…。」

「これで終わりだな…。

俺は…俺達は待ってるからな翔!!

雲魔物ー カトリーヌでダイレクトアタック!!

セイグリット・ウィンド!!」

「うわあぁぁぁっ!!」

翔　ＬＰ２００→０

カトリーヌの清らかな風が吹き荒んで、このデュエルは幕を閉じた。

みんなが観客席からデュエルフィールドに降りて来て、俺と翔の所に駆けつけて来る。

これで俺はアカデミアに残れるが、翔は…。

…くそっ！やっぱこんな結末、納得出来ねぇよ！

俺は、直ぐ様クロノス先生に抗議した。

「クロノス先生！本当に翔を退学にすんのかよっ！

たかだかテストで０点を取った位でよ！」

「ぐくっ！抗議した所で、私は怯まないノーネ！　そもそもこれは、０点を取った２人の自己責任ナノーネ！」

「いいえ、２人は０点なんかじゃないわ。」

「「「「「「「「「「響先生！！」」」」」」」」」」

「０点では無いとはどう言う事ナノーネ！シニョーラ響。

この成績表には、２人は確かに０点と…。」

「それは仮の成績表です！

正式な成績表は出張前に校長先生に提出しました！」

「か、仮の成績表デスート！？」

響先生に指摘され、クロノス先生は慌てて取り出した成績表を確認する。

「た、確かに仮と表記されてるノーネ…。
では、これは一体何ナーノ？」

「それは形式的な処置を記載した物です。
２人共、名前欄が無記入だったので…。」

「…ハッ！そう言えばあの時、名前を書き忘れたと、シニョール塔也が…。」

「２人共０点どころか、高得点！
丸藤君は９１点！塔也君に至っては９７点です！」

「ア、アンビリーバボー！！
２人共、高得点だったナンーテ！！」

…なんだよ、て事はクロノス先生の誤解だったのかよ…。

「「「「「それじゃあ、翔の退学は！！？」」」」」

「安心して、退学は有り得ないわ。
勿論、塔也君もね。」

「「「「「や、やったぁー！！！」」」」」

「本当に良かったデス！トウヤ！！」

「うわっ！？フォ、フォリナ！？」

みんなで喜んでいる最中、突然フォリナが俺に抱きついて来た。

「ヒック…ヒック…一時はどうなる事かと…思いマーシタヨ…！」

「フォリナ…。」

俺は抱きついたフォリナの頭を、
優しく撫でてあげた。

「…塔也、みんなが見てる前じゃ、そういうのは控えた方がいいぜ…。」

「…全く2人共、見せつけてくれるな…。」

「2人共、なんか羨ましいッス…。」

十代に指摘され、俺とフォリナは慌てて離れた。

我ながら恥ずかしい事をしてしまったな…。

「場所くらい考えなさいフォリナ…。」

「ウゥ…ハイテンションになってしまって、つい…。」

「ハハハ、いいじゃないか。
仲良しなのは、いい事だよ。」

「…ハハハ。」

「…ひ、雲雀　塔也〜！お、お前〜フォ、フォリナ様によくも…！！」

増川が激昂気味だ…。さっきの行為は、あいつにゃ刺激が強過ぎた様だ…。

「ぬがぎきぃ～！！！本来ならば、即刻デュエルで叩き潰す所だが…！

お、俺は空気が読めん男では無いのでな…。

き、今日の所は勘弁してやるぞ！チクショ～！！」

増川は号泣しながら、去っていった。

「あ、そう言えば十代君は追試ね。」

「え…。」

「今回のテストでも、十代君は赤点だったから…。
追試は来週の木曜日の放課後、教室で。

ではクロノス教諭、一緒に校長室に行きましょうか。」

「分かりマシターノ…。」

そう言って、響先生とクロノス先生は去っていった。

…泣くなよ十代。追試対策に付き合ってやるからさ…。

欲望の象徴　ナンバーズカード！（後書き）

塔也と翔の退学騒動が終わって、僕達はいつも通りにのんびり過ごしたかったんだけど…。

「宝山君！君にデュエルを申し込む！

私が勝ったら、明日香様から離れるのだ！」

「えぇ～！！」

…僕は明日香ファンクラブの会長の天野に、デュエルを挑まれちゃった…。

次回、「煌めく思い」

友達と離れる事にならない為にも、このデュエル、僕は勝ってみせるよ！

煌めく思い（前書き）

お待たせしました！

第２０話です。

この話からしばらくオリジナル展開になっていきます。

煌めく思い

塔也ｓｉｄｅ

俺は今、十代と翔と一緒に教材用のカードを響先生の部屋に届けにやって来た。

「響先生ー、教材用のカードを資料室から持って来ました。どこに置けばいいの？」

「ご苦労様、そこのテーブルに置いてくれる？」

「「「ハーイ！」」」

…ふう、教材用とは言え、結構な量だったな…。

「…それにしても大変だった様ね、この間のデュエル。負けた方が退学だなんて…。」

本当に大変だった…響先生が、出張から帰って無かったら、翔は退学になる所だったからな…。

「ごめんなさい丸藤君、塔也君。
私がクロノス教諭に、成績表の事を伝えていれば…。」

「いえ…もう終わった事だし、いい経験でした。」

あの後クロノス先生は、
鮫島校長に注意を受け、出張から帰って来た建宮先生からも、こってり絞られたそうだ。

ご愁傷様だな…。まあ自業自得な訳だが。

あと、翔が持っていたテラ・バイトのカードは、いつの間にか無くなっていた。

一体あのカードは、何だったんだ?

カードを置き終わって、俺達は部屋を後にした。

「翔…お前あのカードの事、どうしたんだ?」

「あのカード?」

「テラ・バイトの事だよ。」

「…うん、全く覚えてないんだ。

どこで手に入れたかも思い出せないし、いつの間にか僕のデッキから無くなっちゃってたし…。」

「そう言えば…テラ・バイトのカードは、増川が持っていった、って明日香と三沢が言ってたぜ。」

「増川が？」

そう言えばあいつ、前からナンバーズカードを持っていたな…。

あいつは、四六時中デュエルを挑んでくるわ、デュエル中、相手を挑発をしてくるわで、十分奇行な奴だが…。

翔が持っていった時みたいに、
ナンバーズカードを固執している様子は無かった…。

一体どういう事なんだ？

「それよりもさ、アニキ、塔也君。

響先生の机に男の人の写真があったよ！！

響先生の彼氏なのかな？」

ああ…そういえばあったな写真が。

けど、どっかで見た事がある気がするんだが…。

どこだったかな?

「ああ…違う違う。写真に写っていた人は、響先生の弟の響　紅葉さんだよ。」

「へ～弟かぁ…。プロデュエリストなのかな?
大会トロフィーを持っている写真だったけど…。」

響　紅葉…あっ!思い出した!!確か…。

「響　紅葉…第3回デュエル世界大会のチャンピオンだ。」

「そして、海外でも多くの功績を残したプロデュエリストさ…。」

後ろから、万丈目と宝山がやって来た。
そうだ!海外を回った時に見たプロデュエリストの名前だったぜ。

「あっ!万丈目君、宝山君。」

「こんにちは、みんな。」

「…全く、デュエリストならば知らない奴はいないぞ…。

…まあいい、遊城　十代。

前から聞きたかった事がある。

何故お前がジ・アースを持っている!?

アレは響　紅葉が、世界チャンピオンになった時に贈呈されたカードで、世界でたった1枚しかない筈だ…。」

そういえばそうだ…。それにＺｅｒｏも紅葉プロの切り札だった筈…。

「…そうだね、それに十代が使うＨＥＲＯ達って、　どれも紅葉プロが使っていた物ばかりだよね?」

「…さあ、答えろ!遊城　十代!!」

十代は暫く黙ってから、口を開いた。

「へへ…マジな顔して、何を聞いてくると思ったら…。

…貰ったんだよ。」

その答えに、万丈目と宝山は心底驚いていた。

「貰っただって!?…って、まさかそのデッキもかいっ!?」

「ああ、そうだよ。…まあ貰ったって言うよりは、俺に託してくれた…かな?」

「貰っただと…託してくれただと…。

ふざけるな!そんな答えに納得出来るか!!」

万丈目は、十代の言葉に激怒していた。

「万丈目!?ちょっと落ち着こうよ!」

「これが落ち着いていられるか!」

「そんな事言われたって、俺が話した事は本当なんだからな…。」

「嘘をつくな!そんな訳が…!」

あっ!チャイムが鳴っている。

「ヤベェ!授業に遅れるぜ!!

急ごうぜ！翔、塔也！！」

「お、おう！そうだな！！じゃ、どっちが早く教室に着くか競争な十代、翔。」

「よし来た！負けないぜ翔、塔也！！」

「待ってよ～！アニキ～、塔也君～！！」

「お、おい！待て遊城　十代！！」

「万丈目、僕達も教室に急ごうよ！
欠席になっちゃうよ！！」

「…チッ！！」

万丈目は、まだ納得してない様子だが…。

紅葉プロと十代は、何があったんだろな…。

俺も気になる所だがな…。

塔也→宝山ｓｉｄｅ

あれっきり、万丈目の機嫌が悪くなっていた。
授業の最中でも、むくれていたなぁ…。
授業が終わってから、早速万丈目と話したみた。

「万丈目…いい加減、機嫌を直しなよ。
ほら、笑って笑って。」

「余計なお世話だ…。俺の事など、放っておけ宝山。」

万丈目の態度に、珍しく僕は、ムッと来ちゃったよ!

「放っておける訳無いじゃないか!!
僕達は友達でしょう!?」

「…悪かった、少し言い過ぎたな宝山。」「…やっぱり、さっきの十代の言葉が原因なのかい万丈目?」

「…まぁな、紅葉プロは、俺の憧れのデュエリストだからな…。
俺の知る限りでは、他人にホイホイ大切なカードを譲る様な人ではない。」

「そうか…君は紅葉プロに憧れを…。
なら…もし十代が、紅葉プロと知り合いだったらとしたら？」

「バカな！？俺ですら、紅葉プロとは、小さい頃に大会で１度きりしか会っていないんだ！
あいつに、そんな接点がある筈など無い！」

「…だから、もしもの話だってば。
そんなに怒らないでよ～。」

「…フン。」

あ～あ…これじゃ今日１日は機嫌は直りそうにないや。

「ふぁ～…やっと授業が終わったか！
よ～し！遊城　十代め…待っていろよ～！！」

あ～！ダメだよ増川！！今、万丈目の前で十代の名前を言ったら…。

「遊城　十代だとっ！！俺の前でそいつの名前を言うな！」

「ぬおっ!?何だ何だ万丈目氏、そんな大声をあげて…。」

「増川、今日は万丈目の前で十代の名前を言わないであげて…。十代とちょっとした事があって、少し気が立っているんだ。」

「余計な事を言うな宝山!」

「ほお…かのジュニアチャンピオンも、奴に頭を悩ませるか…。これは傑作だなぁ!ハッハッハ!!」「貴様…!」

「おっと、そろそろロビーに行かねばな…。授業までに、間に合わなくなってしまう!ではな!万丈目氏、宝山氏!!」

「フン、忙しない奴め…。」

「本当にね…、いつになったら諦めるんだろ?」

増川は、今まで十代に５００回位デュエルをして、全て負けているけど…。

最近になってからは、十代をギリギリまで追い詰める事が多くなってきたね。

毎回見ていてヒヤヒヤしているよ…。

…あれ？増川の表情がいつもと違うね。

「いや…違ったな。今はそれどころでは無かった！
…宝山氏、警告として伝えたい事がある！」

僕に…？増川が、塔也のデュエルの挑戦権を後回しにするなんて珍しいな…。

何だろう？伝えたい事って…。

「明日香ファンクラブの連中に気を付けろ。」

「明日香ファンクラブに気を付けろって…。

どういう事だい増川？」

「うむ、奴らめ…天上院　明日香に近付く者を、片っ端からデュエルで排除していると言う噂が立っているのだ。」

「…何を言うかと思えば、下らん事を…。
天上院君も困った奴らがくっついて、さぞかし迷惑している事だろうな…。」

増川の言葉に、万丈目が呆れちゃった…。
でも、お陰で機嫌が戻ってきたよ。

「話を最後まで聞くのだ！万丈目氏！！

その噂には続きがあってな…。
言葉通りに、ただデュエルで排除するだけならまだ良かったのだが…。
奴らとのデュエルで敗れた連中は、生気が抜けた様な状態になってしまったと言うのだ…。」

「…何だそれは？そんな下らん話を宝山に伝えてどうする？」

「…万丈目、増川の話は事実かもしれないよ。」

「…何？どういう事だ宝山？」

万丈目に、僕の推察を話した。

「…見てよ、この寂しい教室を。
ホームルームでクロノス寮長が、クラスの半数近くが体調不良で欠席になったって言ってた話を、万丈目は覚えているかい？」

「ああ、覚えている。この時期では有り得ない程の人数だった…。
お陰で、今日は授業中は静かだ。
…だが、それと何の繋がりがあると言うんだ宝山？」

「欠席になった人はみーんな、明日香さんと友達、そうじゃなくても、よく明日香さんと会話していたんだ。」

「だとしても、増川の話が事実と言う証拠は無いぞ…。
大量欠席は、偶然に過ぎん。」

「いーやっ！俺の聞いた噂は、間っ違い無くアカデミアで実際に起こっている！
証拠だってあるんだぞ！！」

増川は、万丈目に反論して、懐から幾つかの写真を机に叩きつけて、僕達に見せた。

「見よ！我が同士達の悲痛な姿を！！
髪は白髪になり、肌はしわくちゃになったこの変わり様を！！」

「何だ…これは…。」

「可哀想だよ…。どうしてこんな姿に…。」

増川が見せた写真をみて、
僕達は絶句した。

だって…見せた写真の中には、僕の友達のクラスメートが、
まるで、老人の様な姿に変わり果てていたんだから…。

「被害に遭った者達は皆、
こんな姿になり果てている…。

鮎川保険医でも、原因は分からないと言っていた…。

だが何とか俺は、被害に遭った同士の1人から聞き出せたのだが
…。」

何やら増川が困惑している…。

どうしたと言うんだろう?

「…どうにも不可解な言葉でな、
明日香ファンクラブの連中とデュエルで敗北をして、こんな姿
になったと言うのだ…。」

「何、デュエルで！？」

それは確かに不可解だね。
ソリッド・ビジョンが、人体にそんな悪影響を及ぼすだなんて…。

「これでは先生達に証言した所で、
痛い奴と言われて、それで終わりだ…。
これでは、被害に遭った同士達や生徒に何の力にもなってやれん…。」

「安心しろ増川、お前は十分痛い奴だ。」　あちゃ～万丈目…今それを言っちゃダメだよ。

「万丈目氏～！人が真剣に話をしている時に…！
…そうだ！これ以上奴らをのさばらせ無い為にも、２人共、俺に力を貸してくれ！」

「何だと！？」

「僕は協力するよ！増川。」

「そうと決まったら、行動開始だ！

さぁ、奴らをとっちめに行くぞ！２人共！！」

「待て！何故、俺がお前に協力しなければならん！」

「奴らはデュエルで被害者達をあんな目に遭わせたからな…。
２度とそんな考えを起こさん様、　徹底的にデュエルで叩きのめす事が出来るデュエリストが必要なのだ！
２人共、強大な実力を持っているからな。それが理由だ…。

頼む！万丈目氏！！この通りだ！！」

増川が万丈目に土下座した。

増川は、そこまでファンクラブの仲間達を思っていたんだね…。

「増川…お前。」

「万丈目、引き受けてあげてようよ。
増川がこんな姿を見せてまで、人に頼み事をするなんて、滅多に無いんだよ？」

「…宝山。」

「1つ、僕から提案してもいいかい増川？」

「提案？それは何だ宝山氏？」

「もし…明日香ファンクラブの会員が犯人なら、この時間帯にはまず動かないと思うんだ。
捜索をするなら、放課後がいいと思うんだ。」

僕の提案に、増川は納得した様だ。

「…むぅ、確かにな…分かった！

ならば放課後、一度正門にて集合だ！2人共！！
万丈目氏は火山周辺を、
宝山氏はレッド寮周辺を頼む！
それぞれの場所に、数人の同士を待機させておく。」

「増川は、どこを探すの？」

「俺は、ブルー寮近くの林を捜索する！
今言った場所が、被害者が多く出ている所だからな…。」

「随分と、場所を知っているんだな。」

「俺達ファンクラブの情報網をナメるなよ万丈目氏？
結構な大人数だからな、
大抵の情報は自然と入って来るのだ。」

…うわぁ、何気に怖いよ増川…。

「では放課後まで一度解散だ！万丈目氏、宝山氏！！
俺は同士達に改めて情報を聞いてくる！」

そう言って、増川は教室を出ていった。

「…全く、俺が奴に力を貸す事になるとはな…。」

「いいじゃない、万丈目。
人助けと思って頑張ろうよ！」

「…まあ、奴の言葉が本当ならば、
同じオベリスク・ブルーとして、見過ごす事は出来ん！
そいつらを叩き潰すぞ、宝山！」

良かった、やる気になってくれたよ！

「勿論、頑張ろうね万丈目！」

「…ああ。」

そうして放課後、僕達3人は前もって決めた場所で、明日香ファンクラブのメンバーを捜索したんだけど…。

なかなか見つからないなぁ…。

時間が過ぎて、日が沈んだ頃だったかな。

「うわあぁぁぁっ！！」

突然、悲鳴が聞こえたんだ。

僕は、悲鳴が聞こえた方へ走った。

暫く走ったら、そこには、僕と一緒に捜索していたフォリナファンクラブのメンバーが、

老人の様に年老いた姿で倒れていて、

その近くにもう1人、明日香ファンクラブの会長の天野がいた。

「…それは、君がやったのかい？」

そう尋ねると、冷たく笑いながら答えた。

「…フフフ、そうだ。この私が罰を下したのだ！」

「罰だって！？どう言う事だい？」

「…コイツは、私達が明日香様に近付く輩に罰を与えようとしたら、邪魔をしたのでね…。

代わりに罰を与えたのだよ。」

…なんて自分勝手な人なんだ…。

増川はフォリナさんの事が好きで、アドレス欲しさに十代や塔也に、デュエルを挑んで来る位だけど…。

でも、天野みたいに人を傷付ける事は1度もしていない！

「そう言えば、君もよく明日香様に近付いていたな…。

私は君にデュエルを申し込む！私が勝ったら、明日香様には近付くな！」

「…いいよ、けど僕が勝ったら、こんな事は2度しないと約束し

て欲しいんだ！」

「いいだろう！だが、その前に…。」

突然、天野の体が光り出し、
発光が収まると、何故かそこには天野ではなく、同じオベリスク・ブルーの白石が立っていた。

「なっ！？これは一体どういう事だい！？」

「ハハハハ！驚いたか宝山よ！」

「なんで白石が？確かそこには天野が…。」

「どうでもいいだろ、どうせお前も恐怖に苛まれて、
それどころではなくなるのだからな！」

これはデュエルの後でじっくり問い詰める必要がありそうだね。

「では始めようか…お前にも罰を与えてやる。」

「それはこっちの台詞だよ…。
僕は君を…君達を絶対に許さないよ！」

「「デュエル！！」」

宝山　ＬＰ４０００

白石　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で、
先攻は僕からだ。

「僕の先攻、ドロー。僕は宝玉獣　サファイア・ペガサスを攻撃表示で召喚するよ。」

今回も頼んだよ、サファイア・ペガサス！！

宝玉獣　サファイア・ペガサス
ＡＴＫ１８００

「サファイア・ペガサスの効果を発動するよ！

自分の手札・デッキ・墓地の中から、宝玉獣１体を永続魔法扱いとして、魔法・罠ゾーンにセット出来るよ。　僕はＬ・宝玉獣　ガーネット・フェニックスをセットする！」

「ほお、そいつは寮対抗デュエルに出た奴か。」

「そうだよ。続けて、永続魔法レインボー・クリスタルを発動。これで自分フィールドにいる宝玉獣１体につき、宝玉獣の攻撃力を２００ポイントアップする！」

宝玉獣　サファイア・ペガサス
ＡＴＫ１８００↓２２００

「カードを１枚伏せて、ターンエンドだよ。」

「…フッ、私のターン、ドロー。」

宝山　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

宝玉獣　サファイア・ペガサス

魔法・罠ゾーン

レインボー・クリスタル

Ｌ・宝玉獣　ガーネット・フェニックス

伏せカード×１

白石　ＬＰ４０００

手札６枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

白石のデッキは確か、光属性のデッキの筈…。
手ごわいだろうけど、負けられないよ！

「私は速攻魔法、フォトン・リードを発動。

手札からレベル４以下の光属性１体を攻撃表示で特殊召喚する。

私はデイブレーカーを特殊召喚する。」

白い鎧を纏った騎士が、颯爽と現れた。

デイブレーカー
ＡＴＫ１７００

「更にデイブレーカーの効果発動。

コイツが特殊召喚した時、
手札の同名モンスター１体を特殊召喚出来る。

来い、新たなデイブレーカーよ！

更に効果発動、三体目のデイブレーカーを手札から特殊召喚する。」

デイブレーカー×２
ＡＴＫ１７００

フォトン・リード

速攻魔法

手札からレベル４以下の光属性１体を、
攻撃表示で特殊召喚する。

デイブレーカー

レベル４　光属性　戦士族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ０

このカードが特殊召喚に成功した時、　手札から同名モンスター
１体を特殊召喚出来る。

フィールドに３体のモンスターが召喚されたけど…。
まだ大丈夫、充分耐えられるよ！

「私は魔法カード、フォトン・ドライブを発動。
自分フィールドの光属性を１体選択し、
そのモンスターと同名モンスター１体につき、　１枚ドローする。

私はデイブレーカーを選択！
フィールドに他にデイブレーカーは２体存在する為、２枚ドロー
する。

…フッ、来た様だ。」

…っ！仕掛けて来るみたいだね！
一体何のカードを引いたんだろう？

「魔法カード、フォトン・フラッシュを発動。
自分フィールドの光属性の数だけ、
相手の表側表示のカードをセット出来る…。

さぁ、宝山よ！お前のフィールドのサファイア・ペガサスとガーネット・フェニックス…。
そして、レインボー・クリスタルをセットして貰おうか！」

「…分かったよ。」

「更に魔法カード、フォトン・イレイサーを発動する！」

マズいよ！あのカードは…！

「コイツは自分フィールドの光属性の数だけ、
相手のセットカードを破壊する！

…ククク、セット状態のサファイア・ペガサスとレインボー・クリスタル、
そしてお前が、元々伏せていた魔法・罠カードを破壊する！」

フォトン・ドライブ

通常魔法

自分フィールドの光属性を1体選択し、
そのモンスターと同名モンスター1体につき、1枚ドローする。

フォトン・フラッシュ

通常魔法

自分フィールドの光属性の数だけ、
相手の表側表示のカードをセット出来る。

フォトン・イレイサー

通常魔法

自分フィールドの光属性の数だけ、
相手のセットカードを破壊する。

「なら僕は魔法・罠ゾーンのガーネット・フェニックスを墓地に送って、
罠カード、宝玉の輝きをチェーン発動するよ！
自分フィールドの宝玉獣1体を墓地に送る事で、

このターンまで相手フィールドのモンスターの攻撃力を半分にするよ！」

ガーネット・フェニックスは、強烈な紅い輝きを放つと、
デイブレーカー達は、怯み出したよ。

デイブレーカー×３
ＡＴＫ１７００↓８５０

「そしてサファイア・ペガサスは、破壊される時、
魔法・罠ゾーンにセットするよ。」

「悪あがきを…バトルフェイズに移る！

デイブレーカーでダイレクトアタック！」

「う…ぐはっ！」

宝山　ＬＰ４０００↓３１５０

な、何！？この痛みは…？まるで本当に斬られたみたいだよ…！

「まだ行くぞ！2体目のデイブレーカーでダイレクトアタック！」

「うぐ…っあ！」

宝山　ＬＰ３１５０→２３００

「うぅ…どうなっているの？
なんで…ソリッド・ビジョンのモンスターの攻撃で、本当に傷を…。」

「…おっと、言い忘れた…。
このデュエルでは、
ダメージがそのままプレイヤーに直結するのだ。」

「何だって！？どうしてそんな事が出来るの！？」

「あるカードの力…とだけ言っておこうか。

さあ、３体目のデイブレーカーのダイレクトアタックを喰らえ！」

最後に控えたデイブレーカーが、
僕を斬りつけた。

「うぐうぅぅっ！」

宝山　ＬＰ２３００→１４５０

「はぁ…はぁ…。」

「どうした宝山、息があがっているぞ？
俺を許さないんじゃ無かったのか？」

白石はそう言って、僕を嘲笑った。

被害に遭ったみんなは、
こんなに悲しいデュエルをしたって言うの！？

そして最後には…。

気をしっかり持たなきゃ、僕！

じゃないと彼らはいずれ、
塔也や十代達にも、被害を及ぼす筈…。

最悪の場合、アカデミアの生徒全員が被害者に…。

そんな事には、絶対にさせない！

その為にも、まずは僕が彼をここで食い止めないとね…。

「まだまだだよ！これ位の傷なんて、どうって事無いさ！」

「威勢はいいな…。だが、それはいつまで持つかな？

私はメインフェイズ２に移行する。

ククク…行くぞ、私はレベル４のデイブレーカー３体をオーバー・レイ！！」

エクシーズ召喚…。…っ！まさか、呼び出すのって！

「３体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！

輝けし刃よ、断罪の時は来たれり…。

正義を我が物に！

エクシーズ召喚！！

裁け、？１０　白輝士　イルミネーター！！」

3体のデイブレーカーが渦に飲まれると、
豪華な銀のモニュメントが出現し、
それが、馬に跨った騎士に変形した。

？１０　白輝士　イルミネーター
ＡＴＫ２４００
ＯＲＵ　０→３

「やっぱり…そのモンスターって、ナンバーズカードだよね？」

「ほう…ナンバーズカードを見るのは初めてではないのか？

…まあいい、私はイルミネーターの効果を発動する！

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、
手札１枚を墓地に送り、
カードを１枚ドローする！」

？１０　白輝士　イルミネーター
ＯＲＵ　３→２

あのナンバーズカードの効果は、どうやら手札交換の様だね…。

？１０　白輝士　イルミネーター

ランク４　光属性　戦士族／エクシーズ

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２４００

レベル４×３体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、
手札１枚を墓地に送り、
カードを１枚ドローする

白石が、微かににやけた…。

どんなカードを引いたんだろう？

「カードを１枚伏せて、ターンエンド。」

白石の手札は０だ…。

今伏せたカードは、明らかに罠カードだね。

でも、まずはこの状況を何とかしないと！

「僕のターン、ドロー！」

宝山　ＬＰ１３５０

手札４枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

宝玉獣　サファイア・ペガサス

白石　ＬＰ４０００

手札０枚

モンスターゾーン

？１０　白輝士　イルミネーター（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

伏せカード1枚

「僕は魔法・罠ゾーンのサファイア・ペガサスをリリースする！
来て、L・宝玉獣　アクアマリン・サーペント！！」

僕のフィールドに翼の様なエリと水色の鱗を持った、優美な大蛇が現れたよ。

L・宝玉獣　アクアマリン・サーペント
ＡＴＫ２４００

「くっ！新たなL・宝玉獣か…。」

僕にとっては、久し振りなんだけどね…。

「まだまだ行くよ！僕は魔法カード、宝玉の恵みを発動するよ！
効果で墓地から、サファイア・ペガサスとガーネット・フェニックスを魔法・罠ゾーンにセットして、
更に魔法カード、宝玉の導きを発動！

自分の魔法・罠ゾーンに、

宝玉獣が2体以上存在する時、
デッキから、宝玉獣1体を特殊召喚出来るよ！
僕はデッキから、L・宝玉獣　オパール・シャークを攻撃表示で特殊召喚するよ！」

L・宝玉獣　オパール・シャーク
ＡＴＫ２１００

宝玉の導き
通常魔法

自分の魔法・罠ゾーンに、
宝玉獣が2体以上存在する時、
デッキから、宝玉獣1体を特殊召喚出来る

「一気に上級モンスターを2体召喚だと！？」

「さあ行くよ！アクアマリン・サーペントの効果発動！
1ターンに1度、手札1枚を墓地に送る事で、相手フィールドのカード1枚を手札に戻す！

僕が戻すカードは、白輝士　イルミネーターだよ！」

「止める！私は墓地からライト・デチャンターの効果発動！
自分フィールドの光属性1体が、　相手のカード効果を受ける時、
墓地のこのカードを除外する事で、その効果を無効に出来る！」

あのカードは…イルミネーターで墓地に送ったカードだね…。

L・宝玉獣　アクアマリン・サーペント

レベル6　水属性　爬虫類族

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１６００

このカードをアドバンス召喚する時、
自分の魔法・罠ゾーンの宝玉獣をリリース出来る。
1ターンに1度、手札1枚を墓地に送る事で、相手フィールドの
カード1枚を手札に戻す。
このカードがモンスターゾーンで破壊された時、
自分の魔法・罠ゾーンに永続魔法カード扱いとしてセット出来る。

ライト・デチャンター

レベル3　光属性　魔法使い族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００

自分フィールドの光属性1体が相手のカード効果を受ける時、
墓地のこのカードを除外する事で、その効果を無効に出来る。

アクアマリン・サーペントの効果は無効にされたけど、これで勝機は見えたよ！

「バトル！アクアマリン・サーペントで、
イルミネーターを攻撃！！」

「同士討ちか？…だがさせん！罠発動、光子化（フォトナイズ）！
相手モンスターの攻撃を無効にし、
次の自分のエンドフェイズまで、自分フィールドの光属性1体の
攻撃力は、無効にしたモンスターの攻撃力分アップする！」

「予想してたよ！僕は墓地のライジングサン・ドラゴンの効果発動！」

「…っ！宝玉獣じゃないだと？」

「宝玉獣達は種類が少ないからね、調整の為に他のモンスターも入れているのさ。」

それにこのカードは、万丈目から交換して貰ったカード…。
それもあって、入れているんだ。

「続けるよ、ライジングサン・ドラゴンの効果は、相手モンスターの攻撃力をアップする効果が発動した時、
このカードを除外する事で、
その効果を無効にし、エンドフェイズまで無効にした効果の数値分、
自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をアップさせるよ！
光子化の効果をアクアマリン・サーペントに！」

L・宝玉獣　アクアマリン・サーペント
ＡＴＫ２４００→４８００

「何っ！バカな…。」

「行け！アクア・スパイラル！！」

アクアマリン・サーペントは水流と共に螺旋を描き、
イルミネーターに突撃した。

「ぐがっ！…くっ、バカな！？イルミネーターが！！」

白石　ＬＰ４０００→１６００

「これが最後の攻撃…。今度は君が痛みを知る番だよ！行って！オパール・シャーク！！

オパール・バイト！！」

「ぐおあぁぁぁっ！！」

白石　ＬＰ１６００→０

「う…あぁぁ…。」

白石の体から何かが抜けて、
さっきから右手に浮かんだ数字は消え、
見る見るうちに老化していく。

どうなっているの？翔や龍牙先生の時は、こんな事は無かったの

に…。

うぅ…さっきのデュエルで受けた傷が今になって響いてくる…。

ゴメン、2人共…。僕はここまでみたいだ…。

僕の意識はそこから途絶えてしまった…。

煌めく思い（後書き）

俺は増川の頼みで、宝山と共に、天上院君を慕っているファンクラブの愚かな行動を止めるべく協力する事になってしまった。

火山付近を捜索していた俺は、
ファンクラブの笹原と対峙するになった。

「同じオベリスク・ブルーとして、
お前達の行動を見過ごないのでな…。

俺が勝ったら、無差別に生徒を襲うを止めろ！」

すると、奴は思いがけない要求を突きつけた。

「なら、僕が勝ったらアンタの精霊のカードを頂くよ！」

「な、何だと！？」

次回、「終焉への計略」

光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）…。
俺と共に、奴に立ち向かうぞ！

終焉への計略（前書き）

お待たせしました！

第２１話です。

今回は、アニメでは一瞬しか出ていないナンバーズカードが登場します。

終焉への計略

塔也ｓｉｄｅ

「お～い、見つかったか～？翔～、塔也～。」

「ううん、まだ見つからないよアニキ～！」

「おいおい十代…。昨日、響先生に追試喰らったばっかりだってのによ…。
宿題のプリントを失くすなよな…。」

「ハハ…悪いな翔、塔也。探すの手伝って貰ってよ。」

「まあ、いいけどさ…。」

「気を付けてよアニキ！
アニキが宿題のプリントを失くしたって、
響先生が知ったら、また補習授業を受けさせられるよ…。」

俺は今夜中に、十代と翔と一緒に、
十代が失くした宿題のプリントを探している最中だ。　何でも寮に帰る途中に一眠りして、

寝ている時に風で飛ばされたらしい…。

まあ、無理もないか…。
増川が以前よりも、頻繁にデュエルを挑んで来る様になったからな…。

本当にスマン！十代。

「本当に済まないな十代。
俺が増川に、十代に勝ってからと言っちまったばっかりに…。」

「いいんだよ、その事は。
塔也には、勉強を教わってるんだし…。
助け合うのが友達だろ？」

「十代～！俺にとって、今はその言葉が感激もんだぜ！」

「ハハ…そう言えばさ、今日は増川、珍しく俺達のところに来なかったよな？」

十代の言う通り、増川の奴、今日は全く見かけないな…。

「確かに今日は見てないよな…。

いつもだったら、しつこい位現れるのにな。」

「まあ、お陰で今日はぐっすり寝れそうだぜ。」

十代と話しながら探し続ける事5分、
ようやく、茂みに引っかかっていたプリントが見つかった。

「おおっ！あったあった！！
じゃあ、翔に連絡してレッド寮に戻ろうぜ塔也。」

「そうだな十代、今から取り掛かればすぐに終わるぜ。」

十代が翔に連絡しようとした矢先に、
翔が慌てた様子で、こっちに向かって来た。

一体、どうしたんだ？

「アニキー！塔也君ー！大変だよ～！！」

「どうしたんだ？翔。そんな血相変えて…。」

「十代のプリントだったら、見つかったぜ？」

「そうなの？良かったねアニキ。
…じゃなくって！ちょっと僕に付いて来て！」
そう言って、翔は俺達に付いて来る様に促して、走っていく。

「お、おい！待てよ翔！」
「一体どうしたってんだ？」

翔に付いて来て暫くすると、
そこには宝山と、凄く老けているブルー生徒が倒れていた。

「ほ、宝山！？何でこんな所で倒れているんだ！？」

「それに、なんか爺さんみたいに老けたブルー生徒も近くで倒れているぜ！」

「僕が見つけた時には、２人共意識が無かったんだ。
大変だ！と思って２人を探したんだ。」

翔が簡潔に説明した。

「ど、どうしよう！？保健室に運んであげたいけど…。」

「今日は体調不良を訴えた生徒でごった返しているから、行っても恐らく、2人を懐抱する事は出来ねぇ…。」

そうだ…今日は朝のホームルームで響先生が、体調不良で、どのクラスの生徒の大半が保健室に運ばれている為、保健室は使えねぇんだ…。

「だったらひとまず、俺達の部屋まで運ぼうぜ！翔！この事を響先生に伝えて、この2人をレッド寮で休ませる許可を取ってくれ！」

「うん、分かったよアニキ！」翔は一足早く、レッド寮へ戻っていった。

「塔也は俺と一緒に、この2人を俺達の部屋まで運ぶぜ！」

「よし、任せろ！」

俺は老けているブルー生徒を十代は宝山を運ぶ為、それぞれのディスクにセットされているカードをホルダーに戻した。

その時、1枚のカードに目が止まった。

「?10　白輝士　イルミネーター…?

これって翔の持ってたテラ・バイトみたいに?って記されているな…。」

そのカードを手にすると、
何かが頭の中に入って来る感覚が襲ってきた。

「ぐわっ!?あ、頭が痛っえ!!!
何だこりゃ!?」

「お、おい!どうしたんだ塔也!?」

頭に入って来たそれの感覚は突然消滅し、頭痛が収まった。

まるで、何かの力がそれを打ち消した様だった…。

直後、イルミネーターのカードが光り出し、
カードから複数の光の束が、空に放たれ、
やがて、光の雫となって降り注いだ。

「こ、これは一体…？」

「お、おい塔也、どうしたんだ急に？
突然苦しみ出してよ…。」

「あ、ああ…もう平気だ。
早く2人を部屋まで運ぼうぜ十代。」

「平気ならいいけどな…。

じゃあ、レッド寮まで急いで2人を運ぶぜ！」

俺達は2人をおぶって、レッド寮へ向かった。

それにしても、さっきの頭痛は一体…？　光の雫が降り注いだ後、爺さんみたいなブルー生徒が、見る見るうちに若返ったみたいだし…。

一体何がどうなっているんだ？

兎に角、今はこの2人をレッド寮で休ませないとな…。

塔也↓万丈目ｓｉｄｅ

増川に、火山付近を探せ　と言われ、
怪しい奴を探しているが、
一向に見つからん…。

もし…今回の事件が、あのナンバーズカードによって引き起こされた物だったとしたら…。

明日香君のファンクラブの連中は、
全員ナンバーズカードに乗っ取られている可能性が高い。

だが、未だに分からん…。

ナンバーズカードならば、龍牙先生や丸藤　翔も使っていたが、
デュエル中に悪影響を及ぶ物では無かった…。

ならば何故、今になってそんな現象が起こった?

「…フフフ。やあ…アンタとこんな所で会うなんて奇遇だねぇ…万丈目?」

突然、誰かの声が聞こえ、
咄嗟に振り向くと、オベリスク・ブルーの生徒が、俺に歩み寄って来た。

「お前は…笹原か。お前こそ、こんな所で何をしている?」

「ちょっとデュエルをしただけさ…。
別に怪しい事はしてないよ。」

笹原は、せせら笑いしながら答える。

「ならば、お前の相手をした生徒はどこにいる?」

「さぁ?どこだろうね…。」

笹原の体からは、丸藤　翔と同様にオーラが纏わり憑いている。

やはり…コイツは、ナンバーズカードに取り憑かれいるな…。

「単刀直入に聞くぞ、笹原…今日、クロノス寮長が話していた生徒の大量欠席の原因はお前達なのか?」

「随分と唐突な言い分だねぇ…。
…誰の入れ知恵なのかなぁ?」

笹原の表情が険しくなった。
…フン、あの様子だと事実の様だな。

「フォリナ君のファンクラブをしている増川からだ。
もし…増川の言葉が事実ならば、
同じオベリスク・ブルーとして、見過す訳にはいかん！」

「…やれやれ、やっぱり根こそぎ生気を奪うべきだったよ…。
そしたら、誰かに伝わるなんて事が無かったのにさぁ！」

笹原は怒気を籠もらせて、白状をした。

「あっさりと白状するんだな。
ついでに、お前達の目的を教えて貰おうか！」

「アッハハハ！そこまで喋る程、僕は親切じゃないさ。
どうしてもと言うならさぁ～万丈目、僕とデュエルをして勝つ事だねぇ！」

「いいだろう…元々お前達ファンクラブの連中とデュエルする為に、ここに来たのだからな…。
俺が勝ったら、無差別に生徒を襲うのを止めろ！」

「…いいよ！でも、な～んかそっちだけ一方的に要求してるよね～？

…そうだ！僕が勝ったら、万丈目…アンタの精霊のカードを頂くよ！！」

「何だとっ！？」

コイツ、何故精霊のカードの事を…！

…いや、待てよ。

「笹原…お前、その事は誰に聞いた…！」

「さぁ？誰だろうねぇ…。

でも万丈目、その反応だと持ってるんだぁ～！」

やはり…笹原には光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の事は見えていないな…。

ならば、誰が精霊のカードの事を…。

「お前などに負ける俺ではない！

サッサと始めるぞ笹原！」

「へへ…約束したよぉ～。
じゃあ行くよ！」

光と闇の龍よ…。俺と共にナンバーズカードに立ち向かうぞ！

「「デュエル！！」」

万丈目　ＬＰ４０００

笹原　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能により、先攻は俺からだ。

「先攻は俺だ…。俺のターン、ドロー！
俺はレッド・ワイアームを攻撃表示で召喚！」

赤い飛竜が空より飛来して来た。

レッド・ワイアーム

ＡＴＫ１７００

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

「じゃあ行くよ！僕のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
レッド・ワイアーム
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

笹原　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「僕はカードを2枚伏せて、魔法カード、手札抹殺を発動だよ～ん！」

な、手札抹殺だと！？

くっ、光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が…。

「その効果により、お互いの手札を全て墓地に送り、その枚数分だけドローする。

僕は3枚、万丈目も3枚ドローしなよ。」

手札抹殺

通常魔法

お互いの手札を全て墓地に送り、その枚数分だけドローする。

「更～に、僕はマッド・リローダーを守備表示で召喚！」

マッド・リローダー

ＤＥＦ０

あのモンスターの効果は確か、手札交換…！

「僕はこれでターンエンドだ。」

奴は手札が悪いのか？
だとすれば、好都合だ！

ナンバーズカードが召喚される前に蹴りをつけてくれる！

「俺のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ４０００

手札４枚

モンスターゾーン

レッド・ワイアーム

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

笹原　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

マッド・リローダー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「俺は炎龍（マグナ・ドラコ）を攻撃表示で召喚！」

小さな赤い龍が、笹原を威嚇する。

炎龍（マグナ・ドラコ）

ＡＴＫ１４００

「行くぞ！炎龍で、マッド・リローダーを攻撃！マグナ・フレイム！！」

小さな火炎弾を放って、マッド・リローダーを焼き尽くした。

「…くっ、マッド・リローダーの効果発動！
このカードが戦闘で破壊された時、手札２枚を墓地に送り、
デッキから新たに２枚ドローするよ～ん！」

マッド・リローダー

レベル１　闇属性　悪魔族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードが戦闘で破壊された時、手札２枚を墓地に送り、
デッキから２枚ドローする。

「まだ攻撃は残っている！
レッド・ワイアームでダイレクトアタックだ！」

レッド・ワイアームの火炎のブレスが、笹原を襲った。

「うわあぁっ！」

笹原　ＬＰ４０００→２３００

「…フフーン、罠発動！無抵抗の真相！！

相手からダイレクトアタックを受けた時、　手札のレベル1モンスターを相手に見せる事で発動する！
そのモンスター1体と、
デッキの同名モンスター1体を特殊召喚するよぉ～！

僕は手札のダークシー・フロートを見せ、
手札とデッキからそれぞれ1体ずつ特殊召喚だよ～ん！」

ダークシー・フロート×2
ＡＴＫ０

無抵抗の真相

通常罠

相手からダイレクトアタックを受けた時、
手札のレベル1モンスターを相手に見せる事で発動する。
そのモンスター1体と、
デッキの同名モンスター1体を特殊召喚する。

モンスターを2体を特殊召喚して来たか…。　次のターンに仕掛けるのか？

「俺はこれでターンエンド…「じゃ～あ、エンドフェイズに罠カ

ード、捨て身の宝札を発動～！」何だと！？」

くっ！またドロー効果か！

「自分フィールドの攻撃表示モンスター2枚の攻撃力の合計が、
相手フィールドの最も攻撃力が高いモンスターよりも低い場合、
カードを2枚ドローするよ～ん！

で～も、このカードを発動したターン、
僕はモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚が出来ず、
表示形式の変更も出来ないけ～ど～、
エンドフェイズなら意味無いよね～？」

「くっ、お前のフィールドのダークシー・フロートの攻撃力は
共に0…。」

「その通～り！だからアンタのフィールドにいるどのモンスター
でも結果は変わらないけどね～。
ダークシー・フロート2体の合計攻撃力は、
レッド・ワイアームよりも下！

よって2枚ドローするよ～ん！」

捨て身の宝札

通常罠

自分フィールドの攻撃表示モンスター2枚の攻撃力の合計が、
相手フィールドの最も攻撃力が高いモンスターよりも低い場合、
カードを2枚ドローする。

このカードを発動したターン、
自分はモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚が出来ず、
表示形式の変更も出来ない

「フフーン！僕のターン、ドロー～！」

万丈目　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
レッド・ワイアーム
炎龍（マグナ・ドラコ）
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

笹原　ＬＰ２３００

手札４枚

モンスターゾーン

ダークシー・フロート×２

魔法・罠ゾーン　無し

「僕は金華猫（きんかびょう）を召喚！」

笹原のフィールドに、不気味な猫の影が現れた。

金華猫

ＡＴＫ４００

「このカードが召喚・リバースした時、
自分の墓地から、レベル１モンスターを特殊召喚するよ～ん。
僕は墓地からミスティック・バイパーを特殊召喚！」

ミスティック・バイパー

ＡＴＫ０

笹原の奴、デュエルに勝つ気があるのか？
さっきからやっている事と言えば、
手札交換にドローばかり…。
…いや、待て！まさか笹原の狙いはっ！

「ミスティック・バイパーの効果発動～。
このカードをリリースして、カードを1枚ドローするよ～ん。
この効果でドローしたカードをお互いに確認し、
レベル1モンスターだった場合、
更に1枚ドローするよ～ん。」

金華猫
レベル1　闇属性　獣族／スピリット
ＡＴＫ４００　ＤＥＦ２００
このカードは特殊召喚出来ない。　召喚・リバースしたターンのエンドフェイズに手札に戻る。　このカードが召喚・リバースした時、
自分の墓地から、レベル1モンスターを特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、

この効果で特殊召喚したモンスターを除外する。

ミスティック・バイパー

レベル１　光属性　魔法使い族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードをリリースして、カードを１枚ドローする。
この効果でドローしたカードをお互いに確認し、
レベル１モンスターだった場合、
更に１枚ドローする。
ミスティック・バイパーの効果は、１ターンに１度しか使用出来ない。

「さ～てと、ドロー！
何か～な何か～な？

…おぉっ、やったね！僕がドローしたカードは、封印されし左手…。

レベル１だよ！よって更に１枚ドロー～！」

やはり！エクゾディアかっ！

「もう一つ行ってみよ～！

僕はレベル1の金華猫1体と、
ダークシー・フロート2体をオーバー・レイ！！」

チッ、来るか！ナンバーズカードがっ！！

「3体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

幸運の導き手よ、病める者に一握りの幸福を与えよ！

エクシーズ召喚！幸福の化身、

?56　ゴールド・ラット！！」

笹原のフィールドから、3体のモンスターが渦に入り、
そこから巨大な金貨が出現し、
すぐさま金色のネズミに変形していった。

?56　ゴールド・ラット

DEF600

ORU　0→3

「ゴールド・ラットの効果発動～！

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で～、
カードを１枚ドローして、
その後、手札１枚をデッキに戻すよ。」

？５６　ゴールド・ラット
ＯＲＵ　３↓２

成る程…エクゾディアデッキには、うってつけの効果と言う訳かっ！

？５６　ゴールド・ラット

ランク１　光属性　獣族／エクシーズ

ＡＴＫ５００　ＤＥＦ６００

レベル１×３体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、　カードを１枚ドローして、
その後、手札１枚をデッキに戻す。

「さ～て、ドロー！フフフ、じゃあ…これをデッキに戻してっと、カードを2枚伏せてターンエンドするよん！」

マズいな…笹原がエクゾディアデッキの使い手ならば、奴に手札を増やすのを許してはダメだ…。

「俺のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ４０００

手札４枚

モンスターゾーン

レッド・ワイアーム

炎龍（マグナ・ドラコ）

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

笹原　ＬＰ２３００

手札２枚

モンスターゾーン

？５６　ゴールド・ラット（ＯＲＵ×２）　魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「俺はスター・ブライト・ドラゴンを召喚！」

金色に輝く龍が、俺のフィールドに降り立った。

スター・ブライト・ドラゴン

ＡＴＫ１９００

「スター・ブライト・ドラゴンの効果発動！

このカードの召喚に成功した時、

このカード以外の表側表示モンスター１体のレベルを、

エンドフェイズまで２つアップする！

俺は炎龍（マグナ・ドラコ）のレベルを２つアップだ！」

炎龍（マグナ・ドラコ）

レベル2→4

スター・ブライト・ドラゴン

レベル4　光属性　ドラゴン族

ＡＴＫ１９００　ＤＥＦ１０００

このカードの召喚に成功した時、
このカード以外の表側表示モンスター1体のレベルを、
エンドフェイズまで2つアップする。

「行くぞ！俺はレベル4のレッド・ワイアームに、
レベル4になった炎龍（マグナ・ドラコ）をチューニング！！

地獄の業火よ！万物を焼き尽くす龍へ転生せよ！

シンクロ召喚、灼熱の淵より出でよ！！

ヒートエンド・ドラゴン！！」

炎龍（マグナ・ドラコ）が４つの輪となり、
レッド・ワイアームが輪の中心に飛び込むと、
屈強な体に翼を持った、紅蓮の大型龍が降臨した。

ヒートエンド・ドラゴン
ＡＴＫ２６００

「へぇ～お得の大型ドラゴンのシンクロ召喚かい？
見事だねぇ～。」

「行くぞ！俺はスター・ブライト・ドラゴンで、ゴールド・ラットを攻撃！」

「ゴールド・ラットはやらせないよ～！

カウンター罠発動、平穏の対価！！

相手モンスターの攻撃を無効にし、
相手はカードを１枚ドローするよん！」

チッ、ゴールド・ラットを仕留め損ねたか…。

平穏の対価

カウンター罠

相手モンスターが攻撃した時に発動出来る。

相手モンスターの攻撃を無効にし、
相手はカードを1枚ドローする。

「そして、アンタがカード効果でドローした事で、
永続罠、便乗を発動！
相手がカード効果でドローした時に発動出来、
相手がカード効果でドローする度に、
カードを2枚ドローするよん。」

便乗

永続罠

相手がカード効果でドローした時に発動出来、
相手がカード効果でドローする度に、
カードを2枚ドローする。

くっ、更にドロー効果を持つカードを発動して来たか！

「だが…まだだ！バトルフェイズを終了し、
俺はヒートエンド・ドラゴンの効果発動！

1ターンに1度、このカードの攻守を５００ポイントダウンする事で、
相手の手札1枚を墓地に送り、
それがモンスターカードだった場合、

レベル１つにつき、２００ポイントのダメージを与える！」

ヒートエンド・ドラゴン

ＡＴＫ２６００↓２１００　ＤＥＦ２１００↓１６００

「な、何だって！？」

「やれ！ヒートエンド！！ブレイズ・フレア！！」

ヒートエンド・ドラゴン

レベル８　炎属性　ドラゴン族／シンクロ

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２１００

チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上

１ターンに１度、このカードの攻守を５００ポイントダウンする事で、
相手の手札１枚を墓地に送り、
それがモンスターカードだった場合、
レベル１つにつき、２００ポイントのダメージを与える。

ヒートエンドの灼熱のブレスが、
笹原の右側の手札１枚を焼き尽くす。

「封印されし左手のレベルは１だ…。
よって、２００ポイントのダメージを与える！」

「うわあ…っくう！」

笹原　ＬＰ２３００→２１００

「これでターンエンドだ…。」

「…やってくれたねぇ～！
僕のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ４０００

手札４枚

モンスターゾーン

ヒートエンド・ドラゴン

スター・ブライト・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

笹原　ＬＰ２１００

手札２枚

モンスターゾーン

？５６　ゴールド・ラット（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

便乗

「僕は魔法カード、暗黒界の取引を発動！

お互いにカードを１枚ドローし、

手札１枚を墓地に捨てる！

更に、アンタがカード効果でドローした事で、　便乗の効果で更に２枚ドロー！」

「くっ…俺はラビードラゴンを墓地に捨てる。」

「僕は封印されし左足を墓地へ…。

更に魔法カード、壺の中の魔術書を発動！
お互いにカードを3枚ドローする！
最も、僕は便乗で更に2枚ドロー出来るけどね！！」

「これ以上はさせん！
カウンター罠、カートリッジ・フィルターを発動！

相手がカードをドローするカード効果を発動した時に発動し、
そのカード効果は、カードを1枚ドローする効果に変更する！」

「なっ！？…こ、この～！！」

暗黒界の取引

通常魔法

お互いにカードを1枚ドローし、
手札1枚を墓地に捨てる。

壺の中の魔術書

通常魔法

お互いにカードを3枚ドローする。

カートリッジ・フィルター

カウンター罠

相手がカードをドローするカード効果を発動した時に発動する。
そのカード効果は、カードを1枚ドローする効果に変更する。

「…ッ！まだだ！！僕は魔法カード、ゼロ・コールを発動！
その効果により、自分の墓地から、攻撃力0のモンスター2体まで手札にっ！

僕はミスティック・バイパーと、マッド・リローダーを手札に戻し、そのまま攻撃表示で召喚だ！」

ミスティック・バイパー

ＡＴＫ０

ゼロ・コール

通常魔法

自分の墓地から、攻撃力0のモンスター2体まで手札に加える。

「僕はミスティック・バイパーの効果発動！
このカードをリリースして、カードを１枚ドロー！
…フフフ、僕がドローしたカードは、ジェスター・コンフィ…。
レベル１だ！よって、更にドローだ！」

「くっ！立て続けでドロー効果のカードを引き当てるか…！」

「まだまだ行くよん！
僕はジェスター・コンフィを、効果により攻撃表示で特殊召喚する！」

小太りしたピエロが、ボールに乗って、一礼した。

ジェスター・コンフィ
ＡＴＫ０

「そして装備魔法、ワンダー・ワンドをジェスター・コンフィに装備！

これにより、ジェスター・コンフィの攻撃力は５００ポイントアップするけ～ど～…」

ジェスター・コンフィ
ＡＴＫ０↓５００

奴はもう１つの効果である、ドロー効果を使う気だな…。

「ワンダー・ワンドのもう１つの効果を使うよ～ん！
このカードと装備したモンスターを墓地に送り、
カードを２枚ドローするよん！
…ッ！アッハハハ！！」

マズいな…あの様子だと、エクゾディアパーツの１枚を引き当てたか！

ジェスター・コンフィ

レベル１　闇属性　魔法使い族

ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚出来る。　自身の効果で特殊召喚した場合、
次の相手のエンドフェイズに、このカードと相手の表側表示モンスター１体を手札に戻す。

ジェスター・コンフィは、自分フィールドに1体しか表側表示で存在出来ない。

ワンダー・ワンド

装備魔法

魔法使い族にのみ装備出来る。
装備モンスターの攻撃力を５００ポイントアップする。

このカードを装備した自分のモンスターと、このカードを墓地に送る事で、
カードを2枚ドローする。

「もう一押しだ！僕はゴールド・ラットの効果を発動だよん！

オーバー・レイ・ユニットを1つ使用し、
カードを1枚ドロー！」

?５６　ゴールド・ラット

ＯＲＵ　２↓１

「…フフフ、アッハッハ！

僕はこのカードをデッキに戻す！

そして、カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

マズい…笹原はこのターンの内に、大量にドローをしてきた。

これでは、エクゾディアが揃うのも時間の問題か…。

「俺のターン、ドロー！」

万丈目　ＬＰ４０００

手札５枚

モンスターゾーン

ヒートエンド・ドラゴン

スター・ブライト・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

笹原　ＬＰ２１００
手札３枚
モンスターゾーン
？５６　ゴールド・ラット（ＯＲＵ×１）　魔法・罠ゾーン
便乗
伏せカード×１

「さあ…万丈目、聞こえるかい？
このデュエルに終焉をもたらす魔神の声が…。」

「何！？まさかその伏せカードはっ！」

「そのまさかだよ～ん！罠発動、補充要員！！

自分の墓地にモンスターが５体以上存在する時に発動出来、
自分の墓地から攻撃力１５００以下の通常モンスターをまで手札に加える！

僕は墓地から、封印されし左手、左足、右手を手札に加える！

アッハッハ！エクゾディアの完成だー！！」

「そうはさせん！ヒートエンド・ドラゴンの攻撃力を２０００ポイントダウンさせ、
罠カード、パワー・トラッシュをチェーン発動！！」

「なっ！！？そのカードはっ！」

「自分フィールドのモンスターの攻撃力を１０００ポイント単位で、
任意の数だけダウンさせ、
ダウンした攻撃力１０００につき、
相手の手札を1枚捨てる！

発動時に、ヒートエンド・ドラゴンの攻撃力を２０００ポイントダウンさせた…。

よって、お前の手札を2枚を墓地に捨てて貰うぞ！」

ヒートエンド・ドラゴン

ＡＴＫ２１００→１００

補充要員

通常罠

自分の墓地にモンスターが5体以上存在する時に発動出来る。
自分の墓地から攻撃力１５００以下の通常モンスターをまで手札に加える。

パワー・トラッシュ

通常罠

自分フィールドのモンスターの攻撃力を１０００ポイント単位で、任意の数だけダウンさせて発動出来る。
ダウンした攻撃力１０００につき、
相手の手札を1枚捨てる。

「ぐくっ！僕は封印されしエクゾディアと右足を墓地へ送り、補充要員で、封印されし左足、左手、右手を手札に加える…。」

このターンで、決める！

「俺はヒートエンド・ドラゴンを除外し、魔法カード、シンクロ・チェンジを発動！

除外したモンスターと同じシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する！

永久の光より降臨せよ！ライトエンド・ドラゴン！！」

ヒートエンド・ドラゴンが、
光に包まれると、４枚の翼を持った純白の龍に姿を変えた。

ライトエンド・ドラゴン
ＡＴＫ２６００

「あ…あぁ…、嘘だよね？この僕が…。」

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスター効果は無効化されるがな…。」

「負ける…？」

シンクロ・チェンジ
通常魔法

自分フィールドのシンクロモンスター１体を除外して発動する。
除外したモンスターと同じシンクロモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスター効果は無効化される。

「さあ…ラストバトルだ！
スター・ブライト・ドラゴンで、
ゴールド・ラットを攻撃！
コメット・グライド！！」

スター・ブライト・ドラゴンは、
彗星の如く速さでゴールド・ラットに突撃した。

「うくう～っ！」

「トドメだ！ライトエンド・ドラゴンで、ダイレクトアタック！
シャイニング・サプリメイション！！」

ライトエンド・ドラゴンの放つ閃光が、笹原に裁きを与えた。

「うわあぁぁ～っ！！」

笹原　ＬＰ２１００→０

「うわあぁっ！僕の…僕の生気がぁ～！！」

何だ？笹原の様子がおかしい…。
まさか、ゴールド・ラットに笹原の生気が取り込まれていると言うのか！？

「くっ！光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）！
ナンバーズカードに光の洗練を！
シャイニング・ブレス！！」

光と闇の龍（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が、
ゴールド・ラットのカードに閃光のブレスを炸裂させると、
そのカードから幾数の光が飛び散り、
カードに包まれたオーラは消滅した。

「う…ああ…。」

笹原は気絶して倒れた。

念の為に確かめたが、ナンバーズカードのオーラは纏っておらず、

脈もある。

「コイツはこのまま放置してもいいか…。だが、ナンバーズカードは回収しておこう…。」

俺は自分のデッキとゴールド・ラットのカードをホルダーに納めた。

さて…宝山と増川は無事だろうか？

まず宝山に連絡したが、繋がらない…。

「くそっ！まさか宝山がやられたのか！？
くっ！レッド寮付近まで急がなければ…！」

俺は急いでレッド寮付近の林へと向かった。

無事でいろよ…宝山！

終焉への計略（後書き）

俺はブルー寮付近の林で、明日香ファンクラブの連中を探していると、

海野　幸子と明日香ファンクラブの斎木　望のデュエルを目撃する。

海野　幸子は追い詰められ、
いてもたってもいられ無かった俺は、海野　幸子と代わってデュエルをする為に、斎木　望にある提案をする。

「斎木　望よ！このデュエル、俺が引き継ぐぞ！
もしも、お前が勝ったら…俺が持っているナンバーズカードをくれてやるっ！」

奴はこの提案に応じた。

今こそ、被害者達の無念を晴らしてくれるわ！

次回、「熱き志を胸に…」

無念に散った生徒達よ！

俺に力を貸してくれ！！

熱き志を胸に…（前書き）

お待たせしました！

第２２話です。

今回は、最近出て来たナンバーズカードが登場しますよ。

熱き志を胸に…

十代ｓｉｄｅ

俺と塔也は、倒れていた宝山とブルー生徒を俺達の部屋で休ませている。

「２人共、全く目覚めないね…。」

「俺達に出来る事は全てやった。
今は意識が戻る事を祈るしかねぇよ…。」

「…そうだね。」

そう言えばここに運ぶ途中に、
塔也が触れたブルー生徒のモンスター・エクシーズカード…。

アレには…翔や龍牙が使ったモンスター・エクシーズと同じ様な、嫌なオーラがこびり付いてた…。

一瞬、そのオーラが塔也に取り憑く様に見えたけど…、
同時に、なんかとてつもない精霊が、
オーラを打ち消したのが見えたぜ。

あの精霊は一体何だったんだ…。

「なあ、塔也…1つ聞いていいか？」

「…ん？何だよ十代改まって…。」

「お前って、その…精霊とかが見えた事って…あるか？」

「…ハァ？精霊って…。…十代、こんな時に何言ってるんだよ？
そんなの一度も見た事が無いぜ。」

…え？塔也は精霊が見えてないのか！？

「…アニキ～、またそれ？
塔也君が呆れてるよ～？」

「…あ…ああ、悪い塔也。今のは忘れてくれ。」

「…？まあ、いいけどさ。」

じゃあ、あの精霊は何で塔也を守ったんだ？

「…う、う～ん…アイタタッ…。」

そう思っていた時、宝山の意識が戻ったぜ！。

「あっ！宝山君の意識が戻ったよ！」

「やっとお目覚めか、宝山？」

「…あれ？十代と…翔、それに…塔也も…。ここは…どこだい？」

「レッド寮の部屋の中だぜ。

俺の宿題のプリントを3人で探している時に、翔が偶然、2人の事を見つけたんだ。」

「…そう…か、ここはレッド寮の…十代達の部屋か…。」

「…で、取りあえず俺と塔也で2人を俺達の部屋まで運んだんだって訳さ。」

「…成る…程ね…。ありがとう…3人共…。」

目覚めたばかりなのか、
宝山はまだ、ボ～っとしているみたいだぜ。

「今度はこっちが質問する番だぜ、宝山。
お前、何であんな所で倒れていたんだよ?」

「あ…、え～と…。」

「それに…部屋で懐抱した時、お前…所々に傷を負ってたじゃねぇか。」

「そ、それは…その…何て言ったらいいのか…。」

宝山は困惑しているみたいだ。

何か言い辛い事でもあったのか?

「ちょ、ちょっと待ってよ2人共!
宝山君は意識が戻ったばかりだから、
少し安静にしなきゃ…。」

その時、宝山の携帯が鳴った。

運んでいる途中でも鳴ってたけど、
勝手に出たら悪いしな。

「…あっ！万丈目からだ！！

…ゴメン、３人共…ちょっと部屋で待ってて？」

「お、おい宝山！」

塔也が止める間も無く、宝山は外に出た。
万丈目と一体どんな話をしているんだ？

しばらくすると、宝山が戻って来た。

「…お待たせ…。十代、塔也、ちょっとレッド寮の前まで来てくれる？」

「…へっ？レッド寮の前に…？」

「まあ、それはいいけどさ…。」

「僕が一緒じゃダメなの？」

「…ゴメン、翔…万丈目が2人に話したい事があるって…。」

万丈目が…？話って、一体何だ？

「悪い、翔。ちょっと部屋で待っててくれ。」

「…うん、行ってらっしゃいアニキ、塔也君。」

部屋から出ると、万丈目がレッド寮の前で待っていた。

「…来たか十代、そして塔也…。」

「…万丈目、いいの？あのデュエルの事を十代達に言って…。」

「構わん…。むしろ、コイツらには早く知らせるべきだ…。」

「…知らないよ～増川から何か言われても…。」

「あんな奴の言う事など知らん。」

さっきから2人して、何コソコソ話しているんだ?

「おい万丈目、俺と十代に話があるんじゃ無かったのか?」

「…済まんな、では始めるか…。

ナンバーズカード…お前達は、そのカードを知ってるな?」

塔也が急かし、万丈目が話を切り出した。

「ナンバーズカード…翔や龍牙が使ってたモンスター・エクシーズの事か?」

「そうだ、そして今…それらのカードによって、アカデミアに事件が巻き起こっている…。」

「何だよ、その事件って…。」

「朝のホームルームに担任の先生から、
全校生徒の殆どが体調不良で欠席している…って話は2人共知っているよね?」

「…何だそれ？初めて聞いたぜ。」

「…えっ？どのクラスでも、今その話題で持ちきりだよ！？」

「そう言えば…翔や塔也とかが、そんな事を話していた様な気がするな…。」

「…全く十代、お前と言う奴は…。」

「…まあ、無理ねぇよ宝山…。
最近、増川が頻繁にデュエルを挑むもんだからさ…、
十代は、最近のホームルームや昼休み以外の休み時間は大抵寝てるんだよ。」

本当に増川には困りもんだぜ…。

まあ…そうじゃなくても、
たまに授業中は寝てるけどな…。

「…話を戻すぞ。全校生徒の殆どが体調不良に陥った原因は、どうやらナンバーズカードにある様だ…。」

「…おいおい、笑えない冗談はよせよ万丈目。

タダのカードにそんな事が引き起こせる訳ねぇだろ？」

塔也は自覚は無いけど、
俺は自然と納得出来た。

どのナンバーズカードにも、嫌なオーラが纏わり憑いていたからな…。

「塔也…万丈目はね、突拍子も無い事を話す様な人じゃないんだよ…。」

「…それに、ナンバーズカードと何度も出くわしたお前ならば、薄々気付いている筈だ…。

アレがタダのカードなどでは無い事を…。」

塔也はしばらく黙った。

まあ、普通なら信じろって方が無理だよな。

俺も初めてハネクリボーを見るまで、
紅葉さんの言う事を信じて無かったしな…。

「…まあ、その話が本当だったとして、

俺や十代にどうしろってんだ？」

「お前達には、俺と一緒に明日香ファンクラブの連中と、片っ端にデュエルをして貰う。

連中は恐らく、丸藤　翔と同様にナンバーズカードに意識を乗っ取られている…。

ナンバーズカードの支配から、連中を引き剥がすには、精霊の力が必要だからな…。」

…えっ？まさか万丈目には精霊が付いているのか！？

それに…俺の事にも気が付いている感じが…。

「…あのな、万丈目…。俺は一般人だぜ？

そんな精霊なんて物は…。」

「お前が気が付いていないだけだ。

俺には分かる…！

お前の幾つかのカードには、僅かに精霊の気配が感じる事を…。」

「俺のデッキの…カードに…。」

言われてみれば…確かに塔也のデッキからは、微かにそんな気配が感じた事があったな…。

「俺と一緒に、奴らからナンバーズカードの呪縛を解く事を手伝って貰えないか？
十代、塔也。」

万丈目が俺達に頼み込んだ。

「勿論協力するぜ！万丈目！！」

「…まあ、精霊なんて物は今一つ信じられねぇが…。
人からの頼みを無碍（むげ）にゃ出来ねぇ…。
手伝うぜ、万丈目。」

それを聞くと、万丈目は一礼した。

「…感謝するぞ2人共、早速だが、俺とブルー寮の湖畔付近の林に来て貰う。

まだ増川の奴が、ファンクラブの連中を捜索中だろうからな…。」

増川がっ！？今日は見かけ無いと思ってたら、
そんな事をしてたのか！？

「万丈目、僕は？」

「今日はコイツらの部屋で安静にしていろ宝山。
傷はまだ完治して無いのだろう？」

「…う、うん分かったよ…。」

宝山は俯きながら答えた。

「では急いで行くぞ！お前ら！！」

「よし！行こうぜ十代！！」

「３人共…気を付けてね！」

「おうっ！じゃあ行って来るぜ宝山！」

こうした、俺達3人はブルー寮の湖畔へと急いだ。
増川に何事もなけりゃいいけどな…。

十代→増川ｓｉｄｅ

くっそ～！明日香ファンクラブの連中め…。
ドコにいるのだ～！！

捜索を開始してから、結構時間が経ったが…、
一向に見つからん…。
この辺りに頻繁に出没している筈なのだがな…。

俺は一旦、湖畔に出ると、
遠くの方に人影が見えた…。
向こう側の人影の動きから、
デュエルをしているのだと気付いた。

くっそ！間に合わなかったか！！

…いや、まだデュエルの最中なら間に合う筈だ！

待っていろよ！明日香ファンクラブの連中め！！

俺がお前らに鉄槌を喰らわせてくれるわ！

増川→海野ｓｉｄｅ

「…はぁ…はぁ…。」

「…フフフ、どうしました？

かなり息が上がっている様子で…。」

「…くっ、お黙り…な…さい庶…民。」

あれは、私（わたくし）が夜の散歩をしていた途中でした…。

突如、庶民が私（わたくし）の目の前に庶民が現れ、

デュエルを挑んで来たのです。

貴族たる者、挑まれた勝負から逃げては格好が廃りますわ。
ですから当然、庶民の挑戦に向かい撃ちました。

…ですが、庶民は未知のモンスター・エクシーズを使うばかりか、
デュエル中に不可思議な出来事が、
私(わたくし)に襲って来ましたわ…。

そして今に至り、現在の庶民のＬＰは２６００…。
手札は2枚、フィールドには未知のモンスター・エクシーズ1体
と伏せカードが2枚…。

対して、私(わたくし)のＬＰは１３００…。

手札は3枚、フィールドにはモンスターは存在せず、
魔法・罠ゾーンには伝説の都　アトランティスに、伏せカードが
2枚ありますが…。

庶民の召喚した未知のモンスター・エクシーズ…。
ショック・ルーラーの効果で、お互いに罠カードが発動出来ませ
んわ…。

…ですが私(わたくし)は、
今ある手札で流れを変えますわ！

「私(わたくし)は魔法カード、浮上を発動よ！
自分の墓地からレベル３以下の魚・海龍・水族モンスター１体を、
表側守備表示で特殊召喚しますわ！

おいでなさい、オーシャンズ・オーパー！！」

三又の矛を構えた赤い魚人が水飛沫と共に飛び出しましたわ。

オーシャンズ・オーパー

レベル３→２

ＡＴＫ１５００→１７００　ＤＥＦ１２００→１４００

「行きますわ！私(わたくし)はオーシャンズ・オーパーをリリース！
このカードは、伝説の都　アトランティスによって、レベル６となっている為、
１体のリリースでアドバンス召喚出来るのです！

深海の果てより、おいでなさい！

超古深海王　シーラカンス！！」

このカードは、お父様からプレゼントして戴いた思い出のカードですわ！

超古深海王　シーラカンス

レベル７→６

ＡＴＫ２８００→３０００　ＤＥＦ２２００→２４００

「…ほほう、この状況で上級モンスターを召喚とは…。
これまた結構なお手前で…。」

「見え透いたお世辞は結構です！
私（わたくし）はシーラカンスの効果を…。」

「おおっと！慌てないで頂こう！！
速攻魔法、禁じられた聖杯を発動！」

「なっ！？」

「フィールドのモンスター１体の攻撃力を４００ポイントアップする。

…ですが、代わりにこの効果を受けたモンスターは、　このターンのエンドフェイズまで効果を発動出来ませんがね…。」

超古深海王　シーラカンス
ＡＴＫ３０００→３４００

禁じられた聖杯
速攻魔法

フィールドのモンスター1体の攻撃力を４００ポイントアップする。
この効果を受けたモンスターは、
このターンのエンドフェイズまで効果を発動出来ない。

くうっ！シーラカンスの効果が！！
心許ないですが、シーラカンスの攻撃でショック・ルーラーを…！

「ならばシーラカンス、ショック・ルーラーを攻撃しなさい！
オーシャン・イズ・ビューティー・フォール！！」

「けど、残念でしたね。速攻魔法、収縮を発動！」

そ、そんなっ！2枚共速攻魔法でしたの！？

「収縮の効果により、シーラカンスの元々の攻撃力は、エンドフェイズまで半分に…。

つまりは、…返り討ちです。」

超古深海王　シーラカンス

ＡＴＫ３４００→２０００

収縮

速攻魔法

フィールドのモンスター１体を選択して発動する。

そのモンスターの元々の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする。

「迎撃しろっ！ショック・ルーラー！！

パルス・ショック・ブラスト！！」

「あぐぅぅ～っ！」

海野　ＬＰ１３００→１０００

う…くうっ…！　またですわ…。

何故、ソリッド・ビジョンである筈のモンスターの攻撃で傷を…！

「…く…うっ…。庶民！アナタは一体、このデュエルにどんな細工をしたのです！！」

「先程から、申しているじゃないですか～。

このデュエルでは、ダメージが現実の物になるとね…。」

「ふざけないで下さる！ダメージが実際の傷になるだなんて、そんなふざけた話が…。」

「ですが、実際にあなたは傷を負っているではないですか…？」

「…くうっ！」

先程から庶民は、この一言の一点張りで、

まるで話が通じませんわ。

「さて…もう策は尽きましたか？
それとも、まだ何かあります？」

「…ターンエンドよ！」
「「では私のターン、ドロー。」

斎木　ＬＰ２６００
手札３枚
モンスターゾーン
？１６　色の支配者　ショック・ルーラー（ＯＲＵ×２）
魔法・罠ゾーン　無し

海野　ＬＰ１０００
手札１枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

「では、終わりです。ショック・ルーラーで、ダイレクトアタック！！」

少ないダメージでも結構傷を負ってしまいましたわ…。

LPが0になったら…ひょっとしたら私、死んでしまいま…すの…？

そんな事って！うぅっ…嫌…嫌ァ！！誰か！！…誰か！！お願いだから私を助けて！！

「パルス・ショック…。「待てー！待て待て待てーい！！」な、誰だ！」

誰かが、攻撃宣言を遮って、大声で制止を掛けました。

この品の無い声…まさか！？

「ゼェ…ハァ…ゼェ…ハァ…。

…どうやら、ギリギリの所で間に合った様だなぁ…。」

「…アナタは下民！何故アナタがこんな所にいるのです！？」

「…海野　幸子！
何でお前がアイツとデュエルをしているのだ！！」

「私（わたくし）は、貴族として挑まれたデュエルを受けたまでですわ！」

それを聞くと、下民は心底呆れていましたわ。

「…お前と言う奴は、意地っ張りだな全く…。」

「な、何ですって！？相変わらず無礼ですわね！！」

「…まあいい、お陰でお目当ての奴を見つける事が出来たからな！
斎木（さいき）　望（のぞみ）よ！

このデュエルの仕切り直しを申し立てるぞ！

相手は当然、この俺だ！！」

えっ！？今、デュエルの相手を代わると仰ったの！？

「…下民、アナタ何故私（わたくし）の代わりに相手になるなどと…。」

すると、いつもの態度で応えましたわ。

「…フン、勘違いするな。
我が同士達や、我がファンクラブとは無関係の生徒の大半が奴らのデュエルで変わり果てた姿にされたからな…。
その敵討ちだ！」

「勝手に決めないで頂きたいですねぇ…。
私には、アナタのデュエルをすぐに受けても、何のメリットも無い…。」

「ハンッ！ならば俺のデュエルをすぐに受けるのなら、俺の持っているナンバーズカードをくれてやるっ！」

「ナ、ナンバーズカードを！？」

下民の提案に、庶民が反応しましたわ。

「受けんなら、俺はコイツを連れて逃げるまでだ…。」

「ハッハハハ！面白い提案ですねぇ…。
…ナンバーズカードが手に入ると言うのならば、話が別ですねぇ。

…いいでしょう、アナタのデュエルを受けますよ！」

「ハッ！そう来なければなぁ！！」

わ、私（わたくし）、助かりました…の？

「おい海野　幸子よ、今の内にブルー寮に逃げてろ。
コイツはこの俺が鉄槌を喰らわせる。」

「私（わたくし）は誇り高い貴族です！
例え下民であろうと、自分だけで逃げて、他人を見捨てる事は出来ませんわ！」

確かに死ぬのは恐ろしいでしょうけど、
自分の信念だけは曲げたくありませんわ！

「…ならば、１つ頼まれくれてないか？」

「…何ですの？」

「お前がさっき使ってた超古深海王　シーラカンスを、
今だけ俺に貸してくれ…！」

「な、何ですって!?あのカードは、私(わたくし)にとって大切な…。」

「…バカな頼みと言う事は重々承知の上だ…。

俺も奴に負ける気は毛頭無いが、
奴らは我が同士や、同士とは無関係な生徒に迷惑を掛けた…！

だからこそ、徹底的に叩く必要がある！」

「…下民、アナタは先程意味深な事を仰っていたわね…。

この庶民と、今日の朝のホームルームで聞いた、多数の生徒の体調不良と何の関係があると言うのです!?」

「この場を乗り切った時にでも話す！…だから、頼む！海野　幸子!!」

下民は必死に私(わたくし)懇願しました。

普段は無礼極まりない　下民がここまで私(わたくし)に頼み込むだなんて…。

…全く、後で納得出来る理由を聞かせて貰うわよ？

「…約束、しましたわよ？
では、ト・ク・ベ・ツにお貸しして差し上げます！
あの庶民に目に物を言わせなさい！！」

「任せろ！元よりそのつもりだっ！！」

「…もう始めても宜しいかな？」

先程から待っていた庶民が、しびれを切らして、下民に問い掛けて来ました。

「待たせたな！ではお前をメッタメタにしてくれるわっ！」

「やれる物ならどうぞご自由に…。」

「行くぞっ！」

「「デュエル！！」」

斎木　ＬＰ４０００

増川　ＬＰ４０００

「彼女のデュエルを中断させてまで、君の無茶な提案を飲んだんだ…。
先攻くらいはとらせて貰いますよ…。」

「フン、勝手にするがいいっ！」

いけませんわ！あの庶民に先攻をとられては…！

「それでは…ドロー。私はイエロー・ガジェットを守備表示で召喚する。」

イエロー・ガジェット
ＤＥＦ１２００

早速出ましたわね…。あのモンスターを含めたガジェットモンスターが、
文字通りに、あの庶民のデッキの歯車となりますわ…。

「イエロー・ガジェットだと…！

そうか…お前のデッキはガジェットデッキかっ！」

「その通りです…。さて、イエロー・ガジェットの効果を発動です。

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキからグリーン・ガジェット1体を手札に加える事が出来ますよ。」

イエロー・ガジェット

レベル4　地属性　機械族

ATK1200　DEF1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからグリーン・ガジェット1体を手札に加える事が出来る。

「カードを2枚伏せ、ターンエンドで…。

…さて、アナタを手早く倒してナンバーズカードを頂くとしましょうか…。」

「やれる物ならばなっ！
俺のターン、ドローだ！」

斎木　ＬＰ４０００
手札４枚
モンスターゾーン
イエロー・ガジェット
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

増川　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「俺はバルーン・オクトパスを攻撃表示で召喚だ！」

ＡＴＫ１８００

「バトルだ！バルーン・オクトパスで、イエロー・ガジェットを攻撃するぞ！」

「フッ…罠発動、エマージェンシー・ゲート！

相手モンスターが攻撃した時、手札のレベル４以下の機械族１体を相手に見せて発動です。　相手モンスターの攻撃を無効にし、見せたモンスター１体を特殊召喚しますよ。」

「何をしているのです下民！相手に伏せカードがある時に、迂闊に攻撃するだなんて…！」

「お、落ち着け海野　幸子よ！

コレはそ、想定済みなのだ。」

…態度からして明らかに想定外だった様ですわね…。

…全く、下民は…。

「フフフ…私は手札のグリーン・ガジェットを見せ、
効果により攻撃表示で特殊召喚しますよ。」

バルーン・オクトパスの突進を阻んだ鋼鉄の門から、
緑色をした機械の歯車が飛び出しましたわ。

グリーン・ガジェット
ＡＴＫ１４００

「そして、特殊召喚したグリーン・ガジェットの効果が発動します。　このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからレッド・ガジェット１体を手札に加える事が出来ますよ。」

エマージェンシー・ゲート

通常罠

相手モンスターが攻撃した時、
手札のレベル４以下の機械族１体を相手に見せて発動出来る。

相手モンスターの攻撃を無効にし、
見せたモンスター1体を特殊召喚する。

グリーン・ガジェット

レベル4　地属性　機械族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ６００

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからレッド・ガジェット1体を手札に加える事が出来る。

「ぬぅ、厄介な事を…。
俺はカードを2枚伏せ、
ターンエンドだ！」

これで庶民のフィールドにはレベル4モンスターが2体…。

恐らく次のターンには…！

「私のターン、ドローです。」

斎木　ＬＰ４０００

手札5枚

モンスターゾーン
グリーン・ガジェット
イエロー・ガジェット
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

増川　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
バルーン・オクトパス
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

「私はレッド・ガジェットを攻撃表示で召喚です。」

レッド・ガジェット
ＡＴＫ１３００
「レッド・ガジェットの効果を発動！
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからイエロー・ガジェット１体を手札に加える事が出来ます。」

レッド・ガジェット
レベル４　地属性　機械族
ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１５００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキからイエロー・ガジェット１体を手札に加える事が出来る。

「行きますよ！私はレベル４のイエロー・ガジェットとグリーン・ガジェット、
そしてレッド・ガジェット３体をオーバー・レイ！！」

「気を付けなさい下民！！
来ますわよっ！あの庶民の切り札が！！」

「何!?では、奴はナンバーズカードをエクシーズ召喚する気か!」

「3体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築!!

原色の支配者よ!規律を色となし、
理を塗り替えろ!

エクシーズ召喚!!

出でよ、?16　色の支配者　ショック・ルーラー!!」

庶民の3体のモンスターが渦に飲まれると、

その中から紫色の箱が出現し、
奇妙な姿のモンスターに変化しましたわ。

それに、また庶民の右手に数字が浮かび上がっていますが…。

アレは一体何なんですの?

?16　色の支配者　ショック・ルーラー

ＡＴＫ２３００
ＯＲＵ　０→３

「それがお前の持つナンバーズカードか…。

だがな、バルーン・オクトパスがいる限り、ソイツの攻撃は届かないぞ！」

「…フフフ、まあ落ち着いて下さいよ…。
まずはショック・ルーラーの効果を発動しましょうか…。

１ターンに１度、オーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、
カードの種類を１つ宣言し、
次の相手ターンが終了するまで、
お互いに宣言した種類のカード効果は発動出来ません！」

くぅっ！先程のデュエルでも、
このモンスター・エクシーズの効果で苦しみましたわ…！

「何！？宣言した種類のカード効果を発動不能にするだと！？」

「その通り！さて…私が宣言する種類は…罠カードです！」

？１６　色の支配者　ショック・ルーラー
ＯＲＵ　３→２

ショック・ルーラーはユニット１つを吸収すると、
下民のディスクに目掛けて角から電撃を放ちました。

「ぬうぅ！…だが、解せんな…モンスターカードと宣言せんでいいのか？」

「…ええ、いいんです。
これで我々は、次のアナタのターンが終わるまで、罠カードは発動不能になりました。」

？１６　色の支配者　ショック・ルーラー

ランク４　光属性　天使族／エクシーズ

ＡＴＫ２３００　ＤＥＦ１６００

レベル４モンスター×３体

１ターンに１度、オーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、
カードの種類を１つ宣言し、　次の相手ターンが終了するまで、
お互いに宣言した種類のカード効果は発動出来ない。

「バトル！ショック・ルーラーで、
バルーン・オクトパスを攻撃！！
パルス・ショック・ブラスト！！」

「無駄だ！バルーン・オクトパスの効果発動！
相手モンスターが攻撃して来た時、
このカードを次の自分のスタンバイフェイズまで除外する事で、
相手モンスター1体の攻撃を無効にするぞ！」

バルーン・オクトパスは空気を吐き出し、
ショック・ルーラーの放ったエネルギー弾を、明後日の方向へと
弾き返しましたわ。

「ハッハハー！見たか、斎木　望よ！
お前のナンバーズカードの攻撃を無効にしてやったぞ！」

「…ですが、バルーン・オクトパスは自身の効果でフィールドに
戻った時、
自身の効果の使用不能に、…つまり、2度目は防げないと言う訳
です。」

…そうですわ。

最近の制限変更に伴って、
幾つかのカード効果にデメリットが付いてしまったのです…。

バルーン・オクトパスもその内の1枚…。

バルーン・オクトパス

レベル4　風属性　魚族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ９００

相手モンスターが攻撃して来た時、
このカードを次の自分のスタンバイフェイズまで除外する事で、
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

自身の効果でフィールドに戻った時、
自身の効果は発動出来ない。

「ぬぐぅ…！だが、1度だけでも攻撃を無効に出来れば十分だ！
次のターンには、お前のショック・ルーラーを倒す為のモンスター・エクシーズのユニットとなって貰うからな！」

「…フッフッフ、アナタに次のターンが回ってくればね…！」

「何だと!?どういう意味だ!」

庶民が不適に笑っていますが…。
まさか、このターンで下民を倒すつもりなの!?

「こういう意味ですよ!
私は速攻魔法、ダブル・アップ・チャンスを発動!」

「ダブル・アップ・チャンスだと!?
ぬぐうぅ!ソイツはっ!」

いけませんわ!!あのカードの効果は…!

「このカードは、自分のモンスターの攻撃が無効になった時に発動出来、
攻撃が無効になったモンスターの攻撃力をバトルフェイズ中まで2倍にし、
2度目の攻撃が可能となるのです!」

？１６　色の支配者　ショック・ルーラー
ＡＴＫ２３００→４６００

「攻撃力が４６００になっただと！？」

「しかも、２度目の攻撃が可能になってしまいましたわ！」

ダブル・アップ・チャンス

速攻魔法

自分のモンスターの攻撃が無効になった時に発動出来、
攻撃が無効になったモンスターの攻撃力をバトルフェイズ中まで
２倍にし、
もう１度だけ攻撃が出来る。

「この攻撃で終わりですねぇ～増川君？
何か言い残した事があるのなら聞いておきますが？」

「何だその言い草は！？
まるで俺が、この後に死ぬみたいではないか！」

「ああ…言い忘れてました。

このデュエルでは、受けるダメージが現実の物となって、
プレイヤーを襲うのですよ。」

「な、何をバカな事を!?デュエルでそんな事があってたまるか!!」

「嘘ではありませんよ…。
その証拠に、そこにいる彼女…。
所々に傷を負ってますよねぇ？
何故だと思いますか、増川君?」

そう言って、庶民は私(わたくし)に指を差しました。

「…ッ!そう言えば…お前!!よく見れば、幾つか傷を負っているではないか…!

…奴の言った事は本当なのか!?　海野　幸子よ!」

下民は私(わたくし)に問いただしました。

「…認めたくはありませんが、
あの庶民のデュエルでダメージを受けた時に、負った傷ですわ…。」

「ほ～ら、彼女もこう言っていますよ。

彼女の傷は、１０００ポイント程度で付いた物ですよ。
それをアナタは４０００ポイントも受けるのです…。
果たして生きていられますかねぇ？」

そう聞くと、下民は怒りを露わにしましたわ。

「お前～！！被害を受けた同士に事情を聞いた時は意味が全く分からなかったが、
こういう事だったのかっ！！
こんなデュエルを平然とするお前らの事は、断じて許さんぞ！！
２度と下らん考えが出来ん様に、徹底的に叩きのめしてくれるわっ！」

「それは無理と言う物でしょう…？

アナタのＬＰは、ショック・ルーラーのダイレクトアタックを受ければ０…。　どう私を叩きのめしてくれると言うのです！？」

「くっ…御託はいい！サッサと来い！！斎木　望！！」

「では遠慮無く…。再び攻撃しろ！ショック・ルーラー！！

パルス・ショック・ブラスト！！」

ショック・ルーラーは、先程よりも強力なエネルギー弾を、下民に放ち、近くで爆発を起こしました…。

「ぬぐうおぁぁっ！！」

「下民ー！！」

下民は倒れ、ピクリとも動きません…。

「…やり過ぎましたか。あのダメージを喰らっては、最早、このカードに吸収出来る程の生気は残って無いか…。

…まあいい、アナタから吸収するとしましょうか！」

熱き志を胸に…（後書き）

下民は息絶えたと思われてましたが、
咄嗟に奇策を繰り出した事で、
何とか持ちこたえ、形勢を逆転しましたわ！

…ですが、庶民は更なる手段を繰り出したのです…。

「エクシーズ召喚！！
幻惑の瞳を持つ支配者！
？１１　ビッグ・アイ！！」

「何ィ～！？２体目のナンバーズカードだとっ！？」

新たなモンスター・エクシーズを召喚された事で、
下民は更なる窮地へと追い込まれたのです…。

「俺は諦めんぞ！お前らに被害を受けた同士や生徒の為にも、俺は絶対に勝つ！！」

次回、「思いを乗せた激流　ノック・アップ・ストリーム！」

下民…いえ、増川！このデュエル、何が何でも勝つのです！！

思いを乗せた激流　ノック・アップ・ストリーム！（前書き）

お待たせしました！

第２３話です。

最初の話と比べると、最近はかなり長くなってしまいました…。

思いを乗せた激流　ノック・アップ・ストリーム！

海野ｓｉｄｅ

何て事なの！？まさか…デュエルで人が倒れるだなんて…！

これではまるで、文字通りに決闘ではありませんか！

「…さてと、次はアナタの番ですよ。
覚悟して下さいよ？」

私（わたくし）の実力は、
あの庶民には届かないかもしれません…。

ですが私（わたくし）には…あの庶民の愚行を、この場で止める義務がありますわ！

「下民が命がけでアナタに挑んだのです…。
もう決心はつきましたわ！」

「ほお、先程のデュエルで手痛い目に遭いながらも、
その様な決断を出来るとは…。」

あの世で私の勇志を見てなさい下民…。

アナタの敵討ちを、この私がして差し上げます！

もし私が、アナタの後を追ったとしたら、
アナタは愚かな事をしたと怒るのかしらね？

「さあ、では早く始めま「…ま、待…てお前…ら。」

そう、こんな品の無い声で…。

…え！？ま、まさか！

声が聞こえた方へ咄嗟に振り返ると、
下民が立ち上がっていましたわ…！

「…ハァ…ハァ…全く、俺の意識が飛んでいる間に、勝手にデュエルを終わられては困るぞ…。」

「な、何！？アナタは４６００ポイントのダメージを受けた筈！
立ち上がる事など…。」

「ハァ…ハァ…くそ、何てデュエルだ…。一瞬だけ、俺の頭に走

馬灯がよぎっていたぞ…。」

「下民…、アナタ！意識があるのでしたら、
サッサと起き上がりなさい！！
思わず、アナタが亡くなったかと思いましたわ！！
…全く、心臓に悪いですわよ！下民！！」

「人の事を勝手に殺してくれるな！

…痛てて、さっきの爆発で頭を打って気絶していたのだ、仕方あるまい…。」

下民は頭をさすりながら、
平然と答えました。

「あのダメージを受けて生きているだとっ！

…しかし、立ち上がった所でアナタのＬＰは０だ！
もう、どうする事も出来ない！」

「お前の目は節穴か？斎木　望よ！
俺のＬＰは３０００ポイントだ！
その証拠に俺のＬＰを見てみろっ！」

増川　ＬＰ４０００→３０００

「バ、バカな!?何故こんな事が!」

すると、下民はニヤけながら、
墓地から1枚のカードを取り出しました。

「フッフッフ…お前のショック・ルーラーから戦闘ダメージを受けた時に、
手札にあったこのボムセンボンの効果を発動させたのだ。」

「そのカード効果は、受けるダメージを１０００ポイントする効果…ですわよね?」

「ご名答だ海野　幸子よ。
コイツの効果は、プレイヤーがダメージを受ける時に手札から墓地に送る事で発動出来、　その時に受けるダメージを１０００ポイントとする事が出来るのだ!」

ボムセンボン

レベル３　水属性　魚族

ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００

プレイヤーがダメージを受ける時に、手札から墓地に送る事で発動出来る。
その時に受けるダメージを１０００ポイントとする事が出来る。

このカードはカード効果によって、
墓地から手札に加える事は出来ない。

まさか、こんな奇策を打って出るだなんてね…。

私（わたくし）と遊城　十代と３人でデュエルした時よりも、
確実に腕を上げた様ね…。

「…くっ！そんなモンスター効果を発動していたとは！」

「ついでに言うとな…さっきの爆発は、
お前のショック・ルーラーの攻撃で起こった物ではなく、
コイツの効果による物だぞ！

…さて、まだお前のバトルフェイズは続いているが、ま～だ何かあるのか？」

「くっ…私はこれでターンエンド…。

そして、ダブル・アップ・チャンスの効果で2倍となっていたショック・ルーラーの攻撃力は元に戻りますよ…。」

？１６　色の支配者　ショック・ルーラー
ＡＴＫ４６００↓２３００

「フッ…どうやら種は尽きた様だな！
ならば…宣言通りに、お前のショック・ルーラーを倒してくれるわっ！」

「さあ下民、あの庶民にアナタの反撃を見せてあげなさい！」

「その目に、しかと焼き付けるといいぞ海野　幸子よ！
俺の猛攻をな！！」

こうなれば、アナタの実力をとことん出し切って、
あの庶民に必ず勝ちなさい！

海野↓増川ｓｉｄｅ

ぬうぅっ…！まだ体中に痛みが走るぞ…！

アイツらから被害を受けた我が同士や生徒は、
こんな痛みを受けてデュエルをしたと言うのか…。

さっきは、ボムセンボンの効果でダメージを減らしたから気絶で済んだが、
あのまま受けたら、永眠する羽目になっていたかもな…。

しっかし…アイツに激励をされた手前、ああ言ったはいいが…。

参ったぞこれは…。
何故なら俺の手札には、奴のショック・ルーラーを倒せる手立てが無い…。

フィールドには一応、それが可能な罠があるのだが、
奴のショック・ルーラーの効果で発動を抑えられている為、使えん…。

このドローで、レベル４…いや、３のモンスターでもいい…。
ソイツを引く事が出来れば…。

「行くぞ！俺のターン、ドローだ！」

斎木　ＬＰ４０００

手札４枚

モンスターゾーン

?１６　色の支配者　ショック・ルーラー

（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

増川　ＬＰ３０００

手札３枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

…ッ！来たぞ！！これならアイツを呼べるぞ！！

「そして、このスタンバイフェイズに、
バルーン・オクトパスは俺のフィールドに戻って来るぞ！」

上空へ飛んで行ったバルーン・オクトパスが降下して来たぞ！

…自身の効果が使えん為か、
萎んだ姿になっとるな…。

バルーン・オクトパス
ＡＴＫ１８００

「フフフ…自身の効果でフィールドに戻って来た為、
もうそのモンスターは、効果は使えませんよ？」「そんな事は
分かっているわ！俺はキラー・ラブカを攻撃表示で召喚だ！」

湖畔の中から、黄色い平べったいサメが飛び出したぞ。

キラー・ラブカ
ＡＴＫ７００

「更に俺は魔法カード、浮上を発動！
自分の墓地からレベル３以下の魚・海龍・水族１体を、
表側守備表示で特殊召喚するぞ！
復活しろ！ボムセンボン！！」

水面下から、至る所に爆弾が取り付けた、黒いハリセンボンが浮上したぞ。

コイツも効果を使った後だからか、
やはり萎んでいるな…。

ボムセンボン
ＤＥＦ１０００

「これで下民のフィールドにはレベル３モンスターが２体ですわね…。」

「行くぞ斎木　望よ！

俺はレベル３のキラー・ラブカと、ボムセンボンをオーバー・レイ！！

２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

大海の底より猛威を奮え！

エクシーズ召喚！！目覚めろ！？１７　リバイス・ドラゴン！！」

俺のフィールドにいる２体のモンスターが渦に入ると、
そこから、青い目玉のモニュメントが出現し、　細長いドラゴン

に変形していったぞ！

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００

ＯＲＵ　０→２

「ほお、それがアナタの…増川君のナンバーズカードですか…。
ですが、私のショック・ルーラーの攻撃力には及びませんよ？」

「慌てるなよ斎木　望？

俺はリバイス・ドラゴンの効果発動だ！

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ
使用する事で、
このカードの攻撃力を５００ポイントアップするぞ！」

リバイス・ドラゴンは、
ユニット１つを食らうと、
自身の力を漲らせた。

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２０００→２５００
ＯＲＵ　２→１

「攻撃力が、ショック・ルーラーより上回っただと！？」

「斎木　望よ…お前は言ったな？

このデュエルでは、ダメージが現実の物として返って来ると！

ならば、被害に遭った我が同士や生徒達の受けた痛み…。　お前の身をもって思いしるがいいわ！」

「下民…。」

「行け、リバイス・ドラゴンよ！

ショック・ルーラーを攻撃するのだ！！

吹き飛ばせ、バイス・ストリーム！！」

リバイス・ドラゴンの激流を伴うブレスにより、

ショック・ルーラーは粉微塵となっていったぞ！

「ぬうっ…！」

斎木　ＬＰ４０００→３８００

「まだまだ行くぞ！バルーン・オクトパスで、お前にダイレクトアタックだ！！」

「ぐうっ…っお！」

斎木　ＬＰ３８００→２０００

「少しは被害に遭った生徒達の痛みを思い知ったか！

俺はこれでターンエンドするぞ！

そして、このターンが終わった事で、
お前のショック・ルーラーの効果は切れる！」

「ぐう…くっ！」

「下民…前回のデュエルでもそうでしたが、アナタはあの庶民とは違って、
ナンバーズカードとやらを召喚しても、
体に数字が浮かんで来ませんわね？

…何故なのです？」

「…まあ、それについても後で話してやるから、　今はただ見ていろ。」

「…全く、必ず話して頂きますからね！」

「うっ…！？くっ！うおあぁぁぁっ！！」

「…！？庶民の様子がおかしいですわ！」

何だ！？斎木　望は急に苦しみ出したぞ？

…気のせいなのか、奴の体に濃いオーラの様な物が見えよるぞ…。

「あぁぁ…『ハハハ、クッハハハ！』

「何だ！？何をそんなに笑っているのだ！」

斎木　望は高笑いしてのけた後、声変わりしたかの様に低い声になりおった…。

『いい気になるなよ小僧！！
お前には更なる苦痛を味あわせてやる！』

「…！？庶民の雰囲気が豹変しましたわ！」

何だ何だ…！？性格まで一変してないかアイツ？

『フッフフ…私のターン、ドロー！』

斎木　ＬＰ２０００
手札５枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

増川　ＬＰ３０００
手札１枚

モンスターゾーン

?17　リバイス・ドラゴン

（ORU×1）

バルーン・オクトパス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×2

『私の墓地からイエロー・ガジェットとレッド・ガジェット、そしてグリーン・ガジェットをデッキに戻し、手札からレインボー・ガジェットを特殊召喚する！』

レインボー・ガジェット

ATK2500

さっきまで出て来た3体のガジェットモンスターよりも巨大な、虹色の歯車が出現して来おった…。

『このカードは、自分の墓地から地属性・機械族・レベル4モン

スター3体をデッキに戻す事で、
手札から特殊召喚出来る！』

レインボー・ガジェット
レベル7　地属性　機械族
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００

このカードは、自分の墓地から地属性・機械族・レベル４モンスター3体をデッキに戻す事で、
手札から特殊召喚出来る。

「くっ…庶民がレベル7モンスターを特殊召喚して来ましたわよ！下民！！」

「安心しろ海野　幸子よ！
奴のナンバーズカードは既に倒した上に、
レインボー・ガジェットの攻撃力はリバイス・ドラゴンと互角だ！
次のターンで、リバイス・ドラゴンの攻撃力を上げれば充分倒せるぞ！」

『フッフッフ…続けて魔法カード、手札抹殺を発動！
互いに手札を全て墓地に捨て、
その枚数だけドローする！』

「ぬぅ…手札交換か…。」

『私はスクラップ・リサイクラーを攻撃表示で召喚だ…。』

奴のフィールドに、ゴミ箱に車輪の付いたメカがやって来たぞ。

スクラップ・リサイクラー

ＡＴＫ９００

『このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
自分のデッキから機械族１体を墓地に送る事が出来る！

私はデッキから、グレー・ガジェット１体を墓地に送る！

更に、スクラップ・リサイクラーは１ターンに１度、　自分の墓地の地属性・機械族・レベル４モンスター２体をデッキに戻す事で、カードを１枚ドローするのだ！』

スクラップ・リサイクラー

レベル３　地属性　機械族

ＡＴＫ９００　ＤＥＦ１２００

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
自分のデッキから機械族1体を墓地に送る事が出来る。

1ターンに1度、
自分の墓地の地属性・機械族・レベル4モンスター2体をデッキに戻す事で、
カードを1枚ドローする。

『私は墓地のイエロー・ガジェットと、レッドガジェットをデッキに戻し、
1枚ドロー！…ッ！フッハハハ！！』

何だ…奴は何を引いたのだ！？

『私はレインボー・ガジェットと、スクラップ・リサイクラーを選択し、
魔法カード、共振装置を発動！

自分フィールドに表側表示で存在する同じ種族・属性のモンスター2体を選択する事で発動出来、
選択したモンスターの内1体のレベルをエンドフェイズまで、
どちらかと同じレベルとなる！

私はスクラップ・リサイクラーのレベルを、
レインボー・ガジェットと同じ、レベル7にする！』

スクラップ・リサイクラー

レベル3→7

共振装置

通常魔法

自分フィールドに表側表示で存在する同じ種族・属性のモンスター2体を選択し、
選択したモンスターの内1体のレベルをエンドフェイズまで、
どちらかと同じレベルとなる。

「レベル7が2体…。まさかお前！」

『見せてやるぞ…私の真の力を！

私はレベル7のレインボー・ガジェットと、スクラップ・リサイクラーをオーバー・レイ！！

2体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

鮮血の雨が降り注ぎし時、幻惑の瞳が開かれる…。

虚ろぎに沈め！！

エクシーズ召喚!!出でよ、我が分身!!
幻惑の瞳を持つ支配者、？１１　ビッグ・アイ!!』

２体のモンスターが渦に入ると、
そこから大量の血液が流れ、
やがて、その血液は巨大な目玉へと変化しおったぞ…。
そして斎木　望の額に、オーラを纏った数字が浮かんで来たぞ。

？１１　ビッグ・アイ
ＡＴＫ２６００
ＯＲＵ　０→２

ぬぅ…何て気味の悪い登場のするモンスター・エクシーズだ…。
いや待て…そんな事より…。

「２体目のナンバーズカードだと!?」

『ククク…ナンバーズカードを１体しか持っていないと思ったか小僧?

ショック・ルーラーは、他の奴から奪ったナンバーズ…。我が糧

に過ぎん！

私自身…ビッグ・アイこそが、
我がデッキの最強モンスターだ！』

「斎木　望よ、お前はさっきから一体何を言っているのだ！？」

「下民！今はそれ所ではありませんわ！！
庶民のフィールドに召喚されたビッグ・アイの攻撃力は、
アナタのリバイス・ドラゴンよりも上回っているのですよ！！」

俺は海野　幸子に指摘された事で、
我に返った。

「…ッ！大丈夫だ！！さっきと違って、
今は罠カードが使える！

奴の攻撃なぞ防いでくれる！」

『ククク、無駄だ…！私は私自身…ビッグ・アイの効果を発動！

1ターンに1度、私のオーバー・レイ・ユニット1つを使用する
事で、
相手フィールドのモンスター1体のコントロールを得る！』

?11　ビッグ・アイ
ORU　2↓1

「な、何ぃ～!?相手モンスター1体のコントロールを奪うだと!?」

「これが、あのモンスター・エクシーズの効果…。
なんて恐ろしい効果ですの…。」

『これでお前のナンバーズ…リバイス・ドラゴンは、私の配下に下る!!

行くぞ…テンプテーション・グランス!!』

ユニットを1つ吸収したビッグ・アイが、
リバイス・ドラゴンを睨み付けると、
リバイス・ドラゴンは奴のフィールドに行ってしまった…。

「下民のリバイス・ドラゴンが庶民の手に…。」

『私はリバイス・ドラゴンの効果発動!

オーバー・レイ・ユニット1つを使用し、
このカードの攻撃力を５００ポイントアップする！』

？１７　リバイス・ドラゴン
ＡＴＫ２５００↓３０００
ＯＲＵ　１↓０

『行け、リバイス・ドラゴンよ！
我が手足となり、バルーン・オクトパスを攻撃せよ！』

「ナメるな！俺は墓地のキラー・ラブカの効果発動！
自分フィールドの魚・海龍・水族が攻撃された時、
このカードを墓地から除外する事で、
相手モンスター１体の攻撃を無効にするのだ！」

リバイス・ドラゴンが放った激流は、
俺の目の前で霧散していった。

「そして、そのモンスターの攻撃力を、
次の自分のエンドフェイズまで、５００ポイントダウンするぞ！」

キラー・ラブカ

レベル３　水属性　魚族

ＡＴＫ７００　ＤＥＦ１５００

自分フィールドの魚・海龍・水族が攻撃された時、

このカードを墓地から除外する事で、

相手モンスター１体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力を、

次の自分のエンドフェイズまで、５００ポイントダウンする。

？１７　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ３０００→２５００

『小賢しい真似を…！私はカードを２枚伏せて、ターンエンド！』

「随分とナメた事を…！その大目玉で攻撃すれば、

バルーン・オクトパスを倒せるかもしれんぞ？」

『私自身は、効果を発動したターンには攻撃が出来ない…。

慌てずとも、すぐに苦痛を与えてやるぞ小僧！』

？１１　ビッグ・アイ

ランク７　闇属性　魔法使い族／エクシーズ

ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２０００

レベル７×２体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニット１つを使用する事で、
相手モンスター１体のコントロールを得る。
この効果を発動したターン、
このカードは攻撃出来ない。

「そう言う事か…。ならば俺のターン、ドローだ！」

斎木　ＬＰ２０００

手札０枚

モンスターゾーン

？１１　ビッグ・アイ

（ＯＲＵ×１）

？１７　リバイス・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×３

増川　ＬＰ３０００

手札２枚

モンスターゾーン

バルーン・オクトパス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

「俺は魔法カード、アクア・ジェットを発動！

自分フィールドの魚・海龍・水族１体の攻撃力を１０００ポイントアップする！

コイツで、バルーン・オクトパスの攻撃力を…。」

『甘いわ小僧！私は速攻魔法、誤爆（ミス・バースト）をチェーン発動！
この効果により、アクア・ジェットの効果を、自分フィールドのモンスター1体を破壊する効果に変更する！』

「そんな事だろうと思ったぞ！
バルーン・オクトパスをリリースして、罠カード、フィッシャー・チャージをチェーン発動！
相手フィールドのカード1枚を破壊し、
カードを1枚ドローするのだ！
これでお前のビッグ・アイを撃ち落としてくれるわ！」

『ならば速攻魔法、強制召集をチェーン発動！
相手が発動した魔法・罠の効果を、
自分のデッキからレベル4以下のモンスター1体を、
攻撃表示で特殊召喚する効果に変更される！』

「何だと！？それではビッグ・アイを破壊出来んではないか！」

『さあ…変更されたフィッシャー・チャージの効果で、
デッキからレベル4以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚

して貰うぞ小僧！！』

「ぬくぅ…ならば、デッキからビッグ・ジョーズを攻撃表示で特殊召喚するぞ…。」

ビッグ・ジョーズ

ＡＴＫ１８００

フィッシャー・チャージ

通常罠

自分フィールドの魚族１体をリリースして、発動する。
相手フィールドのカード１枚を破壊し、
カードを１枚ドローする。

強制召集

速攻魔法

相手が発動した魔法・罠の効果を、
自分のデッキからレベル４以下のモンスター１体を、
攻撃表示で特殊召喚する効果に変更する。

「何て事!?これでは、次の庶民のターンで、大ダメージを受けてしまいますわ!」

『クハハッ!小僧、もう諦めろ。

そうすれば、そこの娘だけは見逃してやってもいいぞ?』

「ふざけるなっ!!俺は絶対に諦めんぞ!
お前らから被害を受けた我が同士や生徒の為にも勝って、
必ず謝罪させてやるぞ!」

「よくぞ言いましたわ下民…いえ、増川!

もし庶民に屈伏していたら、
アナタを一生蔑んでいた所です!」

「…フッ、そうか…。付き合わせて悪いな…海野氏。
デュエルは続行だ!俺はこれで、ターンエンド!

そして、キラー・ラブカの効果で下がっていたリバイス・ドラゴンの攻撃力は、元に戻る…。」

?17　リバイス・ドラゴン

ＡＴＫ２５００→３０００

『…いいだろう。そこにいる娘と共に、我が糧となるがいい！

私のターン、ドロー！』

斎木　ＬＰ２０００

手札１枚

モンスターゾーン

？１１　ビッグ・アイ

（ＯＲＵ×１）

？１７　リバイス・ドラゴン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

増川　ＬＰ３０００

手札１枚

モンスターゾーン

ビッグ・ジョーズ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

『私はブラック・ガジェットを攻撃表示で召喚！
更に、地属性・機械族・レベル４モンスターを召喚した事で、
墓地からグレー・ガジェットを特殊召喚する！』

奴のフィールドに、黒色と灰色の歯車が現れて来たぞ…。

ブラック・ガジェット

ＡＴＫ１８００

グレー・ガジェット

ＡＴＫ１６００

『ブラック・ガジェットの効果発動！

１ターンに１度、自分フィールドの地属性・機械族・レベル４モンスター１体の攻撃力を４００ポイントアップする！

私は、グレー・ガジェットの攻撃力を４００ポイントアップする！』

グレー・ガジェット
ＡＴＫ１６００→２０００

ブラック・ガジェット
レベル４　地属性　機械族
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ０

１ターンに１度、自分フィールドの地属性・機械族・レベル４モンスター１体の攻撃力を４００ポイントアップする。

グレー・ガジェット
レベル４　地属性　機械族
ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１０００

自分フィールドに地属性・機械族・レベル４モンスターを召喚に成功した時、
墓地から、このカードを特殊召喚出来る。

『バトル！リバイス・ドラゴンで、
ビッグ・ジョーズを攻撃！
喰らえ、バイス・ストリーム！！』

「くっ、罠発動！ポセイドン・ウェーブ！！

相手モンスター1体の攻撃をした時に発動し、そのモンスターの攻撃を無効にするぞ！

更に自分フィールドの魚・海龍・水族1体につき、
８００ポイントのダメージを与えるのだ！

俺のフィールドには、魚族のビッグ・ジョーズ1体のみだ…。

よって、８００ポイントのダメージを喰らえ！」

『グウォッ！！クッ…悪足掻きを！』

斎木　ＬＰ２０００→１２００

『ならば私自身で、ビッグ・ジョーズを攻撃！

トランス・オブ・トゥルース！！』

ビッグ・アイは、再び血液に戻ると、
幾つもの赤い槍となって、
俺とビッグ・ジョーズに降り注ぎおった…。

「ぐふっ！…ぬ…くぅ…。」

増川　ＬＰ３０００→２２００

『今度はダイレクトアタックだ…。
全てを喰らうまで、持つかな？お前の命は…。』

「…いいか…ら、サッサと、かかっ…てこ…い！」

『ホザきよる！まずは、ブラック・ガジェットのダイレクトアタックを喰らうがいい小僧！』

ブラック・ガジェットの右ストレートで、
俺は殴り飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「ぬぐあぁっ…！…ッウ…ぬ…ぅ！」

増川　ＬＰ２２００→４００

…く…ぬぅ…。く…そ、中々立ち…上が…れんぞ…。

「増川！立ちなさい！！何が何でも立ち上がるのよ！！
…立って、お願い…だから…。」

くそ！海野…氏をあんな表情にさ…せるとはな…。立て！立ち…
上がるのだ！！
俺の体よ！！

「ハッ…ハ…ハ、任…せろ海野…氏。
俺は、倒れ…ん！」

『ほう、ＬＰが４００になってもまだ意識を保てるか…。

だが、これで終わりだ！
そこの娘が来るのを、奈落の底で待つがいい！

グレー・ガジェットでダイレクトアタックだ！
くたばれぇ！小僧！！』

「待…て！俺は墓地か…ら、
カイトマンタを特…殊召喚…。」

カイトマンタ
ＤＥＦ１０００

「コイ…ツは、相手がダイレ…ク…トアタ…ックをして来…た時に、
墓地から特殊召…喚出来る！
こ…の効果で特殊召喚し…たカイトマンタがフィール…ドから離れ…る場合、
カイトマンタは除外され…るぞ！

カイトマンタ

レベル３　風属性　魚族

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１０００

相手がダイレクトアタックをして来た時、
このカードを墓地から特殊召喚出来る。

この効果で特殊召喚した場合、フィールドから離れる時、このカードは除外される。

『バカな！？そんなモンスターをいつ墓地へ送った！』

「お前…が、手札抹…殺を発動した時に…だ！」

「増川…！」

『クッ！ならば、カイトマンタを攻撃だ！！』

カイトマンタが、グレー・ガジェットの進行を、
その身で塞がった。

…スマン、助かったぞ！

『何とか、このターンを凌いだ様だな小僧…。
だが、これでお前のフィールドはがら空き…。
次で終わりだ！クハハハ！！

…ターンエンドだ。』

「くっ！俺のターン…。」

この時だけでいい！俺に遊城　十代の様な引きよ…宿れ！

「…ッドローだ！！」

斎木　ＬＰ１２００

手札０枚

モンスターゾーン

？１１　ビッグ・アイ

（ＯＲＵ×１）

？１７　リバイス・ドラゴン

ブラック・ガジェット

グレー・ガジェット

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

増川　ＬＰ４００

手札２枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

このカードは…！こうなれば、コイツに賭けるしかないか…。

「俺は魔法カード、ノック・アップ・ストリームを発動！

デッキの下のカードを確認し、
それが魚・海龍・水族モンスターだった場合、
自分フィールドに特殊召喚するぞ。

それ以外のカードだった場合は除外だ…。」

ノック・アップ・ストリーム

通常魔法

デッキの下のカードを確認し、　それが魚・海龍・水族モンスターだった場合、
自分フィールドに特殊召喚する。

それ以外のカードだった場合は除外する。

…くそっ、デッキの下を確認するだけだろうが！
何故、手が震えるのだ…！

『無駄だ小僧！お前にこの状況を覆す事など出来ん！！』

「ぬくぅ…。」

「何を恐れているのです増川！」

「海野氏！？」

「いつも自信に満ちたアナタの姿はドコへ行ったのです！
いつもの様に、デュエルに臨みなさい増川！！」

…そうだ、俺は何を恐れているのだ！
どんな時だろうと、いつもの俺らしく挑むだけだ！

「済まんな海野氏…、お陰で吹っ切れたぞ！」

「…全く、手間が掛かりますわね。」

「…っしゃあ！行くぞ！！」

俺は勢い良くデッキの下のカードを確認した。

…フッ、コイツか…。

「…海野氏。」

「…な、何ですの？」

「…感謝するぞ！俺が確認したカードは、超古深海王　シーラカンス！コイツは魚族だ！！

よって、ノック・アップ・ストリームの効果で特殊召喚するぞ！」

『バカな！？ここで、そのモンスターを引き当てただと！？』

湖畔から凄まじい水流が発生し、
その中から、深海の王が姿を現したぞ！

超古深海王　シーラカンス
ＡＴＫ２８００

「そして、俺はシーラカンスの効果発動！
手札１枚を墓地に送る事で、
デッキからレベル４以下の魚族を可能な限り特殊召喚するのだ！」

『させるか！！私は速攻魔法、サプライズ・ギフトをチェーン発動！』

「な…に…！ここで…、ソイツか～！！」

「何て…事なの…。」

『相手が発動したカード効果は、
お互いにカードを1枚ドローする効果に変更される！
これにより、変更されたシーラカンスの効果で、
互いに1枚ドローする。』

くっそ～！最後のチャンスが…！！

…ん？コイツは…。

『さあ小僧…最後の悪足掻きに、
ソイツで攻撃でもするがいい！

どのモンスターを攻撃しても、
私の勝利は揺るがないがな！！』

「ならば、そうさせて貰おうか…。

シーラカンスで、ブラック・ガジェットを攻撃！

オーシャン・イズ・ビューティー・フォール！！」

シーラカンスの放った高圧縮された鉄砲水が、ブラック・ガジェットを粉砕したぞ！

『グオォッ！！…ック！』

斎木　ＬＰ１２００→２００

『…流石に効いた。だが、私のＬＰはまだ残っている！
これで私の勝ちだ！！』

「誰が俺のモンスターの攻撃が、これで終わりだと言った？」

『何？』

「俺はシーラカンスをリリースして、速攻魔法、エネミー・コントローラーを発動！

２つある効果の内、
俺は自分のモンスター１体をリリースして、
相手の表側表示モンスター１体のコントロールをエンドフェイズまで得る効果を発動する！

リバイス・ドラゴンは返して貰うぞ！」

シーラカンスの魂が、リバイス・ドラゴンに宿ると、
正気を取り戻し、俺のフィールドに戻って来たぞ！

『バカな、何故ソイツを私に使わなかったのだ!?
そうすれば、リバイス・ドラゴンのコントロールを完全に取り戻せた筈だぞ!』

「それをやっては、ビッグ・アイを倒せんからな…。
さて…覚悟しろよ?」

『…ッオォォ!!私が、こんな小僧に負けるだと!?』

「シーラカンスの思いを力に変え、
ビッグ・アイにぶつけろ!リバイス・ドラゴン!!

バイス・ストリーム!!」

リバイス・ドラゴンの放った激流に飲まれ、
ビッグ・アイは消滅していった…。

『…ッグオォォッ!!バカなァ!?この私が…ッアァァァッ!!』

斎木　ＬＰ２００→０

斎木　望は絶叫後に気絶した。
そして浮かんでいた数字は消滅し、
2枚のナンバーズカードからが、
俺の手元に飛んで来たぞ。

『おのれぇ！！よくもやってくれたな小僧！
こうなれば、お前に取り憑いてくれる！！』

「…ぬぐっ！ッアァァ！！」

く…そ、リバイス・ドラゴンを手にした時より強烈な頭痛が…！

「増川！一体どうしたのです！！」

『…ッ！何だこれ…は！？
私…の意識が…消え…てい…く…。』

その一瞬、頭痛が収まり、ナンバーズカードから光が放たれた。

ぬうっ…くっ！…流石に…ダメージを受け過ぎた…か。

俺は海野氏の声を聞きながら、
地面に倒れ、意識を手放した。

思いを乗せた激流　ノック・アップ・ストリーム！（後書き）

俺は十代、そして万丈目の3人でブルー寮近くの湖畔へと急いだ。

辿り着くと、そこには海野と、意識を失った増川がいた。

俺達は増川をブルー寮へ運び、
翌日、今後の対策を練るのだった…。

次回、「壮絶なる夜明け」

増川の奴、無茶しやがって…。

壮絶なる夜明け（前書き）

お待たせしました！

第２４話です。

今回の話では、デュエルはありません。

壮絶なる夜明け

塔也ｓｉｄｅ

「急げ十代、塔也!!先程、ブルー寮の湖畔辺りで水流が立ち昇っていたのが見えた!
恐らく増川が、ナンバーズカードの持ち主とデュエルしてると見て間違いない!!」

「ああ、そうだな!それに…今までの奴と違って、
なんか嫌な悪寒まで感じるぜ!」

「俺には相変わらず分かんねぇが…、
そんなにヤバいのか?」

俺は今、万丈目を先頭に、
十代と一緒にブルー寮の湖畔へと向かっている最中だ。

「ああ…、そうだ!増川の実力では適わない可能性もある!
もし負ける様な事があれば、アイツの命が危ない!」

「命ねぇ…そこの所もまだしっくり来ないんだよな…。」

「兎に角、急いで向かった方がいいって事だぜ！塔也。」

「…ったく。」

まあ、アイツも十代と何遍もデュエルして、十代を追い詰める位まで強くなったんだ…。

今のアイツに適う奴なんて、そうそういない筈だ…。

だが、嫌な胸騒ぎがするな…。

アイツ、無事なんだろうな？

途中、林の中を走り続けながら俺達3人は、ようやくブルー寮近くの湖畔へと辿り着いた。

「ハァ…ハァ…やっと着いたぜ…。」

「けど、もうモンスターは影も形も無いぜ…。」

「チッ…既にデュエルは終わった様だ…。」

「だったら、アイツ…何で万丈目や宝山に連絡もよこさねぇんだ？」

「まさか…アイツ！」

「兎に角、増川を探そうぜ！」

俺達は増川を探す為、湖畔周辺を練り歩いた。

「…ったく、アイツ一体ドコほっつき歩いてるんだよ…。」

「何事も無ければいいがな…。」

「おっ！あそこに人影が見えたぜ２人共！」

「何！？ドコに見えた十代！」

「向こう側に見えたぜ！…ほら、あそこだよ。」

十代が指差す方向を見ると、
確かに人影が見えたぜ。

「よし、行ってみるか。」

「待て！少しは警戒をしろ、十代！」

「けど、行ってみない事には始まらないぜ？万丈目。」

俺の言葉に、万丈目は渋々賛成した。

「…分かった。なら、周囲に警戒しながら行くぞ…。」

人影の近くまで来ると、
懸命に誰かに叫んでいる声が聞こえたぜ。

「…川、増川！しっかりなさい！！
目を覚ますのです！！」

「あそこにいるのは、海野君？
…ッ！おい、増川と斎木が倒れているぞっ！」

確かに…。増川とブルー生徒が倒れていて、
海野が必死になって、増川に呼び掛けていた。

「…おーい、幸子！一体どうしたんだ？」

十代が声を掛けると、海野はこちらに気付いた。

「…ッ！アナタ達、ちょうどいい所に来ましたわね！！
増川をブルー寮まで運んで下さらない！？
私（わたくし）1人では、とても運べませんので！」

増川と海野の体をよく見ると、所々に傷付いている。
しかも、増川はグッタリしていてかなりヤバい状況だ…。

万丈目の言ってた事って、
この事だったのか！？

真相を確かめるべく、俺は海野に尋ねてみた。

「海野！お前は増川が何で倒れているのか知らないか！？
…それに、お前も何か傷付いてるみたいだし…。」

「…そ、それは…何と仰ったらいいのか…。」

俺が事情を聞いても、海野は困惑した表情を浮かべ、話すのを躊躇っている。
…まさかと思いながらも、俺はこう切り出した。

「…ひょっとして、デュエルをしてる最中に付いた…とかか？」

「…ッ！ど、どうしてそうだと思ったのです！？」

…海野の様子からして、図星か…。

マジかよ…本当にデュエルをしていて傷付いたなんてな…。

「嘘の様な話だとは、私自身も思いますわ…。

ですが、実際に起こった事なのです！！

現に増川が、私のデュエルの最中に割って入り、

私に代わって、

あそこで倒れている庶民とデュエルして、倒れてしまいましたわ

…。」

「じゃあ…増川の奴、負けちまったのか！？」

「…ならば、斎木が倒れている筈が無かろうが…！

状況を察するに、引き分けと言った所か…。」

すると、海野は即座に否定した。

「違いますわ！デュエルは増川が勝利しましたわ！！

…ですが、デュエルが終わった後に…倒れてしまったのです…。」

「デュエルの後に？それは一体どういう事だ？」

「詳しい話は後日に致しますわ…。
ですから今は、増川と向こうに倒れている庶民を運ぶのです！！」

海野の言う事は、最もだな。

こんなに傷付いた増川を放っておいたら、
症状が悪化するばかりだからな…。

「仕方無いか…。十代、塔也、ひとまず増川と斎木をブルー寮の
正門まで運んでくれ。

…海野君、１人で歩けるか？」

「…私（わたくし）は大丈夫です。」

「…そうか、ならば俺は一足早くブルー寮へ行って、
クロノス寮長にお前達の入寮許可を取ってくる。

本来ブルー寮は、ブルー生徒以外は入寮禁止だからな。」

「分かったぜ、万丈目！俺は増川を運ぶ。

十代は向こうのブルー生徒を頼んだぜ。」

「おう！任せろ塔也！！」

「アナタ達、頼みましたわよ…。」

俺達は海野と別れた後、
倒れている2人を担いでブルー寮へ入って、
それぞれの自室に休ませた。

そして今、俺達はブルー寮の正門にいる。

「ご苦労だったな…十代、塔也。

明日の放課後に、海野君が詳しい話をしてくれるそうだ…。
今日の所は、ひとまず解散だ…。」

「全く、あんな不可思議な事が起こるなんてな…。
未だに頭の中が、こんがらがっているぜ…。」

「だがな塔也…実際に、起こっている事なんだ…。
夢や幻では無い。」

俺の言葉に万丈目が釘を刺す。
確かに、そうだ…。あんな光景を目の当たりにしちゃあ、流石に認めざるおえないな…。

「…しばらくの間、宝山の事を頼んだぞ十代、塔也。」

「任せろ、万丈目。」

「宝山の事は、俺達がしっかり面倒を見るぜ！」

「…フッ、明日の放課後は時間を開けておけよ…。」

万丈目が寮へ戻った後、
俺達はレッド寮へと帰路についた。

部屋に戻ると、翔と宝山が俺達を迎えてくれた。

「あっ！お帰り～アニキ、塔也君。」

「たたいま…翔、宝山。」

「今、戻ったぜ！」

「良かった…。２人共無事だったんだね！」

「…？無事だったって、どういう事ッスか宝山君？」

「…え！？あ、ああ…ほら、夜道は割と物騒だからね。
それで、思わず…。」

おいおい…。言い訳にしちゃあ、随分と苦しいぜ宝山…。

「まあ、兎に角…十代の宿題を終わらせて、早く寝ようぜみんな。
俺もう、眠くってよ…。」

「あっ！そうだった！元々は、俺の宿題のプリントを探して外に
出たんだったぜ！
ああ～！今からでも間に合うのか～！？」

十代、お前な…。

「だったら、僕も手伝ってもいいかい？」

「えっ、いいのか！？助かるぜ宝山！」

「いいよ、お礼なんて…。
それに…今の体の具合だと、
明日は休んでって、響先生が言ってたし…。」

「悪いな…宝山。じゃあ、チャッチャッと終わらるか！」

こうして、４人掛かりで十代の宿題を手伝ってから、
俺達は就寝した。

それにしても…デュエルで人が傷付く…か。
そんな危険なデュエルをしている奴らは、
一体何が目的で、そんな事を？

唯一分かった事と言えば、
今回の出来事には、恐らく…ナンバーズカードが絡んでいるって
事ぐらいだ…。

夕暮れ刻に見つけたブルー生徒が持ってたナンバーズカード…。
あれに触れた途端、激しい頭痛が起こった。

それに、あの時に発光した光は一体…？

もっと言えば、増川の事もそうか…。

アイツは翔…恐らくは龍牙もだが、
ナンバーズカードを持ってる奴らは、どこか正気を失った感じに見えるのだが、

アイツはそんな風には見えない…。

…ダメだ、情報が少な過ぎて、考え様がねぇな…。

もう、寝よう寝よう！明日、海野の話を聞いてからでも考えるとするかな…。

おやすみ、みんな～。

あっ！明日、日直だったけ…。

翔、起こすのよろしく～。

…？？。

塔也→？？？ｓｉｄｅ

『むぅ…？１１の反応までもが消えよった…。』

『へぇ、アイツがねぇ～。
結構実力持っている筈じゃなかった？アイツ。』

まあ…？１０と？５６は、所詮は我(われ)らの使い捨てに過ぎんが…。
あやつまでも存在を抹消されるとは…。
とんだ期待外れよ…！

『？１１め…！我(われ)が折角、自我に目覚めさせてやったものを…！！
使えん奴め…。』

『まあまあ、落ち着きな大将…。

アイツ…自我に目覚めた途端に、
私達に吸収した生気を与えるのを拒んだっけか。
近々、私が奴を取り込むつもりだったんだけどなぁ～。』

『下らん事を言うとる場合かっ！

貴殿の配下が2体もやられた上に、
?11までもが、人間の手に落ちたのだぞ!!
あやつは、我が輩達の中でも上位クラスの存在の筈…。
そやつが負けるとは、なかなか侮れんな…。』

『まあ…配下と言っても下っ端もいい所さ。
それに、私達には及ばんさ。』

『フッフッフ…そう、確かにな。
所詮、我(われ)の指先にもならん奴らよ…。
ここまでが限界と言った所か…。』

『お主まで何を言い出すのだ!?
事態は一大事なるぞ!』

『本当に心慮深いんだね…。
…まあ、私としても、我々の存在を脅かす人間を、
このまま放置するのはマズいと思っているけど…。
…私が始末しようか?』

『…まあ、待て？５４よ…。
ここはひとまず、配下の者にやらせるのだ。』

『何故かな大将？脅威となる芽は、
サッサと摘むべきだと思うんだが？』

『…果実は実った時に喰らう方が美味だからな…。
…それに、事が順調に進み過ぎるのも退屈だ…。
ほんの余興代わりに、遊んでくれる…。』

『…ま～たお主は、そうやってすぐに遊びにしよる…。』

『…っと言っても、ただ様子見と決めた訳では無い…。
ここは１つ、我の配下を奴らに仕向けておくとしようか…。』

『…アンタの配下だったら、下手したらそれで全滅かもしれないよ？』

『そこまでの存在ならば、
興味が失せるわ…。

ひとまずは、現状維持とする。

貴様等も今は、身を潜めているがよい…。
来るべき時が来るまでは…な。』

『大将が言うなら、…仕方無い…かな。』

『ぬぅ…御意。』

クックック…精々、我を楽しませるがいい！人間共よ！！

？？？→塔也ｓｉｄｅ

フワァ～…昨日はよく寝たなぁ…。

結局、今日も今日とて寝坊して遅刻してしまった…。

響先生には、厳重注意を受けちまったなぁ…。

俺はどうも、朝にゃあ弱い…。

本当、どうしたもんかな…。
みんなに起こされたけどなぁ…自分でも驚く程、起きねぇもんだ。

あと…今朝のホームルームで、早速不可思議な事を耳にしたな…。
最近、謎の体調不良で倒れていた生徒の具合が良くなったとの事だ。

それでもまだ、症状が回復してない生徒の方が圧倒的に多いが…。

生徒が体調不良で倒れたと訴えた事自体は、

随分と前から起こっていたらしい。

回復した生徒が症状を訴えた時期がバラバラで、

しかも未だに原因不明なもんだから、

鮎川先生は頭を悩ませているらしい。

増川の奴も、今日は休みだ。

まあ…あんな傷付いた体じゃあ、

登校は無理か…。

昼休みになって、いつものロビーで、宝山を除いた４人で話をしていた。

「今日になって、とうとう宝山までもが欠席か…。

一体、アカデミアで何が起こっていると言うんだろうな…。」

「いや、違うぜ三沢。

宝山は、レッド寮の近くで、ちょっとした怪我を負って欠席してるんだ。

例の体調不良とは、関係無ぇよ…」

いや…生徒を体調不良に追いやった犯人とデュエルしたばっかりに、怪我をしたんだ…。

関係無いとは言えねぇか…。

十代は無言で聞いていた。

「そうッス！今は僕達の部屋で安静にしているよ。」

「…そうだったのか。今日早速、十代達の部屋に行ってもいいかな？

宝山のお見舞いをしたいのだが…。」

「勿論、構わないぜ三沢！

宝山も、きっと喜ぶと思うぜ！」

「なら、今日の放課後にでも行くとするよ。
見舞い品に、購買でお菓子を買って行こうかな…。」

「ありがとうな三沢、宝山もきっと喜ぶと思う…。」

…ん？待てよ、放課後は確か万丈目と一緒に…。

「「あぁっ！忘れる所だった！！」」

「ど、どうしたんだ！？２人共。いきなり大声を上げて…。」

「悪い！俺と塔也、放課後はちょっと用事があるんだ！！」

「だから…頼む翔！放課後までに帰っててくれ！！」

「…全く、アニキ達…。また、響先生に呼び出しを受けたの？」

翔がジト目で、俺と十代を見つめる。

「ま…まあ、そんなとこだ。
なあ、塔也？」

「あ…ああ、そういう事だから…。頼む、翔！」

「…全く、アニキ達は…。
…分かったよ。
三沢君、部屋の前に来たらノックしてよ。
鍵を開けるからさ。」

「了解だ、翔。じゃあ俺は、ちょっと購買で宝山の見舞い品を見繕って来るよ。
また放課後に会おう、３人共。」

そう言って、三沢は購買へ向かって行った。

「聞かせて貰ったわよ…３人共。宝山君、アナタ達の部屋で養生してたのね。」

「…トウヤ、また響ティーチャーから呼び出しデースカ…？」

振り返るとそこには、明日香とフォリナがいた。

「…ハハハ、全く…参ったもんだぜ。」

「トウヤ！幾ら何でも呼び出され過ぎデスヨ！
キッズの時からのバットな癖が、
マダ直っていない様デースネ！！」

珍しくフォリナが、俺に怒りをぶつけた。

「お、おい！落ち着けってフォリナ…。」

「マタこの前みたいな、制裁デュエルを受ける事になったら、ドウスルノデスカッ！！

ワタシ、トウヤの事が心配で…心配で…ッウ…ウゥ…。」

「塔也…アナタ、女の子を泣かせるなんて…。

男として最低よ！」

仕舞に俺は、フォリナにはその場で泣き出してしまって、
明日香には説教された。

「…えぇ！？十代、翔！助けてくれよ～。」

「悪い塔也…弁解出来ねぇぜ…。」

「自業自得ッスよ、塔也君。」

…うぅ、冷てぇな2人共。

「仕方ねぇだろ！？小さい頃から朝にゃ、滅法弱いんだからよ！」

「俺も早起きは苦手だけどよ…。

俺が起きた時でも、まだ塔也は寝てるんだぜ。」

「アニキと塔也君を起こすお陰で、
毎朝大変だよ…。」

「呆れたわ…。塔也、アナタは成績はいいみたいだけど…。

そんな生活態度じゃあ、
本当に退学させられるわよ。」

「退学!?マジでか!!」

「冗談じゃないわよ塔也。
稀なケースだけど、
前にもオベリスク・ブルーの生徒が、生活態度が原因で退学させられたって聞いた事があるわ。」

「ソ、ソンナ…このままじゃトウヤは本当に…。
…ワタシ、決めマシタ!
ショウ君、お願いしてもイイデスカ?」

「…僕に?フォリナさん、お願いって?」

「明日の朝から、起きたら、トウヤの携帯からワタシにテレフォンをかけて下サーイ。
スペシャルなモーニングコールを流しマスヨ!!」

「スペシャルかあ…。
何か、凄そうだな!」

「でも…優しく声を掛けた位じゃあ、塔也君は起きないよ?」

「ノンノン、違いマスヨショウ君。

…ソウデス！テレフォンをかける前に、耳栓をしておいて下サイネ。」

凄い目覚ましに…耳栓…。
…ッ！まさかフォリナの奴、
アレをやるつもりなのか？

「おいおいフォリナ、まさかアレをやるつもりじゃ…。」

俺がそう聞くと、フォリナは笑顔で頷いた。

「ザッツライト！正解デスヨ、トウヤ。」

「おい、アレって何だよ塔也。」

「それに耳栓をしてって…。」

「十代、翔、先に言っておくぞ…。
…スマンッ！」

「スマンって、どういう事だよ塔也！？」

十代が尋ねた時、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「…おっと、授業が始まるぜ！
教室に戻ろうぜ十代、翔！」

「待てよ塔也！アレって何なんだよ！？」

「明日の朝に一体何が…。」

「明日の朝から、必ずワタシにテレフォンして下サイネ～、ショウ君～！」

んで、昼の授業も終わって放課後、
俺と十代は海野から話を聞く為、
ブルー寮付近の湖畔に向かった。

湖畔に着くと、既に万丈目と海野がいた。

「遅いぞ！お前ら、何をしていた！」

「悪い悪い、今日は日直でさ…。」

「俺は塔也の手伝いをしててな…。」

「…全く、私を待たせるだなんて…。
いい度胸ね、庶民達！！」

俺と十代は2人に説教されちまった…。

「…では海野君、話して貰おうか…。」

海野は俺達に昨日のデュエルに起こった出来事を話してくれた。
話の内容は、まず斎木って奴がデュエルの最中、急に性格が豹変した事…。

ビッグ・アイって言うモンスター・エクシーズの事を、
自分自身と言っていた事…。

デュエルが終わった時に、
斎木が使用した2枚のモンスター・エクシーズが、
増川の手元に飛んで行った事…。

そして…それを手にした時に、
増川が倒れた事などだ。

「…と言う事があったのです。
私が知っている事は、これで全てですわね。」

「感謝するぞ海野君。」

「…では私(わたくし)は用事が立て込んでいるので、これにて失礼します。

ごきげんよう…庶民達。」

そう言って、海野は立ち去った。

「十代、塔也…。海野君の話を聞いて、何か似た様な事に出くわした事があるな?」

「う〜ん…そうだな。性格が豹変したって話なんだが…。

翔の時と似ているな…。」

「そうだな…。あの時の翔は、様子がおかしかったぜ。

塔也がテラ・バイトを破壊した時に、

元に戻ったけどな…。」

「あと、増川が斎木の使っていたナンバーズカードを手にした時に、

苦しみ出したって話なんだが…。

あれ…俺も体験したわ…。」

「何だと！？」

万丈目が驚愕している中、
俺はその時に入手したナンバーズカードを見せた。

「コイツを手にした時に頭痛が走ったんだ。
まあ、すぐに収まったけどな…。」

「…ッ！そう言えばその時、
そのカードが光って、光が空に飛んで行ったぜ！」

「俺も回収したナンバーズカードから、光が放出された所を見た
…。

そして…その翌日に、倒れていた生徒の内、少数が回復した…。」

万丈目はしばらく考え、
口を開いた。

「…どうやら、ナンバーズカードを回収すれば、　回収したカードの餌食になった生徒が回復する様だな。」

「ま～た随分と突拍子もねぇ事を…。

…っと言いたいが、それなら光が校舎に降り注いだ事に説明がつくな…。」

「という事は…ナンバーズカードをもっと回収すれば、
倒れた生徒はみんな回復するって事か！」

「恐らくな…。問題はそのナンバーズカードが、あと何枚あるのかだな…。」

明日香ファンクラブの奴らの人数分あるとしたら…。
厄介だな、おい…。

「だが、何枚あろうとやるしかあるまい…。

今夜も俺と一緒に、奴らの捜索を手伝って貰うぞ十代、塔也。」

「任せろ万丈目！」

「俺達しか出来ねぇってんなら、
やるっきゃねぇか！！」

「…では一度解散だ。夜になったら、十代はレッド寮付近を頼む。」

塔也はイエロー寮付近を頼む。」

「分かったぜ！万丈目。」

「万丈目、気を付けろよ！」

「お前達もな…。十分気を引き締める事だ…。」

こうして、俺と十代は一度レッド寮に戻るのだった。

壮絶なる夜明け（後書き）

俺は宝山への見舞い品を持って、
レッド寮へ向かっていた。

その途中で、レッド生徒の峠に出くわして、デュエルを挑まれた。

『お主、この場で其（それがし）とデュエルをして貰おうか…。

お主が負ければ、お主の命…貰い受ける！』

俺は立ち去ろうとすると、
周囲に切り立った岩がそびえ、逃げる事が出来なくなった。

『因みに、お主にデュエルを拒否する事は許されぬぞ…。
助かりたくば、其（それがし）に勝利する事だ…。』

「…分かった。俺が勝ったら、素直に通して貰うよ。」

こうして俺は、峠とデュエルをする羽目になってしまった。

次回、「脅威！忍者軍団」

…くっ！何だ…これは！？

このデュエル、いつもと何かが違う！

脅威！忍者軍団（前書き）

大変お待たせしました！

第２５話です。

今回は、ＴＦ３まで出ていたキャラが登場します。

？？？ｓｉｄｅ

…全く、あやつも困った物だ。

遊びと称して、我が輩達の消滅を企む人間をいたぶる気になっておる…。

あやつのやり方は、どうも性に合わん！！

手を拱いてなどいられるか！

こうなれば…その人間達を、我が輩の前に引っ立たせ、
我が輩が直々に、そやつらを纏めて斬り捨ててくれようぞ！！

それらしき人間は、昼間の内に、我が輩の依り代を通して目星をつけたからな！

後は、そやつらを呼びつけて斬り捨てるのみよ…。

さて、どうやって呼びつけてくれようか…。

そう思考を巡らせていると、

我が輩の視界に1人の小童が映った。

…決めたぞ。あの小童を、我が輩の配下の依り代として使って、目星を付けた奴らを我が輩の前に引っ立ててくれるわ！

そうと決まれば、依り代の意識を操って…。

「…ねぇ、そこのアンタ。」

「むっ？拙者に何か用でゴサルか？」

「…ボクとデュエルしてくれない？」

？？？→海野ｓｉｄｅ

庶民達と別れた後、私（わたくし）は増川の懐抱をしてます。

夕方からやっと意識が目覚め、何か食べたいと言ったので、爺やにリンゴを剥かせてますわ。

「…スマンなご老体。わざわざリンゴを剥いて貰って…。」

「いえいえ…増川様は、お嬢様の危機を救って下さった命の恩人。これ位の事…。」

「…それで、怪我の具合はいかがなのです、増川？」

すると増川は、苦笑いを浮かべながら答えました。

「…ハッハハ、意識が回復したのはいいのだが…。いかんせん、思う様に体が動けんのだ…。」

鮎川保険医が言うには、完治するにはまだまだ時間が掛かるそうだ…。」

「…まあ、無理もありませんわね。アナタは、まだ目覚めたばかりなのですから…。ゆっくり養生なさい。」

「何を言っとるっ！ゆっくりなどしてられ…。

…ッオオオ！痛たた！！」

興奮していきなり体を伸ばした所為で、
傷に響いた様ね…。

「ほら見なさい！今のアナタは、
体を動かす事も出来ないではありませんか！」

「しかしだな、海野氏…。」

「グウゥ～！」

「…うっ。」

その時、増川のお腹が鳴りましたわ…。

「…悪いがご老体、リンゴを俺の口元まで持っててくれんか？」

「かしこまりました、増川様。」

増川は、爺やが剥いたリンゴを3個食べると、
少しは落ち着いた様ですわ。

「…フゥ、これで少しは腹も落ち着いたぞ。
…悪いがご老体、海野氏と込み入った話がしたいので、
一旦、部屋の外に出て貰えないか？」

「…お嬢様、宜しいので？」

「…ええ、構いませんわ。
爺や、下がってなさい。」

「…かしこまりました、お嬢様。
では、扉の前で待っておりますので…。」

増川は、爺やが扉を閉めるのを見届け、
再び口を開きました。

「…さっきは少し興奮してしまったな。
…だが、鮎川保険医から、
まだ体調不良で倒れた生徒が絶えないと聞いた以上、
俺はやはり、部屋でのんびり休んでなどいられん…。」

…全く、アナタと言う方は…。

本当に聞き分けの無い殿方ですわね！

「…では聞きますが、体を満足に動かす事が出来ない今のアナタに、
何が出来ると言うのです！」

「…うぬぅ、そ…それは…。」

「今のアナタが、昨日の様なデュエルをしたら、
今度は意識が戻らないかもしれませんわよ！！
少しは自分の体を大事になさい！！」

「ぬぅ…スマン、海野氏。」

私（わたくし）の言葉が効いたのか、
増川は引き下がりました。

「それに…万丈目君や、庶民達…遊城　十代や雲雀　塔也が事の解決に努めてますわ。」

「アイツらも…。宝山氏だな、アイツらに喋ったのは…。全く、困った物だな…。」

増川が溜め息をつきますが、
私(わたくし)には、どこか安心している様子に見えましたわ。

「…そうだ、俺のデッキから、シーラカンスを引き抜いていっていいぞ。

ありがとな、海野氏。ソイツのお陰で、あのデュエルに勝つ事が出来た。」

「お互い様ですわ。あの時にアナタがいなかったら、私(わたくし)は、今この場所にはいませんもの。」

「…そうか。」

私(わたくし)は増川のデッキから、
シーラカンスを探していると、
あるカードに目が止まりました。

「…増川、このカードは何ですの？

私(わたくし)も見た事の無いカードですけど…。」

「…ああ、ソイツか。小学生の時に同級生の1人に連れられて、

デュエル大会に観戦しに行った時に、大会の審査をしていたカードデザイナーから貰った物だ。」

「それにしても、随分と強力なカードですわね…。
これほど強力なカードがあるのでしたら、

遊城　十代にも勝てるのでは無くって？」

すると、増川の表情が堅くなり、真剣な口調で答えました。

「…確かに、ソイツを使えば、遊城　十代に確実に勝てる…。
だが俺は…ソイツはデュエルでは使わんと決めているのだ。」

「何故です？アナタのデッキなら、
このカードは召喚出来る筈ですわ。」

「効果が強過ぎるのだ…。

それこそ一瞬で、そのデュエルが終わるくらいにな…。

それで勝ってもつまらんから、
使ってないのだ。」

「でしたら、何故デッキに入れているのです？」

「そのカードは、デュエルを始めるきっかけのカードだからな…。

…それに、そのカードには秘密がある。」

「秘密？一体、このカードにどんな秘密があると言うのです！？」

「聞いて驚くなよ海野氏？そのカードには…。」

この後、増川の口から信じ難い事を耳にしましたわ。

「不思議な力が宿っているのだ…。」

海野↓三沢ｓｉｄｅ

やれやれ…もうすぐ夜になってしまうな。

資料室でデュエルの資料やビデオを閲覧していて、

すっかり長引いてしまったな。

今日は、十代達の部屋で養生している宝山のお見舞いに行く、
と十代達に言っておいたと言うのに…。

俺は荷物を纏め、見舞い品のクッキーを片手に校舎を後にし、
レッド寮へと向かった。

それにしても…宝山は何故、登校出来ない位の怪我を負ったんだ?
後で十代達に聞いたが、
宝山は白石と一緒に、レッド寮近くの林で倒れていたらしいが…。
あの辺りは前に、十代とデュエルした時に行った事があるのだが、
大怪我する程、危険な場所では無かった筈なんだがな…。

…フゥ、最近になってから、
全校生徒の大半が体調不良で倒れたり、
宝山が大怪我を負ったりと、

一体、アカデミアで何が起こっているんだ?

「さて…この林を抜ければ、
レッド寮に着くぞ。」

『あいや、そこの者よ。暫し待たれよ！！』

「な、誰かいるのか！？」

上の方から突然、俺を呼び止める声が聞こえ、見上げると、
レッド生徒が、木のてっぺんに佇んでいた。

『…ハッ！！』

次の瞬間、そのレッド生徒は、
木のてっぺんから飛び降りて、こちらの方へやって来た。

『ふぅむ…お主に尋ねたい事がある。お主は遊城　十代と縁のある者でゴサルか？』

そのレッド生徒は、少々整った髪に、忍者の様なマスクと言った身なりをしていた。

それに、この独特な口調…峠か。

「おいおい峠…君もレッド生徒なら、
よく俺がレッド寮の十代達の部屋に、出入りしている所を見かけている筈だぞ？」

すると、峠がほくそ笑んだ。

『…そうか。お主は遊城　十代と知り合いでゴサルか…。
…ならばお主、其(それがし)とデュエルをして貰う！』

突然、何を言い出すんだ峠は…？

「…悪いが、今は急いでいるんだ。
デュエルはまた今度にしてくれないか？」

そう言って、この場から立ち去ろうとした。

『待たれい！お主をこの場から逃がしはせんぞ！』

峠が忍者の様に印を結んだ時、
俺達の周囲の地面が、切り立った岩となってせり上がって来た。

「な、地面が切り立った岩に！？」

『お主が、其(それがし)とのデュエルを拒否する事は許されぬ。
この場から出たければ、
其(それがし)に勝つ事でゴサル！！』

峠は忍者に憧れてこそはいるが、
本当に忍術の類が使える訳では無かった筈だぞ？

「…フゥ、分かったよ。
一応聞いておくが…俺が勝ったら、
ココから出られるんだろうな？」

『どちらかが勝てれば、
岩は、たちまち崩れ去る。
さあ…デュエルの始まりでゴサル！！』

「やれやれ…じゃあ君に勝って、通して貰うよ。」

「「デュエル！！」」

三沢　ＬＰ４０００

峠　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能によって、
俺が先攻となった。

「俺の先攻、ドロー！

俺は亡者魂（もうじゃだま）を攻撃表示で召喚だ！」

俺のフィールドに、灰色がかった怨霊が現れる。

亡者魂（もうじゃだま）
ＡＴＫ１４００

『ほう…そやつは妖の類か。お主、なかなか面白い魔物を使役するのでゴサルな。」

「それはどうも。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

今使っているデッキは、

増川が、十代と海野君とのデュエルでみせた展開力や奇抜性を参考に、

先程、資料室で組み上げたデッキだ。

増川の戦略は、モンスターを大量展開してエクシーズ召喚へ繋げ、相手の行動を、魔法・罠・モンスター効果で抑えると言った物だ。

この戦略は使えると思った俺は、
資料室で手当たり次第に、アンデットでも同様な働きがあるカードを模索し、
苦悩の末に作り上げる事が出来た。

塔也か十代に試すつもりだったのだが、

まさか、こんな形でこのデッキを試す事になるとはな…。

『では其(それがし)の番でゴサル。　1枚引くでゴサル！』

三沢　ＬＰ４０００

手札　３枚

モンスターゾーン

亡者魂（もうじゃだま）

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

峠　ＬＰ４０００

手札　６枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

『其（それがし）は永続魔法、芳香の狼煙を発動し、
機甲忍者　アクアを召喚するでゴサル！』

峠のフィールドに、青い装束を纏った忍者が飛び出した。

機甲忍者　アクア

ＡＴＫ１４００

『機甲忍者　アクアが召喚された事で、

永続魔法、芳香の狼煙の効果が発動するでゴサル！

自分の場に　魔物を召喚した時、

山札から、召喚した魔物の水準以下の忍者1体を手札に加えるでゴサル！』

水準？ひょっとしてレベルの事か？

芳香の狼煙

永続魔法

自分フィールドにモンスターが召喚された時、

デッキから、召喚したモンスターのレベル以下の忍者と名の付くモンスター1体を手札に加える。

『其（それがし）は山札より、機甲忍者　エアーを手札に加えるでゴサル！

更に自分の場に忍者を召喚した事で、

手札より機甲忍者　スパークを特殊召喚出来るでゴサル！！』

黄色い装束を纏った忍者が、上空より飛来した。

機甲忍者　スパーク
ＡＴＫ１６００

機甲忍者　スパーク

レベル４　光属性　戦士族
ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１４００

自分フィールドに忍者と名の付くモンスターを召喚した時、
手札からこのカードを特殊召喚出来る。

「レベル４が２体…。まさかエクシーズ召喚か！？」

『いざ参る！其(それがし)は水準４の機甲忍者　アクアと、
機甲忍者　スパークを
共鳴でゴサル！！

２体の魔物で、共鳴回線を構築！！

荒ぶる勇志よ、地を駆け巡り、双剣を奮え！

重複召喚！！疾風と共に出でよ、機甲忍者　ブレイド・ハート！
！』

峠のフィールドにいる2体の忍者が勢い良く渦に入ると、
そこから、鎧を纏った忍者が双剣を携えて、推参した。

…それにしても、峠が言った重複召喚って、
エクシーズ召喚の事か？

共鳴回線とは多分、オーバー・レイ・ネットワークの事だろうな
…。

機甲忍者　ブレイド・ハート
ＡＴＫ２２００
ＯＲＵ　０→２

『更に装備魔法、雷光丸を　ブレイド・ハートに装備！
これにより、ブレイド・ハートの攻撃力を６００数値分上昇する
でゴサル！』

ブレイド・ハートは双剣の内1本を、
雷を纏った刀に持ち替えた。

機甲忍者　ブレイド・ハート

ＡＴＫ２２００→２８００

攻撃力２８００か…。

しかし…峠はこんなパワーデッキ使いだったか？

前に実技授業で相手をした時には、
リバース効果を主力にしたデッキだったな…。

それに峠は、機甲忍者と言うカテゴリーは使って無かった筈だが
…。

『尋常に致せ！ブレイド・ハートよ、奴の場の亡者魂（もうじゃだま）を成敗せよ！
切り裂け、連次抜刀・霞切り！！』

ブレイド・ハートは颯爽と亡者魂（もうじゃだま）に近付くと、
装備した雷光丸で、亡者魂（もうじゃだま）を素早く切り裂いた。

「うっ…！？ぐわあっ！！」

三沢　ＬＰ４０００→２２００

「この経費は高く…。
…ぐうっ！な、何だこの感覚は！？」

俺は、おもむろに胸に手を当てると、
手に血液がベッタリと付いていた…。

これは一体どうなっているんだ！？まるで、あのモンスターに本当に切り裂かれた様だ…。

『どうだ、其（それがし）のブレイド・ハートの切れ味は？
このデュエルでは、其達（それがし）が受ける傷は、そのまま実物の物となるのてゴサル！！』

「バカな！？召喚されたモンスターはソリッド・ビジョン…。あくまで映像の筈だ！

実際にプレイヤーを傷付ける筈が無い！」

『普通ならばな…。だが其（それがし）らはそれに介入する事で、
実際の痛みへと変換出来るのでゴサル！！』

今、峠は其（それがし）らと言ったのか？

ならば、宝山が負った怪我は、峠の仲間の誰かがやったのか！？

恐らく、体調不良で倒れた生徒も…。

「くっ、俺は亡者魂（もうじゃだま）の効果発動！

このカードが戦闘によって破壊された時、
デッキからレベル４以下のアンデット族１体を特殊召喚出来る！

俺はデッキから、牛頭鬼を攻撃表示で特殊召喚する！」

牛の頭をした鬼が、大槌を構えて、ブレイド・ハートを見据えている。

牛頭鬼

ＡＴＫ１７００

亡者魂（もうじゃだま）

レベル３　地属性　アンデット族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００

このカードが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル４以下のアンデット族１体を特殊召喚出来る。これで次のターン、牛頭鬼でデッキのアンデット族を墓地に送って、

こちらの反撃の準備を整えられる！

『増援を呼んだか…。
だが、それは無駄に終わるぞ？』

「何だって？」

『先ずは雷光丸の効果！
雷光丸を装備した魔物が、
相手の魔物を戦闘で破壊した時、相手の手札１枚を墓地に送る
でゴサル！！
お主には、其(それがし)から見て、
左側の札を墓地に送って貰うぞ！』

「いいだろう、これも経費の内だ。俺はこのカードを墓地に送る
…。」

だが、俺のデッキには寧ろ好都合な効果だ。

まだ、勝利の方程式は崩れてはいない！

『そして、ブレイド・ハートの効果を発動！

戦闘行程中に1度、ブレイド・ハートの共鳴機体を1つ使用する事で、
相手の場の魔物1体を追撃出来るのゴサル！！』

機甲忍者　ブレイド・ハート
ＯＲＵ　2↓1

何！？これでは牛頭鬼が…！

雷光丸

装備魔法

忍者と名の付くモンスターに装備出来る。

装備モンスターの攻撃力を６００ポイントアップし、
装備したモンスターが、
相手モンスターを戦闘で破壊した時、
相手の手札1枚を墓地に送る。

機甲忍者　ブレイド・ハート

ランク４　風属性　戦士族／エクシーズ

ＡＴＫ２２００　ＤＥＦ１０００

バトルフェイズ中に1度、
このカードのオーバー・レイ・ユニットを1つ使用する事で、
相手フィールドのモンスター1体を選択し、もう1度だけ攻撃出来る。

『弐の太刀を受けよ！ブレイド・ハートで、牛頭鬼を攻撃！！
連刃抜刀・霞切り！！』

ブレイド・ハートは、切り立った岩に飛び移ると、
雷光丸をユニットの光を帯びた刀に持ち替えて、
牛頭鬼に切り伏せ様と飛び交って来る。

「流石に、これ以上の経費を払うのはゴメンだね！
墓地の亡者魂(もうじゃだま)を除外して、罠カード、魂縛(こんばく)を発動！！

このカードは、自分の墓地のアンデット族1体を除外して発動する！

相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を、このカード効果で除外したモンスターの攻撃力分ダウンする！」

墓地に眠っていた亡者魂(もうじゃだま)が、
ブレイド・ハートに憑依すると、
刀を振り下ろす勢いが緩くなっていった。

機甲忍者　ブレイド・ハート
ＡＴＫ２８００→１４００

魂縛（こんばく）

通常罠

自分の墓地のアンデット族1体を除外して発動する。
相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を、このカード効果で除外したモンスターの攻撃力分ダウンする。

『な、何と!?ブレイド・ハートの攻撃力が!』

「これで返り討ち…だな。
向かい討て、獄落槌!!」

牛頭鬼はブレイド・ハートの太刀筋を避けてると、
ブレイド・ハートの頭上に飛び上がって、　大槌を振り下ろした。

『ぬおっ!…ほお、お主も中々やるでゴサルな。』

峠　ＬＰ４０００→３７００

『ならば、2段階の主動行程に移り、札を2枚伏せる！
其(それがし)の番は、これにて終了でゴサル。』

牛頭鬼の迎撃を受けた事で、
峠の体も少し傷付いている…。

どうやらこのデュエルで怪我を負うのは、こちらだけでは無いらしいな…。

ダメージに比例して怪我を負うとしたら、
1度に多くのダメージを受ける訳にはいかないな…。

兎も角…このデュエルに負ければ、何か不吉な事が降りかかる気がする…。

特に、今の峠は様子がおかしい…。

俺が負ければ、何をされるのか分かった物じゃない！

「このターンの内に、俺が受けたダメージを、利子付きでお返しさせて貰うよ！峠！！」

『面白い…。ならば、やってみせよ！』

「行くぞ！俺のターン、ドロー！」

三沢　ＬＰ２６００
手札３枚
モンスターゾーン
牛頭鬼
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

峠　ＬＰ３７００
手札１枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

「俺はまず、牛頭鬼の効果を発動する。
１ターンに１度、自分のデッキからレベル４以下のアンデット族１体を墓地に送る事が出来る！
俺はデッキから、馬頭鬼を墓地に送る。」

『ほお…自らのデッキから、魔物を墓地送りとな？
何を仕出かすつもりでゴサル？』

「今に分かるさ。更に俺は、酒呑童子を攻撃表示で召喚！」
ＡＴＫ１５００

『ならば…この瞬間、罠発動！鳴子の鈴！！
相手の場に魔物が召喚特殊召喚された時に発動出来、
相手の場の魔物の数だけ、
自分の山札より水準４以下の忍者と名の付く魔物を特殊召喚するのでゴサル！！
出でよ！機甲忍者　フロスト、ブラインド！！』

峠のフィールドに、幾つもの鳴子が出現すると、
それら全てが鳴り出した。
そして、その音色に呼応する様に、
水色の装束の忍者と灰色の装束の忍者が推参した。

機甲忍者　フロスト

ＡＴＫ１５００

機甲忍者　ブラインド

ＡＴＫ１８００

鳴子の鈴

通常罠

相手フィールドにモンスターが召喚・特殊召喚した時に発動出来る。

相手フィールドのモンスターの数だけ、
自分のデッキからレベル４以下の忍者と名の付くモンスターを特殊召喚する。

『其(それがし)は２体の忍者の効果を発動！

機甲忍者　フロストは特殊召喚した時、
相手の魔物１体を守備表示にし、
その魔物の表示形式は変更出来ず、

機甲忍者　ブラインドは特殊召喚した時、　相手の場にある表側表示の札を置き直すのでゴサル！！』

「な、何!?」

『其(それがし)は機甲忍者　フロストの効果を牛頭鬼に！
機甲忍者　ブラインドの効果を酒呑童子に！

それぞれ発動する!!』

機甲忍者　フロストは、牛頭鬼を凍結させ、

機甲忍者　ブラインドは、
酒呑童子を黒い霧で覆った。

牛頭鬼

ＤＥＦ８００

酒呑童子

ＤＥＦ８００

機甲忍者　フロスト

レベル４　水属性　戦士族

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１２００

このカードが特殊召喚した時、
相手フィールドのモンスター1体を守備表示にし、
そのモンスターは表示形式を変更出来ない。

機甲忍者　ブラインド

レベル４　闇属性　戦士族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１０００

このカードが特殊召喚した時、
相手フィールドの表側表示のカード1枚をセットし直す。

「くっ！これでは、2体共攻撃出来ない！」

『フッフッフ…其(それがし)の機甲忍法の恐ろしさ、思い知ったか？

最早、お主は其(それがし)の刃からは逃れる事は叶わんぞ！

フッハハハ！ハッハッハ！！』

脅威！忍者軍団（後書き）

俺は、峠の機甲忍者によって翻弄されていくが、
活路を見いだし、反撃を仕掛ける。

『其(それがし)をここまで追い詰めるとは見事なり！
だが…お主もここまでよ！！』

「何だと！？どういう事だ！」

『味わうがいい…其(それがし)自身が持つ刃の切れ味をっ！！』

次回、「決闘活劇！　忍者　ＶＳ　妖怪」

次は俺が、妖怪の畏れを思い知らせる番だ！峠！！

決闘活劇！　忍者　ＶＳ　妖怪（前書き）

大変お待たせしました！

第２６話です。

今回は三沢の強力な切り札が登場しますよ。

海野ｓｉｄｅ

「…増川、アナタ今何と仰いましたか？」

「おいおい…あまり何回も言いたく無いんだが…。
聞こえなかったか海野氏？」

「不思議な力が宿っていると言われて、
はい、そうですか…って、すんなり納得出来る筈がありませんわ！」

全く、一体何を言い出すかと思えば…。

「…まあ、こういう話されりゃあ、そういう反応にもなるか…。
う～む何と説明すれば良いか…ッ！そうだ！」

何やら増川が閃いた様子ですが…。

一体、今度は何を言い出すと言うのかしら？

「海野氏よ…斎木のデュエルの時に、
俺に何故ナンバーズカードを使っても、数字が浮かんで来ないのかと聞いたな？」

「…ええ、アナタは私（わたくし）と遊城　十代とのデュエルでも、

ナンバーズカードを召喚したにも関わらず、
アナタ、普段と変わりありませんでしたわね？」

「まぁな…俺がマトモにナンバーズカードを使える理由は、
そのカードのお陰なのだ。」

「またアナタはそんな事を…。」

私（わたくし）は呆れていますが、
増川は構わずに話し続けました。

「まあ聞くのだ！海野氏よ、あれは俺がカイザーに惨敗して途方に暮れていた時だ…。」

増川がカイザーと！？

これは驚きですわ！

「増川…アナタ、カイザーとデュエルをしたのですか!?」

「うむ…その時の俺は、デュエルした相手が、
カイザーと呼ばれているデュエリストとは、全く知らんかったがな…。

…で、その時だったか、
リバイス・ドラゴンを拾ったのは…。」

「…拾ったですって!?
一体、ドコで落ちていたと言うのです?」

「アカデミアの港で…だな。
最初は真っ白なカードだったのだがな…。」

「真っ白なカードですって!?
ならば、シンクロモンスターのカードではありませんの?」

すると、増川は少し唸り声を上げました。

何か躊躇っている様に見えますわね…。

「いや、違うぞ…最初は文字通りに真っ白なカードだった…。
絵柄は疎か、文字すら無かったからな…。」

そんなカード、製作ミスもいい所ですわ。
どうして、港なんかに落ちていたのでしょうか?

「…で、俺はそのカードを拾った訳なのだが…。
カードを手にした時に、頭痛が起こったのだ。」

「頭痛ですって!?アナタはその時、大丈夫でしたの!?」

「うむ…その時に起こった頭痛は、
昨日よりはまだマシだったからな…。

その時、何かが払われた感覚があったのだ。」

「…それで?このカードと何の関係があるのです?」

「その感覚が起こった時、
…光ったのだ、そのカードがな。」

そう言えば…昨日、増川が苦しんだ時に、
ホルダーが微かに光っていましたわ。

「…俺はもっと強くならなければ…！
誰にも負けない位に…！！」

増川は、とても悔しそうな表情をしてましたわ。

「…だったら、まずは自分の体を治す事に専念なさい。
今のアナタは、デッキ構築すら出来ないのでは無くって？」

「今はそれが最善の策か…。

その時は、新たな俺のデッキ構築に付き合ってくれるか？海野氏。
」

「…仕方ありませんわね。

私（わたくし）もアナタのデッキ構築に、協力して差し上げますわ。」

「…うむ、恩に着るぞ。海野氏。」

アナタには借りがありますものね…。

受けた恩は倍にして返すのが、
貴族として当然の義務ですわ。

海野↓三沢ｓｉｄｅ

峠は、前に実技授業でデュエルした時に比べると、かなり腕を上げた様だな…。

俺の妖怪達の動きを、こうも封じ込めに来るとはな…。

『フッフッフッ…お主は、既に通常召喚をしている。
この番には、攻撃は出来まい？』

だが…俺の妖怪達の進撃を、
これ位で止めた気でいるとしたらな…峠。
それは、大きな間違いだ！

「確かにな…俺はこのターン、もう通常召喚は出来ない…。
…ならば、特殊召喚をするまでだ！！
俺は自分フィールドの牛頭鬼を、
魔法・罠ゾーンにセットする！」

『何と！自分の魔物を、魔法・罠の領域に置くとな！？
面妖な事を仕出かすなぁ…お主。』

「このデッキは、奇抜性と展開力が売りなんでね！
自分のアンデット族1体を、
魔法・罠ゾーンにセットする事で、
このカードは墓地から特殊召喚出来る！！
さぁ…黄泉帰れ！茨木童子！！」

俺達の周囲に黒い霧が立ち込めてくると、
霧から、顔に卒塔婆（そとば）を張り付けた若者の妖怪が、
刀を携えて出現した。

茨木童子
ＡＴＫ２３００

『何と！お主はいつ、そやつを墓地送りにしたと…。

ハッ！しまった！！

前の其(それがし)の戦闘段階の時に、

雷光丸の効果で墓地送りにした札でゴサッタか！！』

「ご名答だ、峠。

前のターン、君が俺の手札にあった茨木童子を墓地送りにしなければ…、

このターン、俺のモンスター達の攻撃は完全に封じられる所だったよ。」

『お、おのれ～！！

お主…随分と味な真似をしてくれおったなぁ！』

「バトルだ！茨木童子で、

機甲忍者　フロストを攻撃！！」

『ならば永続罠、機甲忍法　フリーズ・ロックを発動！！

自分の場に忍者と名の付く魔物が存在する時に発動出来、
お主の番の戦闘段階を飛ばすでゴサル！！』

戦闘段階を飛ばす…。つまり、バトルフェイズをスキップされたと言う訳か…。

『更にこの札が場に存在する限り、
お主の魔物の表示形式の変更を封じる！！』

フリーズ・ロックのカードから鎖が伸びて、
茨木童子の身動きを封じ込めた。

機甲忍法　フリーズ・ロック

永続罠

自分フィールドに忍者と名の付くモンスターが存在する時に発動出来る。

発動したターンのバトルフェイズをスキップする。　その後、このカードが存在する限り、
相手はモンスターの表示形式を変更出来ない。

「このターンの戦闘ダメージはお預けか…！」

『フッフッフ…残念だったなお主。』

「ああ、戦闘ダメージは…な。」

『…どういう意味でゴサル？』

「メインフェイズ２に移り、
俺は茨木童子の効果発動だ！

１ターンに１度、自分フィールドのアンデット族１体につき、
相手に４００ポイントのダメージを与える！」

『何と！？』

「俺のフィールドには、アンデット族は２体だ。

よって、１０００ポイントのダメージを与えるぞ！

打ち鳴らせ！鬼太鼓（おんでこ）！！」

茨木童子

レベル６　地属性　アンデット族

ＡＴＫ２３００　ＤＥＦ１４００

自分フィールドの表側表示で存在するアンデット族１体を魔法・罠ゾーンにセットする事で、
このカードを墓地から特殊召喚出来る。

この効果で特殊召喚した場合にフィールドから離れる時、
このカードは除外される。

１ターンに１度、自分フィールドのアンデット族×４００ポイントダメージを与える。

また、このカードがフィールドから離れた時、　この効果でセットしたモンスターを自分フィールドに特殊召喚出来る。

茨木童子の周囲に、雷の球が幾つか出現すると、
それらが峠に襲い掛かった。

『ぐおぉっ！…っくう！やりおるわ…。』

峠　ＬＰ３７００→２９００

「３００ポイント分返しそびれたか…！

俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

しかし…俺の体力は、このデュエルが終わるまで持つのか？

俺は先程出血した箇所に手を当てるが、

驚く事に出血が治まっていた。

傷口は消えていたが、代わりに、色濃い痣になっていた…。

「一体どういう事だ？

あれほど出血していた筈なのだが…。」

『ほう…お主、なかなか強靭な精神を持っている様でゴサルな…。

其(それがし)らが与える傷は、

あくまでも、その者の脳に錯覚させる幻術の類いに過ぎない…。』

俺が困惑していると、峠がそう言い放った。

『…っと言っても、中には…受ける怪我が本当に傷に変わる代物もあるがな…。

其位（それがし）の力では幻覚に過ぎないが、

其（それがし）らの中には、かなり強烈な術をかける者もいるのでな…。

あまりに鮮麗な物と認識するあまりに、
全ての魔物の受ける怪我によって、
体が勝手に傷口を開くやもしれんがな…。』

成る程、要は気持ちの持ちようと言う訳か！

痣は恐らく…強烈な幻覚によって引き起こった刺激が、
体内の血管を潰して出来た物か…。

どちらにせよ…こんな強烈な刺激を受け続けたら、
痣はやがて宝山の様に、療養が必要になる程に重傷物の傷口に変わってしまうぞ…。

『少々、話が過ぎたな…。　其（それがし）の番だ、１枚引くでゴサル。』

三沢　ＬＰ２６００

手札１枚

モンスターゾーン

茨木童子

セットモンスター×１

（酒呑童子）

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

牛頭鬼

峠　ＬＰ２９００

手札２枚

モンスターゾーン

機甲忍者　フロスト

機甲忍者　ブラインド

魔法・罠ゾーン

機甲忍法　フリーズ・ロック

芳香の狼煙

『手札から魔法札、機甲忍法　ゴールド・コンバーションを発動！
自分の魔法・罠領域にある忍法と名の付く札を全て破壊！
そして、山札から札を2枚引くでゴサル。」

成る程…フリーズ・ロックは、
発動時にはバトルフェイズをスキップすると言う強力な効果があるが、
それ以降は、相手モンスターの表示形式を封じるだけだ。
今の状況では、あまりいい効果とは言えないから、
早々に墓地送りにした訳か…。

機甲忍法　ゴールド・コンバーション
通常魔法
自分の魔法・罠ゾーンに存在する　忍法と名の付くカードを全て破壊し、
カードを2枚ドローする。

『其(それがし)の魔法・罠の領域にある機甲忍法　フリーズ・ロックを破壊し、
２枚引くでゴサル！
…フム、これは中々。』

何だ!?一体どんなカードを引き当てた?

『生命数値を５００払い、手札より永続魔法、レベル増幅Ｄ地区を発動！

この札がある限り、
お互いの者の手札・場に存在する魔物の水準は、
発動時に払ったＬＰが５００数値につき、１つ上がるでゴサル。』

峠　ＬＰ２９００→２４００

レベル増幅Ｄ地区

永続魔法

ＬＰを２０００までの任意の数値分払う事で発動する。
このカードが存在する限り、

お互いのプレイヤーの手札・フィールドに存在するモンスターのレベルは、

払ったＬＰが５００ポイントにつき、１つ上がる。

『発動時に払ったＬＰは５００！

よって、手札と場の魔物の水準は１つ上がる！』

機甲忍者　フロスト

レベル４→５

機甲忍者　ブラインド

レベル４→５

茨木童子

レベル６→７

手札のモンスターのレベルも上がるだと！？

俺の通常召喚を封じる気か！

『其(それがし)をここまで追い詰めるとはな…。
中々の実力を持っている様だが…、
お主の進撃もここまでよ…。』

「何だと!?どう言う事だ!」

『見せてくれよう…其(それがし)自身の刃の切れ味を…!』

…其(それがし)自身だと?峠は一体何を言っている!?

『叩き切る…!跡形も残さずにな!!

其(それがし)は水準5の機甲忍者　フロストと、
機甲忍者　ブラインドを共鳴!!

2体の魔物で、共鳴回線を構築!!

闇夜に佇みし荒ぶる影よ、
戦渦を飛び交い、幾兵を赤き影と成せ!!

重複召喚!!出でよ其(それがし)の分身、?12!

鮮血に塗(まみ)れし忍、
機甲忍者　クリムゾン・シャドー！！』

峠のフィールドの2体の忍者が、渦に飛び込むと、

そこから、赤い十字手裏剣が出現した。

そして、たちまち赤い甲冑に仮面を纏った忍者に姿を変え、

赤い長髪をなびかせながら、刀を一振りした。

そして何故か、峠の手に数字が浮かび上がって来たぞ？

あの数字は一体何だ？

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー

ＡＴＫ２４００

ＯＲＵ　０↓２

『更に、水準5となった機甲忍者　エアーを墓地に送り、

装備魔法　紅桜(べにざくら)を、クリムゾン・シャドーに装備！

この札は、手札の水準5以上の魔物1体を墓地に送る事で、

自分の場の戦士族の魔物に装備出来るでゴサル！！』

クリムゾン・シャドーは、
元から持っていた刀から、
紅色の刀に持ち替えた。

『覚悟せよ！其自身（それがし）で、
茨木童子を攻撃！

必殺抜刀・紅時雨！！』

クリムゾン・シャドー　は装備した紅桜を構えると、
その刹那、目にも止まらない速さで、
茨木童子に幾数もの斬撃を見舞った。

「ぐうっ…っがぁっ！？」

三沢　ＬＰ２６００→２５００

「くっ…な、何だ！？

全身に…傷口が…！」

俺の体を見ると、茨木童子が斬られた箇所と同じ所に傷口があった。

幾ら気を強く持っても、傷口は一向に痣にはならなかった…。
これは幻覚なんて物じゃないぞ！
「ど、どう…いう事だ峠！
こ…れは幻覚じゃ…あ無かっ…たのか！？」
すると、峠は不適に笑いだした。
『フッフッフ…お主に言った筈だ…。　中には本当に傷に変わる代物があるとな…。
其自身（それがし）が正にそれよ…。』
くっ…たった１００ポイントで、
これだけの傷を負ったとなると…。
あのモンスターの攻撃をまともに受ける訳にはいかなくなったな…。
『更に、装備魔法　紅桜の効果を発動！
装備モンスターが戦闘を行った怪我工程の終了後、
発動時に墓地に送った魔物の水準１つにつき、装備した魔物の攻

撃力を１００数値上げるのでゴサル！

発動時に墓地へ送った機甲忍者　エアーの水準は５…。

よって、クリムゾン・シャドーの攻撃力を５００数値上げる！！』

紅桜が妖し気に輝き出し、
クリムゾン・シャドーに力を与えた。

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー

ＡＴＫ２４００→２９００

紅桜（べにざくら）

装備魔法

手札のレベル５以上のモンスターを墓地に送り、
このカードを戦士族に装備出来る。

装備モンスターが戦闘を行ったダメージステップ終了時に、
装備モンスターの攻撃力を、
発動時に墓地へ送ったモンスターのレベル×１００ポイントアップする。

「だが俺も、茨木童子の効果発動！
茨木童子がフィールドから離れた時、
このカードの効果で魔法・罠ゾーンにセットしたモンスター1体
を特殊召喚する！
フィールドに舞い戻れ！牛頭鬼！！」

牛頭鬼
ＡＴＫ１７００

『守りを固めて来たか…。
だが、幾ら魔物を並べた所で、
其(それがし)を倒す事は出来んぞ！』

「どうかな…これが君を倒す勝利の方程式へとなるんだぜ？」

『ほお…ならば、やってみせよ！
これで、其(それがし)の番を終えるでゴサル！』

「俺のターン…。」

レベル増幅Ｄ地区がある以上、
俺が通常召喚可能なモンスターは、レベル３以下のみ…。
今の手札には、方程式の解になり得る物は無い…。
ならば、このドローで引き当てるしかない！
十代や塔也達の様に、自分のデッキを信じろ！
そうすれば…！！

「…ッ、ドロー！」

三沢　ＬＰ２５００
手札２枚
モンスターゾーン
牛頭鬼
セットモンスター×１
（酒呑童子）
魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

峠　ＬＰ２４００

手札０枚

モンスターゾーン

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー

（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

紅桜（＋？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー）

芳香の狼煙

デッキは…応えてくれる！！

「俺は牛頭鬼の効果を発動！

デッキからマツリ火を墓地に送り、

マツリ火の効果発動だ！

このカードを墓地より除外する事で、自分フィールドに火の魂トークン2体を特殊召喚出来る。」

火の魂トークン×2
ＡＴＫ１０００

マツリ火
レベル４　炎属性　アンデット族
ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００
このカードを墓地より除外する事で、自分フィールドに火の魂トークン
（レベル３　炎属性　アンデット族　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００）
2体を特殊召喚出来る。

火の魂トークンは、アンデット族以外のアドバンス召喚の為のリリースには出来ない。

「行くぞ、峠！俺は火の魂トークン2体をリリース！」

『2体の魔物を生贄とな！？

強力な魔物を召喚する気でゴサルか！？』

「君からは、忍者の持つ刃の切れ味を教えられたな…。

だったら今度は、俺が妖怪達の持つ畏れを教える番だ！！

地獄に住まいし鬼神よ、

現世にて、赴くままに力を奮え！

地獄より降り立て！金剛鬼神、召来！！」

火の魂トークンが天に昇って行くと、

たちまち暗雲が発生し、

そこから怒号に満ちた表情をした鎧を纏った鬼が、

地面を砕く様な勢いで、降り立った。

金剛鬼神

レベル８→９

ＡＴＫ３０００

『攻撃力３０００とな！？

何と凄まじい覇気を放つ妖(あやかし)よ…！』

「そして速攻魔法、異次元からの埋葬を発動！

この効果で除外されたモンスターを3体まで持ち主の墓地に戻す！

俺は自分の除外ゾーンから、
亡者魂(もうじゃだま)と茨木童子、そしてマツリ火を墓地に戻し、
更に馬頭鬼の効果発動だ！

このカードを墓地より除外し、
墓地のアンデット族1体を特殊召喚する！

再びフィールドに黄泉帰れ！茨木童子！！」

茨木童子

レベル6→7

ＡＴＫ２３００

異次元からの埋葬

速攻魔法

除外されたモンスターを3体まで持ち主の墓地に戻す。

『くっ…！またそやつかっ！！』

「何度でもフィールドに舞い戻って来るのが、アンデットの強みさ。

墓地から舞い戻った茨木童子の効果発動だ！

自分フィールドのアンデット族は3体…。

よって、１２００ポイントのダメージだ！

再び放て！鬼太鼓（おんでこ）！！」

茨木童子は再び雷の球の発生させると、

峠に炸裂させた。

『ぬうぅお！！…っくう、おのれ…！』

峠　ＬＰ２４００→１２００

「行くぞ峠！金剛鬼神で、クリムゾン・シャドーを攻撃！！

鬼神剛烈衝！！」

金剛鬼神はクリムゾン・シャドーに飛びかかり、
凄まじい勢いを付けた拳で殴り付けた。

『ぐがっ…！…っく！！』

峠　ＬＰ１２００→１１００

『おのれ…やってくれたなお主！
だが、其(それがし)は倒れん！！
其(それがし)自身の効果発動！！
其(それがし)が破壊される時、
共鳴機体１つを使用する事で、
破壊を免れるでゴサル！！

機甲忍法　シャドー・バック！！』

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー
ＯＲＵ　２→１

オーバー・レイ・ユニットの光が影に同化すると、
そこから、破壊した筈のクリムゾン・シャドーが飛び出した。

「成る程…そいつの効果は破壊無効化か！」

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー

ランク５　地属性　戦士族／エクシーズ

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１７００

レベル５×２体

このカードが破壊される時、
このカードのオーバー・レイ・ユニット１つ使用する事で、
その破壊を無効に出来る。

『左様…そして紅桜の効果を連鎖発動！
攻撃力を５００数値上げる！！』

「それは待って貰おうか！
俺は罠カード、あまのじゃくの呪いをチェーン発動！！」

『な、何！？』

「このカードは発動したターンのエンドフェイズまで、
モンスターの攻守をアップまたはダウンする効果を入れ替える！」

あまのじゃくの呪い
通常罠
このターンのエンドフェイズまで、
モンスターの攻守をアップまたはダウンする効果を入れ替える。

あまのじゃくの呪いによって、
紅桜の妖力が、逆にクリムゾン・シャドーを苦しめたぞ。

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー
ＡＴＫ２９００↓２４００

『だ…だが、それでも攻撃力は茨木童子よりも上だ！
お主は、もう追撃する事は叶わぬ！！』

「それはどうかな?金剛鬼神には攻撃した後に、相手フィールドにモンスターが存在する時、

2回目の攻撃が可能となる!」

『な、何と!?2回目の攻撃とな!?』

金剛鬼神

レベル8　地属性　アンデット族

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２５００

このカードが攻撃した後に、相手フィールドにモンスターが存在する時、

2回目の攻撃が出来る。

「再びクリムゾン・シャドーに攻撃だ!金剛鬼神!!

鬼神剛烈衝!!」

『追撃はさせぬ!!墓地より機甲忍者　アクアの効果を発動!

アクアを墓地より除外する事で、

相手の魔物の攻撃を無効にするでゴサル！！』

この機会は逃しはしない！

「なら俺はカウンター罠、闇魔の宣告をチェーン発動！

相手が墓地から、または墓地を対象とした魔法・罠・モンスター効果を発動した時、

そのカードの発動と効果を無効にする！！」

『な、何と！これではアクアの効果が！？』

アクアは金剛鬼神の行く手を阻んだが、

闇から出現した闇魔大王が、アクアに裁きを下した。

機甲忍者　アクア

レベル４　水属性　戦士族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１６００

相手モンスターの攻撃時、

このカードを墓地から除外する事で、

そのモンスターの攻撃を無効にする。

闇魔の宣告

カウンター罠

相手が墓地から、または墓地を対象とした魔法・罠・モンスター効果を発動した時に発動出来る。

そのカードの発動と効果を無効にする

「バトル続行だ！行け、金剛鬼神！！鬼神剛烈衝！！」

『ぐ…ぬおっ！』

峠　ＬＰ１１００→５００

『くっ、再び其自身（それがし）の効果発動！機甲忍法　シャドー・バック！！』

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー
ＯＲＵ　１→０

「そして紅桜の効果もチェーン発動するが、
あまのじゃくの呪いにより、その効果は逆作用に働く！」

？１２　機甲忍者　クリムゾン・シャドー
ＡＴＫ２４００→１９００

『お、おのれ…！』

「まだまだ行くぞ！茨木童子で、
クリムゾン・シャドーを攻撃！！
鋏断（きょうだん）の一太刀！！」

ユニットを使い果たしたクリムゾン・シャドーは、
成す術も無く、茨木童子の繰り出す斬撃を２度受けて、その身は
崩れ去った。

『ぬうぅぉ…っあ！！』

峠　ＬＰ５００→１００

「これで方程式の解へと辿り着く！
牛頭鬼でダイレクトアタックだ！
行け！獄落槌！！」

『ぐおぉぉぉっ！！』

峠　ＬＰ５００→０

デュエルが終わると、峠が言った通りに、たちまち岩が崩れ去った。

「う…うおぉぉっ！！」

な、何だ！？峠が見る見るうちに老化していくぞ！？

『む、無念…。其(それがし)の敗北でゴサル…。　くっ…覚えておれ！』

何処からか声が聞こえた後、

クリムゾン・シャドーのカードが独りでに宙を飛んでいって後に峠が倒れた…。

あれは一体、何なんだったんだ?

『ほお…小僧、中々の畏を秘めたデッキを持っている様だのう…。』

…ッ何だ!?さっきとは別の声が…!

辺りを見回すと、

さっきは無かった筈の光るカードが落ちていたぞ。

『そして、死合って尚折れておらぬその強靭な魂…気に入ったぞ小僧。
お前、儂の依り代となれ!!』

「うあぁぁっ!!…くっ!何だこれは!?

あ、頭が…割れ…る。」

『…フフフ、これで儂もやっと狩りが出来ると言う物よ…。

フフフ、ハーハッハッー!!』

決闘活劇！　忍者　ＶＳ　妖怪（後書き）

俺は十代と万丈目の３人で明日香ファンクラブの連中を捜索したが、

成果はサッパリだったぜ…。

そして翌日、俺はオベリスク・ブルーのツァンに呼び止められたんだ。

「ねぇ…ボクにもアンタ達の犯人捜しを手伝わせてくれない？」

俺は断ろうとすると、ツァンはデュエルの実力を見てから決めろ…っと食い下がってきたんだ。

「だったら、ボクの実力を試して見てよ！

ボクが勝ったら、アンタ達の犯人捜しに協力させて貰うんだから！！」

次回、「武将を束ねし少女」

…何だ！？この威圧感は？

ツァンから感じるってのか！？

武将を束ねし少女（前書き）

お待たせしました！

第２７話です。

今回はＴＦ４からあのキャラが登場しますよ。

翔ｓｉｄｅ

アニキと塔也君…昨日も帰りが遅かったな…。
部屋に帰って来た時には2人共、
随分くたびれていたみたいだったけど…。

一体何をしてたのかな?

そう思っていたら、宝山君が起きたみたいだ。

「ふぁ～…おはよう翔、今日もいい天気だね。」

「おはよう宝山君。怪我の具合はどうッスか?」

「そうだねぇ…こうやって歩ける位は治ってきている…かな。
まだ所々、体の節々が痛むけどね…。」

「そうなんだ…早く怪我が回復するといいッスね!」

「うん、そうだね翔。また、君達と一緒に登校がしたいよ。」

気になると言えば、宝山君の事もだ…。

一昨日に宝山君の怪我を見たけど、
あの辺りはそんな危ない場所じゃないのに…。

宝山君も、その辺の話はアニキと塔也君にしか話していないし…。

あと…昨日、お見舞いに来てくれた三沢君も、何だか様子がおかしかったな…。

上手く言えないけど…なんかよそよそしいって言うか…。

最初、僕達の事を知らなかったみたいな様子だったし…。

もお～！何だか気になる事が沢山あり過ぎるよ～！！

「…う…翔…翔！聞こえているかい！？」

宝山君の声を聞いて、僕は我に帰った。

「…ッ！ゴメンね宝山君。
ちょっとボ～っとしてて…何かな？」

「ほら、フォリナさんに電話を掛けきゃ…。

昨日、フォリナさんが翔にお願いしていた…って、
君が話していたじゃないか。」

「あっ、そうだった！フォリナさんから頼まれたんだっけ…。」

僕は慌ててフォリナさんに電話を掛けた。

「…もしもし、フォリナさん？　翔だけど…。」

「グットモーニング！ショウ君。
トウヤは起きて…マセンヨネ…。」

「…うん、今もアニキと一緒にグッスリ寝てるよ。」

「本当に良く寝てるよね、２人共…。」

電話越しでフォリナさんが、溜め息をしていたのが聞こえたよ。

「分かりマシタ…！ショウ君、携帯をトウヤの枕元に置いて下サーイ！

置いたら、すかさず部屋の外に出て下サイネ。」

「部屋を…？何でッスか？」

「…部屋から出ないと、大変な事になりマスヨ。…フフフ。」

ヒィッ！何だか怖いよフォリナさん！

「翔…フォリナさんは、何をするって言っていたんだい？」

「…携帯を塔也君の枕元に置いて、だって…。
後、部屋の外に出て…って。」

「外に？フォリナさんは何をするんだろう？」

「分からないけど、部屋から出ていた方がいい気がするッス…。」

僕は携帯を塔也君の枕元に置いてから、
宝山君と一緒に部屋から出てしばらくした時だったな…。

部屋の中から騒々しい音が鳴り響いて来たんだ。

「うわっ！な、何この音！？
外まで響いて来るよ！！」

「外に出ろって、この事だったんだね…。

確かに部屋にいたんじゃあ、大変な事になっていたよ…。」

こんなの近くで聞いていたら、間違い無く鼓膜が破れちゃうよ…。

「うわぁっ！！…何なんだよこの音！？」

「どわぁ！！…こ、これを聞くのは、始業式の日以来だ…ぜ…。」

流石にこの音が効いたのか、
アニキは勿論、塔也君までビックリして飛び起きたみたいだよ。

凄いや、フォリナさん。

「グッドモーニング、トウヤ。

フフフ、目が覚めマーシタカ？」

「…フォリナか。まさか、お前からコイツを見舞う羽目になるなんてな…。」

「自分で起きれないトウヤがいけないんデースヨ！
トウヤが自分で起きれるまで、毎朝やりますカラネ！」

「うへぇ、マジか…。」

「塔也君、さっきの騒音は一体何？」

僕は思わず塔也君に聞いてみた。

「…ああ、お玉でフライパンを打ち鳴らしただけだよ。

俺と親父も朝に弱くてな…。
毎朝、お袋か葵がコイツをやって、目が覚めたもんだぜ…。」

「君の家は、随分と変わった目覚まし方法があるんだね…。」

塔也君が当然の事の様に言ったから、宝山君は呆気に取られているよ…。

これは絶対、目覚ましってレベルじゃないよ…。

「…まぁな、だが俺には、コイツの音が一番いい目覚ましなんだよな…。」

「フフ…アカデミアで会いマショウネ、トウヤ。
では、シーユー！」

そう言ってから、フォリナさんは電話を切った。

「うぅ…塔也、さっき聞いたけど、
これを毎朝聞かされるのかよ…。
まだ頭がガンガンするぜ…。」

「ほら2人共、起きたのなら早く登校する準備をしなきゃダメだよ！」

「…おぅ。」

「…ああ、そうだな。」

なんか2人共、少しフラフラしてる様な気が…。

「じゃあ、行って来るよ宝山君。

ほら、アニキと塔也君も行くよ！」

「…ま、待てって翔！まださっきの音が頭に残ってるんだって！」

「あ～…久々に効いたわ～。

じゃあ宝山、留守番宜しくな。」

「うん、行ってらっしゃい３人共。」

翔→塔也ｓｉｄｅ

あ～まだ頭に響いて来るぜ…。

まさか、アカデミアでアレを聞くなんてな…。

フォリナの家に泊まった時でも聞かされたからな…。

その時にお袋にでも教わったんだろうな…。

「え～、クラスの皆さんは既に知っているかもしれませんが…。

最近、アカデミアでは生徒が体調不良で倒れると言った事が続出してます。

クラスのみんな、体調管理には呉々（くれぐれ）も気を付けましょうね。」

朝のホームルームで響先生が、クラスの生徒に注意を呼び掛けた。

体調不良かぁ…実際は明日香ファンクラブの連中が、デュエルで引き起こした物だけどな…。

昨日も十代と万丈目の3人で捜索したが、

被害者は発見出来たが、肝心のファンクラブの連中はと言うと…。

結局見つける事は出来無かった…。

本当、ドコに雲隠れしたんだか…。

そして昼休みになって、

俺は何時ものロビーに向かっている時だった。

「そこのアンタ、ちょっといい？」

不意に声がしたので辺りを見回すと、

ピンク色の髪に、ボブと言う髪型をしたオベリスク・ブルーの女子生徒がいた。

…え～と、何て言う名前だっけ？

「…え～と、もしかして俺に言っているのか？」

「そう、アンタに言ったの。」

「…悪いが、アンタの名前は？」

すると、その女子生徒はぶっきらぼうに自己紹介する。

「…ボクはツァン・ディレ。

呼びにくかったら、ツァンって呼んだっていいから…。」

「そうか、ツァンって言うのか…。」

「な！？馴れ馴れしく呼ばないでよ！」

名前で呼ぶと、ツァンは慌てて叫んできた。

…俺が何したってんだ。

「おいおい…ソッチがそう呼べって言ったんじゃねえか。」

「う、うるさーい！！アンタは黙っててよ！」

「…まあいいか、俺の名前は…。」

「知ってるわ、雲雀　塔也…って言うんでしょ、アンタ。」

「あ…ああ、知ってたんだな…俺の名前。
俺の事も塔也って呼んでくれていいぜ。」

「なっ！？ま、まあ考えてあげない事もないわ。」

ツァンは、俺から目線を逸らしながら応えた。

「…で、俺に何の用だツァン？

俺、今からロビーに行く所なんだが…。」

「そ、そうよ！ボクはアンタに用があったんだったわ！

一昨日、ブルー寮近くの湖畔で偶然アンタ達が話してたのを聞いたんだけど…。

生徒が体調不良で倒れたのは、
明日香のファンクラブが原因って本当なの!?」

一昨日って言うと、増川をブルー寮に担いだ時か…。

「…ツァン、お前はそれを知ってどうするつもりだ?」

「そんなの決まっているよ!

ボクもアンタ達と一緒に犯人を探すんだ!!

体調不良で倒れた生徒の中には、

ボクの友達もいるんだ!

もし犯人がいるんなら、
ボクがとっちめてやるんだ!!」

「ダメだ!アイツらはお前が思っている以上にヤバい連中なんだ!!」

俺自身こそ、まだ危険な目には遭ってないが…。

ツァンが下手に連中に首を突っ込んだら、
犠牲者になる可能性がある以上、

連れて行く訳にゃあ、いかねぇよな…。

「なんでさ!?アンタ達の話だと、
ソイツらをデュエルで懲らしめているんでしょ!?
ボクもデュエルの腕なら自信が…!」

ツァンは言い切る前に、
少し考え出した。

そして、ツァンは俺に唐突な提案を出してきた。

「そうだ…だったらアンタ、ボクの実力を試してよ!
ボクが勝ったら、アンタ達に協力させて貰うから!!」

「お、おい!ちょっと待ってってツァン!!
何と言われても俺は…。」

いや、待てよ…下手にツァンを説得させるよりも、
デュエルで勝つ方が手っ取り早いかもしれねぇな…。

それに、ツァンの表情は真剣だ…。

こういう奴には、半端な言葉よりも、確固な実力を示す方がいい。

「…フゥ、分かったよツァン。

けど、俺が勝ったら、俺の言う事に従って貰うぞ。」

「…分かった、ボクもデュエリストだ…。約束は守るよ！」

「いい返事だ、ツァン！

なら、早くデュエルを始めるか！！」

「このデュエル…絶対にボクが勝つんだから！！」

「行くぜ、ツァン！！」

「「デュエル！！」」

ツァン　ＬＰ４０００

塔也　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能によって、
先攻はツァンからだ。

「先攻は貰うよ…。　ボクのターン、ドロー！
ボクは永続魔法、六武衆の結束を発動し、
六武衆－ザンジを召喚！」

ツァンのフィールドに　黄色い甲冑を纏った武士が、
光の薙刀を構えて推参した。

六武衆－ザンジ
ＡＴＫ１８００

「六武衆だと！？
もしかして、ツァンのデッキは六武衆デッキか！！」

「その通りだよ。
気を付けなよ、アンタ…。
ボクのデッキは使い方次第じゃあ、
アンタの友達が使うＨＥＲＯデッキにだって、勝っちゃうんだから！」

ツァンは自信満々と言い放った。
確かに六武衆はＨＥＲＯとは違って、
１体でも安定した攻守を持つモンスターが多い上に、
徒党を組まれたとなると、
更に厄介さが増す相手だ。

「更にザンジが召喚に成功した事で、
六武衆の結束の効果で、
このカードに武士道カウンターを１つ乗せるよ。」

六武衆の結束
武士道カウンター
０→１

「ボクはカードを1枚伏せて、ターンエンド。さ、アンタのターンだよ。」

「ああ、行くぜ。俺のターン、ドロー。」

ツァン　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
六武衆ーザンジ
魔法・罠ゾーン
六武衆の結束
伏せカード×１

塔也　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

さて…どうしたもんかな。

ツァンのフィールドにあまり六武衆を残したくはないんだよな…。

モタモタしてると、殿様がやって来ちまうからな。

「俺は永続魔法、残留雲（ダスト・クラウド）を発動し、
更に永続魔法、召喚雲（サモン・クラウド）を発動だ。」

「その2枚は…！…どれも、アンタのデッキの核を担うカードね。」

ツァンは思わず、目を大きく見開いたが、
直ぐに落ち着きを取り戻した。

「まぁな、俺は召喚雲（サモン・クラウド）の効果発動だ。

自分フィールドにモンスターが存在しない場合、
メインフェイズに1度、
自分の手札または墓地から、
レベル4以下の雲魔物1体を特殊召喚出来るぜ。

俺は手札から雲魔物－ミストルティを攻撃表示で特殊召喚だ。」

雲魔物－ミストルティ
ＡＴＫ１８００

「俺のフィールドに雲魔物が召喚・特殊召喚に成功した事で、
残留雲（ダスト・クラウド）の効果発動だ。
このカードにフォッグカウンターを１つ乗せるぜ。」

残留雲（ダスト・クラウド）
ＦＣ　０→１

「更に雲魔物－タービュランスを攻撃表示で召喚。
そして、タービュランスと残留雲（ダスト・クラウド）の効果により、
フォッグカウンターが追加するぜ。」

雲魔物－タービュランス
ＦＣ　０→２

残留雲（ダスト・クラウド）
ＦＣ　１→２

「よし、バトルだ！ミストルティで、ザンジを攻撃！！」

「でもミストルティの攻撃力は、ザンジと同じなんだけど？
…ザンジと相討ちでもするつもり？」

ツァンが疑問を感じて俺に尋ねた。

まあ、そうなるわな…。

「そりゃ、どうだかな？
ミストルティには、

雲魔物と戦闘を行うモンスターの攻撃力を、ダメージステップが終了するまで、
フィールドにあるフォッグカウンター１つにつき、
２００ポイントダウンさせる効果があるんだぜ？」

「じ、じゃあザンジの攻撃力が…！」

「今はフォッグカウンターが４つだから、
８００ポイントダウンだな。」

六武衆ーザンジ
ＡＴＫ１８００→１０００

「行け、ミストルティ！
ライフレス・ベール！！」

ザンジはミストルティの濃霧で包み込まれ、
倒れてしまった。

「うぅっ…こんなのまだまだ軽い軽い。」

ツァン　ＬＰ４０００→３２００

「まだ行くぜ、更にタービュランスでダイレクトアタックだ！」

タービュランスは、ツァンに突風を見舞ったぜ。

「くっ…まだまだへっちゃらだよ。」

ツァン　ＬＰ３２００→２４００

「俺はこれでターンエンドだ。」

「じゃあ、ボクのターンだね。ドロー！」

ツァン　ＬＰ２４００
手札４枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
六武衆の結束
伏せカード×１

塔也　ＬＰ４０００
手札２枚
モンスターゾーン
雲魔物－ミストルティ
雲魔物－ターピュランス
（ＦＣ×２）

魔法・罠ゾーン

召喚雲（サモン・クラウド）

残留雲（ダスト・クラウド）

（ＦＣ×２）

「ボクは六武衆ー カモンを攻撃表示で召喚だ！

そして、六武衆の結束の効果で武士道カウンターを１つ乗せるよ。」

ツァンのフィールドに、赤い甲冑にダイナマイトを常備させた武士が推参したぜ。

六武衆ー カモン

ＡＴＫ１５００

六武衆の結束

武士道カウンター

１↓２

「ボクは六武衆の結束の効果を発動だ！
武士道カウンターの乗ったこのカードを墓地に送る事で、その時に乗っていた武士道カウンターの数だけ、カードをドロー出来るよ！」

「武士道カウンターは2つ…。
…って事は、2枚ドローか！」

六武衆の結束
永続魔法

自分フィールドに六武衆が召喚・特殊召喚に成功した時、このカードに武士道カウンターを1つ乗せる。

武士道カウンターの乗ったこのカードを墓地に送る事で、その時に乗っていた武士道カウンターの数だけ、カードをドロー出来る。

「武士道カウンターは2つ乗っていたから、
2枚ドローするよ！

…フーン、このカードが来たか…。

ねぇ…アンタ。」

ツァンがニヤリとしながら俺に尋ねて来た。

な、何か嫌な予感がして来たぞ？

「な…何だよ、ツァン。」

「このターンで…決めちゃうよ？」

「このターンで俺を倒すだと！？

何言ってるんだよツァン！？」

「なら、何か手を打つ事だね！

じゃないと、本当にこのターンで決めちゃうから！！」

おいおい…まさか、もう引き当てたのか！？

「行くよ！ボクは手札から六武衆の師範を特殊召喚するよ！」

ツァンのフィールドに、
威厳を放った老武士が推参した。

六武衆の師範
ＡＴＫ２１００

「師範は自分フィールドに六武衆がいる時、
手札から特殊召喚出来るよ！
そしてボクは、カモンの効果発動だ！
カモン以外の六武衆がいる時、
１ターンに１度、表側表示の魔法・罠カードを破壊するよ！
ボクが破壊するのは、アンタの残留雲（ダスト・クラウド）だ！！」

六武衆ーカモン
レベル３　炎属性　戦士族
ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１０００
自分フィールドにカモン以外の六武衆がいる時、
１ターンに１度、表側表示の魔法・罠カードを破壊する。

この効果を発動した時、
このカードは攻撃出来ない。
このカードが破壊される時、
代わりにこのカード以外の六武衆を破壊出来る。

六武衆の師範
レベル５　地属性　戦士族
ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ８００
自分フィールドに六武衆がいる時、
手札から特殊召喚出来る。
このカードが相手のカード効果で破壊された時、
自分の墓地の六武衆１体を手札に加える。
六武衆の師範は自分フィールドに１体しか表側表示で存在出来ない。

「何ぃ～!?ちょ、ちょっと待てって!!」

「ダメ、待たない。派手にやって、カモン!屋倉崩し!!」

カモンは、甲冑に取り付いたダイナマイトを残留雲（ダスト・クラウド）に投げつけて、爆破させた。

「ヤバい！残留雲（ダスト・クラウド）がっ！」

「言っておくけど、まだまだボクの反撃は終わらないからね！

ボクのフィールドに六武衆が2体以上いる時、

このカードは手札から特殊召喚出来る！

来て、大将軍　紫炎！！」

カモンと師範が距離を開けて跪くと、

その間から紫炎が、覇気を纏いながらゆっくりと歩いて来た。

大将軍　紫炎

ＡＴＫ２５００

「フフーン、もうボクが勝ったも同然だね。」

予感的中ってか…。

紫炎まで出て来たのはかなりマズイな…オイ。

『…やれやれ、こやつは我が輩の見込み違いだった…か。』

…ッ何だ！今の威圧感のある声は！？

ツァンの方から聞こえてきた様な気が…。

「…な、何よアンタ！？
ボクの顔をジ～ッと見ちゃって…。
何？ボクの顔に何か付いているの？。」

「え？ああ、悪い悪い。
ちょっと、ボ～ッとしてたわ。」

…ツァンじゃないのか？
だとしたら、一体誰が言ったんだ？

「アンタって奴は、全く…。

まあ…気持ちは分からなくもないわ。

アンタのフィールドには、
ボクの紫炎達の攻撃を防ぐ術が何もないんだからね。」

「…そう思うんだったら、
攻撃を仕掛けてみたらどうだ？」

すると、ツァンはムッとした表情になっていった。

「…フーン、アンタがそう言うんだったら…。
望み通りに総攻撃してあげる！

まずは師範で、ターゲットを攻撃！！」

「この瞬間、ミストルティの効果発動だ！

フィールドにフォッグカウンターは２つだから、
師範の攻撃力を４００ポイントダウンさせるぜ！」

六武衆の師範

ＡＴＫ２１００↓１７００

「これ位、どうって事ないよ！

構わずに行って、師範！夜光一閃！！」

師範はタービュランスに一瞬で近付くと、
タービュランスを横一文字に斬り裂いた。

「どわぁっ！」

塔也　ＬＰ４０００→３１００

が、タービュランスは直ぐに元の姿に戻っていき、
師範の攻撃力も元に戻った。

六武衆の師範
ＡＴＫ１７００→２１００

「へへ…タービュランスは戦闘じゃあ破壊されねぇぜ。」

「無駄無駄、今のボクのフィールドじゃあ、
戦闘破壊されなくても、
攻撃力８００なんて壁にもならないよ！
続けて紫炎で、タービュランスを攻撃！
無慈悲なる刃の一撃を受けて！魔王業炎斬！！」

流石にコイツも喰らってたら、
一溜まりもねぇぜ！

「俺は手札から雲魔物－コットン・ボールを墓地に送って、効果発動だ！

このカードを墓地に送る事で、
相手モンスター1体の攻撃を無効にするぜ！」

紫炎は業火を纏った刀を、
タービュランスに斬り掛かるが、
コットン・ボールが紫炎の刀にぶつかり、勢いを止めたぜ。

「その後、相手フィールドのモンスターの数だけ、
雲魔物トークンを守備表示で特殊召喚する！

ツァンのフィールドにはモンスターは3体いる。

よって、雲魔物トークンを3体を守備表示で特殊召喚するぜ！」

雲魔物トークン×3

ＤＥＦ０

「…か、可愛い。」

雲魔物トークンを見たツァンは、何か呟いていた。

「…えっ？今何て言ったんだ、ツァン？」

「な、何でもないよ！

へ、へぇ…手札にそんなカードを持ってたんだ…。」

俺が尋ねると、ツァンは慌てて誤魔化してたが…。

バレバレだぜ…ツァン。

「けどね…安心するのは、まだ早いよ！

ボクは師範をリリースして、手札から速攻魔法、六武衆の理（ことわり）を発動するよ！

自分フィールドに表側表示で存在する六武衆１体をリリースする事で発動出来て、　自分の墓地から六武衆１体を特殊召喚するよ！

ボクはリリースした師範を特殊召喚だ！」

六武衆の師範

ＡＴＫ２１００

六武衆の理（ことわり）

速攻魔法

自分フィールドの表側表示の六武衆１体をリリースする事で発動出来る。

自分の墓地から六武衆１体を特殊召喚する。

成る程な…波状攻撃で決めようって腹か…。

「再び師範でタービュランスを攻撃！　夜光一閃！！」

六武衆の師範

ＡＴＫ２１００→１７００

ミストルティは師範の行く手を濃霧で阻むが、物ともせずに、タービュランスを再び斬り払った。

「くっ！」

塔也　ＬＰ３１００→２７００

六武衆の師範

ＡＴＫ１７００→２１００

「フフ…この瞬間、速攻魔法、リベンジ・アタックを発動だ！

自分フィールドのモンスターが、

相手モンスターを戦闘で破壊出来なかった場合、

攻撃モンスターの攻撃力を１０００ポイントアップして、

更にもう１度攻撃が出来る様になるよ！」

師範に再び闘気が漲り、

タービュランスに向かって刀を構えて来たぜ。

六武衆の師範

ＡＴＫ２１００→３１００

リベンジ・アタック

速攻魔法

自分フィールドのモンスターが、
相手モンスターを戦闘で破壊出来なかった場合、
攻撃モンスターの攻撃力を１０００ポイントアップして、
更にもう１度攻撃が出来る

「な、何じゃそりゃ～！！
また師範の攻撃が、俺に襲って来るってか！！」

「そう言う事…。師範！もう１度だけ、タービュランスを斬り込んで！！」

「くっ！俺はミストルティの効果発動だ！」

ミストルティがまた師範の視界を阻まむが、
闘気に漲っている師範には、
全く堪えた様子が無いぜ…。

六武衆の師範
ＡＴＫ３１００→２７００

「残～念！もうそれ位じゃあ、
師範の攻撃を緩める事も出来ないよ！
受けて、夜光一閃！！」

「ぐおぉっ！！」

塔也　ＬＰ２７００→８００

ＬＰが残り８００って…！
もし…紫炎の攻撃を止めてなかったら、
俺の負けじゃねぇか！！

「あ～、危なかった…。
カモンは効果を発動したら、攻撃は出来ねぇんだったよなツァン？」

「アンタの言う通りだよ…。

あ～あ、残念…。

このターンで決めるつもりだったのにな…。

ボクはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

俺が一息ついていると、

ツァンが溜め息混じりに言った。

やってくれたもんだぜ…。

だが…デュエルはまだまだこっからだぜツァン！！

武将を束ねし少女（後書き）

俺は序盤にも関わらず、
ツァンの猛攻を受けて、
かなりヤバい状況に陥ってしまった。

「もう、アンタにはボクに反撃出来る術は無いんじゃない？
諦めて降参でもしたら？」

「冗談だろ？誰が降参なんてするかよ。」

それでも俺は果敢にツァンを攻める事で、
ようやく勝機が見えて来たのだが…。

「見せてあげるよ…。ボクの渾身の一手を！」

次回、「絶体絶命！！　空閉の陣！」

嘘だろ！？まるで勝機が見えてこねぇだと…！？

絶体絶命！　空閉の陣！！（前書き）

大変お待たせしました！

第２８話です。

今回の話で黒幕のナンバーズカードを持ったデュエリストが判明します。

絶体絶命！　空閉の陣！！

フォリナｓｉｄｅ

「ハロ～！ジュウダイ君、ショウ君。」

ワタシが声をかけると　２人共、

アグレッシブに応えてくれマーシタヨ。

「あっ、フォリナさん！
こっちこっち！」

「よおっ、フォリナ！

待ってたぜ。」

「お待たせしました！一緒にランチを…。

…ワッツ？トウヤがいませんネ？

…ソレに、ミサワ君も…。」

今日もジュウダイ君達と一緒にランチを食べる、
ってトウヤと約束シマシタノニ…。

「塔也なら、購買でコロッケパン買ったから、
すぐに行くって電話で話していたぜ。」

「三沢君から電話が掛かったけど、また今度って言ってたよ。」

ジュウダイ君とショウ君がワタシに説明してくれマーシタ。

「珍しいデスネ…。ミサワ君がジュイダイ君達のお誘いをキャンセルするナンテ…。

何か用事でもあるのデショウカ…。」

「それが…詳しい事は全く話してくれなかったんだ…。

こんな事って、初めてだよ…。」

ショウ君は俯いてしまいマシタ…。

「そう言えばさフォリナ、
今日は明日香と一緒じゃないんだな。」

「エエ、今日は日直で遅くなると言ってマーシタヨ。」

「そうか…じゃあ、先に食べようぜ？
あまり遅くなる様なら、食いっぱぐれるしさ。」

確かにそうかもしれマセンガ…。

「ダメデスヨ！みんなで一緒でランチを食べる方が、
美味しいデスヨ、ジュウダイ君！！
ワタシ、ちょっとトウヤを捜しに行って来マス！！」

「フォ、フォリナさん！？
どこに行くの！？」

「購買の近くデス！
待ってて下サーイ２人共！
ワタシ、トウヤをスグに連れて来マスカラ！！」

「お、おい！…って行っちまったぜ。」

ワタシはトウヤを捜す為、
ロビーを後にシマシタ。
…全く、ドコに行ったというのデスカ、トウヤ…。

フォリナ↓塔也ｓｉｄｅ

「あっ…そうそう、リベンジ・アタックでアップしていた師範の攻撃力は元に戻るよ。」

六武衆の師範
ＡＴＫ３１００↓２１００

「さぁ…どうするのアンタ？
この状況で反撃の術なんてあるの？
もう諦めたら？」

「冗談だろ？デュエルは始まったばかりだぜ、ツァン。

諦めるにゃあ、早過ぎるってもんだぜ。」

それを聞いたツァンは　一瞬だけ驚いていたが、
また澄まし顔に戻っていった。

「へぇ～…随分と面白い事を言うじゃない、アンタは…。
いいよ…この状況を打開出来るって言うんなら、
ボクに見せてみてよ！」

「勿論だぜ、ツァン！！見てビックリすんなよな！」

…と、ツァンに反発してみたはいい言ってみたものの…。

…全く、どうしたもんかね。

ツァンのフィールドには、
紫炎を含めた強力なモンスター3体に伏せカード2枚か…。

カモンはまだいいとして、

問題は師範と紫炎だな…。

師範は効果で破壊されたら、
自身を含め、六武衆を墓地から回収出来るし、
紫炎に至ってはアイツがいる限り、
俺は１ターンに１度しか魔法・罠を発動出来なくなっちまうからな…。

大将軍　紫炎

レベル７　炎属性　戦士族

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２４００

自分フィールドに六武衆が２体以上存在する時、
手札からこのカードを特殊召喚出来る。

このカードが表側表示で存在する限り、
相手は１ターンに１度しか魔法・罠を発動出来ない。

このカードが破壊される場合、
代わりに自分フィールドに存在する六武衆１体を破壊出来る。

「行くぜ！俺のターン、ドロー！」

ツァン　ＬＰ２４００

手札１枚

モンスターゾーン

六武衆ーカモン

六武衆の師範

大将軍　紫炎

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

塔也　ＬＰ８００

手札２枚

モンスターゾーン

雲魔物ーミストルティ

雲魔物ータービュランス（ＦＣ×２）

雲魔物トークン×３

魔法・罠ゾーン

召喚雲（サモン・クラウド）

正直、ツァンの伏せカードが気になるが、

ここは攻めて行くぜ！

「俺は雲魔物トークンを3体リリースして、

雲魔物ニンバスマンをアドバンス召喚だ！」

3体の雲魔物トークンが合体して、

見る見るうちに巨人の様な雲に変わっていったぜ。

雲魔物ニンバスマン

ＡＴＫ１０００

「モンスターを3体もリリースしておいて、

攻撃力がたったの１０００ってどういう事？

アンタ、もしかしてヤケになった？」

ツァンは呆れた様子で溜め息をついてた。

「そんな訳ねぇよツァン。

ニンバスマンはアドバンス召喚する時、

任意の数だけリリース出来て、

リリースした水属性モンスターの数だけ、

このカードにフォッグカウンターを乗せるんだ。

そして…ニンバスマンの攻撃力は、

フィールドのフォッグカウンター１つにつき、

５００ポイントアップするんだぜ？」

ニンバスマンはフィールドのフォッグカウンターから力を吸収すると、

見る見るうちに巨大になっていったぜ。

雲魔物－ニンバスマン

ＡＴＫ１０００→３５００
ＦＣ　０→３

「嘘！？何で攻撃力が２５００もアップしてるのさ！？
ニンバスマンに乗っているフォッグカウンターは３つでしょ！！」

「落ち着けって…ツァン。
俺はフィールドのフォッグカウンター１つにつき…って言った筈だぜ？
ニンバスマンの他にタービュランスにフォッグカウンターが２つあるだろ？」

ツァンが抗議をしだしたので、
慌てて説明すると、納得してくれたみたいだ。

「成る程…そういう事ね。
しかもアンタのミストルティの効果と合わせたら、
ボクのＬＰを０に出来るって訳ね…。
中々やるじゃない、アンタ。」

「そりゃあ、どうも。
…って訳で行くぜ！
タービュランスでカモンを攻撃！
そしてミストルティの効果だ。
フィールドにはフォッグカウンターは５つあるから、
カモンの攻撃力は１０００ポイントダウンするぜ！」

六武衆ーカモン
ＡＴＫ１５００↓５００

「あうっ！…やってくれたね、アンタ！」

ツァン　ＬＰ２４００↓２１００

伏せカードを発動してない…！
これなら…行けるか！？

「調子に乗っちゃって…。

けどこの瞬間、罠発動！六武派桜花落（おうからく）！！」

な！？モンスターが破壊された時に発動出来る罠だったのか！！

「自分フィールドの六武衆が破壊された時、

相手フィールドのモンスターと魔法・罠を1枚ずつ破壊するよ！

ボクが破壊するのは、

ニンバスマンと召喚雲（サモン・クラウド）だ！」

六武派桜花落（おうからく）

通常罠

自分フィールドの六武衆が破壊された時、

相手フィールドのモンスターと魔法・罠を1枚ずつ破壊する。

「だったら俺は、ニンバスマンをリリースして、

速攻魔法　蒸留水を発動！

水属性1体をリリースして発動し、

リリースしたモンスターよりもレベルの低い水属性1体をデッキから特殊召喚する！

俺は雲魔物－キロスタスを特殊召喚するぜ！」

ニンバスマンが凝縮していって、

猫の姿をした雲に変化していって、瞳を潤わせてツァンを見つめている。

雲魔物－キロスタス

ＡＴＫ９００

「うぅ…！な、何なのアンタ！？　そんな可愛いモンスターを出してどういうつもり！？

ボクの油断を誘おうたってそうはいかないから！！」

ツァンはキロスタスに見つめられて思わず、たじろいでいた。

コイツ、こういう可愛い物が好きなのかね…。

「勿論、そんなつもりでコイツを召喚した訳じゃないぜ？

次はミストルティで師範を攻撃だ！

ミストルティの効果で師範の攻撃力は４００ポイントダウンするぜ！」

六武衆の師範
ＡＴＫ２１００→１７００

「師範はやらせないよ！ボクは罠カード、
不動の紋様を発動！

発動したターンまで、自分フィールドの六武衆または紫炎と名の付くモンスターは、
戦闘またはカード効果では破壊されないよ！」

ミストルティが師範を濃霧で覆う直前に、
師範達の足元に、茶色い六武衆の紋様が浮かんで来たぜ。

不動の紋様
通常罠

自分フィールドの六武衆または紫炎と名の付くモンスターは、
このターンのエンドフェイズまで破壊されない。

「だが、ダメージは受けて貰うぜ。」

「うっ…！でも残念、師範はフィールドに残ったよ！」

ツァン　ＬＰ２１００→２０００

師範が残っちまったか！

だったら、次の手だ！

「俺はメインフェイズ２に移って、
フォッグカウンターを２つ取り除いて、タービュランスの効果発動だ！

コイツのフォッグカウンターを１つ取り除く事で、
デッキまたは墓地から雲魔物－スモーク・ボール１体を特殊召喚出来るぜ。

２つ取り除いたから、スモーク・ボール２体を守備表示で特殊召喚するぜ！」

雲魔物－タービュランス

ＦＣ　２→０

雲魔物－スモーク・ボール×２

ＤＥＦ６００

「そして俺は、レベル４のタービュランスとキロスタスをオーバー・レイ！！

２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

雲海の王者よ、白雲のうねりより出でよ！！

エクシーズ召喚！！浮上せよ、雲魔物－ホワイト・ディック！！」

俺のフィールドにいる２体のモンスターが渦に入ると、

そこから、巨大な鯨の姿をした雲が出現したぜ。

雲魔物－ホワイト・ディック

ＡＴＫ２４００

ＯＲＵ　０↓２

「ホワイト・ディックの効果発動！

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、

相手モンスター1体を墓地に送るぜ！
不動の紋様の効果じゃあ、墓地送りまでは無効に出来ねぇ…だろ？
紫炎を飲み込め！ストーム・バキューム！！」

雲魔物－ホワイト・ディック
ＯＲＵ　2↓1

ホワイト・ディックは、
ユニット1つの光と共に紫炎を飲み込むと、
7つのフォッグカウンターを吹き出したぜ。

「そして、墓地送りにしたモンスターのレベル分、
フィールドのモンスターにフォッグカウンターを乗せる。
紫炎のレベルは7だ。
よって、ミストルティにフォッグカウンターを7つ乗せるぜ！」

雲魔物－ミストルティ
ＦＣ　0↓7

「墓地送りじゃあ、紫炎の効果が使えないよ…。
…やるじゃないアンタ、２段構えの策を用意してたなんて…。」
ツァンは大層驚いてたが、
ドコか嬉しそうな表情を浮かべていたぜ。
まあ、コッチはかなりギリギリだけどな…。
「俺はこれでターンエンドだ。」
伏せカードが無い以上、
ツァンにミストルティとホワイト・ディックが倒されたらヤバいな…。
後は運に任せるしか無い…か。
塔也↓ツァンｓｉｄｅ
「行っくぞー！ボクのターン、ドロー！」
ツァン　ＬＰ２０００

手札２枚

モンスターゾーン

六武衆の師範

魔法・罠ゾーン

伏せカード　無し

塔也　ＬＰ８００

手札０枚

モンスターゾーン

雲魔物－ミストルティ

（ＦＣ×７）

雲魔物－ホワイト・ディック

（ＯＲＵ×１）

雲魔物－スモーク・ボール×２

魔法・罠ゾーン　無し

久し振りだよ、この緊張感は…。

ゆまか紫達（ゆかり）とデュエルした時以来かな…。

ボクはプロデュエリストになる為に、
アカデミアに入学した。

夢の為にボクは人一倍、いや…それ以上に努力したんだ。

けど…クラスのみんなは、
ボクのデュエルは卑怯だの、
今回は運が無かっただのと言って、
ボクの事を煙たがっていた…。

それに嫌気が差したボクは、
人を遠ざける様になった。

そんな時にゆま達と出会って、ボクは孤独じゃなくなった…。

その友達が今、誰かにヒドい目に遭っている。
やっと、その手掛かりを見つけたんだ。

このデュエル、負けるもんか！

「ボクは墓地から紫炎をデッキに戻して、　魔法カード、小波（さざなみ）の紋様を発動！

自分の墓地から六武衆または紫炎と名の付くモンスター1体をデッキに戻して、

そのモンスターの攻撃力が１０００ポイントにつき、
カードを1枚ドローするよ！」

「何！ココでドロー効果のカードを引いたのか！？」

「フフ…紫炎の攻撃力は２５００だ、
ボクはカードを2枚ドロー！」

小波（さざなみ）の紋様

通常魔法

自分の墓地から六武衆または紫炎と名の付くモンスター1体をデッキに戻して、
そのモンスターの攻撃力が１０００ポイントにつき、
カードを1枚ドローする。

来たね、これなら…！

「ボクは六武衆の露払いを攻撃表示で召喚だ！」

ボクのフィールドに厳格な表情をした尼（あま）が現れたよ。

六武衆の露払い

ＡＴＫ１６００

「六武衆の露払いの効果発動だ！
自分フィールド上にこのカード以外に六武衆が存在する時、
自分フィールドの六武衆１体をリリースする事で、
相手フィールドのモンスター１体を破壊するよ！」

六武衆の露払い
レベル３　炎属性　戦士族
ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１０００
自分フィールド上にこのカード以外に六武衆が存在する時、
自分フィールドの六武衆１体をリリースする事で、
相手フィールドのモンスター１体を破壊する。

「おいおい…マジか！？
…ハハッ、本当スゲェなツァン！」
凄い…？ボクとデュエルする人は大抵、
ズルいだのなんだの言って野次を飛ばすって言うのに…。

アンタって奴は全く…。

「随分と余裕そうじゃない、アンタ。
ボクは露払い自身をリリースして、
アンタのミストルティを破壊するよ！
霊華（れいか）の刃！！」

露払いは短刀に自身の魂を宿して、
ミストルティを引き裂いたよ。

「バトル！師範でスモーク・ボールをこ…攻撃だ！
い、行って！夜光一閃！！」

ううっ…あんな可愛いモンスターが引き裂かれる所なんて見たくないよ…。

「…どうしたんだツァン？
何か、落ち込んでないか？」

「な、何でもない！ボクはカードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

「…まあ、いいけどな。
俺のターン、ドロー！」

「このスタンバイフェイズ、
ボクは罠カード、六武派二刀流を発動だ！

自分フィールドに六武衆が攻撃表示で1体しか存在しない時に発動出来て、

相手フィールドにあるカード2枚を手札に戻すよ！」

師範は素早く刀を2度振るって、

ホワイト・ディックとスモーク・ボールを剣圧で吹き飛ばしたよ。
六武派二刀流

通常罠

自分フィールドに六武衆が攻撃表示で1体しか存在しない時に発動出来て、

相手フィールドにあるカード2枚を手札に戻す

「うおぉっ！？俺のフィールドが、がら空きになっちまった～！！」

ツァン　ＬＰ２０００
手札０枚
モンスターゾーン
六武衆の師範
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

塔也　ＬＰ８００
手札２枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「やってくれたぜ、ツァン…。
俺をこんなに追い詰める奴なんて、十代くらいなもんだぜ…。」
アイツ…こんな状況で笑ってる…。

まだ何か、とっておきを隠しているって言うの？

『フッフッフ…あやつ、なかなかどうして…。
骨のある奴の様じゃのう…。』

…ッ！？またこの声だ！

最近、ボクの頭の中に幻聴が聞こえて来て以来、
時々、ボクの意識が途絶える事があるんだ…。
そう言えばアイツ、さっきボクの事を見てたけど…。

まさか、この幻聴が聞こえてた？

「俺は雲魔物ースモーク・ボールを守備表示で召喚だ。」

アイツのフィールドにまたボールみたいな黄色い雲が現れたよ。

雲魔物ースモーク・ボール
ＤＥＦ６００

「俺はカードを1枚伏せる！
これで俺は、ターンエンドだ…。」

「ボクのターン、ドロー！」

ツァン　ＬＰ２０００

手札１枚

モンスターゾーン

六武衆の師範

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

塔也　ＬＰ８００

手札０枚

モンスターゾーン

雲魔物－スモーク・ボール

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「ボクは魔法カード、戦士の生還を発動！
この効果でボクは露払いを手札に加えて、
そのまま攻撃表示で召喚するよ！」

六武衆の露払い
ＡＴＫ１６００

「行っくよー！露払いで、スモーク・ボールをこ、攻撃だ！静魂の一刺し！！」

「悪いな…罠発動、雲散結集（うんさんけっしゅう）！
自分フィールドの雲魔物１体が破壊された時、
デッキからレベル４以下の雲魔物１体を特殊召喚する！
来い、雲魔物－ダスト・レーゼ！」

露払いがスモーク・ボールを刺し払った瞬間、
アイツのフィールドに小さな雲の礫がくっ付いた様なモンスターが現れたよ。

雲魔物－ダスト・レーゼ

ＡＴＫ１８００

「構うもんか！ボクは師範でダスト・レーゼを攻撃！夜光一閃！！」

その時、アイツはニヤリと笑っていた…。

「この瞬間、墓地のニンバスマンを除外して、ダスト・レーゼの効果発動だ！

バトルフェイズ中に１度、
自分フィールドの雲魔物が相手モンスターと戦闘する時、

自分の墓地に存在する雲魔物１体を除外する事で、
そのモンスターの攻撃力を除外したモンスターのレベル１つにつき、

３００ポイントダウンさせる！」

雲魔物－ダスト・レーゼ

レベル４　水属性　悪魔族

ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１２００

バトルフェイズ中に１度、

自分フィールドの雲魔物が相手モンスターと戦闘する時、
自分の墓地に存在する雲魔物１体を除外する事で、 そのモンスターの攻撃力を除外したモンスターのレベル１つにつき、
３００ポイントダウンさせる。

「除外したニンバスマンのレベルは５だ！
よって、師範の攻撃力は１５００ポイントダウンするぜ！
行くぜ！ミスト・コキュート！！」

ダスト・レーゼが師範に、霧の礫を纏わり憑かせてきたよ。

六武衆の師範
ＡＴＫ２１００→６００

「師範を迎撃しろ！ダスト・レーゼ！！
切り裂け、スラスト・レーゼ！！」

ダスト・レーゼの放った幾つもの塵風の刃が、

師範を刻んでいった…。

「あうぅっ…！」

ツァン　ＬＰ２０００→１４００

「へへ…どうにか、このターンも凌ぎ切れたぜ。」

「まだまだ！罠発動、六武衆推参！

自分の墓地から六武衆１体を自分フィールドに特殊召喚するよ！

蘇って！師範！！」

ボクのフィールドに六武衆の紋様が現れると、

煙と共に師範が推参したよ！

六武衆の師範

ＡＴＫ２１００

六武衆推参！

通常罠

自分の墓地から六武衆1体を自分フィールドに特殊召喚する。

この効果で特殊召喚した六武衆は、

このターンのエンドフェイズに破壊される。

「ヤベェ！ダスト・レーゼの効果はバトルフェイズに1度しか発動出来ねぇ！！」

アイツはかなり焦っているみたいだね…。

まあ…この効果で特殊召喚した六武衆は、

特殊召喚したターンのエンドフェイズに破壊されるけど…。

「覚悟して！師範でダスト・レーゼを攻撃だ！
斬り裂け！夜光一閃！！」

ダスト・レーゼは力を使い果たしていたからかな…。
微動だに動かないまま、
師範に斬り伏せられたよ。

「ぐおぉっ！…くぅ～っ、効いたぜ！」

塔也　ＬＰ８００→５００

「だが耐えきったぜ…。伏せカードが無い以上、お前の攻撃はこれで打ち止め…だろ？」

安心しきちゃって…。

…って事は、アイツの守りはもう無いって訳ね…。

「ボクは…。」

「…見つけマシタヨ？トウヤ～！！」

「…えっ？な、何！？」

大声のした方に振り向くと、
ボクと同じオベリスク・ブルーの女子生徒が、
怒った顔をしてアイツを睨んでいた。

「フォ、フォリナ！？お前どうしてココに！？」

「トウヤが中々ロビーに来ないからワタシ、

トウヤの事を捜し回っていたんデスヨ！！

ホラ、早くロビーに向かいマスヨ！トウヤ！！」

フォリナって言う子は、

そう言うと、アイツの腕を引っ張って行こうとしているよ。

「イ～テテテッ！！おいフォリナ！

俺まだツァンとデュエルしてんだが…。」

「トウヤ！！デュエルは後にシテ下サイ！！

お昼休みが終わってシマイマスヨ！！

ジュウダイ君達だって待ってイルンデスカラネ！！」

「分かった！分かったから！！

悪いなツァン！また改めてデュエルしような～。」

「ちょ、ちょっとアンタ！待ちなさいよ～！！」

アイツはそう言うと、
あの子と一緒に行っちゃった…。

あ～あ、逃げられちゃった…。

ボクは2人が向かって行った方をしばらく見てから、溜め息をついた。

『先走りとは感心しないなぁ～。

大将に知れたら、消滅されるぜ？アンタ…。』

「…えっ？だ、誰なの！？」

ボクは咄嗟に振り向くと、
そこにはボクも見知った子がいたんだ。

「…ッ！アンタは…ッ！！
まさか、アンタもアイツらとグルだった訳！？」

『あれ…？アンタまさか依り代の方だった？

あちゃ～、ちっとマズかったかな…。』

『全く、あやつめ…。不用意に話し掛けおってからに…。

悪いな、娘っ子。

暫く我が輩と代わって貰うぞ…！！』

な、何な…の！？ボクの意識…が。

ツァン↓？？？ｓｉｄｅ

『まさか、依り代の意識の方だったなんてね…。

お陰でヒヤリとしたぜ。』

『フン…我が輩は必要な時に動ける体さえあれば良いのだ。

四六時中、依り代を操る必要は無かろう…。』

そう言うと、あやつは我が輩を嘲笑しおった。

『ハッハハ！珍しいよなぁ～アンタ位だぜ？

私達の中で、依り代の意識に自由を与えている奴はさ…。』

『我が輩の目的は、血がたぎる様な戦を続ける事のみ…。
ただそれだけよ…。』

『まあ…あんまり動いていたら、大将に知れるぞ？
アンタも知ってるだろ？
大将は楽しみを邪魔する奴にゃあ容赦ないって事をさ…。』

フン…我が輩は元よりアレに付き従っている訳では無い…。
時が来れば、アレとも対峙してくれよう！！

『…品定め位は良かろう？　些か気になる奴がおったからな…。』

するとあやつは、目を見開いて尋ねてきおった。

『気になるねぇ…。
…で、どうだったんだ？
試した結果はさ…。』

『…うむ、試合ったみたが、
あやつからは特別な力はそれ程感じられなかった…。
我が輩らの脅威にはなるまい。』

『そうかい…。ああ…そうだ、大将が私達をお呼びだそうだ。
何でも、かなりの力を持った新入りがやって来たらしいぜ。』

そう言って、あやつはこの場を去っていった。
…正直な話、あやつからは確かに何も感じられなかったが、
あやつのデッキからは僅かに力を感じた…。

あの力の感じ…まるで封をされている様であったな…。
フフフ…アレの力といずれ合間見えてみたい物だ…。

絶体絶命！　空閉の陣！！（後書き）

ホウザン君とマスカワ君の体調が、
アカデミアに登校出来る位に回復シマシタヨ！

その日の放課後、ウミノミさんとミタガワ君がモメテマシタ。

どうやら、ミタガワ君がウミノさんに何かを訴えているみたいデースネ…。

「増川、あの分からず屋を追い払うのです！」

「何故俺が…まあいい、コイツは借りの1つとさせて貰うぞ海野氏。

さて、お前には俺の超絶デッキの練習台になって貰うぞ三田川たくや！！」

ネクスト、「2人の力を交えたデッキ」

マスカワ君、ファイトデスヨ！

2人の力を交えたデッキ（前書き）

大変お待たせしました！

第２９話です。

この小説も、気付けば１万ものアクセス数となりました！

大変嬉しい限りです！

それはさて置き、今回もＴＦキャラが登場しますよ。

2人の力を交えたデッキ

増川ｓｉｄｅ

俺が倒れてから数日が過ぎた…。

俺が自室で養生している間にも、
被害者は続出しとる状態だ…。

万丈目氏や雲雀　塔也らが尽力を尽くしておるので、
その人数は少なくなってきているがな…。

勿論俺は、その間にただ養生していた訳ではないぞ！

まず第一に、我がファンクラブの副隊長である日向(ひなた)氏に、

天野　光ら、明日香ファンクラブの連中を探る様に指示をしておいた。

日向副隊長には、手は出さずに探るだけにしておけ…っと釘を差しておいた。

アイツは深追いする様な奴ではないが、一応…な。

そして第二に、海野氏と一緒に新たなデッキを作った事だ。

海野氏とは、色々と強力なカードを交換して貰い、
それらのカードでデッキを組み直した結果、
我ながら凄まじいデッキになったもんだ…。

そして今…お互いに、組み直したデッキの力を確かめる為にデュエルをしている所だ。

「行っけー！リバイス・ドラゴン！
シーラカンスを攻撃しろ！！
バイス・ストリーム！！」

「キャアァァッ！！」

海野　ＬＰ４００→０

「フゥ…やりますわね、増川。
私（わたくし）のシンクロモンスター達の進撃を抑えるだなんて…。」

海野氏はデュエルが終わって、一息をついていた。

「それはお互い様だ、海野氏…。
前のターン、シーラカンスの効果でシンクロ召喚を連発された時には、生きた心地がしなかったぞ…。」

本当にシーラカンスはいつ来ても厄介な奴だ…。
アイツはデッキからレベル４以下の魚族を大量展開出来るから、シンクロ召喚、エクシーズ召喚に使用するにしろ、大いに役立つ。
俺のデッキにも是非とも欲しいが、
滅茶苦茶高いんだよな…アレ。

「それでも、あの状態から逆転したのです。
十分強いですわよ…増川。
…爺や、紅茶とお茶菓子をお願い。」

「はい…直ぐにご用意致します、お嬢様。」

海野氏は椅子に座って、
ご老体の用意したパンケーキを静かに口へと運び、
紅茶を一杯飲んだ後、再び口を開いたぞ。

「アナタの怪我は、すっかり治ってきた様ですわね。
その様子ですと、明日からでもアカデミアに登校出来そうですわね。」

「そうだな…体の痛みは引いて来たし、走っても大丈夫だ…。
もうアカデミアに登校してもいい状態だ…っと鮎川保険医が言ってたぞ。」

それを聞くと、海野氏は安堵の息をついた。

「それは良かったですわ…。

これで、アナタから受けた恩はお返し致しましたわよ。」

「ああ、感謝するぞ海野氏。
お前やご老体が看病してくれたお陰で、
怪我の具合も良くなったし、
デッキも強化させて貰ったからな。」

「何かあった時には、私(わたくし)に仰って下さいな。

困った者を助けるのも、
貴族の務めなのですから…。

では…ご機嫌よう、増川。
また明日、アカデミアで会いましょう。

爺や、行きますわよ。」

「かしこまりました、お嬢様。
では増川様、お元気で…。」

そう言って、海野氏とご老体は部屋を後にした。

さてと…明日になったら、
万丈目氏やアイツらに、
日向副隊長や我が同士達が集めた情報を伝えるとするか…。

増川→塔也ｓｉｄｅ

…うおぉっ！まだ頭がガンガンしやがる…。

今朝もフォリナからアレを見舞われたぜ…。

「グッドモーニング！トウヤ。

ようやく目覚めマーシタカ？」

「…あぁ、今日も頭に響いたぜ…。

そう言えばさぁ…フォリナ、毎朝打ち鳴らしているけどさ、

お前んとこの寮に迷惑掛かって無いか？

アレやってると、結構周りに響くと思うんだが…。」

「そう言えばそうだね…。

部屋の外にいても、結構響いているんだけど…。」

「ノープロブレムデース！

ブルー寮の部屋は防音性が強いですカラ、

誰にも迷惑は掛かりマセンヨ！」

アレの音が一切漏れないって、

スゲェな…ブルー寮。

「それではワタシは、そろそろブレックファーストを食べに行きマース。　３人共、アカデミアで会いましょうネ。

では、シーユー！」

そう言って、フォリナは携帯を切った。

「…じゃあ、俺達も朝メシを食べに行こうか。」

「おうっ！俺はもう腹ペコだぜ！！

「そうだね！早く食堂に行こうよアニキ、塔也君！」

ファ～…最近は本当眠いわぁ…。

あれから数日間、万丈目と十代の3人で明日香ファンクラブの連中とデュエルをして、

被害を食い止める為に動いている事が原因だが…。

最近、連中はナンバーズカードをもう持ってない気がするぜ…。

もうかなりの人数を倒した筈なのに、

一向に被害が収まらねぇしな…。

もしかしたら…明日香ファンクラブの連中以外に、

ナンバーズカードを持ってる奴がいるのか？

だとしたら、一体誰なんだ？

塔也→増川ｓｉｄｅ

昼休みになって、俺は集めた情報を打ち明ける為に、
万丈目氏らを多目的教室に集めた。

「俺が動けない間、よく頑張ってくれたな…。

感謝するぞ、万丈目氏。

…ついでに遊城　十代に雲雀　塔也よ…。」

「おいおい増川…俺らはついで扱いかよ…。

俺らだって、睡眠時間削って見回りしてたんだぜ！？」

「まあ落ち着こうぜ、塔也。

…で、話したい事って何だよ増川？」

遊城　十代が雲雀　塔也をなだめて、俺に尋ねてきた。

「話と言うのは他でもない、
我がファンクラブの日向副隊長に連中の事を探らせた所、
ちと奇妙な事が判明してな…。」

「奇妙な事だと？一体何が分かったと言うんだ。」

俺は一息入れてから、万丈目氏の質問に答えた。

「…日向副隊長が言うには、

アイツらの所に、度々多くの生徒が出入りしていて、
部屋を出た生徒は、どこか虚ろな様子だったそうだ…。」

「…どう言う事だ増川？一体、その生徒達は何をされたと言うんだ？」

「それが…部屋は完全に閉め切っておったので、
何をやっとったかまでは分からんそうだ…。」

「だったら…ココにいる全員で、
アイツらの所に、かち込みに行くのはどうだ？」

「遊城　十代よ、お前は連中がそんな事で口を割る奴らだと思っとるのか？」

「それにさ十代、連中が部屋の中に何人いるか分からねぇんだ。逆にコッチが全員とっ捕まれるぜ。」

遊城　十代の提案を俺と雲雀　塔也が却下した。

「じゃあ、どうするだよ増川。」

「連中の頭である天野　光に問いただすしかあるまい…。だが、それには事件に関係付ける証拠が必要なのだ。」

「つまり、ファンクラブの会員から証言を吐かせると言う訳か…。」

万丈目氏の発言に俺は頷いた。

「でも、それって難しいと思うな…。デュエルが終わった後に聞いても、放心状態になっているし…。言葉も、うわごとの様にしか話せないからね…。」

そこに宝山氏が口を挟んだ。

「それなんだよな…問題は。

一体どうしたもんか…。」

俺が頭を悩ませていると、

突然誰かが教室に入っていった。

「増川様！此方にいらっしゃいましたか！！」

「…誰だ？この老人は。」

「…！あんたは、海野氏の執事をしているご老体ではないか！

俺に何の用なのだ？」

「詳しいお話は後程…。

皆さま、申し訳ありません…暫し増川様をお借り致します。」

そう言うな否や、ご老体は俺を担いでドコかへと向かうのだった

…。

…って、オイオイ何なんだコレはっ！！

俺を一体、ドコへ連れて行く気だご老体～！！

増川↓フォリナｓｉｄｅ

最近トウヤは何だかビジーみたいデスネ…。

イブニングには、いつもジュウダイ君とドコかに出掛けているみたいテスシ…。

いつもドコに出掛けているのデショウカ？

そう思っていると、ワタシの近くで誰かが言い争ってマーシタ。

「いいだろう海野さん？ミーと一緒にディナーでもどうだい？」

「お生憎様、私（わたくし）には予定がありますので…。
折角ですけど、アナタのお誘いはお断りしますわ。」

言い争っていたのは、ウミノさんとミタガワ君の様デスネ。

「そんな釣れない事言わずにさぁ～、
キミにミーのお抱えの３ッ星シェフの料理をご馳走させるから…さ。」

「アナタしつこいですわよ！いい加減になさい！！」

「ソウデスヨ！ウミノさんが嫌がっているのが分からないのデスカッ！！」

ワタシは思わず2人の中に割って入ってしまいマーシタ。

「キミは…確かフォリナさんだったかな？

ハハハ、キミものディナーに招かれたかったのかい？」

ミタガワ君はワタシの言葉に構わずに、ワタシにもディナーを誘って来マシタ…。

全くワタシのトークを聞いて無い様デース…。

「ノーサンキューデス！

サァ…ウミノさん、行きマショウ！！」

「え…ええ、では参りましょう…フォリナさん。」

ワタシがウミノさんとこの場をエスケープしようとすると、

ミタガワ君がワタシ達の前に立ち塞がりマーシタ。

「まあ待ちたまえ、キミ達。

だったらフォリナさん、
キミとのデュエルで白黒着けようじゃないか。
キミが勝ったら、好きにするといいさ。

ただし、ミーが勝ったら、
ミーと付き合って貰おうかな？」

「ワッツ！？ワ、ワタシがミタガワ君とデスカッ！？」

それにワ…ワタシが負けたら、
ミタガワ君のガ…ガールフレンドになってしまうのデースカ！？
い…嫌デス！！ワ…ワタシにはトウヤがッ…！

「…ッウオォォッ！！フォリナ様を彼女にすると抜かすふざけた
奴はドコのどいつだ～！！」

ドコからか大声が聞こえたと思ったら、

マスカワ君が凄い形相でランニングして来て、
ミタガワ君にドロップキックを繰り出しマーシタヨ…。

「アナタは…増川!?一体ドコからやって来たのです!?」

「…どうしたもこうしたも、こっちはお前んとこのご老体に無理矢理ココに連れて来られたもんでな…。」

マスカワ君が指を差した方を見まスト、

礼服を着たお爺さんが一礼をしていマシタ。

「爺やがアナタを!?

全く…爺や～!!余計なお世話ですわよ!」

「申し訳ありませんお嬢様…。

勝手ながら、増川様に解決して頂くのが最善と思いましたので…。」

ウミノさんの執事がウミノさんをなだめていると、

さっきまで気絶していたミタガワ君が気がつきマシタ。

「…イタタタ、そこのキミ!

よくも、ミーを蹴り飛ばしてくれたね!!

パパにもぶたれた事が無いのにっ!!」

「じゃあがしいわ、三田川　たくや!!

…お前、海野氏にちょっかいを出しておいて、あまつさえフォリナ様に向かってお前と付き合えだぁ～？
そんな事をし出かしてタダで済むと思うなっ！！」

「頼みます、増川様。

どうかお嬢様を守って戴けませんか？

我が社としても、あまり表沙汰で三田川グループとの揉め事は避けたい物でして…。」

「…つまりは、ご老体よ。
俺に海野氏の露払いをしろと言う訳か…。」

マスカワ君は溜め息をつきながら、
頭を掻いてイマス。

「増川、アナタにあの分からず屋を追い払う仕事を頼みますわ。

光栄に思いながら、責務を果たすのです。」

「安心しろ、海野氏よ！
最早頼まれずとも、コイツを叩きのめす気でいるからなぁっ！！

やい！三田川　たくやよ！！

フォリナ様に代わって俺がデュエルしてやる！！」

「…キミとかい？もし負けたらどうするつもりかな？」

「負けた方は、この２人に会う事を禁ずると言うのでどうだ？」

落ち着きを取り戻したミタガワ君に対して、

マスカワ君は強気に返しマーシタ。

「へ…へぇ～随分強気じゃな～い？

言っておくけど、ミーはかなり強いよ～？」

「御託はいい！サッサとかかって来んか！！」

「キイィィ～！！だったら、お望み通りにキミを打ち負かしてあげるよ！！」

「来いやぁ～！お前は俺の超絶デッキで叩きのめしてくれるわ！！」

「「デュエル！！」」

三田川　ＬＰ４０００

増川　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で、
ファーストターンはミタガワ君デースネ。

「先攻はミーが戴いた！
ミーのターン、ドロー！

ミーはモンスター1体と伏せカードを2枚セットして、ターンエンドだ。

サァ、カモーン！」

「いいだろう！メッタメタにしてくれるわっ！！

俺のターン、ドローだ！」

三田川　ＬＰ４０００

手札３枚

モンスターゾーン

伏せモンスター×１

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

増川　ＬＰ４０００

手札６枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン　無し

「俺は永続魔法、マリン・ハーモニーを発動し、

深海のディーヴァを攻撃表示で召喚するぞ！」

マスカワ君のフィールドに、

ピンク色のマーメイドが飛び出しマーシタヨ。

深海のディーヴァ

ＡＴＫ２００

「おや～？そのモンスターって、チューナーか～い？

キミって確か…エクシーズ召喚が軸のデッキだったと聞いたけど

…。」

すると、マスカワ君はスマイルを浮かべながら、答えマーシタ。

「フッフフ…このデッキはココ数日、俺と海野氏で一緒に作り上げた特別製でな…。

新たにシンクロ要素を組み込んだデッキなのだ！」

「ア、アンビリーバボー！？

海野さんが、キミみたいな奴のデッキ構築の手伝いをしただって！？」

「その通りですわ。この私（わたくし）が手施きしたのです…。

今の増川のデッキでは、並大抵の戦術ではビクとも致しませんわよ！」

「そう言う事だ！まずは深海のディーヴァの効果発動だ！

このカードが召喚に成功した時、　デッキからレベル３以下の海龍族１体を特殊召喚出来るぞ！

来い、エアジャチよ！」

ディーヴァが歌い出すと、

そのメロディーに惹かれて、

赤い斑点があるシャチが飛び出しマシタヨ！

エアジャチ

ＡＴＫ１４００

「そして、マリン・ハーモニーの効果により、
召喚したモンスターと同じレベルを持つ魚・海龍・水族モンスター1体を、
デッキから手札に加える事が出来るのだ！
俺はスカイオニヒトデを手札に加えるぞ！」

深海のディーヴァ

レベル２　水属性　海龍族／チューナー

ＡＴＫ２００　ＤＥＦ４００

このカードの召喚に成功した時、
自分のデッキからレベル３以下の海龍族１体を特殊召喚出来る。

マリン・ハーモニー

永続魔法

自分フィールドに魚・海龍・水族モンスターが召喚に成功した時、
召喚したモンスターと同じレベルを持つ魚・海龍・水族モンスター1体を、
デッキから手札に加える事が出来る。

「俺はエアジャチの効果を発動だ！
1ターンに1度、手札の魚・海龍・水族1体を除外する事で、
相手フィールドのカード1枚を破壊するぞ！
手札のスカイオニヒトデを除外し、
セットモンスターを破壊だ！
行け、エアダイブ！！」

エアジャチがミタガワ君のセットモンスターにタックルをした後、
上空へとフライングしマーシタ。

「残～念！キミが破壊したカードは、サンドモスだ。
このカードがセットされた時に効果で破壊され、
墓地に送られた時、このカードを墓地から特殊召喚するよ！
ミーは攻撃表示で特殊召喚するよ！」

サンドモスデースカ…！
ツイてマセンネ…。

あのカードはタダでリターンするだけではありマセンヨ！

サンドモス
ＡＴＫ１０００↓２０００　ＤＥＦ１０００↓２０００

「効果を使用したエアジャチは、
次の俺のスタンバイフェイズまで除外するぞ…。
まあ…それ位はやって貰わなければ、退屈する所だったぞ…。」

「随分と余裕じゃな～い？
キミのフィールドにはチューナーしかいないんじゃあ、怖くも無いね。」

「甘いですわね…。増川のデッキの展開力は、
まだまだこれからだと言うのに…。」

「…と言う事は、マスカワ君にはまだモンスターを特殊召喚するつもりデースカ？」

「…ええ、まあ見ていれば分かりますわ…フォリナさん。」

「さ～てと、俺は除外したスカイオニヒトデの効果を発動するぞ！
このカードが除外された時、
カードを1枚ドロー！
そして、フィールドから海龍族のエアジャチが除外された事で、
ウィング・トータスを手札から守備表示で特殊召喚するぞ！」

ウィング・トータス
ＤＥＦ１４００

スカイオニヒトデ
レベル２　風属性　水族
ＡＴＫ９００　ＤＥＦ５００
このカードが除外された時、
カードを1枚ドローする。

自分のスタンバイフェイズ時、
自分フィールドにモンスターが存在しない時、
このカードを除外ゾーンから特殊召喚出来る。

「では行くぞ！俺はレベル３のウィング・トータスに、
レベル２の深海のディーヴァをチューニング！！
大海原に巣くいし龍よ、
今こそ大海の淀みより姿を現せ！
シンクロ召喚！！唸れ、シーランド・ガルナ！！」

深海のディーヴァが２つのリングにチェンジして、
ウィング・トータスがくぐると、
とてもクールなドラゴンが飛び出しマーシタ！

シーランド・ガルナ
ＡＴＫ２４００

「バトルだ！シーランド・ガルナで、サンドモスを攻撃！！
シーブレイズ・ブラスト！！」

ガルナが放った水圧のブレスを受けて、
サンドモスはブレイクシマーシタ。

「ぬぐぅ…！フッフフ、そよ風の様だ。」

三田川　ＬＰ４０００→３６００

「ソイツはどうだろうな？
シーランド・ガルナが相手モンスターを戦闘で破壊した時、
デッキからレベル４以下の魚・海龍・水族１体を特殊召喚出来る
効果があるのだ！」

シーランド・ガルナ

レベル５　水属性　海龍族／シンクロ

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１６００

このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、
デッキからレベル４以下の魚・海龍・水族１体を特殊召喚出来る。

「俺はデッキからコイツを…ニードル・ギルマンを攻撃表示で特
殊召喚するぞ！
ニードル・ギルマンはフィールドにいる魚・海龍・水族の攻撃力
は４００ポイントアップだ！」

シーランド・ガルナ

ＡＴＫ２４００↓２８００

ニードル・ギルマン

ＡＴＫ１３００→１７００

「行け、ニードル・ギルマンよ！

三田川　たくやにダイレクトアタックだ！」

ニードル・ギルマンのスピアから繰り出されたアタックが、ミタガワ君にヒットシマーシタ。

「うくあぁぁっ！」

三田川　ＬＰ３６００→１９００

「よくもやってくれたね～！

ミーは手札１枚を墓地に捨て、

罠カード、ダメージ・コンデンサーを発動だ！

発動時に受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスター１体を特殊召喚するよ！

ミーが受けたダメージは１７００だ。

よって、ミーはデッキから守護者（ガーディアン）スフィンクスを守備表示で特殊召喚だ。」

アノモンスターも、とても厄介な効果を持ってイマスヨ…。

大丈夫デショウカ、マスカワ君…。

守護者(ガーディアン)スフィンクス

ＤＥＦ２４００

「ほう…守護者(ガーディアン)スフィンクスか…。

次のターンにソイツの効果で、

俺のモンスターを一掃する…っと言った所か…。

俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

「サァ行くよ！ミーのターン、ドロー！」

三田川　ＬＰ１９００

手札２枚

モンスターゾーン

守護者(ガーディアン)スフィンクス

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

増川　ＬＰ４０００

手札２枚

モンスターゾーン

シーランド・ガルナ

ニードル・ギルマン

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「ミーは手札のガーディアン・スタチューを墓地に送り、
魔法カード、奇跡の穿孔を発動するよ。

手札の岩石族１体を墓地に送る事で発動し、

カードを１枚ドローだ。

そして、守護者（ガーディアン）スフィンクスの効果で、
このカードをセットし、反転召喚だ。」

守護者（ガーディアン）スフィンクス

ＡＴＫ１７００

「そして、守護者（ガーディアン）スフィンクスの効果発動だ！
このカードが反転召喚に成功した時、
相手フィールドのモンスターを全て手札に戻すよ！
サァ、キミのモンスター達にはバックホームして貰おうかな？」

奇跡の穿孔

通常魔法

手札の岩石族１体を墓地に送る事で発動し、
カードを１枚ドローする。

守護者（ガーディアン）スフィンクス

レベル５　地属性　岩石族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ２４００

１ターンに１度、このカードをセット出来る。
このカードが反転召喚に成功した時、
相手フィールドのモンスターを全て手札に戻す。

「ぬぅ～！分かっちゃいたが、
厄介な効果だなぁ…オイ。」
「サァ…バトルしようか。
守護者（ガーディアン）スフィンクスで、キミにダイレクトアタックするよ！」

「来たか！罠発動、ガード・ブロック！！
自分が戦闘ダメージを受ける時、
その戦闘ダメージを無効にするぞ！」

「キイィィッ！！そんなカードを伏せていたなんてっ！！」
「そして、ガード・ブロックの効果によって1枚ドローだ！」

エクセレントデス…マスカワ君！
ココマデで1度もダメージを受けてナイナンテ…。

「どうした、三田川　たくやよ？
もうネタ切れか？」

「…クウゥ～ッ！まだだ！！

ミーは守護者（ガーディアン）スフィンクスをリリースして、守護神　エクゾードを守備表示で特殊召喚だ！！」

守護者（ガーディアン）スフィンクスが見る見るうちに、
エクゾディアをモチーフとした様な、
ビッグなスタチューになりマーシタヨ。

守護神　エクゾード

ＤＥＦ４０００

「ミーはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！
ミーを本気にさせた事、
後悔するんだねっ！！」

2人の力を交えたデッキ（後書き）

俺は突然、海野氏の執事をしているご老体に連れられて、

海野氏の露払いとして、

三田川　たくやとデュエルする羽目になってしまった…。

デュエルは俺の流れで、順調に進んで行ったのだが…。

「フォリナ様と付き合うなどと、

フザけた事を抜かしおって！

このまま一気に叩きのめしてくれるわ！！」

「キイィィッ～！！まだだ、まだミーは終わらない！！

キミにミーの実力を思い知らせてあげよう！！」

奴が俺に猛反撃に打って出て来たのだった…。

次回、「愛に生きる男　増川！」

三田川　たくやよ、お前のフザけた妄言など、

俺のデッキで粉砕してくれるわ！！

愛に生きる男　増川！（前書き）

大変お待たせしました！

第３０話です。

今回の話で、増川がシャークの切り札を使用しますよ。

愛に生きる男　増川！

増川ｓｉｄｅ

全く、ご老体め…。

俺をいきなり担いで教室から出たと思ったら、

厄介事を押しつけおって…。

だがお陰で、フォリナ様と付き合おうと言うフザけた妄言を抜かす輩に、

鉄槌を下せる事が出来るので、まあ…良しとしようか…。

「ミーのフィールドにエクゾードがいる以上、

もうキミに勝機は無い！

覚悟する事だね！！」

随分と、めでたい奴だな…。

守備力４０００のモンスターを出した位で、

いい気になりおって…。

「増川！私（わたくし）が手施きしたデッキで、

負けたら承知しませんわよ！」

「任せろ海野氏、俺とお前で作ったこのデッキで、
負ける事など…あり得ん！！」

「グッドデースヨ、マスカワ君！
その調子で頑張って下サーイ！」

「お任せ下さい、フォリナ様！！

この増川、必ずや奴に勝って見せます！！」

フォリナ様と海野氏が、
それぞれ俺に激励を掛けてくれたぞ！

「よっしゃ～！気力が漲って来たぞ～！！俺のターン、ドローだ
！」

三田川　ＬＰ１９００

手札０枚

モンスターゾーン

守護神　エクゾード

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

増川　ＬＰ４０００

手札５枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

マリン・ハーモニー

「俺はスタンバイフェイズに、　エアジャチとスカイオニヒトデの効果を発動だ！

スカイオニヒトデは、自分フィールドにモンスターがいない時、除外ゾーンから特殊召喚出来るのだ！

更にエアジャチも除外ゾーンから舞い戻るぞ！」

上空より赤い斑点が付いたシャチと、

緑色の平べったいヒトデが勢い良く現れたぞ。

スカイオニヒトデ
ＡＴＫ９００
エアジャチ
ＡＴＫ１４００

さて、どうしたもんかな…。
奴が、ただエクゾードを出しただけとは思えん…。
このターンにエアジャチが戻って来る事を、
忘れておる訳では無いだろうしな…。
奴がどう出てくるか試してみるか…。

「俺はニードル・ギルマンを攻撃表示で召喚だ！
ニードル・ギルマンが存在する時、
自分フィールドの魚・海龍・水族の攻撃力は４００ポイントアップするぞ！」

ニードル・ギルマン
ＡＴＫ１３００→１７００

エアジャチ
ＡＴＫ１４００↓１８００
スカイオニヒトデ
ＡＴＫ９００↓１３００

「更にマリン・ハーモニーの効果発動！
俺はデッキからニードル・ギルマンと同じレベルで、
魚族のワンダー・ピクスを手札に加え、
エアジャチの効果発動だ！
手札のワンダー・ピクスを除外して、
お前のエクゾードを破壊だ！」

さて、奴はどう出てくる？

「まあ…待ちたまえ！カウンター罠、バウンド・ウォールを発動だ！
自分フィールドの守備表示モンスターが、
相手のカード効果または攻撃対象にされた時、
それを無効にし、無効にされたカードはデッキに戻るの…さ。」

エアジャチはエクゾードに突撃しようとしたが、
透明なバリアに跳ね返されてしまった…。

バウンド・ウォール
カウンター罠
自分フィールドの守備表示モンスターが、
相手のカード効果または攻撃対象にされた時、
それを無効にし、無効にされたカードはデッキに戻る。

「流石に、対応策はあったか…。
じゃ無けりゃ、お前はこのターンで詰んでたぞ…。」

「何なんだいキミ！さっきからドコか達観した様に、
ミーの事を見透かして～！！」

奴が何か訴えているが、無視だ　無視。

こちとら、遊城　十代と何百回とデュエルを挑んで、
何遍も奇想天外な戦略を見せられておるからな…。

もうコレ位では、驚きもせんな…。

「まだ終わらんぞ！俺はフィールド魔法、
天空の都　ラピュタを発動するぞ！」

周りの風景はアカデミアの廊下から、
天空に浮かぶ古代の都市へと変化したぞ。

そんな中フォリナ様は、感激した様子でラピュタを見ているぞ！

「ワーオ！とてもファンタスティックなフィールド魔法デースネ！」

「ハッハハー！フォリナ様に喜んで頂けるなんて…光栄です！！」

「ちょっとキミ！ミーをほったらかして、
フォリナさんと話しているんじゃないよ！！」

「増川！何鼻の下を伸ばしているのです！！
目の前のデュエルに集中なさい！！」

俺がフォリナ様と話していると、
三田川　たくやと海野氏が水を差して来おった…。

「…全く、そうカリカリするな海野氏…ヒィ!?」

すると海野氏が怒った形相で、
こちらを睨んだ来おった…。

「…増川、何か仰いまして?」

「…いや、何でも無いぞ海野氏…。

天空の都　ラピュタは、フィールドに存在する魚・海龍・水族の攻守を４００ポイントアップさせるぞ。」

ニードル・ギルマン

ＡＴＫ１７００→２１００

ＤＥＦ０→４００

スカイオニヒトデ

ＡＴＫ１３００→１７００

ＤＥＦ５００→９００

「何だ…それぽっちの攻撃アップじゃ、大した事は無いね～。」

「果たしてそうかな？

俺はラピュタのもう１つ効果を発動だ！

１ターンに１度、フィールドまたは手札の魚・海龍・水族１体のレベルを１つアップまたはダウンさせるのだ！

俺はニードル・ギルマンのレベルを、３から２にするぞ！」

ニードル・ギルマン

レベル　３→２

天空の都　ラピュタ

フィールド魔法

フィールドに存在する魚・海龍・水族の攻守を４００ポイントアップする。

１ターンに１度、フィールドまたは手札の魚・海龍・水族１体のレベルを１つアップまたはダウンさせる。

「キミのフィールドには、レベル２が２体…。
まさか、エクシーズ召喚か～い！？」

「当然だ！俺はレベル２のニードル・ギルマンと、
スカイオニヒトデをオーバー・レイ！！
２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！
海底を遊泳するアスリートよ…。　海流を乗りこなし、縦横無尽
に飛び交え！！
エクシーズ召喚！！翻弄しろ、オーシャン・ライナー！！」

俺のフィールドにいる２体のモンスターが渦に入ると、
引き締まった青い体をしたアスリート風の魚人が、
勢い良く飛び出して来たぞ！

オーシャン・ライナー
ＯＲＵ　０↓２
ＡＴＫ１５００↓１９００
ＤＥＦ１２００↓１６００

「オーシャン・ライナーの効果発動だ！
１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニット１つを使用する事で、
自分フィールドの攻撃力２０００以下の魚・海龍・水族１体はこのターン、ダイレクトアタックが可能となるのだ！
水の掛け橋を奴の元へ掛けろ！ストリーム・アーチ！！」

オーシャン・ライナー
ＯＲＵ　２↓１

オーシャン・ライナーは、
ユニットの光を１つ手に取ると、
アーチ型の水流を、三田川　たくやの所まで伸ばしたぞ。

オーシャン・ライナー

ランク２　水属性　魚族

ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１２００

レベル２モンスター×２体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニット１つを使用する事で、
自分フィールドの攻撃力２０００以下の魚・海龍・水族１体は、
このターン、ダイレクトアタックが出来る。

「ノ、ノォ～！！これじゃ、
オーシャン・ライナーのダイレクトアタックで、
ミーのＬＰが０にッ！！」

「グレートッ！コレなら、
エクゾードのディフェンスもパス出来マースヨ！」

「さぁ…そのまま決めなさい、増川！！」

「さ～てと、覚悟を決めるのだ！！

オーシャン・ライナーで、
三田川　たくやをダイレクトアタックだ！

叩き込め、ウェーブ・ストライク！！」

「待ちたまえ！罠発動、
ヘビー・プレッシャー！！

相手モンスター１体の攻撃力を、

自分フィールドの表側表示モンスター1体の守備力分ダウンさせるよ！」

エクゾードが重力を発生させて、
オーシャン・ライナーにソレを纏わせた為、
攻撃の威力が激減してしまったぞ…。

オーシャン・ライナー
ＡＴＫ１９００→０

ヘビー・プレッシャー
通常罠

相手モンスター1体の攻撃力は、
自分フィールドの表側表示モンスター1体の守備力分ダウンさせる。

「フフフ…中々ソフトな攻撃だね～。」

「ぬぅ…自分で強いと言うだけはあるな…。

だが…もうお前のフィールドには、エクゾードを守るカードは無くなったぞ！

オーシャン・ライナーのオーバー・レイ・ユニット1つを使用し、
魔法カード、エクシーズエナジーを発動だ！
自分フィールドに存在するオーバー・レイ・ユニット1つを使用する事で発動出来、
相手フィールドの表側表示のモンスター1体を破壊するぞ！
俺が破壊するのは当然、エクゾードだ！」

オーシャン・ライナー
ＯＲＵ　1→0

オーシャン・ライナーがユニットの光を水流に変えると、
ソレをエクゾードに見舞ったぞ！

エクシーズエナジー
通常魔法
自分フィールドに存在するオーバー・レイ・ユニット1つを使用する事で発動出来る。
相手フィールドの表側表示のモンスター1体を破壊する。

「ノォ～！！ミーのエクゾードがっ！？」

「どの道ソイツは、このターンの内に倒されたと言う訳だ。
残念だったな、三田川　たくやよ…。
俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

「キイィィ～ッ！まだだ、まだミーは終わらない！！
ミーのターン、ドロー！！」

三田川　ＬＰ１９００
手札１枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

増川　ＬＰ４０００
手札１枚
モンスターゾーン

オーシャン・ライナー

魔法・罠ゾーン

天空の都　ラピュタ

マリン・ハーモニー

伏せカード×1

「ミーは魔法カード、女神の施しを発動！
お互いの手札が3枚以下の時に発動して、お互いの手札が3枚になるまでドローするよ！

ミーは手札が0枚だから3枚ドローだ！」

「俺は手札は1枚だから、2枚ドローだな。」

女神の施し

通常魔法

お互いの手札が3枚以下の時に発動出来る。
お互いは、手札が3枚になるまでドローする。

「更に魔法カード、手札抹殺を発動だ！
お互いに手札を捨てて、その枚数分ドローするよ！」

ほぅ…手札交換をして来たか…。

「ミーは墓地から5体の岩石族を除外！！
コレがミーの最強カードさっ！
メガロック・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚だっ！！」

奴のフィールドに、岩石の礫が集まって、たちまち巨大なドラゴンへとなっていったぞ。

メガロック・ドラゴン
ＡＴＫ？

「メガロック・ドラゴンデースカ…！

確か…自身を特殊召喚した時に、
デリートしたモンスターの数だけパワーアップするモンスターダ

ッタ筈デース…。」

「イエス！流石、大地の魔女（グランド・ウィッチ）と呼ばれるフォリナさんだね～。

このカードは自分の墓地から、
岩石族を任意の数だけ除外して特殊召喚出来るのさ。

更にこのカードの元々の攻守は、
特殊召喚した時に除外した岩石族1体につき、７００ポイント
の数値となるのさ！！

ミーが除外した岩石族は5体だから、
メガロック・ドラゴンの攻守は３５００だ！！」

メガロック・ドラゴン

ＡＴＫ？→３５００

ＤＥＦ？→３５００

メガロック・ドラゴン

レベル７　地属性　岩石族

ＡＴＫ？　ＤＥＦ？

このカードは通常召喚出来ない。

自分の墓地からの岩石族を除外する事でのみ特殊召喚出来る。
このカードの元々の攻撃力・守備力は、
特殊召喚した時に除外した岩石族×７００ポイントの数値となる。

「更にミーは速攻魔法、サイクロンを発動！
キミのセットカードを破壊するよ！」

「ぬっ！ポセイドン・ウェーブが…！」

「コレでキミに気兼ねなく攻撃出来るよ…。

メガロック・ドラゴンで、
オーシャン・ライナーを攻撃！！
プレート・プレッシャー！！」

「だが断る！俺は墓地にいるキラー・ラブカの効果発動だ！
自分フィールドの魚・海龍・水族が相手モンスターの攻撃を受ける時、
墓地からこのカードを除外する事で、
その攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力を、

次の自分のエンドフェイズまで５００ポイントダウンさせるぞ！」

キラー・ラブカが、メガロック・ドラゴンの足下から、水流を纏いながら突進して、
バランスを崩したぞ。

メガロック・ドラゴン
ＡＴＫ３５００↓３０００

「キイィィ～ッ！！一体いつそのカードを墓地に送ったんだ～い！」

「お前の手札抹殺で墓地送りとなったのだ。

有利にしようと発動したカードが、
自分の首を絞める事になったとは…。

何とも皮肉な話だなぁ…三田川　たくやよ？」

「…クウゥゥ～ッ！！ミーはターンエンドだ！！」

「…おい三田川　たくやよ、１つ聞いていいか？

何故、お前はフォリナ様に付き合えと言ったのだ？」

「…何を聞いてくるかと思えば…そんな事決まっているよ。

ミーに相応しい女性と思ったから言ったのさ。

2人共、素晴らしい実績があるし…ミーと付き合えるんだ…本望だろう？」

「ア…アナタ、何て図々しい事を仰っていますの！？」

「ソウデスヨ！ワタシはミタガワ君のガールフレンドになっても、全然嬉しくありマセン！！」

コ…コイツ～！！仮にも付き合おうとする相手に対して、なんて態度なんだ～！！

純粋に好きだからと言ったのなら、少しは配慮を考えていたものを～！！

恋愛を何だと思っとるんだ～！！

「…そうか、よく分かったぞ…。

やはりお前は、ド派手に叩きのめてやる必要がありそうだなっ！

！」

「フッフ～ン！ミーのフィールドには、
攻撃力３５００のメガロック・ドラゴンがいるのにか～い？
面白いジョークだね～。」

奴はメガロック・ドラゴンがいる事で、
すっかり安心しておる様だが…。
見てろよ～！ソイツを砂上の楼閣の如く、崩してやるぞっ！！

「言ってろ！俺のターン、ドローだ！！」

三田川　ＬＰ１９００
手札０枚
モンスターゾーン
メガロック・ドラゴン
魔法・罠ゾーン　無し

増川　ＬＰ４０００

手札2枚

モンスターゾーン

オーシャン・ライナー

魔法・罠ゾーン

天空の都　ラピュタ

マリン・ハーモニー

「俺は魔法カード、サルベージを発動だ！

自分の墓地から攻撃力１５００以下のモンスターを2体まで手札に加えるぞ！

俺は墓地から、深海のディーヴァとニードル・ギルマンを墓地から回収するぞ！」

サルベージ

通常魔法

自分の墓地から攻撃力１５００以下のモンスターを2体まで手札に加える。

「そしてラピュタの効果で、
深海のディーヴァのレベルを2から3にしてから、攻撃表示で召喚だ！」

深海のディーヴァ

レベル2→3

ＡＴＫ２００→６００

ＤＥＦ４００→８００

「そして、ディーヴァとマリン・ハーモニー…。
そして、ワンダー・ピクスの効果をチェーン発動だ！

まずはワンダー・ピクスから行くぞ！

コイツは除外されている時に、
自分フィールドにレベル４以下の魚・海龍・水族を召喚した場合、
除外ゾーンから特殊召喚出来るのだ！」

ディーヴァが飛び出した瞬間、
空間が歪み、そこから七色に輝く熱帯魚が出現したぞ。

ワンダー・ピクス
ＡＴＫ１４００→１８００
ＤＥＦ１０００→１４００

ワンダー・ピクス
レベル３　水属性　魚族
ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００

このカードが除外されている時に、
自分フィールドにレベル４以下の魚・海龍・水族を召喚した場合、
このカードを除外ゾーンから特殊召喚出来る。

自分フィールドに同名カードが存在する場合、この効果は発動出来ない。

「次にマリン・ハーモニーの効果で、レベル３の魚族であるボムセンボンを手札に加えるぞ。

最後にディーヴァの効果だ！
デッキからシー・アーチャーを攻撃表示で特殊召喚するぞ！」

シー・アーチャー
ＡＴＫ１２００↓１６００
ＤＥＦ２００↓６００

「エクセレントデース、マスカワ君！
たった1枚のカードから、
あんなにモンスターを展開するナンテッ！！」

「私（わたくし）が手施きしたデッキなのですから、
コレ位は、やってのけて当然ですわ…フォリナさん。」

フォリナ様が興奮している中、
海野氏は至って冷静に言い放っていた。

まあ…海野氏には、何度も練習相手をして貰って、
このデッキで出来うるコンボは粗方見せているからな…。

それに引き替え、奴は何が起こったか分からずに、ただ唖然としている様だ…。

「そ…そんなにモンスターを召喚したのは見事だよ…。
けどね、ミーにとっては、悪あがきでしかないねぇ～。」

「オイオイ…お前の目は節穴か？
言っとくが、ま～だ終わりではないぞ！」

「…え！？」

そうだ…そして、今から呼び出すモンスターこそが、
お前のモンスターごと、その傲慢な態度を打ち砕くのだ！

「俺はレベル３の深海のディーヴァと、
シー・アーチャーをオーバー・レイ！！

２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

仄暗い淀みに潜みし騎手よ、
漆黒の槍を振るい、制裁を下せ！！

エクシーズ召喚！！突き崩せ！ブラック・レイ・ランサー！！」

ディーヴァとワンダー・ピクスが渦に入っていくと、
そこから、漆黒の鎧みたいな体をした騎手が、
赤黒い槍を振るって、参上したぞ！

ブラック・レイ・ランサー
ＯＲＵ　０→２
ＡＴＫ２１００

「またエクシーズ召喚か～い！？
でも、そのモンスターの攻撃力じゃあ、ミーのメガロック・ドラゴンには適わない様だね～！！」

「コレを受けても、同じ事を言ってられるか？
俺はブラック・レイ・ランサーの効果発動だ！
１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、
相手フィールドの表側表示モンスター１体の効果を、
このターンのエンドフェイズまで無効にするぞ！」

ブラック・レイ・ランサー
ＯＲＵ　２→１

「モンスターの効果を！？
ちょ、ちょっと待ちたまえ！

今、メガロック・ドラゴンの効果を無効にされたら…。」

奴が目に見えて焦り出したきたぞ。

流石にどうなってしまうかは…分かっている様だな…。

「メガロック・ドラゴンの攻撃力は、効果によって得た物だ…。

効果を無効にしてしまえば、当然残る攻撃力は…０だ！！

打ち消せ、パラライズ・ランス！！」

ブラック・レイ・ランサーは、ユニットの光を槍に込めると、

ソレをメガロック・ドラゴンに打ち込んだぞ！

すると、体中に亀裂が走り、

仕舞いには膝を折って、しゃがみ込んでしまったぞ！

メガロック・ドラゴン

ＡＴＫ３５００→０

ＤＥＦ３５００→０

ブラック・レイ・ランサー

ランク３　闇属性　獣戦士族

ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ６００

水属性モンスターレベル３×２体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、相手フィールドの表側表示モンスター１体の効果を、このターンのエンドフェイズまで無効にする。

「ノォ～！！ミーのメガロック・ドラゴンが～！！」

「愛を理解出来ん愚か者に、漆黒の槍の裁きを与えろ！！行け、ブラック・レイ・ランサー！

メガロック・ドラゴンを粉砕しろっ！！

ブラック・スピアー！！」

ブラック・レイ・ランサーは、携えた槍を勢い良く投げつけて、メガロック・ドラゴンを粉砕したぞ！

「ウッ…っくあぁぁ～っ！！」

三田川　ＬＰ１９００→０

「そ、そんな…ミーが負けるなんて…。

ウワァ～ン！パパ～！！」

奴はしばらく俯いた後、
父親を呼びながら、情けなく走り去っていった…。

…全く、あんな奴とデュエルしたと思うとドッと疲れてきたぞ…。

「増川、よくぞ責務を果たしてくれました…。

褒めて差し上げますわ。」

「気にするな、海野氏よ…。
俺はただ…ご老体に連れられて、気に入らなかった奴を叩きのめしただけだからな…。」

「アリガトウゴザイマース、マスカワ君。

お陰で助かりマーシタヨ！」

「ハッハハー！なんのなんの～！！
フォリナ様の為なら、例え火の中、水の中…！」

「ア…アハハ、ドウモデース…。」

「ど…どうですフォリナ様？
コレから、お…俺とお茶でも…。」

「エ…エ～ト、困りマスヨ、マスカワ君…。」

「増川！アナタは何をしているのです！！」

「見て分からんのか、海野氏？
フォリナ様をお茶に誘っているに決まってるだろうが！」

「威張らないで下さる！？

アナタもさっきの殿方と同類なのですか！？

イヤらしいわね！そこにお直りなさい！！」

「アイツと一緒にするな！
好きな人をお茶に誘って、何が悪いのだ！！」

「…やっと見つけたと思ってたら…。
オイ、増川！！お前何やってんだよ、こんな所で！」

突然、誰かに呼ばれたと思って振り向いたら、
そこには雲雀　塔也と遊城　十代、
そして宝山氏の3人が、ジト目でこちらを見ていた。

「ぬぉっ！？なんでお前達がこんな所に！？」

「海野の執事をしている爺さんが、
ココまで案内してくれたんだ。」

ご老体がココを！？そう言えば、デュエルの途中から見かけなかったような…。

「それよか、増川さぁ…。お前、フォリナに何してんだよ！」

「な…何って、俺はフォリナ様に迫っていた輩（やから）がいたから、

ソイツを追っ払っていたのだ！」

「…それで、どうして君がフォリナさんに迫っていたの…かな？」

…ぬぉっ！？宝山氏の表情が、いつものと違うぞ！？

「いいではないかっ！

フォリナ様に会える機会なんて、そう滅多に無いのだぞ！？」

俺　俺は必死に訴えたが…3人共、ドコか呆れていたぞ…。

「アホな事言ってる場合か！

俺らにゃ、やる事があるだろうが！！

十代、宝山…、コイツを連れ戻すのを手伝ってくれ…。」

俺は必死に抵抗したが、3人に取り押さえられ、

元いた多目的教室まで引っ張られていったのだった…。

クソッ…フォリナ様とお話出来るチャンスが…！！

愛に生きる男　増川！（後書き）

俺は自身の心を見つめ直す為、

日々、鍛錬に明け暮れていた。

そんな中、俺の持つ水晶が多くのアカデミアの生徒から、

微弱ながらも精霊の反応を感知し出した。

強大な反応を辿りながら走っていると、

俺は、異常な光景を目の当たりにするのだった…。

次回、「破滅の足音」

くっ！何だアレは…。

マンジョウメの光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）よりも、

禍々しい何かを感じる…！！

破滅の足音（前書き）

タッグフォース６やターミナルを回して、更新が遅れてしまいました…。

済みませんでした…。

では、お待ちかねの第３１話をどうぞ！

破滅の足音

???side

フゥ…やはり、シェークスピアの手掛けた小説は、心が安らぐ物だな…。

私はココ、イギリスアカデミアの空き教室で読書をしながら、仲間を待っている所だ。

すると、ドアをノックする音が聞こえた…。

…どうやら、来た様だな。

「済まんな…エヴァン。
森林浴をしていた時に呼ばれたのでな…。
ココまで来るのに、少々遅れてしまった…。」

茶色がかった金髪をした、
屈強な体格の男が部屋に入って来た。

彼の名前はガルデン・ボレッグ…。

私の仲間の1人だ。

「それは済まなかったな、ガルデン…。
だが、先日…私達の力が必要とする者が訪問し、依頼を頼んできたのだ…。
その依頼内容なのだが…。
私1人で承諾を決めるには、あまりにも事が大きい物でね…。」
「俺達の力が必要だと？
ソイツは一体何者で、どんな依頼をしてきたんだ、エヴァン？」
ガルデンは冷静に、疑問を投げかけてきた。
「詳しい話は、アーレイが来た時にしようか…。」
「…まだアーレイは来てないのか。
全く…アイツは約束通りの時間に来た試しが無いな…！」
「オレがどうしたって？ガルデン。」
ガルデンが愚痴を零していると、

赤髪の青年が飄々とした返事をして、部屋にやって来た。

彼の名前は、アーレイ・ヴェルテ…。

彼もまた…私の大切な仲間だ。

そして、私の名前はエヴァン・クロイツ…。

私達はイギリスアカデミアの生徒であり、

プロリーグで活躍しているチーム　アース・ガルドのメンバーでもある。

「遅いぞ、アーレイ！

今まで何をしていたんだ！」

「何って…ほら、オレの家って、結構な大家族でさ…。

ガキ共の面倒を見ていて、遅れちまったんだよ…。」

アーレイは、しんみりとした表情でガルデンに弁解をした。

「ああ…お前の家にいる孤児達の事か…。

だが、約束の時間に遅刻をするのは戴けんな…。」

「悪い悪い、気を付けちゃあいるんだけどな…。
アイツらの頼みにゃ、弱いんだ…オレ。」
「各々用事があったと言うのに、急に召集を掛けてしまって済まないな2人共…。
だが、早急に耳に入れたい事なのでね…。
では、話そうか…。」
「さっき話した内容は昨日、エヴァンの屋敷に何者かがやって来て、
お前に依頼を頼んだと言う所までだったな…。」
「そうだ…そしてその人物の名前は、雲雀　空也…。
私達の持つ極星カードを幾つか手掛けたカードデザイナーだ。」
私達の扱うカードは、どれも強大な力を持つが、
安定性に欠けたカード達だった。
だが、世界を回っていた彼ら夫妻と偶然知り合いとなり、
極星カードに興味を持った彼が幾つかカードを手掛けてくれたの

だ。

「あのおっちゃんが、オレ達に頼み事だって？」

「ああ…依頼の１つは、日本のアカデミア本校に赴き、
そこで起こり得るであろう災厄を払って欲しいとの事だが…。」

それを聞いたガルデンは、首を傾げた。

「…今、依頼の１つと言ったか？
その口振りでは、他にも依頼がある様に聞こえるのだが…。」

「察しがいいな、ガルデン。
依頼はあと２つある…。

１つは、エジプトのファラオの墓所近くにあるピラミッドの調査
…。

もう１つは、Ｍｒ　フェニックスが製作したプラネットシリーズ
の行方を突き止める事だ。」

「依頼はオレらの人数と同じで、ちょうど3件か…。

なら…ジャポーネのアカデミアには、オレが行っていいか？

オレ、ジャポーネのアカデミアには、一度行ってみたいと思っていたんだよな～。

なんたって強豪揃いで名が知れ渡ってるあのアメリカ大会で、優勝を頂戴したカイザー亮の母校だからな…。

ヤッベェ…今からワクワクして来たぜ…！」

「オイ、アーレイ！観光しに行くんじゃないんだぞ！！

俺達に課せられた使命を忘れるなよ！」

アーレイが揚々とした態度に、ガルデンが咎めた。

「…分かってるさ、ガルデン…。

オレが使命を忘れた事なんてあったっけか？

使命はキッチリ果たすからさ、安心してくれって、ガルデン。」

「…オレはお前のそういう性格に、

不安を感じさせるんだ…。

まあいい…ならば、ピラミッドを調査する依頼は俺に任せてくれないか、エヴァン？

体力面や隠し部屋を発見するのに、土の構造を知り尽くしている俺が適任だろうからな…。」

「…ああ、遺跡調査はアーレイを除けば、君が適任だろう…。

任せたぞ、ガルデン…。」

ガルデンの提案に、私は静かに賛同する。

「…って事は、残ってる依頼は…。」

「プラネットシリーズの捜索だな。

これは私が引き受けるとしよう…。

私は世界中に顔が利くから、

見つけるのに、そう時間は掛からない筈だ…。」

「ヨッシャ～！じゃあ誰がドコに行くか決まったし、

早速ノーゼス校長に手続きを済まさねぇとな…。

待ってろよ～！ジャポーネ！！

このアーレイ様が、チャッチャッと災厄を払ってやるからな！！」

「調子に乗って足元を掬われるなよ、アーレイ！」

「ハハハ…では行こうか、ガルデン、アーレイ…。

栄光ある未来の為に…。」

「おうよっ！このルーンの瞳に賭けて、

使命を全うしてやるぜ！！」

「ああ…無事に再会を果たせる様、道中で武運を祈るからな…。」

「そうだな…互いに使命を果たせる様、尽力を尽くそう…。

我々の持つ三極神の名に賭けて…！」

こうして互いに再会を誓い合い、

私達は校長室へと向かって行った。

私達の使命を果たす為に…。

？？？↓ベネットｓｉｄｅ

オレはマンジョウメに敗北してから数日間、自身のデッキと向き合っていた。

どうすればマスターから預かったカードと組み合わせる事が出来るのか…。

そんな葛藤に苛まれた時だったな…。

ジュウダイ達がオレに声に掛けて来たのは…。

「どうしたんだ、ベネット？

お前が落ち込んでるなんて、珍しいな？」

「僕達で良ければ、相談に乗るッスよ？」

「いや…お前達に心配される様な事では…。」

オレは遠慮したが、トウヤは構わずに声を掛けて来た。

「そんな事は聞いてみないと分からねぇだろ？

まあ、話してみなって。」

変に詮索されてミッションがバレては元も子もないと思い、

オレはトウヤ達に7枚のカードを見せた。

「…実は、コレらのカードを合わせたデッキを組んでみたのだが…。

中々上手くいかなくてな…。」

「…どれどれ、オォッ！ヴォルカニックのシンクロモンスターにモンスター・エクシーズか！！

どのカードも見た事がない物ばかりだぜ！」

「…確かに、どれも出回ってないカードばかりだな…。

…ベネット、ちょっとお前のデッキを見せて貰っていいか？」

「…ああ、構わない。」

オレはホルダーからデッキを取り出して、ジュウダイ達に見せた。

すると、デッキを見ていたショウが唸り出した。

「…う～ん、ベネット君には悪いけど…。

このデッキ構築だと、バランスが悪い…かな。

シンクロやエクシーズを重点にするなら、

純粋なバーンカードよりも、

もっと攻守が安定、じゃなかったらリクルーター要因のモンスターを入れた方がいいと思うよ。」

「成る程な…ありがとう…ショウ、お陰でデッキを完成させる事が出来そうだ。」

「…へへっ、まあ…全部三沢君の受け売りなんだけどね。」

「…さて、早速自室に戻ってデッキ調整をするとしよう…。

ではな、ジュウダイ達…。」

「まあ…待ちな、ベネット。」

その時、トウヤがオレを呼び止めた。

「…何だ、トウヤ？」

「コイツをお前のデッキに入れてみな…。

この前買ったパックからゲットしたんだが…。

俺のデッキにゃあ合わねぇんでな…お前にやるよ。」

「じゃあ…俺からもコイツをやるぜ！

きっと、お前のデッキに力を貸してくれる筈だぜ！！」

トウヤとジュウダイが、

オレにそれぞれ1枚ずつカードを手渡した。

「いいのか？オレがこれらのカードを貰っても…？」

「いいって…。翔から聞いたけど、お前は龍牙の悪事を暴くのに

一役買ってたそうじゃねぇか。

そのカードはお礼だよ。」

「ああ！あの時はありがとな、ベネット！！
お陰で翔達のカードも戻って来たぜ！」

トウヤとジュウダイは満面の笑みで、お礼を述べた。

「…そうか、ならば有り難く使わせて貰おう…。
では、またな3人共…。」

「うん、またね～！ベネット君。」

「おう、デッキ調整頑張れよ～！」

「デッキが完成したら、俺とデュエルしようぜ～！！」

オレはジュウダイ達と別れて、
ショウのアドバイスを元に、イエロー寮の自室でデッキ調整をした。

…フゥ、まあこんな物か…。

いつもは入れていた純粋なバーンカードは抜いて、
モンスターを展開、手札補充を重点に組み直したぞ。

コレで準備は万端だな…。

何の準備かと言うと…。
最近になって、オレの持っている水晶が、

アカデミアの生徒から微かに精霊の反応があった。

それを辿ろうにも、元の反応を感知出来ず、参っていた…。

だが、最近保健室に運ばれた生徒からも反応があり、
それからは元凶であろう反応を感知出来た。

この調査に備える事もあって、数日間デッキ調整をしていた。

今日、夕方になってから、調査を開始した。

何故かと言うと、その反応は夕方以降に感知していたからだ。

水晶の反応を辿っていったら、オレは異様な光景を目撃した。

「ウアァァッ！！」

『…グフフ、コ…レでオマ…エの生気はオレ達の物…ダ！』

デュエルに負けたであろうブルー生徒が、

見る見るうちに老化していって、倒れてしまった。

対戦相手をしていた生徒…アイツはサキョウか？

アイツは、俺と同じラー・イエローの生徒で、俺の隣の部屋に住んでいた奴だ…。

…水晶がアイツに対して凄まじい反応を示しているな…。

まるでマンジョウメが持つ、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の様な反応だった…。

オレはサキョウが精霊のカードを持っていると確信し、奴に挑むべく、草むらから飛び出た。

…サァ、ミッションスタートだ！！

「おいサキョウ…お前、精霊のカードを持っているな…？

お前は生徒達を昏睡状態にして、

何をしようと言うんだ…？」

するとサキョウは、低い声でせせら笑っていた。
何だ!?アイツから何か不気味な気配を感じる…。

『精霊…?お前、精霊の気配が分かるノ…カ?

…な…ラ、オマエがオ…レらを消滅し…ようと動いている連中の仲間…なのカ?

…グフフ、漸…く見つけ…タ。

先ず…は、オマ…エから葬っ…てやル!』

サキョウは何かを呟きながら、ディスクを構えて来た。

…どうやら、話をする気は無い様だな…。

「いいだろう…お前とのデュエル、受けて立つ!
お前に勝って、精霊のカードを手に入れてみせる!!」

『…ク…ククク。』

「『デュエル!!』」

左京　ＬＰ４０００

ベネット　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能によって、先攻はサキョウからだ…。

『…オレのター…ン、ドロー…。

オレはブリザード・リザードを守備表…示で召…喚。』

サキョウのフィールドに厚い体毛を持つ、青いトカゲが飛び出した。

ブリザード・リザード

ＤＥＦ１８００

『カードを…2枚伏せ…ル。

コレで、オレのター…ンは終了…ダ。』

「オレのターン、ドロー！」

左京　ＬＰ４０００
手札３枚
モンスターゾーン
ブリザード・リザード
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

ベネット　ＬＰ４０００
手札６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

先ずは手堅く様子見といった所か…。

今のオレの手札の状況ならば、ココは襲撃をかける時だ！！

「オレはヴォルカニック・バンカーを攻撃表示で召喚する！」

オレのフィールドに片手が鋭利な銛となっている尖兵が出動した。

ヴォルカニック・バンカー
ＡＴＫ１９００

「バトルだ！ヴォルカニック・バンカーで、
ブリザード・リザードを攻撃！！」

ヴォルカニック・バンカーは、鋭利な銛に高熱を帯びせ、ブリザード・リザードに見舞った。

『…コノ瞬間…ブリザード・リ…ザードの効果…発動…。

更に罠…カード、リグレッ…ト・リボーン…チェーン発動…。

先ずはブリザード・リ…ザードの効果…。

コノカードが戦闘で破壊され…た時、相手に８００ポイントのダメージを与え…ル。』

ブリザード・リザード
レベル３　水属性　獣族
ＡＴＫ６００　ＤＥＦ１８００
このカードが戦闘で破壊された時、相手に８００ポイントのダメージを与える。

ブリザード・リザードは、力尽きる直前に猛吹雪を放った。
その刹那、急激な冷気がオレを襲った。

「…グウッ！な、何だこの凍てつく感覚は！？」

ベネット　ＬＰ４０００→３２００

まるで、本当に吹雪を受けたみたいに冷えてくる…。

『…グフフ、コレがオレ達のデュ…エル…ダ。
コノデュ…エルでハ、ダメー…ジが現実とな…って、プレイ…ヤーを襲う…のダ。』

成る程…このデュエル、
一瞬でも気を抜いたら、
決着が付く前に力尽きる危険性があるな…。

『更に、リグレッ…ト・リ…ボーンの効果…。
ソノ戦闘で破壊され…タモンスター1体を表側守備表…示で墓…
地から特殊召喚…。
…ブリ…ザード・リザードを守備…表示で特殊召喚…。』

ブリザード・リザード
ＤＥＦ１８００

リグレット・リボーン

通常罠

自分フィールドのモンスターが戦闘で破壊された時に発動出来る。
その戦闘で破壊されたモンスター1体を守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは自分のエンドフェイズに破
壊される。

「…クッ！だがこの瞬間、
ヴォルカニック・バンカーの効果を発動！
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、
デッキから、ヴォルカニックと名の付く攻撃力１５００以下のモンスター１体を特殊召喚出来る！！
カモン！ヴォルカニック・アラーム！！」

ヴォルカニック・アラーム
ＡＴＫ１５００

ヴォルカニック・バンカー
レベル４　炎属性　炎族
ＡＴＫ１９００　ＤＥＦ１０００
このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、
自分のデッキから攻撃力１５００以下のヴォルカニックと名の付くモンスター１体を特殊召喚出来る。

『…グフフ、そのモンスターの攻撃力で…ハ、ブリザ…ード・リザードの守備力にハ…及ばなイ…。
バトルは続行…出来ま…イ？』

「確かにお前の言う通りだ…。
…だが、コイツの役割は別にある！
オレはメインフェイズ２に移り、
レベル４　ヴォルカニック・バンカーに、
レベル３のヴォルカニック・アラームをチューニング！！
傲慢なる魂よ、煉獄の炎を纏う覇者となれ！
シンクロ召喚！！カモン、ヴォルカニック・ルシファー！！」

ヴォルカニック・アラームが３つのリングに変化し、
ヴォルカニック・バンカーがくぐると、業火に燃えたぎる大鎌を携えた大悪魔が、
灼熱の焔より出でた。

ヴォルカニック・ルシファー
ＡＴＫ２６００

『…ほウ、シンク…ロ召喚…カ。』

「行くぞ！オレはヴォルカニック・ルシファーの効果発動！！
1ターンに1度、相手フィールドのカード1枚を破壊し、５００
ポイントのダメージを相手に与える！
オレはルシファーの効果で、お前のブリザード・リザードを破壊
する！」

ルシファーの振り上げた灼熱の鎌が、
ブリザード・リザードを引き裂いた。

『…グッ…ク！』

左京　ＬＰ４０００→３５００

『…だガコノ瞬間、罠…発動！ドッペ…ル・サモン！！
自分フィール…ドのモンスター…が破…壊され…た時、
デッキから、同レベルモンス…ター1体…を特殊召喚…すル。
出で…よ、ボーガ…ニアン。』

ボーガニアン

ＡＴＫ１３００

ブリザード・リザードが破壊された瞬間、入れ替わった様にボウガンを構えた一つ目のメカが出現した。

ドッペル・サモン

通常罠

自分フィールドのモンスターが破壊された時に発動出来る。
自分のデッキから、同レベルモンスター１体を特殊召喚する。

「オレはカードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

『…グフフ、オレのター…ンダ…ドロー！』

左京　ＬＰ３５００

手札４枚

モンスターゾーン

ボーガニアン

魔法・罠ゾーン　無し

ベネット　ＬＰ３２００

手札３枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ルシファー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

『コノスタン…バイフェイ…ズ、ボーガニアンの効果…発動。相手に６００ポイン…トのダメージ…を与え…ル！』

ボーガニアン

レベル３　闇属性　機械族

ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００

自分のスタンバイフェイズに相手に６００ポイントダメージを与える。

ボーガニアンはサキョウの宣言を合図に、
オレにボウガンを放った。

「…グッ！…ッオ！！」

ベネット　ＬＰ３２００→２６００

『…オレは手札から死者転…生を除外シ、
モノ…ケロースを特殊召喚す…ル。
コノカード…ハ、自分の手札か…ら魔…法カード１枚を除外す…
る事デ、
特殊召喚出来…ル。』

モノケロース
ＤＥＦ１０００

モノケロースだと？先程までの戦略を見る限り、バーンデッキの
筈…。

いや待て…モロケロースのレベルは、ボーガニアンと同じレベル
３だ！

まさか、エクシーズ召喚か！！

『…ク、ククッ！オレはレベル３のボーガ…ニアンと、モノ…ケロースをオー…バー・レ…イ！！

２体のモンス…ターデ、オーバー・レイ・ネット…ワークを構…築！！

禁断の技…術より生まれシ…禁忌な…ル巨兵ヨ…。

ソノ身に…力と呪いを…宿シ、全てを滅ぼ…セ！！

エク…シーズ召喚！！出でヨ…オレの…化身、？３０！！

忌まわ…しき力デ…全てを溶か…し尽くセ！！

破滅のアシッド・ゴーレム！！』

サキョウのフィールドに存在する２体のモンスターが渦に入ると、

そこからおぞましい形相をした巨像が、

酸を垂れ流しながらゆっくりと這い上がって来た。

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ＯＲＵ　０↓２

ＡＴＫ３０００

何だ…コレは！？水晶があのモンスターとサキョウから、同じ反応を感知しているぞ？

…まさか、サキョウは…！

「…お前、サキョウでは無いな？

答えろ、お前は一体何者だ！」

すると、奴は不気味に笑いながら答えた。

『…グフフ！！オレ達…はナンバー…ズと呼ばれていル…。

お前が…言う精霊と同…等な存在…ダ。』

では…サキョウは、あの精霊に操られているというのか！？

それに奴の口振りでは、奴の他にナンバーズとやらが複数いる様だな…。

『…グフフ、行くゾ！

オレ自身で、ヴォルカ…ニック・ルシ…ファーを攻…撃！！

ヘヴィ・クラッシャー！！』

アシッド・ゴーレムは拳を振るい、強烈な一撃をルシファーに見舞った。

「…ウッ！…ッグ！！」

ベネット　ＬＰ２６００→２２００

「…だが、ヴォルカニック・ルシファーは戦闘及びカード効果で破壊される時、
ＬＰを５００払う事で、その破壊を無効にする！」

ルシファーはアシッド・ゴーレムの一撃を受けるが、業火をたぎらせて攻撃の威力を押し返した。

ベネット　ＬＰ２２００→１７００

『…グフフ、マアイイ…。

オレはカー…ドを２枚伏せテ、ターンエ…ンド…ダ。

コレか…らお前を破滅…させてや…ル！！』

破滅の足音（後書き）

オレはサキョウ…いや、ナンバーズにデュエルを挑み、
遂に奴はナンバーズカードを召喚した。

だが、奴は奇抜な行動に出る。

『オレ自身…のコント…ロールを、お前に移…ス。』

「何？コントロールを移すだと！？
一体、何を考えている！？」

オレのフィールドに移った時、
奴のナンバーズカードの効果が明らかになっていった…。

次回、「自滅のナンバーズ　破滅のアシッド・ゴーレム！！」

勝利への活路がある限り、オレは…オレ自身のデッキと共に戦い続ける！！

自滅のナンバーズ　破滅のアシッド・ゴーレム！！（前書き）

大変お待たせしました！！

第３２話です。

今回の話でベネットが、十代と塔也から貰ったカードが明らかになります。

自滅のナンバーズ　破滅のアシッド・ゴーレム！！

ベネットｓｉｄｅ

オレは今、サキョウ…いや、違ったな…。

サキョウに乗り移ったであろう、ナンバーズにデュエルを挑んでいる。

…それにしても、奴がエクシーズ召喚した破滅のアシッド・ゴーレムと言うモンスター・エクシーズ…。

マンジョウメの持つ光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）と違って、何て禍々しいモンスターなんだ…。

オレ自身は、精霊が見える訳では無いが、

あのモンスターから異様なプレッシャーを感じてしまう…。

『…グフフ、どうし…タ？

お前…のターンだゾ？

それト…モ、オレの姿を見…て恐…れを抱いた…カ？』

奴は余裕が出てきたのか、
オレに挑発を仕掛けて来た。

「…フッ、オレは幾多ものミッションに挑み、心身共に鍛え上げて来た戦士だ！

ミッションの最中に恐れなど…感じはしない！！」

オレは気持ちを切り替える様に、奴に言い放った。

『…グフフ、ソノ威…勢、ドコマデ持つか…ナ？』

「行くぞ、ナンバーズ！！オレのターン、ドロー！」

左京　ＬＰ３５００

手札０枚

モンスターゾーン

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

ベネット　ＬＰ１７００

手札４枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ルシファー

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

奴の魔法・罠ゾーンには、２枚のリバースカード…。

アレは恐らく…アシッド・ゴーレムをルシファーの効果から守るカードに違いない…。

…だとしても、オレには次なる手が残っている！

「オレはヴォルカニック・ルシファーの効果発動！！

１ターンに１度、相手フィールドのカード１枚を破壊し、相手に５００ポイントのダメージを与える！

オレはアシッド・ゴーレムを破壊する！！」

奴はどう出る！？

『…無駄ダ！オレのオーバー・レ…イ・ユ…ニットを１つ使用シ、カウン…ター罠、アウ…ト・コー…ド発…動！

自分…フィールドのモンス…ター・エクシーズか…らオーバー・レイ・ユニットを１つ使用シ…テ、相手のカード効…果の発動また…ハモンスターの召…喚・特殊…召喚を無効にシテ破…壊すル！』

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ＯＲＵ　２↓１

「クッ！カウンター罠だったか！！」

ルシファーが大鎌を振りかざした瞬間、

アシッド・ゴーレムがユニットの光を１つ、ルシファーに炸裂させた。

「…やるな、ルシファーは破壊を無効化にする効果があるが…。

スペルスピードの関係上、カウンター罠の効果までは防げない…。」

『…グフフ、どう…ダ？
お前の主…力モンスターを葬っ…テやった…ゾ！』

…だが、コレは想定内だ！

「罠発動！ピース・ルーカス！！

自分フィールドのシンクロモンスターが破壊され墓地に送られた時、

自分のデッキから、破壊されたモンスターと同じ属性・レベル３以下のチューナー１体を特殊召喚出来る！

オレはルシファーと同じ炎属性で、レベル３のヴォルカニック・チャフを守備表示で特殊召喚する！！

更にヴォルカニック・リボルバーを、攻撃表示で召喚！」

ルシファーが爆散した残り火から、
薄っぺらい金属の体をした緑色の悪魔が飛び出し、
更に巨大なリボルバーを装填したメカも現れた。

ヴォルカニック・チャフ

ＤＥＦ１３００

ヴォルカニック・リボルバー
ＡＴＫ１２００

ピース・ルーカス

通常罠

自分フィールドのシンクロモンスターが破壊され墓地に送られた時、
自分のデッキから、破壊されたモンスターと同じ属性・レベル３以下のチューナー１体を特殊召喚出来る。

『…グッ！またシン…クロ召喚をスルつ…もり…カ！』

「…いや、今度は違うな…。」

『…何ダ…ト？まさ…カ、エク…シーズ召喚…カ！』

オレが最初にシンクロ召喚をした事で、

奴は、オレがエクシーズ召喚をしないと踏んでいたからか、大層驚いていた。

「…フッ、行くぞ！オレはレベル３のヴォルカニック・チャフと、
ヴォルカニック・リボルバーをオーバー・レイ！！
２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！
煉獄の焔よ…幻惑と絶望に交わりて、
罪人を惑わす魔王となれ！
エクシーズ召喚！！カモン、ヴォルカニック・ベルフィーゴ！！」

チャフとリボルバーの２体が赤い閃光となって渦に入ると、
そこから背丈の小さな大悪魔が出現し、　無数の刃とユニットの
光を宙に浮遊させながら、不敵な笑みを浮かべている。

ヴォルカニック・ベルフィーゴ
ＡＴＫ２０００
ＯＲＵ　０→２

『…グッフ…フフ、ハッハ…ハハーッ！』

「な、何だ！？何がおかしい！？」

『お前は…オレの術…中に嵌っ…タ！

オレ自身のオーバー・レ…イ・ユニットを1つ使用シ、罠発…動！スペー…ス・シフト！！

相手がモン…スターを召喚・特…殊召喚し…タ時に発動出来…ル。

自分フィー…ルドのモンスター・エク…シーズと相手フィ…ールドのモンス…ター1体のコントロー…ルを入れ替え…ル！！』

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ＯＲＵ　１↓０

「な、何!?アシッド・ゴーレムをオレのフィールドに移すだと!?」

何故、アシッド・ゴーレムをオレのフィールドに…。

ベルフィーゴの効果を警戒してなのか、

それとも、別の思惑が…？

スペース・シフト

通常罠

相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、自分フィールドのオーバー・レイ・ユニットを1つ使用して発動出来る。

自分フィールドのモンスター・エクシーズと相手フィールドのモンスター1体のコントロールを入れ替える。

『…サァ、お前のヴォルカ…ニック・ベル…フィーゴを貰おウ…カ！！

代わ…りに…オレ自身を…くれてや…ル！！』

アシッド・ゴーレムはユニットの光を使って、オレの視界を一瞬眩ませると、

ベルフィーゴは奴のフィールドに移り、

アシッド・ゴーレムはオレのフィールドへと移った。

「ベルフィーゴの効果を警戒して、スペース・シフトを発動しただろうが、

アシッド・ゴーレムの高い攻撃力が仇となったな！

コレで、お前のフィールドを一掃出来る！

アシッド・ゴーレムで、ヴォルカニック・ベルフィーゴを攻撃ッ！！」

だが…オレが攻撃宣言を下しても、アシッド・ゴーレムはピクリとも動こうともしなかった。

「な、何故だ？何故アシッド・ゴーレムは攻撃しない！？」

すると奴は不敵に笑いながら、語り出した。

『…グッハハ…ハ！オレ…にハ、幾つ…かの呪いが…施され…てイルのダ！』

「呪いだと？」

『…ソウダ、そしてオレの呪…いの１つニ、

オレに…オーバー・レ…イ・ユニ…ットが存在しな…イ場合に…ハ攻撃を行え…ナイ呪いが…アル！』

…そうか、奴はそれを見越して、アシッド・ゴーレムをオレのフィールドに送りつけた訳か…！

『…グッハハ！オレの忌ま…わシイ…呪いの数々…。

存分に…味わうが…イイ！！』

オレの手札には、上級モンスターがいる。

…が、このターン既に通常召喚をしてしまった為、
このターンの内にアシッド・ゴーレムを除去する術が無い…。

「…クッ！オレはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ…。」

『グフフ！コノターンか…ら恐怖に震え…るガイイ！！
オレのター…ン、ドロー！』

左京　ＬＰ３５００

手札１枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ベルフィーゴ

（ＯＲＵ×２）

魔法・罠ゾーン　無し

ベネット　ＬＰ１７００

手札２枚

モンスターゾーン

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

『オレはヴォルカ…ニック・ベル…フィーゴから…オーバー・レ…イ・ユニッ…トを全て使用シ、
魔法カー…ド、コスモ・ブース…トを発…動。

自分フィー…ルドのモンス…ター・エクシーズのオー…バー・レイ・ユ…ニットを全て使…用シテ、

使用し…たオーバー・レ…イ・ユニッ…トの数だケ、カード…ドローす…ル。

使用しタ…ユ…ニットは２つダ…。

オレは…カードを２…枚ドローすル…。』

ヴォルカニック・ベルフィーゴ

ＯＲＵ　２→０

コスモ・ブースト

通常魔法

自分フィールドのモンスター・エクシーズのオーバー・レイ・ユニットを全て使用して発動する。

使用したオーバー・レイ・ユニットの数だけ、自分のデッキからカードをドローする。

…何!?ベルフィーゴのユニットを破棄しただと!?

奴のディスクにはベルフィーゴのカードがあるから、どんな効果なのかを確認出来る筈なのだが…。

…そう言えばオレのディスクには、アシッド・ゴーレムがあったな…。

オレはアシッド・ゴーレムのカードを確認したが、あまりのデメリットが多い効果に驚愕してしまった。

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ランク３　水属性　岩石族／エクシーズ

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ３０００
レベル３モンスター×２体
自分のスタンバイフェイズに、
このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ破棄する。
破棄しなかった場合、このカードのコントローラーは２０００ポイントダメージを受ける。

このカードのオーバー・レイ・ユニットが存在しない場合、
このカードは攻撃出来ない。

このカードがフィールド上に存在する限り、
コントローラーはモンスターを特殊召喚出来ない。

何だ、この効果は…！

コイツは相手に送りつける事が前提の効果じゃないか！！

『…グフフ、ソノ様子だト、オレの呪い…を理…解した様ダ…ナ。』

奴は不敵にオレを見据えている。

『…オレはカード…を２枚伏せ…テ、ターンエンド…ダ！』

「オレのターン、ドロー！」

左京　ＬＰ３５００

手札０枚

モンスターゾーン

ヴォルカニック・ベルフィーゴ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

ベネット　ＬＰ１７００

手札３枚

モンスターゾーン

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

『そしテ、このスタンバイフェイズ、
オレの呪…いが発動ス…ル！
サァ…オレの呪い…を受けロ！！』

「まだだ！オレは自分フィールドのアシッド・ゴーレムを対象に罠カード、ディポーションを発動！

自分がダメージを受ける時、
自分モンスター1体を選択して発動し、

自分が受けるダメージを無効にする代わりに、
その数値分、選択したモンスターの攻撃力または守備力をダウンさせる！」

アシッド・ゴーレムの強酸は、オレに流れ着く前に蒸発し、
アシッド・ゴーレムを衰弱させていった…。

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム
ＤＥＦ３０００→１０００

『…グウ…ゥ～ッ！オレの呪いを上…手く回避したダ…ト！？』

ディポーション

通常罠

自分がダメージを受ける時、
代わりに受けるダメージ数値分、
自分フィールドのモンスター1体の攻撃力または守備力をダウンさせる。

「行くぞ！オレはアシッド・ゴーレムをリリースし、
ヴォルカニック・ハンマーをアドバンス召喚する！」

アシッド・ゴーレムは苦しみながら光の粒子となると、
金色に輝く鎧体を持つ怪獣となって、
その身に灼熱の炎を宿らせた。

ヴォルカニック・ハンマー

ＡＴＫ２４００

「バトルだ！ヴォルカニック・ハンマーで、ヴォルカニック・ベルフィーゴを攻撃！！

ヴォルカニック・ブラスター！！」

ヴォルカニック・ハンマーは、
両手に灼熱の炎を集約し、
それをベルフィーゴに放った。

『…グッフフ、罠発…動！生贄の…抱く爆…弾！！

相手フィール…ドのアド…バンス召喚に…成功したモン…スターが攻撃し…タ時に発動…。

相手フィール…ド上の表…側攻撃表…示のモンスターを全…て破壊シ、１０００ポイントのダメー…ジを与え…ル！！』

生贄の抱く爆弾

通常罠

相手フィールド上に存在するアドバンス召喚に成功したモンスターが攻撃した時に発動出来る。

相手フィールド上の表側攻撃表示モンスターを全て破壊し、
相手に１０００ポイントダメージを与える。

成る程…奴は、オレがアシッド・ゴーレムをアドバンス召喚で除去する事を読んでいたのか！

…だが、コッチも闇雲に突撃した訳ではない！！

「…読んでいた、お前がヴォルカニック・ハンマーの攻撃を妨害するカードを張っていた事は！

オレはヴォルカニック・ハンマーをリリースし、

罠発動！火霊術－「紅」！！

自分フィールドの炎属性1体をリリースして発動し、

相手に、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！！」

火霊術－「紅」

通常罠

自分フィールドの炎属性1体をリリースして発動出来る。

相手に、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

「リリースしたヴォルカニック・ハンマーの攻撃力は２４００だ…。

よって、２４００ポイントのダメージを与える！！

ゴー！ヴォルカニック・ハンマー！！奴に突撃だ！！」

ヴォルカニック・ハンマーは巨大な火球となり、
奴を灼熱の炎で焼き尽くす。

『…グウオォッ！…ッグ…ウゥッ！！』

左京　ＬＰ３５００→１１００

『…ウグ…ゥ！ヨ…クモ、ココま…でオレのＬＰを…！！
ウグオォォッ！！必…ずお…前を破滅させて…ヤル！！』

ＬＰを半分以上失ったからか、
奴は焦り出した様だな…。

この調子ならば…！

「オレはカードを１枚伏せて、ターンエンド！！」

『…ッオォー！！オレのターン…ダ！ドロー！！』

左京　ＬＰ１１００
手札１枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

ベネット　ＬＰ１７００
手札１枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

『オレは罠カー…ド、無謀な欲…張りを発…動！
次のオレのドローフェイ…ズをス…キップすル代わりニ、
カード…２枚ドローす…ル！！
…ッ！グッフフ！！オレは…カードを２…枚伏せ…テ、ターン
エンド！！』

奴が不気味に笑い出した…。

あの様子だと、奴はオレを倒す事が出来るカードを引き当てた様だな…。

一体、奴は何を伏せて来た？

…だが、どちらにせよオレには…まだ、対抗策が残っている！！

「このターンで、ミッションを遂行させる！

オレのターン、ドロー！」

左京　ＬＰ１１００

手札１枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

ベネット　ＬＰ１７００

手札２枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

伏せカード×１

「オレは魔法カード、石油採掘を発動！

このカードは、自分の墓地からレベル４以下の炎属性を２体まで手札に加える効果がある。」

このカードはジュウダイから貰った物だ…。

オレのデッキは炎属性で統一していて、

よく墓地へ送る事が多いから、

コイツは大変重宝するカードだな…。

石油採掘

通常魔法

自分の墓地からレベル４以下の炎属性を２体まで手札に加える。

「この効果でオレは墓地から、ヴォルカニック・バンカーと、

ヴォルカニック・アラームの２体を回収する。

そして手札のヴォルカニック・アラームを墓地に送り、魔法カード、ファイヤー・バックを発動！

手札の炎属性1体を墓地に送り、
墓地の炎属性1体を特殊召喚する！

オレが蘇らせるのは…ヴォルカニック・ルシファーだ！！」

煉獄の火柱が立ち上ると、
そこから、ルシファーが大鎌を振るって飛び出した。

ヴォルカニック・ルシファー
ＡＴＫ２６００

『…グッフッフ、お前が特殊…召喚したヴォルカ…ニック・ルシファーをリ…リースし…罠カード、カース…ド・サモン…発動！！』

カースド・サモンだと！？
あのカードを発動されたらマズい！！

「…クッ！オレはカースド・サモンにチェーンして、
墓地のヴォルカニック・チャフの効果発動！

オレの墓地にこのカード以外の炎属性が存在し、

相手がカード効果を発動した時、
このカードを墓地から除外する事で、相手が発動したカード効果を無効にし、破壊する！」

ヴォルカニック・チャフ

レベル３　炎属性　炎族

ＡＴＫ５００　ＤＥＦ１３００

相手がカード効果を発動した時、

自分の墓地にこのカード以外の炎属性が存在する時、
このカードを除外する事で、相手が発動したカード効果を無効にして破壊する。

『ムダ…ダ！オレは…手札を１…枚捨テ、カウン…ター罠、天罰…発動！

手札を…１枚捨て…テ発動…。

モン…スターの効果の発…動を無効に…シ、破壊すル！！』

クッ！カースド・サモンを無効に出来なかったか…！

天罰

カウンター罠

手札を1枚捨てて発動する。

モンスター効果の発動を無効にし破壊する。

『コレで…カースド・サモンは…無効にはなら…ナイ。

カースド・サ…モンの効果、

相手フィールドにリリースしたモンスターよりモ攻撃力以上のモンスター1体を、

自分の墓地より特殊召喚すル！！

オレ自身…アシッド・ゴーレムを、お前のフィール…ドに蘇らせ…ル！！』

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ＡＴＫ３０００

カースド・サモン

通常罠

相手フィールドに召喚・特殊召喚されたモンスター1体をリリースして発動出来る。

相手フィールドに、リリースしたモンスターよりも攻撃力以上のモンスター1体を、
自分の墓地から特殊召喚する。

「…だが、オレにはまだ通常召喚が残っている！

オレはヴォルカニック・バンカーを攻撃表示で召喚！」

ヴォルカニック・バンカー
ＡＴＫ１９００

「コレで決める！ヴォルカニック・バンカーで、ダイレクトアタックだ！！」

『オレは…墓地からネク…ロ・ガードナーを除…外シテ、効果発動…。

相手モン…スター1体の攻撃を無効…にスル！

ヴォルカ…ニック・バンカーの攻撃は…無効ダ！！』

ヴォルカニック・バンカーが襲撃をかけようとした時、

半透明の戦士が押し返した。

ネクロ・ガードナー

レベル３　闇属性　戦士族

ＡＴＫ６００　ＤＥＦ１３００

　このカードを自分の墓地から除外する事で、
相手モンスター１体の攻撃を無効にする。

『…グッフッフ！コレで…このターン、お前の攻撃は…打ち止め…ダナ。

コレでお前は、次のお前のターン…オレの呪いを受けて…終わり…ダ！！』

「…ああ、その様だな。

…コイツが無ければな！！」

トウヤから貰ったカードで、
このデュエルをオレの勝利で完遂出来る！

「オレはアシッド・ゴーレムを選択し、リバースカードオープン

！速攻魔法、バックアップ！

このカードは、自分フィールドのモンスター・エクシーズ１体を選択して発動する！

自分の墓地から、選択したモンスター・エクシーズのランク以下のレベルを持つモンスター１体をオーバー・レイ・ユニットとして装着する！！

オレは墓地のヴォルカニック・リボルバーを、

アシッド・ゴーレムのユニットとして装着する！！」

？３０　破滅のアシッド・ゴーレム

ＯＲＵ　０↓１

バックアップ

速攻魔法

自分フィールドのモンスター・エクシーズ１体を選択して発動する。

自分の墓地から、選択したモンスター・エクシーズのランク以下のレベルを持つモンスター１体をオーバー・レイ・ユニットとして装着する。

『…何ダ…ト!?モンスター・エク…シーズに…ユニットを装着す…るカード…ダト!!』

奴が手札を墓地送りにしたのは天罰でのコストのみ…。

バンカーの攻撃でネクロ・ガードナーを使用した今、
奴には攻撃を防ぐ手立ては…無い!

「アシッド・ゴーレムはユニットが無ければ攻撃が出来ない…。

…が、ユニットを装着した今、
攻撃が可能となる!

コレでミッション・コンプリートだ!!

アシッド・ゴーレムで、
お前にダイレクトアタック!!

ヘビィ・クラッシャー!!」

アシッド・ゴーレムの繰り出した剛打によって、
奴は吹き飛んでいった。

『グウゥ…!ッオォォ〜ッ!!』

左京　ＬＰ１１００→０

『オ…オノレ～！！こうなった…ラ、
お前の意…識を乗っ取っテ…ヤ…ル！！」

デュエルが終わったにも関わらず、
ソリッドビジョンである筈のアシッド・ゴーレムは消えず、
オレに襲い掛かって来た。
すかさずオレは、装着していたディスクを銃に変形させた。

「ならば…オレは、その前にお前を狩り取るまでだ！！…ファイヤッ！！」

依頼人から預かったカードを装填し、アシッド・ゴーレムに射出した。

『…グウッ！！ナ、何ダ…コレは！？
…グウッ！…ッオォォッ…！！』

アシッド・ゴーレムはオレが射出したカードに見る見る内に吸収

され、

やがて、奴の声は途絶えていった。

そしてオレは、アシッド・ゴーレムのカードを回収した。

「コレが、ナンバーズ…精霊のカードか…。

コイツを依頼人に配送するのは明日にして、

今日はひとまず報告書を作成するとしよう…。」

その後は…依頼人の命令があるまで待機だな…。

ひとまずは、ミッション・コンプリート…だな。

自滅のナンバーズ　破滅のアシッド・ゴーレム！！（後書き）

アカデミアに2人の留学生がやって来たぜ！

1人目は、イギリスアカデミアの生徒でもあり、
チーム　アース・ガルドのメンバーのアーレイ・ヴェルテ！

そして2人目は、アメリカアカデミアからやってきた帰国子女の
凪原（なぎはら）　綾（あや）だ。

鮫島校長が、歓迎式でアーレイと凪原のタッグデュエルを提案したんだが…。

次回、「襲来！神々の遣いと暴走列車」

な、何ぃ～！？俺が増川とタッグを組めだと～！？

襲来！神々の遣いと暴走列車（前書き）

大変お待たせしました！

今回は塔也と増川が、新キャラ2人とタッグデュエルをします。

では、第３３話をどうぞ！

襲来！神々の遣いと暴走列車

アーレイｓｉｄｅ

オレは今、エヴァンがチャーターしたフェリーに乗って、
ジャポンアカデミアに向かってる訳だが…。

ファ～…ジャポンはイギリスから離れているもんだから、
到着するまで時間が掛かっちまうぜ…。

暇つぶしにデュエルしようにも、
エヴァンもガルデンもいねぇしよ…。

オレはあてがわれた部屋で備え付けのテレビで映画を見ていると、
オレの携帯から着信音が聞こえた。

画面を確認すると、覚えのある番号だった…。

…あのおっちゃんからか。

「もしも～し！久し振りだな…おっちゃん、アーレイだぜ。

元気にしてたか～？」

「ハハハ、勿論さ！君も元気そうだな、アーレイ君。
君の家に住んでいる子供達も元気にしているかな？」

「ああ！勿論元気にしてるぜ～。
元気過ぎて、時々オレの手が焼けちまう位だぜ。」

久し振りにおっちゃんの声を聞いたけど、相変わらず元気いっぱいだな…。

いや～良かった、良かった。

「ハハハ、それは良かった。

…さて、先ずはお礼を言わせて欲しい…。

今回は私の依頼を受託してくれてありがとう…アーレイ君。」

「礼なんていいって、おっちゃんはオレ達に、新しい極星カードを作ってくれた恩があるんだぜ？
それに世界を救うのは、
オレ達の使命…ってな。」

「…そうか、では早速今回の依頼内容を話そうか。
今回…日本のアカデミアに行って貰う訳だが…。
そこで君には、あるカードを回収して貰いたいんだ。」

「あるカードねぇ…。
…それって、もしかしてナンバーズカードの事か、おっちゃん?」

すると、おっちゃんは驚いた様子で答えた。

「あ…ああ。ひょっとして君達は、ナンバーズカードを知っているのかい?」

「知ってるもなにも…最近、イギリス中で騒ぎを起こした困り者でね…。

ま、その騒動はオレ達で鎮めたんだけど…な。」

「それは心強い限りだ。
ナンバーズカードは、何の力を持たない者が扱うと、
たちまちそのカードに心を支配されると言う恐ろしいカードだ…。

」

「…それも知ってるぜ、オレの所にいるガキの1人もナンバーズカードを持ってたからな…。

…で、おっちゃんに聞くけどさ、

ジャポンアカデミアにナンバーズカードがあるって目星がついてんだよな？

なら…おっちゃんはどんなナンバーズカードがあるのか知ってんじゃないのか？」

そう聞くと、おっちゃんは神妙な口調で答えた。

「…ああ、ペガサス会長の遺産の中にマヤの預言書と言う石碑があったんだが…。

その石碑に、日本のアカデミアらしき建造物が、大蛇の魔物に襲撃されている絵が刻まれていたんだ…。」

「オイオイおっちゃん…。

まさか目星を付けた理由って、その石碑に刻まれてたからってんじゃ…。」

「アーレイ君！マヤの預言書に刻まれた事柄はね、

全て実際に起こっているんだよ！！

…それに、マヤの預言書は、
ペガサス会長が厳重に保管していた物だったからね…。

眉唾物とは思えない…。」

オレは半ば呆れていたが、
おっちゃんは反論した。

「分かった分かった…。

取り敢えず、大蛇の姿で間違い無いんだな？

なら…後はルーンの瞳でソイツを捜し出して、頂戴してやるぜ！」

「くれぐれも気を付けてくれよ…アーレイ君。

石碑には他にもナンバーズカードらしき魔物が刻まれていたから、

ソイツ1体だけではないかもしれないぞ…。」

「心配すんなって、おっちゃん！

何体いようが、オレが纏めて頂戴してやるぜ！！」

「うむ…任せたぞ、アーレイ君。
武運を祈っている。」

おっちゃんはオレに激励を言ってから携帯を切った。

…さ～てと、待ってろよ～ナンバーズ！

このアーレイ様が、お前らを纏めて頂戴しに行くからな！！

アーレイ↓？？？ｓｉｄｅ

…ホウ、ナンバーズか。

オレはベネットから送られた報告書を目を通した後に、
同封されたカードを眺めている。

精霊とは力が似て非なる存在だが…、
強大な力を秘めているカード…。

ナンバーズカードはオレの捜している物では無いが、
この強大な力は、真実（マアト）の羽根を潰す手駒として使える可能性がある…。

そんな時、誰かがドアをノックした。

「…入りたまえ。」

オレの言葉に従い、赤髪のボブヘアーの女子生徒がドアを開け、オレに一礼をする。

「…失礼します。アタシに何か御用でしょうか？マッケンジー校長。」

「…待っていたよ、アヤ。

君には私が呼び出した用件は、大方察しはついているかもしれないが…。

君にはある場所に赴いて、ナンバーズカードの回収をして貰いたい。」

「…分かりました、マッケンジー校長。

それで、アタシがナンバーズカードを回収に行く場所ってドコですか？」

「…ウム、今回君に行って貰う場所は、ジャパンアカデミアだ。」

「…ジャパン!?…って事は日本ですか!?」

アヤは驚愕した様子で、オレに尋ねた。

「…そう、ジャパン…君の故郷だ。

君にとっては、懐かしい故郷の空気を味わう事となるだろう…。」

「…日本かぁ。もしかしたら…アカデミアだったら、再会出来るのかな～?」

「…コホン、依頼内容を続けても構わないかな?」

「…あっ、は…はい!どうぞ!!」

オレは咳払いをして、アヤに依頼を言い渡した。

「今回の依頼内容は、ジャパンアカデミアに存在するナンバーズカードの確保及び、先発で送ったベネットの監視だ…。」

「…ベーネンを?何故ですか、マッケンジー校長?」

「ベネットは優秀な人物ではあるが、
情に左右される所があるからな…。
それが原因で、所有者を逃す可能性がある。」

「…フ～ン、そういう事ですか…。
まあ…アタシだったら誰が所有者だとしても、逃がす真似は絶対にしないっ！！

ナンバーズカードは…アタシの両親の敵だ！！」

「その通りだ…ナンバーズカードは、君の両親を生死の境に立たせた巨悪の代物だ…。
それを逃す事はあってはならない。」

「任せて下さい！マッケンジー校長！！
日本アカデミアに蔓延（はびこ）るナンバーズカードは、
アタシが根こそぎ狩ってやるっ！！」

「…フフフ、では吉報を待っているよ、アヤ。」

さっきオレが確認したナンバーズには、
僅かながらオレの魔力がこびり付いていた…。

オレが一時期、あの男に憑依した時に作成したカードがナンバーズカードに変化したのか？

どちらにせよ、オレの心臓を取り込んだ白き魔物（カー）には及ばんが、
そのナンバーズカードの力を取り込めば、オレは更なる力を得る事が出来そうだ…！

…クックック、早くオレの魔力を宿したナンバーズカードを持ってくるのだ！！

？？？→塔也ｓｉｄｅ

「なぁなぁ！さっきのモニターを見たかよ、みんな！！
このアカデミアに、あのアーレイがやって来るってよ！！」

俺は思わず興奮しながら、十代達に叫んでいた。

…と言うのも、昼休みにオレは十代・翔・宝山・フォリナ・明日香の6人と一緒に、

いつものロビーで昼飯を食べてたんだが…。

その時に映ったモニターに、

プロリーグのチームブロックで不敗神話をおっ立てた、あのチーム　アース・ガルドのメンバーのアーレイが、

このアカデミアに留学して来るというビッグニュースが飛び込んできたからだ。

「…どうしたんだよ、塔也？

何そんなに興奮してんだ？」

「オイオイ…コレで興奮しないでどうするよ？十代！！

俺達のアカデミアにプロデュエリストがやって来るんだぜ！？」

十代が半ば呆れているが、俺は更に熱く語ったぜ！

「なぁ…みんな、そのアーレイって奴はそんなに凄い奴なのか？」

「ジュウダイ君、アーレイを知らないのデースカ！？

世界中のデュエリストにアトラクトされているノニ…。」

「アーレイ・ヴェルテ…。

彼はイギリスアカデミアの生徒でありながら、

プロリーグのチームブロックで、

チーム　アース・ガルドの一員として活躍しているプロデュエリストなんだ…。」

「それに…彼がいるチーム　アース・ガルドは、

プロリーグに初出場してから、1度も敗れた事が無いのよ…。」

「エェ～ッ!!嘘だろ!?プロリーグのデュエルで1度も負け無しかよ!?

おい何だよ、みんな!ソイツらってスゲ～じゃねぇかよっ!!」

宝山と明日香から説明を聞いて、

ようやく十代は事の重大さに気付いた様だな…。

「…クウゥ～ッ!!俺、早くアーレイって奴とデュエルしたくなって来たぜ!!

なぁ…ソイツって、いつアカデミアに来るんだ!?」

「さっきのモニターには、

明日にはアカデミアに着くって映ってたぜ！」

「ココにやって来るのは、
アーレイだけじゃ無いよ、塔也君。
アメリカアカデミアからも、凪原（なぎはら）　綾（あや）って言う帰国子女の女子生
徒も来るらしいッスよ！」

「…へっ？アメリカアカデミアからも留学生が！？
…そうだったけ？」

俺がそう言うと、十代以外のみんなが呆れていた。

「…全く、アーレイに浮かれ過ぎデースヨ…トウヤ。」

「悪い悪い…。凪原　綾…か、どんなデュエリスト何だろうな…。
」

「ワタシがジャパンに移住する前に聞いた話なのデースガ…。
その年に開催した全てのアメリカ大会デ、
チャンピオンの座に君臨したと聞きマーシタヨ。」

俺が想像を膨らませていると、

フォリナが凪原の事を話してくれた。

「…あれ？そう言えば…みんなで、兄さんがアメリカ大会で優勝した時に記事を見たけど…。

凪原さんの名前は記事には載って無かったよ？」

その話を聞いた翔が、疑問を抱いたが、確かにそうだよな…。

そんなに凄い奴なら、記事に載っててもおかしくは無い筈だが…。

「どういう訳か…凪原さんは、

今年に開催された大会には一切出場して無いんだって…。

地元の人達に凪原さんは、凄い戦略の持ち主だって噂されてて、

カイザー亮と互角の戦いをするんじゃないかって話だよ。」

「カイザーと互角！？スゲェ～な、ソイツも！！

…でも、何でそんな凄い奴が大会に出なくなったんだ？」

「…さあね、ソコまでは僕にも分からないよ…。

家庭の事情とか、込み入った理由からかもしれないね…。」

「「「「「フ～ン…。」」」」」

「ハァ～…。」

宝山の説明を聞いて、みんなが感心している中、
1人落胆してる奴がいた。
誰かと思って振り向くと、ソイツは増川だった。

「増川!?お前いつからそこにいたんだ!?」

「そんな事はどうでもいい!!

そ…それよりも皆の者、い…今、一体誰が来ると言ったのだ!?」

増川の表情が見る見る内に青冷めていった。
…ん?まさか増川の奴、
凪原を知ってるのか?

「え~と、凪原　綾…だったけか?　なぁ増川…お前、凪原の事を知ってるんじゃ…。」

「ぬぅうぁぁっ~!何たる事だ~!!

アイツがココに転入して来おるとは~!!

い…いや、知らん知らん!!

ア…アイツの事など、コレぽっちも微塵も知らんぞ~!!」

俺が凪原の事を聞こうとすると、

増川はパニックになって、

そのままドコかに駆け出してしまった…。

「…珍しいわね、増川君があんなに慌てるなんて…。」

「そうだな…しかもあの様子じゃ、
凪原って奴と確実に何かあったな…。」

一体、増川は何をやらかしたんだ?

そう思っていると、チャイムが鳴り出した。

「…おっ、もう昼休みは終わりか…。

教室に戻ろうぜ…十代、翔。」

「うへぇ~…次の授業って、確か数学だったよな…?
何か憂鬱になって来たぜ…。」

「そんな事言ってないで、教室に戻ろうよアニキ。

分からない所は教えてあげるからさ…。」

うなだれる十代を翔がなだめた。

「…じゃあ僕達は別の教室だから、ココでお別れだね。」

「またね、楽しいお昼だったわ…みんな。」

「シーユー！トウヤ、ジュウダイ君、ショウ君。
アフタヌーンクラスも頑張りマショウネ～。」

俺達はそれぞれの教室に向かっていった。

放課後だが、増川が俺達は今日の探索に出なくていいと言った。

何でも今日になってから、
保健室で寝込んでいる殆どの生徒の体調が回復したらしい…。

未だに回復してない生徒は少ないから、

アイツとファンクラブのメンバーだけで巡回するそうだ…。

そして…翌日、校庭で開かれた朝会で歓迎式が執り行われた。

鮫島校長の長話が終わって、
遂に待ちに待ったこの時がやって来た！

「…では、今日から我がアカデミアに留学する新しい生徒を紹介しましょう。

アーレイ・ヴェルテ君、
凪原　綾さん、壇上に上がって下さい。」

アーレイと凪原が朝礼台に上がり、アーレイが鮫島校長からマイクを受け取り、自己紹介を始める。

「ハロ～！ジャポンアカデミアのみんな～！！
オレがサメジマ校長から紹介に預かった、アーレイ・ヴェルテだ！
イギリスアカデミアから、遥々ココ…ジャポンアカデミアに短期留学しに来たぜ！
短い間しかコッチにいられねぇけど…。
よろしく頼むぜ！みんな～！！」

流石プロデュエリストと言った所か、
快活に自己紹介をして、生徒達の気分を湧かせた。

「キャー！アーレイ様、ステキ～！！」
「アーレイ様～！コッチ向いて～！！」

アーレイはチーム　アース・ガルドの中でも、
リーダーのエヴァンに次いで女性からの人気が絶大だ。　なもんだから…女子生徒から、もの凄い歓声が飛び交ってくる。
まるでプロリーグの会場にいるみたいだぜ！

「ヒャ～…凄い歓声ッスね～。
流石はプロデュエリストだよ。」

「紅葉さんもこんな風に、みんなから応援されていたのか…。」

「俺もプロデュエリストになって、
こんな風に歓声を浴びたいもんだぜ…！」

「…全く、キャーキャーやかましいな～。
何でい…ちょっと顔がいいからって、騒ぎ立てておって…。」

振り向くと、増川が屈みながら俺の背中にしがみ付いていた。

「あれ？増川君、何でレッド生徒の列にいるの？
早くブルー生徒の所に戻った方が…。」

「アイツに見つからない為だ、丸藤氏。

普通に突っ立っておっては、
間違い無く感づかれてしまうからな…！」

「…何アホな事を言ってるんだよ増川。
早くブルーの所に戻れって…。」

「あまり動くな！アイツに気付かれる！！」

「アイツって、凪原の事か？

こんな人数の中で、お前を見つけるなんて出来ねぇって…。」

「いいから俺を隠させろ！
アイツに俺がアカデミアにいる事を知られたく無いのだ！」

そうこうしてる内に、凪原がアーレイからマイクを受け取り、自己紹介を始める。

「ヤッホー！アカデミアのみんな！！
アタシの名前は凪原　綾でーす！
アメリカアカデミアからココ、日本のアカデミアに…。
…あれれ～？な～んかあの辺りから…ますちーがいる気がするな～？」

増川はビクッと震えながら、
更に隠れようと屈みこんだ。

マ…マジかよ！？アイツ、本当にお前の事に気付いたみたいだぞ！？

…ってか、ますちーってなんだよ！？

「おい増川…まさかとは思うが、

ますちーって、お前の事か？」

「…ぬあぁぁぁっ！何も聞くな～っ！
アイツ、ま～だ俺をあんなこっ恥ずかしい呼び方をしおって！」

「…ブプッ！増川、お前そんなあだ名があったのかよ！？

ギャハハハ！！おっかし～の！！」

十代は、ますちーの響きが笑いのツボに入ったのか、笑い転げてしまった。

オイオイ十代…仮にも今は朝礼中だぜ？

「笑うな～！遊城　十代！！

そのあだ名はアイツが勝手に…！」

「ち…ちょっと、ま…増川君。」

「…何だ？後にしてくれ丸藤氏！

あまり騒いでおっては、アイツに見つかってしまう所ではな…。」

「ううん…もう、凪原さんに見つかっているよ…。」

「「…え？」」

俺と増川は、翔が指差した方向を見ると、

いつの間にか凪原がココに来て、
増川の事をジ～っと見つめていた。
ア…アレ～？おっかしいな…。
ついさっきまで、朝礼台近くにいた筈だぞ？

「その目、そしてさっきの話し方…。…アハハ！ヤッパリ、ますちーだ～！！
会いたかったよ～！ますち～！！」
そう思ってると、凪原は瞳をキラキラ輝かせ、
増川に抱き付いて来た。
「ぬぎゃ～っ！！だ、誰か助けてくれ～！！」

「…え～と、凪原さん…まだ君の自己紹介の途中なのだがね…。」
「…あっ、そうだった…！
ゴメンなさい、エヘヘ…。
…ますちー、ちょっと待っててね。スグに済ませるからっ！」

鮫島校長が自己紹介を続ける様に促された事で、
凪原は名残惜しそうに増川から離れて、朝礼台へ戻っていった。

…増川はと言うと…ガタガタ震えながら、仕切りに何かを呟き始めていたな…。

コイツがこんなに思い詰めた姿なんて、初めて見たぜ…。

「コホン…では、改めまして…。
アタシの名前は、凪原（なぎはら）　綾（あや）です！

生まれは日本、育ちはアメリカ！

アメリカアカデミアから来ました帰国子女で～す！

日本アカデミアのみんな～！

アタシと仲良くしてね～！！」

アーレイとは違って、今度は男子から歓声が飛び交って来たぜ。

…その歓声の中から時々、増川爆発しろ！…だの、
増川もげろ！…とか聞こえちまったけどな…。

「え～、留学生の自己紹介も済みました所で、

最後は、アーレイ君と凪原さんのタッグデュエルで絞めたいと思います！！」

その言葉に全校生徒がざわついた。

そりゃあそうだ…。プロデュエリストと、アメリカ大会を総ナメしたチャンピオンとデュエル出来るんだからな！

「プロデュエリストや、デュエル大会の優勝者とデュエルを体験…そして見学する事は、
コレからの学習に大いに役立つ事となるでしょう…。

では、アーレイ君と凪原さんとデュエルして頂く生徒ですが…。」

「ハ～イハイハ～イ！！

だったらアタシは、ますちー…じゃなかった、
増川君とデュエルしたいで～す！！」

「ぬぅわぁにぃ～っ！？

俺がお前とデュエルしろだとぉ～！？」

「おっ！対戦相手を指名たぁ…。ナイスなアイデアだな、嬢ちゃん！

…だったら、もう1人の相手は…。

お前だぜ？雲雀　塔也！！」

「俺！？よっしゃー、やったぜ～！！」

「ちぇ～…俺じゃなかったぜ…。」

「…と言う事は、アカデミア側は塔也君と増川君のタッグだね。」

…えっ？ちょっと待てよ…。

「「コイツとタッグを組めだと～！？」」

何の因果か、アーレイと凪原とのタッグデュエルの相手は、俺と増川になっちまった…。

「ち…ちょっと待て～い鮫島校長よ！
な～んで俺が、雲雀　塔也とタッグを組まにゃならんのだ！！
コイツと組む位なら、俺は辞退するぞ！！」

「オイオイちょっと待てよ！
お前が辞退したら、タッグデュエルが出来ねぇじゃねぇか！！」

「ならば、他の奴と組めば良かろう！！
と・に・か・く！俺は、お前と組む事はご免だし、
アイツとデュエルするのはもっとご免だ！！」

「え～っ!?ますちーは、アタシとデュエルしたく無いって言うの～!?

…あっ!もしかして、ますちー…アタシに負けるのが怖いんだ～？」

「な、何ぃ～!?だ～れが、お前に負けるのが怖いと言ったのだ！」

「だって…ますちー、小学校の頃、いっつもアタシにボロ負けだったもんね～。」

「ぬぐぐ～ッ!!言わせておけば～!!

…雲雀　塔也よ!今回だ・け!俺がタッグを組んでやる!

サッサと準備しろ!!」

増川は凪原の挑発が余程堪えたのか、

渋々だが、タッグデュエルを引き受けてくれた。

「…どうやら、ソッチの話は纏まったみたいだな…。

なら、早く始めようぜ!

ジャポンアカデミアの実力を知りたくて、ウズウズしてた所だぜ！」

なんかアーレイって、性格が十代に似ているな…。

プロデュエリストにも、
色々な奴がいるんだな…。

「コッチもプロデュエリストとのデュエルってんで、ワクワクしているぜ！」

「ますちー…アタシはアメリカアカデミアで勉強して、かなり強くなったからね～。

アタシとのデュエル…振り落とさない様に気を付けなよ！！」

凪原の表情がさっきまでとは打って変わって、

真剣味に帯びた顔つきに変わっていった。

それを見た増川は、腹を括ったのか…。落ち着きを取り戻した様だぜ。

「…ホゥ～、言うではないか。

アメリカ大会でチャンピオンになったそうだが…。

俺とて…アカデミアに来てから、とてつもなく強くなったのだ！
このデュエルで勝って、今までの雪辱を晴らしてくれるわ！」

俺と増川は定位置に着いてから、
アーレイ達に向き合い、ディスクを展開した。

「準備は…よろしいですね？
それでは…デュエルを始めて下さい！！」

「「「「デュエル！！」」」」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００
塔也・増川　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能によって、

凪原、俺、アーレイ、増川の順番になったぜ。

「先攻はアタシからっ！

アタシのターン、ドロー！

最初からフルスロットルよ！

アタシはフィールド魔法、エクスプレス・ベース・ターミナルを発動っ！」

校庭が一変して、ドコかの秘密基地を思わせる駅内に変わったぜ！

「へェ～…コイツは…。

なかなかイカスフィールドじゃねぇか…嬢ちゃん！」

「ぬぅ…早々にアレが来るとは…！

コイツはマズいな…。」

アーレイと増川はそれぞれ違った感想を口にしたぜ。

「アタシは常速列車グリーン・ローカルを攻撃表示で召喚よ！」

あちこちにあるシャッターの1つが上がり、

そこから、緑のラインが入った列車が発進したぜ。

凪原は機械族デッキか…。

常速列車グリーン・ローカル

ＡＴＫ１５００

「おっ！凪原は機械族デッキの使い手か…！
お前と同じだな、翔。」
「そうみたいだね…。
機械族にも色々な戦略があるけど…。
凪原さんは一体、どんな戦い方をするのかな？」

「グリーン・ローカルが召喚された事で、エクスプレス・ベース・ターミナルの効果発動！
自分フィールドに列車と名の付くモンスターの召喚に成功した時、自分のデッキから、召喚したモンスターのレベル以下の列車と名の付いたモンスター1体を特殊召喚出来る！
アタシが召喚したグリーン・ローカルのレベルは4！
よって…アタシはデッキから、レベル4の蒸気列車スチーム・ライナーを攻撃表示で特殊召喚よ！」

グリーン・ローカルに続いて、
蒸気を吹かした黒い列車が発進したぜ。

蒸気列車スチーム・ライナー
ＡＴＫ１８００

「アタシは永続魔法、カスタマー・ステーションを発動して、カードを1枚伏せてターンエンドよ！」

「カ…カスタマー・ステーションだと！？

オイ！雲雀　塔也！！あのカードを早いトコ排除するぞ！！

アレを放っておいたら、大変な事になるぞ！」

「言われなくても、そのつもりだぜ！

俺のターン、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札６枚　２枚

モンスターゾーン

アーレイ　無し

綾

常走列車グリーン・ローカル

蒸気列車スチーム・ライナー

魔法・罠ゾーン

アーレイ　無し

綾

エクスプレス・ベース・ターミナル

カスタマー・ステーション

伏せカード×１

塔也・増川　ＬＰ４０００

手札６枚　６枚

モンスターゾーン

塔也・増川　無し

魔法・罠ゾーン

塔也・増川　無し

「自分フィールドに他のカードが無い場合、
メインフェイズに1度、自分の手札または墓地から、このカードを特殊召喚出来る！
来い、雲魔物－モーニング・ミスト！」
薄暗い朝靄が立ち込もり、やがて人型へと変わっていったぜ。
雲魔物－モーニング・ミスト
ＤＥＦ１０００
「何？そのモヤモヤしたモンスターは…。
そんな守りじゃ、アタシの列車デッキには通用しないね！」
「慌てるなよ…。俺は永続魔法、飛来雲（フォール・クラウド）を発動して、
雲魔物－クライ・レインを攻撃表示で召喚するぜ！
更に召喚したクライ・レイン、飛来雲（フォール・クラウド）の効果をそれぞれ発動だ！
クライ・レインを召喚した時、
フィールドの雲魔物の数だけ、このカードにフォッグカウンターを乗せ、
飛来雲（フォール・クラウド）は、
召喚した雲魔物と同じレベルの雲魔物1体を手札に加えるぜ！

クライ・レインにフォッグカウンターを2つ乗せ、
デッキから、レベル4の雲魔物一キロスタスを手札に加えるぜ。」

フィールドに幾つもの雲が発生し、

青黒い雲が、ベールを纏った魔導士の姿に変わったぜ。

雲魔物一クライ・レイン

ＡＴＫ１６００

ＦＣ　０↓２

飛来雲（フォール・クラウド）

永続魔法

自分フィールドに雲魔物と名の付くモンスターを召喚した時、

自分のデッキから、召喚したモンスターと同じレベルの雲魔物と名の付くモンスター1体を手札に加える。

このカードを墓地に送る事で、
自分の手札から雲魔物と名の付くモンスターを2体まで特殊召喚出来る。

凪原がさっきのターン、カスタマー・ステーションを発動しなかったって事は、

発動タイミングは、自分のスタンバイフェイズの時だな…。

俺の手札にはアレを破壊する手はねぇ…。

だが、少しの間封じる位なら…！

「俺は魔法カード、ショート・ダウンを発動するぜ！」

発動したショート・ダウンのカードから、幾つもの稲光が放出され、

エクスプレス・ベース・ターミナルを停電にさせて、フィールドの魔法・罠カードがセットされた。

すると、周りの景色が元の校庭へと戻っていったぜ。

「うっそ～!?アタシの発動したカードがセットされちゃった～!?」

「悪いな凪原…。ショート・ダウンの効果で、お互いのプレイヤーの表側表示の魔法・罠カードをセットさせて貰ったぜ？

しかも、それらのカードは相手ターンの3回目のエンドフェイズまで、

発動出来なくなるんだぜ！」

ショート・ダウン

通常魔法

フィールド上の表側表示で存在する魔法・罠カードをセットし直す。

お互いのプレイヤーは相手の3回目のエンドフェイズまで、この効果でセットされた魔法・罠カードは発動出来ない。

「へェ…ますちーの助言を受けて、アタシのカードを封じて来たか…。

…でもさ～？飛来雲（フォール・クラウド）を先に発動させたのは、どういうつもり？」

「ソイツは…まぁ、スグに分かるぜ。

俺はコレでターンエンドだ。」

「やるじゃねぇか…。オレのターンだぜ、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札６枚　３枚

モンスターゾーン

アーレイ　無し

綾

常速列車グリーン・ローカル

蒸気列車スチーム・ライナー

魔法・罠ゾーン

アーレイ　無し

綾

伏せカード×３

塔也・増川　ＬＰ４０００

手札３枚　５枚

モンスターゾーン

雲魔物－モーニング・ミスト

雲魔物－クライ・レイン

（ＦＣ×２）

増川　無し

魔法・罠ゾーン
塔也
伏せカード×１
増川　無し

「さて…本来なら、オレのスタンバイフェイズにカスタマー・ステーションの効果で、
自分フィールドの列車と名の付くモンスターのレベル１つと、攻撃力を４００ポイントアップするが…。
トウヤが発動させたショート・ダウンの効果でセットされちまった上に、コイツの発動は無理…か。」

成る程な…モンスターのレベルを上げて、エクシーズ素材にしよう…て魂胆か！

「ま、問題無くやらせて貰うぜ！
オレは極星霊ドヴェルグを攻撃表示で召喚！」

アーレイのフィールドに、オレンジ色のヒゲモジャな精霊が飛び出したぜ。

極星霊ドヴェルグ
ＡＴＫ１００

来たな…チーム　アース・ガルドを象徴する極星モンスターが…。

「攻撃力がたった１００しかないモンスターを攻撃表示で召喚だと？
一体、ソイツには何の効果があるのだ!？」

増川は思わず声を荒げるが、
アーレイは不適に笑う。

「ハッハハ！…いい洞察力を持ってるみたいだな～お前？

ドヴェルグの効果はコイツを召喚した時、
極星と名の付くモンスター限定だが…。

オレはもう１度だけ通常召喚出来る権利を頂戴する事が出来るんだぜ！」

極星霊ドヴェルグ

レベル１　地属性　戦士族

ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１０００

このカードを召喚したターン、　通常召喚に加えて１度だけ、
手札の極星と名の付くモンスター１体を通常召喚出来る。

このカードが墓地に送られた時、

墓地から極星宝と名の付くカード１枚を手札に加える。

「よってオレは、ドヴェルグをリリースして、
極星霊エーギルをアドバンス召喚するぜ！」

ドヴェルグが消え、一回り体の大きな騎士の姿をした漆黒の精霊が、刃を構えた。

極星霊エーギル

ＡＴＫ２４００

「初手のターンで、上級モンスターをアドバンス召喚して来おっただと！？」

「へっへへ…見せて貰うぜ？

ジャポンアカデミアの実力って奴をな！」

襲来！神々の遣いと暴走列車（後書き）

オレ達は序盤から凄い展開を繰り出して、

トウヤ達を牽制したが…。

トウヤ達も負けじと、オレ達に挑んでいったぜ！

「中々やるじゃねぇか、お前ら！

だが…お前達の進撃はココまでだ！

見せてやるぜ…世界レベルってもんをな！」

オレが締めを決めようとしたが、

嬢ちゃんがドエライモンスターを呼び出したぜ！

次回、「世界の実力

発進！グスタフ・マックス！！」

悪いなお前ら…勝利はオレ達が頂戴するぜ！！

世界の実力　発進！グスタフ・マックス！！（前書き）

大変お待たせしました！

デュエル構成に悩んでいる内に、結構時間が掛かってしまいました…。

では、第３４話をどうぞ！

世界の実力　発進！グスタフ・マックス！！

アーレイｓｉｄｅ

周りにいるギャラリーの生徒達はエーギルが登場した瞬間、

歓声を響かせたぜ！

…マァ、オレの手札には既に三極神を呼び出す手はあったんだが…。

いきなり呼び出したんじゃあ、ジャポンの実力を見る前に終わっちまうからな…。

先ずは小手調べってな！

「ヘッ、行くぜ！オレは極星霊エーギルの効果発動！

1ターンに1度、自分の墓地にある極星と名の付いたカード1枚をデッキに戻し、カードを1枚ドローするぜ！

更にこの効果で極星と名の付いたカードをドローした時、相手フィールドのカードを1枚破壊する事が出来る！」

極星霊エーギル

レベル６　闇属性　魔法使い族

ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１０００

１ターンに１度、自分の墓地に存在する極星と名の付いたカード１枚をデッキに戻し、カードを１枚ドローする。

この効果で極星と名の付いたカードをドローした時、相手フィールドのカードを１枚破壊する事が出来る。

「ドロー出来る上に、俺達のフィールドのカードを破壊するだと！？」

「オレは墓地からドヴェルグをデッキに戻し、１枚ドローするぜ！」

さ～て、ドローしたカードは…っと。

「来たぜ、俺がドローしたカードは…極星宝グラム！

エーギルの効果により、　トウヤのクライ・レインを破壊するぜ！」

「何！？」

「喰らいな！シャドウ・スラスト！！」

エーギルは刃を交差に振るい、
発生させた真空波によってクライ・レインを塵に変えちまったぜ！

「オイオイ！いきなりソイツを倒されてどうするのだ、雲雀　塔也よ！」

「無茶言うなっての！相手はプロデュエリストなんだぜ！？」

デュエルが始める前から思っていたが…。
あの2人、仲が相当悪いみたいだな…。

オレとしては、おっちゃんの息子って奴とデュエルしてみてぇ…
と思ってトウヤを指名した訳だが…。

人選ミスかね、コリャ…。

「あ～…デュエルを続けるぜ。

オレは装備魔法　極星宝グリムをエーギルに装備するぜ。

コイツは極星または極神と名の付いたモンスターに装備出来、

装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、

カードを1枚ドロー出来るんだぜ！」

エーギルは漆黒の剣から、透明な刃を持つ剣に持ち替えたぜ。

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド。

さて…ジャポンの実力の程を拝見させて貰うぜ？」

「ならば…しかと焼き付けるがいいわ！

俺のターン、ドローだ！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札2枚　3枚

モンスターゾーン

アーレイ

極星霊エーギル

（＋極星宝グリム）

綾

常速列車グリーン・ローカル

蒸気列車スチーム・ライナー

魔法・罠ゾーン

アーレイ

極星宝グリム

伏せカード×２

綾

伏せカード×３

塔也・増川　ＬＰ４０００

手札３枚　６枚

モンスターゾーン

塔也

雲魔物ーモーニング・ミスト

増川　無し

魔法・罠ゾーン
塔也
伏せカード×1
増川　無し

「雲雀　塔也よ…礼は言わんからな…。」

「そんなんいいから、サッサとやってくれよ。
お膳立てしといたからよ。」

オッ！どうやらちゃんと、チームプレーをしているみてぇだな。
面白ぇ…何をやらかす気だ？

「フン…俺はカードを2枚伏せて、
魔法カード　クラック・バックを発動だ！
自分の魔法・罠ゾーンのカードを任意の数だけ手札に戻し、
戻した数だけ、相手フィールドの魔法・罠カードを破壊するのだ！
俺のフィールドから2枚と、

雲雀　塔也のフィールドから1枚を手札に戻すぞ！

タッグデュエルならば、
パートナーのフィールドは自分・相手フィールドとして扱えるからな！

よって…綾のフィールドから2枚、

アーレイ氏のフィールドから極星宝グリムを破壊だ～！」

「よし！コレでアーレイ達の魔法・罠カードを殆ど破壊出来るよ！」

「行っけ～！増川！！」

「ウワーッ！オレらの魔法・罠ゾーンがズタボロにされちまう～！！

…な～んてな！」

「…ハァ？」

「気を付けろ増川！来るぜ…アーレイのカウンターが！！」

「オレはクラック・バックにチェーンして、罠発動！神の慟哭
スヴィティ！！

自分フィールドのカードが相手のカード効果で破壊される時、そ

の効果を無効にして破壊するぜ！」

「…くぬぅ～！！綾のカードの破壊を防がれてしまったか…！」

「お～っと！スヴィティの効果は、それだけじゃないぜ！

その後、相手の手札を自分の手札の枚数分、墓地に捨てさせるぜ！」

神の慟哭　スヴィティ

通常罠

自分フィールドのカードが相手のカード効果で破壊される時に発動出来る。

その効果を無効にし破壊する。

その後、自分の手札の数だけ相手の手札を捨てる。

「ありがと～、アーちん！」

「いいって事よ！…さて、タッグデュエルじゃ、プレイヤーを対象にした効果を与える場合、相手を選ばなきゃならねぇ…。

手札を捨てるのは…お前だぜ、マスカワ！

オレから見て、左から1番目と3番目の手札を捨てな！」

スヴィティのカードから石の楔が飛び出し、
オレが選択したマスカワの手札を墓地送りにしたぜ。

「…クヌゥ～！俺の手札が…！」

「ま、気にすんなよ増川。次、頑張りゃいいじゃねぇか！」

「お前に言われるまでも無いわ！

俺はセットした魔法カード　魚影を発動だ！

自分のデッキからレベル４以下の魚・海龍・水族１体を手札に加えるぞ。

俺は魚族・レベル３のボムセンボンを手札に加え、

素早いマンボウを守備表示で召喚するぞ！」

青白いマンボウが、水飛沫を立てながら現れたぜ。

素早いマンボウ
ＤＥＦ１００

魚影

通常魔法

自分のデッキからレベル４以下の魚・海龍・水族１体を手札に加える。

「むぅ…俺はコレでターンエンドするぞ…。」

「さぁ、行くよ…ますちー！

アタシのターン、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札２枚　４枚

モンスターゾーン

アーレイ

極星霊エーギル

（＋極星宝グリム）

綾

常速列車グリーン・ローカル

蒸気列車スチーム・ライナー

魔法・罠ゾーン

アーレイ

極星宝グリム

伏せカード×１

綾

伏せカード×３

塔也・増川　ＬＰ４０００

手札３枚　１枚

モンスターゾーン

塔也

雲魔物ーモーニング・ミスト

増川

素早いマンボウ

魔法・罠ゾーン

塔也

伏せカード×１

増川

伏せカード×１

「アタシは地潜列車アンダー・スターを攻撃表示で召喚！」

ドリルの付いた茶色の列車が、
地中から勢いよく現れたぜ！

地潜列車アンダー・スター
ＡＴＫ１２００

「…行くよ、ますちー！

アタシは3体の列車をリリース！！

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシスを特殊召喚！！」

３体の列車が合体して、
要塞みたくバカデケェ列車が出撃したぜ！

…ってか、列車ってデカさなのか？コレ！？

あまりのデカさに、ギャラリーの生徒達が唖然としてるぜ？

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス

ＡＴＫ３５００

「オイオイオイ！？何だよ…このバカデケェモンスターは！？」

「ぬ…わわわっ！で…出おった…綾の超弩級モンスターがっ！！」

「ドーラ・クライシスは、
通常召喚出来ず、３体の列車と名の付いたモンスターをリリースする事でしか特殊召喚出来ない！

覚悟してよ…ますちー！！
アタシはドーラ・クライシスで、
素早いマンボウを攻撃！！

爆進オーライ！ギガンテック・クラッシュ・ブレイカー！！」

「オ…オイ！雲雀　塔也！！

お前の手札にあるソイツで、
ドーラ・クライシスの攻撃を止めろ！！」

「ハァ？何でだよ、増川！？

素早いマンボウはリクルーターなんだから、
別に破壊されたって…。」

「いいから早くしろ！

出ないと、手遅れになってしまうぞ！！」

「…ったく、俺は手札から雲魔物－コットン・ボールを墓地に送って、効果発動だ！

相手モンスター1体の攻撃を無効にするぜ！」

暴走するドーラ・クライシスの目の前に、

コットン・ボールが膨張して、
ドーラ・クライシスを食い止めたぜ。

「アチャ～…止められちゃったか…。」

「更に…相手フィールドのモンスターの数だけ、

自分フィールドに雲魔物トークンを特殊召喚するぜ！
俺以外のフィールドには、モンスターが３体！
よって、３体の雲魔物トークンが特殊召喚されるぜ！」

雲魔物トークン×３
ＤＥＦ０

「…けど、ドーラ・クライシスの爆走は止まらないっ！
アタシは速攻魔法　オーバー・トップ・ランを発動よ！
自分フィールドのモンスターの攻撃が止められた時に発動し、
相手フィールドにいるモンスター１体につき、５００ポイントの
ダメージを、相手に与える！
サァ…再爆走よ！ドーラ・クライシス！！」

一度は止まっちまったドーラ・クライシスだったが…。
エンジンを震わせて、再びトウヤ達に向かって爆走し始めたぜ！

オーバー・トップ・ラン

速攻魔法

自分フィールドのモンスター1体の攻撃が無効にされた時に発動出来る。
相手フィールドにいるモンスター1体につき、５００ポイントダメージを、相手に与える。

「相手フィールドには、アーレイのモンスターも含まれてっから…6体か！

…って事は、受けるダメージは３０００ポイント！？

オイ…増川！状況が更に悪化したじゃねぇか！！」

いや…マスカワの判断は間違っちゃいねぇ…。

ただ…嬢ちゃんのタクティクスが、ソレを上回っちまったがな…。

「いや…コレで、僅かな活路への道が開けたぞ！

雲雀　塔也よ！コイツは責任を持って俺が抑える！

後は…お前の悪運でなんとかしろ！」

「オイ～っ！他力本願かよ！？」

「俺は手札から、ボムセンボンの効果発動だ！

プレイヤーがダメージを受ける時、
コイツを手札から墓地に送る事で、
受けるダメージを１０００ポイントにするぞ！」

ボムセンボンがドーラ・クライシスの手前で爆発した事で、
激突を避ける事は出来た様だが…。
爆発の余波で、トウヤ達は吹き飛んだぜ。

「ぐわぁぁっ！！」
「ぬわぁぁっ！！」

塔也・増川　ＬＰ４０００→３０００

「往生際が悪いんじゃない、ますちー？

ま…いっか、このままアタシ達が押し切らせて貰うよ！！

極星霊エーギルで、モーニング・ミストを攻撃！

ダーク・スティンガー！！」

エーギルがグラムでモーニング・ミストに突き刺し、霧散させた

ぜ。

「アタシは極星宝グラムの効果で1枚ドロー！
カードを1枚伏せてっと、コレでターンエンドよ！」

アーレイ↓フォリナｓｉｄｅ

アワワ…マズイデ～ス！！

トウヤとマスカワ君のフィールドのコンディションは、この上無くバットデ～ス！

ソレに引き替え、アーレイとアヤのフィールドには…。
ハイアタッカーのモンスターが2体、それにセットカードもアリマ～ス！

「流石、プロデュエリストと大会チャンピオンだね…。

塔也と増川が、あんなに苦戦を強いるなんて…。」

「ええ…そうね、宝山君。

何とかリリース要因を残せたみたいだけど、塔也達の不利に変わりは無いわ。」

ホウザン君とアスカは、
冷静にナレーションをシテマース…。

「デ…デモ、デュエルの勝敗はマダ分かりマセンヨ！
トウヤ達にも、カウンターのチャンスはアリマスヨ！！」

「フォリナさんの仰る通りです…。
増川はアレぐらいで倒れる程、ヤワではありませんわ！」

「…それはどうなのかな？
このターン、塔也に余計な指示を出さなかったら、
ダメージを受けずに済んだのに…。」

ワタシとウミノサンが、
ホウザン君とアスカに食い下がりマ～スガ、

ツァンサンが水を差しマーシタ。

「な…何ですって！？アナタは、増川が無駄な指示を出したと仰るのですの！！」

「…だって、そうでしょ？

アイツは大方…塔也のキロスタスの効果で、巻き返しを狙ってい

たかも知れないけどさ…。

それにしたって、迂闊だったよ。」

「いや…増田の判断は合っている。」

その時、マンジョウメ君がツァンサンの意見に反論シマーシタ。

「どういう事?アイツはボムセンボンを握っていたにしても、迂闊だった事には変わりは無いと思うんだけど…。」

「ドーラ・クライシスには、
相手モンスターと戦闘を行った時、
ダメージ計算後にそのモンスターを装備する効果がある…。」

「た…確かにソレだと、素早いマンボウの効果が封じられるけど…。

ソレだけじゃあ、攻撃を防ぐ意味は…。」

「無論、ソレだけではない…。

ドーラ・クライシスが破壊される時、

代わりに自身の効果で装備したモンスターを身代わりに出来る効果も備わっている。

増川が塔也にドーラ・クライシスの攻撃を止めさせ無かったら、ドーラ・クライシスを破壊する事が困難になる所だった訳だ…。」

尚も食い下がるツァンサンに、
マンジョウメ君は補足のナレーションをプラスシマーシタ。

超弩級重塔機列車（ちょうどきゅう　じゅうとうき　れっしゃ）
ドーラ・クライシス

レベル１０　地属性　機械族

ＡＴＫ３５００　ＤＥＦ２８００

このカードは通常召喚出来ず、自分フィールドの列車と名の付くモンスター3体をリリースする事でのみ特殊召喚出来る。

このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、
ダメージ計算後に、そのモンスターをこのカードに装備出来る。
（装備出来るモンスターは1体のみ。）

このカードが破壊される時、

代わりに自身の効果で装備したモンスター1体を破壊する事が出来る。

ソンナ効果が!?つまり、ドーラ・クライシスのアタックがヒットしていたら…。

トウヤ達はデットロックになる所ダッタノデースカ！？

「じゃあ…増川が、オーバー・トップ・ランでボムセンボンの効果を使ったのは、想定外って事かい、万丈目？」

「その通りだ…宝山。奴としては、ボムセンボンをアソコで使ってしまったのは、不本意だったのだろうな…。」

トウヤ、マスカワ君、ファイトデ～ス！！

諦めなければ、キットアーレイ達にもビクトリーする事が出来マース！！

フォリナ↓増川ｓｉｄｅ

マズい…コレはかなりマズいぞ～！！

アレの対抗策で手札に加えたボムセンボンを、

こんなに早く使う羽目になろうとは…！

癪な事に…最早、この状況を打破するには、雲雀　塔也の悪運に縋るしかない…！

「…行くぜ！俺のターン、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札２枚　２枚

モンスターゾーン

アーレイ

極星霊エーギル

（＋極星宝グラム）

綾

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス

魔法・罠ゾーン

アーレイ

極星宝グラム

伏せカード×１

綾

伏せカード×３

塔也・増川　ＬＰ３０００

手札３枚　０枚

モンスターゾーン

塔也

雲魔物トークン×３

増川

素早いマンボウ

魔法・罠ゾーン

塔也

伏せカード×１

増川

伏せカード×１

「さっきの凪原のエンドフェイズで、ショート・ダウンの効果は消えた！

俺はセットされた飛来雲（フォール・クラウド）を発動してから、雲魔物－キロスタスを攻撃表示で召喚だ！

飛来雲（フォール・クラウド）の効果で、デッキから雲魔物－ストーム・ドラゴンを手札に加え、

そしてキロスタスの効果により、
このカードに雲魔物の数だけフォッグカウンターを乗せるぜ。

フィールドには、キロスタスと3体の雲魔物トークンがいる…。

よって、フォッグカウンターを4つ追加するぜ！

更に俺の墓地からコットン・ボールを除外して、
雲魔物－ストーム・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚だ！」

龍と猫の姿をした雲が現れ、
周りに4つのフォッグカウンターを纏わせたぞ。

雲魔物－キロスタス

ＡＴＫ９００

ＦＣ　０→４

雲魔物－ストーム・ドラゴン

ＡＴＫ１０００

「よ～し！ソイツで、アイツらに目に物を見せてやるのだ！」

「言われるまでもねーぜ！

俺はキロスタスの効果発動だ！

このカードのフォッグカウンターを２つ取り除く事で、　フィールドのモンスター１体を破壊するぜ！

俺は２つ取り除き、先ずは凪原のフィールドのドーラ・クライシスを破壊するぜ！

喰らえ！マイクロ・ストーム！！」

雲魔物－キロスタス

ＦＣ　４↓２

よ～し！コレでアイツらのフィールドを一掃だ！

「甘いって！アタシは罠カード、亜空間物質転送装置を発動！

アタシはこのターンのエンドフェイズまで、

ドーラ・クライシスを除外よ！」

キロスタスは竜巻を放ったが、
ドーラ・クライシスは異空間に逃げられてしまった…。

亜空間物質転送装置

通常罠

自分フィールドのモンスター1体をエンドフェイズまで除外する。

「避けられたか！もう1度、キロスタスの効果発動だ！
今度はアーレイのフィールドにいるエーギルを破壊するぜ！
今度は決めてやるぜ！マイクロ・ストーム！！」

雲魔物－キロスタス

ＦＣ　2↓0

「なら、コッチは極星宝グラムの効果だぜ！
装備モンスターがカード効果の対象になった時、
このカードを墓地に送る事で、その効果を無効にするぜ！」

今度はエーギルに竜巻を放ったが…。
グラムを竜巻に放った事で、これまた相殺されおった…。

極星宝グラム

装備魔法

極星または極神と名の付くモンスターに装備出来る。
装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、
自分のデッキからカード1枚ドローする。

装備モンスターがカード効果の対象になった時、
このカードを墓地に送る事で、その効果を無効にする。

「オイオイ!?さっきから、悉くハズレているではないか!
…まだ手は残っているのだろうな、雲雀　塔也!?」

「あるには、あるぜ…。
だが、コッチはアーレイ達のカウンターを喰らっちまえば、反撃が出来なくなっちまう…。
少しでも伏せカードは使わせねぇと…。」

…そうか！アイツのフィールドには、レベル４の雲魔物が２体おるから、ホワイト・ディックを呼べる！

「行くぜ！俺はレベル４のキロスタスと、ストーム・ドラゴンをオーバー・レイ！！

２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！！

雲海を漂う王者よ、白雲のうねりより出でよ！

エクシーズ召喚！浮上せよ、雲魔物－ホワイト・ディック！！」

キロスタスとストーム・ドラゴンが渦に入ると、
そこから巨大な鯨の姿をした雲が浮上したぞ！

…っと言っても、ドーラ・クライシスと比べたら、やや小さいと思ってしまうがな…。

雲魔物－ホワイト・ディック

ＡＴＫ２４００

ＯＲＵ　０→２

「随分とモフモフしたモンスター・エクシーズだね～。

それがひばりんのエースかな～？」

「ひ…ひばりん！？もしかして…ソレって、俺の事か？」

「そうだよ？雲雀　塔也って言うんでしょ？

だから…ひばりんね！」

やはりと言うべきか…。

アイツは人の事をあだ名で呼ぶ節がある…。

アイツにますちー呼ばわりされて、俺がどんだけ恥ずかしい思いをしたか…！

「え…えと、気を取り直して…。

俺は雲魔物ーホワイト・ディックの効果発動だ！

1ターンに1度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを1つ使用して、

相手フィールドのモンスター1体を墓地に送るぜ！

今度こそ、エーギルには退場して貰うぜ！

ストーム・バキューム！！」

雲魔物ーホワイト・ディック

ＯＲＵ　２→１

エーギルは必死に逃げようと手足をバタつかせるが、
ホワイト・ディックの凄まじい吸引力に負けて飲み込まれおったぞ！

「…やってくれるぜ。オレ達のモンスターを除去する為に、二段構えの策を用意してたとはな…！」

「へへ…どうだ！更に、この効果で墓地に送ったモンスターのレベル分、
フィールドのモンスターにフォッグカウンターを乗せるぜ！
俺は３体いる雲魔物トークンに２つずつ追加するぜ。」

雲魔物トークン×３

ＦＣ　０→２

フォッグカウンターを、３体の雲魔物トークンに小分けしおったか…。

何かあってもいい様に、用心しとる様だな…。

「バトルだ！ホワイト・ディックで、アーレイ達にダイレクトアタック！！

フォール・ストリーム！！」

その時…綾がアーレイ氏にアイコンタクトを送ったぞ？

アーレイ氏はソレを見ると、少し唸りながら頬を掻いた。

…ン～？な…何か嫌な予感が…！

「…ったく、仕方無ぇ！罠発動、極星宝アントヴァリ！！

自分の墓地から極星と名の付いたモンスター1体を回収し、

回収したモンスターの攻撃力が２０００以下なら1枚、　それ以上なら2枚ドローするぜ！

オレは極星霊エーギルを手札に加え、2枚ドローするぜ！」

極星宝アントヴァリ

通常罠

自分の墓地から極星と名の付いたモンスター1体を手札に戻す。

この効果で手札に戻したモンスターの攻撃力が２０００以下なら、

デッキからカードを1枚、それ以上なら2枚ドローする。

「このタイミングでドロー効果の罠だと!?

一体、何が狙いなんだ、アーレイ?」

アイツがアーレイ氏に問い詰めると、

アーレイ氏は苦笑を浮かべながら、頭を掻いたぞ。

「…あ～、コイツを発動させた理由は、狙いなんて大それた理由なんかじゃねぇぜ。」

「そうだよ、ひばりん。

アタシがこのカードを呼び出すから、

アーちんは発動させたんだよ!

相手がダイレクトアタックを仕掛けた来た時、

自分の魔法・罠ゾーンのカードを全て破壊し、

手札からこのカードを特殊召喚出来る!

さぁ、発進よ!除雪機関車ハッスル・ラッセル!!」

ドコからか汽笛が聞こえて来たと思ったら、突如として赤い車体

をした除雪列車が疾走して来おったぞ！

除雪機関車ハッスル・ラッセル

ＡＴＫ２５００

「攻撃力２５００!?くッ、バトルは中止だ…！」

「どう、ひばりん?ビックリした?

けど、まだ終わりじゃないよ～?

ハッスル・ラッセルは、

特殊召喚した時に破壊した魔法・罠カード1枚につき、２００ポイントのダメージを与えるよ！

アーちんのアントヴァリも含んでるから、3枚！

よって、ますちー達に６００ポイントのダメージよ！」

除雪機関車ハッスル・ラッセル

レベル１０　地属性　機械族

ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ３０００

このカードは通常召喚出来ない。

相手がダイレクトアタックをした時、
自分フィールドに存在する魔法・罠ゾーンのカードを全て破壊する事で、手札から特殊召喚出来る。

この効果で特殊召喚した時、
自身の効果で破壊した魔法・罠カード1枚×２００ポイントダメージを相手に与える。

ハッスル・ラッセルは現れるや否や、

アーレイ氏と綾の魔法・罠カードを巻き添えにしながら、

俺達に突っ込んで来おったぞ！

「どわっ！？」

「ぬぐぅっ！」

塔也・増川　ＬＰ３０００→２４００

「さ～て、ひばりん。

まだ何か手はあるのかな～？」

「…俺はメインフェイズ２に移り、カードを１枚伏せる！

コレで俺はターンエンドだ！」

「ならエンドフェイズに、ドーラ・クライシスは除外ゾーンから帰って来るよ～！」

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス

ＡＴＫ３５００

マ…マズイ、ハッスル・ラッセルの効果ダメージは兎も角…。

コレで綾達のフィールドには、レベル１０が２体…！

ヤバイぞ…アレが来てしまう～！！

「さ～て…こっから、ボチボチ仕掛けるとするか！

オレのターン、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札６枚　１枚

モンスターゾーン

アーレイ　無し

綾

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス

除雪機関車ハッスル・ラッセル

魔法・罠ゾーン

アーレイ　無し

綾　無し

塔也・増川　ＬＰ２４００

手札１枚　０枚

モンスターゾーン

雲魔物－ホワイト・ディック

（ＯＲＵ×１）

雲魔物トークン×３

増川

素早いマンボウ

魔法・罠ゾーン

塔也

飛来雲（フォール・クラウド）

伏せカード×１

増川

伏せカード×１

「オレは極星霊マーラを攻撃表示で召喚するぜ！」

アーレイ氏のフィールドに、
真っ黒な精霊がケタケタ笑いながら、宙を舞っているぞ。

極星霊マーラ

ＡＴＫ１０００

「ヤベェ…マーラの効果って、確か…！」

「オレがプロリーグでよく使ってるから、流石にコイツの効果は知ってるか…。

マーラをシンクロ素材とする時、
他のシンクロ素材は手札にある極星と名の付くモンスター2体で行うぜ。」

アイツが青ざめる中、

アーレイ氏は淡々と説明をしたぞ。

極星霊マーラ

レベル2　闇属性　魔法使い族

ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ５００

このカードをシンクロ素材とする時、

他のシンクロ素材は、手札の極星と名の付くモンスター2体でなければならない。

「見せてやるぜ…神の圧倒的な力をな！

オレは手札からレベル2の極星霊バンシーと、
レベル6の極星霊エーギルに、
レベル2の極星霊マーラをチューニング！！

星界に住まいし気紛れなる神よ…。

絶対的な力を我らに示し、世界を笑え!!
シンクロ召喚!降臨せよ、極神皇ロキ!!」

マーラが黒い2つのリングに変わり、
エーギルとバンシーがソレを潜った瞬間、
空が暗雲に覆われ、ソコから奇妙な格好をした巨人が降り立ったぞ…。

極神皇ロキ
ＡＴＫ３３００

「ヒャ～!?な…何スか、あのモンスターは!?」

「アレが…チーム　アース・ガルドのエースと謡われている星界の三極神の1体ね…。」

「何て大きいの…。綾の大型列車モンスターが、まるでオモチャの様ですわ…。」

ロキの登場に、皆それぞれ感嘆の声を零しておったぞ…。

中には、何か思い耽った奴がいたな…。
遊城　十代と万丈目氏がそうだったか…。

…ソレにしても、何だ…コレは？

俺の目が…やけに熱い…！

「更に極星霊バンシーが墓地に送られた時、
墓地からバンシー以外の極星と名の付いたモンスター1体を特殊召喚するぜ！

サァ…復活しな！極星霊エーギル！！」

さっき、シンクロ素材となった緑色の精霊が叫び声を上げると、
共にシンクロ素材となったエーギルが、
フィールドに舞い戻ったぞ。

極星霊エーギル
ＡＴＫ２４００

極星霊バンシー
レベル２　風属性　魔法使い族
ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ８００

このカードが墓地に送られた時、
極星霊バンシー以外の極星と名の付くモンスター1体を、自分の墓地から特殊召喚する。

「オレは極星霊エーギルの効果発動だ！
墓地のマーラをデッキに戻し、1枚ドロー！
ドローしたカードは、神の拘束　ゲルギャだ。
よって、破壊効果は発動しねぇぜ。
…だが、このターンにお前らのＬＰの殆どを頂戴してやるぜ！
極神皇ロキで、ホワイト・ディックを攻撃！！
撃ち抜きな…ヴァニティ・バレット！！」

「通さねぇ！雲魔物トークン1体をリリースし、カウンター罠
悪天候を発動！
自分フィールドの雲魔物1体をリリースする事で発動し、
モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させるぜ！」

ロキは虚無の弾丸を放ったが、
突然吹き荒れる嵐によって軌道を反らしたぞ。

「神の攻撃から上手く逃れたか…やるじゃねぇか、トウヤ！

なら…カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

俺達のフィールドには、もう…ロクなカードは伏せられとらん…。

このターンで、対応策を引かねば…！

「俺のターン、ドローだ！」

「悪いが…お前らには、もう何もさせねぇぜ。

罠カード　神の拘束　ゲルギャを発動！

相手フィールドのモンスターと魔法・罠カードを1枚ずつ除外し、

それらのカードは発動後、相手の3ターン後のスタンバイフェイズに手札に加わるぜ！

トウヤのフィールドのホワイト・ディックと、マスカワの伏せカードを除外するぜ！」

ウヌゥ…しまった！モンスター・スロットがっ！

神の拘束　ゲルギャ

通常罠

相手フィールドのモンスターと魔法・罠カードを1枚ずつ除外する。

相手はこの効果で除外されたカードを、
3ターン後の相手のスタンバイフェイズに手札に加える。

アーレイ・綾　ＬＰ４０００

手札1枚　1枚

モンスターゾーン

アーレイ

極神皇ロキ

極星霊エーギル

綾

超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス

除雪機関車ハッスル・ラッセル

魔法・罠ゾーン

アーレイ

伏せカード×1

綾　無し

塔也・増川　ＬＰ２４００
手札１枚　１枚

モンスターゾーン
塔也

雲魔物トークン×２

増川

素早いマンボウ

魔法・罠ゾーン

塔也　無し

増川　無し

「ぬぅ～！まだだ…まだ終わらん！
俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ！」

「フフフ…行っくよ～！アタシのターン、ドロー！」

アーレイ・綾　ＬＰ４０００
手札１枚　２枚
モンスターゾーン
アーレイ
極神皇ロキ
極星霊エーギル
綾
超弩級重塔機列車ドーラ・クライシス
除雪機関車ハッスル・ラッセル
魔法・罠ゾーン
アーレイ
伏せカード×１
綾　無し
塔也・増川　ＬＰ２４００

手札１枚　０枚

モンスターゾーン

塔也

雲魔物トークン×２

増川

素早いマンボウ

魔法・罠ゾーン

塔也　無し

増川

伏せカード×１

「ますちー、覚悟してね！

アタシはレベル１０のドーラ・クライシスと、ハッスル・ラッセルをオーバー・レイ！

２体のモンスターで、オーバー・レイ・ネットワークを構築！

アタシの胸に膨らむ想いを届けて欲しいの…。

そう…世界の彼方まで！

エクシーズ召喚！さぁ…出発進行よ！超弩級砲塔列車グスタフ・マックス！！」

ドーラ・クライシスとハッスル・ラッセルが、

巨大な渦へ飲まれ、ソコからドーラ・クライシスよりも巨大な列車が、　汽笛を鳴らして、発進したぞ！

…コイツを見る度に思うんだが…。

コレは…最早列車では無く、砦だろうがっ！

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ＡＴＫ３０００

ＯＲＵ　０→２

「オォーッ、スゲェ！

メチャクチャカッコいいモンスター・エクシーズだぜ！！」

「凄いね…ランク１０のモンスター・エクシーズなんて、早々出せる物じゃないのに…。」

「流石は、アメリカ大会の優勝者と言った所か…。」

「もう…ボクには塔也達が勝つイメージが湧かないんだけど…。

マァ…プロ相手に粘った所は、
評価しない事もないけど…。」

くぬぅ…ツァン・ディレめ…。

今に見ておれよ～！

俺にはまだ、秘策があるのだ…。

「アタシはグスタフ・マックスの効果発動！

1ターンに1度、この子のオーバー・レイ・ユニットを1つ使用する事で、
相手に２０００ポイントのダメージを与えるよ～！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ＯＲＵ　２↓１

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ランク１０　地属性　機械族／エクシーズ

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ３０００

レベル１０モンスター×２体

１ターンに１度、このカードのオーバー・レイ・ユニットを１つ使用する事で、　相手に２０００ポイントのダメージを与える。

「オイオイ…一気に２０００ポイントも与えるのかよっ！」

「綾のデッキには大抵、一気に大ダメージを与えて来おるカードがたんまり入っておる…。

カイザーと同様にな…。」

「行っくよ～！発射オーライ…ビック・キャノン！！」

グスタフ・マックスはユニット１つを大砲に込めると、俺達に凄まじい電磁砲を見舞いおった…。

「うぉわぁーっ！」

「ぐぬぅぅーっ！」

塔也・増川　ＬＰ２４００→４００

「ハァ～…随時とド派手な効果じゃねぇの、嬢ちゃん…。」

「このターンで決めるからね…ますちー、ひばりん！

アタシの墓地から、ドーラ・クライシスとアンダー・スターを除外して、

装備魔法　機関連結をグスタフ・マックスに装備！

機関連結は、自分の墓地から2体の機械族を除外する事で機械族に装備出来て、

装備モンスターの攻撃力を倍にして、貫通効果を付加させるよ～。」

グスタフ・マックスの下部の列車が外され、アンダー・スターとドーラ・クライシスの車体が連結しおったぞ！

機関連結

装備魔法

自分の墓地から機械族2体を除外して、機械族に装備出来る。

装備モンスターの攻撃力を倍にし、

相手の守備表示モンスターに攻撃する時、

攻撃力が守備力を超えた時、貫通ダメージを与える。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス
ＡＴＫ３０００→６０００

「攻撃力６０００～！？しかも貫通付きかよ…。」

「行っくよ～！グスタフ・マックスで、雲魔物トークンを攻撃！！」

フフフ、来おったな…綾め。
コイツを見舞ってくれるわ！

「俺は罠カード、ルーレット・シリンダーを発動だ！
相手モンスター１体の攻撃を無効にするぞ！
その後サイコロを振り、
出た目が１・３・５ならば綾達に…。
２・４・６ならば俺達が、この効果の対象になったモンスターの攻撃力分のダメージを受けるのだ！」

ルーレット・シリンダー
通常罠
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
その後サイコロを振り、
出た目が1・3・5ならば相手に、
2・4・6ならば自分が、この効果の対象になったモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「成る程…そう来たか。
だが…神は賽を振らねぇ！
極神皇ロキの効果発動！
自分のバトルフェイズに1度、相手の魔法・罠カードの発動を無効にするぜ！
神の前じゃ、そんなトリックは通用しねぇぜ！
惑ろみに消えな！ワンダー・トリック！！」

ロキが指を鳴らすと、ルーレット・シリンダーがポンと消えてしまった…。

「な…何と！？コレではグスタフ・マックスを止められん！」

「あ～…ビックリした～。

…で、ますちー達にはまだ何か手はある？」

綾が首を傾げて尋ねて来よった。

「…オイ、雲雀　塔也よ。
何か手は無いのか…。」

「…悪い、何もねぇ…。

お前はどうなんだよ、増川？」

「…あったら、サッサと使っとるわ～！」

「その様子じゃ、もうタネは使いきったみてぇだな…。

締めは譲ってやるぜ…嬢ちゃん、ド派手に決めちまいな！！」

「任せて、アーちん！行くよ～！グスタフ・ハンマー！！」

グスタフ・マックスの装甲が集まって、

巨大な鉄塊となり俺達に降りかかった。

…ってオイオイオイ！コレ当たったらタダじゃ済まんのではないか～！？

「うおぁぁ～っ！！」

「ぬがぁぁぁ～っ！！」

塔也・増川　ＬＰ４００→０

「勝者、アーレイ君・凪原さんのタッグです！

それでは、コレにて本日の朝会を終えます。

全校生徒の皆さん、本日も一層勉学に励んで下さい。」

鮫島校長が締め括り、朝会が終わったぞ…。

それにしても…綾め、相変わらずオーバーキルで決めおって…！

だから…！綾とデュエルするのは嫌だったのだ！！

クソ…ソレに相まって、

カイザーのトラウマが頭によぎりよる…！

「ま～すち～、一緒に教室に…行こ？」

…ぬっ！イ…イカン！！早くこの場を退散せねば…！！

「や～なこった！だ～れが、好き好んでお前なんかと行かねばならんのだ！！サラバだっ！」

「あっ！待ってよ～ますち～！！」

増川→塔也ｓｉｄｅ

負けちまったか…流石はプロデュエリストってトコか…。

ＬＰを１ポイントも削る事が出来なかったなんてな…。

「残念デーシタネ…トウヤ。」

「ああ…けど俺は今より強くなるぜ、フォリナ。

…アーレイにも勝てる位にな！」

俺は改めて、プロデュエリストになる決意を固めるのだった。

世界の実力　発進！グスタフ・マックス！！（後書き）

ヨウッ、みんな！俺はアーレイ・ヴェルテ！

おっちゃんの頼みで、災厄を追っ払いに来たぜ！遥々ジャポンアカデミアにっ！！

俺は鮫島校長にブルー寮を勧められたが、レッド寮を既望したぜ！

ところが…伊藤って言う先生が、俺をブルー寮に入れるって言い出してきたぜ…。

次回、「アーレイ争奪デュエル！」

まさか、プロリーグで活躍していた響プロの姉ちゃんの腕前を拝めるなんてな…。

アーレイ争奪デュエル！（前書き）

大変お待たせしました！

今回は響先生がデュエルをしますよ。

では、第３５話をどうぞ！

アーレイ争奪デュエル！

塔也ｓｉｄｅ

朝会が終わって、英語の合同授業が始まった訳だが…。

俺は夢を見ているんじゃないか…っと錯覚しそうになっている。

何故なら…あのアーレイが、俺達と同じ教室で授業を受けているからだぜ！

「…それデーハ、シニョール　アーレイ。

先程ワタクシが読んだ英文を日本語に略して下サーイ。」

「オレ…いや、違うか。

ワタシは、家族と一緒に裏山へピクニックに行って、楽しい時間を過ごした…。

…コレでいいか？」

「エクセレントッ！素晴らしいノーネ！！

…ただ、最初に一人称を間違って言ってマシータネ…。

ソコだけ気を付けレ～バ、完璧ナノーネ。」

「…ハハハ、悪いね…クロノス先生。

母国語なもんだから、ついオレ…って言っちまったぜ。」

まあ…アーレイはイギリス人だから、英語の授業は国語みたいなもん…か。

そう言えば…フォリナも、たまに一人称を間違えた事があったと言ってたな…。

「では、続きの英文を…。」

クロノス先生が授業を続けようとした時、終了のチャイムが鳴り響いた。

「…宜しい、今日の授業はココまでデースノ。

今日の授業内容は、今度の中間テストに出るノーネ！

皆サーン、シッカリ復習をして下サーイ！」

テストか…最近、夜遅くまでアカデミア内を見回りしてたから、全然勉強出来てねぇぜ…。

「トウヤ、どうシマーシタ？

そんなグロッキーな姿をシテ…。」

俺の事を心配したのか、フォリナが不安げに尋ねた。

「フォリナか…最近、ちと夜更かししててさ、
あまりテスト勉強出来てなくって、困ってたんだよ…。」

すると、フォリナは呆れながら溜め息をついた。

「…全く、ソンナ事ジャ…プロデュエリストには、なれマセーンヨ！

ショウ君に聞きマーシタヨ！
…最近、授業中にスリープしてイルッテ！！

トウヤ…前々から思ってイマーシタガ、イブニングに何をシテイルノデースカ！！」

「え…え～と、ソレは…。」

参ったな…フォリナにあの事を話す訳には行かねぇし、
いや…話しても信じて貰えねぇか…。

何せ…デュエルで生徒を保健室送りした奴を倒して回っている…。
…な～んて、普通じゃ有り得ねぇ話だしな…。

「トウヤ～！ちゃ～んとアンサーして貰いマスカラネ！！」

「オイオイ2人共…痴話ゲンカはソコまでだぜ？」

フォリナが俺に問い質していると、アーレイが割って入ったぜ。

「アーレイ！？オ…オイ！俺とフォリナは、そんな関係じゃ…！」

「ソ…ソウデスヨ！アーレイ君…アーユー　トリッキング　ミー！？」

俺とフォリナは、慌てて否定した。

アーレイ…一体ドコでそんな日本語を覚えたんだよ…。

フォリナなんて、パニクったあまり…英語で反論してるし…。

「…違ったか？お前達みたいな事をそんな風に呼ぶんだ…って、おっちゃんから聞いたんだけどな…。」

「そのおっちゃんって誰だよ…。」

「お前の親父さんの事だぜ…トウヤ？

オレ達に新しいカードを作ってくれた時に、チョコッと聞いたんだけどな…。」

な…何ぃ～!?親父の奴、アーレイと…。

…ってかチーム　アース・ガルド全員と顔見知りなのかよ!?

そう言えば親父の奴、たまに…もの凄い人物と知り合いだったりするからな…。

「確か…トウヤのお父さんとお母さんは、今でも世界中をトラベルしているのデ～シタネ…。」

「ああ…大方イギリスに旅行した時に、アーレイ達と知り合ったんだろな…。」

「ま…そんなトコだ。

ところでトウヤ…お前、な～んか疲れてねぇか?

…待ってな、ちょうどイイ物がカバンの中に入ってるからさ…。」

アーレイは自分のカバンをガサゴソと漁って、ロキの絵がプリントされた箱を取り出したぜ。

「…オッ!コレコレ!

コレでも食って、元気出しな!

ホレ、嬢ちゃんにもやるぜ。」

「サ…サンキュー、アーレイ君。

トウヤ…折角ですカラ、イーティングしまショウ？」

「あ…ああ、早速食べてみようか…。」

俺とフォリナはアーレイから貰った箱を開けて、中身を取り出した。

見た目はカラフルで、ちょっと厚めの板チョコだな…。

「ところで…アーレイ君、コレはどんなフレーバーなのデースカ？」

貰った箱をよく見ても、どんな味なのかは書かれちゃいねぇな…。

何だろう…どっかで同じ様な物をアカデミアで見た気がするんだが…。

「ソイツは食ってみてのお楽しみってな…。

ホレ、ガブッと食いなっ！」

俺は意を決して、ガブッと食った。

「…コレは、グレープ味か。

うん、結構美味いな…。」

「グレープ味なのデ～スカ…。

デハ、ワタシも…。」

フォリナは安心した様子で、チョコをパクッと食べた。

「…ワッツ？このフレーバーは…。

オレンジ味デ～スネ？」

「…不思議だろ？ソイツはロキのイタズラって言ってな…。

今、イギリス中で流行ってるチョコでさ～。

食うまでどんな味なのか分かんねぇ…このドキドキ感がウリなんだぜ！」

「トウヤ…コレって、ドローパンに似てマースネ。」

そうだ…覚えがあって当然だ。

コレは…ドローパンと同じじゃねぇか！

「…アーレイ、コレってもしかして、ハズレとか…ってあるのか？」

「…ハズレ？そうだな…オレが聞いた話じゃ、

激辛ペッパーチョコと、

激甘ヌガーチョコ…。

あっ、そうそう…スティルトンチョコなんてのもあったっけ…。」

うわぁ…正にドローパンじゃねぇか…。

ハズレが極端にマズい物ばっかだぜ…。

「…ってか、そんなチョコをプレゼントしたのかよ！？」

「まあまあ…落ち着けよ、トウヤ。

プレゼント用に買ったチョコは、全〜部オレが選んだんだぜ？

オレはこのチョコでハズレを引いた事は、１度も無い！

…だから、安心しなって〜。」

そう言って、アーレイは得意気に笑った。

…勘弁してくれって。

もし…ハズレを引いたら、当分の間チョコが食えなくなっちまうぜ…。

「オ～イ、そこの2人もコッチに来な！

お前達にもイイ物やるぜ。」

アーレイが呼びかけると、
十代と翔がやって来たぜ。

「グッドモーニング、ジュウダイ君、ショウ君。」

「よう十代、翔。どうしたんだよ、もっと早く話し掛けても良かったのに…。」

「…だって、ねぇ…アニキ。」

「フォリナと話してる所を邪魔しちゃ悪いと思ってよ…。」

「…モゥ！ジュウダイ君達マデ～！」

…全く、アーレイと言い、十代達と言い、何だってんだ？

「ハハハ…ところで何食ってるんだ、2人共？」

「コイツか？ロキのイタズラって言うチョコだ。

…まあ、ドローパンのチョコ版みたいなもんだ。」

「まだあるから、お前らにもやるぜ。…待ってな。」

「待った！…折角だからさ、俺が選んでもいいか？」

アーレイがカバンを漁ってる時、

突然、十代が提案してきた。

「へェ…お前もドローには自信があるってか？

…いいぜ、じゃあこん中から選びな。」

そう言うと、手に持ったカバンを机に置いた。

中を見ると、数十個のロキのイタズラがギッシリあったぜ。

「アーレイ…もしかして、このカバンに入ってるのって、全部ロキのイタズラか！？」

「ああ、そうだぜ？ジャポンアカデミアの生徒全部分買ったから、ギッシリ詰まってるだろ～？お陰で教科書とかは、別のカバンん中に入れるハメになっちまってな～。」

そう言って、陽気に笑ってるけどよ…。

アカデミアの生徒全員分って、どんだけ買ったんだよ…アーレイ。

ちょっとした売店でも開けそうだぜ…。

「う～ん、そうだな…。

じゃあ、コレだ！翔、折角だからお前も選んでみろよ。」

そうこうしてる内に、十代は選び終わったみたいだな。

翔も少し悩んでから、選んだぜ。

「じゃあ…一斉に食おうぜ、翔。いただきま～す。」

「う…うん、いただきます！」

十代と翔は一斉にチョコを食べた。

「オォ～！美味いな～コレ！！
リンゴ味みたいだけど…。
なんか、普通の奴よりも、特別美味いぜ！」

「オッ！やるな～ジュウダイ。
ソイツは黄金のリンゴ味って言う奴で、１００枚買っても当たんねぇ…って言われてるレアな奴だぜ！

まさか、オレ以外にソイツを当てる奴がいるとはな…。」

流石、十代…。毎回黄金のタマゴパンを当ててるだけあるぜ…。

「僕のは…ウゥ～！辛い～！！
この味って、まさかカレー味！？」

「アチャ～…。ハズレを引いちまったか…ショウ。
あ～…こんだけ買っちまったから、
ちょっとしたハズレが紛れ込んでるかもしれねぇや…。」

危ねぇな…オイ。…て事は、こん中には本当にアーレイが言って

た大ハズレがあるって事かよ！？

「オイ、大丈夫か翔！？口直しに俺のチョコをやるから食え！」

翔は慌てて俺のチョコを頬張って、何とか落ち着いたぜ。

「～っ！アーレイ君！！

この中にはハズレは無いんじゃ無かったの！？」

「あ～…悪いな、ショウ。

けど、コレよりヒドい物は無いと思うぜ…。」

アーレイは頬をポリポリ掻いて、翔に謝った。

「さ～てと、他のみんなにもコイツを配りに行くかね…。

じゃあな！また授業で会おうぜ～。」

アーレイはヒラヒラと手を振ってから、カバンを2つ引っ提げ、

他の生徒にロキのイタズラを配りに行ったぜ。

…やれやれ、大ハズレを引く奴が出ないといいんだけどな…。

塔也→アーレイｓｉｄｅ

ア～…ショウには悪い事をしちまったかな…。

流石にあんだけ買ったら、
ハズレを引いちまう…か。

色んな店で買ったから、ハズレは1つも無いと思っていたんだが…。

さて…午前の授業は終わって、今は昼休み。

早速昼メシ…っといきたいトコだが、オレはサメジマ校長のトコに行かなきゃならない。

何でも、オレの寝泊まりする寮を案内するんだと…。

…で、オレは校長室の前にやって来た訳だが…。

どうやら、嬢ちゃん…アヤも来ている様だぜ。

「よぅ！嬢ちゃん！！嬢ちゃんもサメジマ校長に用か？」

「うん！そうだよ～アーちん！

アタシが入る寮に案内するんだって～。

アーちんも同じ用事で呼び出されたんでしょ？」

「…ま～な、んじゃ…入るとしますか。」

「「失礼しまーす！」」

オレ達はドアをノックして、挨拶をした。

「…どうぞ。」

サメジマ校長の許可を得て、オレ達は部屋に入った。

「よく来ました…アーレイ君、アヤさん。

転校前にお伝えしました通り、今日の昼休みの時間に、お2人に入って頂く寮へ案内します。

クロノス先生、説明をお願いしますよ。」

「分かりマシータ、サメジマ校長。

シニョール　アーレイにはオベリスク・ブルーの男子寮へ…。

シニョーラ　アヤには、女子寮へ案内するノーネ。

それでは早速…。」

「ちょ～っと待ってくれねぇか、クロノス先生？」

「な…何デスーカ、シニョール　アーレイ？」

「折角の推薦だけど…オレは、レッド寮を希望するぜ。」

「な…何デスート？何故レッド寮を希望するノーネ、シニョールアーレイ？」

クロノス先生は大層驚いて、理由を尋ねて来たぜ。

「理由は…アレだ。ジャポンアカデミアに到着する前に、ココの資料を見せて貰ったんだが…。

レッド寮のデザインが、結構オレのハートにガツンと来たもんでね…。

折角ジャポンに来た事だし、
日本家屋って奴に1度住んでみたいと思ってたんだよな～。」

「ソ…ソレがレッド寮を希望した理由デスーカ！？」

「いや…あと1つあるぜ。

オシリス・レッドって、

ジャポンアカデミアの中じゃあ、最低ランクなんだろ？

オレは成り上がりでプロになった身だからな…。

ソイツらに実力を付ける為の助け舟になってみてぇ…そう思ってな。

オレがレッド寮を選んだ理由は以上だ…。」

「…アーちん。」

オレが言った事は本当だ…。

オレはエヴァンやガルデンに会うまでは、イギリスアカデミアの生徒ですら無かったな…。

…タダの粋がってたストリートチルドレンだったけ…。

そん時のオレは…まあ、生きる為に色々やったわな…。

同じストリートチルドレンの連中とツルんで、人の家に忍び込んでは盗みをしたり、観光客相手に詐欺やったりな…。

そん時にエヴァンとガルデンにお縄を頂戴されて無かったら…オレは犯罪者として生きていたかもな…。

「フ～ム、確かに…オシリス・レッドの生徒達にトッテ～ハ、シ

ニョール　アーレイの入寮はこの上無い起爆剤になり得マスーガ…。

サメジマ校長、シニョール　アーレイの提案…ドウシスーカ？」

「…そうですね、本人がレッド寮を希望すると言うのなら、私はソレに賛成しましょう。

では、レッド寮長の響先生にその旨を伝えておきましょう。」

よっし！レッド寮への入寮を、サメジマ校長は認めてくれたぜ！

まあ…もう1つの理由で、

気楽な学園生活を送りたいってトコもあるけどな～。

イギリスアカデミアじゃあ、オレはエヴァンとガルデンと同じエルドヘイムってクラスなんだが…。

そのクラスの生徒は生真面目な奴ばっかで、デュエル以外じゃ楽しいとは程遠い学園生活だったからな…。

ジャポンアカデミアには使命で来た訳だが…。

…コレぐらいのハメ外しをしても、罰には当たらないよな？

「待って下さい！鮫島校長！！

私は反対です！彼をレッド寮などに入れるなんて…！」

…と思ってたら、イトウって言う先生が異議を立てて来たぜ。

「…オイオイ、そりゃあ無いんじゃねぇの？

アンタは生徒の頼みを蔑ろにするってか？」

「フン…私はただ、君の様な優秀な生徒をレッド寮などに入る事がガマンならんと言っているだけだ！」

…あ～あ、コリャてんで話になりゃしねぇな…。

このアカデミアにも、こういう石頭な先生がいるんだな…。

状況を見かねたサメジマ校長が、イトウ先生にある提案をしたぜ。

「では…どうです、伊藤先生？

レッド寮長の響先生とデュエルをしてみては？」

「…この私がレッド寮長とデュエルを…？」

「いい機会です…響先生とデュエルをすれば…。

伊藤先生にも、オシリス・レッドもそう侮れない物だと分かる筈ですよ。」

「…いいでしょう。ですが…私が勝ったら、アーレイ君にはブルー寮に入って貰いますよ！」

サメジマ校長の提案に、
勝手に条件を付け加えて了承しやがったぜ…。

「…ちょっと待ってて！オレの意見を無視した上に、勝手に条件を付け加えるなっての！」

「諦めなよ…アーちん。」

「それでは鮫島校長…私は凪原さんを女子寮へ案内致します。

さぁ…凪原さん、私について来て。」

「ハ～イ、それじゃあお先～アーちん！」

アヤは一足先に、アユカワ先生について行って女子寮へ向かったぜ。

それから少し経ってから、ヒビキ先生がやって来たぜ。

…ん？そういや、ヒビキって名前、どっかで聞いた事が…。

「待ってましたよ、響先生。

早速で申し訳無いですが、伊藤先生とデュエルして頂きます。」

「伊藤先生とですか…？

…え～と、コレは一体どういうでしょうか、鮫島校長？」

唐突に呼び出されたのか、ちょっと困惑しているみたいだぜ。

「実は…アーレイ君が、レッド寮への入寮を希望していましてね…。

私としては、大いに賛成なのですがね…。

伊藤先生はレッド寮への入寮を反対しましてね…。」

「そ～こで！シニョーラ　ヒビキとデュエルをシ～テ…、アナタが勝てば、シニョール　アーレイをレッド寮へ入寮する事となった～ノ。」

サメジマ校長とクロノス先生が、状況を説明したぜ。

「…へェ、わざわざレッド寮を希望するなんて…。

変わっているわね、アーレイ君？」

「そんな事は無ぇと思うんだけどな…。

オレはただ、入りたいと思って志願した訳だし…。」

ヒビキ先生はしばらく考えてから、サメジマ校長の提案に乗ったぜ。

「分かりました…そのデュエル、お受けします。

アーレイ君がウチのレッド寮に来てくれる事は、私としても願っても無い事ですしね。」

「…フン、あの響　紅葉の姉とは言え、レッド寮を担当している教師などには負けはせんぞ！

このデュエル…必ず勝利して、アーレイ君にはブルー寮に来て貰う！」

「…あら、言ってくれますねぇ…伊藤先生？

オシリス・レッドのみんなの為に、少々本気で行かせて貰いますよ？」

あ～…ヒビキって、どっかで聞いた事があると思ったら…。

プロリーグ　シングルブロックで君臨していたチャンピオンと同じ名前じゃねぇか！！

…ヘェ、コイツは面白いデュエルになりそうだぜ！

「それでは2人共、準備は宜しいですね？」

「ええ、いつでも。」

「早々に片を付ける！」

イトウ先生とヒビキ先生は向かい合って、ディスクを構えたぜ。

「ソレデ～ハ、デュエル開始ナノーネ！！」

「「デュエル！！」」

伊藤　ＬＰ４０００

響　　ＬＰ４０００

ディスクのルーレット機能で、先攻はイトウ先生から…か。

「先攻は私か…。私のターン、ドロー！

私はライトロード・パラディン　ジェインを攻撃表示で召喚する！」

高貴な鎧を装備した騎士が颯爽と現れたぜ。

ライトロード・パラディン　ジェイン
ＡＴＫ１８００

イトウ先生はライロデッキか…。
あのデッキはプロリーグでも良く相手にするんだよな～。

　ライロって、純成か混成かによって厄介さがガラリと変わるんだが…。

どっちにしたって、タチが悪いデッキだぜ…。

「カードを2枚伏せ、ターン終了。

そして、エンドフェイズに　ジェインの効果を発動する！
自分のデッキトップから2枚のカードを墓地に送る！

私のデッキトップより、ライトロード・ビースト　ウォルフ、ゾ

ンビキャリアを墓地へ送る！

そして、私はウォルフの効果を発動！

このカードがデッキから墓地に送られた時、自分フィールドに特殊召喚する！」

ライトロード・ビースト　ウォルフ

ＡＴＫ２１００

ライトロード・ビースト　ウォルフ

レベル４　光属性　獣戦士族

ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ３００

このカードは通常召喚出来ない。

このカードがデッキから墓地に送られた時、自分フィールドに特殊召喚する。

来たか…ライトロードの切り込み隊長が！ソレにゾンビキャリア…。

…って事は、シンクロを軸にした混成ライロデッキか…。

「成る程…早速、ライトロードによる墓地肥やしを…。
では…私のターン、ドロー。」

伊藤　ＬＰ４０００
手札　３枚
モンスターゾーン
ライトロード　パラディン　ジェイン
ライトロード・ビースト　ウォルフ
魔法・罠ゾーン
伏せカード×２

響　ＬＰ４０００
手札　６枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン　無し

「さて…私はカードを3枚セット！
私はコレでターンを終了します。」

ヒビキ先生はカードを伏せただけ…か。
う～ん…コレだけじゃあ、どんなデッキか見当もつかねぇな…。

「伏せカードのみ…か。
モンスターを引き当てる事が出来んとは…。
やはりオシリス・レッドと言った所か…。」

…オイオイ、いくらモンスターを召喚しなかったとは言え、油断し過ぎじゃねぇか？

「それはどうでしょうね？

…さぁ、伊藤先生のターンですよ？」

「…フン、行くぞ！私のターン、ドロー！」

「ではこのドローフェイズに、リバースカード　オープン！

永続罠　人造天使を発動！

このカードが存在する時にカウンター罠が発動される度に、
自分フィールドに人造天使トークン１体を特殊召喚出来ますよ。」

人造天使

永続罠

カウンター罠が発動される度に、
自分フィールド上に人造天使トークン
（レベル１　光属性　天使族　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ３００）
を１体特殊召喚する。

アレは…カウンター罠を発動した時にトークン１体を呼び出すカードか。

…って事は、ヒビキ先生はパーミッションデッキか？

伊藤　ＬＰ４０００

手札　４枚

モンスターゾーン

ライトロード・パラディン　ジェイン

ライトロード・ビースト　ウォルフ

魔法・罠ゾーン

伏せカード×２

響　ＬＰ４０００

手札　３枚

モンスターゾーン　無し

魔法・罠ゾーン

人造天使

伏せカード×２

「伏せカードで私を躊躇させる気か…！

ならばジェインをリリースし、ライトロード・エンジェル　ケルビムをアドバンス召喚する！」

ジェインが閃光となって天に昇ると、錫杖の様な槍を携えた聖母

が舞い降りたぜ。

ライトロード・エンジェル　ケルビム
ＡＴＫ２３００

「ケルビムの効果を発動する！

このカードのアドバンス召喚にライトロードの名の付いたモンスターをリリースした時、

デッキトップからカードを４枚墓地に送る事で、相手フィールドのカード２枚を破壊する！」

「では…リバースカード　オープン！

カウンター罠　天罰！

手札１枚を墓地に捨て、効果モンスターの効果を無効にして破壊します！」

ドコからともなく降り掛かった雷がケルビムに当たったぜ。

「そして…人造天使の効果により、私のフィールドに人造天使トークン１体を守備表示で特殊召喚しますね。」

人造天使トークン
ＤＥＦ３００

カウンター罠で効果を無効にされちまったから、墓地肥やしは出来ねぇが…。

ライロがコレで終わるとは思えねぇな…。

「クッ！ケルビムが破壊されたか！

ならば…手札のライトロード・ウォリアー　ガロスを墓地に送り、魔法カード　ソーラー・エクスチェンジを発動！

カードを2枚ドローする！

そして、デッキトップから2枚墓地へ送る。

私はライトロード・ドルイド　オルクス、グローアップ・バルブを墓地へ送る。」

グローアップ・バルブか…。

ま～た、厄介な奴が墓地に落ちたもんだぜ…。

ソーラー・エクスチェンジ

通常魔法

手札のライトロードと名の付いたモンスター1体を墓地に送り発動する。

カードを2枚ドローし、
デッキの上からカード2枚を墓地に送る。

「…フッ、行くぞ！ウォルフで人造天使トークンを攻撃だ！

クレセント・ルーカス！！」

ウォルフの三日月を描く様な一撃で、人造天使トークンは呆気なく壊れたぜ。

「…ふふ、引っ掛かりましたね、伊藤先生？」

「…何？どういう事だ！？」

「リバースカード　オープン！　罠カード　天の警鐘！

自分フィールドの天使族モンスターが戦闘で破壊された時、　デッキからレベル４以下の天使族モンスター1体を特殊召喚します！

来なさい、堕天使オレブ・ザラク！！」

白銀のベルが鳴り響き、
ベルとは不釣り合いな双子の堕天使が出現したぜ！

堕天使オレブ・ザラク
ＡＴＫ１７００

天の警鐘
通常罠
自分フィールド上の天使族モンスターが戦闘で破壊された時に発動する。
自分のデッキからレベル４以下の天使族モンスター１体を特殊召喚する。

「カウンター罠では無かったか…。
私はメインフェイズ２に移行！
デッキトップから１枚墓地に送り、墓地のグローアップ・バルブを守備表示で特殊召喚する！」

グローアップ・バルブ
ＤＥＦ１００

グローアップ・バルブ
レベル１　地属性　植物族／チューナー
ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１００
自分のデッキの上からカード１枚を墓地に送り、このカードを墓地から特殊召喚出来る。
グローアップ・バルブの効果はデュエル中に１度しか使用出来ない。

「行くぞ！私はレベル４のウォルフにレベル１のグローアップ・バルブをチューニング！！
集いし星が…不屈の勇志を呼び起こす！
シンクロ召喚！出番だ、スカー・ウォリアー！！」
グローアップ・バルブが１つのリングになって、
ウォルフが潜ると、所々に傷付いた戦士が現れだぜ。

スカー・ウォリアー
ＡＴＫ２１００

「カードを１枚伏せ、ターン終了だ。」

「では…私のターン、ドロー。」

伊藤　ＬＰ４０００
手札　２枚
モンスターゾーン
スカー・ウォリアー
魔法・罠ゾーン
伏せカード×３

響　ＬＰ４０００
手札　３枚
モンスターゾーン
堕天使オレブ・ザラク

魔法・罠ゾーン

人造天使

「私は魔法カード　闇の誘惑を発動！

カードを2枚ドローし　、その後手札の闇属性モンスター1体を除外します。

除外出来ないと、私は手札を全て墓地に送る事になりますけどね…。

私は手札から闇属性の堕天使アスモディウスを除外しますね。」

ヒビキ先生が僅かに微笑んだぜ！

キーカードを引けたのかね？

闇の誘惑

通常魔法

デッキからカードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスター1体を除外する。

手札に闇属性が存在しない場合、手札を全て墓地に送る。

「ふふ…行きますよ、伊藤先生？
私は堕天使オレブ・ザラクをリリースし、
堕天使ベルゼルスをアドバンス召喚！」

オレブ・ザラクは巨大な闇になって、

見る見る内に、凶悪な面構えをした堕天使に変わっていったぜ！

堕天使ベルゼルス
ＡＴＫ２８００

「な！？レベル７のモンスターをリリース１体で召喚だと？

…さては、堕天使オレブ・ザラクはダブルコストモンスターか！」

「ご名答ですよ、伊藤先生。

堕天使オレブ・ザラクは闇属性・天使族のアドバンス召喚する時、
２体分のリリースとして扱えます。」

堕天使オレブ・ザラク

レベル４　闇属性　天使族

ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１２００

このカードは１ターンに１度、戦闘及び効果では破壊されない。

このカードは闇属性・天使族のアドバンス召喚する時、

２体分のリリースとして扱う。

成る程…段々、ヒビキ先生がどんなデッキを使ってるか分かって来たぜ！

大方、堕天使を軸にしたビートダウン…ってトコか？

「さて…行きますよ、伊藤先生？

私の堕天使達の力、存分に味合わせてあげますよ。」

「堕天使だと？そんな物、私の秩序の光で蹴散らしてくれる！」

ライロ対堕天使ってトコか…。

頼むぜ、ヒビキ先生！

必ず勝ってくれよ～！

アーレイ争奪デュエル！（後書き）

アーレイ君のレッド寮へ入寮を拒む伊藤先生にオシリス・レッドの強さを分かって頂く為…。

私は急遽、響先生とのデュエルを提案しました。

伊藤先生は優秀な生徒のみを尊重する困り物の先生ですが、響先生とのデュエルで、きっと考えが改まる筈です。

次回、「響先生の実力」

頼みましたよ…響先生。

伊藤先生に正しい教師の在り方という物を見せて下さい！

響先生の実力（前書き）

大変お待たせしました！

第３６話です。

前回の話で出ていたヌガーは、フランスで作られているとっても甘～いスイーツの事です。

スティルトンはイギリス産のブルーチーズで、世界三大ブルーチーズとして有名なチーズですよ。

ちなみに…今回のデュエルには、最近解禁されたあのモンスターが登場します。

響先生の実力

増川ｓｉｄｅ

「隊長、大丈夫？あの時から、ずっと顔色が悪くなってるけど…。」

「ぐぬおぉ～ッ！！口の中がまだ気持ち悪いぞ～！！。

～っ！！コレだから、あの手の食い物は～！！」

日向副隊長の心配をよそに、俺は未だに悶絶しかかっていた…。

一体何があったかと言うと、話は今日の午前中にまで遡る。

丁度、現国の授業が終わって休み時間になった時、

俺は日向副隊長に、天野　光らの動向について話をしていた…。

「それでは、奴らは今…目立った動きはしとらんと言うのだな？日向副隊長よ。」

「うん…ファンクラブの部室は不気味な位に静まり返っているよ。

まあ…部室には、度々ファンクラブじゃない生徒か来ているみたいだけどね…。」

「…そうか。苦労を掛けて済まんな、日向副隊長よ。」

「…まあ、ソレはいいんだけどさ…。」

日向副隊長は一息ついてから、俺に不安げな眼差しを送った。

「隊長、もしかして…オイラ達には内緒で、何かヤバい事に首突っ込んで無〜い？」

「…な、何だ？どうしたと言うのだ、藪から棒に…。」

「オイラ達は不安なんだよ…。

…だって、隊長が仲間のみんなが倒れたと聞いて、

夜遅くまで…万丈目君や宝山君と一緒に天野達を探し回っていた事があったじゃない？」

俺が斎木とデュエルをした日の事か…。

あの時に命懸けのデュエルをし、辛くもナンバーズカードを回収出来たのは良かったが…。

その時に激しい頭痛がと、

デュエル中に喰らったダメージが体に響いた事で、

その場に倒れたのだったな…。

「あの後大変だったんだよ～？
隊長が倒れたって聞いて、パニックになった仲間が数人いたんだから…。
何とかその場はオイラが納めたんだけどさ…。
隊長、あまり無茶しないでよ…。
ホラ…オイラ達ってみんな、何かしら心に傷を持った集まりだからさ…。」

日向副隊長は心境を打ち明けた。

…済まんな、お前達。

「な～に話しているの～？
アタシも混ぜてよ～ますち～！」

そんな時だったな、綾が来おったのは…。

何故だか…周りの男子生徒から、もの凄い殺気を感じるのだが…。

…気のせいか？

「…綾か、一体何しに来たのだ？」

「もう隊長…そんなに綾さんを邪険にしなくても…。

えっと…初めまして、
オイラは日向（ひなた）　耕助（こうすけ）って言います。
隊長が設立したフォ…。」

「ぬわぁ～！ストップ！ストッ～プ！！日向…氏よ！」

俺は慌てて日向副隊長の言葉を遮った。

もし…俺がフォリナ様のファンクラブの隊長をやっている事を綾の耳に入ってしまったら…。

俺は綾にボコボコにされてしまう～！

「…ま～すち～？ヒナタンが言ってた隊長って、な～に…？」

ぬわ～！！綾が手をパキポキと鳴らしとる～！

マ、マズイ！何とか話を反らさねば…！

「べ…別に、大した事ではないぞ！アダ名の様な物だ！！」

「…そうなの？だったらいいんだけど…。」

…フゥ、綾は少し落ち着いてくれたか…。

「…あ、綾よ！そ…そんな事よりも、俺に何か用があったのだろう！？」

「…あっ！そうそう。さっき、アーちんからチョコを貰ったんだ～！

ますちーの分も貰ったから、一緒に食べよ～っと思ってね～！」

綾は機嫌を良くして、カバンから2つの箱を取り出したぞ。

…このチョコこそが事の始まりだった。

「…ところで綾よ、このチョコは一体何味なのだ？」

「え～と、アーちんが言うには…。

どんな味なのかは、食べてみるまで分からないんだって～。」

何だソレは！？まるでドローパンではないか！

イ…イカン！俺はドローパンにはいい思い出が無い！！

ある時はクサヤパンを食べ…またある時は激辛パンを…。

ヒドい時には、ハチノコパンを食ってしまったのだからな！！

「お、俺は遠慮しておこう…。

そのチョコは日向…氏にでも…。」

「…ますち～？アタシがあげるチョコを食べたくないの…かなぁ…？」

ヤ…ヤバいぞ、コレは！断ったら絶対ボコボコにされる…！

「わ…分かった！ならば、右だ！右のチョコを貰おうか！」

「…エヘヘ、ならアタシはコッチのチョコだね～。

じゃあ…一緒に食べよ？」

「ええ～い！南無三！！」

俺は意を決してチョコを食った。

その瞬間、強烈な臭いが口いっぱいに広がった。

「ぬっわー！！な、何じゃコリャ～！？

口の中が…臭い～！！

コリャ、チーズの臭いか！？」

「ウップ…隊長の食べたチョコからブルーチーズの臭いがする…。

しかも、かなり強烈な奴だよ…コレ。」

「だ…大丈夫！？ますちー？」

「綾、チョコだ！ソッチのチョコをくれ！！」

「う…うん！はい、ますちー！」

綾は食べてたチョコを割って、俺に差し出した。

俺は慌ててソレを食べたが…。

今度は舌全体に凄まじい辛味が襲って来おった…。

「ウッギャー！！か…辛い～！！

だ…誰か、水…水を持って来てくれ～！！」

「あ…あれ～？このチョコ、そんなに辛かったかな～？」

綾よ…何故ソイツを平然と食えたのだ～！？

「綾さん…オイラもそのチョコ、食べていいかい？」

「いいよ～ヒナタン！…はい、どうぞ。」

日向副隊長は綾から貰ったチョコを食った瞬間、
あまりに激辛だったのだろう…思わず悶絶しかけておったぞ…。

「…ウゥ～っ！！コ…コレ、凄く辛いよ～！！

あ…綾さん、よくこんなに辛いチョコを食べれたね！？」

「…そうかな？アタシは、コレ位の辛さなんて平気なんだけどね～？」

そう言えば…綾は大の辛党だったな…。

…小学生の頃に、綾に貰った手作り激辛チョコを食って、気絶してしまった事があったな…。

お陰で…しばらくの間、俺はチョコを受け付け無くなってしまったぞ…。

…こんな事が起こり、俺の口には…未だに凄まじい臭みと辛味が居座っておる…。

クソ～！チョコなんて大っ嫌いだ！！2度と食うものかっ！！

増川↓アーレイｓｉｄｅ

な～んか…今、ロキのイタズラを食った奴が絶望に浸ってる様な気がしたが…。

…オレの気のせいかね？

…今はその事は置いとくとして、目の前のデュエルを楽しむとするか！

「行きます！堕天使ベルゼルスで、スカー・ウォリアーをアタック！！

エルモス・ブレイズ！！」

ベルゼルスは深淵の焔火をスカー・ウォリアーに見舞ったぜ。

「ぐっ…！」

伊藤　ＬＰ４０００↓３３００

「…だが、スカー・ウォリアーは1ターンに1度、戦闘では破壊されん！！」

「では…こちらも堕天使ベルゼルスの効果を発動します。

ベルゼルスが攻撃をした時、ダメージステップ終了後に相手モンスター1体を墓地に送ります！

燃え尽きなさい、スカー・ウォリアー！

ヘル・エンバーション！！」

残り火が急に燃え広がって、スカー・ウォリアーを焼却しちまったぜ…。

堕天使ってのは、ドイツもコイツも厄介な効果を持ってるからな…。

一度回り出したら…ライロでも、一筋縄じゃいかなくなるんじゃね？

スカー・ウォリアー

レベル５　地属性　戦士族／シンクロ

ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ１０００

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが表側表示で存在する限り、相手は他の戦士族モンスターを攻撃出来ない。
また、1ターンに1度、このカードは戦闘では破壊されない。

堕天使ベルゼルス
レベル7　闇属性　天使族
ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２５００
このカードは墓地から特殊召喚出来ない。
このカードが攻撃した時、ダメージステップ終了後に相手モンスター1体を墓地に送る。

「アルデンティ～ノ！流石、シニョーラ　ヒビキ…。
鮮やかなタクティクスナノーネ！」

「クッ…！いい気になるな…響先生！」

「勿論、油断はしませんよ！
私はカードを2枚セットし、ターンを終了します。」

「グッ…！私のターン、ドロー！」

伊藤　ＬＰ３３００
手札　３枚
モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×３

響　ＬＰ４０００
手札　０枚
モンスターゾーン
堕天使ベルゼルス
魔法・罠ゾーン
人造天使
伏せカード×２

「私は手札１枚をデッキトップにセットし、墓地のゾンビキャリアを特殊召喚する！

更に、ライトロード・サモナー　ルミナスを攻撃表示で召喚！

そして、ルミナスの効果を発動する！

手札１枚を墓地に捨て、レベル４以下のライトロードと名の付くモンスター１体を墓地から特殊召喚する！

立ち上がれ、ライトロード・ウォリアー　ガロス！！」

ゾンビキャリア
ＡＴＫ４００

ライトロード・サモナー　ルミナス
ＡＴＫ１０００

ライトロード・ウォリアー　ガロス
ＡＴＫ１８５０

オ～ッ！スゲェスゲェ…。

流石ライロ、一気にモンスターを展開して来たか…。

コレでイトウ先生はレベル５か６…、または８のシンクロモンスターを呼び出せるな…。

ゾンビキャリア

レベル２　闇属性　アンデット族／チューナー

ＡＴＫ４００　ＤＥＦ２００

自分の手札１枚をデッキの上に置く事で、このカードを墓地から特殊召喚出来る。

この効果で特殊召喚した時にフィールドから離れる場合、このカードは除外される。

ライトロード・サモナー　ルミナス

レベル３　光属性　魔法使い族

ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００

１ターンに１度、手札１枚を墓地に捨てる事で、墓地からレベル４以下のライトロードと名の付くモンスター１体を特殊召喚出来る。

自分のエンドフェイズに、デッキの上からカード３枚を墓地に送る。

「よし！私はレベル３のルミナスと、レベル４のガロスに、レベル２のゾンビキャリアをチューニング！！

天空の守護騎士よ…聖なる光をその身に宿し、裁きの刃を掲げよ！

シンクロ召喚！秩序の騎士、神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアス！！」

ゾンビキャリアが２つのリングに変わり、ルミナスとガロスがソレを潜ると、

ソコから、天界の加護を受けてパワーアップしたパーシアスが駆け抜けて来たぜ。

神聖騎士パーシアス

ＡＴＫ２６００

「攻撃力はベルゼルスより下…。でも、そのモンスターの効果は…。」

「…ほう、知っている様だな、響先生。

神聖騎士パーシアスの効果！

１ターンに１度、相手フィールド上の表側表示モンスター１体の表示形式を変更出来る！

さあ…秩序の光に目を眩ませ！

セイント・フラッシュ！！」

ベルゼルスはパーシアスから放たれた光に眩んで、思わず体勢を崩しちまったぜ。

堕天使ベルゼルス
ＡＴＫ２８００↓ＤＥＦ２５００

神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアス
レベル８　光属性　天使族／シンクロ
ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２１００

１ターンに１度、相手フィールド上の表側表示モンスター１体の表示形式を変更出来る。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えた場合、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

「コレで堕天使ベルゼルスを倒せる！

バトルだ！神聖騎士パーシアスで、堕天使ベルゼルスを攻撃！！

やれ！セイント・セイバー！！」

パーシアスは聖なる光を剣に纏わせると、ベルゼルスを一刀両断に切り抜けて行ったぜ。

「…くっ、…っう！」

響　ＬＰ４０００→３９００

「ですが…この瞬間、リバースカードオープン！！

罠カード　闇の慟哭を発動！！

このカードは、自分フィールドの闇属性モンスターが破壊され、墓地に送られた時に発動し、

破壊モンスターがレベル６以下なら、相手フィールドのカードを１枚、レベル７以上なら２枚破壊します！！

破壊された堕天使ベルゼルスのレベルは７…。

よって…神聖騎士パーシアスと、左側のセットカードを破壊します！！」

「グッ…パーシアスとライトロード・バリアがっ…！！」

闇の慟哭

通常罠

自分フィールドの闇属性モンスターが破壊され、墓地に送られた時に発動出来る。

破壊されたモンスターがレベル６以下なら、相手フィールドのカードを１枚、レベル７以上なら２枚破壊する。

「…だが、パーシアスは囮に過ぎない！

永続罠　閃光のイリュージョンを発動する！！

自分の墓地に存在するライトロードと名の付くモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！！

出でよ、ライトロード・ドラゴン　グラゴニス！！」

イトウ先生のフィールドに閃光のサークルが浮かび上がると、ソコから神聖な鎧を装着したドラゴンが出現したぜ！

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス

ＡＴＫ２０００

「グラゴニス…！そのカードは、グローアップ・バルブを特殊召喚した時か、ルミナスの効果で墓地送りにしたと言った所かしら？」

「その通りだ、響先生…。

そして…グラゴニスの攻撃力と守備力は、墓地に存在するライトロード1種類につき、３００ポイントアップする！

墓地に存在するライトロードは…ジェイン、ルミナス、ガロス、ウォルフ、オルクス、ケルビムの6種類…。

よって、攻撃力・守備力をそれぞれ１２００ポイントアップする！

輝け！シャイニング・プラウド！！」

グラゴニスが雄叫びを上げると、自身を眩ゆく輝かせていったぜ。

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス

ＡＴＫ２０００→３２００

ＤＥＦ１６００→２８００

閃光のイリュージョン

永続罠

自分の墓地からライトロードと名の付くモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する。

自分のエンドフェイズに、デッキの上からカードを2枚墓地に送る。

このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターは破壊する。

そのモンスターがフィールドから離れた時、このカードを破壊する。

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス

レベル６　光属性　ドラゴン族

ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ１６００

このカードの攻撃力と守備力は、墓地のライトロード1種類につき、３００ポイントアップする。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えた場合、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

「フィールドはがら空きだ！

グラゴニスでダイレクトアタック！！」

「…仕方ありませんね。

リバースカード　オープン！！

永続罠　闇次元の解放を発動！！」

「な…何！！モンスターを特殊召喚出来るカードを伏せていたのか！？」

「…ええ、用心の為に。

この効果により、自分の除外ゾーンに存在する闇属性モンスター1体を、自分フィールドに特殊召喚します！

次元の彼方より舞い戻りなさい！堕天使アスモディウス！！」

ヒビキ先生のフィールドが歪み出し、ソコから漆黒の鎧を纏った堕天使が降臨したぜ！

堕天使アスモディウス

ＡＴＫ３０００

「くっ！だが、グラゴニスの攻撃力の方が勝っている！

ならば…グラゴニスで、堕天使アスモディウスに攻撃！！

シャイニング・ストリーム！！」

グラゴニスは、閃光のブレスをアスモディウスに浴びせたぜ。

「…うっ！」

響　ＬＰ３９００→３７００

「…ですが、堕天使アスモディウスの効果を発動します！
アスモディウスが自分フィールドで破壊され墓地に送られた時、
自分フィールドに　アスモトークンと、ディウストークンを１体ずつ特殊召喚します！」

浄化されたアスモディウスの翼が、一回り小さい２体の分身に変化したぜ。

アスモトークン
ＡＴＫ１８００

ディウストークン
ＡＴＫ１２００

闇次元の解放

永続罠

自分の除外ゾーンに存在する闇属性モンスター1体を、自分フィールドに特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターを破壊して除外する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

堕天使アスモディウス

レベル8　闇属性　天使族

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２５００

このカードはデッキまたは墓地から特殊召喚出来ない。

1ターンに1度、自分のデッキから天使族モンスター1体を墓地に送る事が出来る。

このカードが自分フィールドで破壊され墓地に送られた時、

自分フィールドに　アスモトークン

（レベル5　闇属性　天使族　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１３００）

と、ディウストークン
（レベル３　闇属性　天使族　ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ１２００）
を１体ずつ特殊召喚する。

アスモトークンは効果では破壊されず、ディウストークンは戦闘では破壊されない。

「くっ…ここまで攻めて、ＬＰをたった３００ポイントしか削れんとは…！

…コレでターン終了だ。

そして、エンドフェイズに閃光のイリュージョンとグラゴニスの効果で、
ネクロ・ガードナー、ダメージ・イーター、光の護封剣、裁きの龍、サイクロンを墓地に送る。」

本当にな…。並みのデュエリストなら、このターンで終わってる所だぜ…。

それだけヒビキ先生の実力が上…ってトコか。

アーレイ↓響ｓｉｄｅ

鮫島校長に呼び出された時は何事かと思ったけど…。

まさか…伊藤先生と、アーレイ君を賭けたデュエルをする事になるなんてね…。

伊藤先生には困った物ね…。

レッド生徒のみんなを見下したり…。
我が強くて、しょっちゅう他の先生にも反発したり…。

今回もきっと、アーレイ君の意見に猛反対したに違いないわね…。
いい機会だから、伊藤先生を少し懲らしめようかしら？
その為にもグラゴニスには退場して貰いましょう…。

「私のターン、ドロー。」

伊藤　ＬＰ３３００

手札　０枚

モンスターゾーン

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス

魔法・罠ゾーン

閃光のイリュージョン

伏せカード×１

響　ＬＰ３７００

手札　１枚

モンスターゾーン

アスモトークン

ディウストークン

魔法・罠ゾーン

人造天使

「私は人造天使を墓地に送り、魔法カード　マジック・プランターを発動！

その効果により、カードを２枚ドローします！」

マジック・プランター

通常魔法

自分フィールド上の永続罠１枚を墓地に送り発動する。

自分のデッキから2枚ドローする。

…来たわ、コレなら何とかなりそうね！

「私は堕天使アティエルを攻撃表示で召喚します。」

暗闇が溢れ、そこから堕天使の少女が飛び出したわ。

堕天使アティエル
ＡＴＫ１４００

「フン、とうとう勝負を諦めたか。」

「それはどうでしょうね？
私は堕天使アティエルの効果を発動！

１ターンに１度、自分の墓地から天使族モンスター１体を除外し、
そのモンスターのレベルが６以下なら１枚、レベル７以上なら２枚
ドローします。

私は堕天使アスモディウスを除外し、２枚ドローします。」

堕天使アティエル

レベル３　闇属性　天使族

ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００

１ターンに１度、自分の墓地から天使族モンスター１体を除外する事で、
そのモンスターのレベルが６以下なら１枚、レベル７以上なら２枚ドローする。

「そして堕天使ベルゼルスを除外し、魔法カード　闇の誘いを発動します！

この効果により、除外した闇属性モンスターのレベル以下の相手モンスター１体を除外します！

伊藤先生のグラゴニスを除外します！」

グラゴニスの足元から闇が溢れてくると、そのまま闇に引きずり込まれたわ。

闇の誘い

通常魔法

自分の墓地から闇属性モンスター1体を除外して発動する。

除外した闇属性モンスターのレベル以下の相手モンスター1体を除外する。

伊藤先生の墓地にネクロ・ガードナーがある以上、このターンで決着をつけるのは無理ね…。

「バトルフェイズ！堕天使アティエル、ディウストークン2体でダイレクトアタック！！」

「グウゥ～ッ！」

伊藤　LP3300→700

「ラスト！アスモトークンでダイレクトアタック！！」

「コレ以上は通しはしない！

墓地のネクロ・ガードナーを除外して、効果を発動！

相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

やっぱり防がれたわね…。
けど、コレで裁きの龍の脅威は削げた筈…。

「では、メインフェイズ2です。
カードを1枚セットし、ターン終了です。」

「くっ…私のターン、ドロー！」

伊藤　ＬＰ７００
手札　１枚

モンスターゾーン　無し
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

響　ＬＰ３７００
手札　１枚

モンスターゾーン

アスモトークン

ディウストークン

堕天使アティエル

魔法・罠ゾーン

伏せカード×1

「魔法カード　貪欲な壺を発動！

自分の墓地から、グローアップ・バルブ、神聖騎士パーシアス、スカー・ウォリアー、ライトロード・エンジェル　ケルビム、ライトロード・ハラディン　ジェインをデッキに戻し、2枚ドロー！

…フッ、行くぞ！私の墓地から、光属性の裁きの龍と闇属性のダメージ・イーターを除外する！」

光属性と闇属性を除外ですって！？

その召喚条件だと、カオス・ソーサラーかしら？

それとも、まさか…！

「コレこそが…混沌を切り開く至高の騎士！

出でよ！カオス・ソルジャー！！」

カオス・ソルジャー　－開闢の使者－

ＡＴＫ３０００

嫌な予感が的中しちゃったわね…。

あのカードは、あのデュエルキングと名高い武藤　遊戯が愛用していたエースカード…。

あまりに効果が強大過ぎた為に、長い間禁止カードに指定されていたけれど…。

まさか、伊藤先生が持っているなんて…！

コレは、ちょっとマズいわね…。

「…マジかよ！？まさかアカデミアで、カオス・ソルジャーを拝めるなんてな…。

夢にも思わなかったぜ…。」

「オ～ソレミーヨ～！！シニョール　イトウ…一体ドコで、そのカードを手に入れた～ノ！？」

「…フッフ、私にはＩ２社に勤めている友人がいましてね…。
そのツテで手に入れたのだ！」

そんなに誇らしげに語られてもねぇ…。
もしかしたら、生徒相手に使ってたりしているのかしらね？

「覚悟しろ、響先生！カオス・ソルジャーで、堕天使アティエルを攻撃！！」

本当なら裁きの龍に使いたかったけれど…！

「くっ…！カオス・ソルジャーを対象にして、リバースカードオープン！！

速攻魔法　禁じられた聖杯！！

フィールドに存在する表側表示モンスター１体を選択し、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで、４００ポイントアップします！

この効果により、カオス・ソルジャーの攻撃力は、４００ポイントアップします！」

神々の美酒を浴びた事で、カオス・ソルジャーは闘気を昂らせて

いったわ。

カオス・ソルジャー　－開闢の使者－
ＡＴＫ３０００→３４００

「何のつもりだ？…まあいい、そのまま堕天使アティエルを切り裂け！開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーは、神速の刃でアティエルを両断していったわ…。

「…ぐうっ！」

響　ＬＰ３７００→１７００

ゴメンなさい、アティエル…。

けれど、コレで…！

「相手モンスターを戦闘で破壊した事により、カオス・ソルジャーの効果を…！」

「生憎ですが、その効果は発動しませんよ！

禁じられた聖杯の効果を受けたモンスターは…エンドフェイズまで、その効果は封じられるわ！」

禁じられた聖杯

速攻魔法

フィールドに存在する表側表示モンスター1体を選択して発動する。

そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで、４００ポイントアップし、効果は無効化になる。

「…クッ、ならばコレでターン終了だ…。」

危なかったわ…。もし、禁じられた聖杯を引けなかったら…、カオス・ソルジャーの連続攻撃を受けて負ける所だったわね…。

カオス・ソルジャー　－開闢の使者－

レベル８　光属性　戦士族

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２５００

このカードは通常召喚出来ない。

自分の墓地から光属性と闇属性モンスターを1体ずつ除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度、以下の効果から1つだけ発動出来る。

●フィールド上に存在するモンスター1体を除外する。

この効果を発動したターン、このカードは攻撃出来ない。

●このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、もう1度だけ続けて攻撃出来る。

「もう…勝利は確定的だな。

諦めて、サレンダーでもしたらどうだ?」

「ご冗談を…次のターンで、私が逆転をするかもしれませんよ?」

「この状況でまだ勝てると思っているのか?

妄言も程々にして貰おうか。」

「意気込みと言って欲しい物ですね。

諦めなければ、デッキは応えてくれる物ですよ!」

「フン、ならば私にそれを見せて貰おうか。

まあ、無理な話と思うがな…。」

「行きます！私のターン、ドロー！」

伊藤　ＬＰ７００
手札　１枚
モンスターゾーン
カオス・ソルジャー　－開闢の使者－
魔法・罠ゾーン
伏せカード×１

響　ＬＰ１７００
手札　２枚
モンスターゾーン
アスモトークン
ディウストークン
魔法・罠ゾーン　無し

…ホラ、デッキは応えてくれたわ。

「私は速攻魔法　サイクロンを発動。
伊藤先生のセットカードを破壊します！」

「くっ…オプション・ハンターが！」

「そして…ディウストークンをリリース！
堕天使ディザイアをアドバンス召喚します！！」

ディウストークンが闇に溶け、ソコから紅の翼と、闇のガントレットを装着した堕天使が出現したわ。

堕天使ディザイア
ＡＴＫ３０００

「何！レベル１０のモンスターをリリース１体で召喚だと！？」

「堕天使ディザイアは、天使族モンスター１体のリリースでアドバンス召喚出来ます！

そして、堕天使ディザイアの効果を発動！

自分のメインフェイズに1度、このカードの攻撃力を1000ポイントダウンさせ、相手モンスター1体を墓地送りに出来ます！」

堕天使ディザイア
ＡＴＫ３０００→２０００

「混沌よ、闇となりなさい！
ダーク・ディコンプション！！」

カオス・ソルジャーは、ディザイアから放出された闇のオーラを浴びると、たちまち闇に溶けていったわ。

堕天使ディザイア

レベル１０　闇属性　天使族

ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２８００

このカードは特殊召喚出来ない。

このカードは天使族モンスター1体のリリースでアドバンス召喚出来る。

自分のメインフェイズに1度、このカードの攻撃力を1000ポイントダウンさせ、相手モンスター1体を墓地に送る事が出来る。

「バ、バカな！本当に逆転したと言うのか！？」

「コレが本当のラストアタック！

堕天使ディザイアで、伊藤先生にダイレクトアタック！！

ディザイヴ・ディストーション！！」

「ぐわぁぁ～っ！！」

伊藤　ＬＰ７００→０

「ソコまで！！勝者、シニョーラ　ヒビキナノーネ！

よって…シニョール　アーレイは、要望通りにレッド寮に入って貰うノ～ネ。

…それで宜しいデースカ、シニョール　イトウ？」

「くっ…負けは負けです。

…だが、私はまだ認めた訳ではないぞ！次こそは勝ってみせる！！

…では、失礼します！」

そう言ってから、伊藤先生は早々に校長室から出ていったわ。

…参ったわね、あの様子じゃあ…全然堪えてないみたいね…。

どうした物かしらね…全く。

「へへっ…ヒビキ先生！

おっと…ヒビキ寮長だったか？

まあ、コレからよろしく頼むぜ？」

伊藤先生に頭を悩ませていると、アーレイ君が握手を求めてきたわ。

どう言うつもりでレッド寮を選んだかは知らないけど…。

私はアナタを甘やかしたりはしないわよ…アーレイ君？

「…ええ、こちらこそよろしくね、アーレイ君。」

響先生の実力（後書き）

アーレイ君がレッド寮に入って、トウヤはとっても　ベリーハッピーになってマースヨ！

そんな中…もう1人の転入生のナギハラサンが、ワタシにデュエルを申し込んで来マ～シタ。

「…フォリナ・ロック・ハート！！

アタシとデュエルしなさい！

アタシが勝ったら、ますちーには近づかないで！！」

…ホワイ？どうしてマスカワ君の事が出てくるのかは　キャンノットデースガ…。

挑まれたデュエルには…受けて立ちマース！

ネクスト、「恋する暴走列車」

…ウゥ、ナギハラサンから、ベリー　ストロングなオーラが見えマース…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4734u/

遊戯王 白雲の使い手

2011年11月26日01時47分発行